

志木市遺跡調査会調査報告 第10集

城山遺跡第42地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 0 5

埼玉県志木市遺跡調査会



基本土層 (A-A')



旧石器時代遺物出土状態



148号住居跡遺物出土状態



148号住居跡遺物出土状態



215号土坑



215号土坑火床部



234号土坑



234号土坑鉄鍋出土状態



188号土坑



270号土坑



1号溝跡



1号溝跡ピット列



1号溝跡ピット



1号溝跡硬化部分

はじめに

志木市遺跡調査会
会長 柚木 博

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、面積9.06km²を有し、人口約6万8千人を擁する自然と文化の調和する都市です。この地には現在、我々の先人たちが遺した足跡とも言うべき埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が14遺跡確認されています。

今回、発掘調査を実施した城山遺跡は、旧石器時代から近世にかけての幅広い時期の複合遺跡です。特に、本遺跡内には、市指定文化財の城山貝塚があることで有名です。この貝塚は、学術的な調査は実施されていませんが、同遺跡内には縄文前期の諸磯式期^{もろいそしき}の住居跡が存在することから、今のところ、この時期に貝塚が形成された可能性があるものと考えられています。

さらに、古墳時代後期の集落跡は、県内でも最大級の規模を誇り、以前に新聞でも報道されているほどです。住居跡からは、当時の食器である土師器・須恵器と呼ばれる土器がたくさん発見されています。最近では、これらの土器を科学的に分析し、産地同定も可能になってきました。今後は一層、土器の流通から当時の歴史を探索する動きが活発になるものと思われれます。

近年には、日本最古の土器群に位置づけられる縄文時代草創期の爪形文系土器の破片が1点発見され注目を浴びています。

さて、本書は、平成13年に発掘調査が実施された城山遺跡第42地点の発掘調査報告書です。その内容ですが、この調査により、とても一言では言い表すことのできない程の多くの遺構・遺物が発見されました。中でも、本遺跡では初めて旧石器時代の石器が調査により発見されたことは注目に値します。さらに、中世の234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきです。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」^{なべかぶりそう}と呼ばれる古い風習が志木市でも実在していたことが証明されたことになりました。

以上、ここではほんの数例でしか紹介できませんが、本地点からの貴重な発見により、志木市の歴史にまた新たなる1ページが追加されたことは大変喜ばしいことであり、同時に本書が郷土の歴史研究のために広く活用されますよう切に願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、ご指導ご協力いただきました文化庁、埼玉県生涯学習文化財課、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の方々並びに関係者に対し、心から厚くお礼申し上げます。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市に所在する城山遺跡（県No.09-003）の第42地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び整理作業は、志木市教育委員会の斡旋により、興和地所株式会社から志木市遺跡調査会が委託を受け実施した。
3. 本書の作成において、編集は尾形則敏・深井恵子が行い、執筆は下記以外を尾形則敏が行った。
なお、朝霞市教育委員会の野沢 均氏には、中世以降の遺構・遺物の全般についてご教示を頂き、さらに第4章では玉稿を賜った。
 深井恵子 第3章第3・4節の遺構
 青木 修 第3章第2節、第5節の遺構、第6節第1群 縄文土器、第4章第1節
 野沢 均 第4章第4節
4. 旧石器・縄文時代の石器と中・近世の陶磁器・土器に関する実測及び観察表の作成等は、(有)アルケリサーチ（代表取締役 藤波啓容）に依頼した。なお、瀬戸・美濃の陶器については、アルケリサーチを通じ、愛知学院大学の藤澤良祐教授にご教示を頂いた。
5. 自然科学分析については、株式会社パレオ・ラボ（代表取締役 藤根 久）に依頼し、その結果を付編に併載するものとする。なお、動物遺体の分類・同定については、パレオ・ラボを通じ、国立歴史民俗博物館の西本豊弘教授にご教示を頂いた。
6. 234号土坑出土の鉄鍋の保存処理は、株式会社東都文化財保存研究所（代表取締役 朝重嘉朗）に依頼した。鉄鍋の保存処理に係る工程は付編に併載するものとする。
7. 遺物の実測は、鎌本あけみ・星野恵美子・松浦恵子・山口優子が行い、遺構・遺物のトレースは、深井恵子が行った。写真撮影は青木 修・尾形則敏が行った。
8. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課・埼玉県立博物館・埼玉県立歴史資料館・埼玉県立さきたま資料館・埼玉県立埋蔵文化財センター・朝霞市教育委員会・新座市教育委員会・和光市教育委員会・朝霞市博物館・富士見市立水子貝塚資料館

会田 明・浅野晴樹・荒井幹夫・石井 寛・飯田充晴・井上洋一・上田 寛・江原 順・大野邦彦・加藤秀之・片平雅俊・川辺賢一・隈本健介・栗原和彦・小出輝雄・肥沼正和・小滝 勉・小林寛子・小宮恒雄・齋藤欣延・笹森健一・斯波 治・鈴木一郎・鈴木重信・隅田 眞・高橋 学・田代雄介・田中広明・都築恵美子・照林敏郎・並木 隆・根本 靖・野沢 均・原 京子・早坂廣人・廣田吉三郎・福田 聖・藤波啓容・堀 善之・松本 完・松本富雄・水口由紀子・三田光明・村本周三・山田尚友・和田晋治

開発主体者（愛知県名古屋市東区東桜1-10-37 興和地所株式会社 代表取締役 中込 稔）

凡 例

1. 本報告書で使用した地図は、以下のとおりである。

第1図 1：10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製 平成9年3月志木市1：2,500をデジタルマップにより縮図編集

第2図 1：2,500「志木市No.6」東日本航空株式会社 アジア航測株式会社調製 平成8年測量

2. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。
3. 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。
4. ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。
5. 遺構挿図版中のドットは、遺物出土位置を示し、その番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。
6. 挿図版中のスクリーントーンは、以下のとおりであるが、その他は個々に凡例を示した。

遺 構

 焼土範囲を示す。

遺 物



土器…赤彩範囲を示すが、遺物番号下に黒彩とあるものは、黒色土器の黒彩範囲を示す。

陶器…平安時代の灰釉陶器および中世以降の陶器の施釉範囲を示す。

 土器に付着した粘土範囲を示す。

 土器に付着した煤範囲を示す。

7. 遺構の略記号は、以下のとおりである。

F P = 炉穴 D = 土坑 H = 古墳・平安時代の住居跡 W = 井戸跡

M = 溝跡 P = ピット

志木市遺跡調査会組織

〈役員〉

会長 細田 信良 (志木市教育委員会教育長) (平成12年7月～平成17年6月)
 会長職務代理者 柚木 博 (") (平成17年10月～)
 副会長 新井 茂 (志木市教育委員会教育政策部長) (平成17年7月～9月)
 谷合 弘行 (志木市教育委員会教育政策部長) (平成12年4月～平成15年3月)
 白砂 正明 (") (平成15年4月～平成16年3月)
 杉山 勇 (") (平成16年4月～平成17年3月)
 理事 新井 茂 (") (平成17年7月～)
 神山 健吉 (志木市文化財保護委員長)
 井上 國夫 (志木市文化財保護副委員長)
 高橋 長治 (志木市文化財保護委員)
 高橋 豊 (")
 内田 正子 (")
 理事兼事務局長 土橋 春樹 (志木市教育委員会教育政策部参事兼生涯学習課長)
 (平成12年4月～平成16年3月)

〈監査〉

大熊 章只 (生涯学習課長) (平成16年4月～)
 萩原 洋子 (志木市立郷土資料館長) (平成8年4月～平成14年3月)
 永田 伸夫 (社会教育指導員) (平成10年4月～平成13年3月)
 三ツ矢美代子 (") (平成13年4月～平成14年3月)
 福田 鮎子 (") (平成14年4月～平成16年3月)
 金子 雅佳 (生涯学習課主幹) (平成14年4月～8月、平成15年8月～平成16年3月)
 荒井 正夫 (生涯学習課主査) (平成14年8月～平成15年7月)
 樺嶋 秀俊 (生涯学習課主任) (平成16年4月～)
 並木 貴子 (") (平成16年4月～平成17年3月)
 古屋 大輔 (") (平成17年4月～)

〈事務局〉

担当課・係 志木市教育委員会生涯学習部生涯学習課 (平成12年4月～平成14年3月)
 志木市教育委員会教育政策部生涯学習課 (平成14年4月～)
 理事兼事務局長 土橋 春樹 (教育政策部参事兼生涯学習課長) (平成12年4月～平成16年3月)
 事務局 大熊 章只 (生涯学習課長) (平成16年4月～)
 金子 雅佳 (生涯学習課主幹) (平成12年4月～平成14年3月、平成14年8月～平成17年3月)
 下河辺信行 (") (平成14年4月～8月)
 醍醐 一正 (") (平成17年4月～)
 関根 正明 (生涯学習課主査) (平成9年4月～平成15年7月)
 佐々木保俊 (") (昭和61年～)
 今野 美香 (") (平成15年8月～)
 新井由起子 (生涯学習課主任) (平成12年4月～平成14年3月)
 尾形 則敏 (") (昭和62年～)
 倉部 恵子 (") (平成14年4月～)
 高野 雅也 (") (平成17年4月～)

〈発掘調査〉

調査担当者 尾形 則敏
 調査協力員 深井 恵子
 足立 裕子・阿部 公子・阿部ふみ子・阿部 理英・伊野部三千子・今田 俊枝・
 岩森 都・遠藤 英子・大井 文・大平 真喜・奥野 恭子・鎌本あけみ・
 木島 かつおる・熊谷 秀子・栗原 祐子・榎松 典子・三瓶 慎一・柴田 栄子・
 鈴木 浩子・高杉 朝子・高田 美智子・塚田 和枝・土屋 富子・土橋 宣子・
 富田 静江・永井 真理・中間 皆子・成田しのぶ・二階堂美知子・萩尾みどり・
 長谷川 公子・原 千恵子・久留 浪子・弘中 謡枝・藤村 珠美・星野 恵美子・
 松浦 恵子・松崎 陽子・水野 良美・宮入 友紀・宮川 幸佳・八代 恵子・
 矢野 恵子・山口 優子
 佐々木 潤 (東洋大学生)・藤岡 智子 (早稲田大学生)

〈整理作業〉

調査員 深井 恵子
 調査補助員 青木 修
 整理協力員 遠藤 英子・奥野 恭子・鎌本あけみ・鈴木 浩子・高田 美智子・高野 美子・
 星野 恵美子・松浦 恵子・山口 優子
 佐々木 潤 (東洋大学生)・藤岡 智子・福永 亜希子 (早稲田大学生)
 田村 知子 (昭和女子大学生)

目 次

巻頭図版／はじめに

例 言／志木市遺跡調査会組織／目 次／挿図目次／表 目 次／図版目次

第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 遺跡の概要	9
第2章 発掘調査の概要	15
第1節 調査に至る経過	15
第2節 調査の方法と経過	16
第3章 検出された遺構と遺物	22
第1節 旧石器時代	22
(1) 概要	22
(2) 基本層序	22
(3) 各文化層の概要	24
第2節 縄文時代	31
(1) 概要	31
(2) 土坑	31
(3) 炉穴	36
第3節 古墳時代	41
(1) 概要	41
(2) 住居跡	41
第4節 奈良・平安時代	100
(1) 概要	100
(2) 住居跡	100
(3) 土坑	107
(4) ビット	112
第5節 中世以降	117
(1) 概要	117
(2) 土坑	118
(3) 井戸跡	143
(4) 溝跡	148
(5) ビット	152
第6節 遺構外出土遺物	173
第4章 調査のまとめ	184
第1節 縄文時代の土器について	184
第2節 148号住居跡出土の土師器の胎土分析と考古学的な検証	185
第3節 中・近世について	194
第4節 中・近世における城山遺跡の総括	202
図 版	
報告書抄録	
[付 編] 自然科学分析	
I. 土師器の胎土分析	209
II. 土坑内土壌の微細物分析・炭化物同定	223
III. 動物遺体の分類・同定	231
IV. 鉄鍋の保存処理に係る工程	233

挿 図 目 次

第 1 図	市域の地形と遺跡分布 (1/20000)	2
第 2 図	城山遺跡の調査地点 (1/3000)	11
第 3 図	遺構分布図 (1/200)	17
第 4 図	旧石器時代の調査範囲 (1/400)	23
第 5 図	基本層序 (1/50)	23
第 6 図	旧石器時代遺物分布図 (1/50)	25
第 7 図	第 1 文化層 (第 IV 層上部) 器種別分布図 (1/50)	26
第 8 図	第 1 文化層 (第 IV 層上部) 母岩別分布図 (1/50)	26
第 9 図	第 1 文化層 (第 IV 層上部) 出土石器 (2/3)	27
第 10 図	第 2 文化層 (第 VII 層) 器種別分布図 (1/50)	28
第 11 図	第 2 文化層 (第 VII 層) 母岩別分布図 (1/50)	29
第 12 図	第 2 文化層 (第 VII 層) 出土石器 (2/3)	30
第 13 図	縄文時代の遺構分布図 (1/400)	31
第 14 図	土坑 1 (1/60)	37
第 15 図	土坑 2 (1/60)	38
第 16 図	土坑出土遺物 (1/3)	38
第 17 図	4 号炉穴・出土遺物 (1/60・1/4・1/3)	39
第 18 図	古墳時代後期の遺構分布図 (1/400)	41
第 19 図	131・132号住居跡 (1/60)	42
第 20 図	132号住居跡カマド (1/30)	43
第 21 図	131号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	44
第 22 図	132号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	45
第 23 図	133号住居跡 (1/60)	46
第 24 図	133号住居跡カマド (1/30)	47
第 25 図	133号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	48
第 26 図	134号住居跡 (1/60)	49
第 27 図	134号住居跡出土遺物 1 (1/4)	50
第 28 図	134号住居跡出土遺物 2 (1/4・1/3・2/3)	51
第 29 図	135号住居跡 (1/60)	52
第 30 図	135号住居跡出土遺物 1 (1/4)	53
第 31 図	135号住居跡出土遺物 2 (1/4)	54
第 32 図	136号住居跡・遺物出土状態 (1/60)	55
第 33 図	136号住居跡カマド (1/30)	56
第 34 図	136号住居跡出土遺物 1 (1/4)	57
第 35 図	136号住居跡出土遺物 2 (1/4)	58
第 36 図	136号住居跡出土遺物 3 (1/4・1/3)	59
第 37 図	137号住居跡・190号土坑 (1/60)	60
第 38 図	137号住居跡出土遺物 (1/4)	61
第 39 図	140号住居跡 (1/60)	62
第 40 図	140号住居跡遺物出土状態・カマド (1/60・1/30)	63
第 41 図	140号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	64
第 42 図	141号住居跡 (1/60)	65
第 43 図	141号住居跡出土遺物 (1/4)	66
第 44 図	142・144号住居跡 (1/60)	67
第 45 図	142号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	69
第 46 図	144号住居跡出土遺物 (1/4)	69
第 47 図	143号住居跡・出土遺物 (1/60・1/4・1/3)	70
第 48 図	145号住居跡・出土遺物 (1/60・1/4・1/3)	71
第 49 図	146号住居跡・カマド (1/60・1/30)	73
第 50 図	146号住居跡出土遺物 (1/4)	74
第 51 図	147号住居跡・出土遺物 (1/60・1/4)	75
第 52 図	148号住居跡 (1/60)	76
第 53 図	148号住居跡器種別遺物出土状態 (1/60)	77
第 54 図	148号住居跡遺物出土状態・カマド (1/60・1/30)	78
第 55 図	148号住居跡出土遺物 1 (1/4)	79
第 56 図	148号住居跡出土遺物 2 (1/4)	80
第 57 図	148号住居跡出土遺物 3 (1/4)	81

第58図	148号住居跡出土遺物4 (1/4・1/3)	82
第59図	奈良・平安時代の遺構分布図 (1/400)	100
第60図	138号住居跡・カマド (1/60・1/30)	101
第61図	138号住居跡出土遺物 (1/4・1/6・1/3)	102
第62図	139号住居跡 (1/60)	103
第63図	139号住居跡出土遺物 (1/4・1/6・1/3)	104
第64図	149号住居跡・出土遺物 (1/60・1/4・1/3)	105
第65図	150号住居跡・出土遺物 (1/60・1/4・1/3)	106
第66図	151号住居跡・出土遺物 (1/60・1/3)	107
第67図	土坑 (1/60)	111
第68図	土坑・ピット出土遺物 (1/4)	113
第69図	中世以降の遺構分布図 (1/400)	117
第70図	土坑A群 (1/60・1/30)	121
第71図	土坑B群2類 (1/60)	121
第72図	土坑B群3類 (1/60)	124
第73図	土坑B群4類 (1/60)	127
第74図	土坑C群 (1/60)	131
第75図	土坑D群 (1/60)	133
第76図	土坑E群1類 (191号・270号土坑) (1/60)	136
第77図	土坑E群1類 (223号・312号土坑) (1/60)	137
第78図	土坑E群2類 (145号土坑) (1/60)	140
第79図	土坑E群2類 (183号土坑) (1/60)	141
第80図	土坑E群2類 (188号土坑) (1/60)	142
第81図	井戸跡1 (1/60)	146
第82図	井戸跡2 (1/60)	147
第83図	1号溝跡 (1/120・1/60)	149
第84図	土坑出土陶磁器・土器1 (1/4)	157
第85図	土坑出土陶磁器・土器2 (1/4)	158
第86図	土坑出土陶磁器・土器3 (1/4)	159
第87図	土坑出土陶磁器・土器4 (1/4)	160
第88図	井戸跡出土陶磁器・土器 (1/4)	160
第89図	溝跡・ピット出土陶磁器・土器 (1/4)	161
第90図	遺構出土の土製品 (1/3・2/3)	162
第91図	出土石製品 (2/3・1/3)	162
第92図	234号土坑出土鉄鍋 (1/6)	163
第93図	出土金属製品 (1/3)	164
第94図	出土銭貨 (4/5)	165
第95図	遺構出土の瓦 (1/6)	166
第96図	遺構出土の板碑 (1/6)	166
第97図	遺構外出土石器1 (2/3)	175
第98図	遺構外出土石器2 (1/3)	176
第99図	遺構外出土遺物1 (1/3)	177
第100図	遺構外出土遺物2 (1/3・1/4)	178
第101図	遺構外出土遺物3 (1/4)	179
第102図	城山遺跡第1・2地点の遺構分布図 (1/600)	203

表 目 次

第1表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧	1
第2表	志木市の時代別にみた考古資料一覧 (1)	4
	志木市の時代別にみた考古資料一覧 (2)	5
	志木市の時代別にみた考古資料一覧 (3)	6
第3表	志木市の発掘調査報告書一覧	7
第4表	城山遺跡調査一覧 (1)	12
	城山遺跡調査一覧 (2)	13
第5表	発掘調査工程表 (1)	19
	発掘調査工程表 (2)	20
	発掘調査工程表 (3)	21
第6表	第1文化層 (第IV層上部) 出土の石器一覧	27

第7表	第2文化層(第Ⅶ層)出土の石器一覧	30
第8表	土坑・炉穴出土の縄文土器一覧	40
第9表	土坑出土の縄文時代の石器一覧	40
第10表	131号住居跡出土遺物一覧	83
第11表	132号住居跡出土遺物一覧	84
第12表	133号住居跡出土遺物一覧(1)	84
	133号住居跡出土遺物一覧(2)	85
第13表	134号住居跡出土遺物一覧(1)	86
	134号住居跡出土遺物一覧(2)	87
	134号住居跡出土遺物一覧(3)	88
第14表	135号住居跡出土遺物一覧(1)	88
	135号住居跡出土遺物一覧(2)	89
第15表	136号住居跡出土遺物一覧(1)	89
	136号住居跡出土遺物一覧(2)	90
	136号住居跡出土遺物一覧(3)	91
第16表	137号住居跡出土遺物一覧(1)	91
	137号住居跡出土遺物一覧(2)	92
第17表	140号住居跡出土遺物一覧(1)	92
	140号住居跡出土遺物一覧(2)	93
第18表	141号住居跡出土遺物一覧(1)	93
	141号住居跡出土遺物一覧(2)	94
第19表	142号住居跡出土遺物一覧	94
第20表	143号住居跡出土遺物一覧	94
第21表	144号住居跡出土遺物一覧(1)	94
	144号住居跡出土遺物一覧(2)	95
第22表	145号住居跡出土遺物一覧	95
第23表	146号住居跡出土遺物一覧	95
第24表	147号住居跡出土遺物一覧	96
第25表	148号住居跡出土遺物一覧(1)	96
	148号住居跡出土遺物一覧(2)	97
	148号住居跡出土遺物一覧(3)	98
	148号住居跡出土遺物一覧(4)	99
第26表	138号住居跡出土遺物一覧	114
第27表	139号住居跡出土遺物一覧(1)	114
	139号住居跡出土遺物一覧(2)	115
第28表	149号住居跡出土遺物一覧	115
第29表	150号住居跡出土遺物一覧	115
第30表	151号住居跡出土遺物一覧	115
第31表	土坑・ピット出土遺物一覧	116
第32表	土坑A群一覧	153
第33表	土坑B群一覧(1)	153
	土坑B群一覧(2)	154
第34表	土坑C群一覧	155
第35表	土坑D群一覧	155
第36表	土坑E群一覧	155
第37表	井戸跡一覧	156
第38表	溝跡一覧	156
第39表	ピット一覧	156
第40表	遺構出土の陶磁器・土器一覧(1)	167
	遺構出土の陶磁器・土器一覧(2)	168
	遺構出土の陶磁器・土器一覧(3)	169
第41表	遺構出土の土製品一覧	170
第42表	石製品一覧	170
第43表	金属製品一覧(1)	170
	金属製品一覧(2)	171
第44表	銭貨一覧	171
第45表	遺構出土の瓦一覧	172
第46表	遺構出土の板碑一覧	172
第47表	遺構外出土の旧石器時代の石器一覧	175
第48表	遺構外出土の縄文時代の石器一覧	176

第49表	遺構外出土の縄文土器一覧(1)	180
	遺構外出土の縄文土器一覧(2)	181
第50表	遺構外出土の弥生～平安時代の遺物一覧	182
第51表	遺構外出土の陶磁器・土器一覧	183
第52表	148号住居跡出土の器種別割合	186
第53表	土師器坏形土器の分類基準	189
第54表	土師器坏形土器の分類と製作ランクの一致	189
第55表	土師器坏形土器の分類比率	189
第56表	分類別の土坑割合	197
第57表	中世以降の遺構出土の遺物集計	197
第58表	時代別の土坑割合	200
第59表	館村元禄前後面積比較表	201
第60表	村高比較表	201
第61表	148号住居跡から出土した土器の詳細とその特徴	210
第62表	粘土および砂粒等の特徴	213
第63表	胎土中岩石片の分類と組み合わせ	221
第64表	土壌試料の粗粒および細粒部分の特徴	225
第65表	炭化種実出土一覧	226
第66表	貝類出土量	232
第67表	動物遺体一覧	232
第68表	234号土坑出土鉄鍋の脱塩グラフ	234

図版目次

図版 1	1. 調査区近景 2. 表土剥ぎ風景 3・4. 旧石器時代遺物出土状態 5. 基本土層(A-A') 6・7. 4号炉穴遺物出土状態 8. 4号炉穴
図版 2	1. 195号土坑 2. 251号土坑 3. 252号土坑 4. 284号土坑 5. 286号土坑 6. 287号土坑 7. 290号土坑 8. 291号土坑
図版 3	1. 314号土坑 2. 315号土坑 3. 320号土坑 4. 321号土坑 5. 326号土坑 6. 327号土坑 7. 328号土坑 8. 329号土坑
図版 4	1. 131・132号住居跡 2. 131・132号住居跡貯蔵穴 3. 132号住居跡遺物出土状態 4. 132号住居跡カマド 5・6. 133号住居跡遺物出土状態 7. 133号住居跡カマド 8. 133号住居跡貯蔵穴
図版 5	1～4. 134号住居跡遺物出土状態 5. 134号住居跡貯蔵穴 6. 134号住居跡 7・8. 135号住居跡遺物出土状態
図版 6	1. 136号住居跡遺物出土状態 2. 136号住居跡貯蔵穴遺物出土状態 3. 136号住居跡カマド遺物出土状態 4. 136号住居跡カマド 5. 136・137号住居跡 6. 137号住居跡炭化材出土状態 7・8. 137号住居跡遺物出土状態
図版 7	1・2. 140号住居跡遺物出土状態 3. 140号住居跡カマド遺物出土状態 4. 140号住居跡 5～7. 141号住居跡遺物出土状態 8. 141号住居跡貯蔵穴遺物出土状態
図版 8	1. 142号住居跡遺物出土状態 2. 142号住居跡貯蔵穴遺物出土状態 3. 142・144号住居跡 4. 144号住居跡遺物出土状態 5・6. 143号住居跡遺物出土状態 7. 143号住居跡炭化材・粘土出土状態 8. 143号住居跡
図版 9	1. 145号住居跡遺物出土状態 2. 145号住居跡貯蔵穴 3. 145・146号住居跡遺物出土状態 4. 145・146号住居跡 5. 146号住居跡貯蔵穴遺物出土状態 6. 146号住居跡入口ピット付近 7. 147号住居跡 8. 147号住居跡掘り方
図版10	1～8. 148号住居跡遺物出土状態
図版11	1. 148号住居跡貯蔵穴遺物出土状態 2. 148号住居跡貯蔵穴 3. 148号住居跡カマド遺物出土状態 4. 148号住居跡カマド 5. 148号住居跡入口ピット付近 6. 148号住居跡 7. 148号住居跡間仕切り溝 8. 148号住居跡掘り方
図版12	1. 138号住居跡遺物出土状態 2. 138号住居跡カマド遺物出土状態 3. 138号住居跡カマド瓦出土状態 4. 139号住居跡遺物出土状態 5. 150号住居跡 6. 151号住居跡 7. 156号土坑 8. 177号土坑
図版13	1. 190号土坑 2. 193号土坑 3. 218号土坑 4. 228号土坑 5. 247号土坑 6. 255号土坑 7. 259号土坑 8. 259号土坑遺物出土状態
図版14	1. A群1類 146号土坑 2. A群1類 155号土坑 3. A群1類 184号土坑 4. A群2類 234号土坑(精査前) 5・6. 234号土坑鉄鍋出土状態 7. 234号土坑 8. 234号土坑鉄鍋取り上げ作業風景
図版15	1. B群1類(B・C-3)グリッド付近 2. B群1類 297・299・300号土坑

3. B群2類 194号土坑 4. B群2類 256号土坑 5. B群3類 192号土坑
6. B群3類 257号土坑 7. B群3類 311号土坑 8. B群3類 319号土坑・D群 325号土坑
- 図版16 1. B群4類 178号土坑 2. 178号土坑火床部 3. B群4類 179号土坑 4. 179号土坑火床部
5. B群4類 187号土坑 6. 187号土坑火床部 7. B群4類 215号土坑 8. 215号土坑火床部
- 図版17 1. C群 180号土坑 2. C群 196号土坑 3. C群 224号土坑
4. B群1類 322号土坑・C群 323・324号土坑 5. D群 147号土坑 6. D群 186号土坑
7. D群 318号土坑 8. 土坑群測量風景
- 図版18 1. E群1類 191号土坑 2. 191号土坑竪坑部 3. E群1類 223号土坑 4. 223号土坑連絡部
5. E群1類 270号土坑 6. 270号土坑竪坑部 7. E群1類 312号土坑 8. 312号土坑
- 図版19 1. E群2類 145号土坑竪坑ロームブロック 2. 145号土坑 重機による発掘風景
3. 145号土坑主体部 4・5. 145号土坑主体部C～E 6・7. 145号土坑主体部G
8. 145号土坑照明5
- 図版20 1. E群2類 183号土坑入口A 足掛け状の階段 2. 183号土坑連絡横坑部
3. 183号土坑主体部Aと主体部B連絡部 4. 183号土坑主体部A 5. 183号土坑照明2・3
6. 183号土坑照明1 7. 183号土坑主体部B連絡部 8. 183号土坑主体部B
- 図版21 1. E群2類 188号土坑 2. 188号土坑 3. 188号土坑主体部B 4. 188号土坑主体部A
5. 188号土坑照明2 6. 188号土坑主体部B 7. 188号土坑主軸横坑部
- 図版22 1. 17号井戸跡 2. 18号井戸跡 3. 19号井戸跡 4. 21号井戸跡 5. 22号井戸跡
6. 22号井戸跡スロープ部 7. 22号井戸跡 8. 22号井戸跡発掘風景
- 図版23 1. 1号溝跡(E-3~5)グリッド 2. 1号溝跡発掘風景
3. 1号溝跡硬化部分(E-3・4)グリッド 4. 1号溝跡ピット列(E-3・4)グリッド
5. 1号溝跡ピット列 6. 1号溝跡発掘風景 7. 1号溝跡(E-1・2)グリッド
- 図版24 1. 1号溝跡(E-1・2)グリッド 2. 1号溝跡(E-1・2)グリッド
3. 1号溝跡硬化部分(E-3)グリッド 4. 30号溝跡(B-3・4)グリッド 5. 31号溝跡
6. 32号溝跡(D-4)グリッド
- 図版25 1. 第1文化層(第IV層上部)出土石器 2. 第2文化層(第VII層)出土石器
3. 4号炉跡・土坑出土遺物
- 図版26 1. 131号住居跡出土遺物 2. 132号住居跡出土遺物
- 図版27 1. 133号住居跡出土遺物 2. 134号住居跡出土遺物1
- 図版28 134号住居跡出土遺物2
- 図版29 135号住居跡出土遺物
- 図版30 136号住居跡出土遺物1
- 図版31 1. 136号住居跡出土遺物2 2. 137号住居跡出土遺物
- 図版32 1. 140号住居跡出土遺物 2. 141号住居跡出土遺物
- 図版33 1. 142号住居跡出土遺物 2. 143・144号住居跡出土遺物 3. 145・147号住居跡出土遺物
- 図版34 1. 146号住居跡出土遺物 2. 148号住居跡出土遺物1
- 図版35 148号住居跡出土遺物2
- 図版36 148号住居跡出土遺物3
- 図版37 1. 138号住居跡出土遺物 2. 139号住居跡出土遺物
- 図版38 1. 149~151号住居跡出土遺物 2. 土坑出土遺物 3. ピット出土遺物
- 図版39 234号土坑出土鉄鍋
- 図版40 土坑出土陶磁器・土器1
- 図版41 土坑出土陶磁器・土器2
- 図版42 土坑出土陶磁器・土器3
- 図版43 1. 17号井戸跡出土陶器 2. 21・24号井戸跡出土陶器・土器 3. 23号井戸跡出土陶器・土器
- 図版44 1. 溝跡出土陶磁器・土器 2. ピット出土陶磁器・土器
- 図版45 1. 遺構出土の土製品 2. 出土石製品
- 図版46 出土金属製品
- 図版47 出土銭貨
- 図版48 1. 遺構出土の瓦 2. 遺構出土の板碑
- 図版49 1. 遺構外出土石器 2. 遺構外出土遺物1
- 図版50 遺構外出土遺物2
- 図版51 遺構外出土遺物3
- 図版52 土器胎土中の粒子顕微鏡写真
- 図版53 土壌試料の産状写真
- 図版54 土壌試料中の粒子顕微鏡写真
- 図版55 出土した炭化種実1
- 図版56 出土した炭化種実2
- 図版57 出土炭化材の走査電子顕微鏡写真
- 図版58 出土貝類、191号土坑出土人骨

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 市域の地形と遺跡

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりを持ち、面積は9.06km²、人口約6万8千人の自然と文化の調和する都市である。

地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が広がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、西原大塚遺跡をはじめ市域の大部分の遺跡は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に存在している。遺跡は柳瀬川上流から、西原大塚遺跡（7）、中道遺跡（5）、新邸遺跡（8）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）の順に名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	60,990 m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	78,700 m ²	畑・宅地	城館跡・集落跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、鑄造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、鑄造関連遺物等
5	中道	45,100 m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（前～後）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚ノ山古墳	800 m ²	林	古墳？	古墳？	なし	なし
7	西原大塚	163,100 m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新邸	16,400 m ²	畑・宅地	貝塚・集落跡	縄（早～中）、古（前）、中・近世	貝塚、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900 m ²	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	62,200 m ²	畑・宅地	集落跡	縄（草創～晩）弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	7,100 m ²	宅地	集落跡	弥（後）～古（前）	住居跡	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800 m ²	畑	集落跡	古（前）	住居跡？	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900 m ²	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700 m ²	田	館跡	中世	溝跡・井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	10,700 m ²	宅地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、近代	住居跡・方形周溝墓	弥生土器、土師器、かわらけ
16	大原	1,700 m ²	宅地	不明	近世以降？	溝跡	なし
合計		463,090 m ²					

平成17年7月6日現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



第1図 市域の地形と遺跡分布 (1/20000)

将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、市内の遺跡総数は、現在前述した12遺跡に塚ノ山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた14遺跡である（第1図）。

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

志木市内に最初に人が住みついたのは、旧石器時代からで、この時代の遺跡としては、柳瀬川右岸の西原大塚・中道・城山・中野遺跡がある。中道遺跡では、昭和62（1987）年の富士見・大原線（現ユリノキ通り）の工事に伴う調査により、立川ローム層のIV層上部・VI層・VII層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパー・ナイフ形石器や安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

平成11～14年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からも立川ローム層のIV層下部から、黒曜石・頁岩の石材の石核・剥片が約60点出土している。

縄文時代になると、草創期では、平成4年度に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成10年度の田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、田子山遺跡から撚糸文・沈線文・条痕文系土器、富士前・城山遺跡から撚糸文系土器が数点出土している。住居跡としては、西原大塚・新邸遺跡の前期黒浜式期のものが最古に位置付けられ、それぞれ1軒検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

遺跡が最も増加するのは、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期である。西原大塚遺跡では、多くの住居跡が環状に配置する可能性のあることが指摘されている。その他、中道・城山・中野・田子山遺跡からも住居跡・土坑などが発見されている。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されるのみである。

さらに後期では報告書として刊行された住居跡は皆無であるが、田子山遺跡第31地点では1基、西原大塚遺跡第54地点では2基の土坑が検出されている。特に田子山遺跡第31地点の184号土坑は、下層から称名寺I式期の土器、上層からII式の特徴をもつ土器が出土している。

晩期になると、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では遺跡が希薄になる傾向にあるが、平成12年度の西原地区特定区画整理事業に伴う発掘調査により、後期の堀之内式期の住居跡1軒と遺物集中地点、晩期の溝跡1本が検出されている。

弥生時代では、現在のところ、前・中期に遡る遺跡は存在しない。大部分が後期末葉から古墳時代前期にかけての遺跡であろうと考えられる。その中で、田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、志木市史にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が200軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは、全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

当時の墓域の可能性として、方形周溝墓が、昭和62（1987）年以降、西原大塚・市場裏・田子山遺跡の3遺跡から相次いで確認されており、集落跡との関連の中で今後注目されるであろう。古墳時代前期

第1章 遺跡の立地と環境

1. 旧石器時代

No.	遺跡名	地点名	掲載された主な遺構・遺物	報告書一覧No.及び資料索引
7	西原大塚	区画整理	石器集中地点 2カ所	No.19
		市史掲載	ナイフ形石器、尖頭器など	1984『志木市史 原始・古代資料編』
2	中野	第49地点	石器集中地点 1カ所、ナイフ形石器、角錐状石器など	No.29

2. 縄文時代

2	中野	第2地点	包含層出土土器	中期	No.2		
		第16地点	集石 1基	不明	No.17		
		第25地点	住居跡 1軒、土坑 9基、炉穴 5基、土器、石器	早～中期	No.25		
		第43地点	包含層出土土器	早～後期	No.20		
		第49地点	住居跡 1軒、土坑 10基、炉穴 1基、遺物包含層	早期～後期	No.29		
		A地点	住居跡 1軒	前期	『志木市史 原始・古代資料編』		
		第3地点	包含層出土土器	早～後期	No.7		
		第4地点	埋蔵 1基	中期	No.8		
		第9地点	土坑 1基	不明	No.11		
		第11地点	住居跡 1軒、土坑 3基、炉穴 1基、土器	前・中期	No.12		
3	城山	第12地点	包含層出土土器	早～晩期	No.17		
		第15地点	遺構外出土土器、石器	早～後期	No.27		
		第16地点	包含層出土土器、集石 1基、土器(爪形文系など)、石器	草創～後期	No.27		
		第29地点	土坑 1基	早～後期	No.18		
		第32地点	包含層出土土器	早～中期	No.18		
		第34地点	包含層出土土器	早～中期	No.20		
		第35地点	包含層出土土器	早～後期	No.20		
		5	中道	第2地点	住居跡 3軒、土坑 8基、集石 2基、土器、石器	中期	No.6
				第12地点	住居跡 2軒、土器	中期	No.13
				第13地点	住居跡 1軒、土坑 1基、土器	中期	No.13
				第21地点	包含層出土土器	前期	No.17
				第27地点	包含層出土土器	前～後期	No.22
				第41地点	包含層出土土器	早～後期	No.20
		7	西原大塚	第44地点	包含層出土土器	早～後期	No.21
第1地点	住居跡 4軒、土坑 8基、土器、石器			中期	No.1		
第3地点	住居跡 5軒、土坑 2基、土器			中期	No.2		
第8地点	住居跡 1軒、土坑 24基、土器、石器			中期	No.9		
第34地点	住居跡 3軒、土坑 6基、土器、石器			中期	No.18		
第39地点	住居跡 3軒、土器、石器			中期	No.21		
第43地点	住居跡 10軒、土坑 22基、土器、石器			中期	No.24		
第47地点	土坑 1基、遺構外出土土器			中期	No.26		
第54地点	土坑 7基、土器			中・後期	No.28		
第65地点	遺構外出土土器・石器			前～後期	No.30		
8	新邸	第1地点	住居跡 1軒(貝塚)、土坑 2基、包含層出土土器	前・中期	No.3		
		第2地点	住居跡 1軒(第1地点と同一)、土器、石器、貝類	前期	No.4		
		第3地点	包含層出土土器	早・前期	No.10		
10	田子山	第4地点	土坑 1基	不明	No.13		
		第10地点	住居跡 1軒、土器	中期	No.17		
		第19地点	土坑 2基、遺構外出土土器	早～後期	No.22		
		第21地点	遺構外出土土器片	早～後期	No.22		
		第25地点	炉穴 1基、遺構外出土土器	早～後期	No.22		
		第32地点	土坑 1基、遺構外出土土器	早～中期	No.16		
		第37地点	遺構外出土土器	早期	No.16		
		第39地点	土坑 3基、集石 2基、炉穴 2基、土器	早期	No.18		
		第47地点	遺構外出土土器	早・前期	No.20		
		第49地点	遺構外出土土器	早期	No.20		
		第69地点	集石 1基	中期	No.26		
		第78地点	集石 1基、土器	前期	No.28		
		第81地点	遺構外出土土器・石器	早期～中期	No.30		

3. 弥生時代

2	中野	第2地点	住居跡 2軒、土器	後期	No.2
		第9地点	住居跡 1軒、土器	後期	No.8
		第25地点	住居跡 1軒、土坑 1基、土器	後期	No.25
		第49地点	住居跡 6軒、土器	後期	No.29
3	城山	B地点	住居跡 1軒	後期	『志木市史 原始・古代資料編』
		第4地点	住居跡 2軒、土器	後期	No.8
		第35地点	住居跡 1軒、土器、砥石	後期	No.20
7	西原大塚	第1地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No.1
		第2地点	住居跡 3軒、土器	後期～古墳	『志木市史 原始・古代資料編』
		第3地点	住居跡 2軒、土器	後期～古墳	No.2
		第4地点	住居跡 3軒、土器、砥石	後期～古墳	No.4
		第6地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No.8
		第7地点	小竪穴状遺構 1基	後期～古墳	No.10
		第8地点	住居跡 13軒、方形周溝墓 1基、掘立柱建物跡 1基	後期～古墳	No.9
		第9地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No.9
		第10地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No.9
		第14地点	住居跡 4軒、土器	後期～古墳	No.17
		第21地点	方形周溝墓 1基、土器	後期～古墳	No.22

第2表 志木市の時代別みた考古資料一覧(1)

No.	遺跡名	地点名	掲載された主な遺構・遺物	報告書一覧No及び資料索引	
7	西原大塚	第32地点	住居跡 2軒、土器	後期～古墳	No.16
		第36地点	住居跡 4軒、土器	後期～古墳	No.20
		第37地点	住居跡 7軒、土器	後期～古墳	No.21
		第39地点	住居跡 1軒、方形周溝墓 1基、土器、石器	後期～古墳	No.21
		第43地点	住居跡 9軒、土器	後期～古墳	No.24
		第45地点	住居跡 72軒、方形周溝墓 1基、土器（鳥型土器）	後期～古墳	No.23
		第47地点	溝跡 1本	後期～古墳	No.26
		第54地点	方形周溝墓 1基、土器	後期～古墳	No.28
		第65地点	住居跡 3基、土器、土師器、石器	後期～古墳	No.30
10	田子山	区画整理	住居跡 30軒、方形周溝墓 4基（記述のみ）	後期～古墳	No.19
		第1地点	住居跡 1軒、土器	後期	No.9
		第4地点	住居跡 1軒、土器	後期	No.13
		第10地点	住居跡 5軒、土器	後期	No.17
		第19地点	遺構外出土土器	後期	No.22
		第31地点	住居跡 17軒（21号住居跡記述のみ）	後期	『田子山富士』文化財第22集
		第32地点	方形周溝墓 1基	後期～古墳	No.16
15	市場裏	第1地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No.17
		第2地点	方形周溝墓 2基、土器小片	後期～古墳	No.17
		第3地点	方形周溝墓 1基、土器小片	後期～古墳	No.14

4. 古墳時代

2	中野	第2地点	住居跡 1軒、土師器	後期	No.2		
		第7地点	住居跡 1軒	後期	No.10		
		第12地点	住居跡 1軒、土師器多数	後期	No.12		
		第16地点	住居跡 1軒、土師器	後期	No.17		
		第18地点	住居跡 1軒、土師器、鉄鏃多数	後期	No.14		
		第25地点	住居跡 10軒、土師器多数	後期	No.25		
		第31地点	住居跡 1軒、土師器、鉄鏃、砥石	後期	No.15		
		第41地点	住居跡 1軒、土師器多数、紡錘車	後期	No.18		
		第49地点	住居跡 1軒、土坑 2基、土師器	後期	No.29		
		第50地点	住居跡 1軒	後期	No.24		
3	城山	B地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	後期	『志木市史 原始・古代資料編』		
		第1・2地点	住居跡 54軒、土師器多数、須恵器、鉄・土製品	前・後期	No.5		
		第3地点	住居跡 4軒、土師器	前・後期	No.7		
		第4地点	住居跡 1軒、土師器多数	後期	No.8		
		第6地点	住居跡 2軒、土坑 1基、土師器多数	後期	No.10		
		第7・9地点	住居跡 7軒、土師器多数、鉄製品	中・後期	No.11		
		第11地点	住居跡 3軒、土師器	前・後期	No.12		
		第13地点	住居跡 1軒、土師器	後期	No.17		
		第15地点	住居跡 6軒、土師器	後期	No.27		
		第25地点	住居跡 2軒、土師器、初期須恵器	中・後期	No.16		
		第29地点	住居跡 1軒、土師・須恵器	後期	No.18		
		第34地点	住居跡 3軒、土師器	後期	No.20		
		第35地点	住居跡 1軒、土師器多数	後期	No.20		
		5	中道	第2地点	住居跡 5軒、土師器	後期	No.6
				第12地点	住居跡 3軒、土師器	後期	No.13
第13地点	住居跡 1軒、土師器			後期	No.13		
第21地点	住居跡 2軒、溝跡 1本、土師器、鉄製品（鎌完形1点）			後期	No.17		
第33地点	住居跡 1軒、土師・須恵器			後期	No.16		
第36地点	住居跡 1軒、土師器			前期	No.18		
第37地点	住居跡 1軒、土師器多数、須恵器小片、土製品			中期	No.18		
7	西原大塚	市史掲載	土師器	前期	『志木市史 原始・古代資料編』		
		第11地点	方形周溝墓 1基、壙棺 1基、土師器	前期	No.11		
		第43地点	住居跡 1軒、土師器	後期	No.24		
		第45地点	住居跡 2軒、土師器	後期	No.23		
		第111地点	住居跡 1軒、土師器	前期	No.31		
8	新邸	第2地点	住居跡 1軒、土師器	前期	No.4		
10	田子山	第5地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、炭化種子（ヤマモモ多数）	後期	No.13		
		第13地点	住居跡 1軒、土師器（暗文土器1点あり）	後期	No.17		
		第29地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	後期	No.15		
		第48地点	住居跡 1軒、土師器（統比企型坏あり）	後期	No.20		
		第69地点	住居跡 1軒、土師器	後期	No.26		
11	富士前	市史掲載	土師器多数	前期	『志木市史 原始・古代資料編』		
		第15地点	住居跡 1軒、土師器（元屋敷系高坏あり）	前期	No.20		
12	馬場	市史掲載	土師器（S字鏃か）	前期	『志木市史 原始・古代資料編』		

5. 奈良・平安時代

2	中野	第2地点	住居跡 1軒、須恵器	8c 後半	No.2
		第16地点	住居跡 3軒、須恵器	9c 中葉	No.17
		第25地点	住居跡 2軒	平安時代	No.25
		第41地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、鉄製品、転用紡錘車	9c 後半	No.18
		第43地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、鉄滓	9c 前半	No.20
3	城山	第49地点	住居跡 1軒、土坑 5基、土師・須恵器、砥石	9c 中葉～後葉	No.29
		第1・2地点	住居跡 6軒、灰釉陶器、土師・須恵器多数、鉄・石製品	8～10c	No.5
		第4地点	土坑 2基、灰釉陶器、須恵器（新開・栗谷ツ産）	10c 前半	No.8

第2表 志木市の時代別にみた考古資料一覧（2）

第1章 遺跡の立地と環境

No.	遺跡名	地点名	掲載された主な遺構・遺物	報告書一覧No.及び資料索引	
3	城山	第7地点	住居跡 1軒、灰釉陶器	9c か?	No.11
		第11地点	住居跡 1軒	平安時代	No.12
		第16地点	住居跡 1軒、土師・須恵器	平安時代	No.27
		第29地点	住居跡 1軒	平安時代	No.18
		第35地点	住居跡 2軒、銅印、布目瓦、緑釉陶器片、土師・須恵器	9c 後半	No.20
5	中道	第12地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	9c 後半	No.13
		第21地点	住居跡 1軒、溝跡 1本、灰釉陶器片、土師・須恵器	9c 後半	No.17
		第41地点	住居跡 1軒、溝跡 1本、灰釉陶器片、須恵器、炭化米	9~10c	No.20
		第44地点	土坑 1基	平安時代	No.21
		第7	西原大塚	第8地点	住居跡 3軒
10	田子山	第34地点	住居跡 1軒	平安時代	No.18
		第4地点	住居跡 9軒、土師・須恵器	8~10c	No.13
		第5地点	住居跡 4軒、土師・須恵器	8~10c	No.13
		第6地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、刀子、土鍾	9c 後半	No.12
		第7地点	住居跡 1軒、布目瓦小片2点、格子目叩き瓦小片1点	8c 後半	No.12
		第19地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、鉄製品	9~10c	No.22
		第21地点	住居跡 3軒、土坑 1基、土師・須恵器、鉄製品	9c 代	No.22
		第25地点	住居跡 5軒、土師・須恵器、砥石	9c 後半	No.22
		第29地点	住居跡 1軒、須恵器・布目瓦1点	9~10c	No.15
		第37地点	土坑 2基、須恵器	9~10c	No.16
		第39地点	溝跡 3本、土師・須恵器小片	9c 代	No.18
		第41・42地点	住居跡 1軒、土坑 1基、土師・須恵器、鉄・銅製品	9~10c	No.18
		第47地点	住居跡 2軒、土坑 1基、土師・須恵器、鉄・石製品	9c 中頃	No.20
		第49地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	10c 代	No.20
		第69地点	住居跡 1軒、溝跡 1本、土師・須恵器	9c 中頃	No.26
		第78地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	9c 前~後半	No.28
		第81地点	住居跡 1軒、土坑 1基、溝跡 1本、須恵器、鉄製品	9c 後半、 10Mは古墳か?	No.30
6. 中・近世					
2	中野	第2地点	溝跡 1本	不明	No.2
		第6地点	溝跡 1本	不明	No.8
		第8地点	土坑 1基	不明	No.10
		第11地点	土坑 1基、陶・磁器小片	18~19c	No.17
		第25地点	土坑 15基、陶・磁器・瓦器小片	近世	No.25
		第43地点	井戸跡 1基	不明	No.20
		第49地点	段切状遺構 1カ所、井戸跡 4基、土坑 12基、人骨、陶磁器、鉄製品、石製品、板碑など	中・近世	No.29
3	城山	A地点	溝跡 1本	中世	『志木市史 原始・古代資料編』
		C地点	柏城跡の大堀跡 1本、陶・磁器	中・近世	『志木市史 中世資料編』
		第1・2地点	柏城跡関連の堀跡 5本、土坑 32基、井戸跡 10基、掘立柱建築跡・ビット群、陶・磁器多数、銅鏡、鉄・石製品	中・近世	No.5
		第3地点	土坑 16基、溝跡 2本	中・近世	No.7
		第4地点	土坑 1基	14~15c	No.8
		第6地点	土坑 7基	中・近世	No.10
		第7・9地点	土坑 4基、土製品	中・近世	No.11
		第11地点	土坑 3基、井戸跡 1基、陶・磁器、板碑、馬歯	中・近世	No.12
		第12地点	土坑 2基、井戸跡 1基、溝跡 5本、陶・磁器、古銭	中・近世	No.17
		第15地点	溝跡 2本(柏城関連)、陶・磁器、かわらけ	中・近世	No.27
		第16地点	井戸跡 2基、溝跡 2本(柏城関連)、陶・磁器、かわらけ、鉄製品(火打金・釘)、板碑	中・近世	No.27
		第25地点	土坑 1基	中・近世	No.16
		第29地点	土坑 11基、溝跡 1本、ビット群、板碑、陶・磁器、馬歯、古銭など	中・近世	No.18
第35地点	土坑 15基(铸造土坑1基・溶解炉1基)、井戸跡1基、鑄型、土・鉄製品、陶・磁器、古銭など	中・近世	No.20		
5	中道	第2地点	土坑 数基、溝跡 14本、掘立柱建物跡 4基、ビット群	中・近世	No.6
		第6地点	土坑 1基、陶・磁器小片	15c 代	No.8
		第26地点	土坑 6基(土坑墓2基)、掘立柱建物跡、人骨、古銭など	17c 代	No.17
		第27地点	地下式坑 2基、土坑 2基、陶・磁器	14~15c	No.17
		第36地点	溝跡 2本、ビット群、陶・磁器小片	中・近世	No.18
		第37地点	土坑墓 1基、道路遺構 1本、人骨、青磁盤、古銭	中世	No.18
		第44地点	溝跡 2本	中・近世	No.21
7	西原大塚	第65地点	遺構外出土陶磁器・土器	中・近世	No.9
8	新邸	第1地点	土坑 19基、井戸跡 1基、溝跡 2本	中・近世	No.3
		第3地点	土坑 1基、溝跡 2本、陶・磁器	中・近世	No.10
10	田子山	第25地点	遺構外出土陶・磁器	中・近世	No.22
		第81地点	遺構外出土陶・土器、泥面子	近世	No.30
16	大原	第1地点	溝跡 1本	近世	No.22
7. 近代以降					
3	城山	第35地点	かわらけ 2点	19c 後半	No.20
10	田子山	第31地点	ローム探掘遺構 2カ所	19c 後半	『田子山富士』文化財第22集
		第49地点	土坑 1基	近・現代	No.20
15	市場裏	第3地点	かわらけ 2点	19c 代	No.14

第2表 志木市の時代別にみた考古資料一覧(3)

No.	報告書名	刊行年	シリーズ名	発刊者	執筆者
1	西原・大塚遺跡発掘調査報告	1975	志木市の文化財第4集	志木市教育委員会	井上國夫・落合静男 谷井 彪・宮野和明
2	西原大塚遺跡第3地点 中野遺跡第2地点発掘調査報告書	1985	志木市遺跡調査会調査報告第1集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形則敏
3	新邸遺跡発掘調査報告書	1986	志木市遺跡調査会調査報告第2集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形則敏
4	新邸遺跡第2地点 西原大塚遺跡第4地点発掘調査報告書	1987	志木市遺跡調査会調査報告第3集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形則敏
5	城山遺跡発掘調査報告書	1988	志木市遺跡調査会調査報告第4集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形則敏 神山健吉
6	中道遺跡発掘調査報告書	1988	志木市遺跡調査会調査報告第5集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形則敏
7	城山遺跡長勝院地点発掘調査報告書	1987	志木市の文化財第11集	志木市教育委員会 志木市遺跡調査会 志木ロータリークラブ	佐々木保俊
8	志木市遺跡群Ⅰ	1989	志木市の文化財第13集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
9	志木市遺跡群Ⅱ	1990	志木市の文化財第14集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
10	西原大塚遺跡第7地点 新邸遺跡第3地点 中野遺跡第7地点 中野遺跡第8地点 城山遺跡第6地点発掘調査報告書	1991	志木市の文化財第15集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
11	志木市遺跡群Ⅲ	1991	志木市の文化財第16集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
12	志木市遺跡群Ⅳ	1992	志木市の文化財第17集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
13	中道遺跡第12地点 中道遺跡第13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点発掘調査報告書	1992	志木市の文化財第18集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
14	志木市遺跡群Ⅴ	1993	志木市の文化財第20集	志木市教育委員会	尾形則敏
15	志木市遺跡群Ⅵ	1995	志木市の文化財第21集	志木市教育委員会	尾形則敏
16	志木市遺跡群Ⅶ	1996	志木市の文化財第23集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏 深井恵子
17	城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点発掘調査報告書	1996	志木市の文化財第24集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
18	志木市遺跡群Ⅷ	1997	志木市の文化財第25集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏 深井恵子
19	西原大塚の遺跡 西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査概報	1998		志木市遺跡調査会 西原特定土地区画整理組合	佐々木保俊
20	志木市遺跡群9	1999	志木市の文化財第27集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子
21	志木市遺跡群10	2000	志木市の文化財第28集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子
22	埋蔵文化財調査報告書 1	2000	志木市の文化財第29集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子
23	西原大塚遺跡第45地点発掘調査報告書	2000	志木市遺跡調査会調査報告第6集	志木市遺跡調査会 小松フォークリフト株式会社	佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳・上田寛
24	志木市遺跡群11	2001	志木市の文化財第30集	志木市教育委員会	尾形則敏・佐々木保俊 内野美津江
25	埋蔵文化財調査報告書 2	2001	志木市の文化財第31集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子
26	志木市遺跡群12	2002	志木市の文化財第32集	志木市教育委員会	尾形則敏・佐々木保俊 深井恵子
27	埋蔵文化財調査報告書 3	2002	志木市の文化財第34集	志木市教育委員会	尾形則敏・佐々木保俊 深井恵子・佐々木 潤
28	志木市遺跡群13	2003	志木市の文化財第35集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子
29	中野遺跡第49地点-東京電力志木変電所の埋蔵文化財発掘調査報告-	2004	志木市遺跡調査会調査報告第7集	志木市遺跡調査会	尾形則敏・深井恵子 青木 修
30	志木市遺跡群14	2004	志木市の文化財第36集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子 青木 修
31	西原大塚遺跡第111地点	2005	志木市遺跡調査会調査報告第8集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳

第3表 志木市の発掘調査報告書一覧

では、特に西原大塚遺跡10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に、畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。平成11年度に西原大塚遺跡第45地点で発見された一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が特筆すべきであろう。この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土器をはじめ、畿内系の有段口緑壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土しており、こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

最新では、平成15年6～8月に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点から、古墳時代前期に比定される住居跡8軒・方形周溝墓が1基検出されている。方形周溝墓については、遺跡名は異なっても墓群の中心をもつ西原大塚遺跡から見れば北東端に含まれるものと考えられる。ただし、集落跡の様相から察すると、新邸遺跡第2地点から古墳時代前期終末から中期に比定される住居跡1軒が検出されていることから、現時点では西原大塚遺跡から継続して集落が広がったものではないかと推測される。

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する。中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。特に中道遺跡第19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、市内最古のカマドをもつ住居跡として注目される。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後半から7世紀後半にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

平成15年には、新邸遺跡でも初めて7世紀代の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で120軒を越え、次いで中野遺跡で約50軒、中道遺跡で約15軒、田子山遺跡で約10軒、新邸遺跡で1軒を数える。また、平成5年の田子山遺跡第24地点では、6世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7mのやや不整形で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されていたが、平成14年には同第81地点から、推定約33mの古墳の周溝と考えられる遺構1基を確認している。

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、田子山遺跡は、この時代の代表とする遺跡として挙げることができる。この遺跡では、住居跡の他、掘立柱建築遺構、溝跡、100基を越える土坑群が確認されている。遺物としては、土器・灰釉陶器の他、腰帯の一部である銅製の丸柄、鉄製の紡錘車・刀子などが出土している。

また、平安時代の城山遺跡128号住居跡からは、印面に「冨」1文字が書かれた銅製の印章が出土したことに注目される。この住居跡からはその他、猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。

中・近世では、柏城跡を有する城山遺跡と関根兵庫館跡が代表される遺跡である。特に、柏城跡内の数次にわたる発掘調査により、『館村旧記』にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。また、城山遺跡第29地点の127号土坑から馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、特に、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されて

いる。さらに、第35地点では、鑄造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鑄造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鑄型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。

また、平成11～14年度にかけて実施された中野遺跡第49地点の調査から、頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑が検出されている。その他、ピット列・土坑・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『館村旧記』に記載されている「村中の墓場」関連に相当する施設ではないかと考えられる。

近代以降の遺跡では、19世紀以降の溝跡・地下室などが、城山遺跡を中心に検出されている。田子山遺跡では、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治2～5年）に関連するローム採掘遺構が検出されており、地域研究の重要な資料であると言える。

第2節 遺跡の概要

ここで、今回本書で報告する城山遺跡について概観することにする。

城山遺跡は、志木市柏町3丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北西約1kmに位置している。遺跡は、柳瀬川右岸の台地上に立地しており、標高は約12m、低地との比高差は約5mである。

遺跡の周辺を眺めると、現況は住宅地を主としているが、小学校・神社・墓地などが存在することから、市内の台地上では比較的緑地を多く残している地区と言える。今後は、個人住宅建設の新築及び建て替え等と中心とする小規模開発の増大が予想される。2000㎡を超えるような大規模開発については、今回の42地点の着手によりひとまず一段落した感がある。

さて、城山遺跡は、これまでに55回の調査（平成16年度まで）が実施され、縄文時代草創・前・中期、弥生時代後期、古墳時代前・中・後期、奈良・平安時代、中・近世に至る複合遺跡であることが判明している。そこで、これまでに城山遺跡からどのような遺構・遺物が検出されたかを今までの発掘調査の成果から代表的な例を挙げ、大まかに振り返ってみることにしたい（第4表）。

まず、城山遺跡における最初の発掘調査は、昭和49（1974）年に実施されたA地点に始まる。この調査は、市史編さん事業の一環で志木市立志木第3小学校の校庭内を発掘調査したものである。この調査により、縄文時代前期の諸磯a式期の住居跡1軒と弥生時代後期の住居跡1軒、中世の溝跡1本が検出されている。特に、この地区から縄文時代前期の住居跡が検出されたことは、同遺跡に存在する城山貝塚との関連で注目されるものとなった。

昭和55（1980）年には、柏城の大堀の実体を解明する目的で、市史編さん室によるトレンチ発掘が実施され、上幅9.02m・下幅1.6m・深さ4.7mの大堀跡の細部形態が明らかになった。

昭和60（1985）年には、志木市遺跡調査会により、城山遺跡第1地点の発掘調査が実施された。この調査は、面積約5,000㎡という市内では初の大規模調査となり、古墳時代前期の住居跡1軒、後期の住居跡53軒、奈良・平安時代の住居跡6軒、中・近世では柏城の大堀跡を含め、土坑・井戸跡・溝跡・ピット群など多くの遺構・遺物が検出された。同時にこの調査を契機に志木市では、本格的に発掘調査体制が整備されたことは重要であろう。

昭和61（1986）年、志木ロータリークラブのボランティア事業の一環として、市教育委員会が主体となり、発掘調査が行われ、弥生時代末葉から古墳時代初頭の住居跡1軒、古墳時代後期の住居跡3軒、中・近世の土坑17基が検出された。

昭和62（1987）年、本市では、国庫及び県費の補助金を導入し、個人専用住宅建設等に伴う発掘調査を開始した。この年は城山遺跡では第4地点の発掘調査が実施され、縄文時代中期の埋甕1基、弥生時代末葉から古墳時代初頭の住居跡1軒、平安時代の土坑2基、中・近世の地下室1基が検出された。

平成元（1989）年、第7・9地点の発掘調査が実施され、古墳時代後期の住居跡7軒、平安時代の住居跡1軒、中・近世の土坑5基が検出された。この調査は、第1地点よりも台地の奥まった地区ではあったが、古墳時代後期の住居跡が密集して分布することが判明し、改めて集落の広がりを理解するのに重要であったと言える。

平成2（1990）年の第12地点の調査では、中・近世に比定される地下室・井戸跡・溝跡が検出されている。これらについては、『^{註3}館村旧記』の屋敷割之図では表記されていないが、柏城関連の遺構と考えられる。

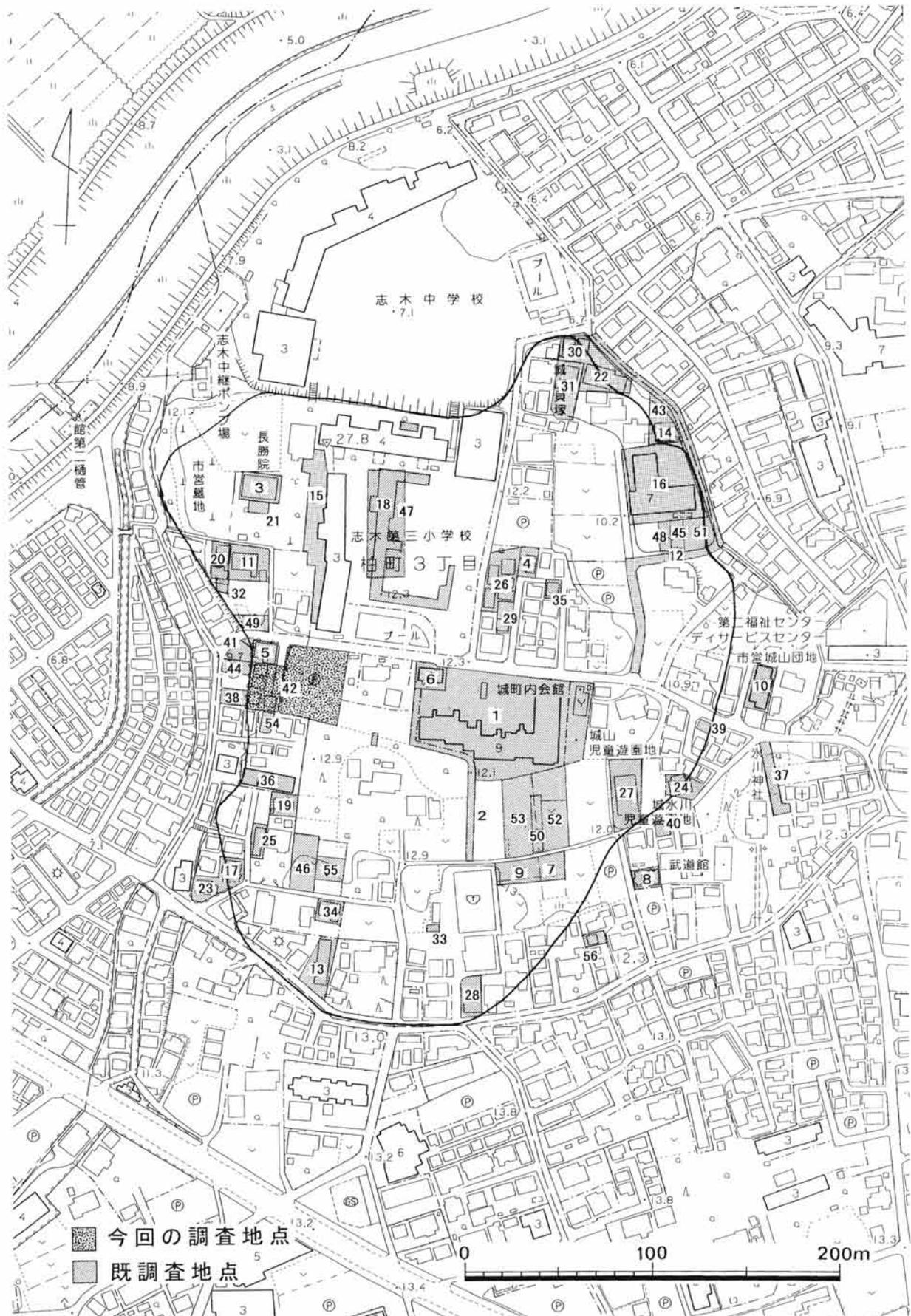
平成4（1992）年には、第15・16地点の調査が実施された。第15地点は志木市立志木第3小学校の西校舎裏の道路工事に伴うもので、この調査では、柏城の本丸を囲む大堀と考えられる遺構が検出されたことに注目される。第16地点は、第15地点から東方向に150m程の近距離に位置しており、ここでも柏城関連の溝跡等が検出されている。また、第16地点は縄文時代の遺物包含層が発達しており、多くの縄文土器が出土している。中でも草創期の爪形土器が1点検出されたことには注目される。

平成5（1993）年には、志木市立志木第3小学校の雨水抑制工事に伴う調査により、縄文時代の土坑1基、弥生時代後期の住居跡1軒、古墳時代の住居跡8軒、中・近世の土坑6基・溝跡6本が検出された。中・近世の溝跡については、柏城関連の堀跡に相当するものと考えられる。

平成6（1994）年、第25地点の発掘調査が実施され、古墳時代中期の住居跡1軒・後期の住居跡1軒、近世の地下室1基・溝跡1本が検出された。古墳時代中期の住居跡については、屋内炉を有するもので、遺物には土師器・須恵器が出土している。特に須恵器は、陶邑産の大型器台の脚部破片の他、坏蓋の破片で、その特徴からTK216型式（5世紀前葉から中葉）に比定される可能性があり、市内では最古のものとなった。

平成7（1995）年の第29地点の調査では、縄文時代早期の土坑1基、古墳時代後期の住居跡2軒、平安時代の住居跡1軒、中・近世の土坑11基・溝跡1本・ピット群が検出されている。特筆すべきは、中世に比定される127号土坑から、馬の埋葬土坑が検出されたことである。馬は頭部及び上半部を欠くが、板碑の直下で、横臥屈葬された状態で埋葬されており、同時に土師質土器・炭化種子（イネ・オオムギ・コムギ）が出土している。中でも、イネの塊状のものは、「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものと分析結果が報告されている。

平成8（1996）年の第35地点の調査では、個人専用住宅という狭小な面積（84.40㎡）ではありながら、調査区全面から、弥生時代後期の住居跡1軒、古墳時代後期の住居跡1軒、平安時代の住居跡2軒、中・近世の鑄造土坑1基・溶解炉1基・井戸跡1基などが密集して検出された。この調査で特筆すべきは、平安時代の128号住居跡から、県内初の出土である「冨」印と市内初の猿投産の緑釉陶器片が出土したこと、さらに、17世紀中頃から後半に比定される鑄造遺構に関連する鑄造土坑・溶解炉、そして数多くの鑄型・鉄滓・道具類が出土したことである。



第2図 城山遺跡の調査地点 (1/3000)

平成17年6月30日現在

第1章 遺跡の立地と環境

調査地点	面積 (㎡)	確認調査日	発掘調査期間	調査原因	遺構の概要	報告書No.
A地点	90.00		昭和49年7月29日 ～8月4日	学術調査	(縄文前期)住居跡1軒(弥生後期)住居跡1軒(中世)溝跡1本	1984 『志木市史 原始・古代編』
C地点	30.00		昭和55年7月20日 ～8月21日	学術調査	(中世)柏城大堀跡	1986 『志木市史 中世資料編』
B地点	50.00		昭和57年3月25日 ～3月31日	学術調査	(古墳後期)住居跡2軒(中世)溝跡1本	1984 『志木市史 原始・古代編』
第1・2地点	4,964.39		昭和60年4月8日 ～11月26日	共同住宅建設	(古墳前期)住居跡1軒(古墳後期)住居跡53軒(奈良・平安)住居跡6軒(中・近世)土坑32基・溝跡5本・井戸跡10基・ピット	No.5
第3地点	300.00		昭和61年7月21日 ～8月30日	学術調査	(古墳前期)住居跡1軒(古墳後期)住居跡3軒(中・近世)土坑16基・溝跡2本	No.7
第4地点	92.28		昭和62年6月19日 ～7月1日	個人住宅建設	(縄文中期)埋甕1基(弥生後期)住居跡2軒(古墳後期)住居跡1軒(平安)土坑2基(中世)土坑1基(不明)土坑1基	No.8
第5地点	125.00	昭和63年 6月10日		共同住宅建設	検出されなかった	No.9
第6地点	166.08		昭和62年12月12日 ～12月28日	共同住宅建設	(古墳後期)住居跡2軒、土坑1基(中・近世)土坑7基	No.10
第7地点	130.00	平成元年 11月17日	11月20日～12月4日	宅地造成	(古墳後期)住居跡1軒(平安)住居跡1軒	No.11
第8地点	132.13	11月23日		共同住宅建設	検出されなかった	No.11
第9地点	115.71	12月4日	12月4日～18日	宅地造成	(縄文)土坑1基(古墳後期)住居跡6軒(中・近世)土坑4基	No.11
第10地点	330.49	平成2年 3月16日		共同住宅建設	検出されなかった	No.11
第11地点	192.00	4月6日	4月7日～20日	個人住宅建設	(縄文早期)炉穴2基(縄文前期)土坑1基(縄文中期)住居跡1軒、土坑2基(古墳前期)住居跡1軒(古墳後期)住居跡2軒(平安)住居跡1軒(中・近世)土坑3基、井戸跡1基	No.12
第12地点	1,074.00	4月19日 ～24日	4月25～5月22日	道路改良工事	(中・近世)土坑2基、溝跡4基、井戸跡1基	No.17
第13地点	400.44	5月7日	5月8日～17日	共同住宅建設	(古墳後期)住居跡1軒	No.17
第14地点	181.90	平成4年 5月1日		個人住宅建設	検出されなかった	No.15
第15地点	560.00		平成4年7月21日 ～8月21日	道路工事	(古墳後期)住居跡6軒(中・近世)溝跡2本・土坑1基	No.27
第16地点	1,556.00		平成4年10月2日 ～12月11日	共同住宅建設	(縄文)遺物包含層、集石1基(古墳後期)住居跡1軒(中・近世)土坑1基、井戸跡2基、溝跡2本	No.27
第17地点	130.56	平成5年 3月22日	6月3日～8月28日	個人住宅建設	検出されなかった	No.15
第18地点	115.45	6月3日	6月3日～8月28日	雨水流水抑制工事	(縄文)土坑1基(弥生後期)住居跡1軒(古墳後期)住居跡8軒(中・近世)土坑6基、溝跡6本	未
第19地点	361.93	10月28日	11月1日～15日	共同住宅建設	(古墳後期)住居跡5軒(不明)土坑1基	未
第20地点	100.38	12月24日	平成6年1月13日 ～17日	個人住宅建設	(古墳後期)住居跡1軒(不明)土坑2基	No.15
第21地点	48.00		2月18日～2月24日	樹木土壌改良	(縄文早期)炉穴1基(古墳後期)住居跡2軒(近世)土坑3基	未
第22地点	498.13	平成6年 3月2日	3月9日～30日	共同住宅建設	(縄文)集石1基(古墳後期)住居跡1軒	未
第23地点	157.94	5月31日		個人住宅建設	検出されなかった	No.16
第24地点	277.68	7月6日		個人住宅建設	検出されなかった	No.16
第25地点	127.38	7月15日	7月15日～29日	個人住宅建設	(古墳中期)住居跡1軒(古墳後期)住居跡1軒(近世)土坑1基(不明)土坑1基	No.16
第26地点	410.00	8月18日	8月22日～10月14日	共同住宅建設	(縄文)土坑1基(古墳後期)住居跡7軒(平安)住居跡4軒、土坑1基(中・近世)土坑6基、溝跡4本(不明)土坑1基	未

第4表 城山遺跡調査一覧(1)

調査地点	面積 (㎡)	確認調査日	発掘調査期間	調査原因	遺 構 の 概 要	報告書No.
第27地点	371.52	平成7年 1月30日	2月27日～4月7日	共同住宅建設	(古墳後期)住居跡2軒(中・近世)土坑15基、溝跡2本、井戸跡1基	未
第28地点	233.30	平成6年 12月13日	平成7年1月10日 ～2月17日	事務所建設	(縄文前期)土坑1基(古墳後期)住居跡5軒(不明)土坑1基	未
第29地点	146.41	平成7年 4月5日	4月11日～28日	個人住宅建設	(縄文早期)土坑1基(古墳後期)住居跡2軒(平安)住居跡1軒(中・近世)土坑11基、溝跡1本、ビット群	No.18
第30地点	200.85	4月24日		分譲住宅建設	検出されなかった	No.18
第31地点	164.27	6月6日		個人住宅建設	検出されなかった	No.18
第32地点	59.62	11月14日	11月15日	倉庫建設	(中世)ビット1本(不明)土坑1基	No.18
第33地点	30.00	平成8年 6月12日		防火水槽設置工事	検出されなかった	No.20
第34地点	162.00	7月12日	7月15日～8月1日	個人住宅建設	(古墳後期)住居跡3基(平安)土坑1基	No.20
第35地点	84.40	11月15日	11月18日～12月25日	個人住宅建設	(弥生後期)住居跡1軒(古墳後期)住居跡1軒(平安)住居跡2軒(中・近世)鑄造土坑1基、溶解炉1基、土坑13基、井戸跡1基、ビット	No.20
第36地点	361.18	平成10年 4月23日		駐車場建設	盛土保存適用	No.21
第37地点	430.00	平成11年 11月5日		駐車場建設	検出されなかった	No.24
第38地点	120.38	平成12年 7月25日		分譲住宅建設	検出されなかった(現地踏査)	No.26
第39地点	94.97	8月21日		個人住宅建設	盛土保存適用	No.26
第40地点	76.32	12月7日		個人住宅建設	検出されなかった	No.26
第41地点	140.33	12月12日		個人住宅建設	検出されなかった(現地踏査)	No.26
第42地点	2,173.79	12月18日	平成13年2月23日 ～6月29日	共同住宅建設	(旧石器)石器集中地点2ヶ所(縄文)土坑21基、炉穴1基(古墳後期)住居跡16軒(平安)住居跡5軒、土坑13基(中世以降)土坑151基、溝跡4本、井戸跡8基、ビット群	本報告
第43地点	117.00	平成13年 5月29日		分譲住宅建設	検出されなかった	No.26
第44地点	132.30	6月20日		分譲住宅建設	検出されなかった(現地踏査)	No.26
第45地点	100.00	平成15年 1月31日		個人住宅建設	検出されなかった	No.30
第46地点	348.29	2月18日	平成15年2月28日 ～4月30日	個人住宅建設	(縄文前期)住居跡1軒(古墳後期)住居跡5軒(平安)住居跡1軒、溝跡1本(近世)道路状遺構1本、土坑26基、井戸跡4基、ビット列	未
第47地点	1,200.00	2月21日		仮設校舎建設	検出されなかった(現地踏査)	No.30
第48地点	100.00	3月14日		個人住宅建設	検出されなかった(現地踏査)	No.30
第49地点	232.23	8月26日	平成17年1月11日 ～2月1日	個人住宅建設	(縄文)土坑1基(古墳後期)住居跡2軒(近世)土坑6基	未
第50地点	199.54	9月5日		道路新設工事	工事立会い	未
第51地点	200.19	9月16日		個人住宅建設	検出されなかった(現地踏査)	未
第52地点	300.42	10月14日		分譲住宅建設	盛土保存適用	未
第53地点	771.53	11月12日		宅地造成	盛土保存適用	未
第54地点	122.70	平成16年 8月11日		個人住宅建設	盛土保存適用	未
第55地点	115.10	10月8日	平成16年10月12日 ～11月30日	個人住宅建設	(縄文)土坑2基(古墳後期)住居跡3軒(平安)溝跡1本(近世)土坑2基	未
第56地点	80.01	平成17年 4月11日		個人住宅建設	検出されなかった	未

第4表 城山遺跡調査一覧(2)

平成10・11・12年は、発掘調査は実施されなかった。

平成13（2001）年には、今回の報告である第42地点の調査が実施された（本書参照）。

平成15（2003）年には、第46地点の調査が実施され、縄文時代前期諸磯期の住居跡1軒、古墳時代後期の住居跡5軒、平安時代の住居跡1軒・溝跡1本、中・近世の道路状遺構1本・土坑26基・井戸跡4本・ピット列が検出された。

平成16（2004）年度には、第49地点と第55地点の発掘調査が実施された。第49地点からは、縄文時代の土坑1基、古墳時代後期の住居跡2軒、近世の土坑6基が検出された。第55地点は、第46地点のすぐ東側に隣接し、縄文時代の土坑2基、古墳時代後期の住居跡3軒、平安時代の溝跡1本、近世の土坑2基が検出された。溝跡については、第46地点と同一遺構と思われる、東西方向に延びていることが判明した。近世の土坑のうち1基は地下坑で、主体部は通路状の横坑構造をもつ特殊タイプであった。

以上の調査から、城山遺跡は、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代・中・近世の複合遺跡であり、また、複合する密度も散在的ではなく、市内では最も濃密な地区であることが判明してきている。

最後に、本遺跡の特色を時代別にまとめると、以下のとおりである。

○旧石器時代 石器集中地点2ヶ所。本地点で初めて検出される。

○縄文時代 第16地点から草創期の爪形文系土器1点出土。

前期の城山貝塚。斜面貝塚。未調査である。

前期の諸磯式期の住居跡が2軒検出される。

第4地点から中期の住居跡1軒。加曾利EⅡ式期。

○弥生時代 後期の住居跡4軒。

○古墳時代 前期の住居跡2軒。

中期から後期の大集落。5世紀後半から7世紀後半にかけての住居跡が約150軒検出されている。

○奈良時代 8世紀後半の住居跡2軒。

本地点の1号ピットから偏行唐草文の軒平瓦片1点出土。

○平安時代 9世紀前半から10世紀にかけての住居跡約20軒。

第35地点128号住居跡から、印面に「富」と書かれた銅印が出土。

○中・近世 柏城関連の大堀を含めた溝跡・井戸跡・土坑。馬の埋葬土坑。铸造関連遺構。

註1 遺跡の存否及び範囲については、平成15年1月10日付の変更増補によって、大々的に見直され修正されている。その主な内容は、市場・氷川前遺跡の2遺跡の削除と中野・城山・中道・西原大塚・新邸・田子山・富士前・市場裏遺跡の8遺跡の一部範囲縮小である。その結果、本市の遺跡総数は、16遺跡から14遺跡に変更されることになった。

註2 縄文時代後期の住居跡については、平成14年度に実施された西原地区特定区画整理事業に伴う発掘調査によって、大量の土器・石器が出土した99号住居跡が1軒検出されている。

註3 『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主であった宮原仲右衛門仲恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。

第2章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経過

平成12年11月、株式会社長谷工コーポレーション（以下、長谷工コーポレーション）から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市柏町3丁目2627-1の一部、2627-2、2627-5の一部、2627-14（面積2,106.89㎡）内に共同住宅建設を行うというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である城山遺跡（コード11228-003）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1. 埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
2. 上記1の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。
3. 城山遺跡における埋蔵文化財の分布状況については、周辺での調査結果から、市内で最も密集していることが判明しているため、今回の開発地域内での埋蔵文化財の所在は確実である。さらに、この地域は中世の柏城跡内に位置するため、堀跡や井戸跡・地下室等の深いものが多く存在する可能性がある等、城山遺跡の状況を説明する。

平成12年11月22日、教育委員会は、土地所有者である株式会社昭和土地（代表取締役柴沼孝）より埋蔵文化財確認調査依頼書を受理し、12月18日、午前9時30分から確認調査を実施した。

確認調査は、調査区のほぼ南北方向に合わせ、幅1.5m程のトレンチを4本設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、調査区のほぼ全面にわたり遺構が密集して分布することが判明した。特に、昭和60（1985）年の発掘調査で明らかにされた柏城関連の大堀が本調査区内にも延びていることが確認された。

教育委員会はこの結果をただちに事業者へ報告し、埋蔵文化財の保存措置を講ずるよう要請した。その後、平成13年1月11日・23日・31日、2月13日の事前協議を経た後、記録保存のための発掘調査を実施することに決定した。さらに、今まで開発側として交渉を行ってきた長谷工コーポレーションは、土地所有者及び開発者の代理業者としてこれからは交渉を行うことになり、土地所有者であり開発事業者は、株式会社興和地所 代表取締役 中込 稔（以下、興和地所）に正式に決定した。

その後、興和地所から埋蔵文化財発掘届が提出され、教育委員会では発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を斡旋した。遺跡調査会ではこれを受け、興和地所と委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出する。教育委員会は、これらの届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

これにより、2月23日から志木市遺跡調査会を主体として発掘調査を実施した。なお、文化庁通知番号は、教文第3-901号 平成13（2001）年3月31日付である。

第2節 調査の方法と経過

本地点では、すでに確認調査により調査区全面にわたり遺構が密集して分布することが確認されていたため、残土置き場については重要な問題であった。通常であれば、埋め戻しを前提に調査区を二分し折り返し調査を行うところであるが、今回は埋め戻しを行わず、残土についても処分してもらいたいという開発側からの要望により、すべての表土及び排土を残土として調査区外に搬出し、同時に処分することにした。

さらに、今後の遺構精査の過程で予想される残土についても調査区内に置くことが不可能であるため、人員導入後においても数回の残土搬出作業が行えるように準備する必要がある。

また、柏城関連の大堀跡が検出された調査区南端部については、大堀の実態が地表から5mもの深さと推測されることから、労働安全衛生規則上、掘削面のこう配の基準から調査することは不可能であり、さらに隣接地には既存住宅が建設されていることから、調査による土砂災害の危険も考え、事前協議の中で開発除外を依頼することにより、調査は範囲確認のレベルに留めることにした。

以下、発掘調査の経過及び各遺構の精査経過については、第5表の発掘調査工程表に示し、文章での説明は割愛することにする。

- 2月23日 重機による表土剥ぎ及び排土搬出作業を開始した。調査区内には駐車場として使用されていた際の碎石が一面に敷かれていたため、まずその碎石の除去作業を行う。
- 26日 プレハブ・トイレを設置する。ただし、プレハブは、調査区内で事前に遺構確認を行い、遺構が検出されなかった位置に設置したかったが、調査区域全域に遺構が密集して検出されたため、ひとまず設置予定の区域を先行し調査を実施する予定とした。プレハブは表土剥ぎを残した場所に仮設置することにした。
- 3月2日 人員導入による発掘調査を開始する。器材搬入後、プレハブ設置場所の確保のため、調査区北東隅から、先行して調査区域の整備と遺構確認作業を開始する。
- 3月30日 145Dは巨大な近世の地下坑であり、天井部がまだ大部分陥落せずに残っているため、危険防止のため、主体部内に入っての精査は行わず、重機により天井部を抜くことにした。
- 4月4日 プレハブ設置予定場所の精査がすべて終了し、重機により埋め戻しを完了。プレハブを定位置に設置し、引き続きプレハブの仮設置場所を重機により表土剥ぎ作業を行う。
- 4月9日 中道遺跡第56地点の発掘調査を併行して進める。
～11日
- 5月31日 現場事務所にて長谷工コーポレーションに中間報告を行う。
- 6月13日 田子山遺跡第78地点の発掘調査を併行して進める。
～7月5日
- 6月27日 旧石器時代の精査を開始する。
- 6月29日 旧石器時代を対象とした基本土層の実測・写真撮影を終了し、すべての調査を完了する。
- 7月5日 プレハブ・トイレを搬出する。

A 1 2 3 4 5 6 7

B

C

D

E

F



第3図 遺構分布図 (1/200)

	平成13年2月	3月	4月	5月	6月	7月
表土剥ぎ作業	2.23				6.19	
中世以降の遺構						
145D	3.5					
146D	3.5					
147D	3.5					
148D	3.6					
149D	3.7					
150D	3.7					
151D	3.8					
152D	3.8					
153D	3.8					
154D	3.8					
155D	3.8					
157D	3.12					
158D					6.27	
159D	3.12					
160D	3.12					
161D	3.13					
163D		3.14				
164D		3.22		5.1		
165D		3.16				
166D		3.16	4.11再開			
167D		3.16				
168D		3.16	4.11再開			
169D		3.16				
170D		3.16		5.2		
171D		3.16				
172D		3.16		5.2		
173D		3.16		5.2		
174D		3.16				
175D		3.19				
176D		3.19		5.2		
178D		3.21	4.18再開			
179D		3.21				
180D		3.21				
181D		3.22				
182D		3.22				
183D		3.23			6.27再開	
184D			4.17			
185D		3.28				
186D		3.28				
187D		3.28				
188D		4.4			6.27再開	
189D		4.4				
191D		4.4				
192D		4.6				
194D		4.6				
196D			4.9			
197D			4.11			
198D			4.17			
200D			4.18			
201D			4.18			
202D			4.19	5.1		
203D				5.2		
204D			4.19			
205D			4.19			
206D			4.19			
207D			4.19			
208D				5.1		
209D			4.20			
210D			4.19			
211D			4.19			
212D			4.19	5.10		
213D			4.20			
214D			4.20			
215D			4.20			
216D			4.20	5.10		
219D			4.24			
220D			4.26			
221D			4.27	5.10	6.20	
222D			4.26			
223D			4.26		6.4再開	
224D			4.27			
225D				5.1		
226D				5.1		
227D				5.1		

第5表 発掘調査工程表(1)

第2章 発掘調査の概要

	平成13年2月	3月	4月	5月	6月	7月
229D				5.10	6.20	
230D				5.1		
231D				5.1		
232D				5.10		
233D				5.2		
234D				5.2		
235D				5.2		
236D				5.2	6.13	
237D				5.2	6.12	
238D				5.2		
239D				5.2		
240D				5.2	6.12	
241D				5.2		
242D				5.2		
243D				5.2		
244D				5.2		
245D				5.7		
246D				5.7		
248D				5.7		
249D				5.7		
250D				5.7		
253D				5.8		
254D				5.8		
256D				5.8		
257D				5.9		
258D				5.9		
260D				5.10		
261D				5.10		
262D				5.10		
263D				5.11		
264D				5.14	6.20	
265D				5.14	6.12	
268D				5.14		
269D				5.15		
270D				5.15	6.1	
271D				5.15		
272D					5.25	
273D				5.17	5.23	
274D					5.23	
275D					5.23	
276D					5.23	
277D					5.25	
278D					5.25	
279D					5.25	
280D					5.28	
281D					5.28	
282D					5.28	
283D					5.28	
285D					5.28	
288D					5.28	
292D					6.4	
293D					6.1	
294D						6.13
295D					6.12	
296D					6.12	
297D					6.12	6.20
298D						6.18
299D						6.18
300D						6.18
301D						6.18
302D						6.18
304D						6.19
306D						6.19
307D						6.18
308D						6.19
309D						6.19
310D						6.19
311D						6.20
312D						6.20
313D						6.20
316D						6.21
318D						6.21
319D						6.21
322D						6.23
323D						6.23
324D						6.25

第5表 発掘調査工程表(2)

	平成13年2月	3月	4月	5月	6月	7月
325D					6.25	
17W		3.19				
18W		3.19				
19W		3.16				
20W		4.4				
21W		4.9				
22W		4.9				
23W		4.9	4.26	5.7	6.21	
24W			5.1		6.21	
1M		3.26	4.16	6.9		
30M	3.9		4.18	5.9	6.20	
31M				5.29		
32M			4.11	5.14		
畝状遺構				5.21		
平安時代の遺構						
138H		3.22				
139H		3.28			6.1再開	
149H					6.5	
150H					6.18	
151H					6.21	
156D	3.9					
177D		3.19				
190D		4.4				
193D			4.13			
217D			4.24	5.1		
218D			4.24			
228D				5.1		
247D				5.7		
255D				5.7		
259D				5.8		
289D				5.28		
303D					6.18	
305D					6.19	
古墳時代の遺構						
131H	3.2					
132H	3.2					
133H	3.5	4.6再開		5.2		
134H	3.8		4.17再開	5.2		
135H	3.15					
136H		3.22			6.1再開	
137H		3.22				
140H		4.4		5.1再開	5.14	
141H			4.11			
142H			4.17			
143H			4.19			
144H			4.20			
145H				5.10		
146H				5.11		
147H					5.28	
148H					5.30	
縄文時代の遺構						
4F P					6.23	
162D	3.14					
195D					6.27	
199D			4.18			
251D				5.7		
252D				5.8		
266D				5.14		
267D				5.2	5.15	
284D					5.28	
286D					5.28	
287D					5.28	
290D					5.29	
291D					5.30	
314D					6.20	
315D					6.21	
317D					6.21	
320D					6.23	
321D					6.23	
326D					6.25	
327D					6.25	
328D					6.26	
329D					6.26	
基本土層					6.23	
旧石器時代の精査					6.26	
器材撤去・片付け						7.5

第5表 発掘調査工程表(3)

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 旧石器時代

(1) 概要

今回の旧石器時代の調査は、293Dの精査中に石器1点が検出されていたため、検出の可能性の高い箇所である(D-3)グリッドを中心に精査対象の設定を行った。同時に南側面に基本層序(セクションA-A')を設定し、立川ローム第X層までの深掘りを行った。

今回検出された文化層は、立川ローム層第IV層上部・第VII層の2枚であった。ここでの文化層は第IV層上部を第1文化層、第VII層を第2文化層として説明することにする。

第1文化層は、黒曜石を中心とする石器集中地点1ヶ所が検出されている。出土した遺物は、石器19点であるが、そのうち実測を行った点数は11点である。

第2文化層は、砂岩・安山岩・チャート・頁岩の多様な石材で構成される石器集中地点1ヶ所が検出されている。出土した遺物は、石器10点・礫1点であるが、そのうち実測を行った点数は9点である。

今回の調査で検出された石器等の総数は、第1・2文化層を合わせ30点である。なお、遺構外出土遺物として、旧石器時代の石器2点を取り扱っているため、実質的な旧石器時代の石器等の出土総点数は32点である。

(2) 基本層序

城山遺跡は、武蔵野台地北端の柳瀬川右岸の標高約12mの台地上に位置する。今回の調査における基本層序は、調査区域のほぼ全域から各時代の遺構が濃密に検出されたため、良好な層序は得られなかったが、比較的遺構により影響が少ない(D-7)グリッド内に設けたセクションB-B'の層序を基本とすることにした(第5図)。なお、旧石器時代の遺物が検出された(E-3)グリッドにはセクションA-A'を設定し、文化層を判定する上での基本層序とした。

第I層 盛土及び表土

以前の駐車場による攪乱及び盛土が著しく、遺存状態は不良である。層厚は約40~70cmである。a層は盛土層、b層は表土層、c・d層は耕作土層に相当する。

第II層 今回の調査区域において、漸移層及び縄文時代以降の遺物包含層は確認できなかった。

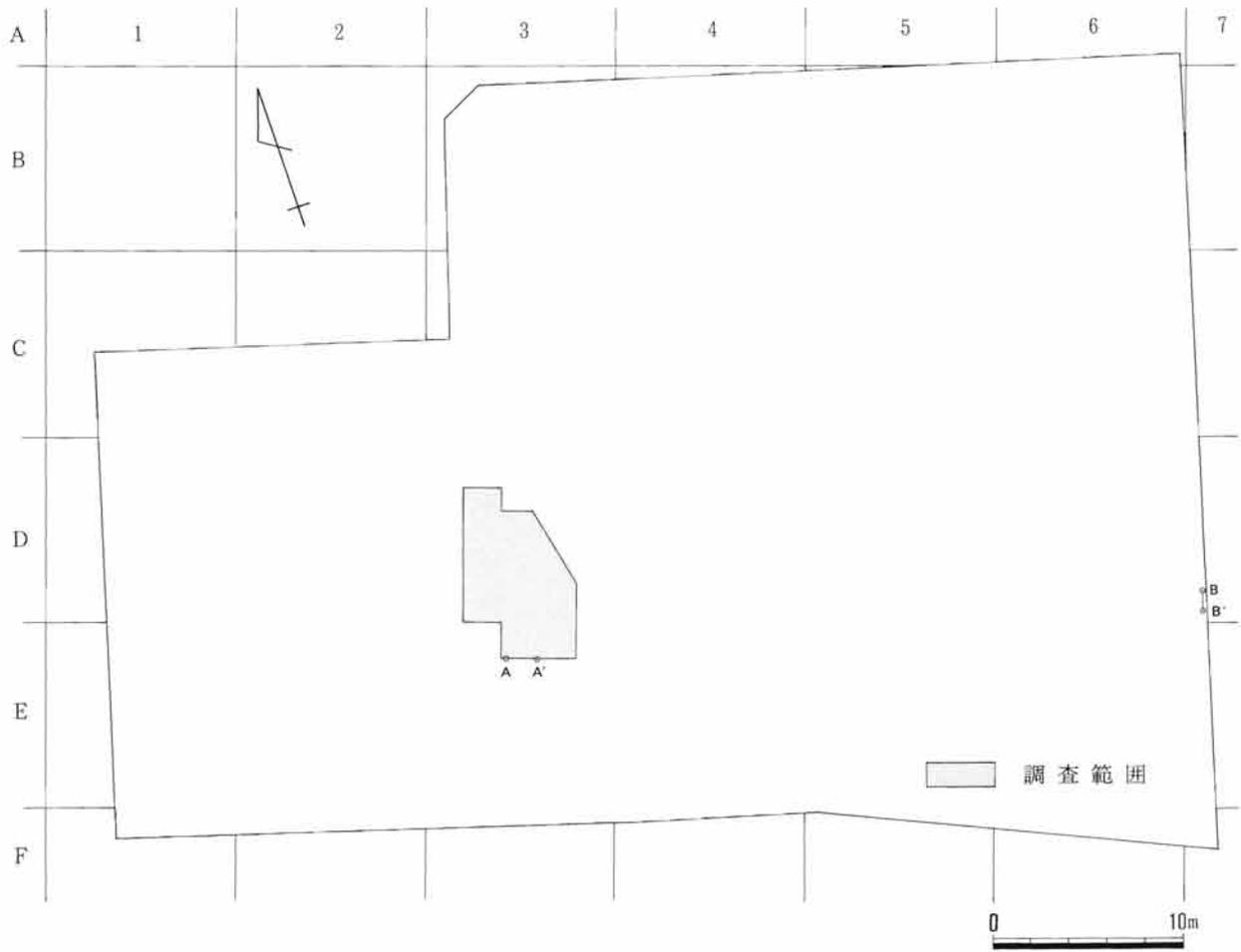
第III層 黄褐色軟質ローム層(ソフトローム層)である。ローム層のソフト化は基本層序の箇所第V層に達していた。

第IV層 黄褐色硬質ローム層(ハードローム層)である。ソフト化の進行が著しい。
本層上部が第1文化層検出層準。

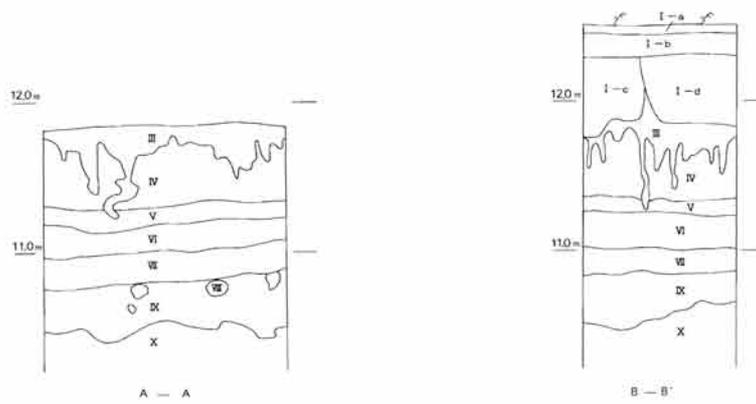
第V層 暗黄褐色土層(立川ローム層第I黒色帯)である。色調から明瞭に判別するのは難しく、部分的に確認しづらい箇所もある。層厚は約10cmと未発達である。

第VI層 黄褐色土層(いわゆるAT包含層準)であり、層厚は20~25cmである。

第VII層 暗黄褐色ローム層(立川ローム層第II黒色帯上半部)であり、層厚は20cm前後である。



第4図 旧石器時代の調査範囲 (1/400)



第5図 基本層序 (1/50)

本層が第2文化層検出層準。

第Ⅷ層 黄褐色ローム層

第Ⅸ層の上層部にブロック状に存在する。非常に散漫であるため、検出できない場合も多い。

第Ⅸ層 暗黄褐色ローム層（立川ローム層第Ⅱ黒色帯下半部）であり、層厚は20～40cmである。

第Ⅹ層 黄褐色ローム層。

（3）各文化層の概要

第1文化層

概要（第6～8図）

立川ローム層第Ⅳ層上部が第1文化層検出層準である。旧石器時代の調査を実施した範囲の北側の（D-3）グリッドから、黒曜石を中心とする石器ブロック1ヶ所が検出されている。出土した遺物は、石器19点であるが、そのうち実測を行った点数は11点である。実測を行った石器の内訳は、抉入石器1点、剥片10点である。石質は、抉入石器が頁岩であった他はすべて黒曜石である。

遺物（第9図・第6表）

1は抉入石器、2～11は剥片である。

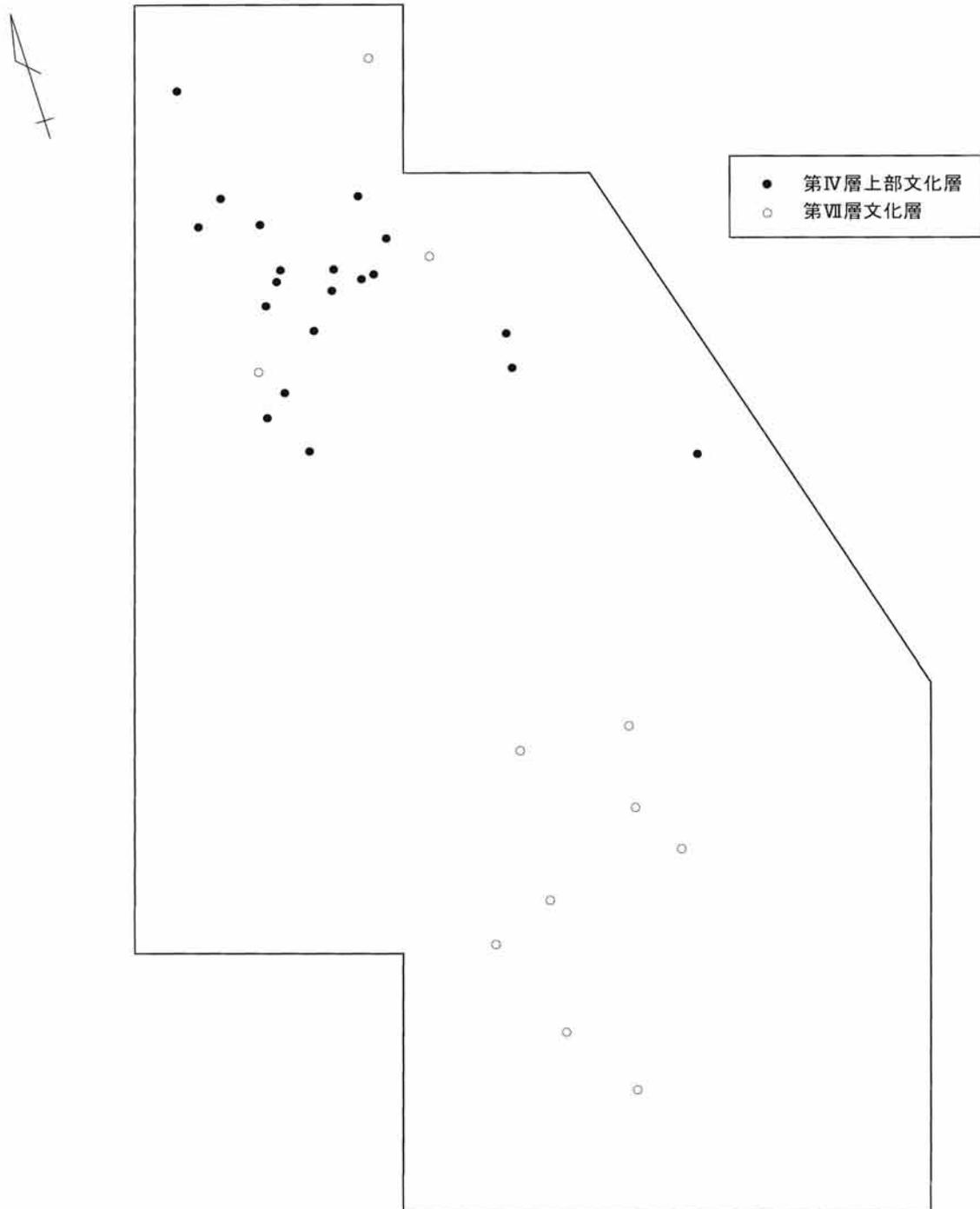
第2文化層

概要（第6・10・11図）

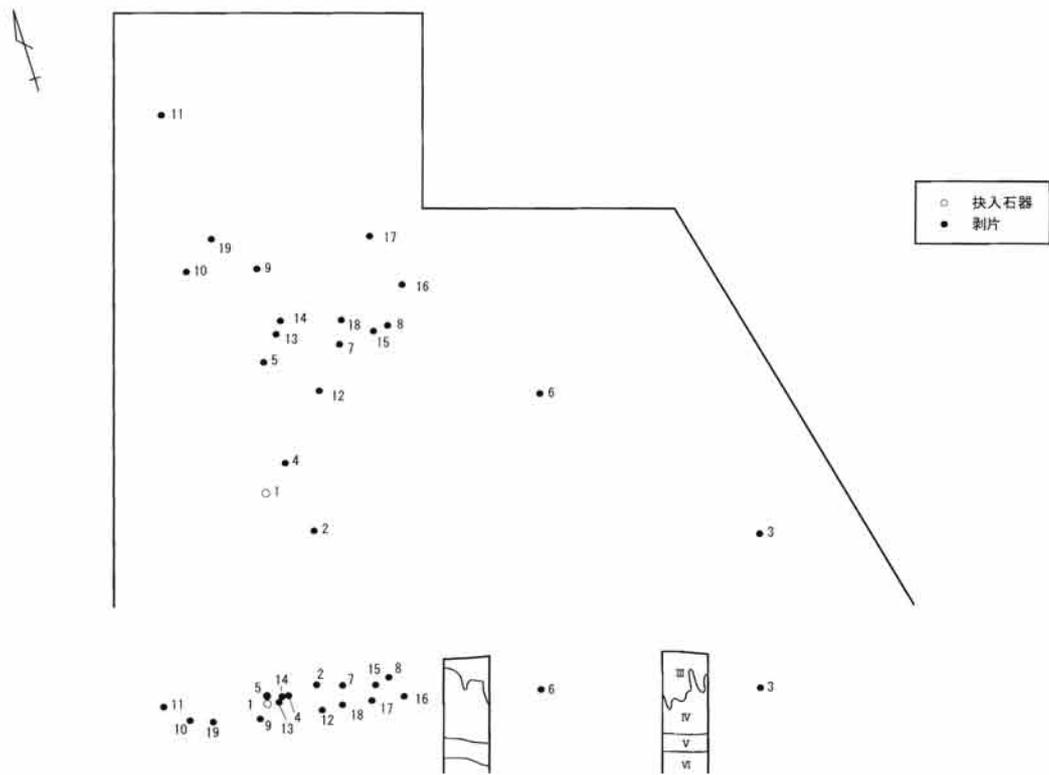
立川ローム第Ⅶ層が第2文化層検出層準である。旧石器時代の調査を実施した範囲の南側の（D・E-3）グリッドから、多様な石材で構成される石器ブロック1ヶ所が検出されている。出土した遺物は、石器10点・礫1点であるが、そのうち実測を行った点数は9点である。実測を行った石器の内訳は、二次加工剥片1点、剥片8点である。石質は、砂岩・安山岩・チャート・頁岩である。

遺物（第12図・第7表）

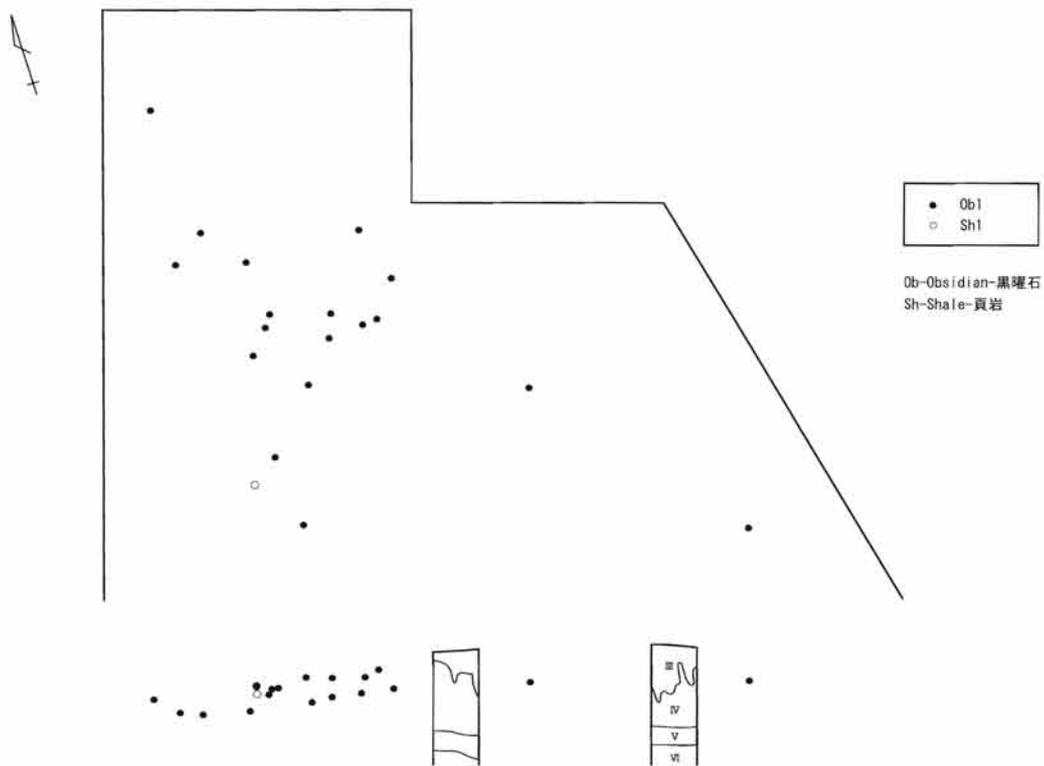
1は二次加工剥片、2～9は剥片である。



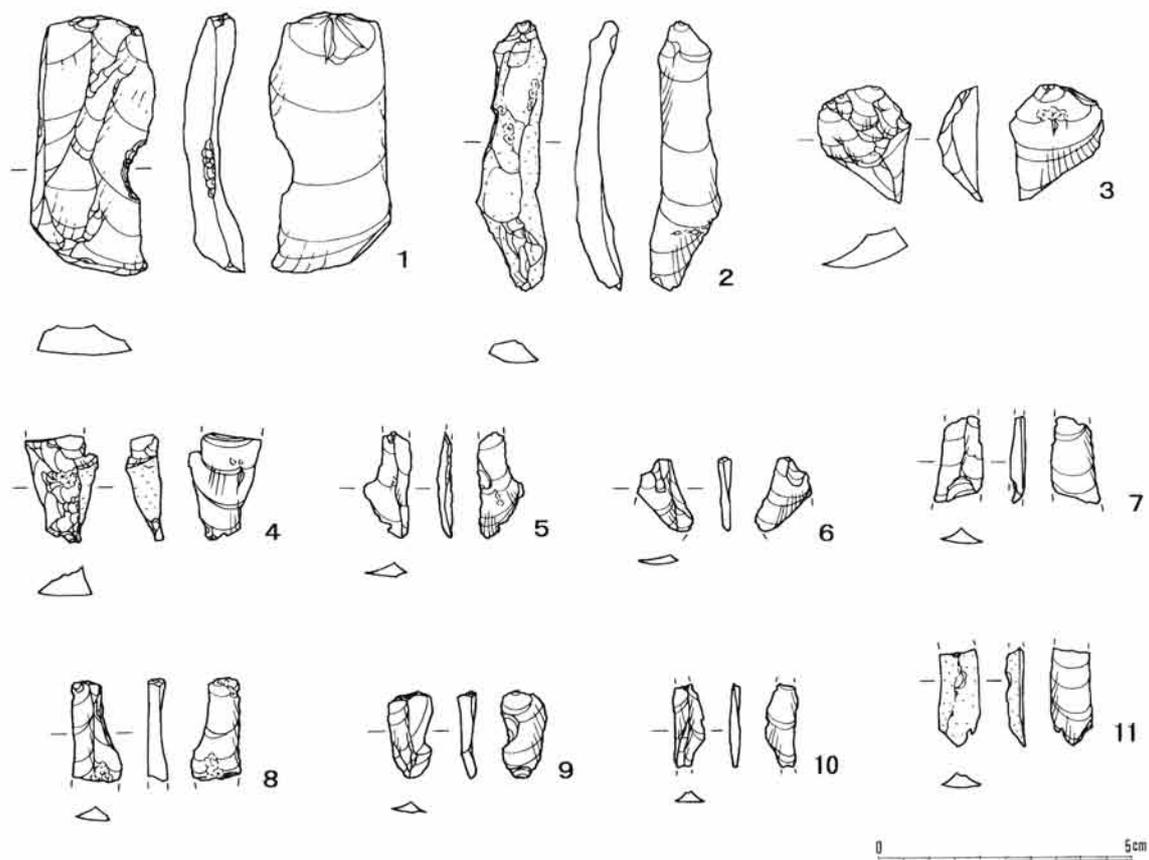
第6図 旧石器時代遺物分布図 (1/50)



第7図 第1文化層（第IV層上部）器種別分布図（1/50）



第8図 第1文化層（第IV層上部）母岩別分布図（1/50）

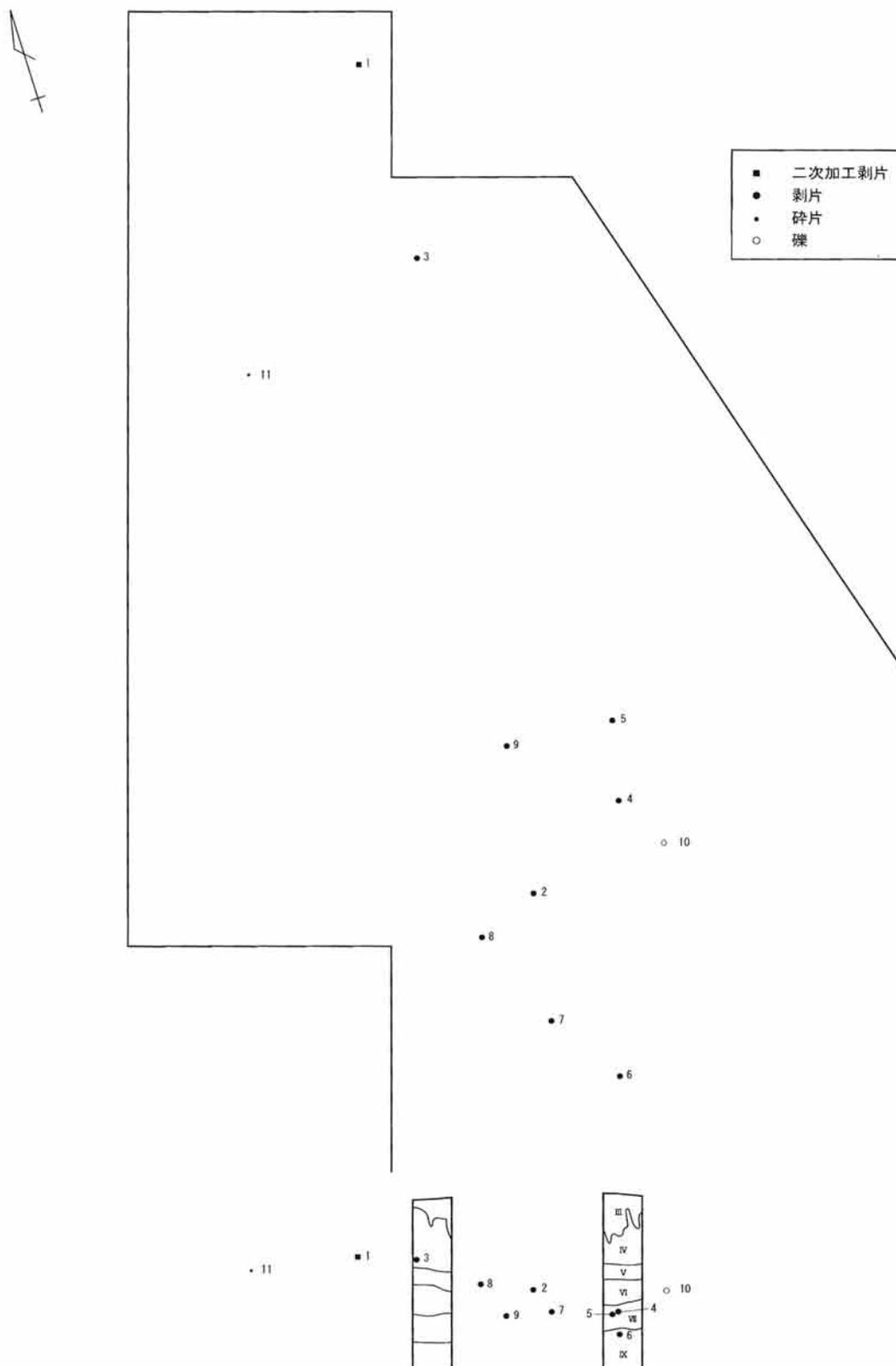


第9図 第1文化層（第IV層上部）出土石器（2/3）

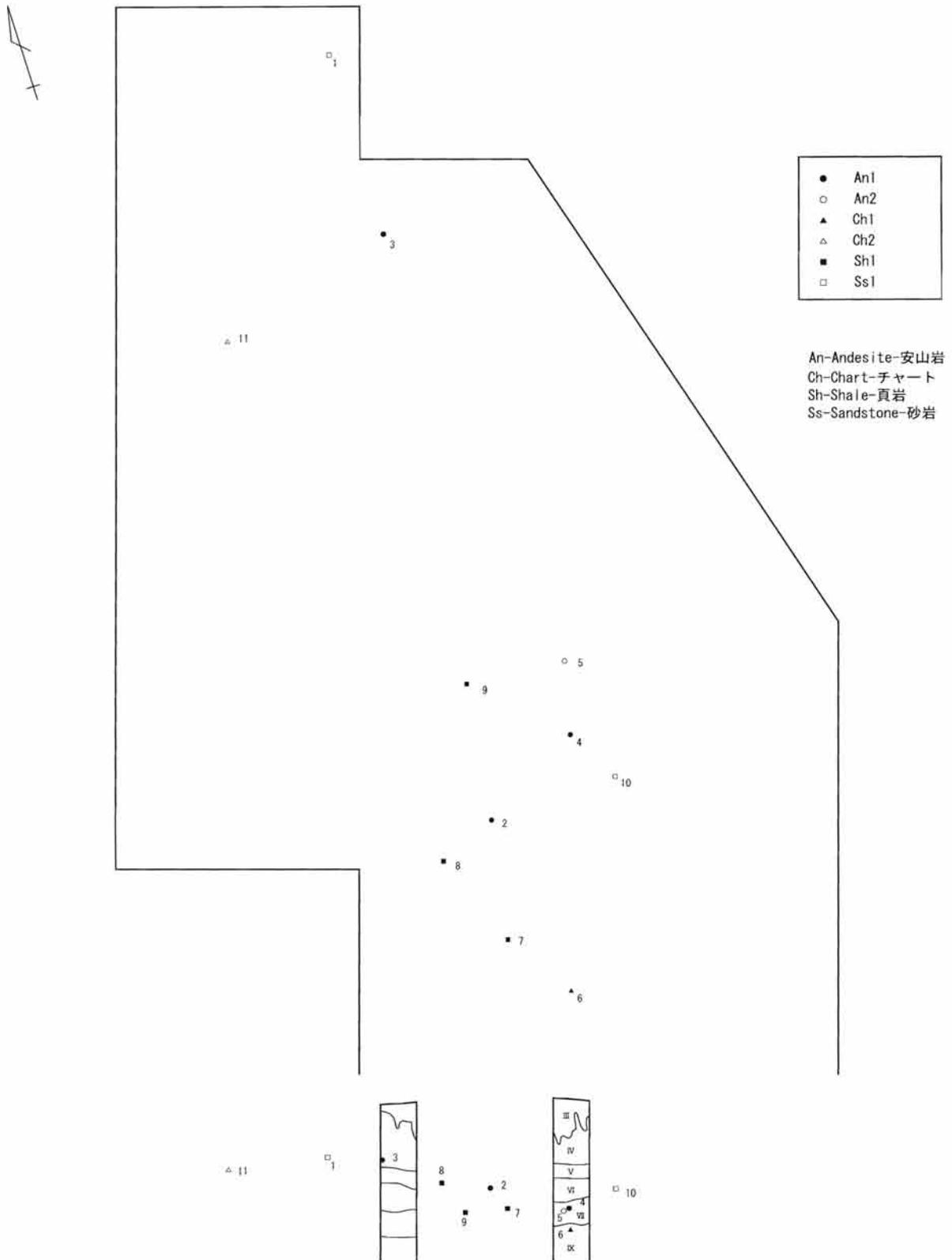
No.	器種	石材	母岩分類	長さ	幅	厚さ	重量	遺存状態	挿図番号
1	挟入石器	頁岩	Sh1	53.09	24.22	10.79	12.6	完形	第9図1
2	剥片	黒曜石	Ob1	53.85	14.06	9.13	3.5	完形	第9図2
3	剥片	黒曜石	Ob1	23.21	19.56	7.97	1.9	完形	第9図3
4	剥片	黒曜石	Ob1	22.16	14.34	7.09	1.3	上部欠	第9図4
5	剥片	黒曜石	Ob1	21.63	9.11	3.92	0.2	上部欠	第9図5
6	剥片	黒曜石	Ob1	13.88	11.26	2.39	0.2	下部欠	第9図6
7	剥片	黒曜石	Ob1	16.76	9.01	3.22	0.3	上下部欠	第9図7
8	剥片	黒曜石	Ob1	19.75	9.39	3.48	0.4	下部欠	第9図8
9	剥片	黒曜石	Ob1	16.92	8.73	3.31	0.3	完形	第9図9
10	剥片	黒曜石	Ob1	16.05	5.93	1.87	0.1	上下部欠	第9図10
11	剥片	黒曜石	Ob1	19.06	8.44	3.65	0.5	上部欠	第9図11
12	剥片	黒曜石	Ob1	10.05	9.12	1.94	0.1	上部欠	
13	剥片	黒曜石	Ob1	8.07	6.03	0.86	0.1	上下部欠	
14	剥片	黒曜石	Ob1	6.59	12.09	2.30	0.1	完形	
15	剥片	黒曜石	Ob1	9.12	3.63	1.01	0.1	左側縁欠	
16	剥片	黒曜石	Ob1	10.09	6.12	1.86	0.1	右側縁欠	
17	剥片	黒曜石	Ob1	11.26	4.16	1.31	0.1	上下部欠	
18	剥片	黒曜石	Ob1	16.12	6.27	1.59	0.1	上部欠	
19	剥片	黒曜石	Ob1	5.06	6.23	1.25	0.1	完形	

(単位 mm, g)

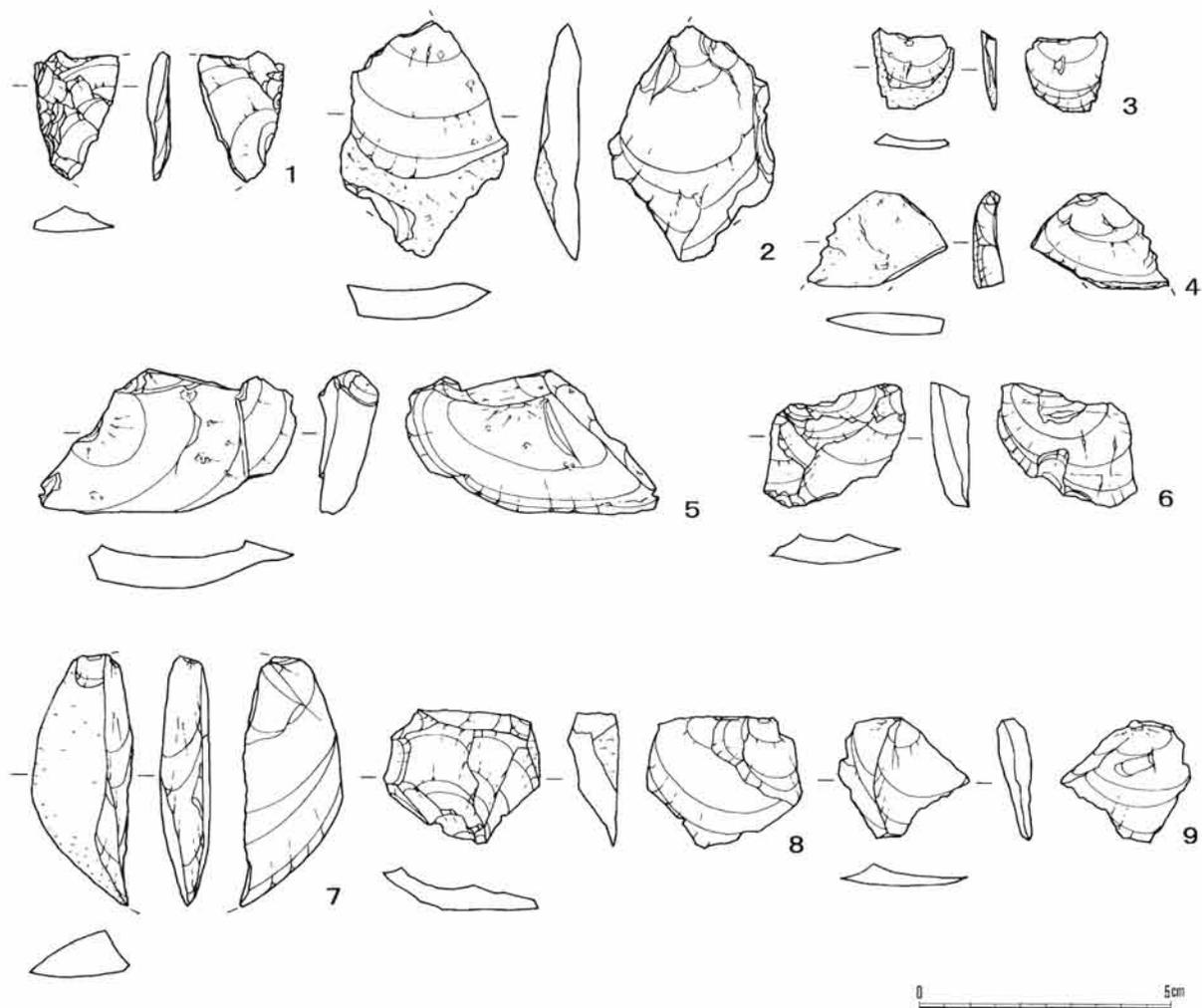
第6表 第1文化層（第IV層上部）出土の石器一覧



第10図 第2文化層(第Ⅶ層)器種別分布図 (1/50)



第11図 第2文化層(第VII層)母岩別分布図(1/50)



第12図 第2文化層（第VII層）出土石器（2/3）

No.	器種	石材	母岩分類	長さ	幅	厚さ	重量	遺存状態	挿図番号
1	二次加工剥片	砂岩	Ss1	26.57	17.17	5.00	2.2	右側縁欠	第12図1
2	剥片	安山岩	An1	47.64	33.26	8.91	12.1	上部から左側縁欠	第12図2
3	剥片	安山岩	An1	15.80	16.52	3.02	0.5	完形	第12図3
4	剥片	安山岩	An1	23.09	26.52	5.38	2.6	下部欠	第12図4
5	剥片	安山岩	An2	34.46	48.20	12.87	12.1	完形	第12図5
6	剥片	チャート	Ch1	22.55	30.02	7.24	4.1	完形	第12図6
7	剥片	頁岩	Sh1	49.01	22.00	9.57	9.3	右側縁欠	第12図7
8	剥片	頁岩	Sh1	27.08	31.65	7.61	4.9	完形	第12図8
9	剥片	頁岩	Sh1	25.24	25.92	7.02	2.4	完形	第12図9
10	礫	砂岩	Ss1	13.15	9.65	7.20	1087.0	完形	
11	砕片	チャート	Ch2	4.61	5.10	2.01	0.1	完形	

(単位 mm, g)

第7表 第2文化層（第VII層）出土の石器一覧

第2節 縄文時代

(1) 概要

縄文時代の遺構については、土坑21基・炉穴1基が検出されている（第13図）。土坑については覆土の観察により縄文時代と判断されるが、遺物の出土量は少なく、詳細な時期について判断するのは困難な土坑が多かった。

(2) 土坑

162号土坑

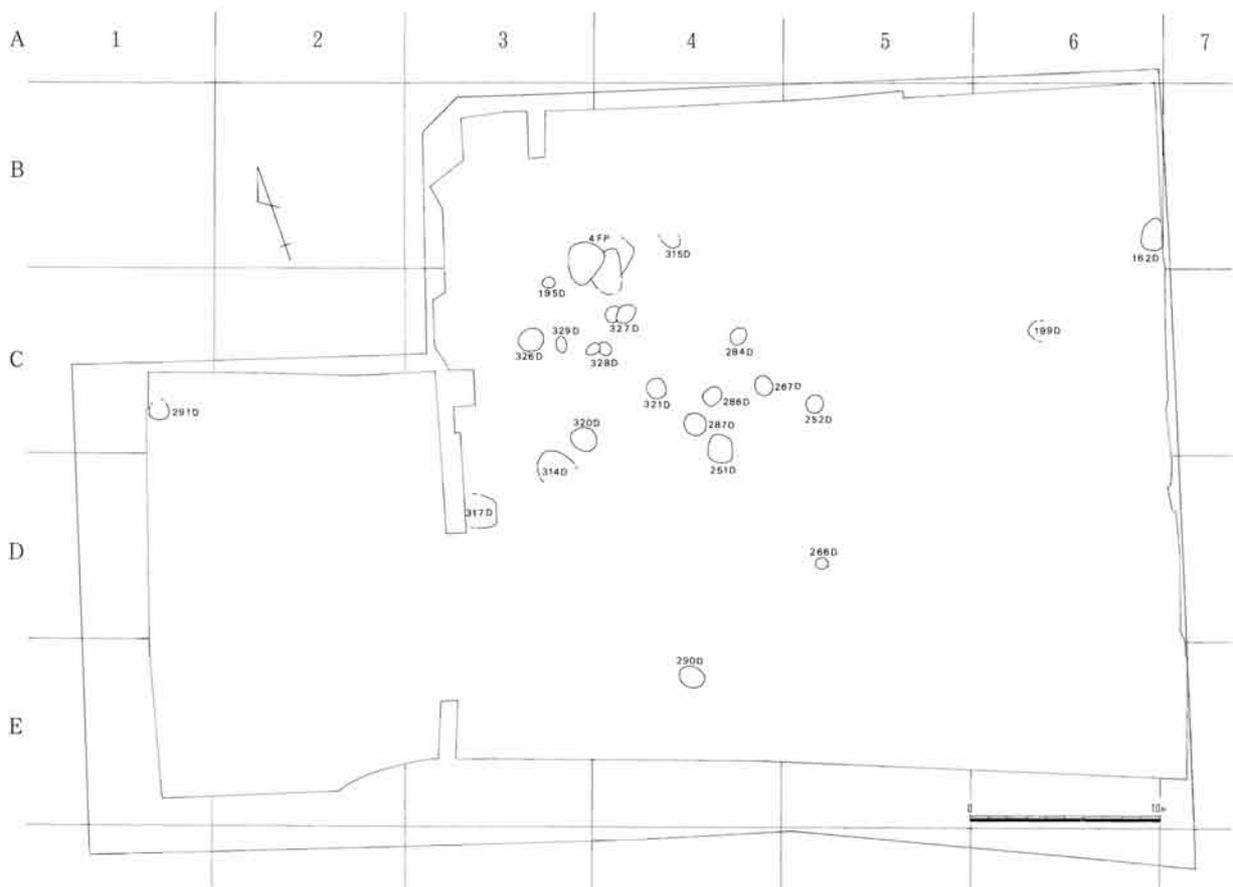
遺構（第14図）

〔位置〕（B-6）グリッド。

〔構造〕東側の一部が調査区外。壁面は緩やかに立ち上がる。（平面形）卵形に近い楕円形。（規模）不明×180cm。（長軸方位）N-30°-E。（深さ）57cm。（覆土）ローム粒子・赤褐色スコリアを含む暗茶褐色土。

〔遺物〕出土しなかった。

〔時期〕縄文時代。



第13図 縄文時代の遺構分布図（1/400）

195号土坑

遺 構 (第14図)

[位置] (C-3) グリッド。

[構造] (平面形) 円形。(規模) 径60cm。(深さ) 14cm。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含み、炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 縄文時代。

199号土坑

遺 構

[位置] (C-6) グリッド。

[構造] 東側部分が133Hや攪乱等に切られ、詳細は不明。(平面形) 不明。(深さ) 16cm。(覆土) 上層部はローム粒子を僅かに含む暗褐色土、下層部はローム粒子・ロームブロックを含む明茶褐色土。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 縄文時代。

251号土坑

遺 構 (第14図)

[位置] (C・D-4) グリッド。

[構造] 257D・260Dに切られる。壁面は緩やかに立ち上がる。(平面形) 隅丸長方形か。(規模) 148×128cm。(長軸方位) N-28°-E。(深さ) 20cm。

[遺物] 土器片が数点出土した。

[時期] 前期後葉(諸磯c式期)か。

遺 物 (第16図1~4、第8表)

1は早期条痕文系土器、2~4は前期諸磯c式土器である。

252号土坑

遺 構 (第14図)

[位置] (C-5) グリッド。

[構造] 248Dに一部切られる。断面は皿状を呈する。(平面形) 円形。(規模) 径93cm。(深さ) 15cm。(覆土) ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 縄文時代。

266号土坑

遺 構 (第14図)

[位置] (D-5) グリッド。

[構造] 140Hの掘り方精査の際に検出された。断面は皿状を呈する。(平面形) 楕円形。(規模) 62×

56cm。(深さ)140H貼床下から10cm。(覆土)ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 縄文時代。

267号土坑

遺構 (第14図)

[位置] (C-4) グリッド。

[構造] 底面はほぼ平面であるが、北側がやや低くなっている。(平面形) 楕円形。(規模) 110×95cm。(長軸方位) N-10°-W。(深さ) 30cm。(覆土) ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 縄文時代。

284号土坑

遺構 (第14図)

[位置] (C-4) グリッド。

[構造] 234・239・240Dに切られ、詳細不明。(平面形) 楕円形か。(規模) 不明×97cm。(長軸方位) N-37°-E。(深さ) 24cm。(覆土) ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 縄文時代。

286号土坑

遺構 (第14図)

[位置] (C-4) グリッド。

[構造] 245・256・258・261Dに切られる。断面は皿状を呈する。(平面形) 楕円形か。(規模) 不明×90cm。(深さ) 20cm。(覆土) ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 土器片が1点出土した。

[時期] 前期後葉か。

遺物 (第16図5、第8表)

諸磯c式土器である。

287号土坑

遺構

[位置] (C-4) グリッド。

[構造] 257・261・262Dに切られ、詳細不明。(平面形) 円形か。(規模) 不明。(深さ) 26cm。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 土器片が1点出土した。

[時期] 早期後葉か。

遺物 (第16図6、第8表)

早期条痕文系土器である。

290号土坑

遺構 (第14図)

[位置] (E-4) グリッド。

[構造] 145Hの掘り方精査の際に検出された。(平面形) 楕円形。(規模) 140×118cm。(長軸方位) N-58°-W。(深さ) 145H貼床下から22cm。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 縄文時代。

291号土坑

遺構 (第14図)

[位置] (C-1) グリッド。

[構造] 276・277Dに切られ、詳細不明。(平面形) 円形か。(規模) 径約104cm。(深さ) 20cm。(覆土) ローム粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 土器片が1点出土した。

[時期] 縄文時代(前期か)

遺物 (第16図7、第8表)

縄文時代前期と思われる土器片である。

314号土坑

遺構 (第14図)

[位置] (D-3) グリッド。

[構造] 南半部を148Hに切られる。(平面形) 楕円形か。(規模) 不明×180cm。(長軸方位) N-36°-W。(深さ) 32cm。

[遺物] 土器片が1点出土した。

[時期] 前期後葉。

遺物 (第16図8、第8表)

前期諸磯c式土器である。

315号土坑

遺構 (第14図)

[位置] (B-4) グリッド。

[構造] 北半部を221Dに切られる。(平面形) 楕円形か。(規模) 不明。(長軸方位) N-S。(深さ) 32cm。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 礫器が1点出土した。

[時期] 縄文時代。

遺物 (第16図9、第9表)

礫器である。

317号土坑

遺構 (第14図)

[位置] (D-3) グリッド。

[構造] 316D・149Hに切られる。(平面形) 楕円形か。(規模) 不明×195cm。(長軸方位) 不明。(深さ) 22cm。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子・焼土粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 縄文時代。

320号土坑

遺構 (第15図)

[位置] (C-3) グリッド。

[構造] (平面形) 楕円形。(規模) 146×133cm。(深さ) 20cm。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子・焼土粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 縄文時代。

321号土坑

遺構 (第15図)

[位置] (C-4) グリッド。

[構造] 256・268Dに一部切られる。(平面形) ほぼ円形。(規模) 112×108cm。(深さ) 40cm。(覆土) 4層に分層された。

[遺物] 土器小片が数点出土したが図示できるものはなかった。

[時期] 縄文時代。

326号土坑

遺構 (第15図)

[位置] (C-3) グリッド。

[構造] 297D・150Hカマド部に切られる。(平面形) 楕円形。(規模) 138×122cm。(深さ) 30cm前後で、中央は後世のピットの深さである。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 縄文時代。

327号土坑

遺構 (第15図)

〔位置〕 (C-4) グリッド。

〔構造〕 265・295Dに切られる。本来2基の土坑が重複しているものと思われるが、ここでは西側をA、東側をBとして説明する。新旧関係は不明である。〈土坑A〉 (平面形) 不整形。 (規模) 不明×86cm。 (長軸方位) N-80°-W。 (深さ) 42cm。 〈土坑B〉 (平面形) 不整形。 (規模) 92×90cm。 (長軸方位) N-74°-E。 (深さ) 54cm。 (覆土) A・Bともにローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子、焼土粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕 出土しなかった。

〔時期〕 縄文時代。

328号土坑

遺構 (第15図)

〔位置〕 (C-3・4) グリッド。

〔構造〕 240・296Dに切られる。2基の土坑が重複しているものと思われるが、ここでは西側をA、東側をBとして説明する。新旧関係は不明である。〈土坑A〉 (平面形) 楕円形。 (規模) 80×57cm。 (長軸方位) N-64°-E。 (深さ) 296Dの底面から18cm。 〈土坑B〉 (平面形) 楕円形。 (規模) 不明×56cm。 (長軸方位) N-60°-W。 (深さ) 296Dの底面から19cm (覆土) A・Bともにローム粒子・ローム小ブロックを含み、炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕 出土しなかった。

〔時期〕 縄文時代。

329号土坑

遺構 (第15図)

〔位置〕 (C-3) グリッド。

〔構造〕 296Dに切られる。底面は幾分中央が高くなっているが、ほぼ平坦である。 (平面形) 楕円形。 (規模) 87×60cm。 (長軸方位) N-6°-E。 (深さ) 23cm。 (覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含み、炭化物粒子を僅かに含む明茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕 出土しなかった。

〔時期〕 縄文時代。

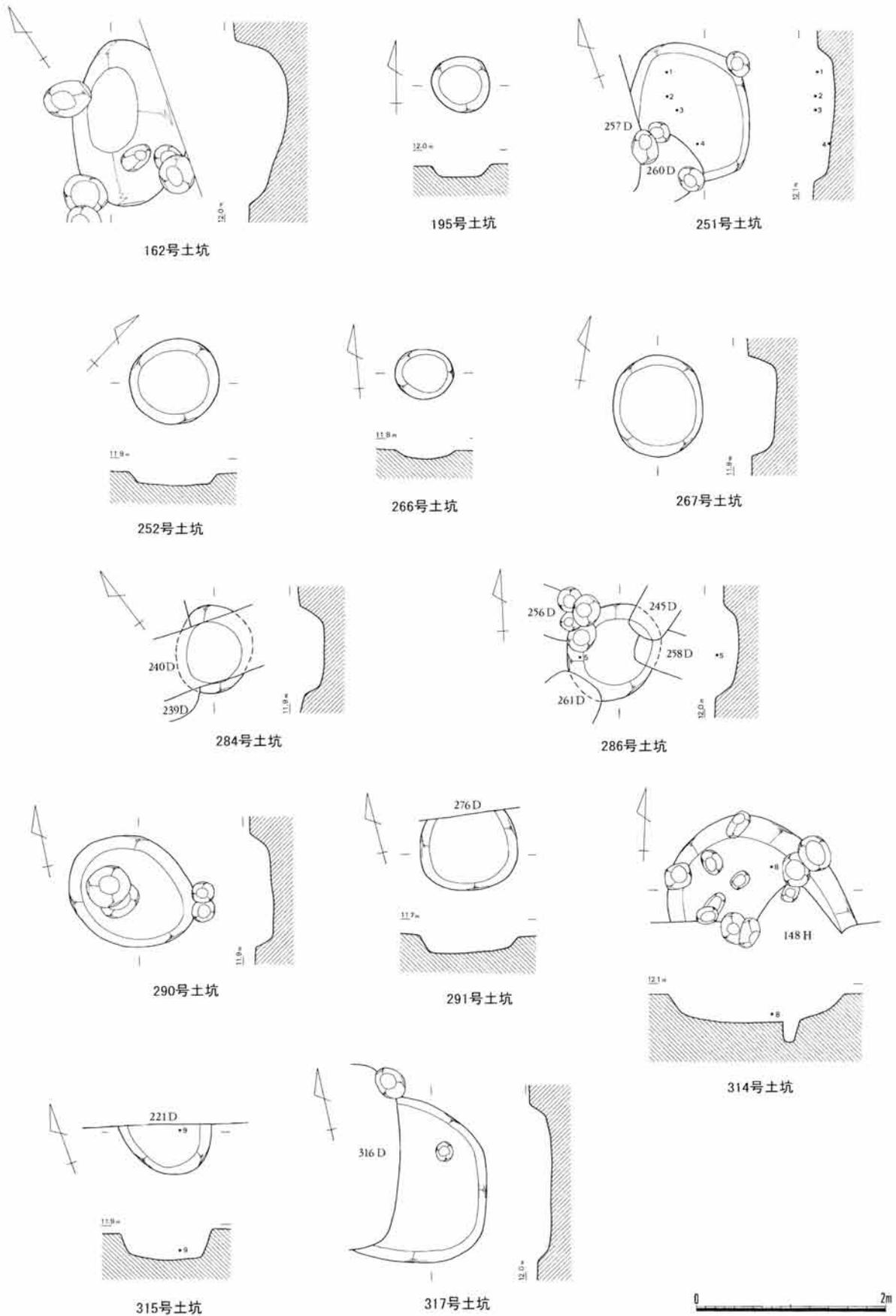
(3) 炉 穴

4号炉穴

遺構 (第17図)

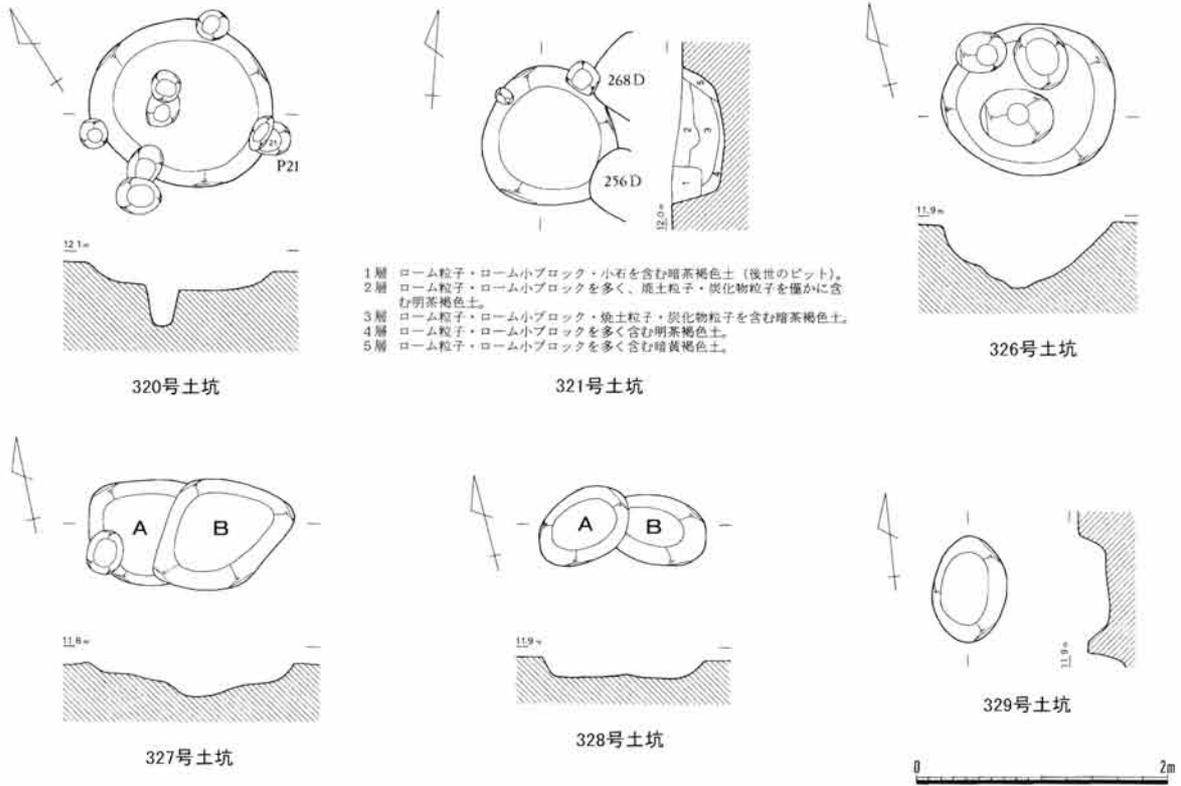
〔位置〕 (B・C-3・4) グリッド。

〔構造〕 221・235・237・264・294・298・309Dや後世のピットに切られ、遺構上部の多くは破壊されている。2基の炉穴が重複しており、西側A、東側Bとし説明する。新旧関係は、土層の観察によってAがBを切っており、Bの構築が古いことが確認された。〈西側A〉 (規模・平面形) 二重に掘り込み



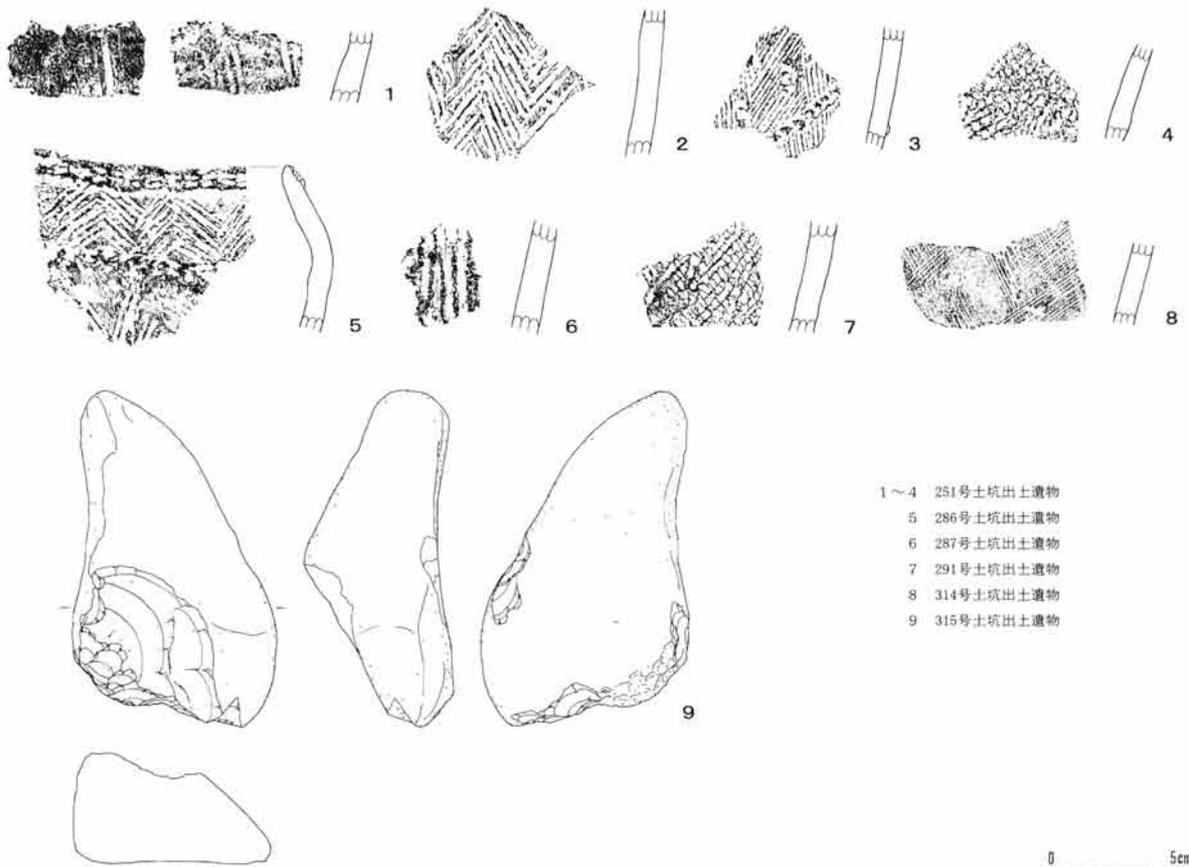
第14図 土坑 1 (1/60)

第3章 検出された遺構と遺物



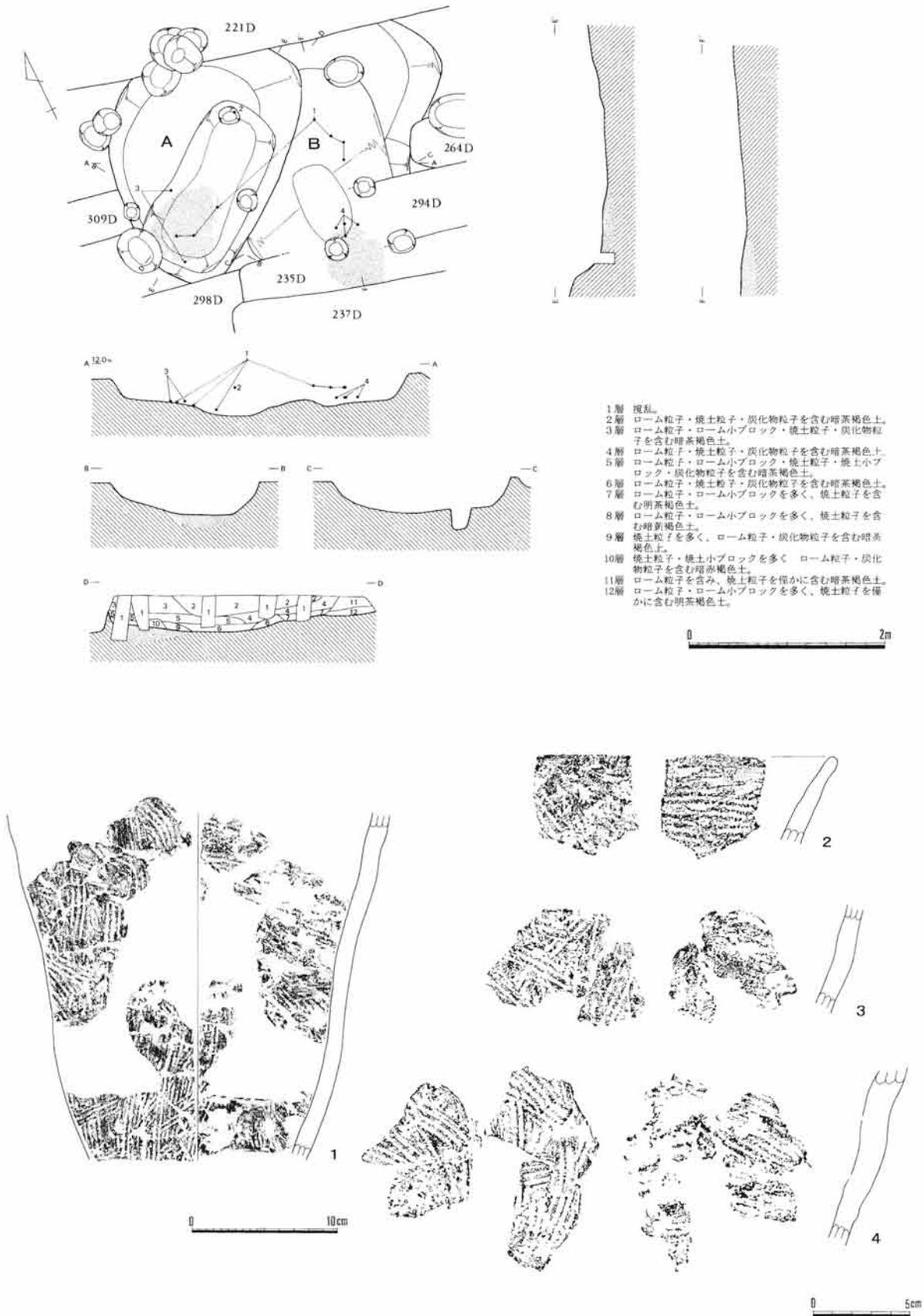
- 1層 ローム粒子・ローム小ブロック・小石を含む暗茶褐色土（後世のピット）。
 2層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、炭化物粒子を僅かに含む明茶褐色土。
 3層 ローム粒子・ローム小ブロック・炭土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。
 4層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む明茶褐色土。
 5層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。

第15図 土坑 2 (1/60)



- 1~4 251号土坑出土遺物
 5 286号土坑出土遺物
 6 287号土坑出土遺物
 7 291号土坑出土遺物
 8 314号土坑出土遺物
 9 315号土坑出土遺物

第16図 土坑出土遺物 (1/3)



第17図 4号炉穴・出土遺物 (1/60・1/4・1/3)

第3章 検出された遺構と遺物

挿図番号	遺構名	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物					備考・出土位置など
						白色粒子	角閃石	細礫	砂粒	その他	
第16図1	251D	胴	貝殻条痕文	明褐色	早期条痕文系	○			○	繊維○	
第16図2	251D	胴	半截竹管による矢羽根状の沈線文	赤褐色	諸磯c式		○				
第16図3	251D	胴	半截竹管による条線文の地文に結節沈線文が施文	黒褐色	諸磯c式				○		
第16図4	251D	胴	L・Rの串節縄文の地文のみ施文	褐色	諸磯c式				○		
第16図5	286D	口縁	口縁部は内湾/最上段に隆帯を貼付しその上に半截竹管による平行した連続刺突文/口唇部から4cm程の幅で半截竹管による横位の鋸歯状文が施され、その下にも連続刺突文が施文/胴部にも横位の鋸歯状文が施文	黒褐色	諸磯c式				○		
第16図6	287D	胴	肋のための貝殻条痕文が施文	赤褐色	早期条痕文系			○	○	繊維○	
第16図7	291D	胴	L・Rの軸にRの附加条	表面が黒褐色、内面が赤褐色	前期か		○		○	ガラス質粒子○	
第16図8	314D	胴	半截竹管による斜位の格子状条線を地文	褐色	諸磯c式	○			○		
第17図1	4FP	胴	断面形は上部に向かい緩やかに開く/現器高24.3cm/内外面ともほぼ全面に貝殻条痕文が施文/外面の条痕文は縦位もしくは左上がりを主とする	下半が赤褐色、上半が赤褐色～黒褐色	早期条痕文系	○			○	繊維○	炉穴B部から潰れた形で出土/非常に脆く、多くの部分に微細な亀裂が入っていたため、5%バラロイド液による含浸処理を行い取り上げた
第17図2	4FP	口縁	表面は左上がり、裏面は水平方向の貝殻条痕文/二次的な焼成を受けていると思われる	明褐色～赤褐色	早期条痕文系			○	○	繊維○	炉穴A部からの出土
第17図3	4FP	胴	文様・胎土・色調ともに1と同様であり同一個体と思われるが接合はできなかった	下半が赤褐色、上半が赤褐色～黒褐色	早期条痕文系	○			○	繊維○	炉穴A部からの出土
第17図4	4FP	胴	文様・胎土・色調ともに1と同様であり同一個体と思われるが接合はできなかった	下半が赤褐色、上半が赤褐色～黒褐色	早期条痕文系	○			○	繊維○	炉穴B部からの出土

胎土混入物の量 ◎：多量 ○：普通 △：少量

第8表 土坑・炉穴出土の縄文土器一覧

挿図番号	遺構名	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	遺存度	備考
第16図9	315D	礫器	148.20	82.03	56.24	50.3	砂岩	完形品	

(単位 mm, g)

第9表 土坑出土の縄文石器一覧

があり、外側は258×183cmの楕円形を呈する。内側は長軸方向の南東壁面に沿って約180×90cmの長方形に掘り込み、西端に炉床を有する。(長軸方位) N-54°-E。(深さ) 45cm。(炉床) 85×65cmの楕円状の範囲にロームが焼けて赤化しており、最も被熱を受けている部分では厚さ15cmを測る。(覆土) 9層に分層される。〈東側B〉(規模・平面形) 残存する部分では南北270cm、東西170cmであった。平面形は不明である。南端に炉床を有する。(長軸方位) 不明。(深さ) 38cm。(炉床) 72×60cmの楕円状で深さ15cm程が焼けて赤化している。(覆土) 残存していた部分は2層に分層された。

[遺物] 土器片が数点出土した。

[時期] 早期後葉。

遺物 (第17図1～4、第8表)

すべて早期条痕文系土器である。

第3節 古墳時代

(1) 概要

古墳時代の遺構については、後期の住居跡16軒が検出された（第18図）。住居跡の分布は、比較的調査区西側では希薄のようであるが、ほぼ全域に分布するものと言える。住居跡の時期は、その出土した土器様相から6世紀初頭から7世紀後葉に比定できるが、6世紀中葉～後葉は空白の時期と言える。

(2) 住居跡

131号住居跡

遺構（第19図）

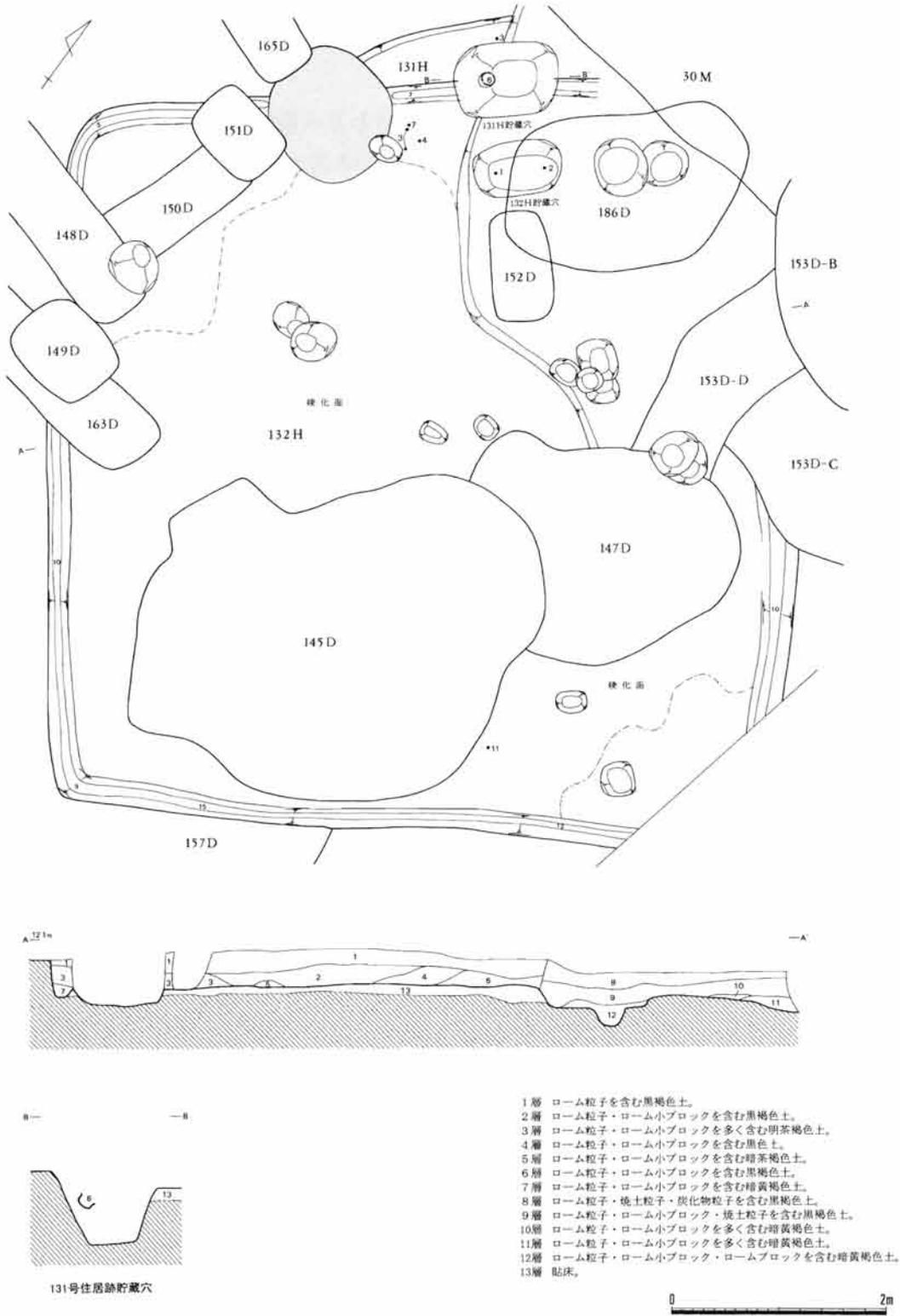
〔位置〕（B-6）グリッド。

〔住居構造〕132号住居跡に切られるため、ごく一部の壁と貯蔵穴しか確認できなかった。（平面形）不明。（規模）不明。（壁高）15～21cmを測る。（壁溝）確認できなかった。（貯蔵穴）平面形は長方形を呈し、規模は98×70cmを測る。

〔遺物〕覆土中及び貯蔵穴内から土器が出土した。その他、自然科学分析を行っていないが、炭化種子（ヤマモモ1点）が出土した。



第18図 古墳時代後期の遺構分布図（1/400）



第19図 131・132号住居跡 (1/60)

[時期] 古墳時代後期（6世紀初頭）。

遺物（第21図、第10表）

土器はすべて土師器で、坏（1～6）、高坏（7）、甕（8）、甑（9）である。

132号住居跡

遺構（第19・20図）

[位置]（B-6）グリッド。

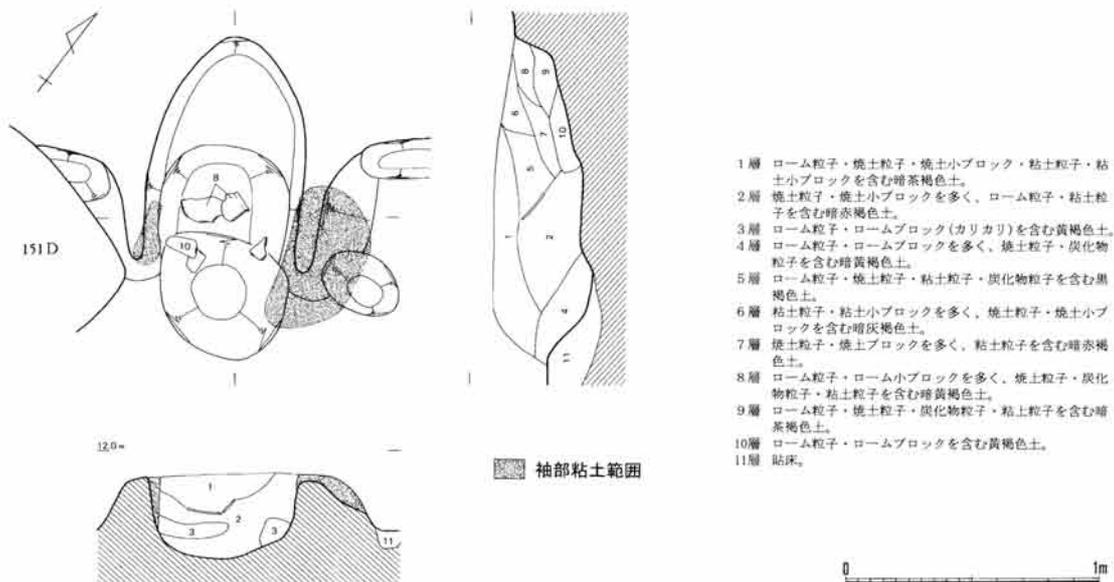
[住居構造] 131Hを切る。多数の土坑と30Mにより破壊されているため北コーナーは不明であり、東コーナーは調査区域外である。（平面形）正方形。（規模）7.06×7.00m。（壁高）16～27cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）確認できた範囲ではカマドを除いて全周する。上幅16～30cm・下幅5～14cm・深さ5～15cmを測る。（床面）全体的によく硬化している。貼床は5～18cmの厚さで施されていた。（カマド）北西壁の中央よりやや西に偏って位置する。左側袖の一部は151Dにより壊されている。長さ130cm・幅不明・壁への掘り込み40cmを測る。（柱穴）本住居に伴うものは検出されなかった。（貯蔵穴）カマドの左側に位置するが、上部は土坑などにより壊されている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は82×52cmを測る。住居床面からの深さは60cmを測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を含む黒褐色土を基調とする。（覆土）12層に分層される。

[遺物] カマド周辺及び貯蔵穴内から土器、鉄製品などが出土した。その他、自然科学分析を行っていないが、炭化種子（ヤマモモ1点）が出土した。

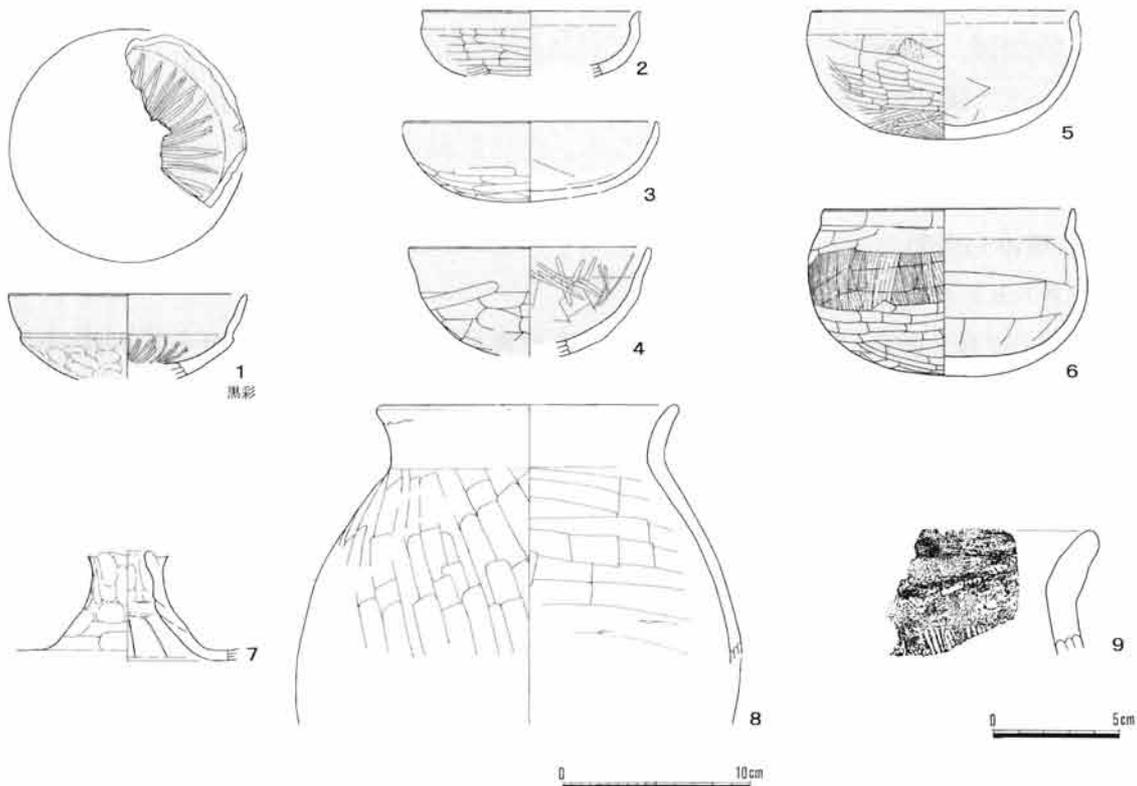
[時期] 古墳時代後期（7世紀中葉）。

遺物（第22図、第11表）

土器はすべて土師器で、坏（1～4）、甕（5～8）、甑（9）である。その他、土製品（10）、ミニチュア土器（11）、鉄製品（12・13）である。



第20図 132号住居跡カマド（1/30）



第21図 131号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)

133号住居跡

遺 構 (第23・24図)

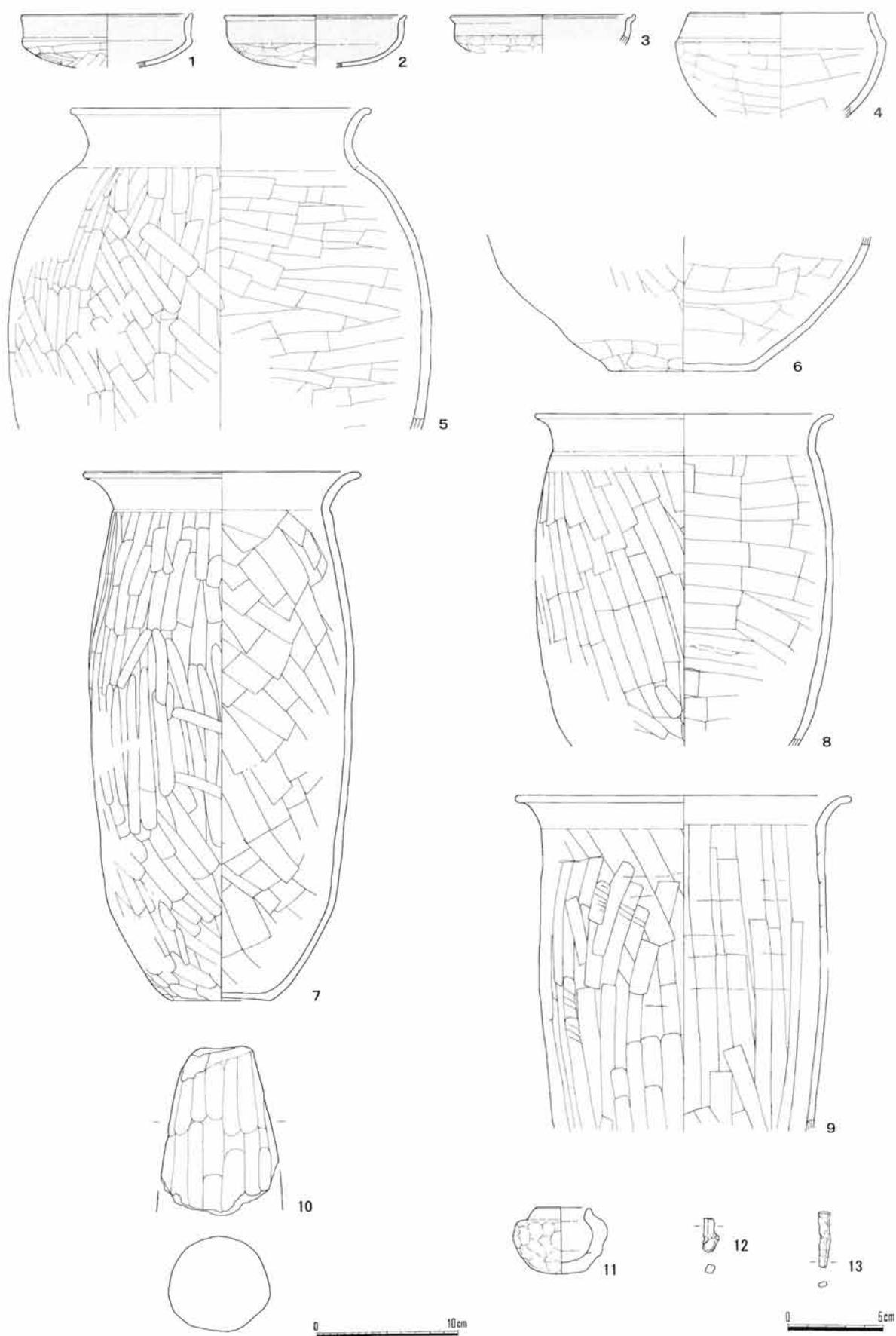
[位置] (C-6・7) グリッド。

[住居構造] 土坑と多数のピットにより一部壊されている。東コーナーは調査区域外である。(平面形) 正方形。(規模) 6.92×6.82m。(壁高) 15~32cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。(壁溝) カマドを除いて全周する。上幅19~30cm・下幅6~14cm・深さ14~21cmを測る。(床面) 入り口付近からカマド前面にかけて良く硬化している。貼床は2~8cmの厚さで施されている。(カマド) 北西壁のほぼ中央に位置する。攪乱によりかなり壊されているため、燃焼部付近しか確認できなかった。袖部はロームを馬蹄形状に残し、その上に粘土を被覆して構築されていたものと思われる。燃焼部は良く焼けて赤化していた。(柱穴) 支柱穴と思われるものが各コーナー付近の4ヶ所から検出され、東と南コーナーのものは2本ずつ重複していた。深さは39~56cmを測る。入口ピットと思われるものが南東壁の中央付近から検出された。深さは26cmを測り、北側には高さ1~5cmのコ字状の凸堤が巡らされていた。(貯蔵穴) カマドと北コーナーの中間付近に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模84×58cm・深さ80cmを測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子・粘土粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。(覆土) 上層はローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土、下層はローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土を基調とする。

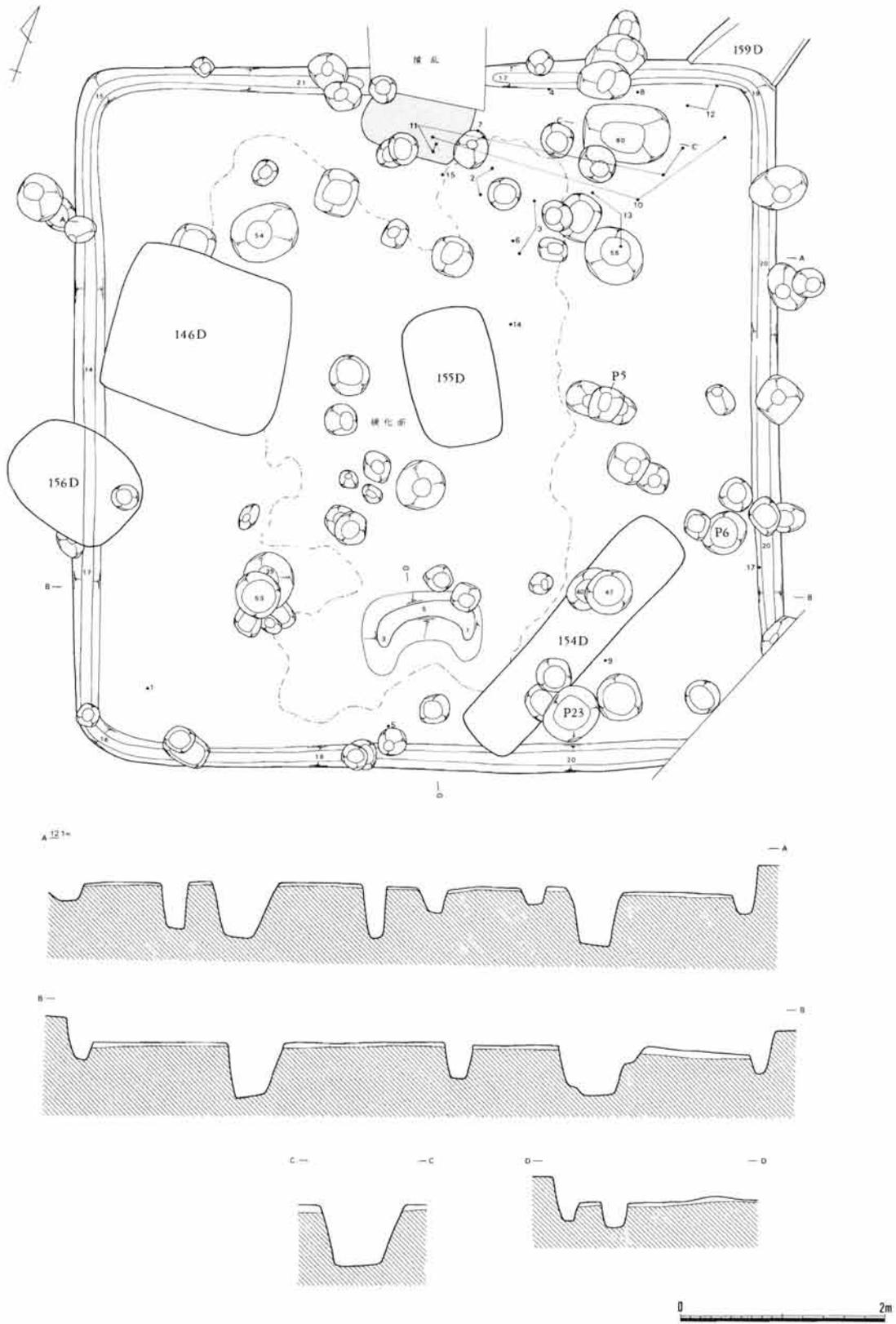
[遺物] カマド及び貯蔵穴周辺から比較的多く土器が出土した。

[時期] 古墳時代後期(7世紀前葉)。

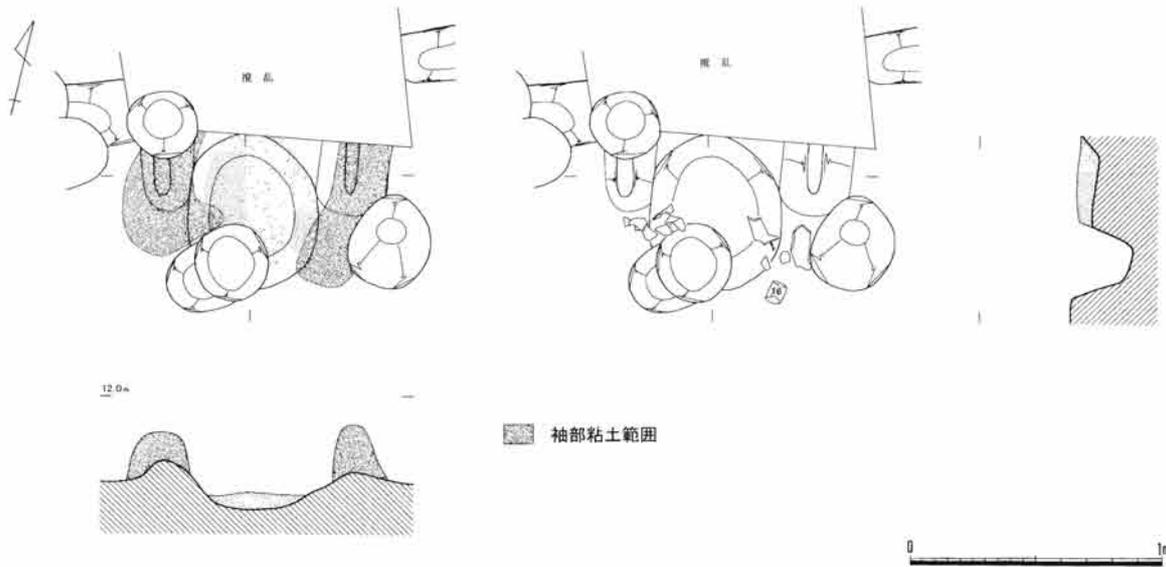
遺 物 (第25図、第12表)



第22図 132号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)



第23図 133号住居跡 (1/60)



第24図 133号住居跡カマド (1/30)

土器はすべて土師器で、坏（1～7）、鉢（8）、甕（9～13）、甑（14・15）である。その他、土製品（16）、ミニチュア土器（17）、石製品（18）、鉄製品（19）である。

134号住居跡

遺構（第26図）

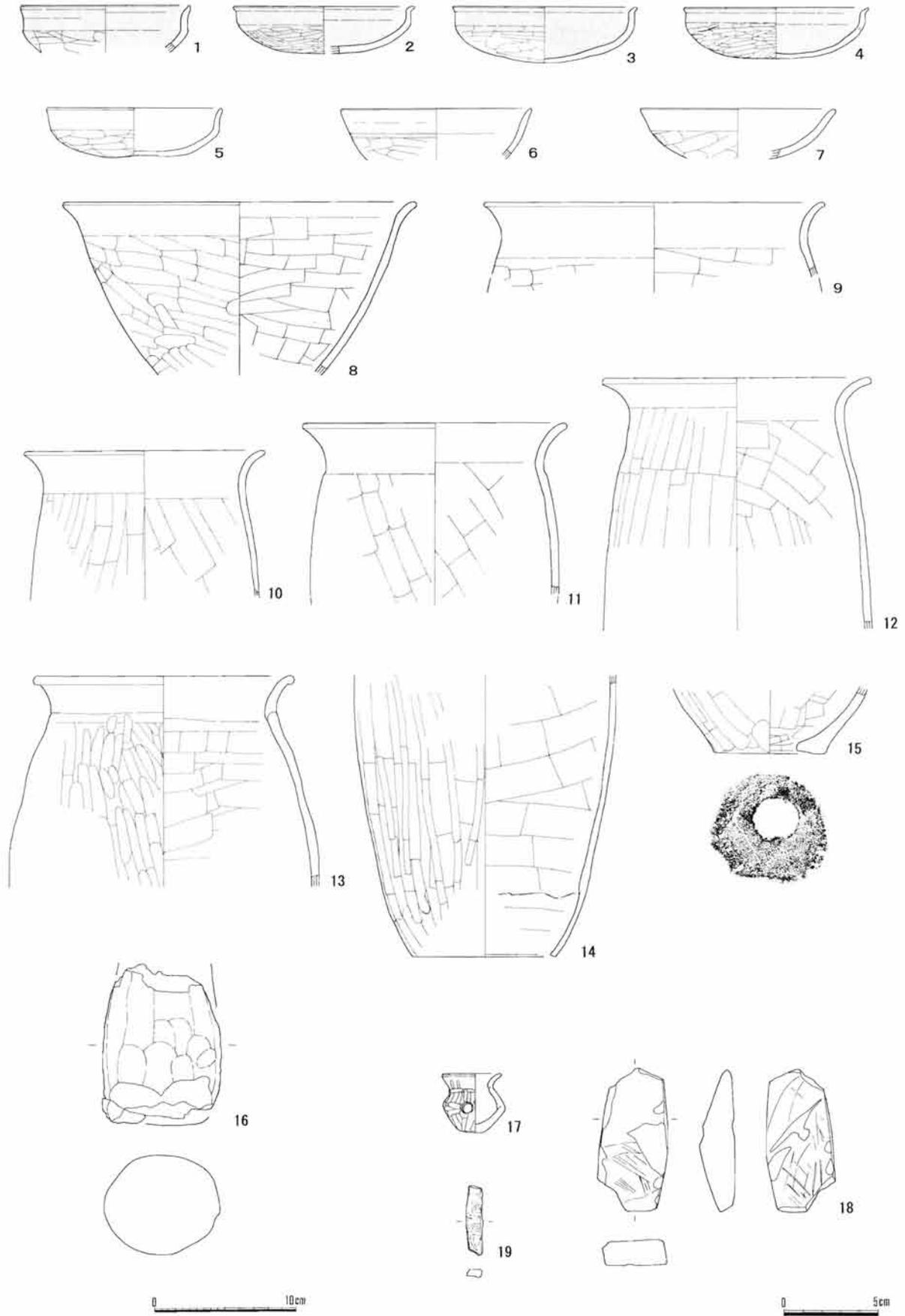
〔位置〕（D-6・7）グリッド。

〔住居構造〕南東コーナーは調査区域外である。（平面形）正方形。（規模）6.94×6.92m。（壁高）11～31cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）カマドを除き全周する。上幅16～22cm・下幅4～8cm・深さ7～11cmを測る。（床面）壁際を除いてよく硬化している。貼床は2～8cmの厚さで施されている。（カマド）北壁の中央よりやや西に偏って位置するが、198Dにより中央付近から左袖にかけてかなり壊されている。長さ130cm・幅不明・壁への掘り込み40cmを測る。袖部はロームを馬蹄形状に残し、その上に粘土を被覆して、構築していたと思われる。袖部の内側は良く焼けて赤化していた。（柱穴）支柱穴と思われるものが4本確認された。深さは67～78cmを測る。南西コーナーの柱穴内から高坏の脚部が出土した。（貯蔵穴）北西コーナーに位置する。平面形は長方形を呈し、規模は126×76cm・深さ58cmを測る。北側を除く周囲に幅10cm・深さ4cmほどの段が設けられている。覆土は上層がローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土、下層がローム粒子・ローム小ブロックを多く、焼土粒子・炭化物粒子を含む明茶褐色土を基調とする。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗茶褐色土を基調とする。堆積状態から判断して、人為的に埋め戻された可能性がある。

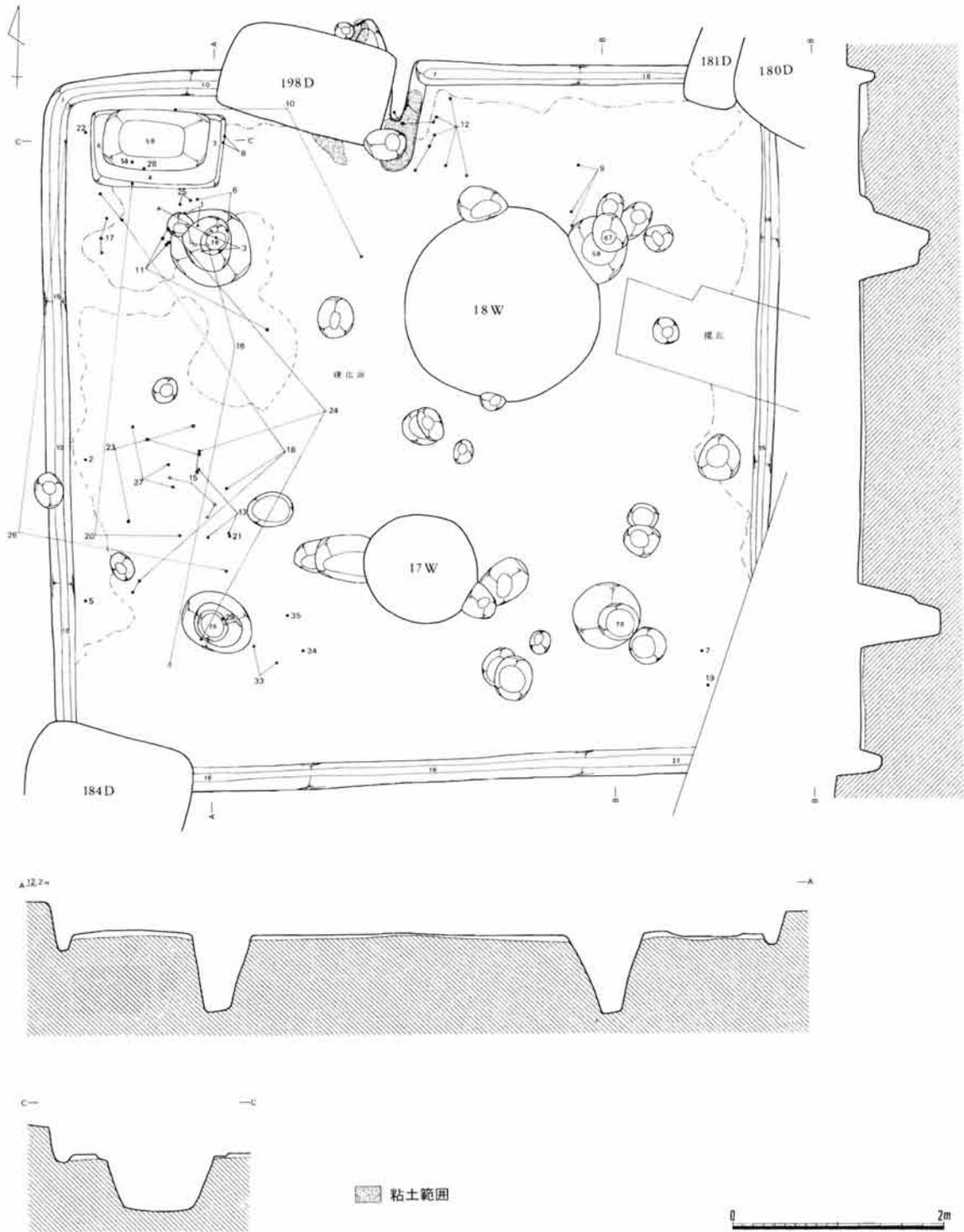
〔遺物〕カマド及び貯蔵穴周辺と住居西半部から多くの土器が出土した。その他、不明炭化物塊が数個検出されている（付編参照）。

〔時期〕古墳時代後期（7世紀中葉）。

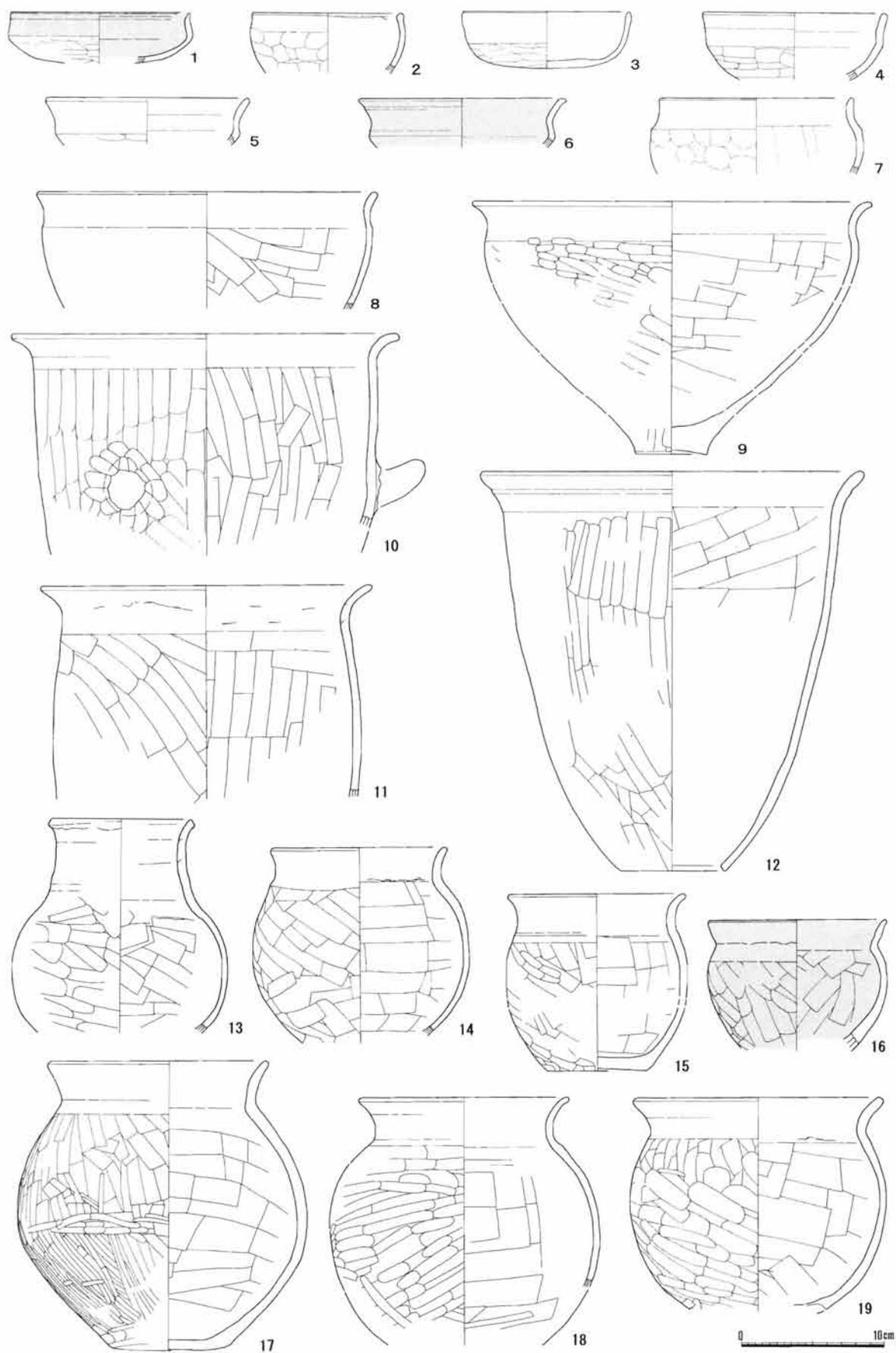
遺物（第27・28図、第13表）



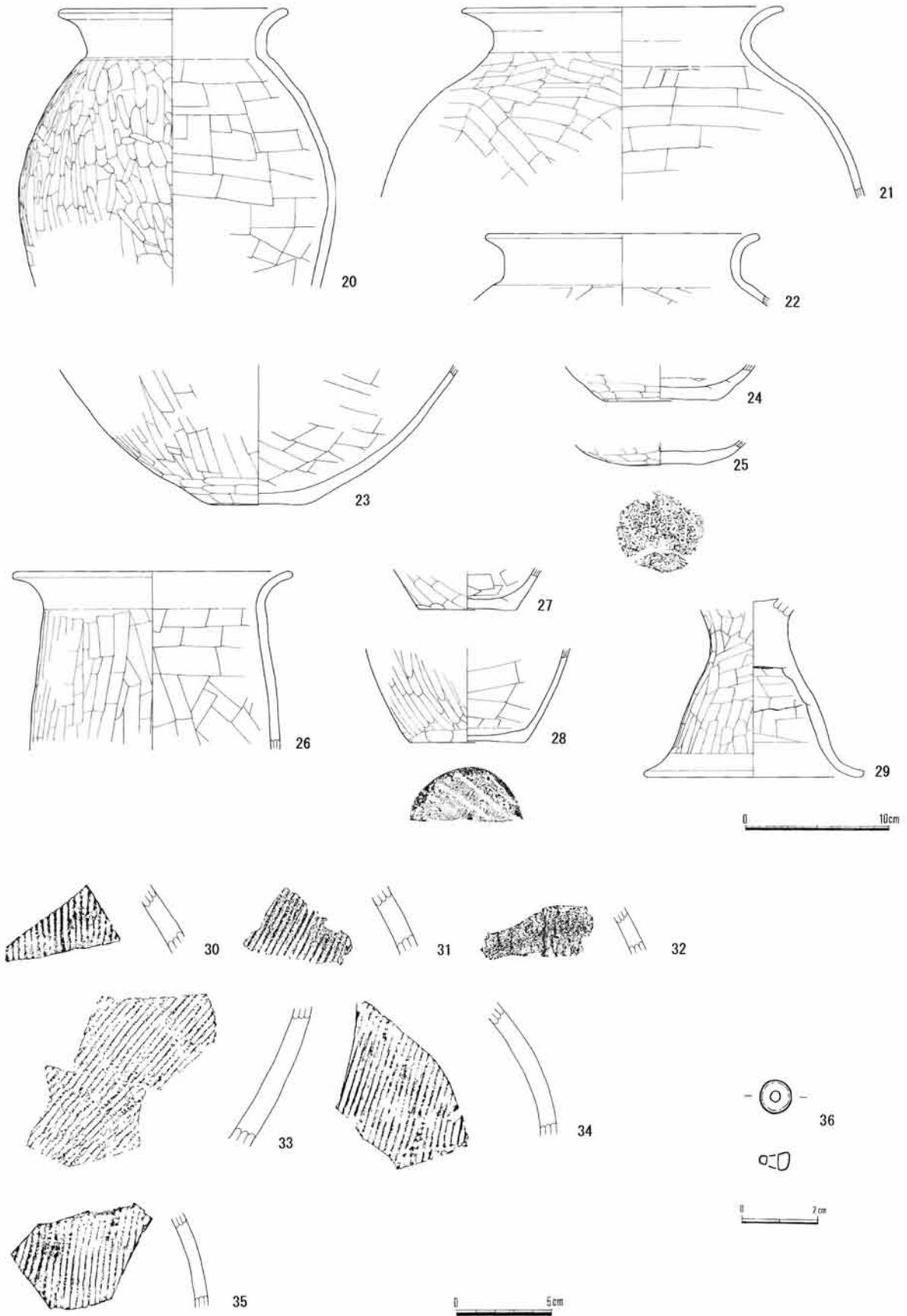
第25図 133号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)



第26図 134号住居跡 (1/60)



第27図 134号住居跡出土遺物 1 (1/4)



第28図 134号住居跡出土遺物 2 (1/4・1/3・2/3)

土師器坏（1～7）、土師器鉢（8・9）、土師器甑（10～12）、土師器甕（13～29）、須恵器甕（30～35）、石製品（36）である。

135号住居跡

遺 構（第29図）

〔位置〕（C-6・7）グリッド。

〔住居構造〕北西コーナー付近以外は調査区域外であるため詳細は不明である。（壁高）27～37cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）確認できた範囲では、巡らされていた。上幅14～20cm・下幅6～10cm・深さ7～10cmを測る。（床面）よく硬化しており、ほぼ直床である。（カマド）北壁にあると思われる。（柱穴）深さ60cmのものが主柱穴の可能性ある。（覆土）10層に分層される。

〔遺物〕カマド付近から多くの土器が出土した。その他、土器内から炭化種子（イネ等）が検出されている（付編参照）。

〔時期〕古墳時代後期（7世紀後葉）。

遺 物（第30・31図、第14表）

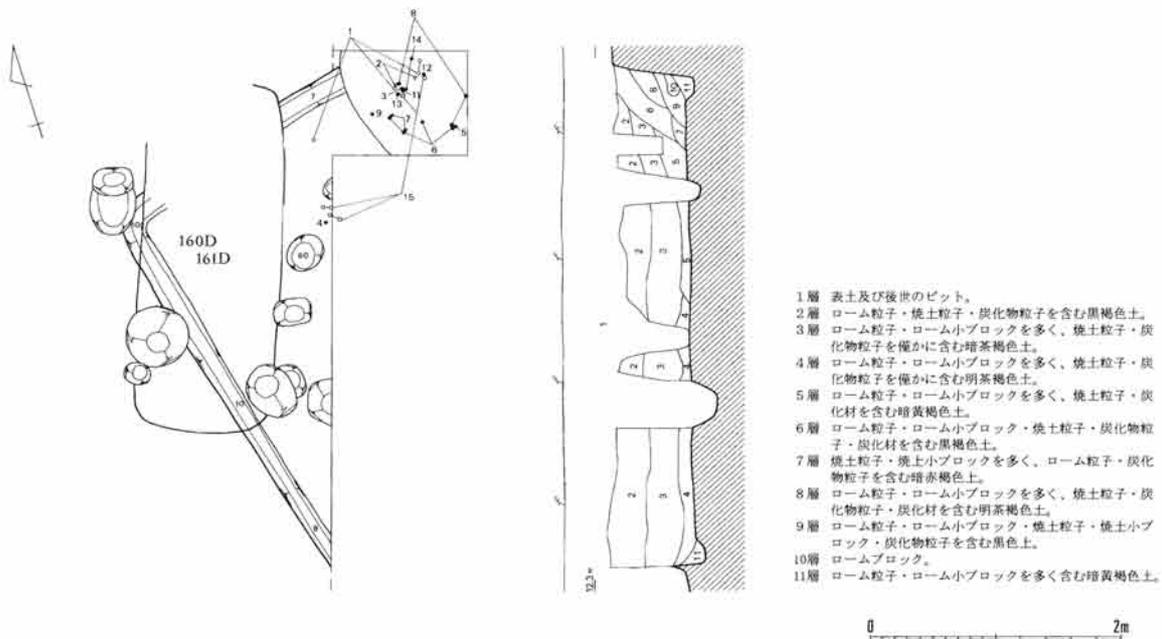
すべて土師器甕形土器で、1～4は丸甕、5～15は長甕である。

136号住居跡

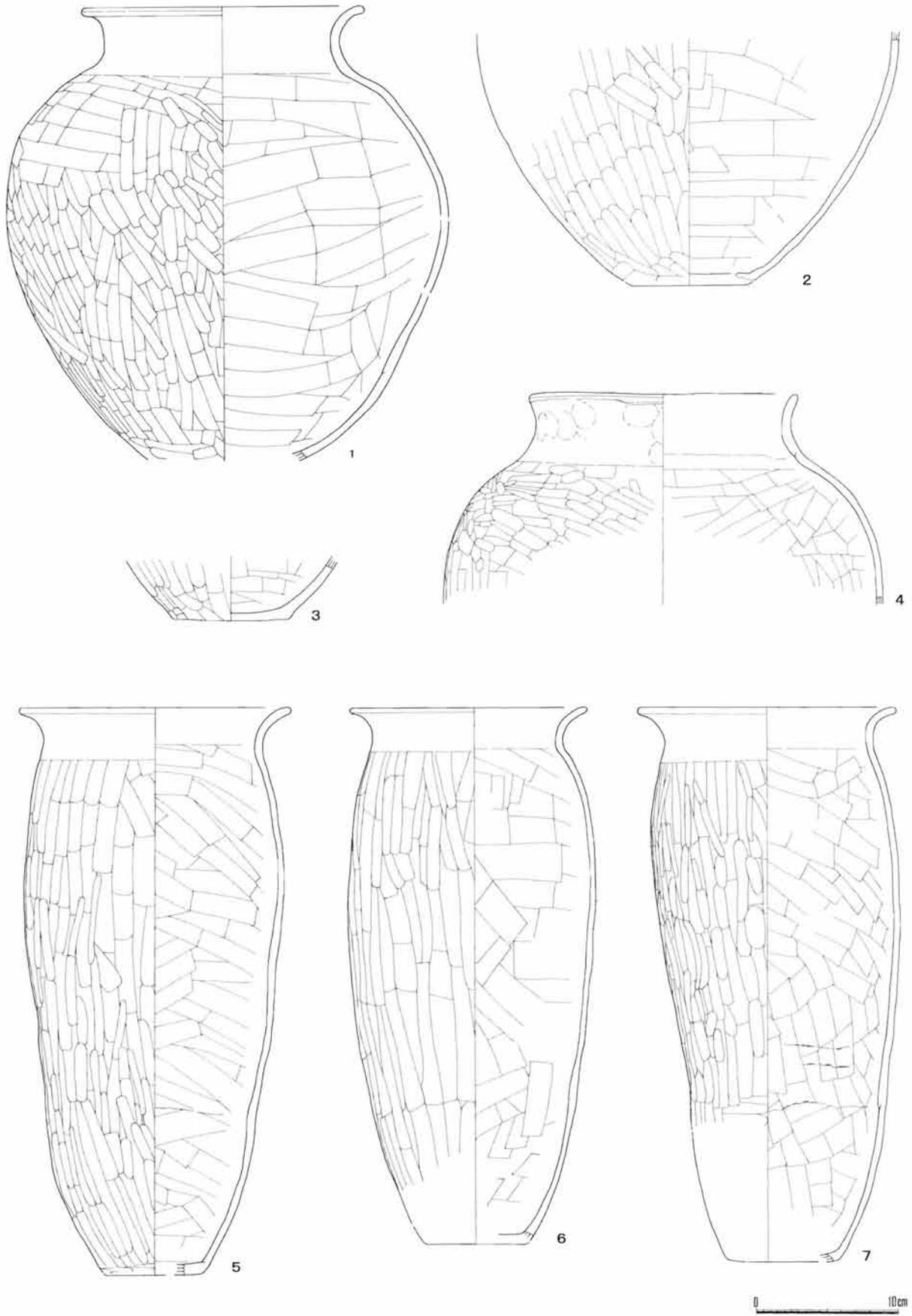
遺 構（第32・33図）

〔位置〕（E-6・7）グリッド。

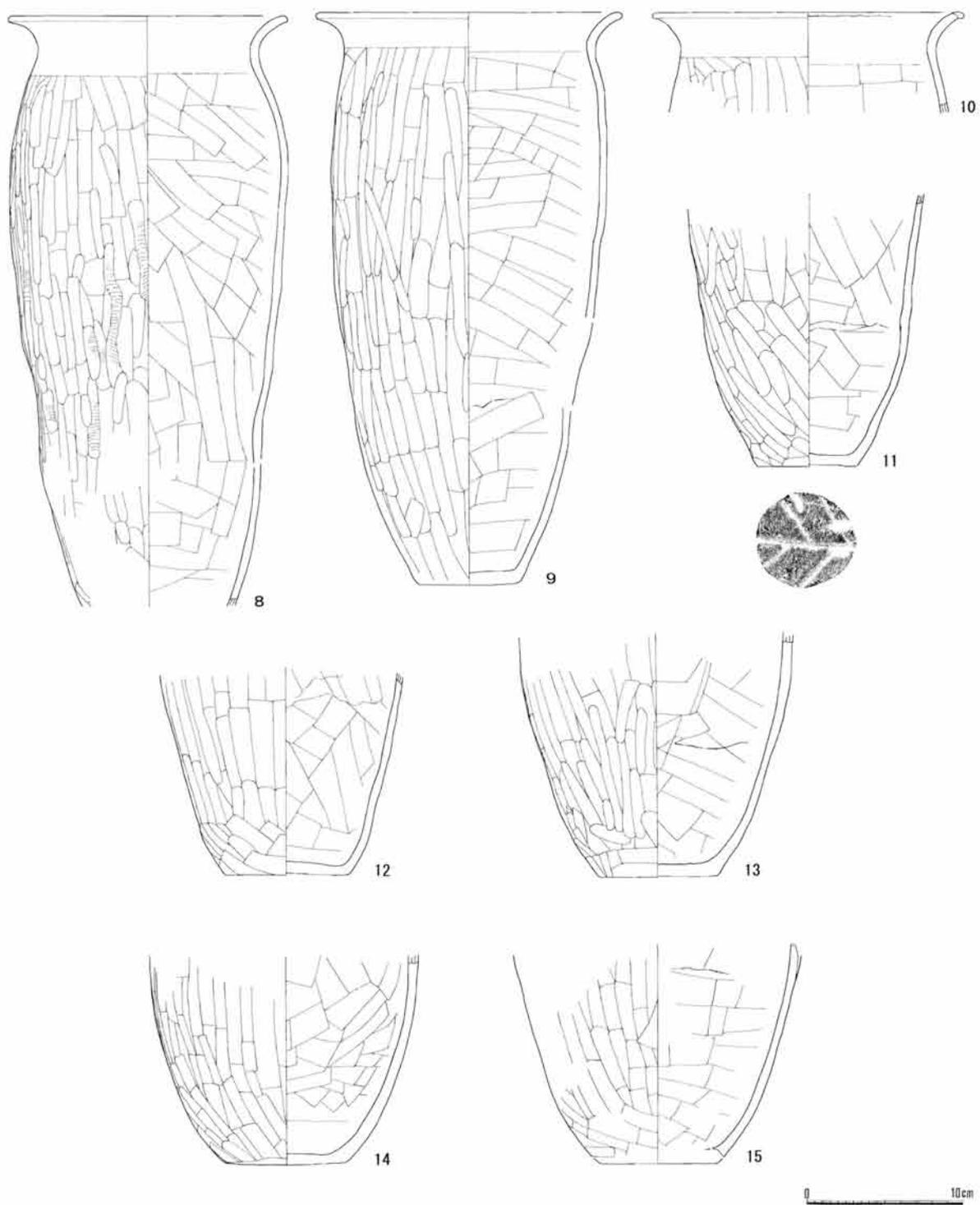
〔住居構造〕西コーナー付近以外は調査区域外である。139Hに切られ、137Hを切る。（平面形）方形。（規模）不明。（壁高）残りの良いところで約40cm、土層断面で60cmを測る。壁は急斜に立ち上がる。（壁溝）確認できた範囲では、カマドを除いて巡らされていた。上幅16～24cm・下幅6～10cm・深さ9



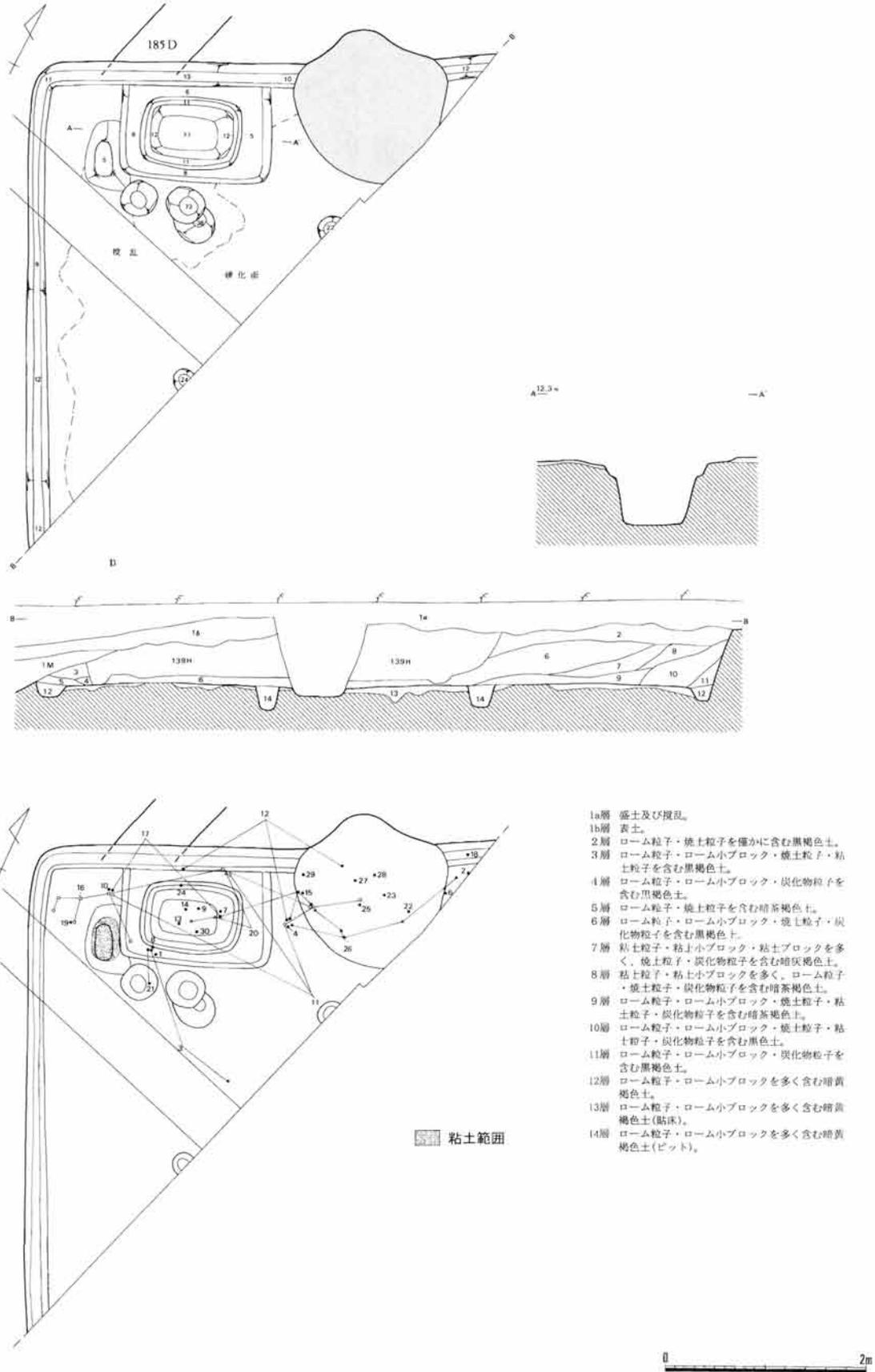
第29図 135号住居跡（1/60）



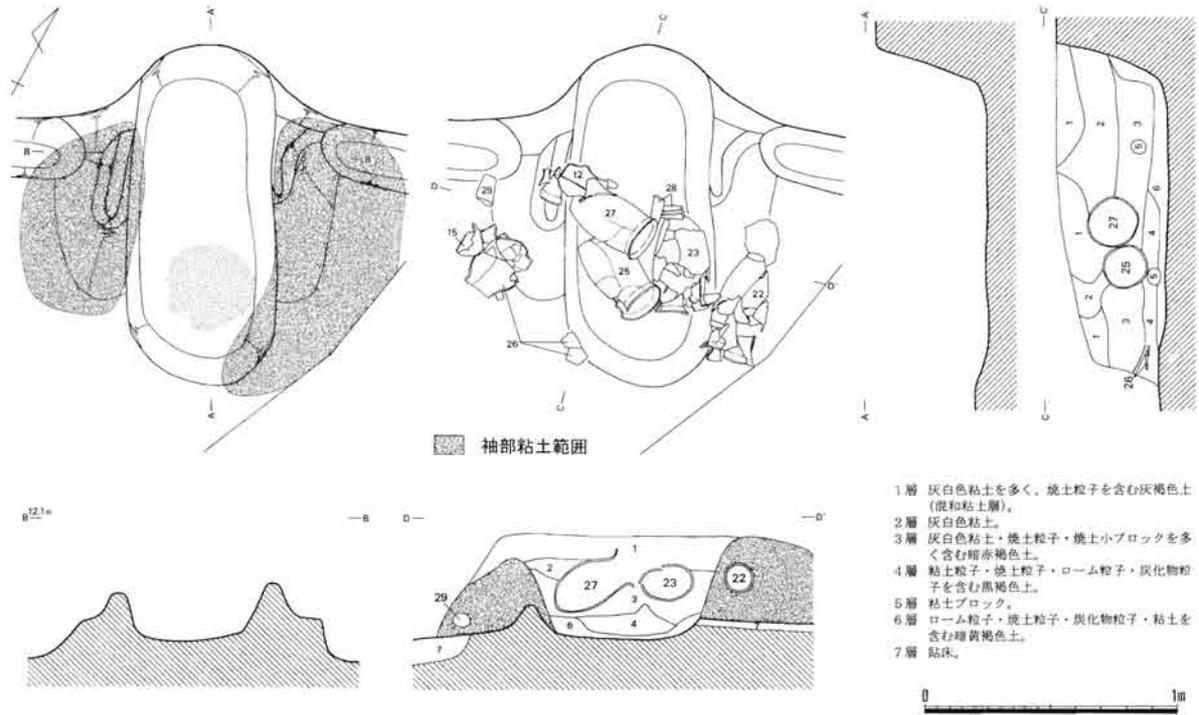
第30図 135号住居跡出土遺物1 (1/4)



第31図 135号住居跡出土遺物 2 (1/4)



第32図 136号住居跡・遺物出土状態 (1/60)



第33図 136号住居跡カマド (1/30)

～12cmを測る。(床面) 壁際を除きよく硬化している。(カマド) 北西壁に位置する。主軸方位はN-30°-E。長さ138cm・幅113cm・壁への掘り込み40cmを測る。袖部はロームを馬蹄形状に残し、その上に粘土を被覆して構築している。粘土中から補強材として使われたと思われる長甕が出土している。天井部も粘土(1・2層)で構築されていたものと考えられる。燃烧部は良く焼けており、その付近の袖部内側も良く焼けて赤化していた。燃烧部直上から長甕3点が出土した。煙道は70°程の勾配で立ち上がっている。(柱穴) 西コーナーの深さ72cmのものが主柱穴の可能性はある。(貯蔵穴) カマド左側の西コーナーに寄って位置し、平面形は長方形を呈する。規模は150×98cm・深さ71cmを測る。周囲にテラス状の段が2段あり、外側が幅6～20cm・深さ6cm、内側は幅約5cm・深さ12cmを測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。土師器鉢・甕・甗、炭化種子(イネ)が出土している。(覆土) 13層に分層される。

[遺物] カマド及び貯蔵穴付近から多くの土器が出土した。その他、土製品、石製品、鉄製品が出土した。また、貯蔵穴出土土器内より炭化種子(イネほか)が検出されている(付編参照)。

[時期] 古墳時代後期(7世紀前葉)。

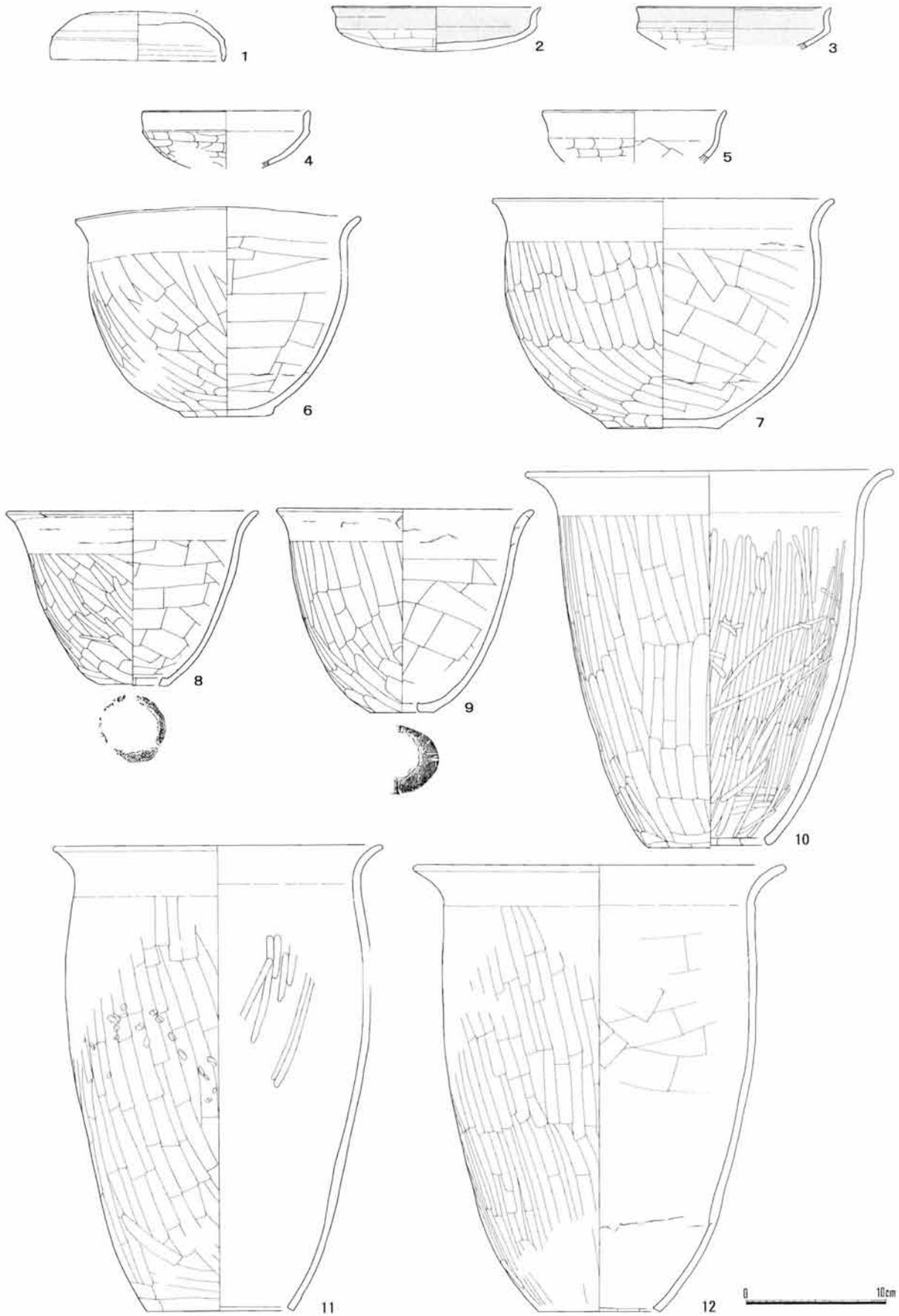
遺物 (第34～36図、第15表、図版31-1-32)

須恵器坏蓋(1・32)、土師器坏(2～5)、土師器鉢(6・7)、土師器甗(8～12)、土師器甕(13～27)、土製品(28・29)、石製品(30)、鉄製品(31)である。

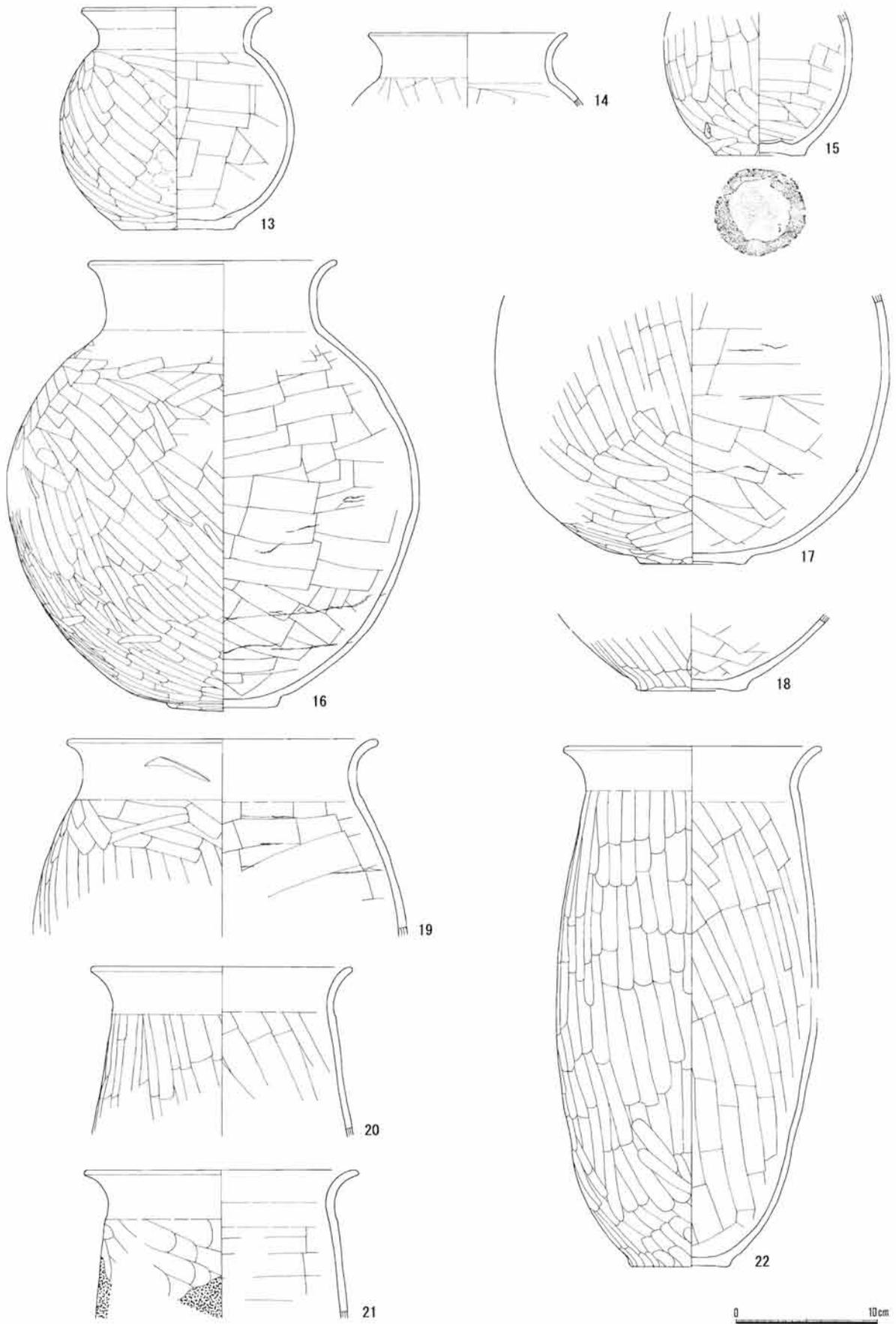
137号住居跡

遺構 (第37図)

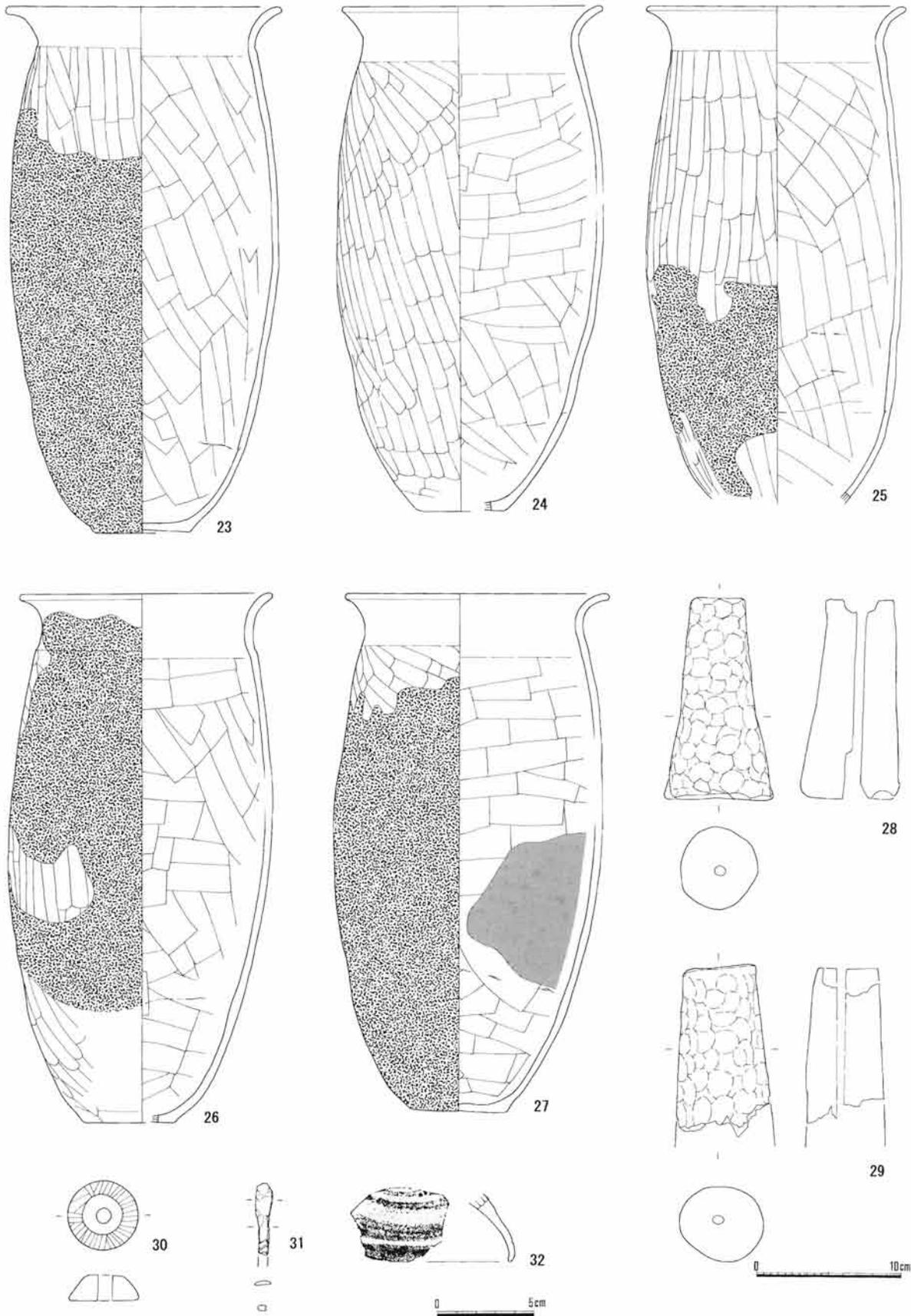
[位置] (E-6) グリッド。



第34図 136号住居跡出土遺物 1 (1/4)



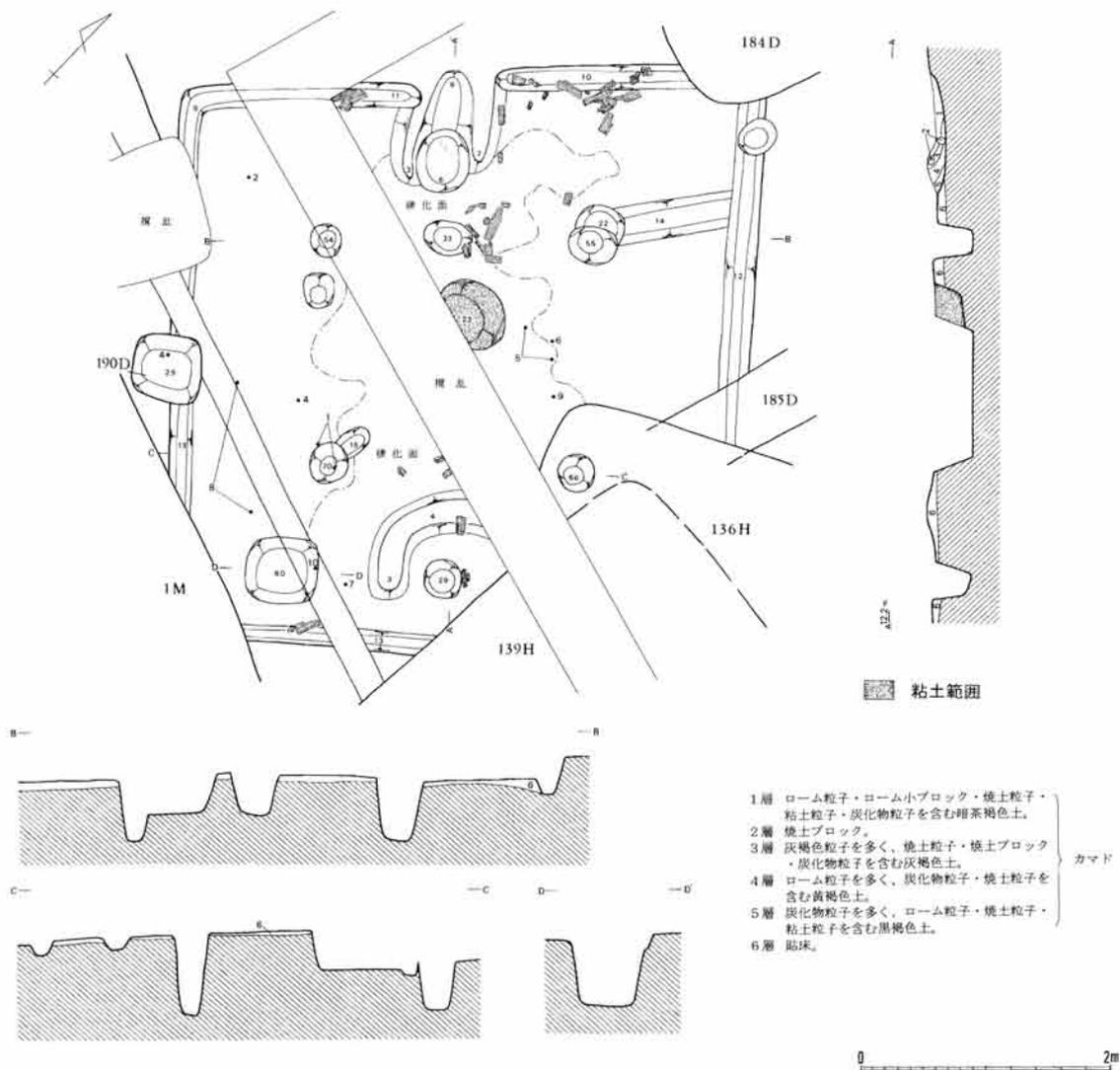
第35図 136号住居跡出土遺物 2 (1/4)



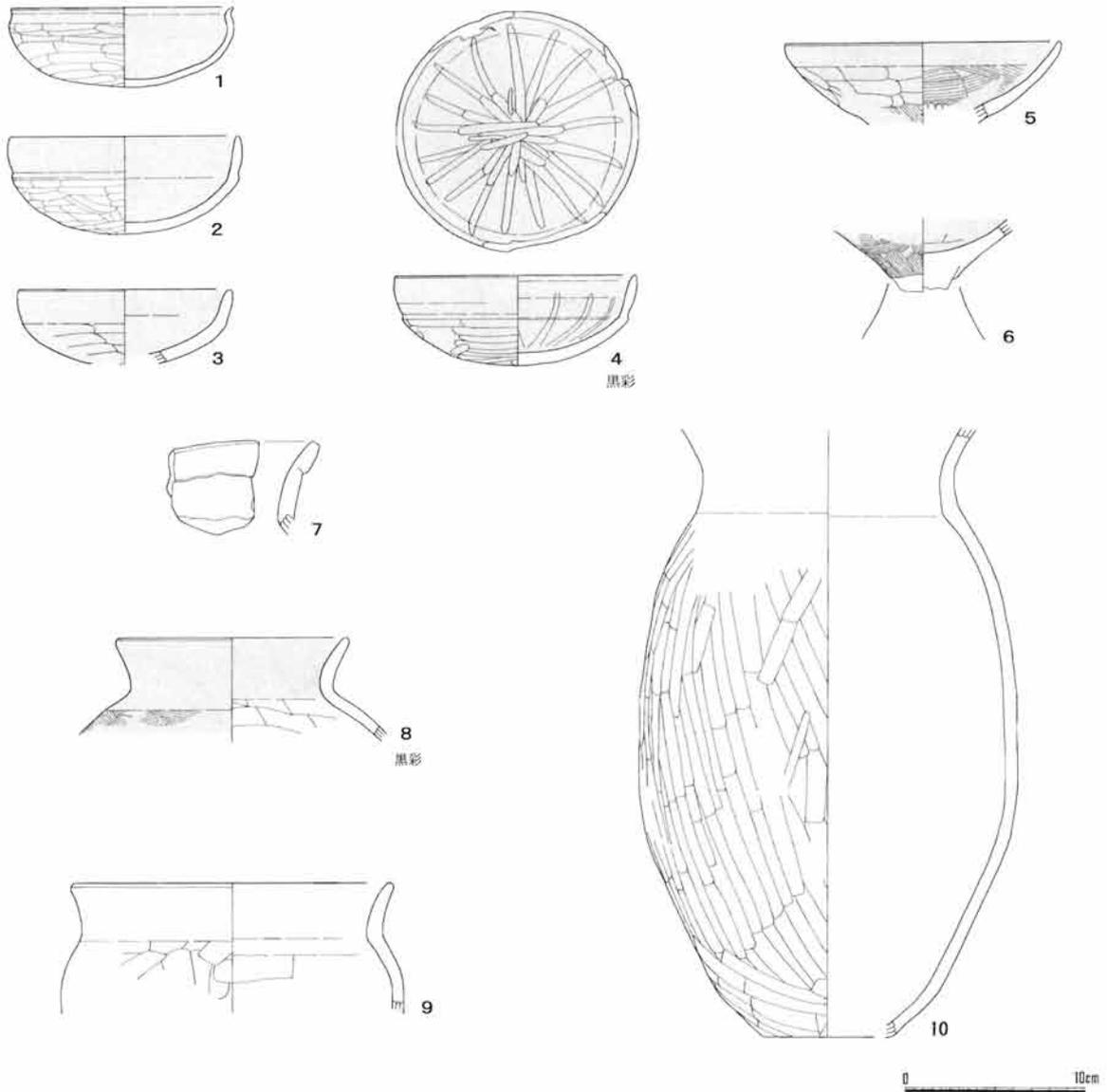
第36図 136号住居跡出土遺物3 (1/4・1/3)

〔住居構造〕 136・139Hに切られ、さらに土坑と攪乱にも壊されている（平面形）正方形。（規模）3.70×3.66m。（壁高）残りの良い北東壁で25～30cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）カマド部分を除いて全周すると思われる。上幅18～25cm・下幅7～10cm・深さ8～13cmを測る。北東壁から北コーナーの支柱穴まで、間仕切りと思われる上幅30cm・下幅15cm・深さ14cmの溝が確認された。（床面）入口付近からカマドの全面にかけて良く硬化している。（カマド）北西壁の中央よりやや西に偏って位置する。主軸方位はN-39°-W。長さ約100cm・幅86cm・壁への掘り込み5cmを測る。袖部はロームを馬蹄形状に残して構築されており、燃烧部は7cm程の掘り込みがあり良く焼けて赤化している。（柱穴）支柱穴と思われるものが4本確認され、深さ54～70cmを測る。南東壁の中央付近に入口ピットと思われる深さ29cmのものが検出され、北西側に高さ3～4cmの凸堤が巡らされていた。（貯蔵穴）南コーナー付近に位置し、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は58×54cm・深さ60cmを測る。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを多く、焼土粒子・炭化物粒子を含む明茶褐色土を基調とする。住居中央付近の床面から粘土が検出され、取り除いたところ深さ23cmのピット状の掘り込みが確認された。

〔遺物〕 覆土中及び床面上から土器が出土した。



第37図 137号住居跡・190号土坑（1/60）



第38図 137号住居跡出土遺物 (1/4)

[時期] 古墳時代後期 (6世紀前葉)。

[所見] 床面上から炭化材が多く出土していることから、焼失住居の可能性はある。

遺物 (第38図、第16表)

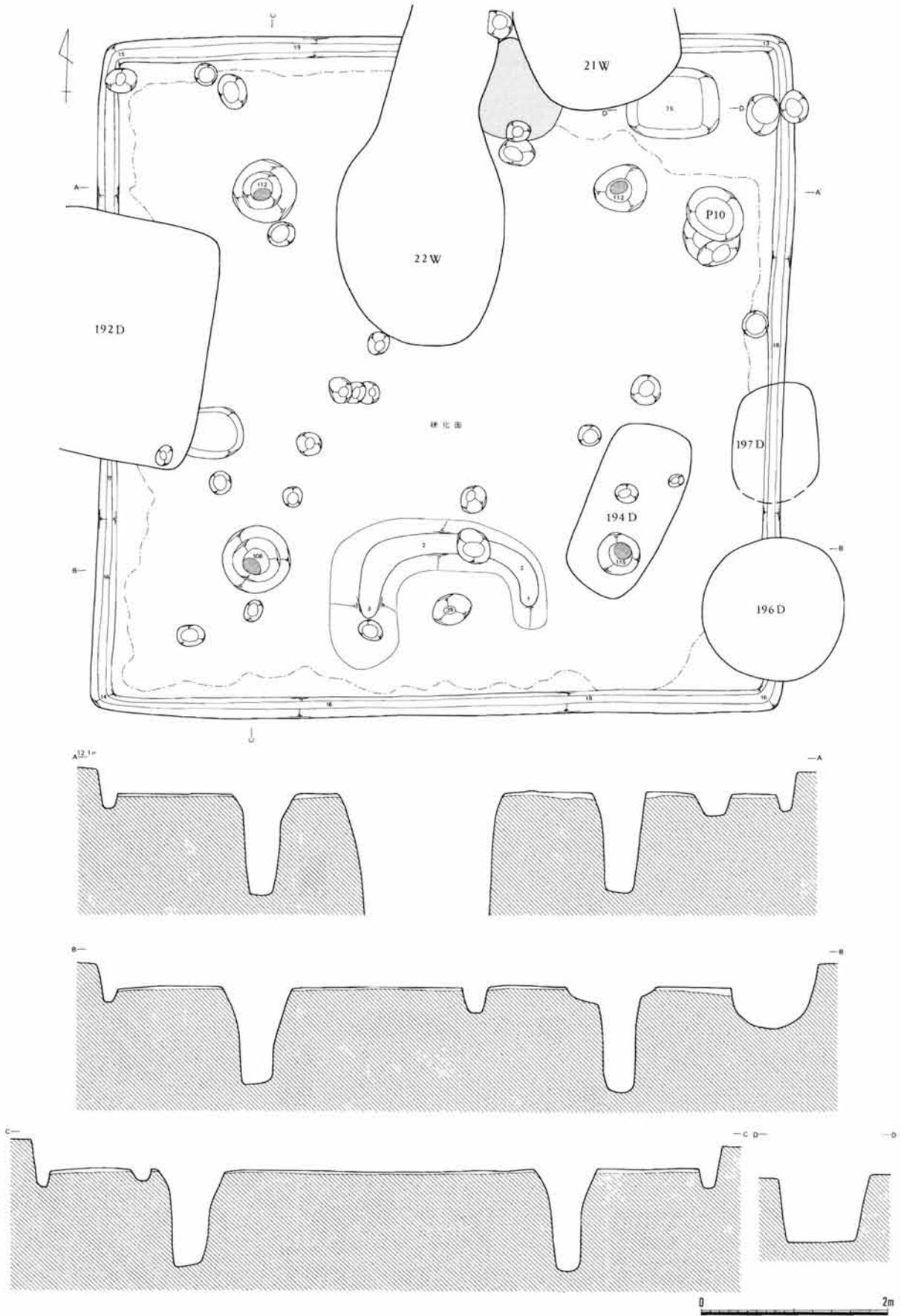
土器は土師器で、坏 (1~4)、高坏 (5・6)、甕 (7~10) である。

140号住居跡

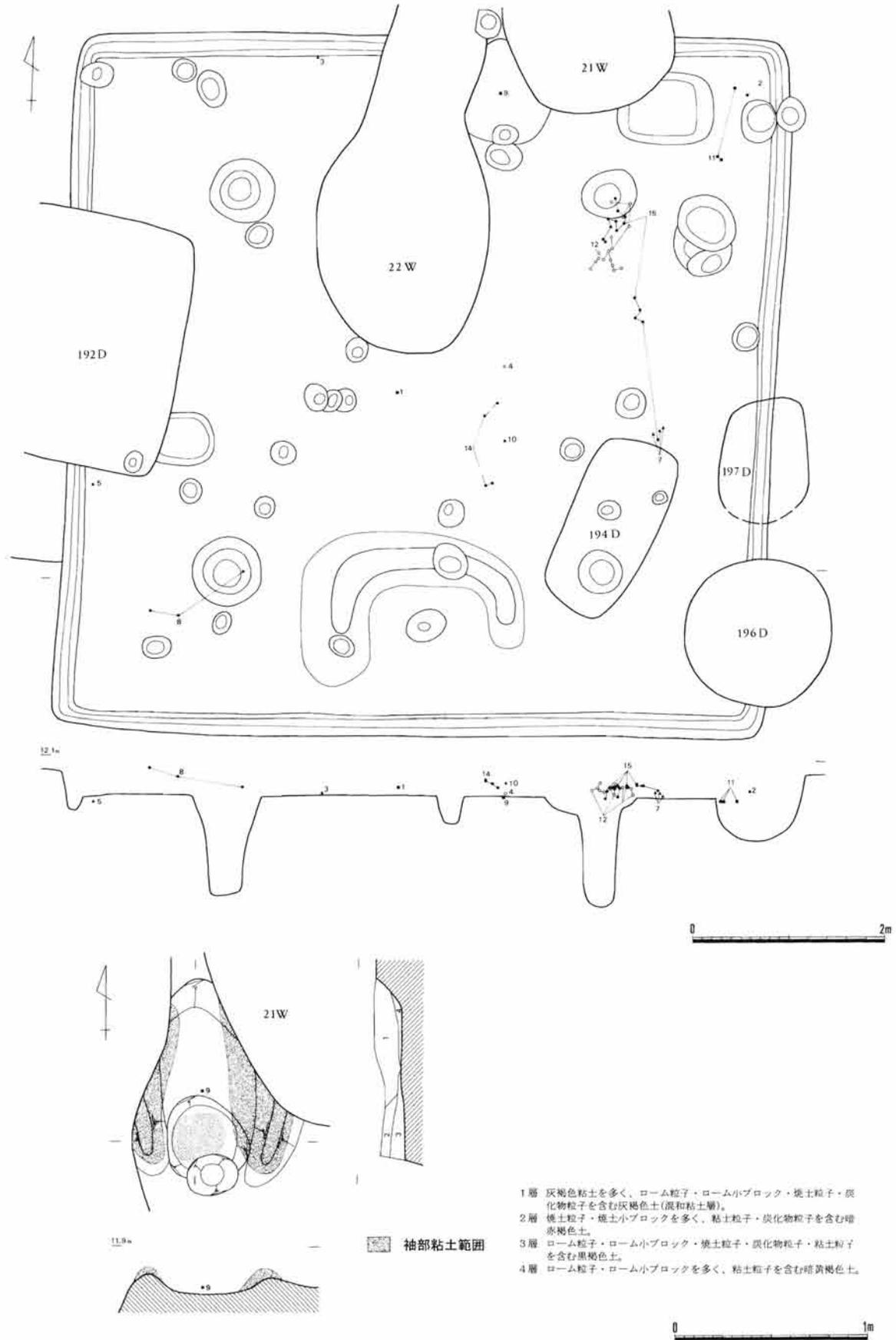
遺構 (第39・40図)

[位置] (D-4・5) グリッド。

[住居構造] 井戸と土坑により一部壊されている。(平面形) 正方形。(規模) 7.45×7.40m。(壁高) 12~37cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 確認できた範囲では、カマド部分を除いて全周する。上幅18~24cm・下幅5~12cm・深さ13~19cmを測る。(床面) 壁際を除いてよく硬化している。

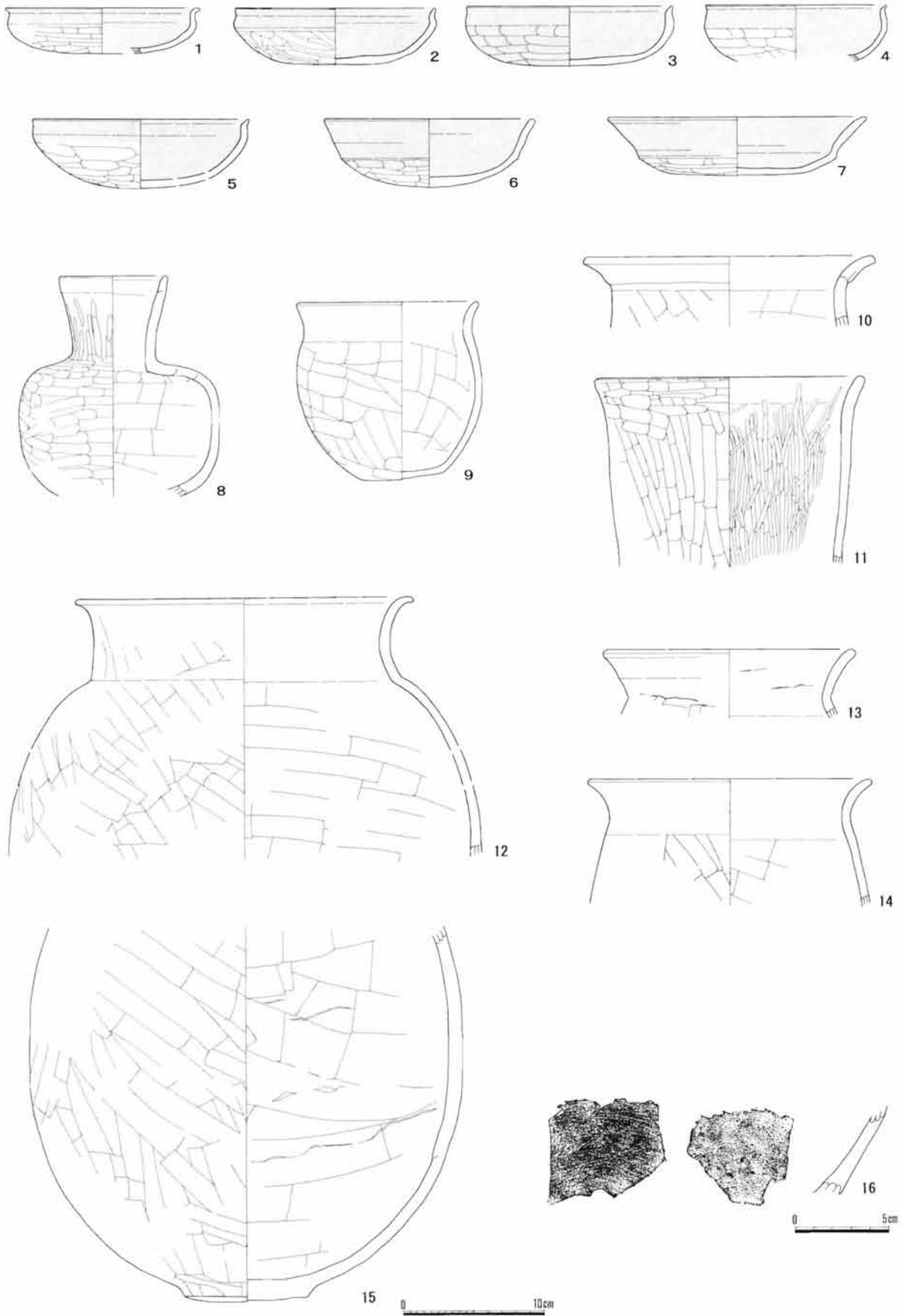


第39図 140号住居跡 (1/60)



第40図 140号住居跡遺物出土状態・カマド (1/60・1/30)

第3章 検出された遺構と遺物



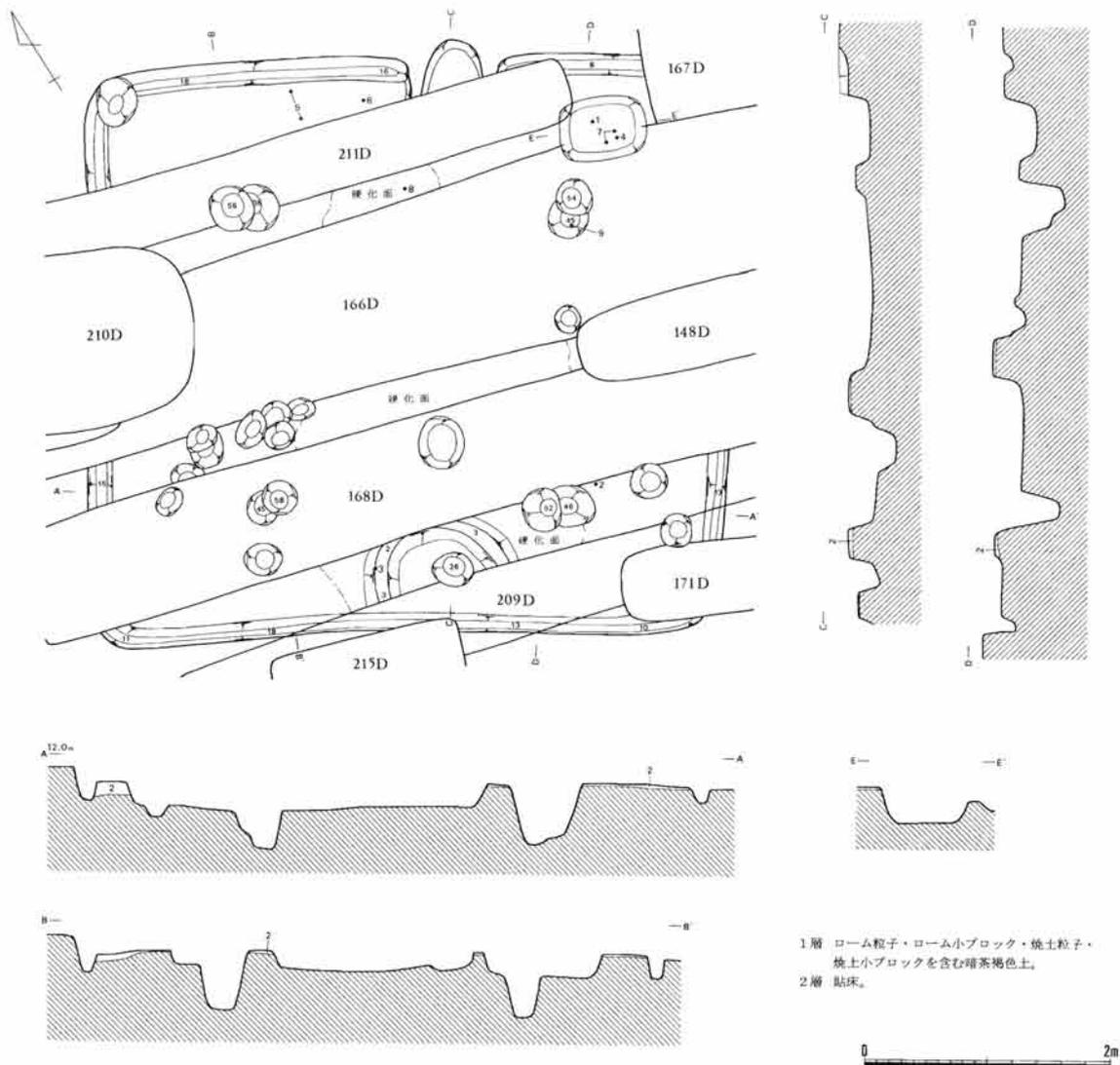
第41図 140号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)

(カマド) 北壁の中央よりやや東に位置するが、2基の井戸に壊されているため遺存状態は良くない。主軸方位はN-S、長さ105cm・幅不明。袖部はロームを馬蹄形状に残し、その上に灰褐色粘土を被覆して構築していたと思われる。煙道は40°程の勾配で立ち上がっている。燃烧部は3cm程の掘り込みをもち、良く焼けて赤化していた。(柱穴) 主柱穴は4本で、深さ108~115cmを測る。南壁の中央付近から1m程離れたところに入坑ピットと思われる深さ39cmのものがあり、北側に高さ2~3cmの凸堤が巡らされている。(貯蔵穴) 北東コーナーに位置し、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は76×100cm・深さ75cmを測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。(覆土) 上層はローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土、下層はローム粒子を多く焼土粒子・炭化物粒子含む明茶褐色土を基調とする。部分的にローム粒子・ローム小ブロックを多く含む箇所があるため、人為的に埋め戻されたと思われる。

[遺物] 覆土中や床面上、カマド内から土器が出土した。

[時期] 古墳時代後期(6世紀末葉)。

[所見] 遺物の大部分が覆土中から出土しているため、住居の埋め戻しの際に廃棄されたものと考えら



第42図 141号住居跡 (1/60)

れる。

遺物 (第41図、第17表)

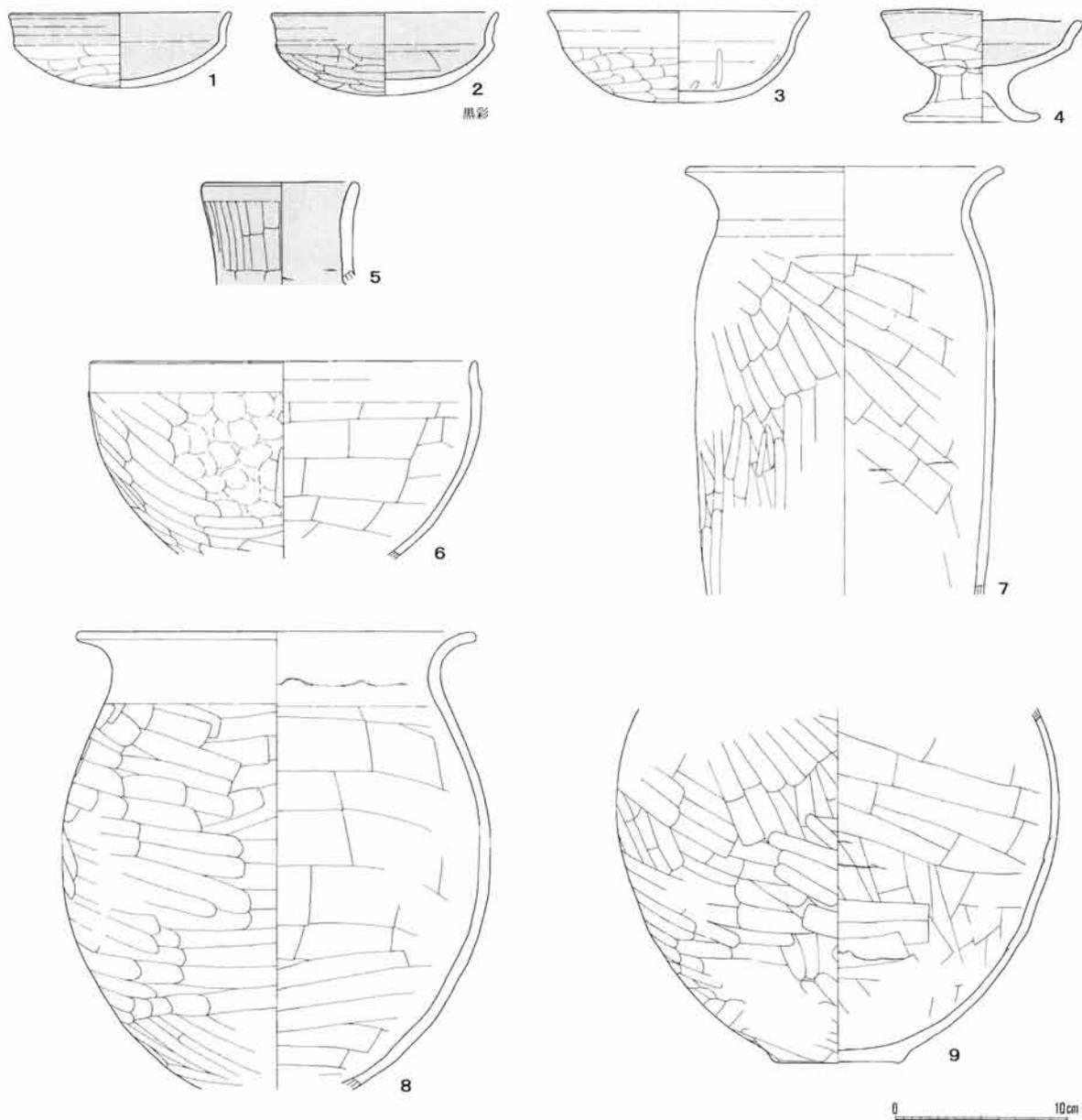
土師器坏 (1~7)、土師器壺 (8)、土師器甑 (10・11)、土師器甕 (9・12~15)、須恵器高坏 (16) である。

141号住居跡

遺構 (第42図)

[位置] (B-5・6) グリッド。

[住居構造] 多数の土坑により住居の大部分が壊されている。(平面形) 隅丸方形。(規模) 5.20×4.28 m。(壁高) 8~21cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) カマド部分を除いて全周すると思わ



第43図 141号住居跡出土遺物 (1/4)

れる。上幅14~20cm・下幅4~8cm・深さ8~18cmを測る。(床面)住居入口付近からカマド前面にかけて硬化していると思われる。貼床は2~10cmの厚さで施されていた。(カマド)北壁の中央よりやや東に偏って位置する。主軸方位はN-30°-E。遺存状態が悪いため詳細は不明であるが、袖部はロームを馬蹄形状に残して構築されていたと思われる。(柱穴)主柱穴と思われるものが、2本ずつの重複形態で4ヶ所から検出された。深さは38~58cmを測る。南壁の中央よりやや東に偏った所に入口ピットと思われる深さ26cmのものがあり、北側には高さ2~3cmの凸提が巡らされていた。(貯蔵穴)カマドの右側に位置し、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は70×53cm・深さ30cmを測る。(覆土)ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。床面上からは多くの焼土が検出された。

[遺物] カマド及び貯蔵穴内から土器が出土した。

[時期] 古墳時代後期(7世紀前葉)。

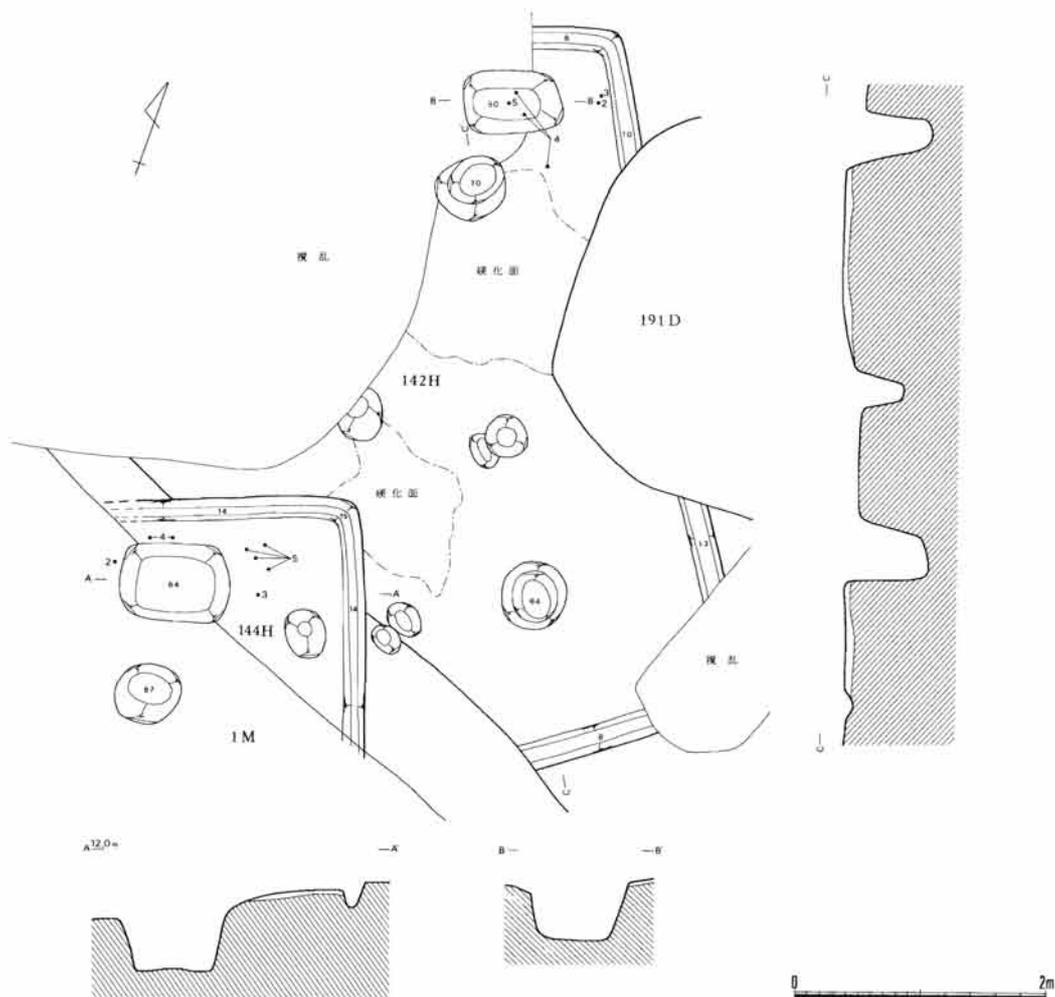
[所見] 床面上から焼土が多く検出されたことから、焼失住居の可能性はある。

遺物 (第43図、第18表)

土器はすべて土師器で、坏(1~3)、高坏(4)、壺(5)、鉢(6)、甕(7~9)である。

142号住居跡

遺構 (第44図)



第44図 142・144号住居跡 (1/60)

[位置] (E-5) グリッド。

[住居構造] 1M・191D・攪乱によりかなりの部分が壊されているため詳細は不明である。144Hを切る。(平面形) 方形。(規模) 不明。(壁高) 残りのよいところで15cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 確認できた範囲では巡らされていた。(床面) 残存していた部分は、よく硬化していた。(柱穴) 支柱穴は4本と思われるが、深さ64cmと70cmのもの2本しか確認できなかった。(貯蔵穴) 北西壁の北コーナーに偏って位置し、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は76×50cm、深さ50cmを測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロックを多く、炭化物粒子を含む明茶褐色土を基調とする。

[遺物] 覆土中及び貯蔵穴内から僅かに土器が出土した。

[時期] 古墳時代後期(7世紀中葉)。

遺物 (第45図、第19表)

土器はすべて土師器で、坏(1)、甕(2・3・5)、甑(4)である。

143号住居跡

遺構 (第47図)

[位置] (B-4、5) グリッド。

[住居構造] 北側は調査区域外であり、さらに30Mと多数のピットに壊されている。(平面形) 正方形。(規模) 6.04×6.00m。(壁高) 10~32cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 確認できた部分では全周する。上幅18~24cm・下幅6~12cm・深さ8~12cmを測る。(床面) 住居中央付近に硬化面が確認された。(柱穴) 支柱穴は4本と思われるが、確認できたのは3本で、深さは87~97cmを測る。南東壁中央付近の深さ21cmのものは入口ピットと思われる。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。南東壁付近から粘土と炭化材が検出された。

[遺物] 土器と鉄製品が出土した。

[時期] 古墳時代後期(7世紀中葉か)。

[所見] 炭化物が床面上から多く検出されていることから焼失住居の可能性がある。

遺物 (第47図、第20表)

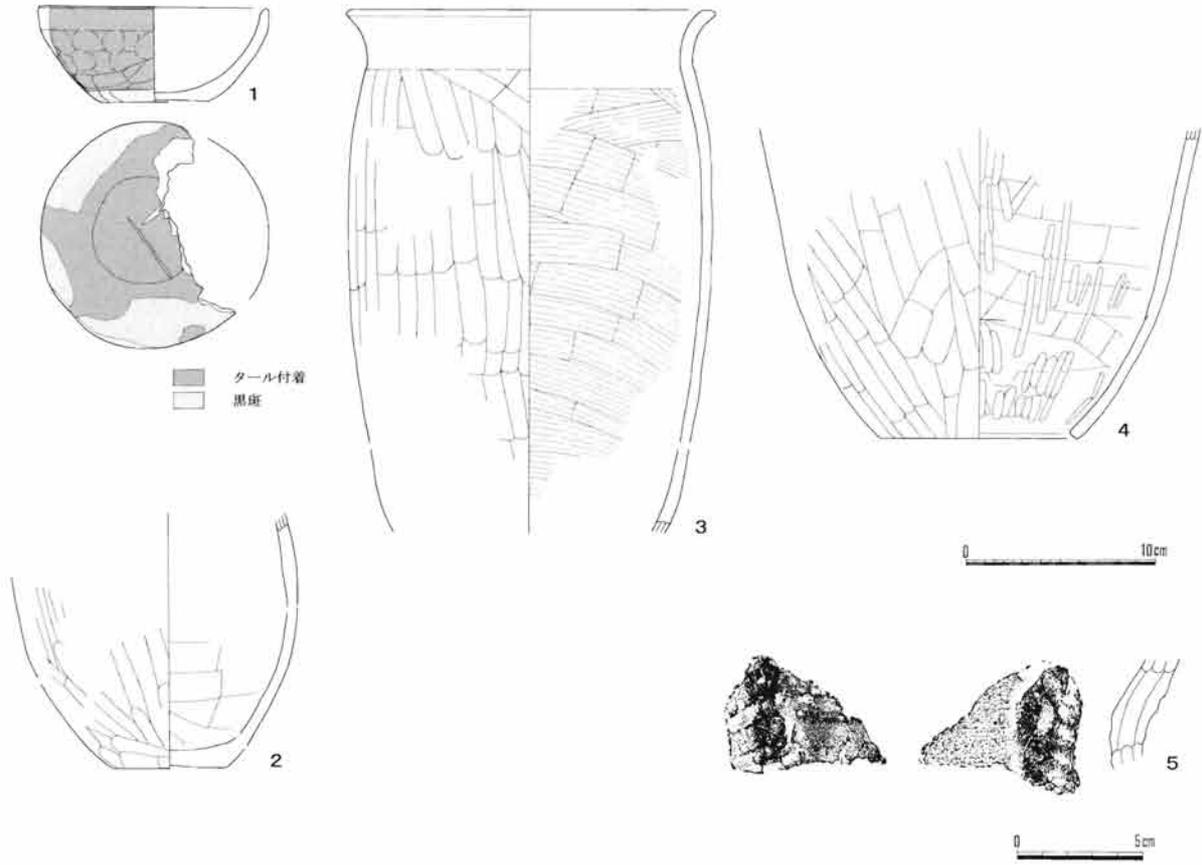
土師器甕(1)、ミニチュア土器(2)、鉄製品(3~5)である。

144号住居跡

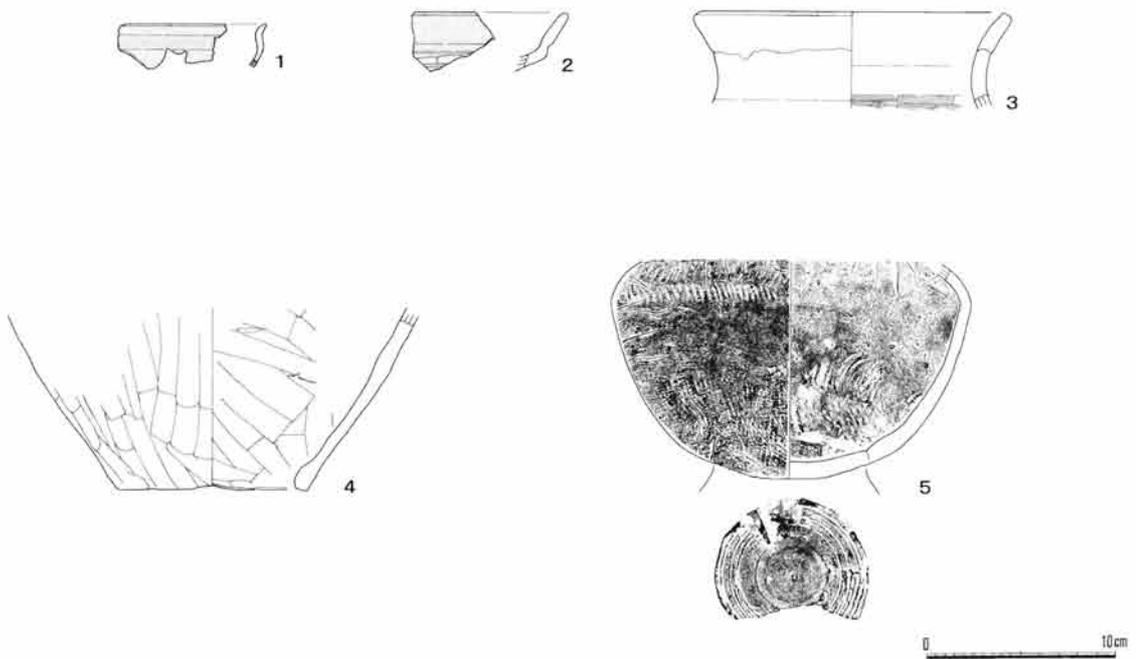
遺構 (第44図)

[位置] (E-5) グリッド。

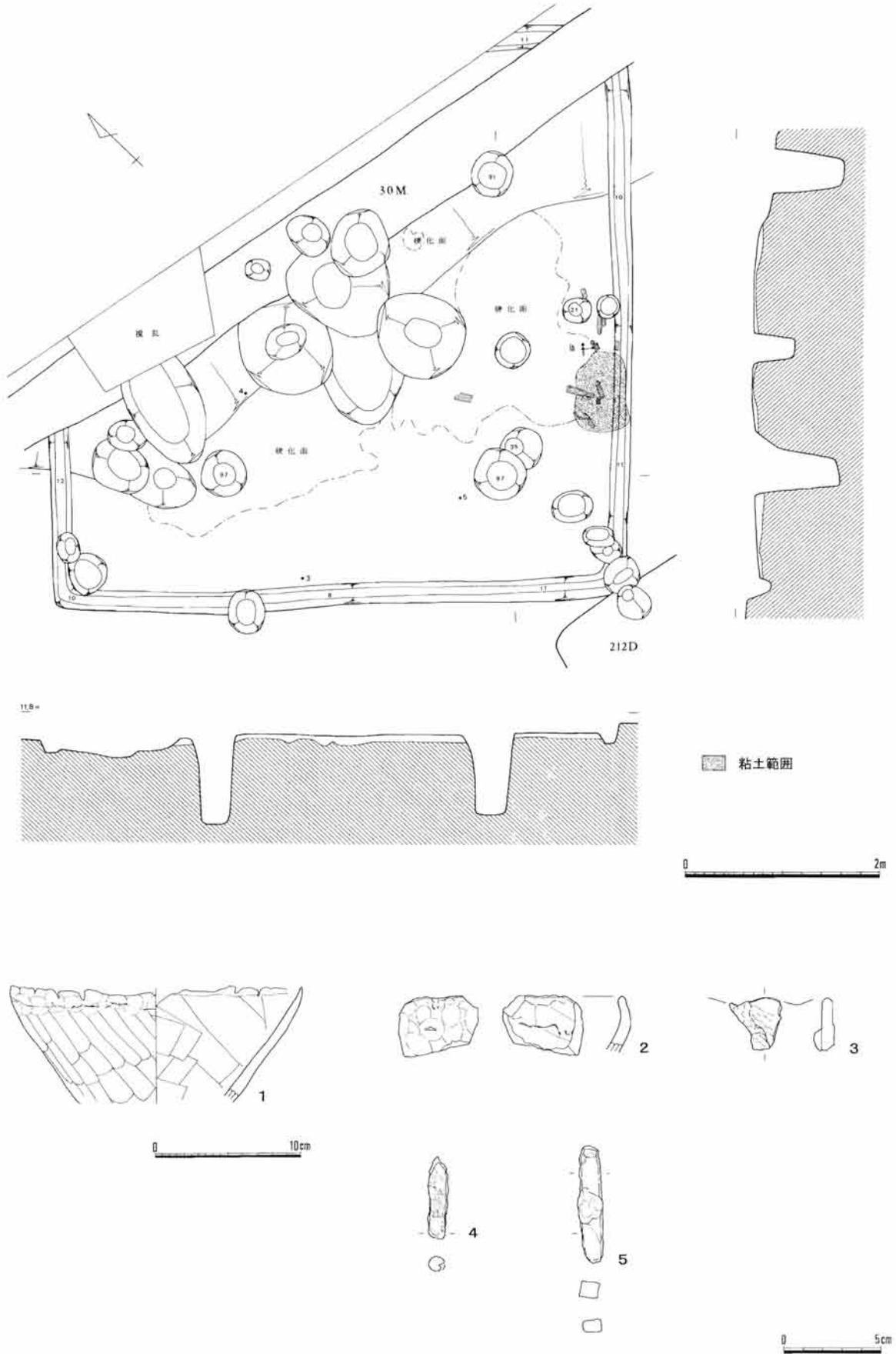
[住居構造] 1Mによりほとんど壊されているため、北コーナー付近しか確認できなかった。142Hに切られる。(平面形) 方形か。(規模) 不明。(壁高) 残りの良いところで14cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。(壁溝) 確認できた部分では巡らされていた。上幅18cm・下幅6cm・深さ14cmを測る。(柱穴) 支柱穴と思われるものが1本確認できた。深さは残りの良い床面から87cmを測る。(貯蔵穴) 北コーナーに位置し、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は88×62cm、深さ64cmを測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。底近くから粘土ブロックが多く出土している。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子・粘土粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。



第45図 142号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)



第46図 144号住居跡出土遺物 (1/4)



第47図 143号住居跡・出土遺物 (1/60・1/4・1/3)

[遺物] 貯蔵穴周辺から土器が出土した。

[時期] 古墳時代後期（6世紀前葉）。

遺物（第46図、第21表）

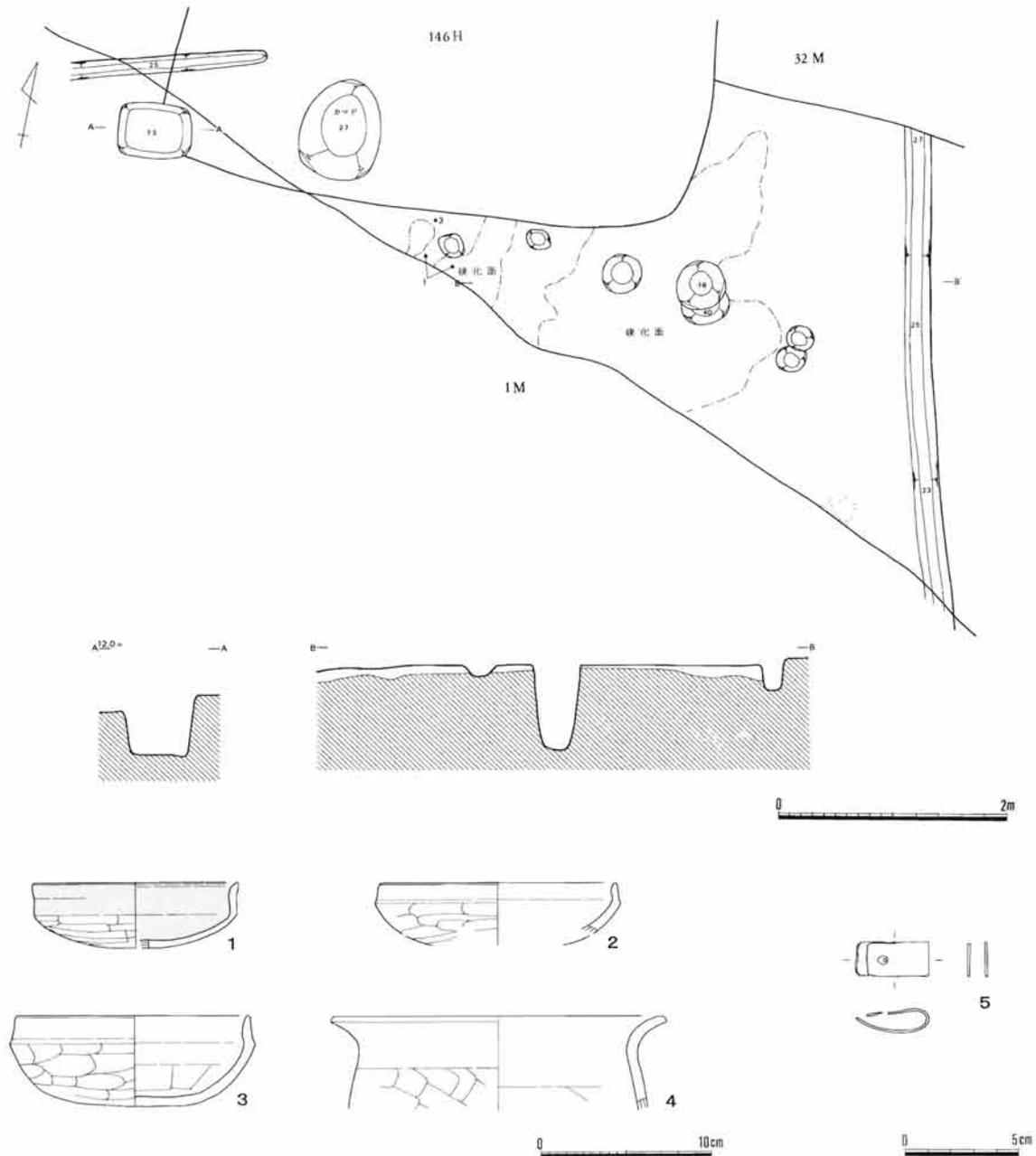
土師器坏（1・2）、土師器甕（3）、土師器甑（4）、須恵器壺（5）である。

145号住居跡

遺構（第48図）

[位置]（E-4）グリッド。

[住居構造] 146Hと1・32Mに切られているため詳細は不明である。（平面形）方形か。（規模）不明。



第48図 145号住居跡・出土遺物（1/60・1/4・1/3）

(壁高) 残りの良いところで5cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。(壁溝) 確認できた部分ではカマド付近を除いて巡らされていた。上幅22~24cm・下幅8~10cm・深さ23~27cmを測る。(床面) 壁際を除いてよく硬化した面が確認された。東壁付近の床面が一部焼けて赤化していた。貼床が2~14cmの厚さで施されていた。(カマド) 北壁に位置するが、146Hの床下より検出されたため規模90×70cm・深さ24cmの楕円形の掘り込みしか確認できなかった。(柱穴) 深さ78cmのものが本住居の主柱穴と思われる。(貯蔵穴) 北壁のカマドの左側に位置し、平面形は長方形を呈する。規模は66×50cm、深さ73cmを測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化材・焼礫を含む暗茶褐色土を基調とする。(覆土) ローム粒子を含み、ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] カマド前面の床面上から土器と覆土中から銅製品が出土した。

[時期] 古墳時代後期(7世紀前葉)。

遺物 (第48図、第22表)

土師器坏(1~3)、土師器甕(4)、銅製品(5)である。

146号住居跡

遺構 (第49図)

[位置] (D・E-3・4) グリッド。

[住居構造] 北側は32Mにより上部が壊されている。(平面形) 隅丸方形。(規模) 4.56×4.70cm。(壁高) 残りの良いところで20cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。(壁溝) カマドを除いて全周する。上幅14~22cm・下幅4~8cm・深さ7~20cmを測る。(床面) 入口付近からカマドにかけて良く踏み固められていたと思われる。(カマド) 北壁のほぼ中央に位置する。32Mによりかなり壊されているため詳細は不明であるが、右袖には掘り残されたロームとその上に被覆された粘土が確認できた。燃焼部は良く焼けて赤化しており、左側から倒立した長甕が出土している。(柱穴) 主柱穴は4本検出され、深さは42~47cmを測る。南壁の中央より内側に50cm程入った所に、入口ピットと思われる深さ10cmのものが検出され、北側にはU字状で高さ4cm程の凸堤が巡らされていた。(貯蔵穴) 北東コーナーに位置し、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は76×58cm、残りの良い床面からの深さは45cmを測る。底から5cm程浮いた状態で、小型の甕が出土した。覆土は上層がローム粒子・ローム小ブロックを含み、焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土、下層がローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調とする。(覆土) 上層はローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土、下層はローム粒子・ローム小ブロックを多く、焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 貯蔵穴及び入口凸堤部から比較的多くの土器が出土した。その他、炭化種子(イネ)。

[時期] 古墳時代後期(7世紀後葉)。

遺物 (第50図、第23表)

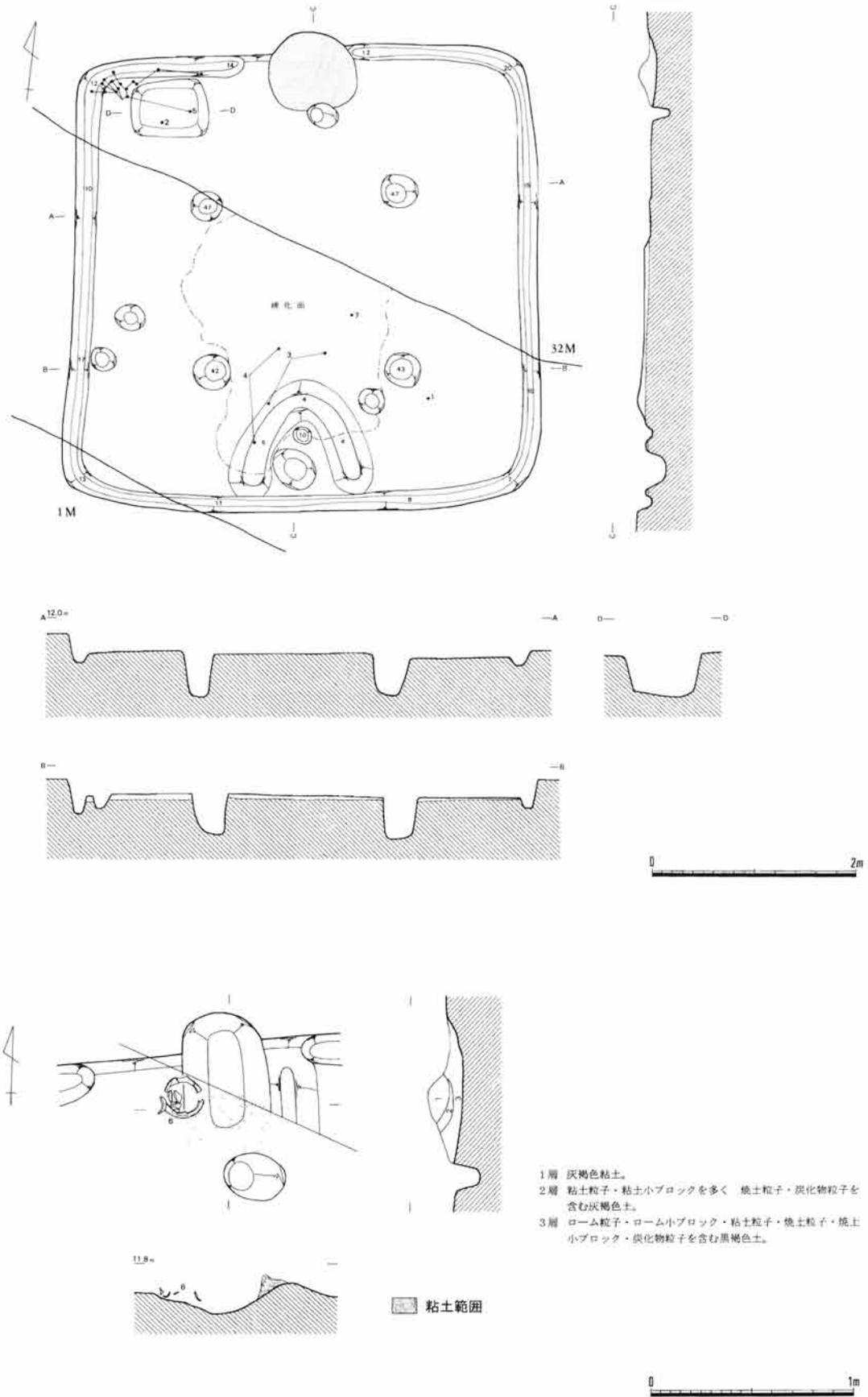
土師器坏(1)、土師器壺(2)、土師器甕(3~6)、土製品(7)である。

147号住居跡

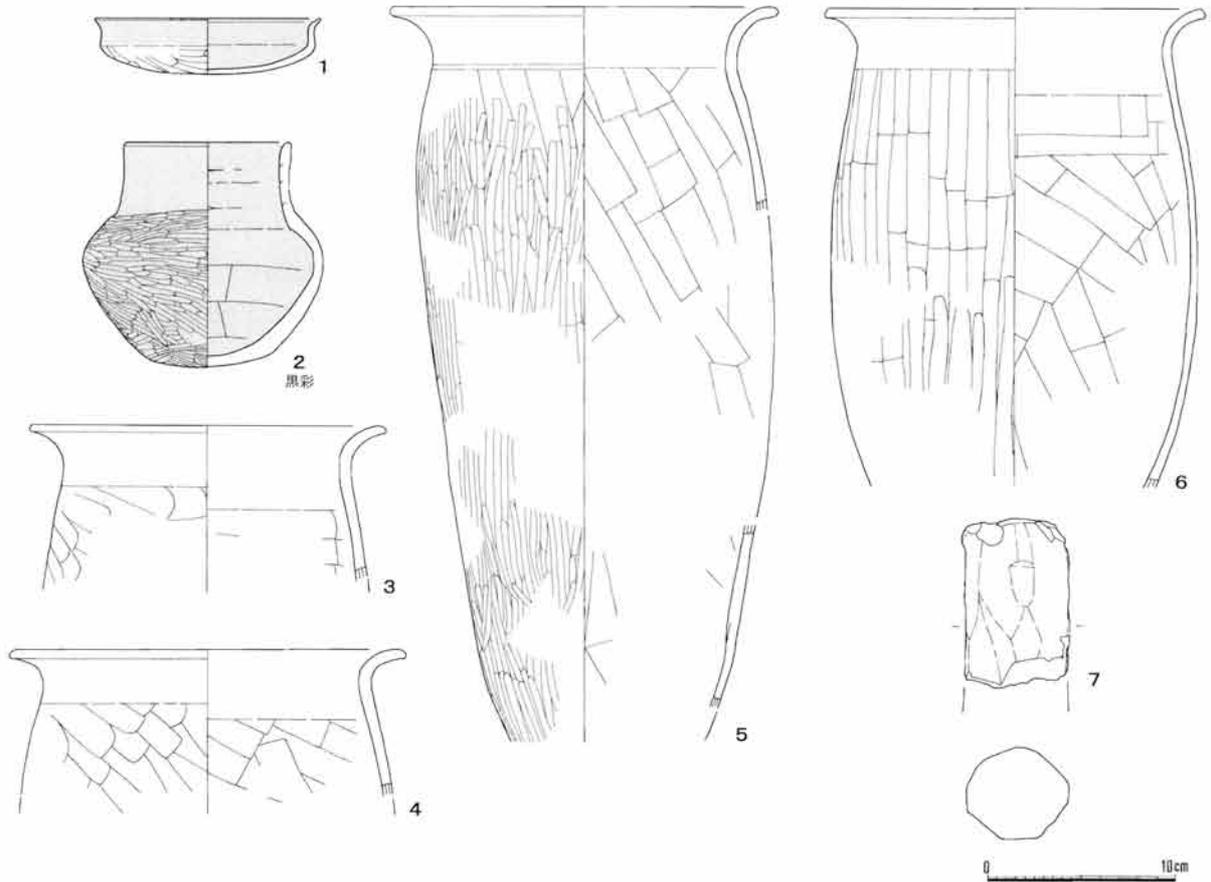
遺構 (第51図)

[位置] (D-3、E-2・3) グリッド。

[住居構造] 南側は1Mにより壊されている。貼床下より壁溝が検出されたことから、住居の拡張が行



第49図 146号住居跡・カマド (1/60・1/30)



第50図 146号住居跡出土遺物 (1/4)

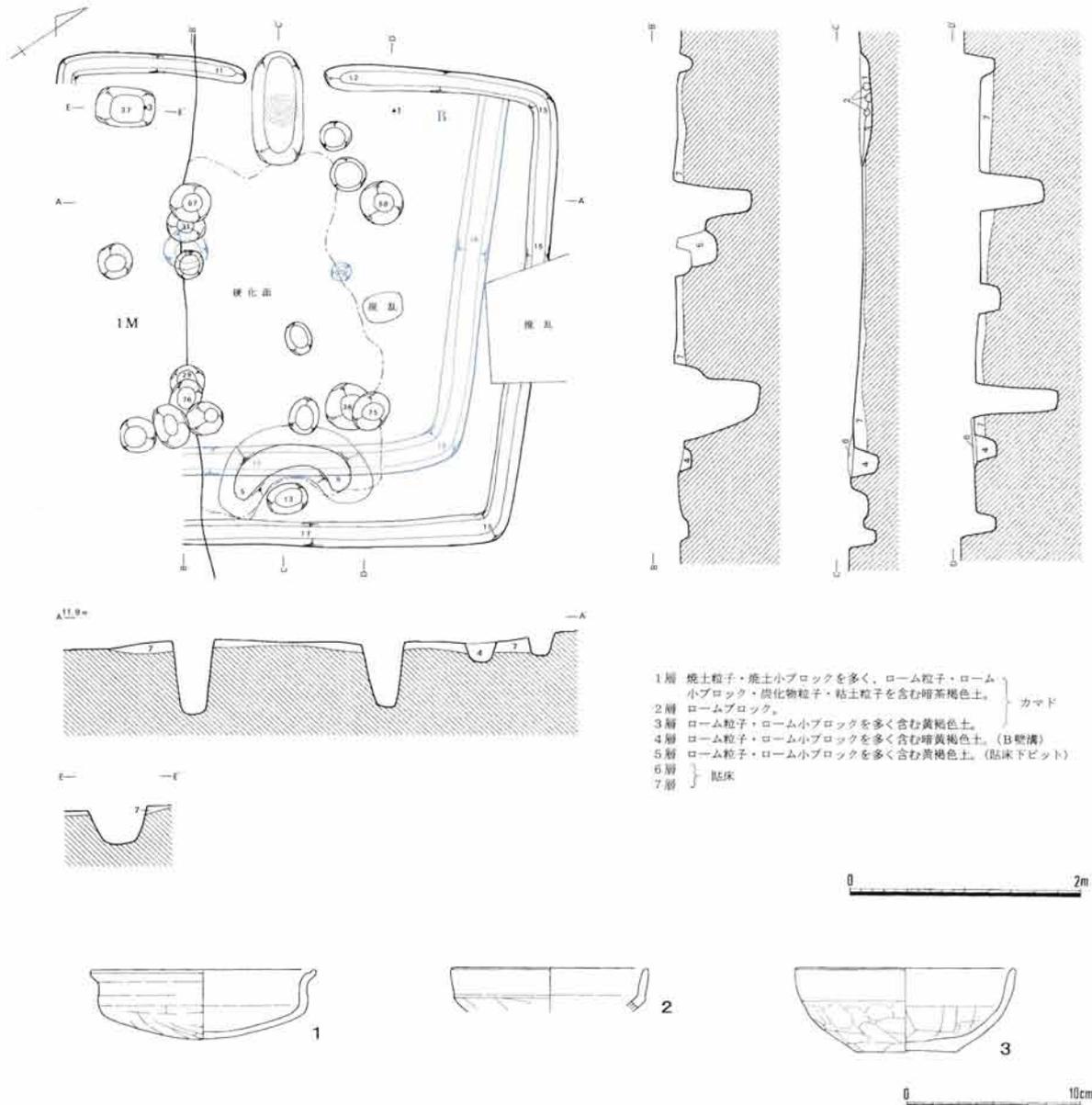
われたものと思われる。拡張後をA、拡張前をBとする。(平面形) 正方形。(規模) Aが4.30×4.26cm、Bが4.30×3.62m。(壁高) 残りの良いところで14~21cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 確認できた部分ではカマドを除いて全周する。Aが上幅18~24cm・下幅8~12cm・深さ10~17cm、貼床下部のBの壁溝は上幅約26cm・下幅12~16cm・深さ13~18cmを測る。(床面) 入口付近からカマドの前面にかけて良く硬化している。貼床は2~12cmの厚さで施されていた。(カマド) 北西壁の中央よりやや西に偏って位置する。主軸方位はN-30°-E。長さ100cm・幅44cm・壁への掘り込み6cmを測る。(柱穴) 支柱穴と思われるものが4本検出され、深さは58~76cmを測る。南東壁の中央付近にある深さ13cmのものが入口ピットと思われ、高さ5cm程の凸堤が巡らされている。貼床下からピット2本が検出された。深さはA住居床面から28・38cmを測る。(貯蔵穴) 西コーナーに位置し、平面形は長方形を呈する。規模は50×34cm・深さ37cmを測る。(覆土) ローム粒子・ロームブロックを多く、焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。6層はA住居の貼床と思われるが、遺存状態が悪く一部しか確認できなかった。

〔遺物〕 カマド周辺及び貯蔵穴内から土器が僅かに出土した。

〔時期〕 古墳時代後期(7世紀中葉~後葉)。

遺物 (第51図、第24表)

すべて土師器坏である。



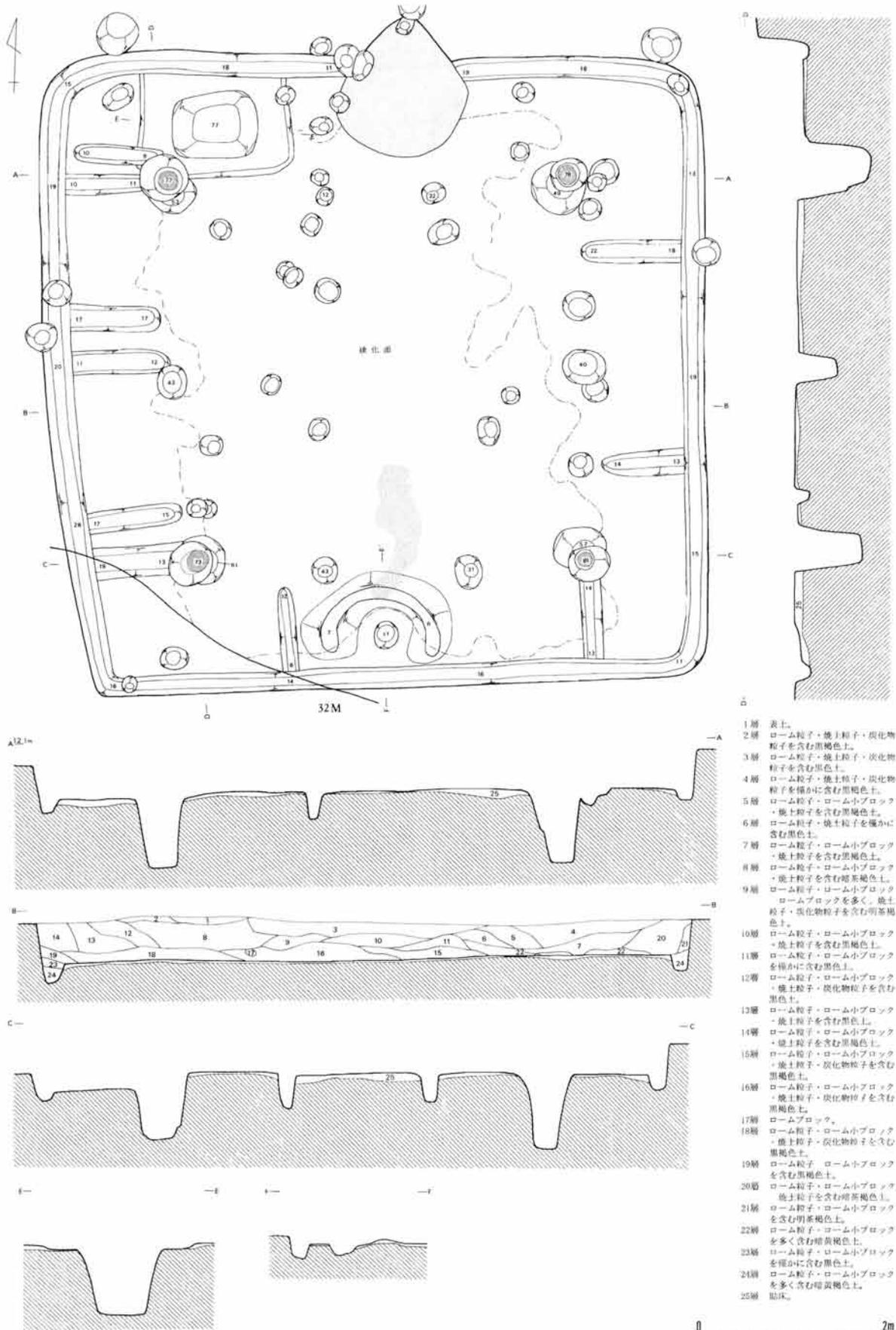
第51図 147号住居跡・出土遺物 (1/60・1/4)

148号住居跡

遺 構 (第52～54図)

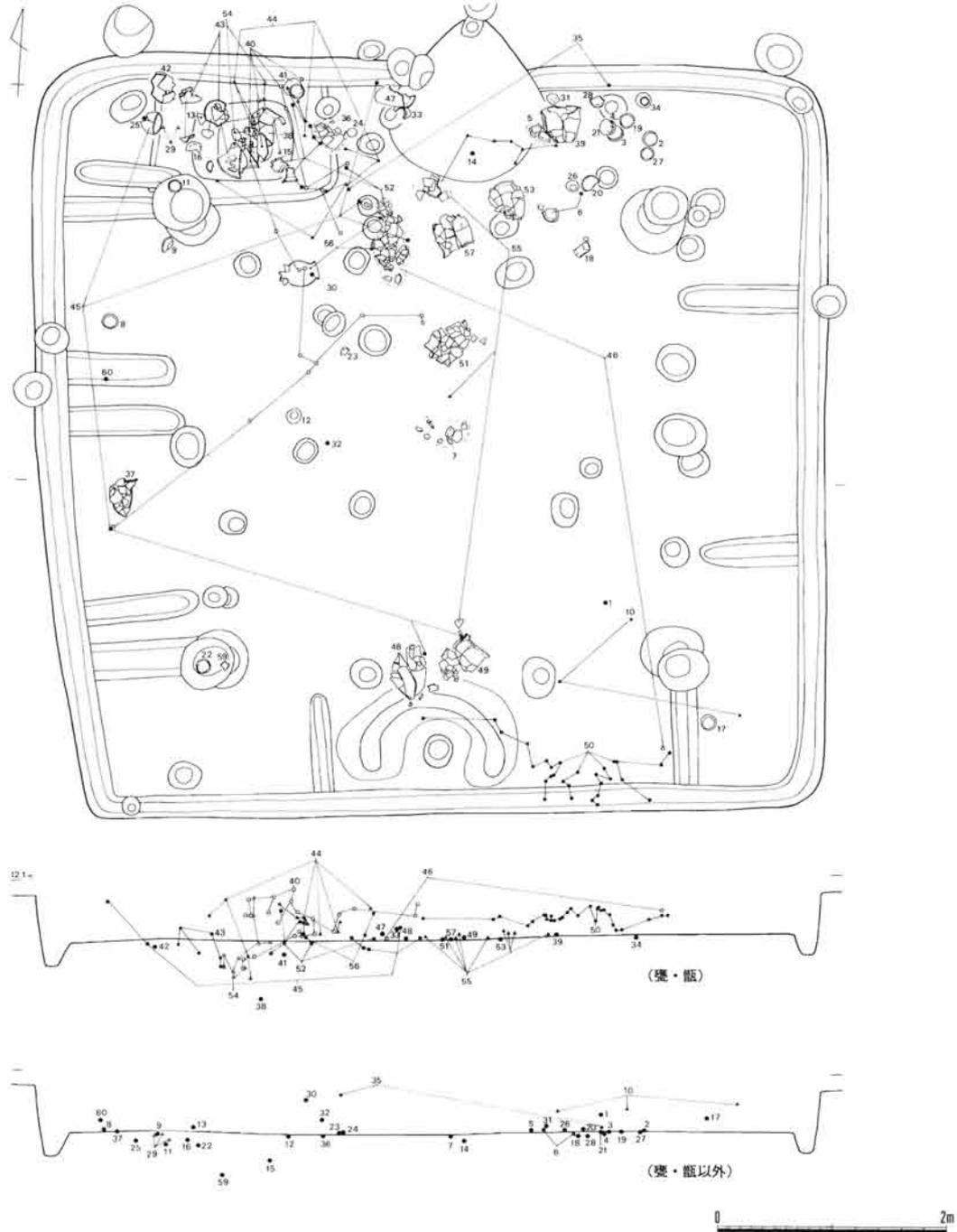
[位置] (D-3・4) グリッド。

[住居構造] 南西コーナーは32Mにより上層が壊されている(平面形)方形。(規模) 6.94×6.80cm。(壁高) 22～49cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) カマドを除いて全周する。上幅20～30cm・下幅8～14cm・深さ11～26cmを測る。間仕切りと思われる溝が東壁と南壁に2ヶ所ずつ、西壁には2本並行したものが3ヶ所の計10本確認された。(床面) 入口ピットからカマドにかけて良く硬化していた。入口凸堤の北側床面が一部焼けて赤化していた。貼床は2～9cmの厚さで施されていた。(カマド) 北壁の中央よりやや東側に偏って位置する。主軸方位はN-7°-W。長さ133cm・幅111cm・壁への掘り

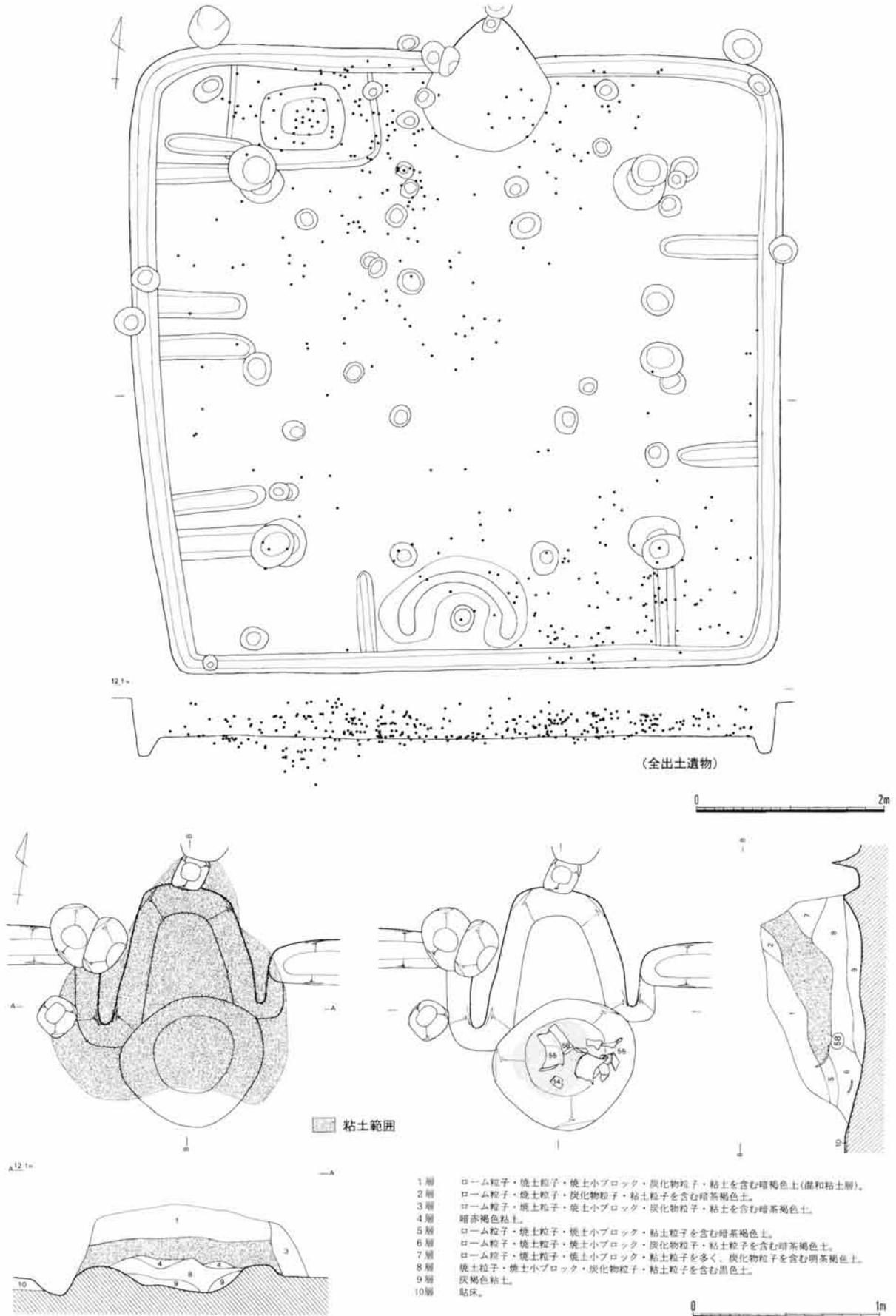


第52図 148号住居跡 (1/60)

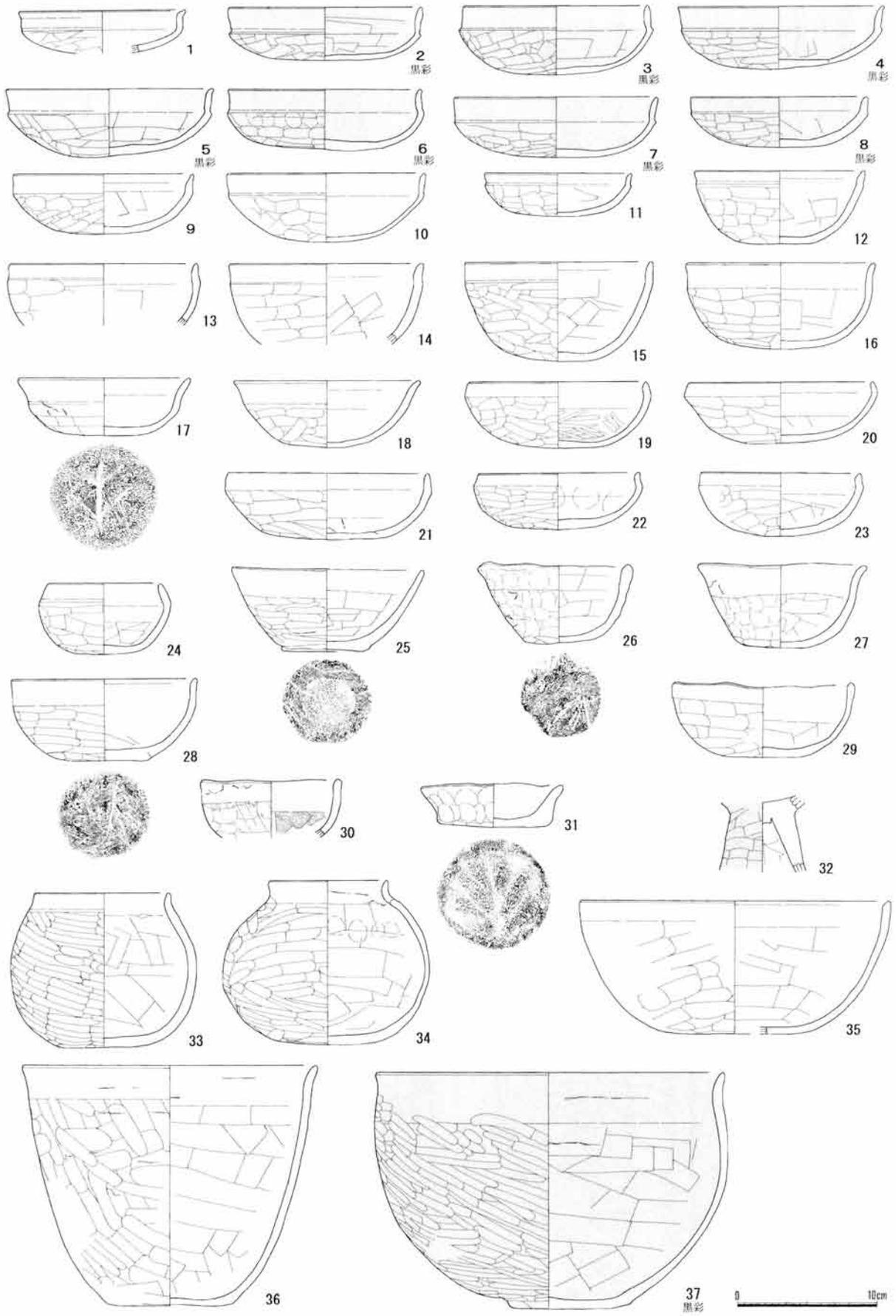
込み30cmを測る。後世ピットにより一部壊されている。袖部はロームを馬蹄形状に残しその上に粘土を被覆し、天井部と共に構築されていたと思われる。燃焼部は焼けて赤化してる。(柱穴) 支柱穴は6本と思われるが、南壁の近くにある2本の柱穴も本住居に伴う可能性がある。コーナーのものは2本ずつ重複している。南壁中央付近に入口梯子穴と思われる小ピットがあり、その北側には高さ6cm程の凸堤が巡らされている。(貯蔵穴) 北壁の北西コーナーとカマドの中間付近に位置する。平面形は長方形で、規模は90×70cm・深さ77cmを測る。周囲には幅20~35cm・深さ約7cmの段が設けられている。覆土はローム粒子・ローム小ブロックを含み、焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。(覆



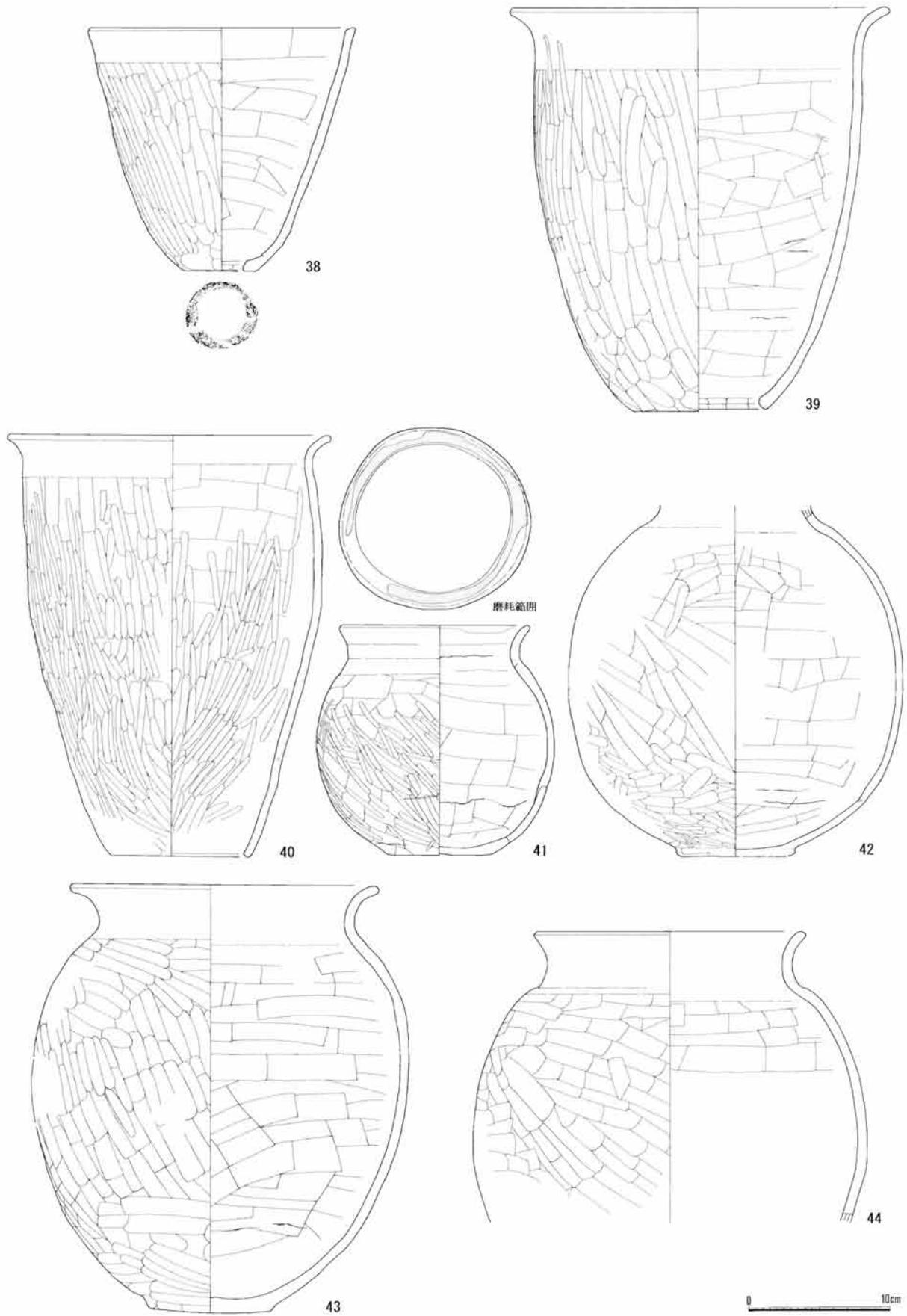
第53図 148号住居跡器種別遺物出土状態 (1/60)



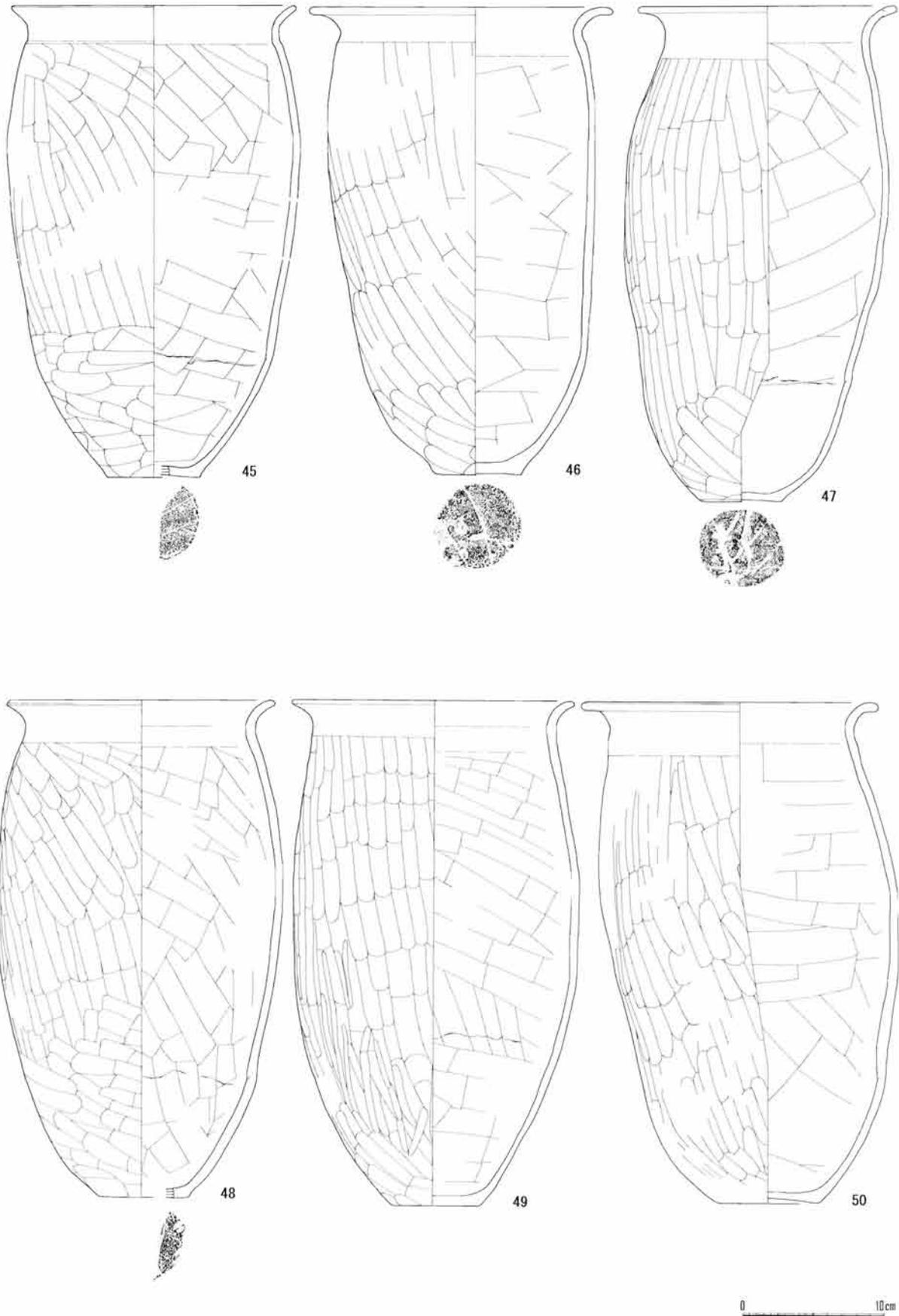
第54図 148号住居跡遺物出土状態・カマド (1/60・1/30)



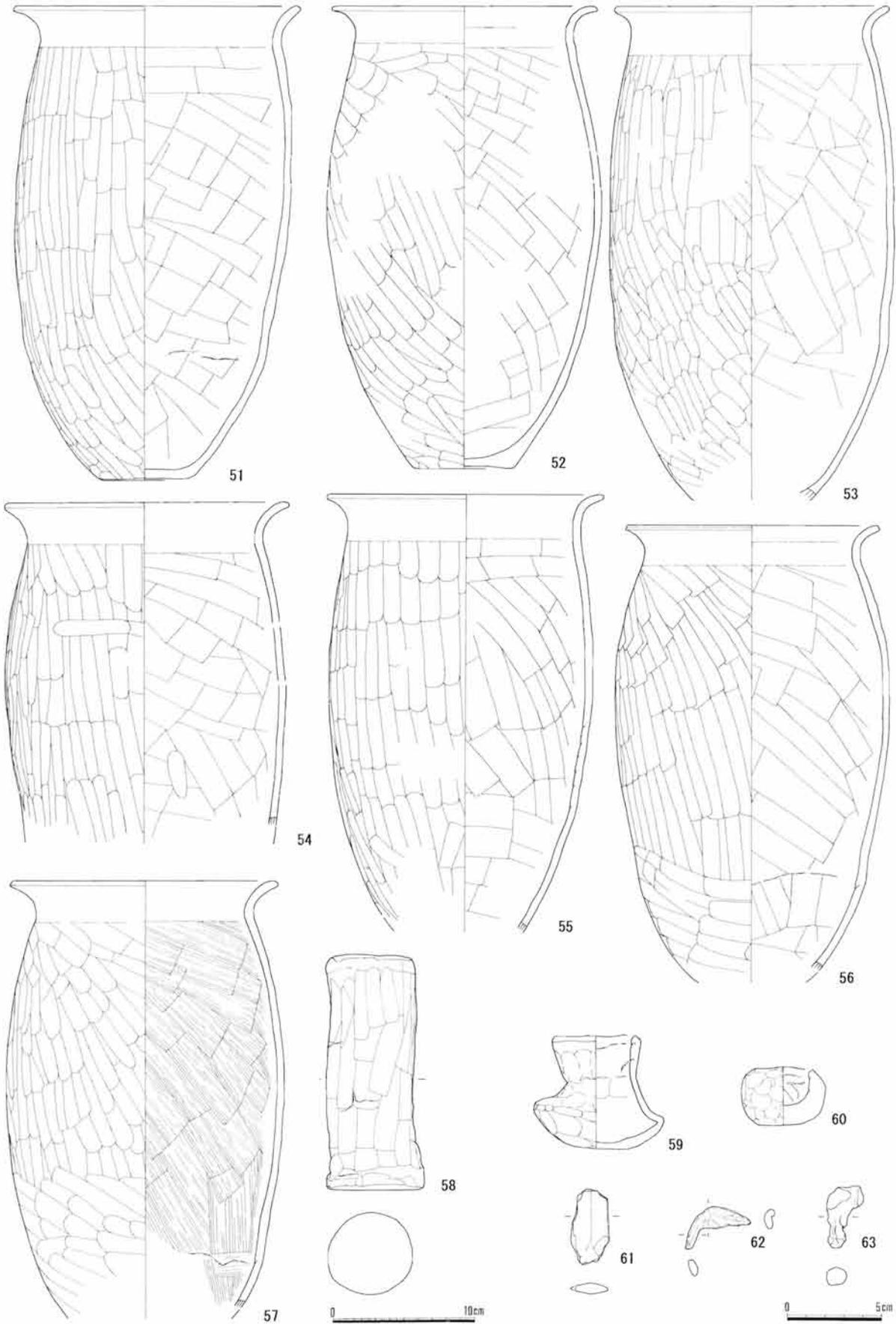
第55図 148号住居跡出土遺物1 (1/4)



第56図 148号住居跡出土遺物 2 (1/4)



第57図 148号住居跡出土遺物3 (1/4)



第58図 148号住居跡出土遺物4 (1/4・1/3)

土) 23層に分層される。

[遺物] 多数の土器が、覆土中及び床直上より出土した。その他、自然科学分析を行っていないが、炭化種子(ヤマモモ1点)が出土した。

[時期] 古墳時代後期(7世紀前葉)。

[所見] 本住居跡の出土の土器及び土製品については、60点すべて胎土分析を行った。分析結果は、付編に掲載した。

遺物(第55~58図、第25・52表)

土器はすべて土師器で、坏(1~31)、高坏(32)、甕(33・34・41~57)、甑(38~40)、土製品(58)、ミニチュア土器(59・60)、鉄製品(61~63)である。

なお、坏に関しては、後述の胎土分析に関連し、第53表の分類基準を準用し説明する。この分類は、胎土分析を実施する以前に行ったものである。

()は現存値及び推定値

押図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第21図1	土師器 坏	(4.6)	12.6	—	口縁部と底部との境には明瞭な段をもち、口縁部は外傾/全面黒色処理が施される黒色系土器である/底部内面には花卉状に暗文が描かれている	黒色	白色粒子を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面は僅かにナデが施されるが、指頭押捺による成形痕が観察される	覆土中	口縁部から底部付近にかけて1/5程	黒色系有段坏
第21図2	土師器 坏	(3.5)	(11.6)	—	丸味をもつ体部をもち、口縁部は短く外反/全面赤彩が施される堅緻な作りの土器	赤色	小石を含む	全面でいねいにナデ、体部外面にはへら削り痕が残る	覆土中	口縁部から底部付近にかけて1/5程	初現段階の比企型坏
第21図3	土師器 坏	4.4	13.5	—	底部から口縁部にかけて内湾/底部内外面を除き赤彩	赤色	黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	口縁部内外面は軽い横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後粗いへら磨き調整	壁際の床面上	4/5強	
第21図4	土師器 坏	(6.0)	(12.8)	—	深身タイプで、口縁部と体部の境には稜をもち、口縁部は外傾/器形としては、須恵器坏蓋の模倣坏の類である/内面及び外面口縁部は赤彩	赤色	黄褐色粒子・砂粒・小石を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ後粗いへら磨き調整、外面はへら削り後粗いナデ	覆土中	1/2程	
第21図5	土師器 坏	6.9	(14.0)	—	塊状タイプで、口縁部は短く外傾し、内面には稜をもつ/内斜口縁部と比企型坏の初現段階のタイプの中間的な形態を呈しているものと思われる/全面赤彩	赤色	砂粒・黄褐色粒子・小石を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後へら磨き調整が施されるが、体部上半には僅かに縦方向のハケ目痕が観察される	覆土中	1/3程	
第21図6	土師器 坏	9.1	13.2	—	大型の塊状タイプで、口縁部は内面に稜をもち内湾気味に直立し、内斜口縁部の口縁部形態に類似する/全面赤彩	赤色	砂粒を多く、黄褐色粒子・小石を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面は体部上半が縦方向のハケ目調整後横方向に軽いナデ、体部下半はへら削り後ナデ(磨きの)が施され光沢を帯びる	貯蔵穴	完形品	
第21図7	土師器 高坏	(5.9)	—	—	脚台部破片である。脚柱部は短めであるが、「ハ」字状を呈し、裾部は屈曲し水平に広がる	黄褐色	茶褐色粒子・金雲母・砂粒を含む	内面はへらナデ、外面はナデられるが、指紋が明確に観察できることから、指頭によりナデが施されているものと思われる	覆土中	脚台部のみ1/3程	
第21図8	土師器 甕	(17.1)	(16.0)	—	胴部中位に最大径を測り、口縁部は「く」字状を呈する	内面は黒色、外面は暗橙色を基調	白色粒子・砂粒を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後斜方向にへらナデ(磨きの)	覆土中	口縁部から胴部下半にかけて1/3程	
第21図9	土師器 甑	—	—	—	口縁部は「く」字状を呈する	暗黄褐色	黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面は縦方向にハケ目調整	覆土中	小破片	

(単位: cm)

第10表 131号住居跡出土遺物一覧

第3章 検出された遺構と遺物

()は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第22図1	土師器 環	(3.8)	(12.0)	-	口縁部と底部との境に段をもち、口縁部は直立/口唇部内面には幅2mmの沈線/内面及び口縁部外面は赤彩	赤色	黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り	貯蔵穴内	口縁部から底部付近にかけて1/3程	比企型環
第22図2	土師器 環	(3.7)	(12.8)	-	1の土器に比べ、口縁部と底部との境は丸味をもつ/口唇部内面には幅3mmの太めの沈線/内面及び口縁部外面は赤彩が施されるが、底部外面にも赤彩のこびり付きが多く観察される	赤色	砂粒・小石を多く、黄褐色粒子を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り	貯蔵穴内	口縁部から底部付近にかけて1/3程	比企型環
第22図3	土師器 環	(2.5)	(13.0)	-	2の土器に類似するが、口唇部の広がり若干強い/口唇部内面には幅3mmの太めの沈線/内面及び口縁部外面は赤彩	赤色	砂粒・黄褐色粒子を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、外面底部はヘラ削りが施されるが、横ナデ直下には指頭押捺による成形痕が残り、指紋が観察される	カマド右横のほぼ床面上	口縁部から底部付近にかけて1/4程	比企型環
第22図4	土師器 環	(7.5)	(13.0)	-	深身の土器で、口縁部と体部の境に段をもち、口縁部は内傾	淡褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ	カマド右横のほぼ床面上	口縁部から底部付近にかけて1/4程	
第22図5	土師器 甕	(23.0)	(21.2)	-	胴部中位に最大径を測り、上半がやや張り、口縁部は大きく外反	暗褐色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後縦方向あるいは斜方向にいていねいなナデ(スリップか)	覆土中	口縁部から胴部下半にかけて1/2程	丸甕
第22図6	土師器 甕	(9.7)	-	(10.4)	底部は平底	暗赤褐色を基調	砂粒・小石を多く、茶褐色粒子を含む	内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ(スリップか)	覆土中	胴部下半以下を4/5程	丸甕
第22図7	土師器 甕	37.9	(19.4)	7.0	口縁部と胴部中位のほぼ同位置に最大径を測り、胴部上半から頸部にかけては横ナデによる段をもち、口縁部は大きく外反	暗黄褐色を基調	茶褐色粒子・砂粒を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ(スリップか)がいていねいに施されるが、その後縦方向の細長いヘラナデ(磨きの)が粗く施され光沢を帯びる	カマド右横のほぼ床面上	3/4程	長甕
第22図8	土師器 甕	(23.7)	(21.0)	-	胴部上半に最大径を測り、胴部上半から頸部にかけては横ナデによる弱い段をもち、口縁部は外反	暗茶褐色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後斜方向あるいは縦方向にいていねいなナデ(スリップか)	カマド内	口縁部から胴部下半にかけて1/3程	長甕
第22図9	土師器 甕	(24.0)	(23.6)	-	口縁部に最大径を測り、胴部は直線的な長胴を呈し、口縁部は外反	淡褐色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面は縦方向にヘラナデ、外面はヘラ削り	覆土中	口縁部から胴部下半にかけて1/2程	
第22図10	土製品	-	-	-	支脚/現存高11.9cm	暗褐色	混入物はほとんど含まれない	表面には面的な成形痕が残るが、成形後軽いナデ	カマド内	1/3程	
第22図11	ミニチュア土器	(3.6)	(3.0)	-	底部は一応平底を呈し、体部上半に最大径を測り、口縁部は短く内傾/短頸甕を模したものか	暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	口縁部内外面は横ナデ、体部以下は指頭押捺による成形痕が残る	覆土中	完形品	
第22図12	鉄製品	-	-	-	鉄釘の小破片か/長さ1.8cm・最大幅0.5cm・重さ1.0g	-	-	-	覆土中	1/3程	
第22図13	鉄製品	-	-	-	鉄釘/長さ3.0cm・最大幅0.4cm・重さ1.8g	-	-	-	覆土中	3/4程	

第11表 132号住居跡出土遺物一覧

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第25図1	土師器 環	(3.5)	(12.0)	-	口縁部と底部との境に稜をもち、口縁部は外傾/口唇部内面には幅4mmの太い沈線/内面及び口縁部外面は赤彩	赤色	赤褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り	住居跡南コーナーの覆土中(床土約15cm)	口縁部から底部付近にかけて1/5程遺存	比企型環
第25図2	土師器 環	3.4	(12.8)	-	口縁部と底部との境は丸味をもち、口縁部は短く外反/不明瞭であるが、内面及び口縁部外面は赤彩と思われる	赤色	黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後ヘラ磨き調整	カマド右前の床面上	1/2程	比企型環
第25図3	土師器 環	4.0	(13.0)	-	口縁部と底部との境は丸味をもち、口縁部は短く外反/不明瞭であるが、内面及び口縁部外面は赤彩と思われる	赤色	黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	カマド右前の床面上	2/3程	比企型環

(単位 cm)

第12表 133号住居跡出土遺物一覧(1)

()は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第25図4	土師器 環	3.6	(13.0)	-	口縁部と底部との境は丸味をもち、口縁部は短く外反/口縁部内面は工具が当てられ弱い沈線状を呈する/内面及び口縁部外面は赤彩と思われる	淡橙色	砂粒を多く、黄褐色粒子	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はへら削り後ていねいにへら磨き調整	カマド右横の床面上	ほぼ完形品	比企型環
第25図5	土師器 環	3.5	12.4	-	口縁部と底部との境に稜をもち、口縁部は外傾	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はへら削り後軽くナデ	南東壁近くの床面上	2/3程	
第25図6	土師器 環	(3.7)	(13.4)	-	口縁部と底部との境に2本の弱い沈線がまわり、口縁部は外傾	淡橙色	砂粒を多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はへら削り後軽くナデ	カマド右前の床面上	口縁部から底部付近にかけて1/6程	
第25図7	土師器 環	(3.6)	13.8	-	口縁部と底部との境には横ナデによる弱い稜をもち、口縁部は外傾	暗茶褐色	砂粒・茶褐色粒子を多く含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面は粗いへら削り/北武蔵型環の胎土・調整に類似する土器と考えられる	カマド右横のほぼ床面上	口縁部から底部付近にかけて1/3程	
第25図8	土師器 鉢	(12.5)	(24.8)	-	体部下半から口縁部にかけて緩やかに開き、口縁部は外反/全体に掛けてはいる	暗橙色を基調		口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後ナデ(スリップか)	貯蔵穴北のほぼ床面上	口縁部から底部付近にかけて1/5程	
第25図9	土師器 甕	(6.5)	(24.0)	-	口径が大きいことや口縁部直下の調整が横方向に施されることから、胴部のあまり張らない丸甕の可能性もあるが、ここでは長甕として扱うことにする	淡黄褐色	砂粒を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後横方向にナデ(スリップか)	住居東コーナーのほぼ床面上	口縁部から胴部上半にかけて1/6程	長甕
第25図10	土師器 甕	(10.7)	(17.0)	-	口縁部と胴部中位のほぼ同位置に最大径を測り、胴部上半から頸部にかけてはスムーズで、口縁部は外反	暗黄褐色を基調	茶褐色粒子を多く、黄褐色粒子を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後ナデ(スリップか)	カマド内及び住居北コーナーの覆土中から散在	口縁部から胴部中位にかけて1/2程	長甕
第25図11	土師器 甕	(13.2)	(18.5)	-	口縁部と胴部中位のほぼ同位置に最大径を測り、胴部上半から頸部にかけては横ナデによる弱い段をもち、口縁部は外反	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後斜方向にナデ(スリップか)	カマド内及び住居北コーナーの床面上から散在	口縁部から胴部中位にかけて1/4程	長甕
第25図12	土師器 甕	(18.1)	(19.0)	-	胴部中位に最大径を測り、口縁部は外反	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、茶褐色粒子を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後縦方向にナデ(スリップか)	住居北コーナーのほぼ床面上	口縁部から胴部中位にかけて1/3程	長甕
第25図13	土師器 甕	(15.3)	(18.4)	-	胴部中位に最大径を測り、胴部上半から頸部にかけてはスムーズであるが、途中に輪積み痕が顕著に残っている/口縁部は外反し、口唇部は外側が少し粘土が丸くめくれている/全体に厚手の土器	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後縦方向にナデ	住居北コーナーの柱穴付近の覆土中(床上約10cm)	口縁部から胴部中位にかけて1/5程	長甕
第25図14	土師器 甕	(20.3)	-	10.0	筒抜け式。胴部は長胴を呈する	淡黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子を僅かに含む	内面はへらナデ、外面はへら削り後縦方向にナデ(スリップか)	住居中央付近の床面上	胴部中位から底部にかけて1/3程	
第25図15	土師器 甕	(4.6)	-	7.8	単孔式で、焼成前の穿孔/穿孔は不整形であるが、およそ3.1×2.7cmの大きさをもち、底部には木葉痕が残る	明橙色	砂粒を多く、黄褐色粒子を僅かに含む	内面はへらナデ、外面はへら削り	カマド前面の床面上	底部のみ遺存	
第25図16	土製品	-	-	-	支脚/現存高11.5cm	暗茶褐色	混入物はほとんど含まれない	表面には粗いへら削り痕が残る	カマド右袖	破片	
第25図17	ミニチュア土器	3.2	3.1	1.2	体部中位に最大径を測り、口縁部は外反/体部中位に穿孔をもつことから、須恵器ハツウ形土器を模したものか	淡橙色	黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	口縁部内外面は軽い横ナデ、以下外面はへら削り	住居東コーナー付近の覆土中(床上約10cm)	完形品	
第25図18	石製品	-	-	-	砥石/長さ7.7cm・最大幅3.7cm・重さ61g/使用面は側面・下面を含め5面で、表裏面には使用時に付いたと思われる擦痕が観察される	-	-	-	覆土中	僅かに欠損	
第25図19	鉄製品	-	-	-	釘か鉄籤であろう/長さ3.7cm・最大幅0.9cm・重さ2.6g/断面長方形を呈する	-	-	-	覆土中	小破片	

(単位: cm)

第12表 133号住居跡出土遺物一覧(2)

第3章 検出された遺構と遺物

()は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第27図1	土師器 杯	(3.7)	(12.4)	—	口縁部と底部との境に稜をもち、口縁部は内傾／口唇部内面には幅3mmの太めの沈線／内面及び口縁部外面は赤彩	赤色	砂粒を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はへら削り	北西コーナーの柱穴内	口縁部から底部付近にかけて1/6程	比企型環
第27図2	土師器 杯	(4.2)	(10.6)	—	碗状の体部をもち、口縁部は若干くびれている	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子を僅かに含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はへら削り後軽くナデ	西壁寄りの覆土中(床上約20cm)	口縁部から底部付近にかけて1/4程	
第27図3	土師器 杯	4.0	(11.8)	—	口縁部が垂にゆがんでいる／口縁部と底部との境に横ナデにより弱い稜をもち、口縁部は直立する	暗黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り	北西コーナーの柱穴内及びその近くの床面上	1/2程	
第27図4	土師器 杯	(4.7)	(13.0)	—	口縁部と底部との境に稜をもち、口縁部は直立気味に外傾／口縁部内面に途中1段の弱い段がまわることから、有段口縁杯を模した土器か	暗褐色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り	貯蔵穴内	口縁部から底部付近にかけて1/6程	
第27図5	土師器 杯	(3.4)	(14.2)	—	口縁部と底部との境に稜をもち、口縁部は外反	暗黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子を僅かに含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はへら削り後ナデ	南西コーナーの西壁寄りの床面上	口縁部から底部付近にかけて1/6程	
第27図6	土師器 杯	(3.4)	(14.4)	—	口縁部と底部との境に稜をもち、口縁部は外反／内外面赤彩	暗褐色	砂粒を多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はナデ	北西コーナーの柱穴内及びその近くの床面上	口縁部から底部付近にかけて1/6程	
第27図7	土師器 杯	(5.5)	(13.6)	—	深身の土器で、口縁部と体部の境に段をもち、口縁部は内傾	淡黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面は指頭押捺による成形痕が残り、指紋が顕著に観察される	南東コーナーの覆土中(床上約15cm)	口縁部から体部中位にかけて1/5程	
第27図8	土師器 鉢	(8.3)	(23.8)	—	口縁部と体部上半との境に稜をもち、口縁部は外反	明褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後ナデ(スリップか)が施されると観察できるが、全体に磨耗しているため不明	貯蔵穴縁の床面上	口縁部から体部中位にかけて1/6程	
第27図9	土師器 鉢	17.9	(27.6)	5.0	口縁部と体部上半との境に稜をもち、口縁部は外反／底部から体部下半はかなり細身で、この時期の土器としては異例か	暗茶褐色を基調	砂粒を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後ナデ(磨き的)	北東コーナーの柱穴近くのほぼ床面上	1/4程	全体に煤けていることから、煮炊きに使用されたものか
第27図10	土師器 甌	(15.7)	26.9	—	11・12と同形であるが、胴部中位に把手をもつタイプ／把手は基部のみを残し欠落しているが、把手を貼付ける際の指によるナデの痕跡が花びら状に残る	明褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後縦方向にいいいにナデ(スリップか)	カマドすぐ右横のほぼ床面上	口縁部から胴部中位にかけて1/5程	
第27図11	土師器 甌	(15.0)	(23.0)	—	胴部は長胴を呈し、口縁部は外反	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後斜方向にナデ(スリップか)	北西コーナーの柱穴近くのほぼ床面上から散在	口縁部から胴部中位にかけて1/4程	
第27図12	土師器 甌	28.4	(27.0)	(7.2)	筒抜け式／胴部は長胴を呈し、口縁部は外反するが、途中弱い段が1段まわっている	淡褐色	砂粒を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後いいいにナデ(スリップか)	カマド周辺の床面上から散在的に出土	1/2程	
第27図13	土師器 甕	(15.2)	(10.1)	—	胴部が球形を呈し、頸部は細く直立気味に立ち上がり、口縁部は外反／口唇部外面は若干面取りが施され、粘土が僅かにめくれ複合口縁部を呈している／長頸壺か	暗黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子を僅かに含む	口頸部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後横方向にナデ(スリップか)	南西コーナーの柱穴近くの覆土中(床上約15cm)	口縁部から胴部上半にかけて1/5程	小型丸壺
第27図14	土師器 甕	(13.9)	12.3	—	胴部は球状を呈し、口縁部は外反	暗茶褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り	貯蔵穴内	口縁部から胴部下半にかけて4/5程	小型丸壺
第27図15	土師器 甕	12.5	(12.4)	7.0	口縁部と胴部上半のほぼ同位置に最大径を削り、胴部上半に膨らみをもち、口縁部は外反	淡黄褐色	砂粒を多く、金雲母を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後横方向にナデ(スリップか)	西壁寄りの覆土中(床上約20cm)	1/3程	小型丸壺

(単位: cm)

第13表 134号住居跡出土遺物一覧(1)

()は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第27図16	土師器 甕	(9.2)	12.4	-	「く」の字口縁を呈し、胴部上半に膨らみをもつ／内外面赤彩／胎土は比企型環に類似	暗赤褐色を基調	砂粒・小石を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後僅かにナデ（スリップか）	住居西半部のほぼ床面上から広く散在	口縁部から胴部下半にかけて2/3程	小型丸甕
第27図17	土師器 甕	20.7	15.4	8.0	「く」の字口縁を呈し、胴部中位に最大径を測る／一見、6世紀代の古いタイプと見間違ふ土器であるが、胎土には砂粒があまり含まれていないことから、在地系の製品ではないためであろう	全体に黒褐色	黄褐色粒子・砂粒・小石を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は胴部上半がヘラナデであるが、その痕跡はハケ目状を呈していることから、先端がさきくれ状の工具を使用しているものと思われる／外面の胴部中位以下はヘラ削り後粗く磨き調整が施され光沢を帯びる	貯蔵穴すぐ南の覆土中（床上約20cm）	4/5程	中型丸甕
第27図18	土師器 甕	(17.6)	14.6	-	胴部は球状を呈し、口縁部は外反	暗黄褐色を基調	砂粒を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ（スリップか）	住居西半部の覆土中（床上13～28cm）から広く散在	口縁部から胴部下半にかけて2/3程	中型丸甕
第27図19	土師器 甕	(15.2)	17.5	-	口縁部と胴部上半のほぼ同位置に最大径を測り、口縁部は外反	淡橙色	砂粒を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ（スリップか）	南東コーナーの覆土中（床上約18cm）	口縁部から胴部下半にかけて1/2程	小型丸甕
第28図20	土師器 甕	(19.8)	15.9	-	胴部中位に最大径を測り、口縁部は「コ」の字状／形態的に丸甕として扱ったが、胴部外面に煤の付着が観察できることから、煮炊き用として使われていると思われる	暗黄褐色	砂粒を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ（スリップか）が施されるが、さらにその後粗いヘラ磨きが施され光沢を帯びる	住居西半部の覆土中（床上約10cm）から散在	口縁部から胴部下半にかけて2/3程	大型丸甕
第28図21	土師器 甕	(13.6)	22.3	-	大型の丸甕で、口縁部は大きく外反／最大径は胴部上半に測るものと思われる	明棕色	砂粒を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後斜方向にナデ（スリップか）	南西コーナー近くの覆土中（床上約10cm）	口縁部から胴部中位にかけて1/3程	大型丸甕
第28図22	土師器 甕	(5.2)	(19.0)	-	「コ」の字口縁	淡橙色	砂粒を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は横方向にナデ（スリップか）	貯蔵穴内及びその近くの床面上	口縁部から胴部上半にかけて1/5程	大型丸甕
第28図23	土師器 甕	(10.0)	-	7.3	底部は平底で、胴部は球状を呈する	暗茶褐色を基調とするが、内面底部は煤けて黒色	砂粒を多く含む	内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ（スリップか）	西壁寄りの覆土中（床上約13～25cm）	胴部下半から底部にかけて1/3程	大型丸甕
第28図24	土師器 甕	(2.6)	-	7.7	大型品	暗茶褐色を基調	砂粒を多く含む	内面はヘラナデ、外面はヘラ削り	住居西半部の覆土中（床上約15cm）から散在	底部のみ4/5程	大型丸甕
第28図25	土師器 甕	(1.7)	-	5.8	底部に木葉痕	暗茶褐色を基調	砂粒を多く含む	内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ	貯蔵穴すぐ南の床面上	底部のみ遺存	大型丸甕
第28図26	土師器 甕	(12.7)	19.5	-	口縁部は大きく外反し、胴部は直線的に細長い	淡橙色を基調	砂粒を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後縦方向にナデ（スリップか）	住居西半部の床面上及び覆土中（床上約15cm）から散在	口縁部から胴部中位にかけて1/2程	長甕
第28図27	土師器 甕	(2.9)	-	6.6	-	暗茶褐色を基調	砂粒を多く含む	内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ	西壁寄りの覆土中（床上約15cm）	底部のみ4/5程	長甕
第28図28	土師器 甕	(6.7)	-	7.8	底部には木葉痕	外面は煤けており黒褐色であるが、内面は暗黄褐色を基調	砂粒・黄褐色粒子を含む	内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ（スリップか）	貯蔵穴内	胴部下半以下を1/3程	長甕
第28図29	土師器 甕	(12.6)	-	15.3	全体に「ハ」の字状を呈する脚台部であるが、裾部はさらに外反し開く	暗黄褐色	砂粒を多く含む	裾部内外面は横ナデ、脚柱部は内面がヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ（スリップか）	南西コーナーの柱穴内	脚台部のみほぼ完形品	台付甕

(単位：cm)

第13表 134号住居跡出土遺物一覧（2）

第3章 検出された遺構と遺物

()は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第28図 30~35	須恵器 甕	-	-	-	-	暗白色を 基調	-	内面はナデられ、外面には 平行叩き目痕が残る	覆土中	すべて胴部小 破片	30・31・ 33・34は 同一個体 か
第28図36	石製品	-	-	-	臼玉/外径0.8cm・穿径0.3cm・ 最大厚0.5cm・重量0.5g/て いねいに成形されておらず、 厚さも均一ではない/石質は 滑石	灰白色	-	-	覆土中	完形品	

第13表 134号住居跡出土遺物一覧(3)

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第30図1	土師器 甕	(32.8)	20.1	-	胴部上半に最大径を測り、口 縁部は「コ」の字状	淡橙色を 基調	砂粒を多く、 黄褐色粒子 ・小石を僅 かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以 下内面はヘラナデ、外面は ヘラ削り後胴部上半は横方 向、胴部中位~下半は縦方 向あるいは斜方向、底部付 近は横方向にナデ(スリッ プか)がていねいに施され、 さらにその後胴部全体に粗 いナデ(磨きの)	カマド内及 びその周辺 の床面上	底部を除き4 /5程	大型丸甕
第30図2	土師器 甕	(18.0)	-	-	大型の丸甕の胴部で、底部は 輪積み部分で剥落している	内面が濃 橙色、外 面が暗黄 褐色	砂粒を多く、 黄褐色粒子 ・茶褐色粒 子を僅かに 含む	内面はヘラナデ、外面はヘ ラ削り後ナデ(スリッ プか)	カマド内	胴部中位から 底部付近に かけて1/3程	大型丸甕
第30図3	土師器 甕	(4.6)	-	8.0	大型丸甕の底部破片と思われ る	暗黄褐色 を基調	砂粒を多く、 茶褐色粒子 を含む	内面はヘラナデ、外面はヘ ラ削り後ナデ(スリッ プか)	カマド内	胴部下半から 底部にかけ て2/3程	大型丸甕
第30図4	土師器 甕	(15.2)	(19.0)	-	胴部上半に最大径を測り、口 縁部は直立気味に外反	淡橙色を 基調	砂粒を多く、 金雲母を僅 かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以 下内面はヘラナデ、外面は ヘラ削り後粗いナデ(磨 きの)	北西コーナ ーの柱穴近 くの覆土中 (床上約23 cm)	口縁部から胴 部中位に かけて1/5程	大型丸甕
第30図5	土師器 甕	40.8	19.2	(7.0)	口縁部と胴部上半のほぼ同位 置に最大径を測り、胴部は直 線的に細長い、胴部上半に やや膨らみをもつ/胴部上半 から頸部への移行はスムーズ /口縁部は大きく外反	暗黄褐色 を基調	砂粒を多く、 黄褐色粒子 ・金雲母を 僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以 下内面はヘラナデ、外面は ヘラ削り後胴部全体に粗く 細長いナデ(磨きの)が施 され光沢を帯びる	カマド内	4/5強	長甕
第30図6	土師器 甕	(38.2)	16.8	-	5の土器に比べ、胴部上半の 膨らみがやや強い	暗橙色を 基調	砂粒を多く、 茶褐色粒子 ・小石を僅 かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以 下内面はヘラナデ、外面は ヘラ削り後縦方向にナデ (スリッ プか)がていね いに施され、さらにその後胴 部全体に粗く細長いナデ (磨きの)が施され光沢を 帯びる	カマド内	口縁部から底 部付近に かけて4/5程	長甕
第30図7	土師器 甕	(39.8)	18.2	(7.8)	5の土器に類似する器形	淡茶褐色 を基調と するが、 器面全体 が黒斑に より黒色	砂粒を多く、 黄褐色粒子 ・金雲母・ 小石を僅か に含む	口縁部内外面は横ナデ、以 下内面はヘラナデ、外面は ヘラ削り後縦方向にナデ (スリッ プか)がていね いに施され、さらにその後胴 部全体に粗く細長いナデ (磨きの)が施され光沢を 帯びる	カマド内	4/5程	長甕
第31図8	土師器 甕	(38.8)	18.0	-	胴部上半の膨らみが強く、胴 部下半以下がかなりスリムで ある	淡茶褐色 を基調	砂粒をやや 多く、黄褐 色粒子・金 雲母を僅か に含む	口縁部内外面は横ナデ、以 下内面はヘラナデ、外面は ヘラ削り後縦方向にナデ (スリッ プか)がていね いに施され、さらにその後胴 部全体に粗く細長いナデ (磨きの)が施され光沢を 帯びる	カマド内	口縁部から底 部付近に かけて3/4程	長甕
第31図9	土師器 甕	37.6	19.6	-	胴部上半の膨らみが弱く、口 縁部に最大径を測る土器であ る	暗橙色を 基調	砂粒を多く 含む	口縁部内外面は横ナデ、以 下内面はヘラナデ、外面は ヘラ削り後縦方向にナデ (スリッ プか)が施され、 さらにその後胴部全体に粗 く細長いナデ(磨きの)が 施され光沢を帯びる	カマド内	遺存度は2/3 程	長甕

(単位 cm)

第14表 135号住居跡出土遺物一覧(1)

()は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第31図10	土師器甕	(6.7)	(20.0)	-	口縁部は大きく外反	暗黄褐色	砂粒を多く、茶褐色粒子を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後縦方向にナデ(スリップか)	覆土中	口縁部から胴部上半にかけて1/4程	長甕
第31図11	土師器甕	(17.9)	-	6.4	胴部下半はスリム	暗黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ(スリップか)	カマド内	胴部中位以下を4/5程	長甕
第31図12	土師器甕	(13.8)	-	7.9	やや薄手の土器	暗赤褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後粗いナデ	カマド内	胴部下半以下は完形	長甕
第31図13	土師器甕	(16.1)	-	7.7	胴部下半は太身	暗黄褐色	砂粒・金雲母を含む	内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後粗いナデ	カマド内	胴部下半以下を2/3程	長甕
第31図14	土師器甕	(13.8)	-	7.8	胴部下半に幾分膨らみをもつ／色調は破片ごとに全く異なることから、遺存状態の違いが色調の変化をもたらすことを示す良好な資料である／大部分が黒く煤けている	暗黄褐色を基調	砂粒・金雲母を含む	内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後粗いナデ	カマド内	胴部下半以下を2/3程	長甕
第31図15	土師器甕	(14.0)	-	(7.5)	-	淡橙褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子を僅かに含む	内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後粗いナデ(スリップか)	カマド内及びその周辺の覆土中(床上約10cm)	胴部下半以下を1/3程	長甕

第14表 135号住居跡出土遺物一覧(2)

挿図・図版番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第34図1	須恵器坏蓋	3.6	(12.4)	-	天井部と口縁部の境に断面三角形の段を有し、口縁部は内湾気味に垂下する／天井部には窯壁材の付着と黒垢が観察される	灰褐色を基調とするが、口縁部は自然釉がかかり、薄緑色を呈する	黒色粒子・小石を含む	ロクロは左回転で、天井部外面は回転ヘラ削り調整／天井部内面は調整ではないかもしれないが、磨ぎ的の平滑面をもつ	貯蔵穴の上端テラス部からの出土	2/3程	
第34図2	土師器坏	3.3	(15.0)	-	口縁部と底部との境に稜をもち、口縁部は外反／口唇部内面には幅2mmの沈線／内面及び口縁部外面は赤彩／出土時の遺存状態が悪かったため、パラロイド液を含浸させ取り上げた	赤色	茶褐色粒子を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面は粗いヘラ削り	カマドすぐ右横のほぼ床面上	1/2程	比企型坏
第34図3	土師器坏	(3.0)	(13.9)	-	口縁部と底部との境に稜をもち、口縁部は外反／口唇部内面には幅2mmの沈線／内面及び口縁部外面は赤彩	赤色	黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面は粗いヘラ削り	貯蔵穴前面の床面上	口縁部から底部付近にかけて1/5程	比企型坏
第34図4	土師器坏	(4.3)	(12.0)	-	口縁部と底部の境に断面三角形の段をもち、口縁部は直立	黄褐色	砂粒をやや多く、黄褐色粒子を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り	カマドすぐ左横の床面上	口縁部から底部付近にかけて1/4程	
第34図5	土師器坏	(3.8)	(13.1)	-	口縁部と底部の境に稜をもち、口縁部は外反	淡橙褐色	砂粒をやや多く含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ	カマド内	口縁部から底部付近にかけて1/6程	
第34図6	土師器鉢	15.3	20.3	6.4	最小口径16.3cm／体部に膨らみをもち、口縁部は外反／全体に歪みが著しい土器	全体に煤けて黒褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ(スリップか)	カマドすぐ右横のほぼ床面上	ほぼ完形品	
第34図7	土師器鉢	16.8	(24.4)	8.0	6の土器より一回り大振りの土器	暗黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子・金雲母を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はていねいにヘラ削り後ナデ(スリップか)	貯蔵穴内	2/3程	
第34図8	土師器甕	12.7	18.0	5.0	単孔式／口縁部は緩く外反し、胴部から底部にかけて緩やかにすぼまる器形	暗橙褐色	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・小石を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ(スリップか)	貯蔵穴縁のテラス状の段部分からの出土	4/5強	小型品
第34図9	土師器甕	14.8	18.3	4.7	単孔式／8の土器に類似するが、胴部は僅かに長胴	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ(スリップか)	貯蔵穴内	ほぼ完形品	小型品

(単位: cm)

第15表 136号住居跡出土遺物一覧(1)

第3章 検出された遺構と遺物

()は現存値及び推定値

挿図・ 図版番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第34図10	土師器 甌	27.4	26.3	8.5	筒抜け式／口縁部に最大径を測り、胴部は底部にかけて緩やかにすぼまる	暗黄褐色を基調とするが、内面は全体に黒褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ後縦方向の細長い磨き、外面はヘラ削り後ナデ（スリップか）	貯蔵穴すぐ左横の床面上	4/5強	大型品
第34図11	土師器 甌	33.8	(23.5)	(10.5)	筒抜け式／口縁部に最大径を測り、胴部は上半にやや膨らみをもつが、長胴化が著しい	暗黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子・小石を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ後縦方向の細長い磨き、外面はヘラ削り後ナデ（スリップか）／胴部中位を中心に縄目圧痕が観察される	貯蔵穴付近の床面上	1/2程	大型品
第34図12	土師器 甌	32.4	(26.5)	8.6	筒抜け式／口縁部に最大径を測り、胴部は底部にかけて緩やかにすぼまる	暗黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ（スリップか）	カマド内及びその周辺から散在	1/2弱	大型品
第35図13	土師器 甌	15.9	13.4	8.0	胴部は球状を呈し、口縁部は大きく外反	暗黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後粗いナデが施されるが、部分的に未調整部分が観察され、指頭押捺による成形痕（指紋あり）が残る	貯蔵穴内	完形品	小型丸甌
第35図14	土師器 甌	(5.3)	(14.0)	—	胴部は球状を呈し、口縁部は大きく外反	暗黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ（スリップか）	貯蔵穴内	口縁部から胴部上半にかけて1/3程	小型丸甌
第35図15	土師器 甌	(10.3)	—	6.4	胴部は球状を呈し、底部は上底風／胴部下半には穿孔(径3mm)が1ヶ所観察でき、その穿孔は意識的あるいは使用痕ではないかもしれないが、焼成前に外面上方から付いたものと思われる	暗黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子を僅かに含む	内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ（スリップか）	カマド内	胴部上半から底部にかけて4/5程	小型丸甌
第35図16	土師器 甌	32.5	17.6	7.7	胴部中位に最大径を測り、口縁部は直立気味に外反	暗黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子・小石を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ていねいにナデ（スリップか）	貯蔵穴付近の床面上及びカマド内から散在	2/3程	大型丸甌
第35図17	土師器 甌	(19.4)	—	7.5	胴部は球状を呈する。	暗黄褐色を基調	砂粒を多く含む	内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ（スリップか）	貯蔵穴・カマド内及びその周辺の床面上から散在	胴部中位から底部にかけて2/3程	大型丸甌
第35図18	土師器 甌	(5.6)	—	7.5	底部はやや上底風	暗黄褐色	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ていねいにナデ（スリップか）	カマド右横の覆土中（床上約10cm）	胴部下半から底部にかけて3/4程	大型丸甌
第35図19	土師器 甌	(14.2)	22.0	—	他の長甌に比べ、太身の土器	全体に煤けており、暗茶褐色を基調	砂粒を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ（スリップか）	貯蔵穴左横の床面上	口縁部から胴部中位にかけて4/5程	長甌
第35図20	土師器 甌	(12.3)	18.5	—	口縁部は外反し、胴部は直線的	暗黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ（スリップか）	貯蔵穴内及びその周辺からの出土	口縁部から胴部中位にかけて4/5強	長甌
第35図21	土師器 甌	(10.7)	19.4	—	20の土器に比べ、口縁部の外反がやや強い／外面の胴部上半に粘土の付着が見られる	暗褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ（スリップか）	貯蔵穴付近からの出土	口縁部から胴部中位にかけて1/3程	長甌
第35図22	土師器 甌	37.5	18.2	6.9	口縁部と胴部中位のほぼ同位置に最大径を測り、胴部上半から頸部にかけては横ナデによる段をもち、口縁部は外反／カマド右袖粘土内から倒置に近い状態で出土したことから、カマド右袖部の補強材として使用された土器と考えられる	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ていねいにナデ（スリップか）	カマド右袖粘土内	ほぼ完形品	長甌
第36図23	土師器 甌	37.1	19.0	6.6	口縁部と胴部中位のほぼ同位置に最大径を測り、胴部上半から頸部にかけては横ナデによる段をもち、口縁部は外反／外面は口縁部から10cm程下を残し、全面に粘土が付着しており、カマド掛け口に設置された土器の可能性はある	暗黄褐色を基調	砂粒・黄褐色粒子をやや多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ていねいにナデ（スリップか）	カマド内	ほぼ完形品	長甌

(単位 cm)

第15表 136号住居跡出土遺物一覧(2)

()は現存値及び推定値

挿図・図版番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第36図24	土師器甕	35.6	18.0	(6.0)	口縁部と胴部中位のほぼ同位置に最大径を測り、胴部上半から頸部にかけての移行はスムーズで、口縁部は大きく外反	明橙色を基調	砂粒を多く、小石を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ていねいにナデ(スリップか)	貯蔵穴内	底部を僅かに欠損するのみで4/5強	長甕
第36図25	土師器甕	(35.0)	17.9	-	口縁部と胴部中位のほぼ同位置に最大径を測り、胴部上半から頸部にかけては横ナデによる弱い段をもち、口縁部は大きく外反/外面は口縁部の20cm程下を残し、全面に粘土が付着している/カマド内のカマド掛け口に設置された土器の可能性はある	明橙色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子・小石を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ(スリップか)	カマド内	ほぼ完形品	長甕
第36図26	土師器甕	37.3	17.5	(6.4)	胴部中位に最大径を測り、胴部上半から頸部にかけては横ナデによる段をもち、口縁部は大きく外反/外面はほぼ全面に粘土が付着している/カマド左袖部の補強材として使用された土器と考えられる	明橙色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子・小石を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ(スリップか)	カマド内を中心やや散在	2/3程	長甕
第36図27	土師器甕	36.5	18.2	6.6	胴部中位に最大径を測り、胴部上半から頸部にかけては横ナデによる弱い段をもち、口縁部は大きく外反/外面はほぼ全面に粘土が付着し、内面には広い範囲で炭化物の付着痕が観察される/カマド天井部の補強材として使用された土器と考えられる	明橙色を基調	砂粒を多く、茶褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ(スリップか)	カマド内	ほぼ完形品	長甕
第36図28	土製品	-	-	-	支脚/高さ14.1cm・上底径3.8cm・下底径7.0cm・重さ592g/中心部は穿孔されている	暗黄褐色を基調	砂粒を僅かに含む	表面には全面指頭による成形痕が観察される	カマド内の23の土器(長甕)のすぐ上からの出土	ほぼ完形品	
第36図29	土製品	-	-	-	支脚/現存高12.1cm・上底径5.0cm・重さ327g/中心部は穿孔されている	暗茶褐色を基調	砂粒を僅かに含む	表面には全面指頭による成形痕が観察される	カマド左袖	下底部(裾部)を欠損	
第36図30	石製品	-	-	-	紡錘車/高さ1.4cm・上底径2.1cm・下底径3.6cm・重さ26g/石質は滑石	黒色	-	外面にはていねいな磨き痕が観察される	貯蔵穴内	完形品	
第36図31	鉄製品	-	-	-	鉄製の鐵身部から頸部にかけての破片/長さ3.8cm・重さ1.6g/長頭片丸造柳葉式	-	-	-	覆土中	破片	
図版31-1-32	須恵器環蓋	-	-	-	天井部と口縁部の境に幅1mm程の細線がまわる	灰褐色	白色砂粒を僅かに含む	ロクロ成形	覆土中	口縁部小破片	湖西編年(Ⅲ-第1小期)

第15表 136号住居跡出土遺物一覧(3)

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第38図1	土師器環	4.6	12.4	-	体部は丸く、口縁部が短く外反/内面及び口縁部外面は赤彩	赤色	茶褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後僅かにヘラ磨き調整	南コーナーの柱穴内及びその近くの床面上	ほぼ完形品	初現段階の比企型環
第38図2	土師器環	5.6	12.7	-	底部と口縁部との境に段を有する/口縁部はやや内湾気味に直立/内面及び口縁部外面は赤彩/底部外面には性格不明であるが、傷状の細線が幅3cm・長さ6cmにわたり観察される	赤色	黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後ヘラ磨き調整	西コーナーの床面上	4/5強	須恵器環蓋模倣
第38図3	土師器環	(4.4)	(12.0)	-	底部と口縁部との境に弱い段を有する/口縁部はやや外傾し、全体に厚ぼったい感じのする土器/全面赤彩が施されると思われるが、剥落が著しく不明	赤色	砂粒をやや多く含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り	覆土中	1/6程	須恵器環蓋模倣

(単位 cm)

第16表 137号住居跡出土遺物一覧(1)

第3章 検出された遺構と遺物

()は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第38図4	土師器 環	5.2	13.6	—	底部と口縁部との境に段を有する／口縁部はやや内湾気味に外傾／全面黒色処理が施された黒色系土器／内面には放射状の暗文が描かれている	黒色	砂粒・小石を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後ヘラ磨き調整が施されるが、一部未調整部分も観察される	南コーナーの柱穴近くの床面上	ほぼ完形品	須恵器環蓋模倣
第38図5	土師器 高環	(4.6)	(15.4)	—	環部のみ破片で、環部は内湾気味に大きく開く／全面赤彩	赤色	砂粒・小石を含む	口縁部内外面は軽い横ナデ、以下内面はハケ目調整、外面はハケ目調整後ナデ	住居中央付近のほぼ床面上	環部を1/4程	
第38図6	土師器 高環	(4.1)	—	—	環部下半のみ破片／脚台部との接合部は若干ソケット状を呈している／全面赤彩	赤色	茶褐色粒子・砂粒を含む	内面はヘラナデ、外面はハケ目調整	住居中央付近の覆土中(床上約13cm)	環部下半を2/3程	
第38図7	土師器 甕	—	—	—	口縁部小破片／複合口縁を呈する「コ」の字口縁の甕であろう	暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒を含む	内外面は横ナデ	南東壁近くのほぼ床面上	小破片	
第38図8	土師器 甕	(5.9)	13.0	—	「く」の字口縁を呈する球胴甕／全面黒く煤けていることから、黒色系土器である可能性がある	黒色	茶褐色粒子・砂粒を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はハケ目調整	南コーナー付近のほぼ床面上及び覆土中	口縁部から胴部上半にかけて1/2程	
第38図9	土師器 甕	(7.4)	(18.0)	—	胴部上半に膨らみをもち、口縁部は外反／色調は黒褐色を基調とするため、黒色系土器の可能性はある	黒褐色	黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ	住居中央付近のほぼ床面上	口縁部から胴部上半にかけて1/6弱	
第38図10	土師器 甕	(34.8)	—	(7.3)	胴部はやや長胴化傾向にあり、中位に最大径を測る／口縁部は「く」の字口縁がやや間延びし、「コ」の字口縁に近い	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、茶褐色粒子・金雲母・小石を含む	口頭部内外面は横ナデ、以下内面は剥落が著しく図示できなかったがヘラナデ／外面はヘラ削り後幅広のヘラ磨き調整が施され光沢を帯びる	南コーナーの貯蔵穴内	2/3程	

第16表 137号住居跡出土遺物一覧(2)

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第41図1	土師器 環	3.3	(13.8)	—	口縁部は短くツンと外反し、体部は上半に稜をもつ偏平タイプ／内面及び口縁部外面は赤彩	赤色	砂粒・小石を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後ヘラ磨き調整	住居中央の覆土中(床上約10cm)	1/5程	比企型環
第41図2	土師器 環	4.0	(14.2)	—	1に比べ、口縁部の外反が緩やかで深身タイプ／内面及び口縁部外面は赤彩	赤色	砂粒・小石を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	北東コーナーの覆土中(床上約15cm)	1/3程	比企型環
第41図3	土師器 環	4.3	(14.6)	—	2よりも大型でやや深身／内面及び口縁部外面は赤彩	赤色	黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後ナデ調整であろう	カマド左横の北壁近くのほぼ床面上	1/3程	比企型環
第41図4	土師器 環	(4.0)	(12.8)	—	底部と口縁部との境にはヘラ削りにより明瞭な稜が形成されているため、有段環との折衷様である可能性がある／内面及び口縁部外面は赤彩	赤色	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り	住居中央の床面上	1/6程	比企型環
第41図5	土師器 環	5.0	15.4	—	大型で深身タイプ／内面及び口縁部外面は赤彩	赤色	砂粒・小石を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	西壁近くの床面上	2/3程	比企型環
第41図6	土師器 環	5.0	(15.0)	—	底部と口縁部との境に弱い段を有する／口縁部は外傾するが、途中に弱い稜が1段まわっている／内外面底部を除き赤彩	赤色	砂粒・小石を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り	覆土中	1/2弱	大型須恵器環蓋模倣
第41図7	土師器 環	4.2	(18.4)	—	底部と口縁部との境に段を有する／口縁部は大きく外反し、体部は偏平／赤彩は全体の色調が赤褐色を呈しているため、やや範囲の確認が難しいが、内面及び口縁部外面に施されると考えられる	赤色	黄褐色粒子・小石を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後ヘラ磨き調整	住居中央からやや東壁寄りのほぼ床面上	1/3程	超大型須恵器環蓋模倣
第41図8	土師器 甕	(16.0)	7.7	—	長頸壺として扱ったが、須恵器環形土器の模倣品である可能性がある／口頭部は細長く直線的に外傾し、口縁部は横ナデにより若干直立気味に作られている	淡橙色	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	口頭部内外面は横ナデが、外面にはその後縦方向の粗いヘラ磨き調整、以下胴部内面は上半部に指頭押捺による成形痕が観察され、全体にヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ(スリップか)	南西コーナーの柱穴内及び覆土中(床上約25cm)	口縁部から底部付近にかけて2/3程	

(単位: cm)

第17表 140号住居跡出土遺物一覧(1)

()は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第41図9	土師器 甕	13.0	12.9	6.0	胴部は球形を呈し、口頸部は外反/外面は赤彩されると思われるが、不鮮明であるため図示できなかった	淡茶褐色を基調	砂粒・小石を多く、黄褐色粒子を僅かに含む	口頸部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り	カマド内	ほぼ完形品	小型丸甕
第41図10	土師器 甕	(5.1)	(20.6)	-	複合口縁を呈する口縁部は大きく外反	暗橙色を基調	砂粒を多く、茶褐色粒子・小石を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り	住居中央付近の覆土中(床上約34cm)	口縁部から胴部上半にかけて1/8程	
第41図11	土師器 甕	(13.8)	(19.1)	-	胴部から口縁部にかけて緩やかに広がり、最大径は口縁部に測る	暗黄褐色を基調	茶褐色粒子・砂粒を含む	内面はヘラナデ後縦方向の細長い磨き、外面はヘラ削り	北東コーナーの床面上	口縁部から胴部中位にかけて1/5程	
第41図12	土師器 甕	(19.3)	24.0	-	接合できなかったが、15と同一個体か/大型で、胴部は球状を呈し、最大径は胴部中位に測り、口縁部は直立気味に外反/外面及び内面口縁部は赤彩されるものと思われるが、不鮮明であるため図示できなかった	暗赤褐色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子・金雲母を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラナデ/ヘラナデの工具は、ヘラの先端が平坦なものではなく、ささくれ状を呈したものと考えられる	北東コーナーの柱穴付近のほぼ床面上	口縁部から胴部中位にかけて1/2程	大型丸甕
第41図13	土師器 甕	(5.0)	(18.0)	-	「く」の字口縁を呈する	暗橙色を基調	砂粒を多く、茶褐色粒子を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り	覆土中	口縁部から胴部上半にかけて1/4弱	球胴甕か
第41図14	土師器 甕	(9.2)	(20.2)	-	長胴化が完成した長甕で、胴部から口縁部への移行はスムーズで口縁部は外反/不鮮明であるため、図示できなかったが、内外面赤彩の可能性ある	暗赤褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ(スリップか)	住居中央付近の覆土中(床上約13~20cm)からやや散在	口縁部から胴部上半にかけて1/3弱	長甕
第41図15	土師器 甕	(27.2)	-	8.8	12と同一個体と思われる/球状を呈する胴部は中位に最大径を測る/外面には赤色塗料の付着が観察できるため、外面全面は赤彩が施されるものと思われるが、不鮮明であるため図示できなかった	暗赤褐色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子・金雲母を僅かに含む	内面はヘラナデ、外面はヘラナデ後部分的に粗いヘラ磨き調整/ヘラナデは、一見ハゲ目調整であるが、工具は、ヘラの先端が平坦なものではなく、ささくれ状を呈したものと考えられる	北東コーナーの柱穴付近のほぼ床面上	口縁部から胴部中位にかけて1/2程	大型丸甕
第41図16	須恵器 高坏	-	-	-	小破片であるため、器種の特定も困難であるが、ここでは高坏の坏部として扱うこととする	灰褐色	黒色粒子を僅かに含む	内面はカキ目調整、外面はナデ調整	覆土中	坏部を1/3程	

第17表 140号住居跡出土遺物一覧(2)

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第43図1	土師器 坏	4.5	(12.8)	-	口縁部と底部との境には弱い段をもち、外傾する口縁部途中にも数条の稜がまわる/内面及び口縁部外面はやや不鮮明であるが赤彩が施される	赤色	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り	貯蔵穴内	1/3程	赤色有段坏
第43図2	土師器 坏	4.9	13.1	-	口縁部と底部との境には段をもち、外傾する口縁部途中にも1段の段がまわる/全体に薄ぼんやりと黒く煤けていることから、黒色系土器と考えられる	黒色	砂粒を多く、茶褐色粒子・金雲母を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデが施されるが、部分的に未調整部分である指頭押捺による成形痕が観察される	南東コーナーの柱穴近くの床面上	3/4程	有段口縁坏
第43図3	土師器 坏	5.4	15.1	-	大型の深身タイプ/口縁部と底部との境には稜をもち、口縁部は外傾/底部内面には不鮮明であるが放射状の暗文であるうか	明褐色	砂粒を多く、茶褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ(スリップか)	入口凸堤部分の直上	ほぼ完形品	
第43図4	土師器 高坏	6.7	11.6	7.9	小型の高坏/坏部は底部と口縁部との境に稜をもち、口縁部は外傾/脚台部は短めで「ハ」の字状を呈する/坏部の内面及び口縁部外面は不鮮明であるが赤彩が施される	赤色	砂粒を多く、黄褐色粒子・小石を僅かに含む	内面及び口縁部外面が横ナデ、以下外面はヘラ削り/脚台部は内面裾部及び外面は横ナデ、内面脚柱部はヘラ削り	貯蔵穴内	4/5強	
第43図5	土師器 壺	(6.0)	9.1	-	長頸壺か/頸部は直線的に直立し、口縁部は僅かに外傾/内外面は不鮮明であるが赤彩が施される	赤色	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面は粗いヘラ磨き調整	カマド左横の覆土中(床上5~13cm)	口頸部のみ2/3程	
第43図6	土師器 鉢	(11.7)	22.4	-	体部は半球状を呈し、口縁部は直立	内外面が黒く煤け、全体に暗茶褐色	砂粒を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラナデが施されるが、未調整部分の指頭押捺による成形痕が残る	カマドすぐ左横のほぼ床面上	口縁部から底部付近にかけて4/5程	
第43図7	土師器 甕	(25.4)	(18.4)	-	口縁部と胴部上半のはほぼ同位置に最大径を測り、胴部上半から頸部にかけては横ナデによる段をもち、口縁部は大きく外反	暗黄褐色を基調とするが、全体に黒く煤けている	砂粒を多く、黄褐色粒子・小石を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後胴部下半を中心に縦方向に細長いヘラ磨き調整	貯蔵穴内	口縁部から胴部下半にかけて1/3程	長甕

(単位:cm)

第18表 141号住居跡出土遺物一覧(1)

第3章 検出された遺構と遺物

()は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第43図8	土師器 甕	(27.2)	(23.0)	-	胴部中位に最大径を測り、口縁部は大きく外反	暗黄褐色	砂粒を多く、茶褐色粒子・小石を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後にナデ(スリップか)	カマド前面の床面上	口縁部から底部付近にかけて1/3程	中型丸甕
第43図9	土師器 甕	(21.0)	-	7.3	胴部は球状を呈し、胴部最大径は中位に測る	明橙色	砂粒を多く、黄褐色粒子・小石を含む	胴部は内面がヘラナデ、外面はヘラ削り後胴部上半を中心にナデ(スリップか)	北東コーナーの柱穴内	胴部上半から底部にかけて1/3程	中型丸甕

第18表 141号住居跡出土遺物一覧(2)

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第45図1	土師器 環	5.1	12.2	5.7	体部から口縁部にかけては内湾し、口縁部は直立/外面口縁部から底部にかけてタール付着物あり/用途は灯明皿か	淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はナデ調整、未調整部分として指頭押捺による成形痕が観察される	北東コーナーの柱穴内	2/3程	
第45図2	土師器 甕	(13.8)	-	6.0	長甕であるが、胴部下半に膨らみをもつ	外面を中心に黒く煤けており、黒色	砂粒を多く含む	内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ	北東コーナーの覆土中(床上約14cm)	胴部下半以下を1/2程	長甕
第45図3	土師器 甕	(28.2)	19.4	-	口縁部と胴部上半のはほぼ同位置に最大径を測り、胴部上半から頸部にかけての移行はスムーズで、口縁部は外反	外面が全体に黒く煤けており、黒褐色を基調	砂粒・金雲母を多く、黄褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はハケ目調整、外面はヘラ削り/ハケ目調整は先端が平坦なものではなく、ささくれ状のもの	北東コーナーの覆土中(床上約14cm)	口縁部から胴部下半にかけて1/2程	長甕
第45図4	土師器 甕	(16.7)	-	(10.5)	筒抜け式/胴部下半は僅かに膨らみをもつ	暗黄褐色	砂粒を多く、茶褐色粒子・金雲母・小石を含む	内面はヘラナデ後縦方向に粗いヘラ磨き調整、外面はヘラ削り	貯蔵穴内	胴部下半以下を1/3弱	
第45図5	土師器 甕	-	-	-	内外面の縦方向に粘土紐が貼付けられている/粘土貼付内の断面に亀裂があることから、破損部の補修痕か/粘土紐には顕著に指頭押捺痕が残る	暗黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	内外面横ナデ	貯蔵穴内	小破片	長甕

第19表 142号住居跡出土遺物一覧

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第47図1	土師器 甕	(8.2)	-	-	胴部下半は輪積痕で剥離/外面の輪積接合部分には指頭押捺による成形痕が残る、指紋も観察される	暗橙色	砂粒を多く、金雲母を含む	内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ	南東壁近くのほぼ床面上	胴部下半のみを1/2弱	丸甕
第47図2	ミニチュア土器	(3.0)	-	-	碗形土器を模したものと考えられる	暗黄褐色を基調	砂粒を多く含む	内外面指頭による軽いナデが施される程度であるが、外面体部下半には軽いヘラ磨き調整	覆土中	口縁部から体部下半にかけての小破片	
第47図3	鉄製品	-	-	-	火打金か/長さ2.7cm・最大幅2.8cm・厚さ0.5cm・重さ9.1g/上端は山形の曲線を呈する	-	-	-	南西壁近くの覆土中(床上約24cm)	小破片	
第47図4	鉄製品	-	-	-	鉄釘か/長さ4.2cm・幅0.8cm・重さ6.1g/表面には錆着した木片が観察される	-	-	-	住居中央よりやや西に寄った覆土中(床上23cm)	小破片	
第47図5	鉄製品	-	-	-	鉄釘か/長さ6.2cm・最大幅1.3cm・重さ20.4g	-	-	-	南コーナーの柱穴近くのほぼ床面上	小破片	

第20表 143号住居跡出土遺物一覧

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第46図1	土師器 環	-	-	-	体部が丸く、口縁部が短く外反/内外面赤彩	赤色	茶褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内外面横ナデ	覆土中	小破片	初現段階の比企型環
第46図2	土師器 環	-	-	-	底部と口縁部との境に段を有する/口縁部は外傾/内面及び口縁部外面は赤彩	赤色	茶褐色粒子を僅かに含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はナデ	貯蔵穴すぐ左縁の1Mと重複部	小破片	
第46図3	土師器 甕	(5.2)	(16.8)	-	口縁部は複合口縁を呈する	暗黄褐色	黄褐色粒子・金雲母・砂粒を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はハケ目調整	北東コーナーのほぼ床面上	口縁部部のみの1/5程	
第46図4	土師器 甕	(9.9)	-	10.0	筒抜け式/底部から胴部にかけて直線的に開く	暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒・小石を含む	内外面はヘラナデ	貯蔵穴すぐ北縁	胴部下半のみを1/3程	

(単位: cm)

第21表 144号住居跡出土遺物一覧(1)

()は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第46図5	須恵器壺	(11.7)	-	-	胴部最大径19.0cm/底部外面に高台の剝離痕が残る、さらに接合面を強化するための細線が施されていることから、高台付の壺と考えられる/底部は丸底で、体部は上半が内傾し、全体に算盤玉状を呈する/文様は体部上半に櫛歯状工具による横位羽状の連続刺突文が施文	灰褐色	白色の砂粒・小石を多く含む	外面は格子叩き後弱いナデ(カキ目調整)/内面は体部がナデ、底部は当て道具痕である青海波が残る	北東コーナーのほぼ床面上	高合部は欠損するが、体部上半以下を1/2程	

第21表 144号住居跡出土遺物一覧(2)

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第48図1	土師器環	3.9	(12.0)	-	口縁部と底部との境に稜をもち、口縁部は直立/口唇部内面には幅1mmの細い沈線/内面及び口縁部外面は赤彩	赤色	赤褐色粒子・砂粒を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り	カマド前面のほぼ床面上	1/5程	比企型環
第48図2	土師器環	(3.8)	(13.9)	-	口縁部と底部との境には段をもち、口縁部は内傾/色調は暗黄褐色を基調とするが、全体に薄ぼんやりと黒く煤けていることから、全面黒彩の黒色系土器の可能性ある	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後ナデ(スリップか)	覆土中	1/3弱	
第48図3	土師器環	5.4	13.6	-	深身タイプ/口縁部と底部との境には段をもち、口縁部は内傾	淡橙色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り	カマド前面の床面上	ほぼ完形品	
第48図4	土師器甕	(5.6)	(19.6)	-	口縁部は大きく外反	全体に煤けており、黒褐色	砂粒をやや多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は斜方向にナデ(スリップか)	貯蔵穴内	口縁部から胴部上半にかけて1/6程	長甕
第48図5	銅製品	-	-	-	用途不明品/刀剣などの鍔(はばき)のように環状を呈するものか/実測上面には鋳留用の穿孔をもつ/長さ3.2cm・幅1.5cm・厚さ0.1cm・重さ8.3g	-	-	-	覆土中	ほぼ完形品	

第22表 145号住居跡出土遺物一覧

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第50図1	土師器環	3.0	(12.0)	-	口縁部と底部との境に稜をもち、口縁部は外反/口唇部内面には幅3mmの沈線/内面及び口縁部外面は赤彩	赤色	赤褐色粒子・黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り	南東コーナーの柱穴近くの床面上	2/3程	比企型環
第50図2	土師器壺	12.2	8.8	6.4	小型の直口壺か/胴部上半に最大径を測り、底部は一度屈曲し稜をもつ丸底/全面黒色処理が施される黒色系土器と思われる	黒色	赤褐色粒子・黄褐色粒子・砂粒を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後緻密なヘラ磨き調整	貯蔵穴内	ほぼ完形品	
第50図3	土師器甕	(9.0)	(18.8)	-	胴部上半から頸部にかけてはスムーズで、口縁部は大きく外反	暗黄褐色	砂粒をやや多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ(スリップか)	入口凸堤及びその近くの覆土中(床上約16cm)	口縁部から胴部上半にかけて1/5程	長甕
第50図4	土師器甕	(8.8)	(20.9)	-	胴部上半から頸部にかけてはスムーズで、口縁部は大きく外反	淡橙色	胎土には砂粒をやや多く、黄褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ(スリップか)	入口凸堤及びその近くの覆土中(床上約13cm)	口縁部から胴部上半にかけて1/4程	長甕
第50図5	土師器甕	(39.3)	20.6	-	口縁部と胴部上半のほぼ同位置に最大径を測り、胴部上半から頸部にかけては横ナデによる弱い稜をもち、口縁部は大きく外反	暗黄褐色を基調とし、胴部上半以下は二次焼成により黒褐色	砂粒をやや多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面は斜方向にヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラ磨き調整	貯蔵穴内及び北西コーナーのほぼ床面上	口縁部から胴部下半にかけて1/2程	長甕
第50図6	土師器甕	(25.7)	20.2	-	口縁部と胴部中位のほぼ同位置に最大径を測り、胴部上半から頸部にかけてはスムーズ/口縁部は外反/胴部上半以下は剥落しているが、粘土の付着痕が観察/出土状態から補強材か	暗黄褐色を基調	砂粒を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	カマド左袖部分から倒置した状態で出土	口縁部から胴部下半にかけて1/2程	長甕
第50図7	土製品	-	-	-	支脚/現存高9.1cm・幅5.5cm	暗茶褐色	混入物をほとんど含まない	表面には成形痕である粗い平坦面が残る	住居中央付近の覆土中(床上約10cm)	下端部分を欠損	

(単位: cm)

第23表 146号住居跡出土遺物一覧

第3章 検出された遺構と遺物

()は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	備考
第51図1	土師器 環	4.1	(13.0)	—	口縁部と底部との境に稜をもち、口縁部は外反/口唇部内面には幅2mmの沈線/内面及び口縁部外面は赤彩	赤色	砂粒・小石を僅かに含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はへら削り	カマド右横の覆土中(床上約6cm)	1/2程	比企型環
第51図2	土師器 環	(2.6)	(11.4)	—	底部と口縁部との境に弱い段を有する須恵器環蓋模倣/口縁部はやや外傾する/内面及び口縁部外面は赤彩	赤色	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はへら削り	覆土中	口縁部から底部にかけて1/8程	
第51図3	土師器 環	4.9	(12.6)	5.6	底部は平底を呈し、体部から口縁部にかけては内湾/口縁部は僅かに直立	暗黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り、口縁部直下には未調整部分の指頭押捺による成形痕が観察される	貯蔵穴内	2/3程	

第24表 147号住居跡出土遺物一覧

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	分類及び備考
第55図1	土師器 環	(3.1)	(12.0)	—	比企型環/口縁部と底部との境に弱い沈線により作出された稜をもち/口唇部内面には幅2mmの沈線/外面底部を除き赤彩	赤色	赤褐色粒子・砂粒を含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はへら削り後軽いナデ	南東コーナーの柱穴近くの覆土中(床上約20cm)	1/6程	A類
第55図2	土師器 環	3.9	13.8	—	口縁部と底部との境には明瞭な段をもち、口縁部は直立/全面黒色処理が施される黒色系土器	黒色	赤褐色粒子・白色粒子・石英・砂粒を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り	カマド右横の床面上	ほぼ完形品	B類
第55図3	土師器 環	5.0	13.2	—	2の土器に比べ深身で口縁部がやや内傾する器形であるが、調整・胎土・黒色処理など酷似する土器/全面黒色処理が施される黒色系土器	黒色	赤褐色粒子・白色粒子・石英・砂粒を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下外面へらナデ、外面はへら削り	カマド右横の床面上	ほぼ完形品	
第55図4	土師器 環	4.6	14.8	—	口縁部と底部との境には段をもち、口縁部は外傾/全面黒色処理が施される黒色系土器	黒色	砂粒を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後軽いナデ	カマド右横の床面上	ほぼ完形品	C1類
第55図5	土師器 環	5.0	14.9	—	口縁部と底部との境には段をもち、口縁部は外傾/全面黒色処理が施される黒色系土器	黒色	砂粒を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後軽いナデ	カマドすぐ右横のほぼ床面上	ほぼ完形品	
第55図6	土師器 環	4.3	13.8	—	口縁部と底部との境には段をもち、口縁部は直立/全面黒色処理が施される黒色系土器	黒色	砂粒を多く、黄褐色粒子・金雲母を僅かに含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はへら削り後軽いナデ、有段直下には指頭による弱い押捺痕が観察される	カマド右横のほぼ床面上	ほぼ完形品	
第55図7	土師器 環	4.4	14.6	—	口縁部と底部との境には段をもち、口縁部は外傾/全面黒色処理が施される黒色系土器	黒色	砂粒を多く含む	内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はへら削り後軽いナデ	住居中央の床面上	ほぼ完形品	
第55図8	土師器 環	3.7	12.7	—	口縁部と底部との境には段をもち、口縁部は直立/全面黒色処理が施される黒色系土器	黒色	砂粒を多く、橙色粒子を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後軽いナデ	西壁寄りのほぼ床面上	ほぼ完形品	C2類
第55図9	土師器 環	4.4	13.0	—	口縁部と底部との境には弱い段をもち、口縁部は直立	淡橙色	砂粒を多く、黄褐色粒子を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後軽いナデ	貯蔵穴内及びその周辺のほぼ床面上	ほぼ完形品	D1類
第55図10	土師器 環	5.0	14.2	—	口縁部と底部との境には弱い段をもち、口縁部は直立/全面がうすく黒く煤けていることから、黒色系土器である可能性あり	黒褐色	砂粒を多く、橙色粒子を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後軽いナデ	南東コーナーの覆土中(床上約20cm)	1/3程	
第55図11	土師器 環	3.2	10.5	—	口縁部と底部との境には段をもち、口縁部は短く直立	暗黄褐色	砂粒を多く、茶褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後ナデ	北西コーナーの柱穴内	完形品	D2類
第55図12	土師器 環	5.4	12.2	—	深身のもの/口縁部と底部との境には稜をもち、口縁部は短く外傾	淡橙色	砂粒を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後ナデ	住居中央の床面上	完形品	E1類
第55図13	土師器 環	(4.5)	(13.4)	—	深身のもの/口縁部と底部との境には稜をもち、口縁部は短く直立	暗黄褐色	砂粒を多く、茶褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後軽いナデ	貯蔵穴内	口縁部から体部下半にかけて1/5程	
第55図14	土師器 環	(6.1)	(14.0)	—	深身のもの/口縁部と底部との境には稜をもち、口縁部は短く外傾	暗黄褐色	砂粒・茶褐色粒子を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後ナデ	カマド燃焼部からの出土	口縁部から体部下半にかけて1/4程	
第55図15	土師器 環	7.2	13.4	—	深身のもの/口縁部と底部との境には稜をもち、口縁部は短く直立	暗黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後ナデ	貯蔵穴内	ほぼ完形品	

(単位 cm)

第25表 148号住居跡出土遺物一覧(1)

()は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	分類及び備考
第55図16	土師器 環	6.3	13.5	—	深身のもの／口縁部と底部との境には稜をもち、口縁部は直立気味に外反	淡橙色	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ	貯蔵穴内	2/3程	E1類
第55図17	土師器 環	4.2	12.4	—	口縁部と底部との境には稜をもち、口縁部は外反／底部には木葉痕が残る	暗黄褐色	砂粒・茶褐色粒子を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後軽いナデ	南東コーナーの覆土中(床上約14cm)	完形品	E2類
第55図18	土師器 環	4.9	13.4	—	口縁部と底部との境には弱い稜をもち、口縁部は外反	暗黄褐色	砂粒・茶褐色粒子を多く、黄褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後軽いナデ	北東コーナーの柱穴近くの床面上	ほぼ完形品	
第55図19	土師器 環	4.8	12.8	—	口縁部と底部との境には稜をもち、口縁部は内傾	淡橙色	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面は粗いヘラ磨き調整、外面はヘラ削り後軽いナデ	カマド右横の床面上	完形品	E3a類
第55図20	土師器 環	4.5	13.0	—	口縁部と底部との境には稜をもち、口縁部は内傾	暗黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ	カマド右横のほぼ床面上	4/5強	
第55図21	土師器 環	4.9	14.2	—	やや大振りの土器／口縁部と底部との境には稜をもち、口縁部は内傾	淡橙色	砂粒を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後軽いナデ	カマド右横の床面上	完形品	
第55図22	土師器 環	4.2	11.5	—	口縁部と底部との境には稜をもち、口縁部は内傾	暗黄褐色	砂粒・茶褐色粒子を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ていねいに全面ナデ	南西コーナーの柱穴内	4/5強	E3b類
第55図23	土師器 環	4.7	11.5	—	口縁部と底部との境には稜をもち、口縁部は内傾	暗黄褐色	砂粒を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後軽いナデ	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後軽いナデ／外面の口縁部直下には僅かに無調整部分が観察される	住居中央の床面上	1/4程	
第55図24	土師器 環	5.2	8.0	—	小振りの土器／口縁部と底部との境には稜をもち、口縁部は内傾	暗黄褐色	砂粒を多く、茶褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り	カマドすぐ左横の床面上	完形品	E3c類
第55図25	土師器 環	6.0	13.8	6.3	底部は上げ底状の平底／底部から口縁部にかけてやや内湾気味に外傾早期の段階でF類に分類してしまったが、製作技術上において粗雑品の26・27などの土器と比べると良品であるため、本来E類に分類すべきか	暗黄褐色	砂粒を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ナデ	貯蔵穴内	完形品	F1a類
第55図26	土師器 環	5.7	11.0	4.8	口縁部がきれいな円形にならず歪んでいる／底部はきれいでないが平底／底部から口縁部にかけて緩やかに内湾	暗黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は無調整で、成形痕である指頭による押捺痕と粘土の輪積み痕が全面に観察される	カマド右横の床面上	完形品	F1b類
第55図27	土師器 環	6.2	12.1	—	口縁部がきれいな円形にならず歪んでいる／底部はきれいでないが平底／底部はやや膨らみを有し、口縁部はゆるく外反	暗茶褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は底部がヘラ削りされ平底状に作出されるが、体部は僅かにナデられるが、成形痕である指頭による押捺痕が残り、指紋も観察される	カマド右横の床面上	完形品	
第55図28	土師器 環	5.9	13.2	5.4	口縁部と底部との境には稜をもち、口縁部は直立／底部は平底／底面には木葉痕が残る／早期の段階でF類に分類してしまったが、製作技術上において粗雑品の26・27などの土器と比べると良品であるため、本来E類に分類すべきか	淡橙色	砂粒を多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は底部がヘラ削り	貯蔵穴内	遺存度は4/5	F2a類
第55図29	土師器 環	5.4	12.8	5.6	口縁部がきれいな円形にならず歪んでいる／底部はきれいでないが平底	暗茶褐色	砂粒を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は底部がヘラ削りが施され平底状に作出されるが、体部はヘラ削りが施されず、直接ナデ	貯蔵穴内及びその周辺からの出土	1/2程	
第55図30	土師器 環	(4.3)	(10.1)	—	口縁部がきれいな円形にならず歪んでいる／体部から口縁部にかけて内湾	暗黄褐色	砂粒を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はハケ目状の軽いナデ、外面は底部がヘラ削りが施されるが、体部は縦方向に粗いハケ目痕が僅かに残るが、指頭による成形が加えられる	カマド前面の覆土中(床上約30cm)	口縁部から体部下半にかけて1/5程	F2b類

(単位: cm)

第25表 148号住居跡出土遺物一覧(2)

第3章 検出された遺構と遺物

()は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	分類及び備考
第55図31	土師器 杯	3.2	10.2	8.0	口縁部がきれいな円形にならず歪んでいる／器高が低く、底部から直接外反し口縁部に至る／平底の底部には木葉痕が残る	淡橙色	砂粒を多く含む、黄褐色粒子を含む	内面及び外面口縁部は横ナデが施され、外面は底部がへら削りが施され、体部は縦方向に粗いハケ目調整が僅かに残るが、指頭による成形が加えられる	カマド右横の床面上	完形品	F3類
第55図32	土師器 高杯	(5.6)	—	—	「ハ」字状を呈する脚台部／杯部内面と脚台部外面は赤彩	赤色	黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	杯部内面及び脚台部内面はへらナデ、脚台部外面は横方向にナデ、縦方向にへら削り痕	住居中央付近の覆土中(床上約15cm)	1/3程	
第55図33	土師器 甕	11.3	9.8	—	最大径を胴部中位にもち、口縁部は短く外反／底部は平底気味に作られ安定感がある	淡橙色	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後横あるいは斜方向にナデ	カマドすぐ左横の覆土中(床上約12cm)	2/3程	小型丸甕
第55図34	土師器 甕	12.0	8.5	—	33の土器に比べ、球胴を呈し、頸部はすぼまる／底部はやや平底気味に作られている	暗黄褐色	砂粒・黄褐色粒子・茶褐色粒子を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後横方向にナデ	カマド右横の床面上	完形品	小型丸甕
第55図35	土師器 鉢	9.7	(22.0)	—	底部から口縁部にかけて内湾／底部は明確な平底ではないが、やや平らに作られている	淡橙色	砂粒・茶褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後ナデ	貯蔵穴内及びカマド周辺の覆土中(床上5～34cm)から散在	遺存度は1/5程	
第55図36	土師器 鉢	17.4	—	8.9	底部から胴部にかけて緩やかに外傾／口縁部は僅かに外反	暗黄褐色を基調	粒・茶褐色粒子を多く、黄褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後ナデ	貯蔵穴近くの覆土中(床上約10cm)	2/3程	
第55図37	土師器 鉢	17.2	25.0	8.7	底部から胴部にかけては内湾し、口縁部は外反／全面黒色処理が施される黒色系土器と思われる	全体に黒く煤けており、黒褐色	砂粒・黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後斜方向にナデ	西壁寄りの床面上	ほぼ完形品	
第56図38	土師器 瓶	17.4	18.8	5.0	単孔式／底部から口縁部にかけて緩やかに外傾する小型の鉢タイプ／底部に木葉痕を残す	淡橙色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後縦方向の粗いナデ	貯蔵穴内	完形品	小型品
第56図39	土師器 瓶	28.9	26.8	9.5	筒抜け式／底部から口縁部にかけて緩やかに開き、口縁部は大きく外反	淡橙色	砂粒を多く、黄褐色粒子を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後縦方向にナデ	カマドすぐ右横の床面上	4/5強	大型品
第56図40	土師器 瓶	30.2	22.8	9.8	筒抜け式／39の土器に比べ、細身	淡橙色	砂粒を多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子・小石を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ後縦方向に細長い磨き、外面はへら削り後内面と同様な縦方向の細長い磨き	貯蔵穴内及びその周辺からの出土	4/5強	
第56図41	土師器 甕	16.6	13.4	7.6	胴部中位に最大径を測り、口縁部は外反／口縁部内面のスクリーン部分は磨耗範囲を示しているが、使用時の擦れの痕か	暗黄褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後斜方向にナデ(スリップか)	カマド左横の壁際	完形品	小型丸甕
第56図42	土師器 甕	(25.3)	—	8.4	胴部中位に最大径を測り、卵形状の胴部を呈する	暗黄褐色を基調	砂粒・黄褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後斜方向にナデ(スリップか)、胴部下半は横方向にナデ(磨きの)が施され光沢を帯びる	北西コーナーの床面上	頸部から底部にかけて1/3程	大型丸甕
第56図43	土師器 甕	31.0	21.8	8.6	胴部上半に最大径を測り、胴部は卵形状を呈し、口縁部は大きく外反	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、茶褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後斜方向にナデ(スリップか)	貯蔵穴内及びその周辺からの出土	4/5程	大型丸甕
第56図44	土師器 甕	(21.0)	19.2	—	胴部上半に最大径を測り、口縁部は大きく外反	淡橙色を基調	砂粒を多く、茶褐色粒子を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後横方向あるいは斜方向にナデ(スリップか)	貯蔵穴内及びその周辺からの出土	口縁部から胴部下半にかけて1/3程	大型丸甕
第57図45	土師器 甕	33.7	(20.0)	(6.5)	全体に薄手の土器／胴部上半に最大径を測り、口縁部は外反／底部に木葉痕が残る	暗茶褐色を基調	砂粒・茶褐色粒子・金雲母を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後斜方向あるいは縦方向にいいいなナデ(スリップか)	住居内の床面上及び覆土内から散在	1/2程	長甕
第57図46	土師器 甕	32.5	(21.4)	6.2	口縁部に最大径を測り、口縁部は大きく外反／底部に木葉痕が残る	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、茶褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後斜方向あるいは縦方向にいいいなナデ(スリップか)	カマド前部から南東コーナーの床面上及び覆土中にかけて散在	2/3程	長甕

(単位 cm)

第25表 148号住居跡出土遺物一覧(3)

()は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度	分類及び備考
第57図47	土師器甕	35.4	18.1	5.8	胴部中位に最大径を測り、口縁部は大きく外反/底部に木葉痕が残る	暗黄褐色を基調	砂粒・茶褐色粒子を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後縦方向にナデ(スリップか)	カマドすぐ左横のはば床面上	2/3程	長甕
第57図48	土師器甕	35.5	18.9	(6.3)	胴部上半に最大径を測り、口縁部は大きく外反/底部に木葉痕が残る	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、茶褐色粒子を僅かに含む砂粒を多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後斜方向あるいは縦方向にいていねいなナデ(スリップか)	入口凸堤部直上	4/5強	長甕
第57図49	土師器甕	36.0	19.8	6.0	胴部中位に最大径を測り、口縁部は大きく外反	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後縦方向にいていねいなナデ(スリップか)	入口凸堤部直上	4/5強	長甕
第57図50	土師器甕	35.7	(21.0)	7.4	胴部中位に最大径を測り、口縁部は大きく外反	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、茶褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後縦方向にいていねいなナデ(スリップか)	南東コーナーの南壁寄りの覆土中(床上4~24cm)	2/3程	長甕
第58図51	土師器甕	33.9	20.4	6.5	口縁部と胴部中位のはば同位置に最大径を測り、口縁部は大きく外反	濃橙褐色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後縦方向にいていねいなナデ(スリップか)	住居中央の床面上	ほぼ完形品	長甕
第58図52	土師器甕	33.1	18.7	7.0	胴部中位に最大径を測り、口縁部は大きく外反	黄褐色を基調とするが、胴部中位以下が暗茶褐色に煤けている	砂粒を多く含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後斜方向にいていねいなナデ(スリップか)	貯蔵穴内及びカマド周辺の床面上	1/2程	長甕
第58図53	土師器甕	(35.4)	19.4	-	胴部中位に最大径を測り、口縁部は大きく外反	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子・金雲母を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後縦方向及び斜方向にいていねいなナデ(スリップか)	カマド前面の床面上	口縁部から底部付近にかけて4/5程	長甕
第58図54	土師器甕	(24.6)	20.0	-	胴部上半に最大径を測り、口縁部は大きく外反	淡橙色を基調	砂粒を多く、茶褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後縦方向にいていねいなナデ(スリップか)	貯蔵穴内及びその周辺からの出土	口縁部から胴部下半にかけて2/3程	長甕
第58図55	土師器甕	(31.6)	19.5	-	口縁部と胴部中位のはば同位置に最大径を測り、口縁部は大きく外反	淡橙色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後縦方向にナデ(スリップか)	カマド前面を中心とした床面上	口縁部から底部付近にかけて4/5程	長甕
第58図56	土師器甕	(32.9)	18.0	-	胴部上半に最大径を測り、口縁部は大きく外反	暗茶褐色を基調	砂粒を多く、茶褐色粒子を含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後斜方向及び横方向にいていねいなナデ(スリップか)	カマド前面の覆土中(床上4~25cm)	口縁部から底部付近にかけて1/2程	長甕
第58図57	土師器甕	(31.5)	18.8	-	胴部中位に最大径を測り、口縁部は大きく外反	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子を僅かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ(先端がささくれ状を呈する施文具による)、外面はヘラ削り後斜方向及び横方向にいていねいなナデ(スリップか)	カマド前面の床面上	口縁部から底部付近にかけて4/5強	長甕
第58図58	土製品	-	-	-	支脚/高さ17cm・最大幅6.9cm/下端はやや短広状を呈し、下面は平坦に成形され、直立し安定感がある	暗茶褐色	砂粒を含む	粗く成形された後、表面を平滑にするために軽くナデが施される	カマド内	完形品	
第58図59	ミニチュア土器	6.1	4.7	-	底部は丸底を呈し、体部中位に強い張りをもつ/口縁部は内湾気味に外縁/埴形土器を模したものか/口縁部内面には輪積み痕が残る	茶褐色を基調	黄褐色粒子を多く、茶褐色粒子・金雲母・砂粒を含む	外面底部のみヘラ削りが施され、他は指頭による押捺成形や軽いナデが施される程度	南西コーナーの柱穴内	完形品	
第58図60	ミニチュア土器	3.2	3.2	2.2	底部は一応平底を呈し、底部から口縁部にかけて内湾する手捏ねである	灰褐色を基調	砂粒を含む	全面に指頭による押捺の成形痕が顕著に残る	西壁寄りの覆土中(床上約15cm)	完形品	
第58図61	鉄製品	-	-	-	鉄鍍か/現存長4.0cm・最大幅1.8cm・厚さ0.6cm・重さ8.9g/表裏中央に稜をもち、断面が変形を呈することから、鋳造りか	-	-	-	覆土中	鐵身部を2/3程	
第58図62	鉄製品	-	-	-	用途不明品/長さ3.5cm・最大幅1.1cm・厚さ0.4cm・重さ4.3g	-	-	-	覆土中	小破片	
第58図63	鉄製品	-	-	-	用途不明品/長さ3.2cm・最大幅1.3cm・厚さ1.0cm・重さ6.4g	-	-	-	覆土中	小破片	

(単位 cm)

第25表 148号住居跡出土遺物一覧(4)

第4節 奈良・平安時代

(1) 概要

奈良・平安時代の遺構については、平安時代の住居跡5軒（138・139・149・150・151H）・土坑13基（156・177・190・193・217・218・228・247・255・259・289・303・305D）、ピット4本（P1～4）が検出されている（第59図）が、奈良時代の遺構については、住居跡・土坑は検出されていない。しかし、遺物としては、1号ピット（P1）から出土した偏行唐草文をもつ軒平瓦の破片1点が、唯一奈良時代の所産のものと言えるであろう。当市での軒平瓦の出土は初めてである。

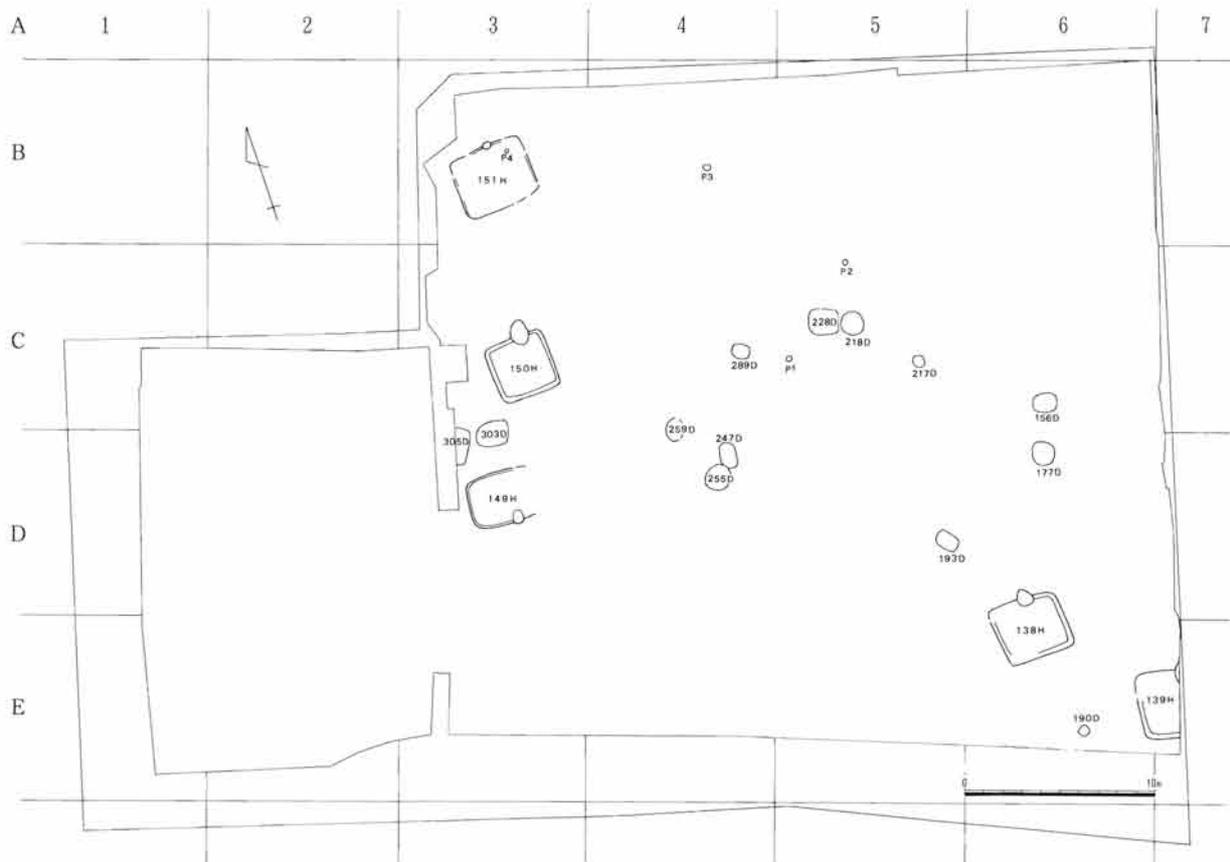
(2) 住居跡

138号住居跡

遺構（第60図）

[位置]（D・E-6）グリッド。

[住居構造] 183Dと攪乱によりかなり壊されている。（平面形）方形。（規模）3.66×3.24m。（壁高）6～9cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。（壁溝）確認できた範囲ではカマドを除いて全周する。上幅16～25cm・下幅6～16cm・深さ6～14cmを測る。（床面）カマド前面から、南壁の中央までが良く硬化



第59図 奈良・平安時代の遺構分布図（1/400）

していた。カマド前面からすこし東寄りの床面が焼けて赤化しており、その下は比較的柔らかく黒色土に焼土と炭化物が混ざっていた。貼床は2～12cmの厚さで施されていたが、壁際が厚く中央付近はほぼ直床であった。(カマド)北壁の中央よりやや東に偏って位置するが、西側は183Dにより壊されている。主軸方位はN-S、長さ99cm・幅不明・壁への掘り込み50cmを測る。カマドの奥からは、5の布目瓦が直立した状態で出土した。袖部付近から粘土が確認されたため、袖部は粘土により構築されていたものと思われる。(柱穴)本住居に伴うものは検出されなかった。

[遺物] カマド及びその周辺から土器、布目瓦、石製品、鉄製品が出土した。

[時期] 平安時代(9世紀末葉)。

[所見] 瓦3点については、139Hの13・15の瓦と遺構間接合した。出土遺物の年代もほぼ同時期であるため、同時期に廃絶した住居跡と考えられる。

遺物 (第61図、図版37-1-12、第26表)

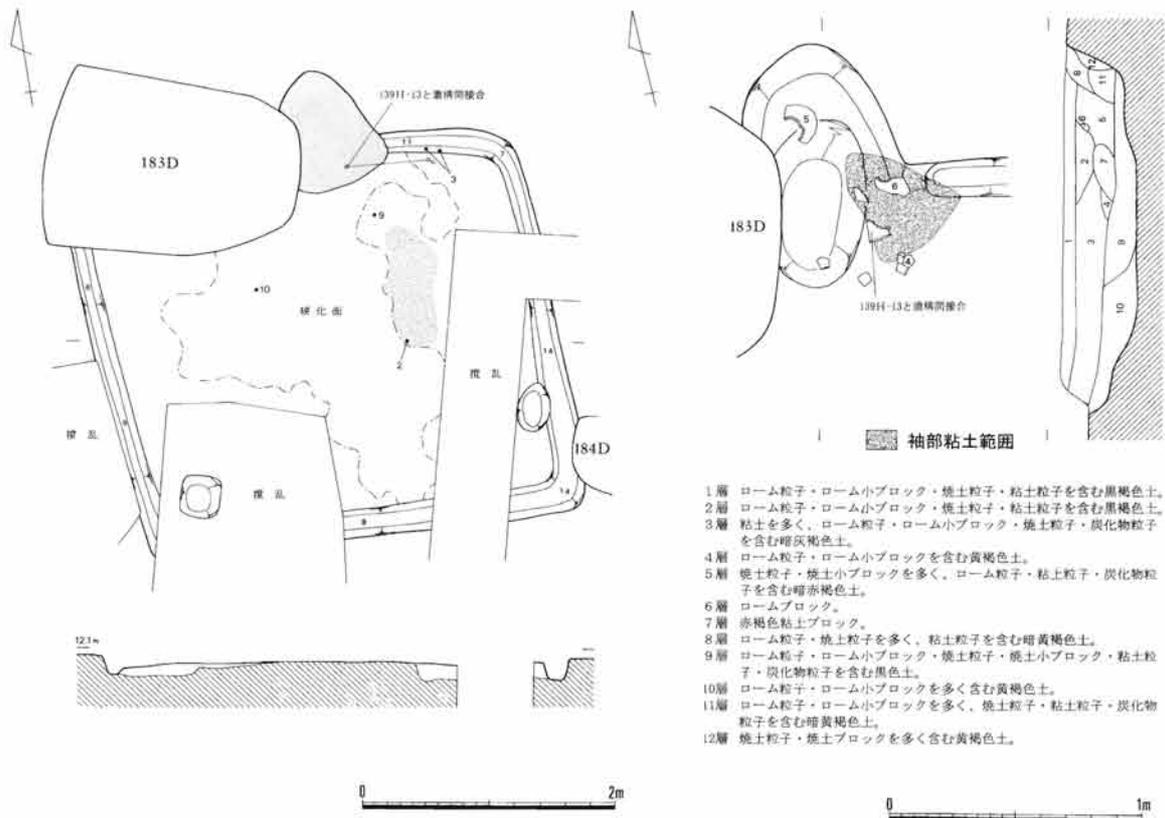
須恵器坏(1～3・12)、土師器甕(4)、布目瓦(5～8)、須恵器甕(9)、石製品(10)、鉄製品(11)である。

139号住居跡

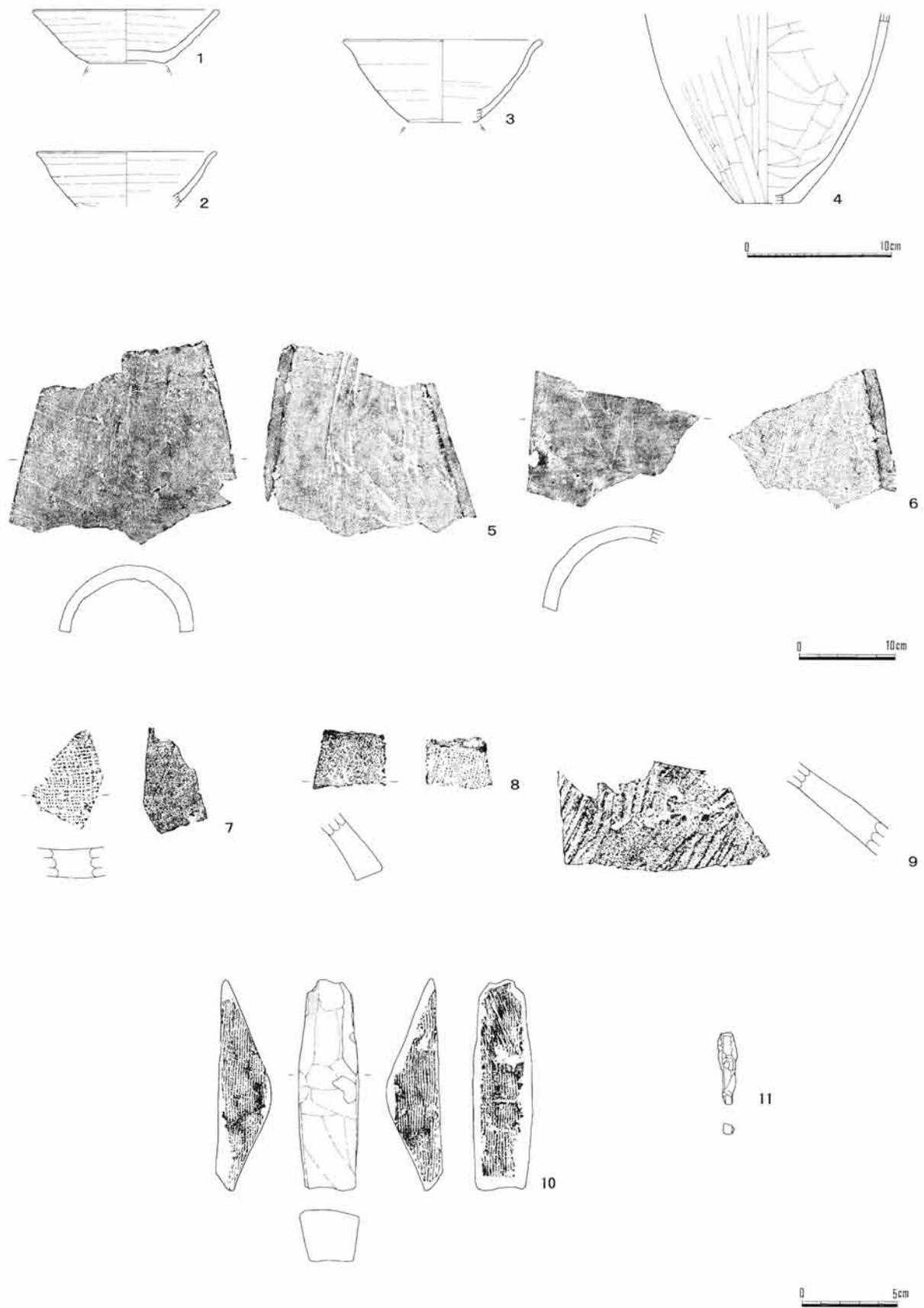
遺構 (第62図)

[位置] (E-6・7)グリッド。

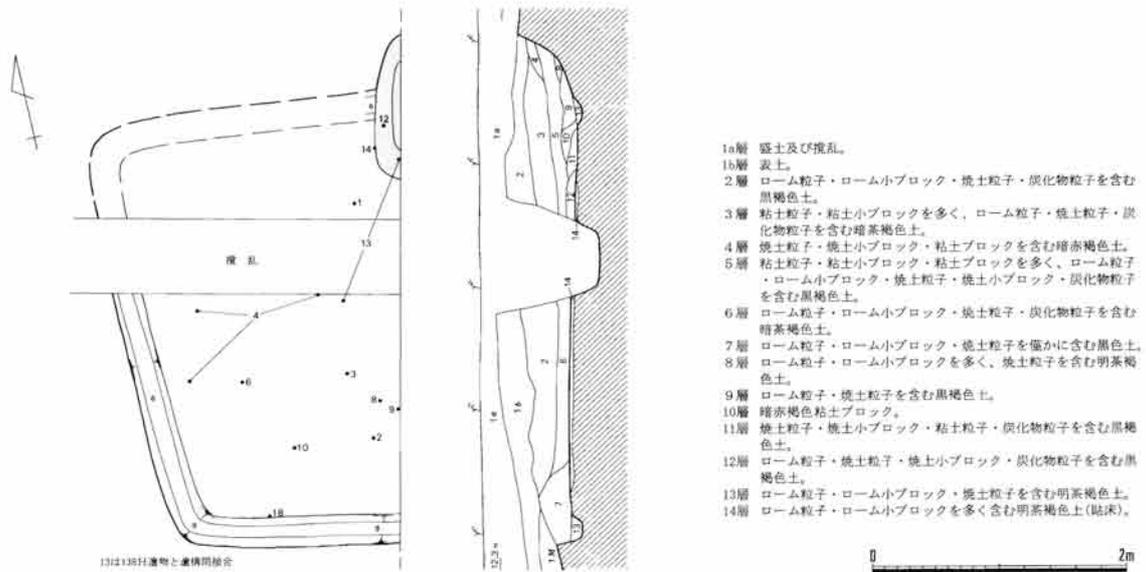
[住居構造] 136・137Hを切る。東側は調査区域外であり、1Mと攪乱により一部壊されている。北側



第60図 138号住居跡・カマド (1/60・1/30)



第61図 138号住居跡出土遺物 (1/4・1/6・1/3)



第62図 139号住居跡 (1/60)

は136Hの覆土中であつたが、掘り下げてしまったため確認できなかった。(平面形) 隅丸方形か。(規模) 不明×3.68m。(壁高) 残りの良い部分で11~16cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 全周すると考えられる。上幅22~26cm・下幅10~13cm・深さ6~9cmを測る。(床面) 136Hの覆土中であつたため全体的に掘りすぎてしまい詳細は不明であるが、土層断面では硬化した床面が確認でき、貼床も薄く施されていた。(柱穴) 本住居に伴うものは検出されなかった。(覆土) 13層に分層される。

[遺物] 覆土中から土器、布目瓦が出土した。

[時期] 平安時代(9世紀末葉)。

[所見] 13・15の瓦は138Hの遺物と遺構間接合した。出土遺物の年代もほぼ同時期であるため、同時に廃絶した住居跡と考えられる。

遺物 (第63図、第27表)

須恵器環(1~10)、土師器甕(11・12)、布目瓦(13~17)、須恵器甕(18)である。

149号住居跡

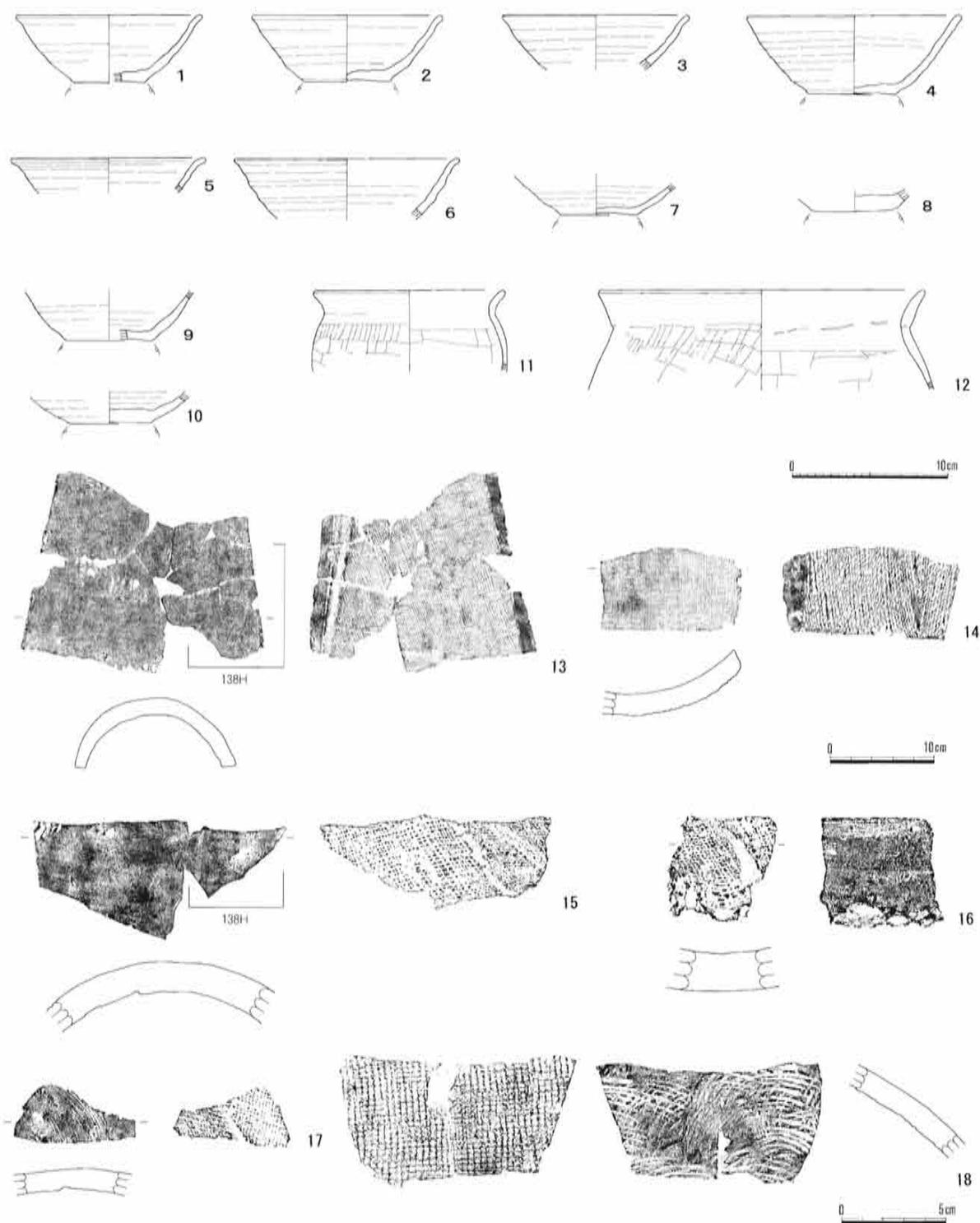
遺構 (第64図)

[位置] (D-3) グリッド。

[住居構造] 148Hを切る。148Hの覆土中であつた東側は掘りすぎてしまい、確認できなかった。(平面形) 方形か。(規模) 不明×2.87m。(壁高) 5~13cmを測る。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 全体的に軟弱であつたが、カマドに近くに硬化した面が確認できた。(カマド) 南壁に位置し、主軸方位はN-17°-E。遺存状態が良くないため詳細は不明であるが、確認できた範囲では長さ64cm・幅60cm・壁への掘り込み16cmを測る。(柱穴) 検出されなかった。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] カマド内及び住居跡中央付近の床面上から土器数点と、カマドから刃子出土した。

[時期] 平安時代(10世紀初頭)。



第63図 139号住居跡出土遺物 (1/4・1/6・1/3)

遺物 (第64図、第28表)

須恵器坏 (1~3)、灰釉陶器 (4)、鉄製品 (5・6) である。

150号住居跡

遺構 (第65図)

[位置] (C-3) グリッド。

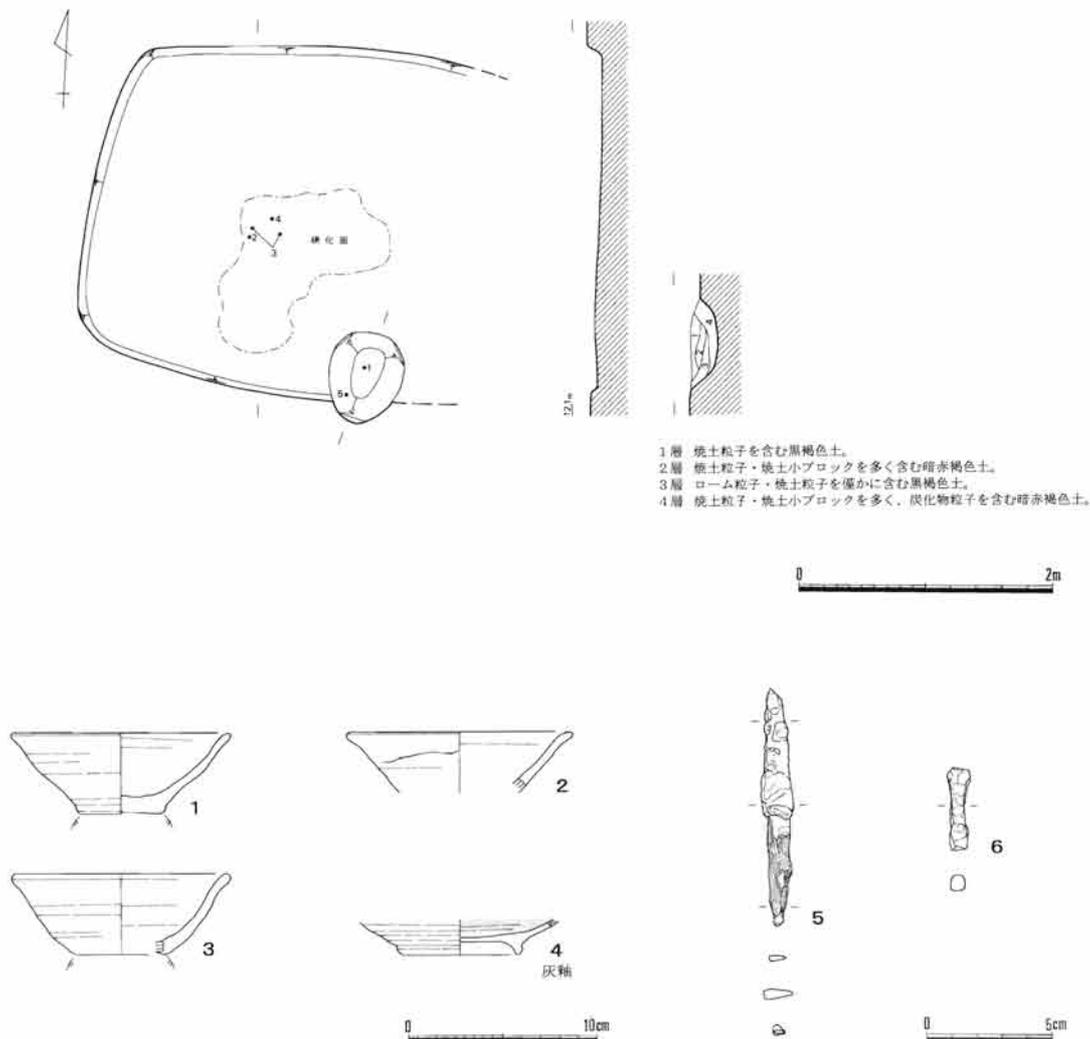
[住居構造] 土坑と後世のピットにより一部壊されている。(平面形) 正方形。(規模) 3.25×3.16m。(壁高) 25~44cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 北壁の北西コーナーからカマドまでを除いて巡らされていた。上幅16~21cm・下幅7~10cm・深さ7~17cmを測る。(床面) カマド前面から居中央付近にかけて良く硬化していた。貼床が2~16cmの厚さで施されており、壁際が特に厚くなっていた。(カマド) 北西壁の中央よりやや東に偏って位置するが、カマドの左側は301Dにより壊されている。主軸方位はN-S、長さ136cm・幅約80cm・壁への掘り込み82cmを測る。煙道は20°程の勾配で立ち上がる。燃烧部は良く焼けていた。(柱穴) 本住居の主柱穴と思われるものは、検出されなかったが、南壁の中央付近にある深さ29cmのものは入口ピットの可能性がある。(覆土) 12層に分層される。

[遺物] 土器が数点と滑石製管玉2点が出土した。

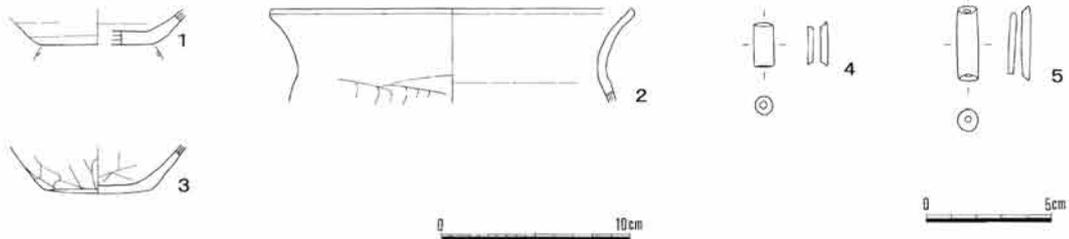
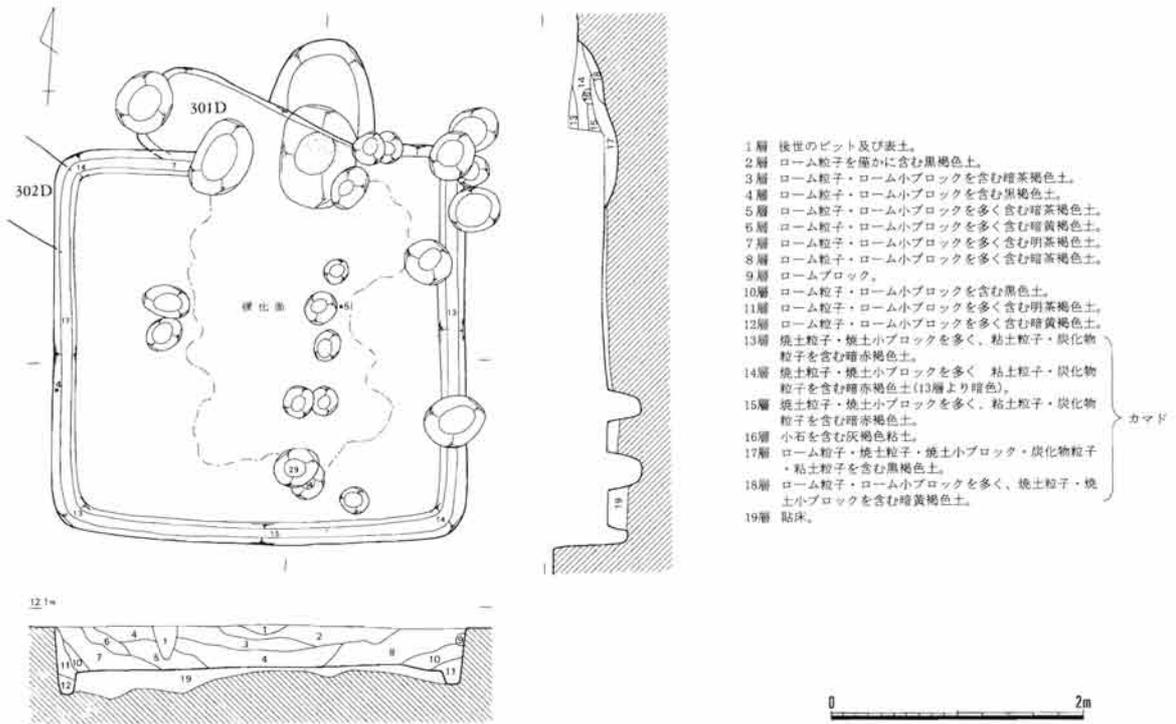
[時期] 平安時代(9世紀末葉か)。

遺物 (第65図、第29表)

須恵器坏(1)、須恵器甕(2・3)、石製品(4・5)である。



第64図 149号住居跡・出土遺物 (1/60・1/4・1/3)



第65図 150号住居跡・出土遺物 (1/60・1/4・1/3)

151号住居跡

遺構 (第66図)

[位置] (B-3) グリッド。

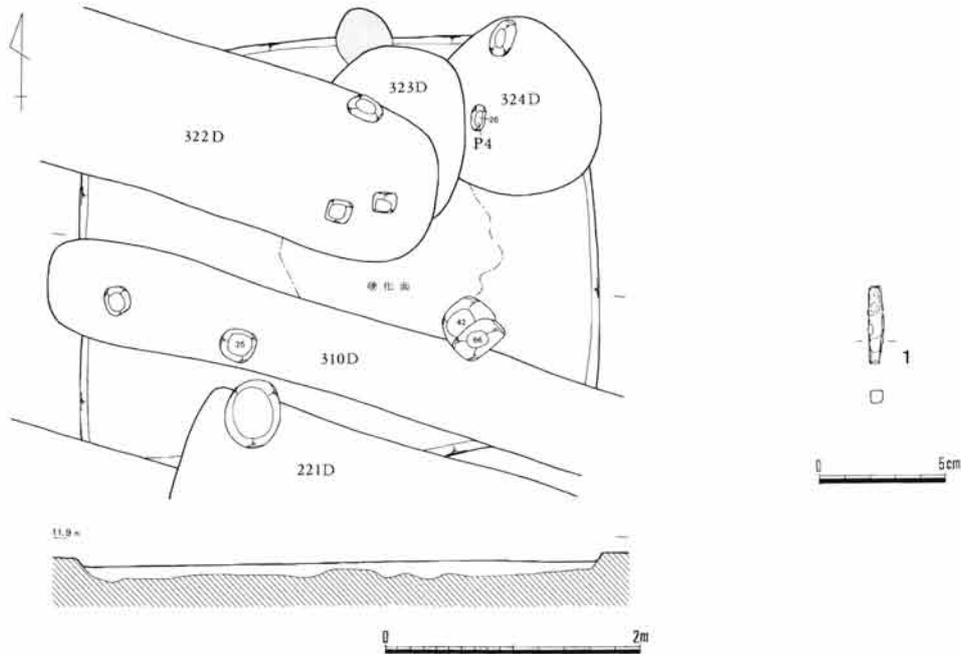
[住居構造] 多数の土坑により壊されているため詳細は不明である。(平面形) 方形。(規模) 4.10×3.40m。(壁高) 残りの良いところで10cm前後を測る。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 住居中央付近に硬化した面が確認された。貼床は6~16cmの厚さで施されていた。(カマド) 遺存状態が悪いため詳細は不明であるが、北壁に焼土粒子と焼土ブロックが多く確認されたことから一応カマドとして扱った。(柱穴) P4を単独ピットとして扱ってしまったが、南半部の2本を合わせると3本が相当する可能性がある。(覆土) ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 土器は小破片で、鉄釘以外図示できるものはなかった。

[時期] 平安時代(9世紀末葉か)。

遺物 (第66図1、第30表)

平釘である。



第66図 151号住居跡・出土遺物 (1/60・1/3)

(3) 土坑

156号土坑

遺構 (第67図)

[位置] (C-6) グリッド。

[構造] 133Hを切る。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 1.33×1.03m。(長軸方位) N-68°-W。(深さ) 42cmを測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 灰釉陶器の甕などの小破片が僅かに出土したが図示できなかった。

[時期] 平安時代 (9世紀末葉か)。

177号土坑

遺構 (第67図)

[位置] (D-6) グリッド。

[構造] (平面形) 隅丸方形。(規模) 1.24×1.18m。(長軸方位) N-8°-E。(深さ) 38cmを測る。坑底は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。(覆土) 5層に分層される。

[遺物] 須恵器杯・碗の破片が出土した。

[時期] 平安時代 (10世紀初頭)。

遺物 (第68図1~3、第31表)

須恵器杯・碗 (1~3) である。

190号土坑

遺構 (第37図)

[位置] (E-6) グリッド。

[構造] 137Hを切る。(平面形) 隅丸方形。(規模) 0.55×0.54m。(深さ) 20cmを測る。

[遺物] 土器、布目瓦が出土した。

[時期] 平安時代(9世紀末葉)。

遺物 (第68図4～6、第31表)

須恵器高台付碗(4)、土師器甕(5)、布目瓦(6)である。

193号土坑

遺構 (第67図)

[位置] (D-5) グリッド。

[構造] 189Dに切られる。(平面形) 長方形。(規模) 1.24×0.80m。(長軸方位)N-40°-W。(深さ) 125cmを測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[遺物] 灰釉陶器の小破片1点が出土した。

[時期] 平安時代(9世紀末葉か)。

遺物 (第68図7、第31表)

灰釉陶器の長頸壺である。

217号土坑

遺構 (第67図)

[位置] (C-5) グリッド。

[構造] (平面形) 円形に近い。(規模) 0.58×0.54m。(深さ) 42cmを測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロック・炭化材を含む黒褐色土。

[遺物] 須恵器坏、灰釉陶器の小破片が僅かに出土したが図示できなかった。炭化材の自然科学分析は、付編参照。

[時期] 平安時代(9世紀末葉か)。

218号土坑

遺構 (第67図)

[位置] (C-5) グリッド。

[構造] (平面形) ほぼ円形。(規模) 直径約1.25m。(深さ) 30cmを測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(覆土) 5層に分層される。

[遺物] 須恵器坏、土師器台付甕の脚台部が出土した。

[時期] 平安時代(9世紀末葉)。

遺物 (第68図8・9、第31表)

須恵器坏(8)、土師器台付甕(9)である。

228号土坑

遺構 (第67図)

[位置] (C-5) グリッド。

[構造] 222・225Dに切られる。(平面形) 長方形。(規模) 1.58×1.33m。(長軸方位) N-70°-W。(深さ) 38cmを測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(覆土) 上層がローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土、下層がローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子・焼土粒子を含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 須恵器碗の小破片1点が出土した。

[時期] 平安時代(10世紀初頭)。

遺物 (第68図10、第31表)

須恵器高台付碗である。

247号土坑

遺構 (第67図)

[位置] (D-4) グリッド。

[構造] (平面形) 隅丸長方形。(規模) 1.47×0.85m。(長軸方位) N-9°-E。(深さ) 29cmを測る。坑底は平坦で、壁は急斜に立ち上がる。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子・焼土粒子を含む明茶褐色土を基調とする。

[遺物] 須恵器坏、土師器甕の小破片が出土したが図示できなかった。

[時期] 平安時代(9世紀末葉か)。

255号土坑

遺構 (第67図)

[位置] (D-4) グリッド。

[構造] (平面形) 円形。(規模) 直径約1.40m。(深さ) 110cmを測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロック・炭化材・炭化物粒子・焼土粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 出土量は比較的によく、須恵器坏、灰釉陶器の高台付碗、土師器甕が出土した。

[時期] 平安時代(10世紀初頭)。

遺物 (第68図11~20、第31表)

須恵器坏(11~18)、灰釉陶器(19)、土師器甕(20)である。

259号土坑

遺構 (第67図)

[位置] (C・D-4) グリッド。

[構造] 257Dに切られる。(平面形) 円形か。(規模) 不明。(深さ) 16cmを測る。坑底は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 覆土中から須恵器坏が1点出土した。

[時期] 平安時代(10世紀初頭)。

遺物 (第68図21、第31表)

須恵器坏である。

289号土坑

遺構 (第67図)

[位置] (C-4) グリッド。

[構造] 288Dに切られる。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 不明×0.76m。(長軸方位) N-53°-W。(深さ) 14cmを測る。坑底は平坦で、壁は比較的緩やかに立ち上がる。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロック・小石を含む暗褐色土を基調とする。

[遺物] 須恵器坏の小破片が出土したが図示できなかった。

[時期] 平安時代(9世紀末葉か)。

303号土坑

遺構 (第67図)

[位置] (C・D-3) グリッド。

[構造] 304Dに切られる。(平面形) 不整長方形。(規模) 1.75×1.27m。(長軸方位) N-85°-W。(深さ) 18cmを測る。坑底は平坦で、壁は急斜に立ち上がる。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 須恵器坏、土師器甕の小破片が僅かに出土したが図示できなかった。

[時期] 平安時代(9世紀末葉か)。

305号土坑

遺構 (第67図)

[位置] (D-3) グリッド。

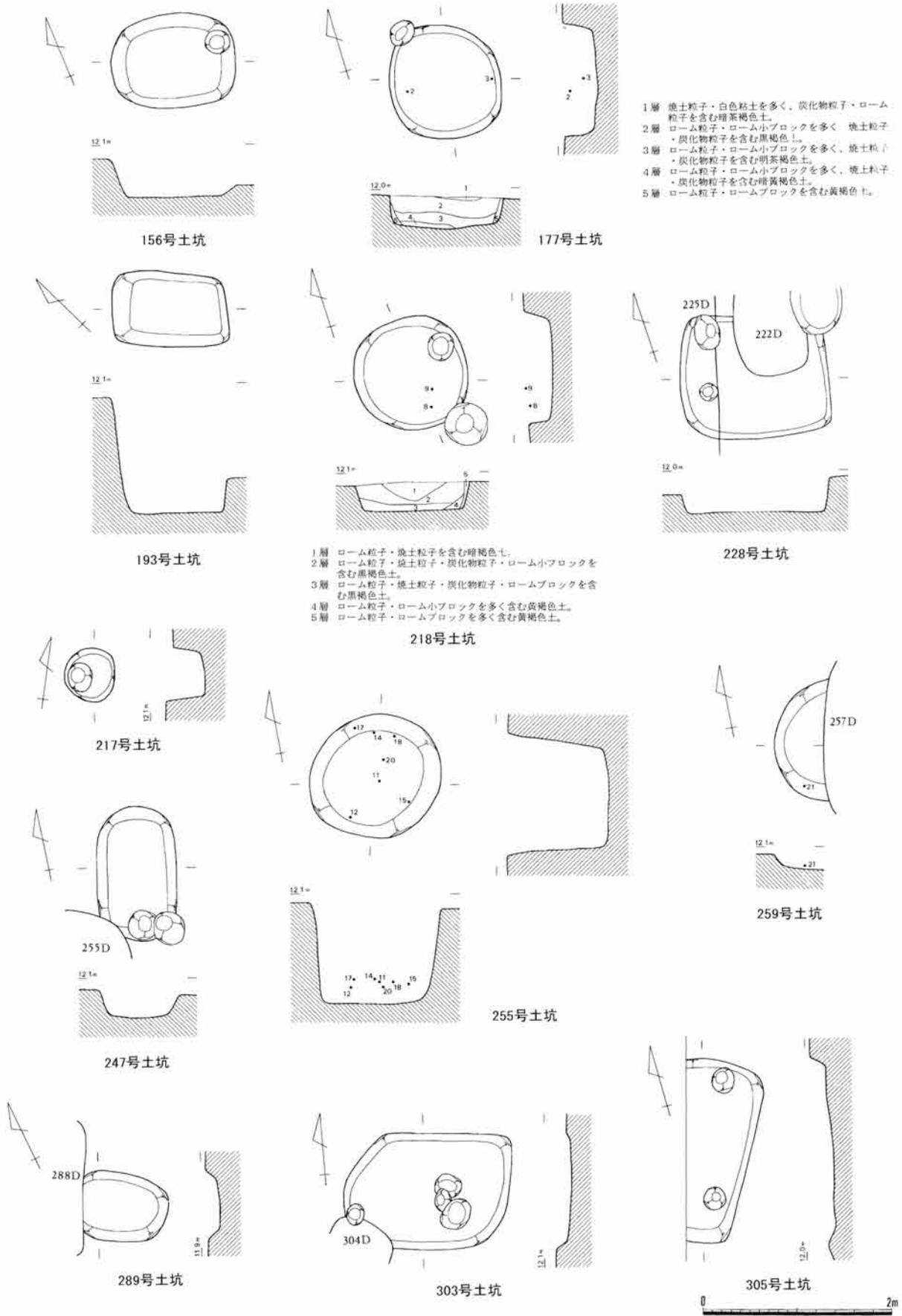
[構造] 西側は攪乱により不明である。(平面形) 長方形か。(規模) 不明×1.98m。(長軸方位) N-30°-E。(深さ) 16~23cmを測る。坑底は南側がやや深くなっており、壁は比較的緩やかに立ち上がる。

[遺物] 須恵器坏、土師器甕が出土したが、図示できたのは、須恵器坏1点のみである。。

[時期] 平安時代(10世紀初頭)。

遺物 (第68図22、第31表)

須恵器坏である。



第67図 土坑 (1/60)

(4) ピット

1号ピット

遺構 (第59図)

[位置] (C-5) グリッド。

[構造] (平面形) 楕円形。(規模) 36×25cm。(深さ) 60cmを測る。

[遺物] 軒平瓦の破片1点が出土。

[時期] 奈良時代(8世紀代)。

[所見] 偏行唐草文をもつ古代瓦は、本市では初の出土である。

遺物 (第68図23、第31表)

偏行唐草文をもつ軒平瓦の小破片である。

2号ピット

遺構 (第59図)

[位置] (C-5) グリッド。

[構造] (平面形) 隅丸方形。(規模) 25×20cm。(深さ) 64cmを測る。

[遺物] 灰釉陶器の壺の小破片が1点出土したが図示できなかった。

[時期] 平安時代(9世紀末葉か)。

3号ピット

遺構 (第59図)

[位置] (B-4) グリッド。

[構造] (平面形) 楕円形。(規模) 45×35cm。(深さ) 26cmを測る。

[遺物] 須恵器高台付壺の破片1点が出土したが図示できなかった。

[時期] 平安時代(9世紀末葉か)。

4号ピット

遺構 (第59図)

[位置] (B-3) グリッド。

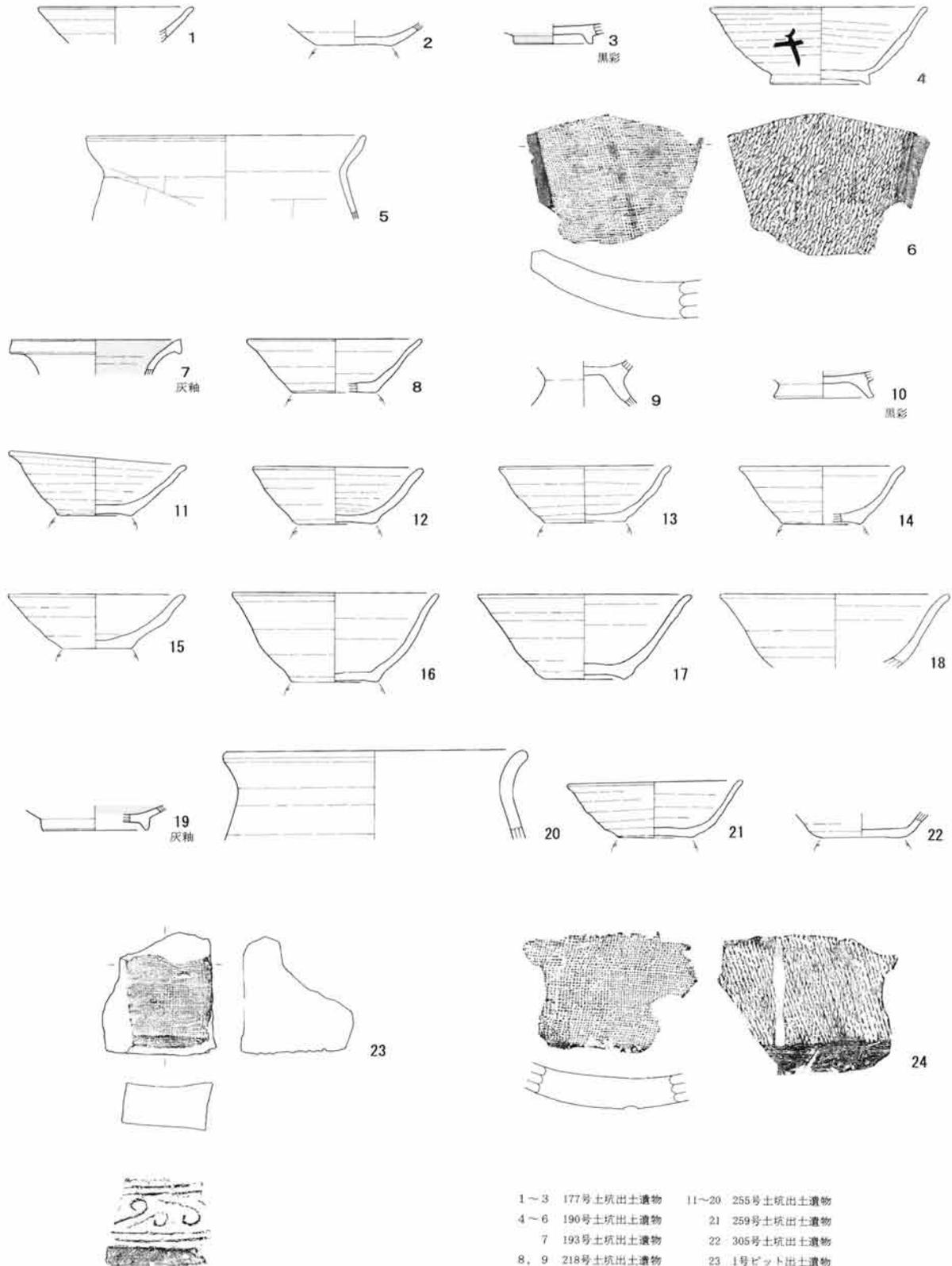
[構造] (平面形) 楕円形。(規模) 22×10cm。(深さ) 151H床面から26cmを測る。

[遺物] 布目瓦(平瓦)1点が出土した。

[時期] 平安時代(9世紀末葉か)。

遺物 (第68図24、第31表)

平瓦の破片である。なお、本ピットは単独のものとして扱ったが、151H柱穴の可能性はある。



- | | |
|-----------------|------------------|
| 1～3 177号土坑出土遺物 | 11～20 255号土坑出土遺物 |
| 4～6 190号土坑出土遺物 | 21 259号土坑出土遺物 |
| 7 193号土坑出土遺物 | 22 305号土坑出土遺物 |
| 8, 9 218号土坑出土遺物 | 23 1号ピット出土遺物 |
| 10 228号土坑出土遺物 | 24 4号ピット出土遺物 |

0 10cm

第68図 土坑・ピット出土遺物 (1/4)

第3章 検出された遺構と遺物

()は現存値及び推定値

挿図・図版番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	成形及び調整	出土位置	遺存度	備考
第61図1	須恵器 環	3.7	(13.0)	5.2	底部から口縁部にかけて直線的に外傾	灰褐色	白色砂粒を含む	ロクロ回転は右回転/底部には回転糸切り痕が残る	貼床内からの出土	1/2程	
第61図2	須恵器 環	3.9	(12.5)	-	口縁部は外反	青灰褐色	白色砂粒を含む	ロクロ回転は右回転	住居中央よりやや東の床面上	1/6程	
第61図3	須恵器 環	5.8	13.8	(5.0)	深身のタイプ	淡灰褐色	砂粒を含む	カマド右横の壁溝(床面上レベル)からの出土	カマド右横のほぼ床面上	1/2程	
第61図4	土師器 甕	(13.4)	-	(4.4)	胴部下半から底部にかけてスリムである	淡橙色	茶褐色粒子・砂粒を含む	内面はヘラナデ、外面はヘラ削り	カマド右袖前面の床面上	胴部下半以下を1/4程	武蔵型甕
第61図5	布目瓦	(23.0)	(21.2)	-	5・6・8は類似する製品/凹面上端部に1ヶ所線刻状の細線が観察されるが、工具痕か	灰褐色	白色の砂粒・小石を含む	凹面には布目痕、凸面は横方向のナデ調整が施され、僅かに叩き痕である縄蓆が観察される/凹面に縦方向に圧痕の段差があるのは模骨の痕か	カマド坑底から直立した状態で出土	-	丸瓦
第61図6	布目瓦	(9.7)	(10.4)	-	5・6・8は類似する製品である	灰褐色	白色の砂粒・小石を含む	凹面には布目痕、凸面は横方向のナデ調整が施され、僅かに叩き痕である縄蓆が観察される/凹面に縦方向に圧痕の段差があるのは模骨の痕か	カマド右袖粘土の上部	-	丸瓦
第61図7	布目瓦	37.9	(19.4)	7.0	5・6・8に比べ、硬質感があるものである	青灰褐色	白色砂粒を含む	凹面に布目痕、凸面はナデ調整がていねいに施されるが、叩き痕である縄蓆が観察される	覆土中	-	平瓦
第61図8	布目瓦	(23.7)	(21.0)	-	5・6・8は類似する製品である/凹面及び側面には赤色顔料の付着か	灰褐色	白色の砂粒・小石を含む	凹面には布目痕、凸面は横方向のナデ調整が施され、僅かに叩き痕である縄蓆が観察される/凹面に縦方向に圧痕の段差があるのは模骨の痕か	覆土中	-	丸瓦
第61図9	須恵器 甕	-	-	-	-	灰褐色	白色砂粒を含む	内外面ナデが施されるが、外面には平行叩き目痕が残る	カマド前面の床面上	胴部小破片	
第61図10	石製品	-	-	-	砥石/長さ11.0cm・最大幅3.2cm・厚さ2.9cm・重さ11.5g/上面が使用面/長軸断面は山形、短軸断面は台形/他面には成形痕の細い条線が観察される/石質は凝灰岩	-	-	-	住居中央付近の床面上	完形品	
第61図11	鉄製品	-	-	-	釘/長さ3.8cm・最大幅1.0cm・重さ4.0g/断面は正方形	-	-	-	覆土中	先端を欠損	
図版37-1-12	須恵器 環	-	-	-	酸化炎焼成/口縁部直下に墨書があるが文字は不明	赤褐色	白色粒子・茶褐色粒子を含む	ロクロ成形	覆土中	口縁部小破片	

第26表 138号住居跡出土遺物一覧

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	成形及び調整	出土位置	遺存度	備考
第63図1	須恵器 環	4.4	(12.0)	4.6	口縁部は外反	暗茶褐色を基調	白色砂粒を含む	ロクロ回転は右回転/底部には回転糸切り痕が残る	カマド前面の覆土中(床上約23cm)	1/6程	
第63図2	須恵器 環	4.3	(12.2)	(5.5)	口縁部は外反	灰白色	砂粒・小石を僅かに含む	ロクロ回転は右回転/底部には回転糸切り痕が残る	南壁寄りの覆土中(床上約10cm)	1/4程	
第63図3	須恵器 環	(3.6)	(12.0)	-	口縁部は僅かに外反	灰褐色	白色の砂粒・小石を含む	ロクロ回転は右回転	住居中央やや南の覆土中(床上約10cm)	1/8程	
第63図4	灰釉陶器(皿)	5.2	13.8	5.7	深身タイプ/底部から口縁部にかけて緩やかに外傾	灰褐色を基調	白色の砂粒・小石を含む	ロクロ回転は右回転/底部には回転糸切り痕が残る	西壁寄りの覆土中(床上約7cm)から散在	4/5強	
第63図5	須恵器 環	(2.3)	(12.5)	-	口縁部は大きく外反	灰褐色	白色の砂粒・小石を含む	ロクロ回転は右回転	覆土中	口縁部から体部中位にかけて1/6程	
第63図6	須恵器 環	(4.0)	(14.4)	-	口縁部は外反	灰褐色	白色砂粒を僅かに含む	ロクロ回転は右回転/底部には回転糸切り痕が残る	西壁寄りの覆土中(床上約15cm)	口縁部から体部下半にかけて1/6程	
第63図7	須恵器 環	(2.7)	-	4.8	体部は外傾	灰褐色	白色砂粒を僅かに含む	ロクロ回転は右回転/底部には回転糸切り痕が残る	覆土中	体部下半以下を1/2程	
第63図8	須恵器 環	(1.5)	-	5.2	底部小破片	淡灰褐色	白色砂粒を僅かに含む	ロクロ回転は右回転/底部には回転糸切り痕が残る	南壁寄りの覆土中(床上約13cm)	底部のみの遺存	
第63図9	須恵器 環	(3.3)	-	(5.6)	体部は外傾	淡橙色を基調	茶褐色粒子・小石を含む	ロクロ回転は右回転/底部には回転糸切り痕が残る	南壁寄りの覆土中(床上約15cm)	体部中位以下を1/4程	
第63図10	須恵器 環	(2.1)	-	5.2	体部は外傾	淡黄褐色	黄褐色粒子・小石を含む	ロクロ回転は右回転/底部には回転糸切り痕が残る	南壁寄りの覆土中(床上約14cm)	底部のみの遺存	

(単位: cm)

第27表 139号住居跡出土遺物一覧(1)

()は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	成形及び調整	出土位置	遺存度	備考
第63図11	土師器 甕	(5.3)	(12.3)	-	「く」の字口縁部を呈し、 胴部上半は膨らむ	暗茶褐色	茶褐色粒子 ・金雲母・ 砂粒を含む	口縁部内外面は横ナデ、以 下内面はヘラナデ、外面は 粗いヘラ削り	覆土中	口縁部から胴 部上半にかけ て1/4程	小型甕
第63図12	土師器 甕	(6.5)	(21.0)	-	胴部上半に最大径を測る/ 「く」の字口縁部	暗茶褐色	茶褐色粒子 ・砂粒を僅 かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以 下内面はヘラナデ、外面は 粗いヘラ削り	カマド内及 び覆土中	口縁部から胴 部上半にかけ て1/8程	武蔵型甕
第63図13	布目瓦	-	-	-	長さ19.2cm・幅17.1cm・厚 さ1.3cm	暗茶褐色	茶褐色粒子 ・砂粒・小 石を含む	凹面に布目痕、凸面には横 方向のナデ調整が施され、 僅かに叩き痕である縄縞が 観察される	カマド周辺 の覆土中	小破片	丸瓦/138 H出土遺物 と遺構間接 合
第63図14	布目瓦	-	-	-	長さ8.6cm・幅14.5cm・厚 さ2.1cm	灰褐色	白色砂粒を 多く含む	凹面に布目痕、凸面にはナ デ調整が施されず、縄縞が そのまま残っている	覆土中	小破片	平瓦
第63図15	布目瓦	-	-	-	長さ8.6cm・幅11.2cm・厚 さ1.3cm	灰褐色	白色砂粒・ 小石を含む	凹面に布目痕、凸面には横 方向のナデ調整が施され、 僅かに叩き痕である縄縞が 観察される	カマド周辺 の覆土中	小破片	丸瓦/138 H出土遺物 と遺構間接 合
第63図16	布目瓦	-	-	-	長さ5.3cm・幅5.9cm・厚さ 2.8cm	暗黄褐色	砂粒・小石 を僅かに含 む	凹面に布目痕、凸面には横 方向のナデ調整が施され、 僅かに叩き痕である縄縞が 観察される	覆土中	小破片	平瓦
第63図17	布目瓦	-	-	-	長さ2.9cm・幅5.3cm・厚さ 1.0cm	灰褐色	白色砂粒を 含む	凹面に布目痕、凸面にはナ デ調整が施され、縄縞は見 られない	覆土中	小破片	丸瓦
第63図18	須恵器 甕	-	-	-	-	灰褐色	白色の砂粒 ・小石を含 む	内面には当て道具痕である 青海波、外面には叩きの縄 縞が残る	南東コーナ ー近くの北 溝縁の覆土 中(床上約20cm)	胴部小破片	

第27表 139号住居跡出土遺物一覧(2)

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	成形及び調整	出土位置	遺存度	備考
第64図1	須恵器 坏	4.3	(11.6)	4.6	体部にやや膨らみをもつ/ 酸化炎焼成の土器	淡橙色	茶褐色粒子 ・砂粒を僅 かに含む	ロクロ回転は右回転。底部 には回転糸切り痕が残る	カマド内	2/3程	
第64図2	須恵器 坏	(3.3)	(12.0)	-	口縁部は外反/酸化炎焼成 の土器	暗黄褐色	砂粒・小石 を僅かに含 む	ロクロ回転は右回転/底部 には回転糸切り痕が残る	住居中央付 近の床面上	口縁部から底 部付近にかけ て1/4程	
第64図3	須恵器 坏	4.3	(11.6)	(4.6)	やや厚手で、口縁部は僅か に外反	暗灰褐色	黄褐色粒子 ・砂粒を僅 かに含む	ロクロ回転は右回転	住居中央付 近の床面上	1/6程	
第64図4	灰釉陶 器(皿)	(1.8)	-	6.1	高台/体部内面に灰釉が施 軸/底部内面には平滑面で あり、磨れた痕跡が観察で きることから、転用硯か	灰褐色	白色粒子・ 黒色粒子を 僅かに含む	ロクロ回転は右回転/底部 には回転糸切り痕が残る	住居中央付 近の床面上	底部のみ遺存	東海道系製 品(静岡県 浜北産)か
第64図5	鉄製品	-	-	-	刀子/長さ9.6cm・刃部最 大幅1.3cm・茎部最大幅0.8 cm・重さ8.5g/茎部に木 質が錆着	-	-	-	カマド内	刃部先端は欠 損しているも のと思われる	
第64図6	鉄製品	-	-	-	平釘/長さ3.3cm・幅0.5cm ・重さ3.7g/断面形は正 方形	-	-	-	覆土中	先端を欠損	

第28表 149号住居跡出土遺物一覧

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	成形及び調整	出土位置	遺存度	備考
第65図1	須恵器 坏	(1.9)	-	(5.9)	底部から体部は外傾	暗灰褐色	白色砂粒を 含む	ロクロ回転は右回転。底部 には回転糸切り痕が残る	覆土中	底部から体部 にかけて1/3 程	
第65図2	土師器 甕	(5.1)	(19.2)	-	口縁部は外反	暗茶褐色	茶褐色粒子 ・砂粒を僅 かに含む	口縁部内外面は横ナデ、以 下内面はヘラナデ、外面は 粗いヘラ削り	カマド内及 び覆土中	口縁部から胴 部上半にかけ て1/8程	武蔵型甕
第65図3	土師器 甕	(2.6)	-	5.6	底部は平底	暗茶褐色	砂粒を含む	内面はヘラナデ、外面は粗 いヘラ削り	覆土中	底部のみ1/2 程	武蔵型甕
第65図4	石製品	-	-	-	管玉/長さ1.8cm・径0.8cm ・穿孔径0.2cm・重さ1.8g /石質は滑石	-	-	ていねいな磨き	西壁に接す る壁溝の上 層(床面レ ベル)	完形品	
第65図5	石製品	-	-	-	管玉/長さ3.0cm・径0.8cm ・穿孔径0.2cm・重さ3.4g /石質は滑石	-	-	ていねいな磨き	住居中央よ り東に寄っ た覆土中 (床上約7cm)	完形品	

第29表 150号住居跡出土遺物一覧

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	成形及び調整	出土位置	遺存度	備考
第66図1	鉄製品	-	-	-	平釘/長さ3.2cm・幅0.6cm ・重さ2.2g/断面形は正 方形	-	-	-	覆土中	両端を欠損	

(単位:cm)

第30表 151号住居跡出土遺物一覧

第3章 検出された遺構と遺物

()は現存値及び推定値

棟図番号	遺構名	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	成形及び調整	出土位置	遺存度	備考
第68図1	177D	須恵器 環	(2.5)	(10.4)	-	酸化炎焼成	淡橙色	砂粒を僅かに含む	ロクロ回転は右回転/ 底部には回転糸切り痕	覆土中	口縁部から体部 中位にかけて1/4程	
第68図2	177D	須恵器 環	(1.8)	-	5.0	酸化炎焼成	暗褐色	砂粒を含む	底部には回転糸切り痕	西壁寄りの覆土中(坑 底上27cm)	底部のみ遺存	
第68図3	177D	須恵器 環	(1.4)	-	5.2	高台付塊/従来のロク ロ土師器を須恵器とし て扱う/内外面黒色処 理	黒色	砂粒を僅かに含む	図示していないが、内 外面は緻密なヘラ磨き 調整	東壁寄りの覆土中(坑 底上14cm)	底部のみ遺存	
第68図4	190D	須恵器 環	5.2	14.5	6.5	須恵器高台付塊/外面 の体部中位は「干」の 字が墨書	暗灰白色	砂粒・小石 を含む	ロクロ回転は右回転/ 底部には回転糸切り痕	覆土中(坑 底上12cm)	完形品	墨書土器
第68図5	190D	土師器 甕	(5.8)	(18.7)	-	口縁部は「く」の字状 口縁/若干受け口状に 内湾	暗茶褐色	砂粒を含む	口縁部内外面は横ナデ、 以下内面はヘラナデ、 外面は横及び斜方向に 粗いヘラ削り	覆土中	口縁部から胴 部上半にかけ て1/6程	武蔵型甕
第68図6	190D	布目瓦	-	-	-	長さ9.3cm・幅11.7cm・ 厚さ2.3cm	灰褐色	白色の砂粒 ・小石を含 む	凹面に布目痕が残り、 凸面にはナデ調整が施 されず、繩蔦がそのま ま残る	住居中央付 近の床面上	破片	平瓦
第68図7	193D	灰釉陶 器(壺)	(2.4)	(11.3)	-	長頸壺/灰釉は口縁部 内面に施釉	灰白色	白色粒子・ 黒色粒子を 含む	ロクロ目	覆土中	口縁部小破片	
第68図8	218D	須恵器 環	3.7	(11.7)	(5.6)	酸化炎焼成の土器/部 分的に黒斑が観察され る	暗黄褐色	砂粒を僅かに含む	底面には回転糸切り痕	南壁寄りの覆土中(坑 底上10cm)	1/4程	
第68図9	218D	土師器 甕	(3.1)	-	-	台付甕	暗橙色	白色粒子・ 砂粒を含む	胴部内面はヘラナデ、 脚台部内外面は横ナデ	南壁寄りの覆土中(坑 底上15cm)	脚台部破片	台付甕
第68図10	228D	須恵器 環	(1.8)	-	6.8	高台付塊/従来のロク ロ土師器を須恵器とし て扱う/内面黒色処理	暗黄褐色	白色粒子・ 黒色粒子を 含む	図示していないが、内 面は緻密なヘラ磨き調 整	覆土中	底部のみ遺存	
第68図11	255D	須恵器 環	4.5	11.8	4.8	酸化炎焼成の土器/内 外面にはタール状の付 着物	暗褐色	砂粒を含む	ロクロ回転は右回転/ 底面には回転糸切り痕	遺構中央の覆土中(坑 底上57cm)	完形品	
第68図12	255D	須恵器 環	4.0	11.5	5.4	口縁部は幾分外反	淡灰褐色	白色砂粒を 含む	ロクロ回転は右回転/ 底部には回転糸切り痕	南壁寄りの覆土中(坑 底上約5cm)	2/3程	
第68図13	255D	須恵器 環	3.9	11.5	5.4	酸化炎焼成の土器/か なり粗雑な作りの土器	暗褐色を 基調	茶褐色粒子 ・砂粒を僅 かに含む	ロクロ回転は右回転/ 底面には回転糸切り痕	覆土中	1/2程	
第68図14	255D	須恵器 環	4.0	(11.1)	(5.3)	口縁部は幾分外反	青灰褐色	砂粒を含む	ロクロ回転は右回転/ 底面には回転糸切り痕	北壁寄りの覆土中(坑 底上41cm)	1/3程	
第68図15	255D	須恵器 環	3.7	(11.9)	4.7	酸化炎焼成の土器/か なり粗雑な作りの土器	明褐色を 基調	茶褐色粒子 ・砂粒を含 む	ロクロ回転は右回転/ 底部には回転糸切り痕	南壁寄りの覆土中(坑 底上16cm)	1/2程	
第68図16	255D	須恵器 環	6.0	(13.8)	5.8	口縁部から底部にかけ て黒斑が観察される	灰白色	砂粒を含む	ロクロ回転は右回転/ 底部には回転糸切り痕	覆土中	1/3程	
第68図17	255D	須恵器 環	(5.8)	(14.2)	5.3	内外面黒色処理/底部 は高台を意識していると 考えられるが、全体的 な作りが悪いためか 上げ底状	暗灰褐色	砂粒を僅かに含む	ロクロ回転は右回転	北壁寄りの覆土中(坑 底上52cm)	1/2程	
第68図18	255D	須恵器 環	(5.0)	(15.4)	-	口縁部は幾分外反	暗灰褐色	砂粒を含む	ロクロ回転は右回転	北壁寄りの覆土中(坑 底上52cm)	口縁部から体 部下半にかけ て1/5程	
第68図19	255D	灰釉陶 器(塊)	(1.7)	-	(7.2)	高台付塊/灰釉内面に 施釉	灰白色	精錬され砂 粒もほとん ど含まない	ロクロ目	覆土中	底部小破片	
第68図20	255D	土師器 甕	(6.0)	(20.4)	-	全体に厚ぼったい/口 縁部は外反し、頸部か ら胴部上半には数段の 弱い稜/全面黒彩か	全体に黒 色を基調	白色粒子・ 黒色粒子を 僅かに含む	内外面に横ナデ/横ナ デの範囲としては異例 の幅の広さと言える	遺構中央付 近のほぼ坑 底上	破片	
第68図21	259D	須恵器 環	3.8	(11.7)	5.0	酸化炎焼成/かなり粗 雑な作り/口縁部内外 面にはタール状の付 着物	暗褐色	砂粒を僅かに含む	ロクロ回転は右回転/ 底面には回転糸切り痕	南壁寄りの覆土中(坑 底上約10cm)	2/3程	
第68図22	305D	須恵器 環	(1.6)	-	6.0	酸化炎焼成	明褐色	砂粒を含む	底面には回転糸切り痕	覆土中	底部破片	
第68図23	P1	布目瓦				偏行唐草文をもつ軒平 瓦/凹面及び一部の欠 損面には平滑面であり、 磨れた痕跡が観察でき る/転用硯とまでは言 えないが、この破片自 体が何かに使用された 可能性がある	灰褐色	白色砂粒・ 小石を多く 含む	唐草文は瓦当面の中央 よりやや左側に相当す る部分が残っている/ 凹面に布目痕が残り、 その裏面は横位ナデ調 整	覆土中	小破片	軒平瓦
第68図24	P4	布目瓦				平瓦	淡灰褐色	砂粒・小石 を含む	凹面に布目痕が残り、 凸面にはナデ調整が施 されず、繩蔦がそのま ま残る	覆土中	小破片	平瓦

(単位:cm)

第31表 土坑・ピット出土遺物一覧

第5節 中世以降

(1) 概要

この第5節での時代設定は、出土遺物や遺構の覆土からの判断では詳細な時代設定を行うことが難しく、中世以降という枠で捉えることにした。

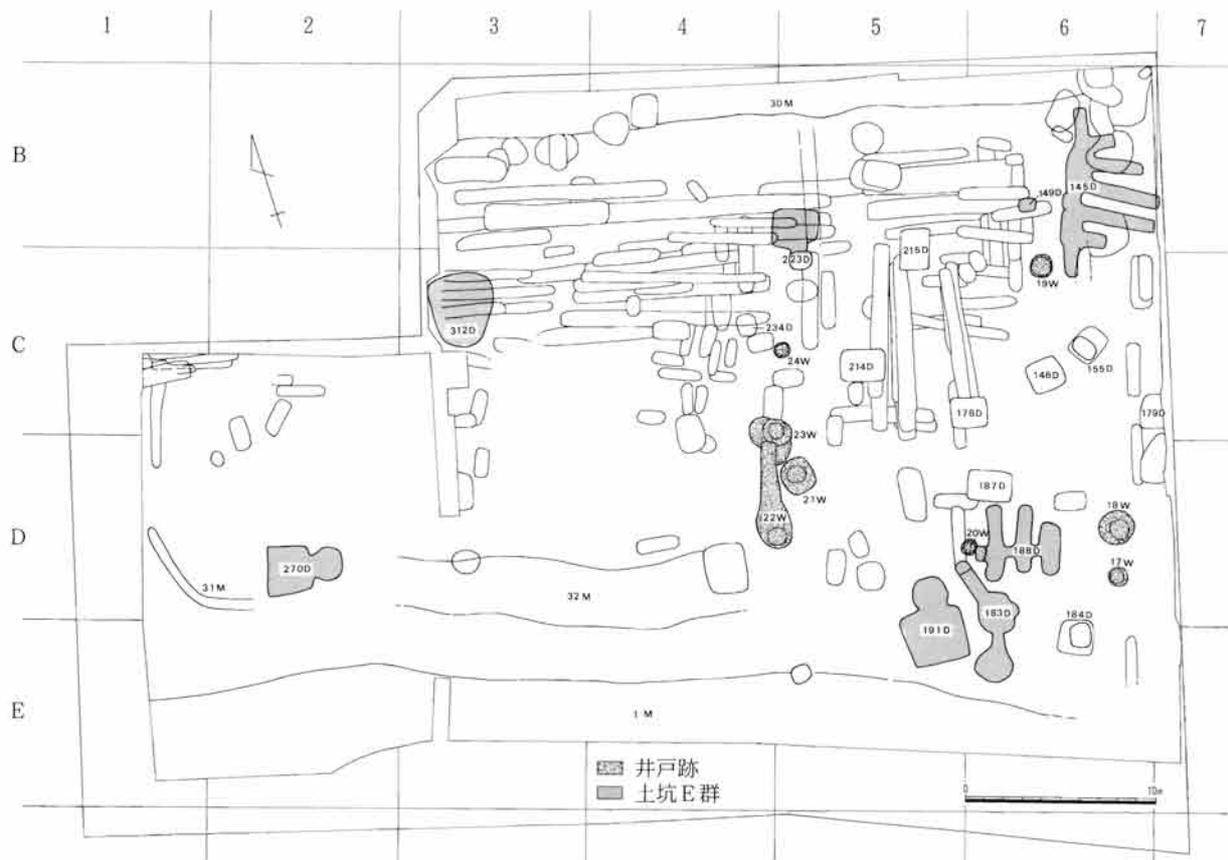
検出された遺構は、土坑151基・井戸跡8基・溝跡4本であるが、その他として多数のピット群がある(第69図)。

まず、土坑については、多種多様の形態をもつため、便宜的に先行して形態分類を行い、その分類に従い説明をすることにした。土坑の中でも、E群とした145・188Dは単純な単室タイプのものではなく、主体部が通路状の横坑として「八っ手」状・「王」の字状を呈する、いわゆる「地下坑」と呼ばれるタイプであった。

井戸跡については、22Wが北側にスロープをもち、その下端にテラス部をもつ特異タイプも存在した。

溝跡については、今回1Mとしたものが、柏城関連の大堀跡と考えられる。しかし、他の溝跡についても、時代設定が詳細に行えなかったが、柏城関連遺構である可能性も十分考えられる。今後、検討が必要であろう。

さらに、調査区域内には無数のピットが確認されたが、その配列や時期区分についても詳細に行うこ



第69図 中世以降の遺構分布図 (1/400)

とができなかった。今回、ピット群として扱ったものの中から、遺物が出土したものに関してのみピット名を付け報告を行うことにした。21本（P5～P25）から遺物が出土したが、大部分が陶磁器の小破片であったため、掲載できないものが多かった。

なお、各遺構の時代設定は、本報告に掲載した遺物の中の陶磁器・土器の年代を中心に詳細年代を明示し、それ以外は中・近世と表記した。さらに小破片でも磁器・近世瓦が出土した場合は短絡的に近世と表記した。詳細年代を示す場合は、1つの遺構出土の遺物で、安定した時期で出土した場合はその時期の年代に、さらに安定せず時代幅がある場合には単純に最新遺物の年代に比定したため、あくまでも恣意的な判断であり、必ずしも遺物年代イコール遺構年代ではないことを留意してもらいたい。

（2）土 坑

土坑については、非常に数が多く、時期・用途の不明なものも多いが、大きく平面形及び細部の形態的な特徴により以下のような分類を行った。ここでは、この分類を基準に説明することにする。

A群 方形の土坑 4基（1類－3基、2類－1基）

1類 袋状の構造を呈する（146・155・184D）

2類 袋状の構造ではなく、単純構造を呈する（234D）※鉄鍋出土

B群 長方形の土坑 119基（1類－56基、2類－47基、3類－11基、4類－5基）

1類 溝状土坑（148・158・163・164・166・168・170～173・176・181・185・189・200～203・206・208・209・211・212・216・219・221・222・225・230～233・235・237・239・240～242・264・265・271～275・277・294～300・308・310・322D）

2類 幅狭の長方形土坑（150～152・154・159・161・165・167・169・175・182・194・198・205・207・213・227・236・238・243～246・248・250・253・256・258・261～263・268・269・278～280・282・283・285・288・292・301・302・304・306・307・309D）

3類 幅広の長方形土坑（160・192・210・249・254・257・276・311・313・316・319D）

4類 火床部を有する土坑（178・179・187・214・215D）

C群 円形・楕円形の土坑 12基

（174・180・196・197・204・220・224・226・281・293・323・324D）

D群 不整形の土坑 8基

（147・153・157・186・229・260・318・325D）

E群 地下室・地下坑 8基（1類－5基、2類－3基）

1類 1 豎坑 1 主体部タイプ（149・191・223・270・312D）

2類 特殊タイプ（145・183・188D）

A群 方形の土坑

平面形が方形を呈する土坑であるが、細部構造において、坑底より開口部の方がすばまり袋状の構造を呈するものを1類、袋状の構造ではなく、単純構造のものを2類とした。なお、2類の234D坑底面からは鉄鍋が出土した。

1類 袋状の構造を呈する

146号土坑

遺構 (第70図、第32表)

[位置] (C-6) グリッド。

[構造] 133Hを切る。壁面はほぼ垂直であるが、北壁は開口部が幾分すぼまっている。坑底部はほぼ平坦である。(長軸方位) N-89°-W。(規模) 1.75×1.58m。(深さ) 1.14m。

[遺物] 陶磁器の小破片が僅かに出土したが、図示できなかった。

[時期] 近世。

155号土坑

遺構 (第70図、第32表)

[位置] (C-6) グリッド。

[構造] 133Hを切る。(形態) 開口部は長方形、坑底部は方形を呈する。坑底に対し開口部は南西に寄る。壁面は下方に向け広がり、特に北東方向への広がりが顕著である。坑底部はほぼ平坦である。(規模) 開口部1.38×0.84m・坑底部1.85×1.56m。(深さ) 1.41m。(長軸方位) N-59°-E。

[遺物] 陶器・鉄製品が出土したが、図示できなかった。

[時期] 中・近世。

184号土坑

遺構 (第70図、第32表)

[位置] (D・E-6) グリッド。

[構造] 134・137・138Hを切る。開口部はやや坑底に比べやや東に寄っている。坑底部は呈する。壁面は開口部が坑底よりすぼまっている。坑底部は北側が0.10m一段テラス状に高くなっている。(規模) 開口部1.40×1.20m・坑底部1.85×1.85m。(深さ) 1.28m。(長軸方位) N-24°-E。

[遺物] 陶器・土器・鉄製品・瓦が出土した。

[時期] 近世(18世紀末)。

[所見] 覆土中から検出された白色の灰については、サンプリングし自然科学分析を行った。結果は付編参照。

遺物 (第84図1、第93図6、第40・43表)

第84図1は陶器(播鉢)、第93図6は鉄製品(釘)である。

2類 袋状の構造ではなく、単純構造を呈する

234号土坑

遺構 (第70図、第32表)

[位置] (C-4) グリッド。

[構造] 240Dに切られ、284Dを切る。壁面は上方に向かってやや広がり、坑底面は平坦である。(規模) 1.13×1.04m(深さ) 0.24m。(長軸方位) N-15°-E。(覆土) 6層に分層された。

[遺物] 完形品の鉄鍋が出土したことに注目される。その他土器1点と鉄製品1点出土した。

[時期] 中世(16世紀後半頃か)

[所見] 本土坑からは、鉄鍋がほぼ坑底面直上に伏せた状態で出土したことから、鍋被り葬の墓坑と考えられる。

遺物 (第92図、図版39・42-1、第40表)

第92図は鉄鍋である。なお、この鉄鍋は遺構精査開始直後の確認面より僅かに下がった浅い位置で検出されたが、幸い遺存状態は良好で完形品の状態を留めていた。しかし、検出直後から急速に風化が目立ち始めたため、パラロイド液を含浸させ、本体を強化した後に取り上げ作業を行った。さらに取り上げ後、保存処理を行ったが、その詳細については付編参照のこと。

図版42-1は土器小破片である。

B群 長方形の土坑

平面的に長方形を呈する土坑は119基検出された。その中で、長軸の長さが3mを超える、もしくは超えるであろうと想定される溝状土坑を1類、長軸の長さが3mを超えず短軸の長さが1m未満の幅狭の長方形土坑を2類、1m以上の幅広の長方形土坑を3類、1m前後の深い掘り込みをもち、火床部を有する土坑を4類として4細分した。なお、1類と2・3類の一部については、第3図・69図を参照とするのみで、個々の詳細図については割愛することにした。

1類 溝状土坑

56基検出された。ここでは詳細図を割愛するが、おおよそ南北と東西の主軸方向をもつものが直交するように調査区北半部に集中して分布する状況である。新旧関係は、主軸方位を東西にもつものより南北にもつものの方が遺構の切り合い関係から新しい傾向にあると言える。

2類 幅狭の長方形土坑

47基検出された。本類は1類より長軸が短いというだけで、厳密には1類との区分は困難であると言える。1類に比べ、調査区全域にも広がりを見せる傾向がある。

194号土坑

遺構 (第71図、第33表)

[位置] (D-5) グリッド。

[構造] 140Hを切る。壁面は上方に向かって広がり、坑底面は平坦である。(規模) 1.95×0.95m。(深さ) 0.47m。(長軸方位) N-22°-E。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを多く、炭化物粒子・灰を含む暗黄褐色土を基調とする。

[遺物] 陶器・土器の小破片が数点出土したが、図示できなかった。

[時期] 中・近世。

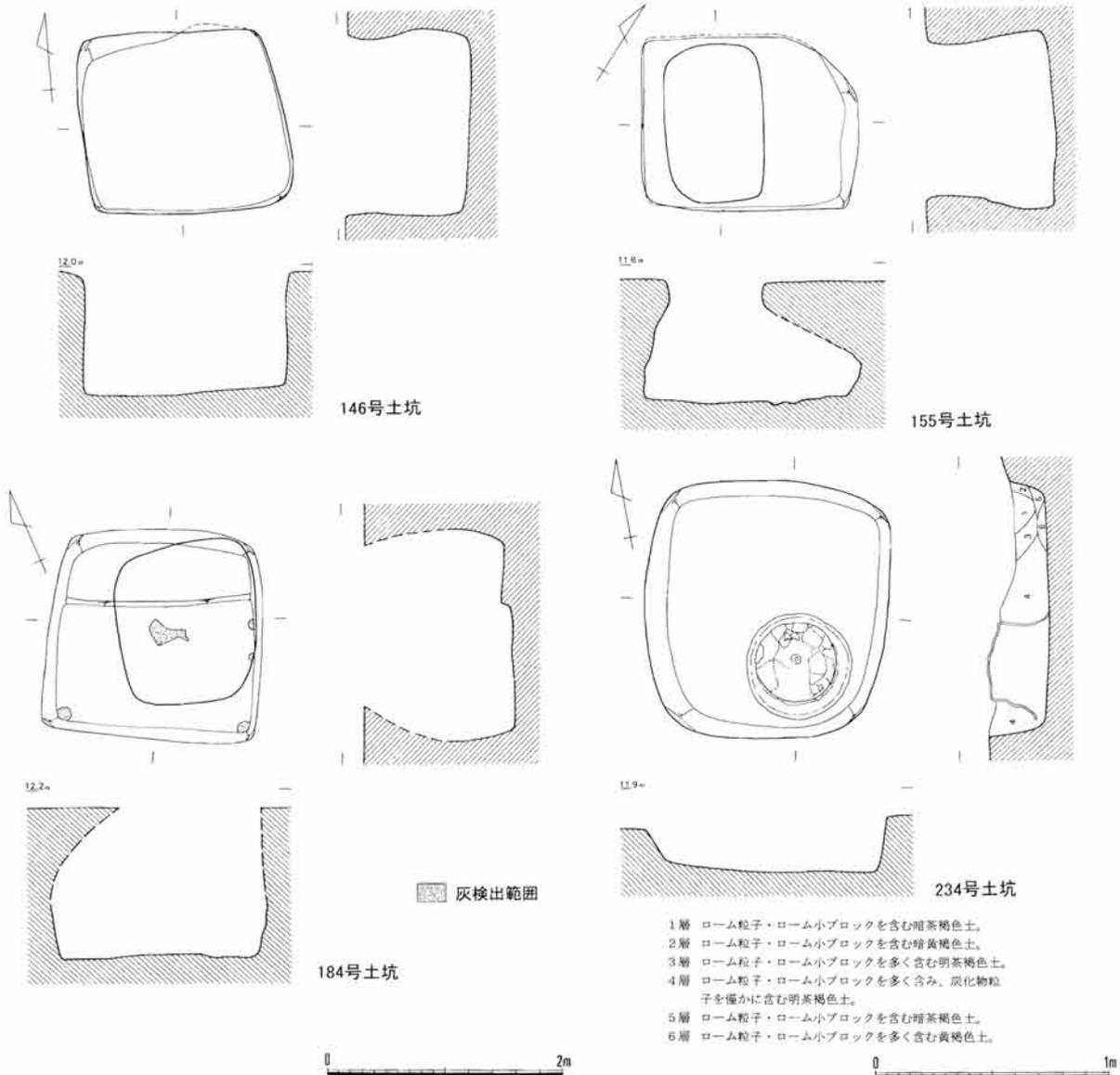
[所見] 炭化物・灰については、サンプリングし自然科学分析を行った。結果は付編参照。

246号土坑

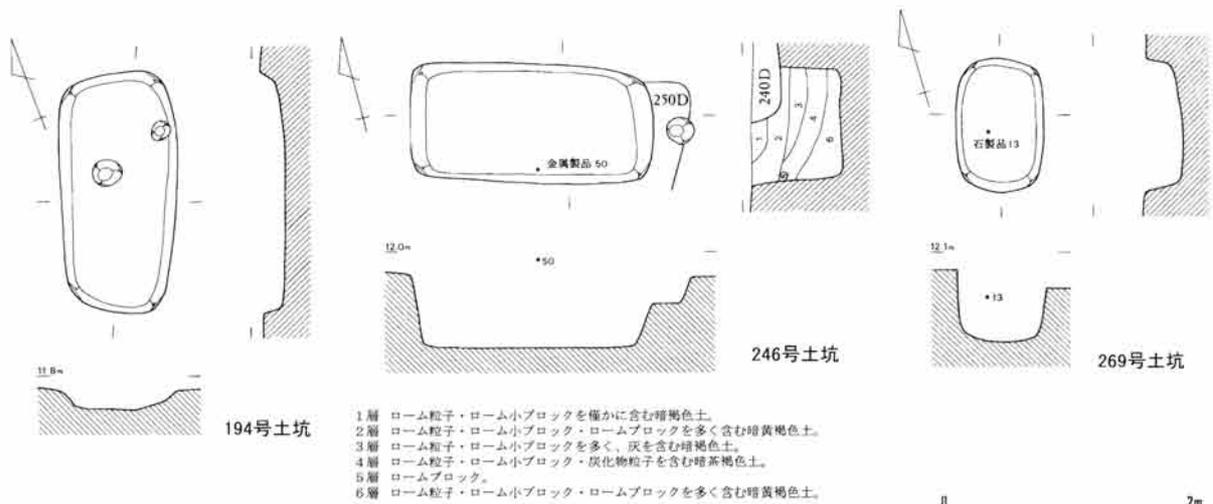
遺構 (第71図、第33表)

[位置] (C-4) グリッド。

[構造] 240Dに切られ、250・296Dと重複する。壁面は上方に向かって直線的に広がる。坑底面は平坦である。(規模) 1.94×0.95m。(深さ) 0.72m。(長軸方位) N-70°-W。(覆土) 6層に分層された。



第70図 土坑A群 (1/60・1/30)



第71図 土坑B群2類 (1/60)

[遺物] 陶器・土器の小破片と鉄製品・銅製品・板碑が出土した。

[時期] 中・近世。

[所見] 銅製品に付着した土壌と覆土3層については、サンプリングし自然科学分析を行った。結果は付編参照。

遺物 (第93図40・50、図版42-1、第40・43表)

図版42-1は土器(埴埴)の小破片である。

鉄製品(第93図40)は不明品で、銅製品(第93図50)は門扉飾りと考えられる。門扉飾りについては、遺構確認の際に検出され、厳密には遺構の掘り込み中ではなかったため、本遺構に伴わない可能性もありうる。

269号土坑

遺構 (第71図、第33表)

[位置] (C-4) グリッド。

[構造] 240・265・271Dと重複する。壁面はほぼ垂直で、坑底面は平坦である。(規模) 1.07×0.70m。(深さ) 0.55m。(長軸方位) N-20°-E。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 石製品1点が出土した。

[時期] 中・近世。

遺物 (第91図14、第42表)

石製品(石臼)である。

3類 幅広の長方形土坑

11基が検出された。いずれも時期は近世以降と思われ、用途などは不明である。大量の瓦片が出土した210Dはゴミ穴として掘られたものであろう。

192号土坑

遺構 (第72図、第33表)

[位置] (D-4) グリッド。

[構造] 140Hを切り、32Mと重複する。壁面は上方に向かってやや広がり、坑底面は平坦である。(規模) 2.65×2.13m。(深さ) 0.62m。(長軸方位) N-11°-E。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを多く、小石を含む暗黄褐色土を基調とする。

[遺物] 陶磁器と銭貨1点が出土した。

[時期] 近世(18世紀後～19世紀初)。

遺物 (第85図1、第94図8、第40・44表)

第85図1は磁器(染付端反碗)、第94図8は銭貨(熙寧元宝)である。

210号土坑

遺構 (第72図、第33表)

[位置] (B-5) グリッド。

[構造] 141Hを切り、166・211・212・240Dと重複する。2基の重複土坑であろうが、A・Bとして扱った。いずれも壁面は上方に向かってやや広がり、底面は平坦である。〈210D-A〉(規模) 2.11×1.48m。(深さ) 0.62m。(長軸方位) N-63°-W。〈210D-B〉(規模) 不明×1.58m。(深さ) 0.48m。(長軸方位) N-58°-W。

[遺物] 陶磁器・土器・瓦が多く出土した。その他、土製品・石製品・鉄製品・銅製品が出土した。

[時期] 近世(19世紀中)。

遺物 (第85図1・2、第93図9・10・38・47、第95図6～9、図版45-1-5、第40・41・43・45表)

第85図1・2は陶器(灯明皿)、図版45-1-5は土製品(素焼人形)である。第93図9・10・38は鉄製品で、9・10は釘、38は不明品、第93図47は銅製品(煙管)である。第95図6～9は瓦である。

257号土坑

遺構 (第72図、第33表)

[位置] (C・D-4) グリッド。

[構造] 251Dを切り、259・260Dと重複する。壁面は上方に向かってやや広がり、坑底面は平坦である。(規模) 2.05×1.50m。(深さ) 0.63m。(長軸方位) N-10°-E。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土と黒褐色土の互層の覆土を基調とする。南西コーナーからは炭化材が出土した。

[遺物] 土器が数点出土したが、図示できるものはなかった。

[時期] 中・近世。

[所見] 炭化材については、サンプリングし自然科学分析を行った。結果は付編参照。

311号土坑

遺構 (第72図、第33表)

[位置] (B-4) グリッド。

[構造] 30Mに切られる。壁面は上方に向かって広がり、坑底面は平坦である。(規模) 1.77×1.43m。(深さ) 0.72m。(長軸方位) N-18°-E。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗褐色土を基調とする。

[遺物] 土器1点が出土したが、図示できなかった。

[時期] 中・近世。

316号土坑

遺構 (第72図、第33表)

[位置] (D-3) グリッド。

[構造] 149H・317Dを切る。壁面は上方に向かって広がり、坑底面は幾分中央が盛り上がっている。(規模) 2.03m×不明。(深さ) 0.30m。(長軸方位) N-13°-E。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロック・小石を含む暗褐色土を基調とする。

[遺物] 土器が数点出土したが、図示できるものはなかった。

[時期] 中・近世。



第72図 土坑B群3類 (1/60)

319号土坑

遺構 (第72図、第33表)

[位置] (B-3) グリッド。

[構造] 325Dを切る。壁面は上方に向かって広がり、坑底面は平坦である。(規模) 1.85×1.03m。(深さ) 0.29m。(長軸方位) N-15°-E。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。

[遺物] 陶器・土器が数点出土した。

[時期] 中世(16世紀後)。

遺物 (第87図1、第40表)

陶器(折縁皿)である。

4類 火床部を有する土坑

178・179・187・214・215Dの5基が検出された。いずれもコーナー部分に火床部と思われる掘り込を有するもので、179Dを除きすべてにおいて炭化物・灰が検出された。179Dについては炭化物の検出は無かったが掘り込みの天井部に煤状の付着物が認められ、明らかに火を焚いたであろう痕跡が確認できた。さらに、179Dは東側が調査区外に在るため詳細は不明であるが、他の土坑の火床部はいずれも長辺側の壁面に向かい左下隅に掘り込まれている。

長軸方位では、215Dを除き西に70°前後の傾きを持つなどの特徴を備えている。同様の土坑は隣接する城山遺跡第1地点で報告されており、その中には火床部を2基持つものも存在する。また、用途としては火床部から炭化物や骨片等が検出されたとして、墓坑の可能性が指摘されていた(佐々木・尾形1988)。しかし、今回の調査では、城山遺跡第1地点で骨片と思われた同様な白色物質は、土壌試料の分析により植物遺体であることが判明した。このことから、今回、貯蔵穴やゴミ穴であった可能性が指摘されている(付編参照)が、基本的に火床部を有するということから、この土坑内に人が入り、火を焚いたことは明らかな事実である。そのため、いわゆる「小竪穴状遺構」の範疇で捉えられるものと考えられるが、時期・用途については、依然として詳細不明と言うしかないであろう。

ただ、本類土坑が検出される遺跡は、市内でも城山遺跡内の柏城跡内部にのみ特異的に検出されるということは動かせない事実である。そのため、柏城関連の遺構であると推察することが最も自然であると考えられよう。

178号土坑

遺構 (第73図、第33表)

[位置] (C-5・6) グリッド。

[構造] 202・219Dに切られる。(規模) 1.90×1.57m。(深さ) 0.99m。(長軸方位) N-74°-W。(火床部) 北西コーナーに径0.65m程の円形の火床部掘り込みを持つ。壁への掘り込みは0.28mで、坑底面より0.10m程窪んでいる。掘り込み内には炭化物・灰が堆積し、火を焚いていた痕跡が確認できる。

[遺物] 陶磁器・土器・瓦が出土したが、図示できるものはなかった。

[時期] 近世。

[所見] 火床部及び坑底上から検出された炭化物・灰はサンプリングし自然科学分析を行った。結果は付編参照。

179号土坑

遺 構 (第73図、第33表)

[位置] (C-6・7) グリッド。

[構造] 東側は調査区域外に出る。(規模) 不明×1.87m。(深さ) 0.80m。(長軸方位) N-65°-W。(火床部) 北西コーナーに火床部掘り込みを持つ。壁への掘り込みは0.30mである。

[遺物] 陶器・土器・板碑が出土した。

[時期] 近世(17世紀初)。

遺 物 (第85図1~3、図版41-4、第40表)

第85図1・2は陶器で、1・2は挿鉢、3は土器(皿)である。図版41-4は志野丸皿である。

187号土坑

遺 構 (第73図、第33表)

[位置] (D-6) グリッド。

[構造] 253Dに切られる。(規模) 2.37×1.70m。(深さ) 1.03m。(長軸方位) N-67°-W。(火床部) 北西コーナーに一辺0.55mの方形の掘り込みを持つ。壁への掘り込みは0.15mで、坑底面より0.05m程窪んでいる。掘り込み内には炭化物・灰が堆積し、火を焚いていた痕跡が確認できる。また、壁立ち上がり部及び各コーナーに斜行する小ピット状の掘り込みを確認した。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。

[遺物] 土器・鉄製品・銅製品・板碑が出土した。

[時期] 中・近世。

[所見] 火床部から検出された炭化物・灰はサンプリングし自然科学分析を行った。結果は付編参照。

遺 物 (第93図49、第43表)

銅製品(刀装具)で柄の縁であろう。

214号土坑

遺 構 (第73図、第33表)

[位置] (C-5) グリッド。

[構造] 201Dに切られる。(規模) 2.40×1.74m。(深さ) 1.09m。(長軸方位) N-72°-W。(火床部) 北西コーナーに径0.65m程の火床部掘り込みを持つ。壁への掘り込みは0.24mで、坑底面より0.06m程窪んでいる。掘り込み内には炭化物・灰が堆積し、火を焚いていた痕跡が確認できる。(覆土) 10層に分層された。

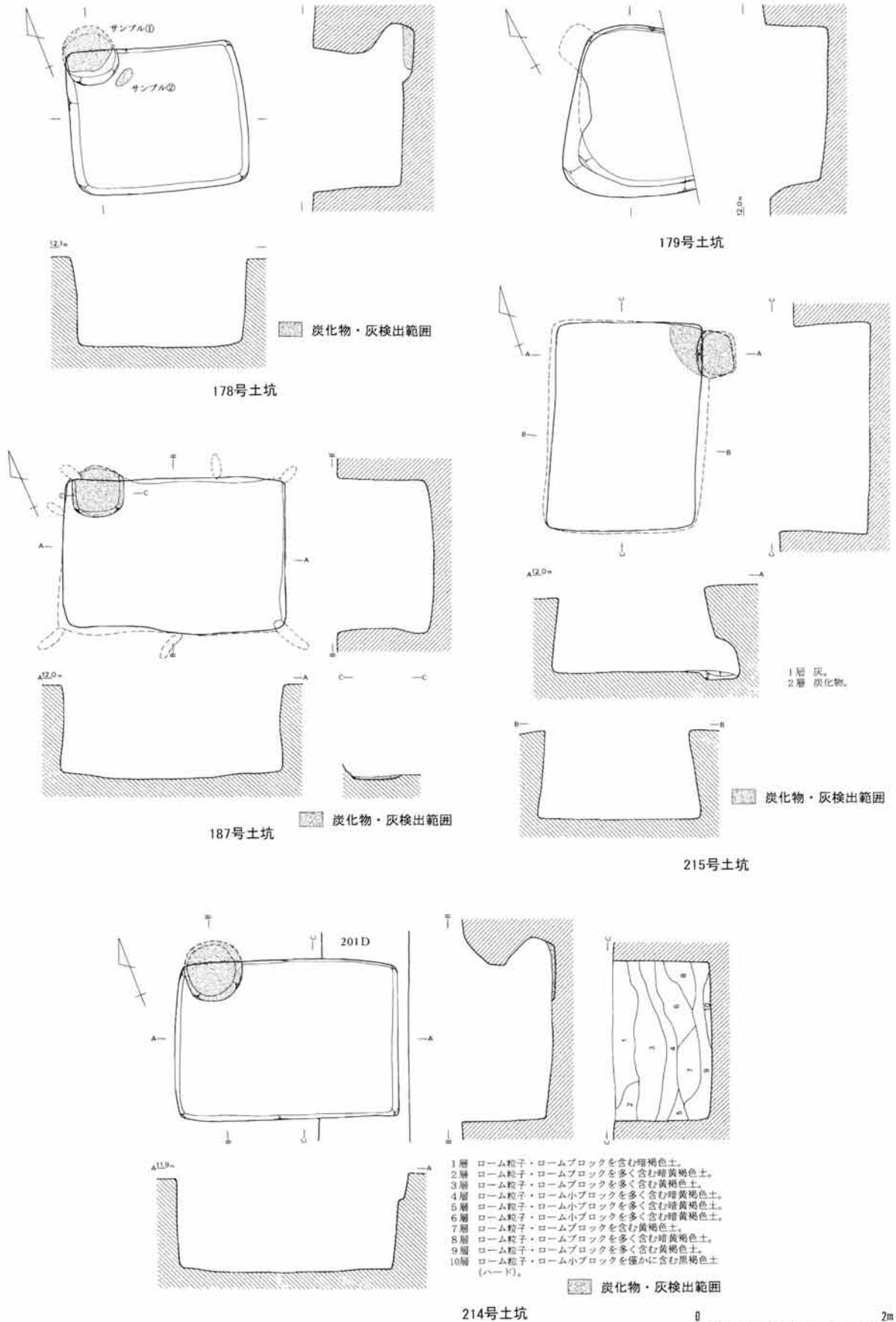
[遺物] 陶磁器・土器・板碑が出土した。

[時期] 近世。

[所見] 火床部から検出された炭化物・灰はサンプリングし自然科学分析を行った。結果は付編参照。

遺 物 (図版41-1、第40表)

陶器(稜皿)である。



第73図 土坑B群4類 (1/60)

215号土坑

遺 構 (第73図、第33表)

[位置] (B・C-6) グリッド。

[構造] 200・209Dに切られる。(規模) 断面形は台形状に坑底部に向かい緩やかに広がり、開口部で2.27×1.53m。坑底部で2.31×1.70mを測る。(深さ) 1.02m。(長軸方位) N-17°-E。(火床部) 北東コーナーに火床部掘り込みを持つ。0.50×0.22mの長方形で、壁への掘り込みは0.30m。坑底面より0.08m程窪んでいる。掘り込み内には炭化物・灰が堆積し、火を焚いていた痕跡が確認できる。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調とする。

[遺物] 陶磁器・土器の破片が数点出土したが、図示できるものはなかった。

[時期] 近世。

[所見] 火床部から検出された炭化物・灰はサンプリングし自然科学分析を行った。さらに、土壌分析において昆虫遺体(コクヌスト)が検出されている。結果は付編参照。

C群 円形・楕円形の土坑

174・180・196・197・204・220・224・226・281・293・323・324Dの12基が該当する。ここでは以下に特徴的なものについて述べるが、個別に記述のない土坑についての用途等の詳細は不明である。なお、196Dについては、深さ2.80mという深い遺構であり、通常の土坑とは区別するべきものかもしれない。

174号土坑

遺 構 (第74図、第34表)

[位置] (C-6) グリッド。

[構造] 173・175・203・204Dと重複する。(形態) 楕円形を呈する。壁面は上方に向かってやや広がり、坑底面は平坦である。(規模) 1.03×0.80m。(深さ) 0.46m。(長軸方位) N-S。

[遺物] 土器が2点が出土したが、図示できなかった。

[時期] 中・近世。

180号土坑

遺 構 (第74図、第34表)

[位置] (C・D-6・7) グリッド。

[構造] 東側は調査区外である。(形態) 開口部の平面形は楕円形を呈する。壁面は上方に向かってやや広がるが、部分的には坑底付近が広がりオーバーハングする部分も見られる。坑底面は途中で貼床状のローム充填土が確認でき、その面を掘り下げると立ち上がり部分から一段下がって平坦になっている。(規模) 不明。(深さ) 0.85m。(長軸方位) N-60°-E。

[遺物] 陶磁器・土器・鉄製品・板碑が出土した。

[時期] 近世。

[所見] 本土坑は、平面形からC群に分類したが、掘り込みが深く、壁がオーバーハングするなど細部の構造から見ると本群には当てはまらないものと思われる。東側が調査区外になり詳細は不明であるが、地下室の可能性もある。さらに、坑底上には貼床状の硬化面が見られたことから人の出入りがあったことが伺える。

遺物 (第93図5、第43表)

鉄製品 (釘) である。

196号土坑**遺構** (第74図、第34表)

[位置] (D-5) グリッド。

[構造] 140Hを切る。(形態) 開口部の平面形は円形、坑底面は長方形を呈する。断面形は上方に向かって広がり漏斗状を呈している。深さ1.30m程から下部はほぼ垂直に垂下する。また、深さ約1.80mの壁面には足掛け穴と思われる掘り込みが1ヶ所確認できた。坑底面は平坦である。(規模) 開口部径1.60m・坑底部1.14×0.90m。(深さ) 2.80m。(長軸方位) N-30°-E。

[遺物] 磁器1点が出土したが、図示できなかった。

[時期] 近世。

[所見] 当初、井戸跡として精査したものであるが、深さ2.80mで坑底面が確認されたため、土坑として取り扱った。しかしこの遺構については、底面の浸食あるいは浸水の痕跡は確認できなかったが、上総掘りによる井戸跡の可能性もある。

197号土坑**遺構** (第74図、第34表)

[位置] (D-5) グリッド。

[構造] 140Hを切る。壁面は上方に向かってやや広がり、坑底面は平坦である。(規模) 不明×0.94m。(深さ) 0.31m。(長軸方位) N-S。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土を基調とする。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 中・近世。

220号土坑**遺構** (第74図、第34表)

[位置] (C-5) グリッド。

[構造] 201Dに切られる。壁面は上方に向かって広がり、坑底面は平坦である。(規模) 不明×1.20m。(深さ) 0.29m。(覆土) 4層に分層される。炭化物粒子・灰が含まれる。

[遺物] 陶磁器・土器・土製品が出土した。

[時期] 近世。

遺物 (第90図1、第41表)

土製品 (土錘) である。

224号土坑**遺構** (第74図、第34表)

[位置] (E-5) グリッド。

[構造] 1Mを切る。壁面は上方に向かって広がり、坑底面は中央付近がやや盛り上がっている。(規模) 1.03×1.00m。(深さ) 0.56m。(長軸方位) N-4°-E。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを多く、炭化物粒子を含む明茶褐色土を基調とする。

[遺物] 土器1点が出土したが、図示できなかった。

[時期] 中・近世。

226号土坑

遺構 (第74図、第34表)

[位置] (C-5) グリッド。

[構造] 225Dに切られる。壁面は上方に向かって広がり、坑底面は平坦である。(規模) 1.64×1.14m。(深さ) 0.29m。(長軸方位) N-80°-W。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 陶磁器・土器・瓦が出土したが、図示できるものはなかった。

[時期] 近世。

281号土坑

遺構 (第74図、第34表)

[位置] (D-2) グリッド。

[構造] 壁面は上方に向かって広がり、坑底面は平坦である。(規模) 0.78×0.65m。(深さ) 0.19m。(長軸方位) N-10°-W。(覆土) 上下2層に分層される。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 中・近世。

293号土坑

遺構 (第74図、第34表)

[位置] (D-3) グリッド。

[構造] 32Mに切られる。壁面は上方に向かって広がり、坑底面は平坦である。(規模) 1.50×1.20m。(深さ) 0.36m。(長軸方位) N-76°-W。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

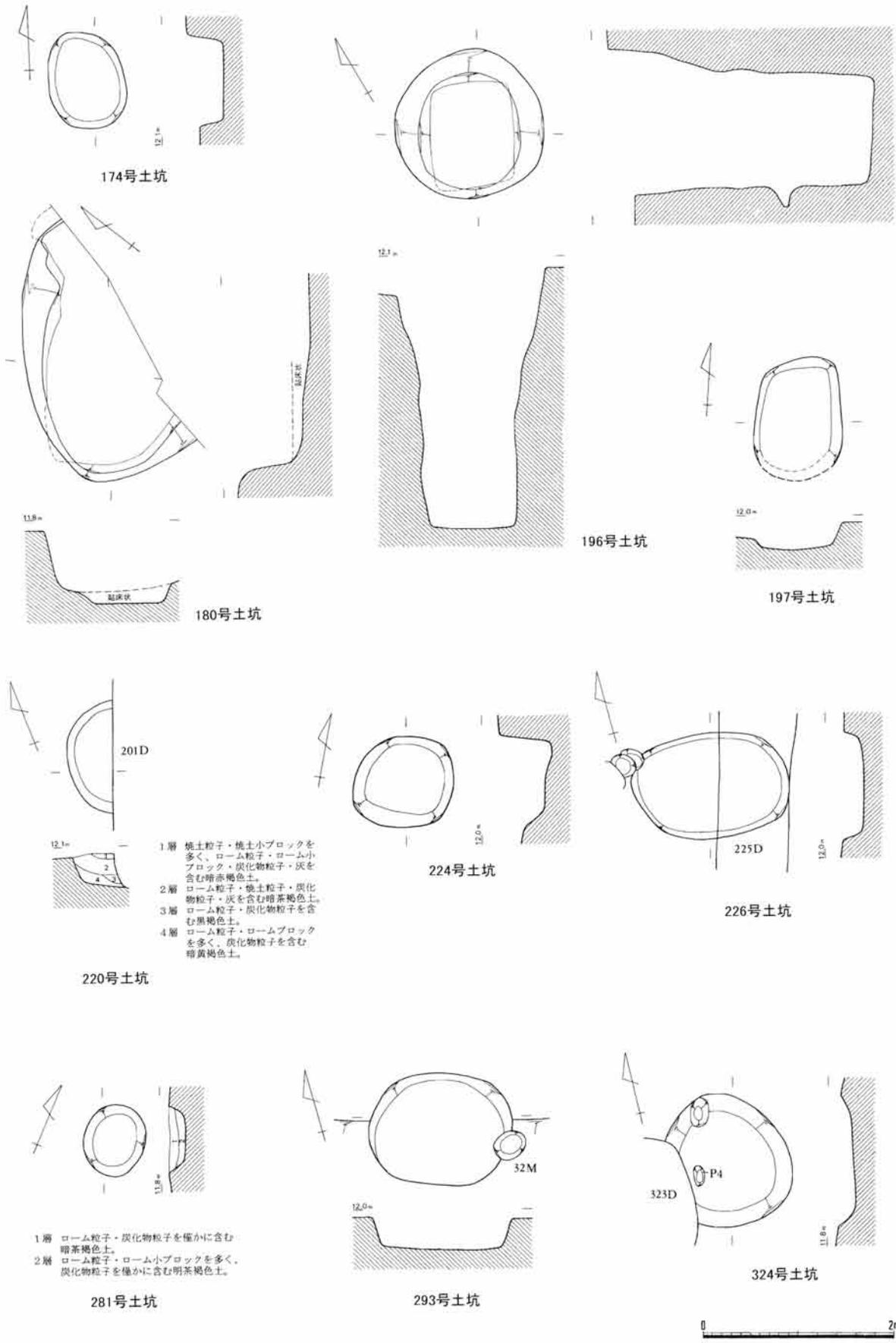
[時期] 中・近世。

324号土坑

遺構 (第74図、第34表)

[位置] (B-3) グリッド。

[構造] 151Hを切り、323Dと重複する。壁面は上方に向かって広がり、坑底面は平坦である。(規模) 不明×1.42m。(深さ) 0.29m。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化材を含む黒褐色土を基調とする。



第74図 土坑C群 (1/60)

[遺物] 土器・鉄製品が出土したが、図示できなかった。

[時期] 中・近世。

D群 不整形の土坑

147・153・157・186・229・260・318・325Dの8基が検出された。そのうち、147・153・157・186・229Dについては近・現代のゴミ穴と思われる。その他の土坑についての詳細は不明である。

147号土坑

遺 構 (第75図、第35表)

[位置] (B-6) グリッド。

[構造] 132Hを切る。平面形は不整形を呈し、坑底面も凹凸が著しい。(規模) 不明×2.07m。(深さ) 0.60m前後。(長軸方位) N-67°-E。(覆土) 3層に分層される。

[遺物] 確認段階から瓦が多く出土し、陶磁器・土器・石製品・鉄製品も出土している。

[時期] 近世(19世紀中)。

[所見] ゴミ穴と思われる。

遺 物 (第84図1～7、第91図3・4、第93図1、第95図1～5、図版40-8・9、第40・42・43・45表)

第84図1・図版40-8・9は陶器で、1は甕類、8は丸皿・反り皿、9は徳利である。第84図2・3・4・5は磁器で、2は瑠璃釉小坏、3は染付合子、4は染付碗蓋、5は染付端反碗である。第84図6・7は土器で、6は焜炉、7は火鉢である。第91図3・4は石製品(砥石)、第93図1は鉄製品(釘)、第95図1～5は瓦である。

186号土坑

遺 構 (第75図、第35表)

[位置] (B-6) グリッド。

[構造] 132を切り、152Dと重複する。平面形は不整形を呈し、坑底面も凹凸が著しい。(規模) 2.41×1.60m。(深さ) 0.85m。(長軸方位) N-26°-E。

[遺物] 磁器1点が出土したが、図示できなかった。

[時期] 近世。

[所見] 遺物量は少ないが、形態的に不整形な特徴は147Dに類似するため、ゴミ穴と思われる。

229号土坑

遺 構 (第75図、第35表)

[位置] (B-5) グリッド。

[構造] 不整形を呈し、坑底面は比較的平坦である。(規模) 1.92×1.72m。(深さ) 0.30m。(長軸方位) N-34°-W。

[遺物] 陶磁器・土器・鉄製品・板碑が出土した。

[時期] 近世(19世紀前～中)。

遺 物 (第85図1、第40表)

陶器（仏餉具）である。

318号土坑

遺構（第75図、第35表）

〔位置〕（B-3）グリッド。

〔構造〕 30Mと重複する。不整形を呈し、坑底面は凹凸が著しい。（規模）1.92×1.80m。（深さ）0.66m。（長軸方位）N-75°-W。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗褐色土を基調とする。

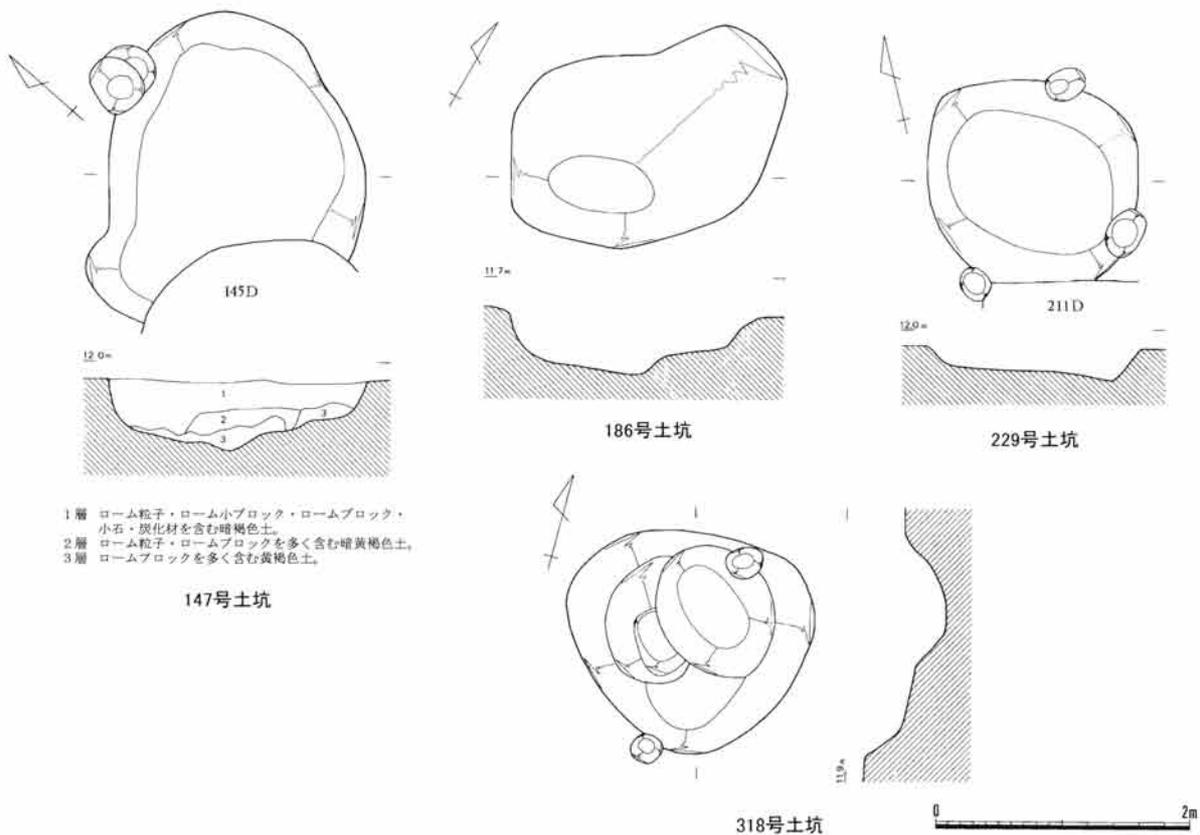
〔遺物〕 陶磁器が数点出土したが、図示できるものはなかった。

〔時期〕 近世。

E群 ^{むろ}地下室・地下坑

145・149・183・188・191・223・270・312Dの8基が該当する。ここでは地下室・地下坑（江戸遺跡研究会編 2001）として扱った。いずれの土坑についても墓坑としての性格はなく、近世以降の貯蔵用の地下室やイモグラ、あるいはコウジムロと呼ばれるものと思われる。単純なものは、1 堅坑1 主体部という構造であり、今回これを1類とし、さらに1類以外の複雑な構造の特殊タイプを2類として細分した。

なお、本群土坑の191・270・312Dからは、人骨片や獣骨片（ウマ）が検出されているが、何れも天



第75図 土坑D群（1/60）

井部の崩落の際に混入したものと考えられる。こうした構造をもつ土坑に関しては、例え遺物が坑内あるいは坑底直上から出土したとしてもその出土状況を判断し、遺構・遺物を直接結びつけるにはワンクッション置いて検討する必要がある。特に191Dに関しては、セクション図を掲載していないため理解しづらいが、崩落した天井部ローム層の上部から人骨・六文銭が出土したことが明らかであるため、本土坑に伴うものではないと判断した。

1類 1 豎坑 1 主体部タイプ

149号土坑

遺構 (第36表)

[位置] (B-6) グリッド。

[構造] 地下室であると思われるが、大部分が崩落しており詳細は不明。(長軸方位) N-11°-E。(入口豎坑部) 主軸に対して横長の長方形で0.75×0.90mを測る。(主体部) 平面形は径2.00~2.40mの不整円形を呈する。

[遺物] 陶磁器・土器・鉄製品・瓦が出土した。

[時期] 近世以降(19世紀中~後)。

遺物 (第84図1~3、図版40-4~6、第93図2、第40・43表)

第84図1・図版40-5は陶器で、1は播鉢、5は直縁大皿である。第84図2・3・図版40-6は磁器で、2は染付小坏、3は白磁小坏、6は染付丸碗、図版40-4は土器(手焙り?)、第93図2は鉄製品(釘)である。

191号土坑

遺構 (第76図、第36表)

[位置] (D・E-5) グリッド。

[構造] 地下室である。主体部天井は崩落していた。(入口豎坑部) 開口部は楕円形を呈し、主軸に対し横長の形態をもつ。規模は2.10m×1.50mである。坑底面はほぼ平坦で、1.10×0.80mのやや不整な長方形を呈する。深さは確認面から2.20mである。主体部との連絡は0.50m程の段差をもつ。(主体部) 底部平面形は2.90×2.60mの長方形を呈する。天井部は崩落しており、残存している壁面高は1.60mを測る。(主軸方位) N-5°-E。

[遺物] 陶磁器・土器・鉄製品・銭貨・瓦・板碑・人骨が出土した。人骨の鑑定については、付編参照。

[時期] 近世。

[所見] 人骨・銭貨(六文銭)が出土しているが、主体部の天井が崩落した際に天井上にあった墓坑が崩壊し混入したものと考えられ、本土坑に伴うものではない。

遺物 (第93図28、第94図2~7、第43・44表)

第93図28は鉄製品(包丁?)、第94図2~7は銭貨である。

223号土坑

遺構 (第77図、第36表)

[位置] (B・C-4・5) グリッド。

[構造] 地下室である。(入口豎坑部・連絡横坑部) 入口豎坑部の開口部は隅丸長方形を呈し、主軸に

対し横長の形態をもつ。規模は1.10×0.98mである。坑底面は0.90×0.70mの長方形を呈する。深さは1.75mである。連絡横坑部は長さ0.50m・高さ0.70mで、坑底は奥に行くにつれて下降しており、主体部との連絡は0.45m程の段差をもつ。(主体部)坑底面は2.25×1.95mの長方形を呈する。底面はほぼ平坦で、天井部までの高さは約1.30mである。(主軸方位) N-16°-E。

[遺物] 陶器・土器・石製品・鉄製品・銭貨・瓦・板碑が出土した。

[時期] 近世(17世紀前半)。

遺物 (第86図1~8、第91図5、第93図12・13・32、第94図10・11、第40・42~44表)

第86図1~7は陶器で、1~4は皿、5は小鉢、6は碗、7は播鉢である。第86図8は土器(瓦灯)、第91図5は石製品(砥石)、第93図12・13は釘、32は火打金、第94図10・11は銭貨である。

270号土坑

遺構 (第76図、第36表)

[位置] (D-2) グリッド。

[構造] 地下室である。主体部天井は崩落していた。(入口竪坑部)開口部はほぼ円形を呈し、径約1.70mを測る。坑底面は1.40×1.10mの長方形を呈し、主軸に対して縦長の形態をもつ。深さは1.60mである。壁面には足掛け穴と思われる小横穴が5ヶ所確認できた。主体部との連絡は明確な段差ではなく、スロープ状を呈している。(主体部)底面の平面形は前壁より奥壁の長さが長く、台形状を呈している。前壁2.10m、奥壁2.60m、奥行き2.10mを測る。天井部は崩落していたが、天井部までの高さは残存する壁面から1.30m前後であったと推察される。(主軸方位) N-80°-W。

[遺物] 陶磁器・土器・石製品・鉄製品・板碑が出土した。

[時期] 近世。

遺物 (第91図7、第42表)

石製品(砥石)である。

312号土坑

遺構 (第77図、第36表)

[位置] (C-3) グリッド。

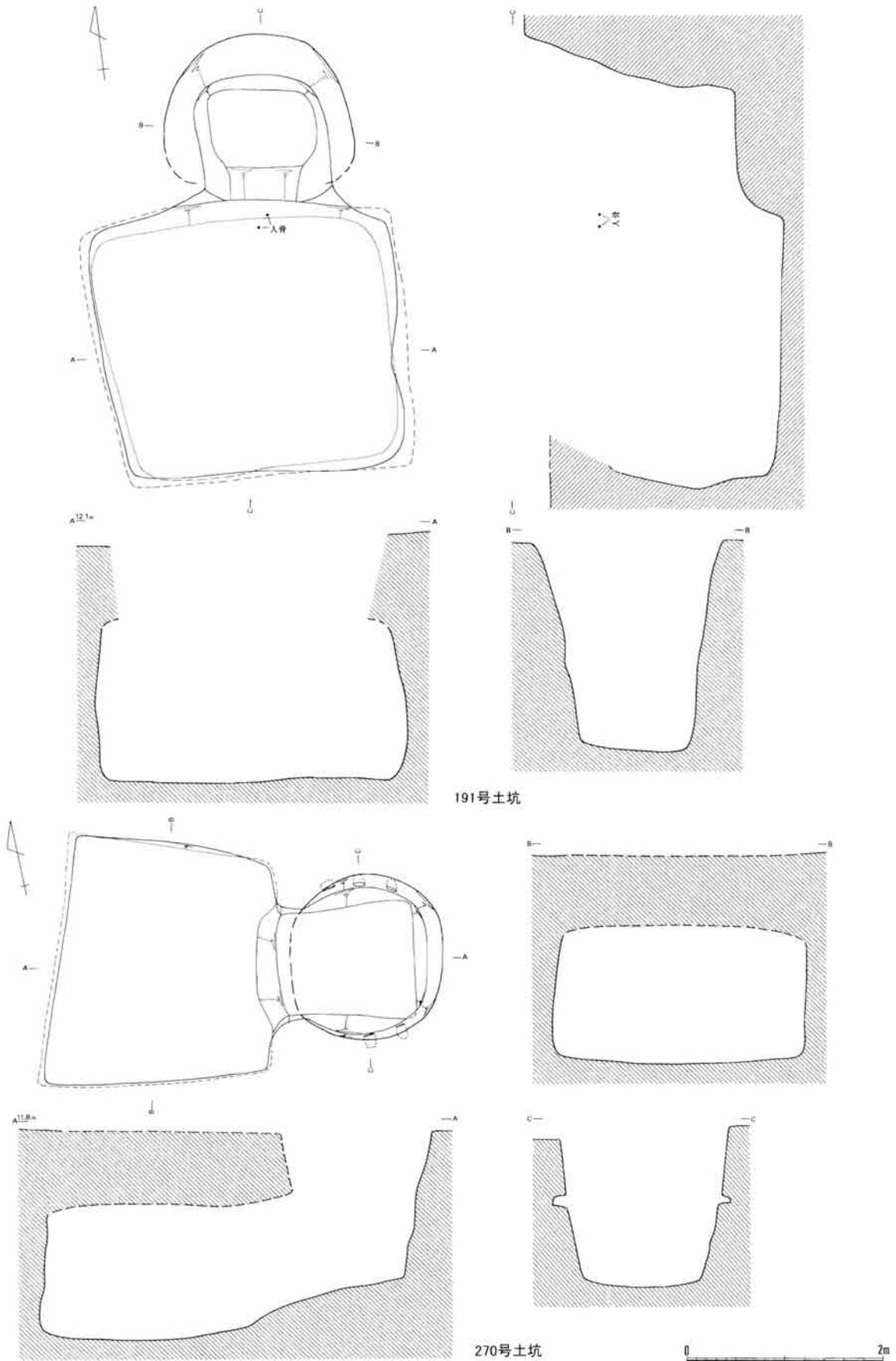
[構造] 地下室である。主体部天井は崩落していた。(入口竪坑部)開口部は楕円形を呈し、主軸に対し横長の形態をもつ。規模は1.70×1.50mである。坑底面は0.85×0.65mの長方形を呈し、深さは2.30mである。主体部との連絡は明確な段差ではないが、比高差0.25m程で主体部に移行する。開口部から底面ににかけ漏斗状の断面形を呈する。(主体部)平面形は主軸に対し横長で、奥に向かい広がる台形状を呈する。最大幅3.10m、奥行き2.00mを測る。底面は平坦で壁は上方にやや膨らみをもつ。天井部は崩落していたが高さは1.50m程度であったと思われる。(主軸方位) N-15°-E。

[遺物] 陶器・土器・石製品・鉄製品・銭貨と馬の骨片が出土した。馬骨の鑑定については、付編参照。

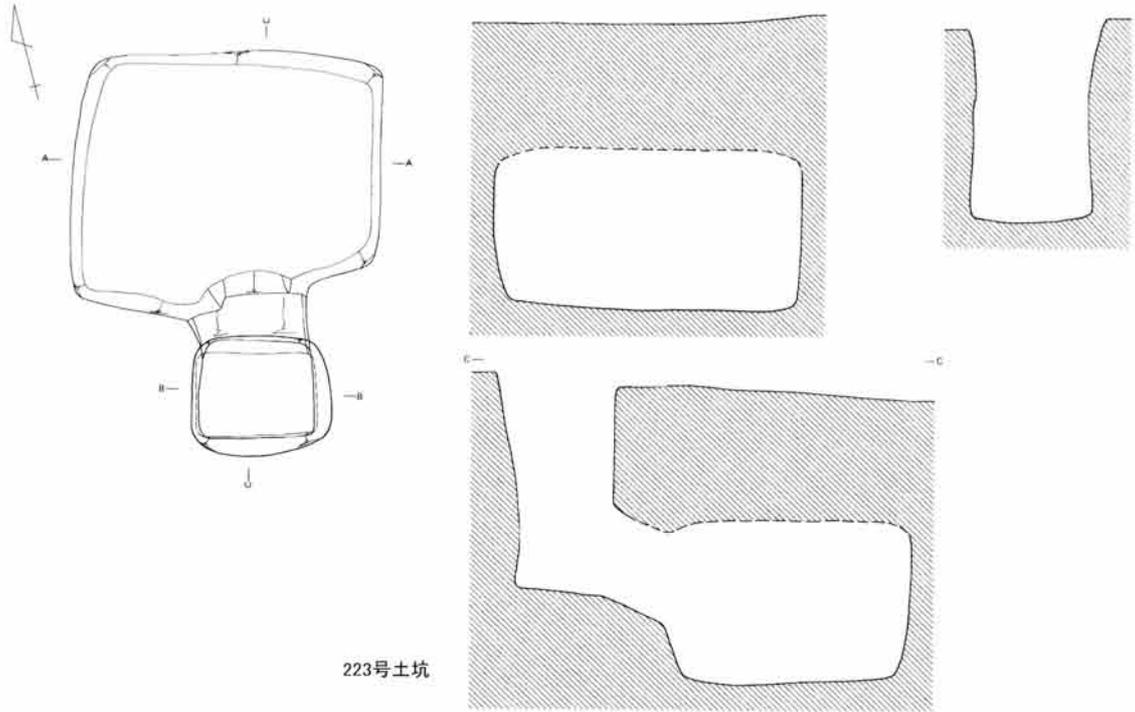
[時期] 近世(17世紀後~18世紀中)。

遺物 (第87図1・2、第91図8、第94図13~15、第40・42・44表)

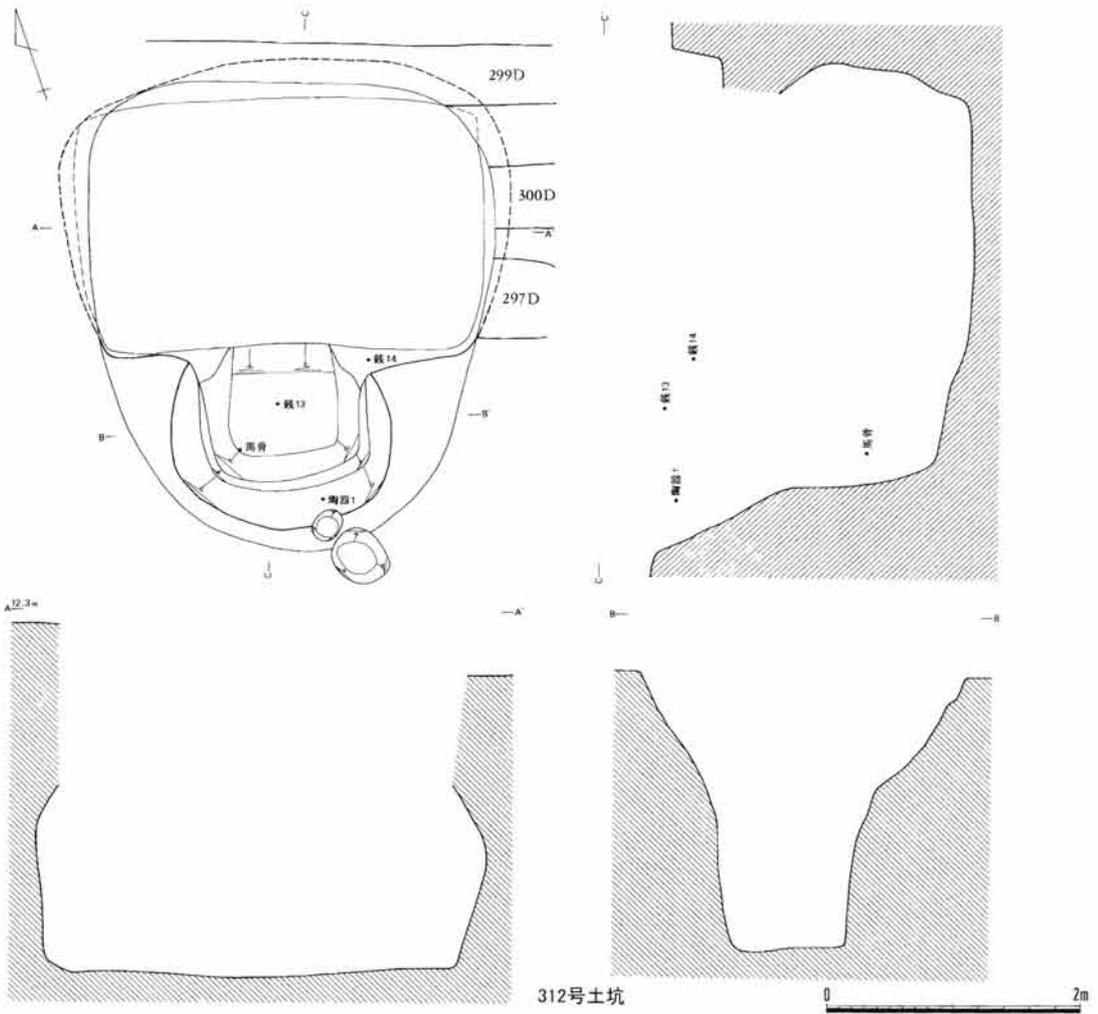
第87図1・2は陶器で、1は皿、2は大甕である。第91図8は石製品(砥石)、第94図13~15は銭貨である。



第76図 土坑E群1類 (191号・270号土坑) (1/60)



223号土坑



312号土坑

第77图 土坑E群1類 (223号・312号土坑) (1/60)

2類 特殊タイプ

145号土坑

遺 構 (第78図、第36表)

[位置] (B-6) グリッド。

[構造] 全長南北9.10m・東西5.20mの規模を測る巨大な地下坑である。構造は南北に延びる横坑を主として、入口竪坑部はやや南側に寄るがほぼそのセンターに位置する。主体部は主軸横坑部から南北1基ずつと東に5基が楕状に延びる横坑状の構造を呈している。ここでは、計7基の横坑状主体部を北側から右回りに主体部A～Gとして説明する。

(入口竪坑部) 入口竪坑部に相当する位置から、「コ」の字状を呈したロームブロックが検出され、この内側が竪坑であることから、このロームブロックは入口部に関連する構築物であると考えられる。このローム構築物は、入口竪坑部の上端を一回り掘り込んで設置されていた。大きさは南北の長さ1.00m・高さ0.50m・厚さ0.20mである。また、東半分が見あたらないことから、この部分は主体部内に崩落欠損したものと思われる。(主軸横坑部) 入口竪坑部から降りて、深さ2.50m程で坑底に到達する。主軸横坑部はそこから南北に延びる通路である。南北方向の長さ5.80m・幅1.30m前後・主軸方位N-20°-E。(横坑状主体部) いずれの主体部の坑底は平坦で、壁はほぼ垂直、天井は緩いアーチ状を呈していた。天井部までの高さは約1.20mであった。〈主体部A〉主軸横坑部との境界は幅が僅かに狭くなる所で区分できる。奥行き1.60m・幅0.65m・長軸方位N-6°-E。〈主体部B〉奥行き1.20m・幅0.78m・長軸方位N-86°-W。〈主体部C〉奥行き2.70m・幅0.70m・長軸方位N-72°-W。〈主体部D〉奥行き4.20m・幅0.80m・長軸方位N-67°-W。〈主体部E〉奥行き4.00m・幅0.80m・長軸方位N-67°-W。〈主体部F〉奥行き1.40m・幅0.70m・長軸方位N-72°-W。〈主体部G〉主体部Aと同様に主軸横坑部との境界は幅が狭くなる所で区分できる。奥行き1.50m・幅0.75m・長軸方位N-15°-E。(照明施設) 主軸横坑部の西側壁面からは照明用具を設置したと思われる掘り込みが確認できた。掘り込みは東に延びる主体部B～Fの背面5ヶ所に位置することから、それぞれの主体部用であることがわかる。ただ、当時の照明具(燭台あるいはロウソク)で主体部の奥まで明るく照らすことができたかは疑問であるため、その具体的な使用方法は不明とするしかない。ここでは、それぞれの掘り込みを照明1～5とする。〈照明1〉主体部Bの背面に設置される。奥行き0.08m・幅0.12m・坑底面からの高さ0.46m。〈照明2〉手前がかなり崩落していた。主体部Cの背面に設置される。奥行き0.04m・幅0.20m・坑底面からの高さ0.90m。〈照明3〉手前がかなり崩落していたがフラット面が僅かに確認できた。主体部Dの背面に設置される。奥行き0.03m・幅0.10m・坑底面からの高さ0.75m。〈照明4〉主体部Eの背面に設置される。奥行き0.12m・幅0.20m・坑底面からの高さ0.75m。〈照明5〉主体部Fの背面に設置される。奥行き0.10m・幅0.14m・坑底面からの高さ0.80m。

[遺物] 陶磁器・土器・鉄製品・銅製品・瓦・板碑が出土した。

[時期] 近世(19世紀中～後)。

[所見] 内部へ進入し精査を行うことは危険であると判断し、重機を使用し、天井部を掘削した後に写真撮影・実測を行った。

遺 物 (第84図1～4、図版40-5～8、第93図34・35・46、第40・43表)

第84図1・2・図版40-5～7は陶器で、1は壺、2は筒形碗、5は馬の目皿、6は片口、7は練鉢である。第84図3・図版40-8は磁器で、3は蓋物、8は染付小坏である。第84図4は土器(焙烙)、第

93図34・35は鉄製品（不明品）、46は銅製品（煙管）である。

183号土坑

遺構（第79図、第36表）

[位置] (D-5・6～E-6) グリッド。

[構造] 全長南北6.80m・東西3.00mを測る地下室である。構造は主体部Aと主体部Bの2つが連結するタイプで、入口竪坑部は、北側の足掛け状の掘り込みをもつ入口Aと主体部Aの東壁に設けられた入口Bの2つが相当するものと思われる。(入口竪坑部) 〈入口A〉北側入口である。開口部は0.75×0.65mの長方形を呈し、主軸に対して横長の形態をもつ。入口竪坑部から降りると、坑底面に達する途中、2ステップの足掛け状の階段を有する。坑底面までの深さは1.90mである。〈入口B〉主体部Aの東壁に設けられた入口である。天井部を重機で掘削した際に同時に破壊してしまったため詳細不明である。坑底面までの深さは2.20mである。(連絡横坑部) 入口Aから入り、主体部Aに通じる通路である。坑底面は平坦で、天井部も真っ平らである。長さ2.00m・幅0.70m・天井部までの高さ1.00m・長軸方位N-15°-Wで、断面形は縦長長方形を呈する。(主体部) 〈主体部A〉径約2.00mの不整円形を呈する。坑底面は平坦で、壁面はほぼ垂直である。天井部までの高さは1.20mである。〈主体部B〉主体部Aから長さ0.70m・幅0.60m程・高さ0.60mの連絡部があり、そこから0.25mの段差で下がった位置に主体部Bがある。平面形は径1.70～1.90mの不整円形を呈し、底面はほぼ平坦であるが奥壁近くに深さ0.05mの小ピットが確認できた。壁面はほぼ垂直で、天井部までの高さは1.10mである。(照明施設) 照明用具を設置したと思われる掘り込みが主体部Aの西・北壁面から3ヶ所、主体部Bの北壁面から1ヶ所確認できた。それぞれの掘り込みを照明1～4として説明する。〈照明1〉主体部Aの西壁面に設置される。奥行き0.14m・幅0.16m・坑底面からの高さ0.65m。〈照明2〉主体部Aの北壁面に設置される。奥行き0.08m・幅0.14m・坑底面からの高さ0.63m。〈照明3〉主体部Aの北壁面に設置される。奥行き0.12m・幅0.18m・坑底面からの高さ0.95m。〈照明4〉主体部Bの北壁面に設置される。奥行き0.10m・幅0.20m・坑底面からの高さ0.71m。

[遺物] 陶磁器・石製品・瓦が出土した。

[時期] 近世（18世紀後～19世紀初）。

遺物（第85図1、第91図12、第40・42表）

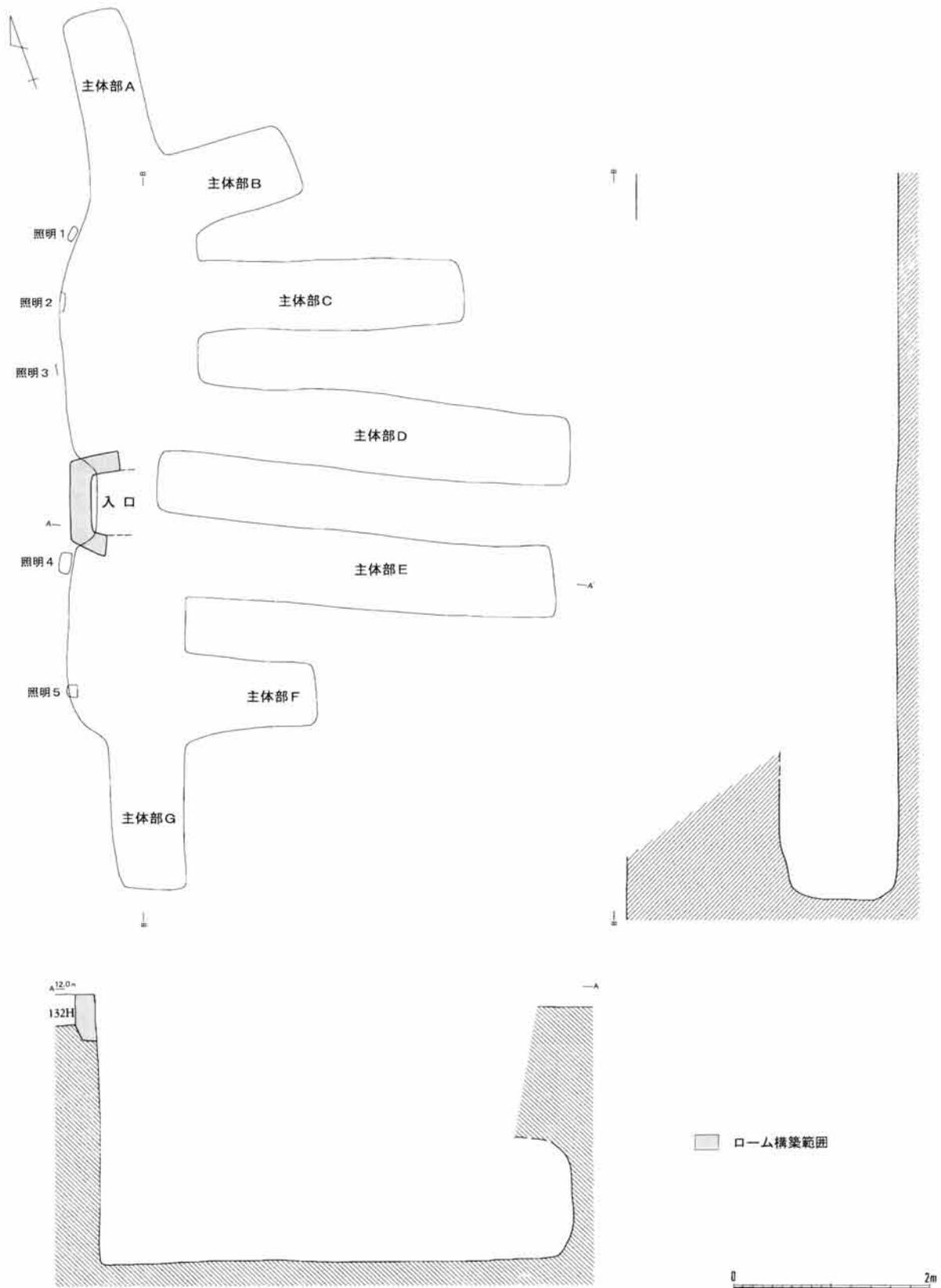
第85図1は磁器（染付蕎麦猪口）、第91図12は石製品（硯）である。

188号土坑

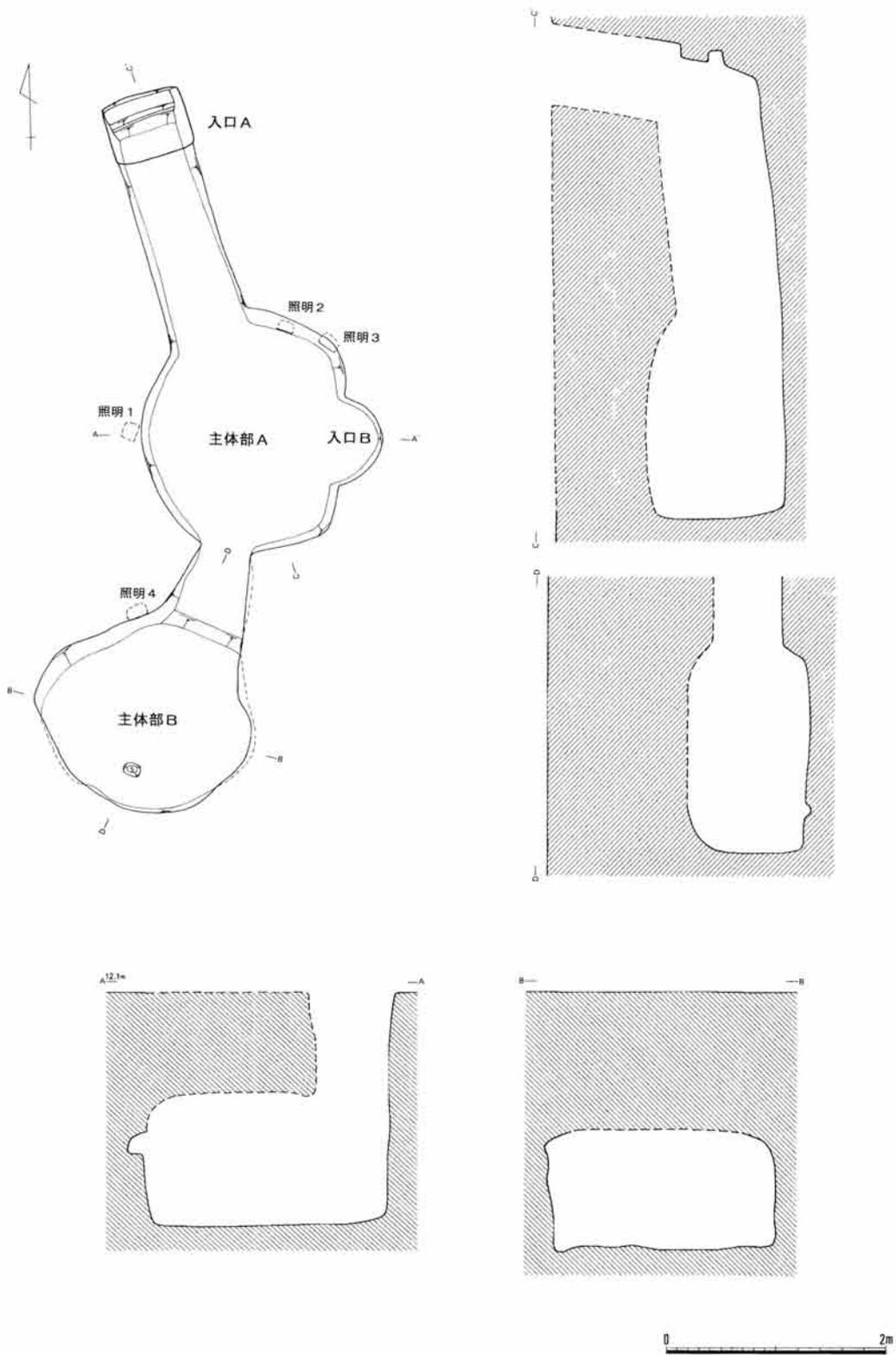
遺構（第80図、第36表）

[位置] (D-6) グリッド。

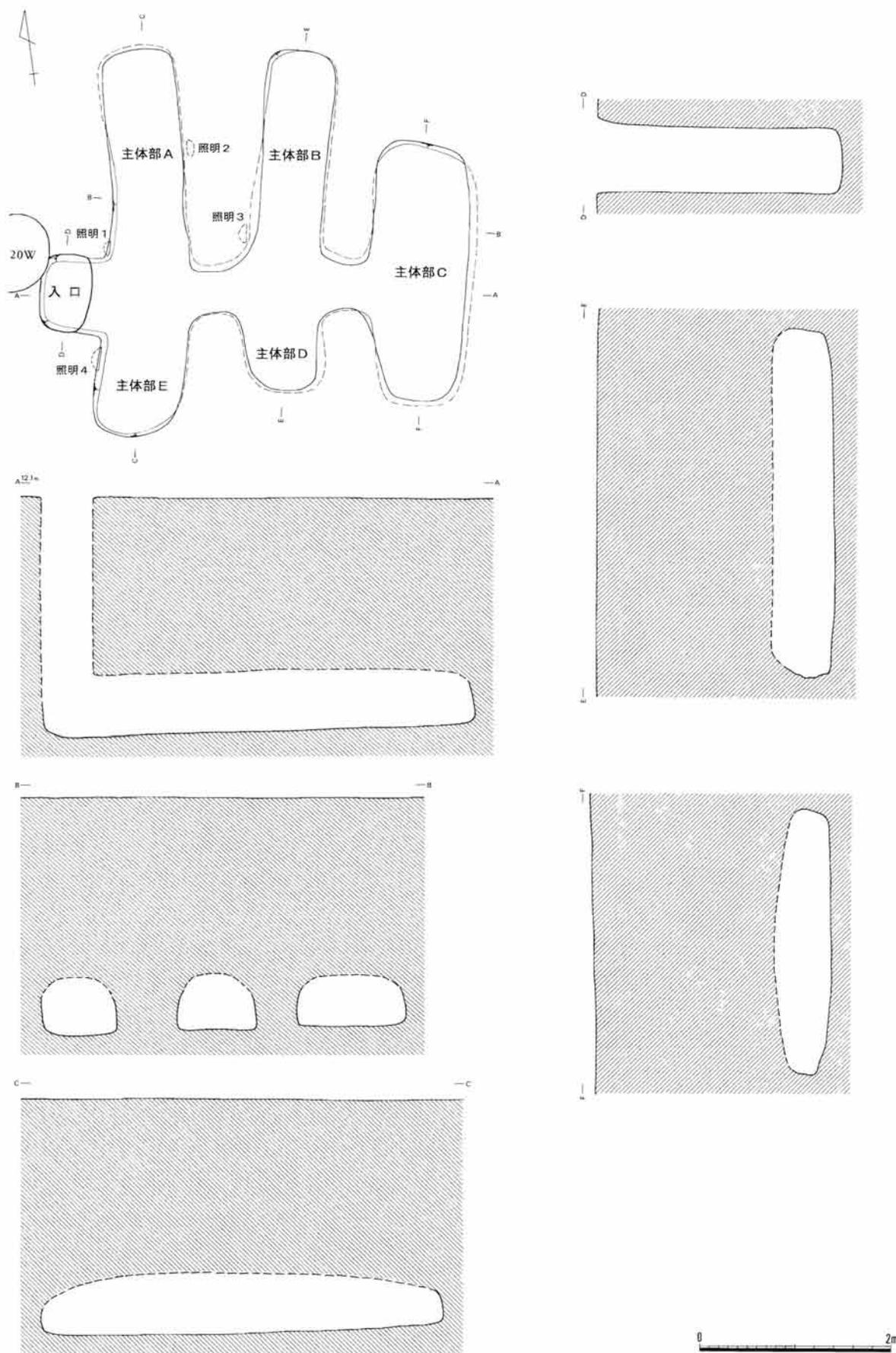
[構造] 全長南北4.20m・東西4.60mの規模を測る巨大な地下坑である。構造は東西に延びる横坑を主軸として、入口竪坑部はその西端に位置する。主体部は主軸横坑部から南北1対2組で4基と東端の1基の計5基で構成され、全体に「王」の字状を呈している。ここでは、主体部を北西のものから右回りに主体部A～Eとして説明する。(入口竪坑部) 開口部の平面形は0.80×0.55mの隅丸長方形を呈し、主軸に対して横長の形態をもつ。坑底面までの深さは2.50mである。(主軸横坑部) 入口竪坑部から降りて、各主体部へ通じる通路である。東西方向の長さは約3.30m、幅は入口竪坑部の近くで0.75m、中



第78図 土坑E群2類(145号土坑)(1/60)



第79図 土坑E群2類 (183号土坑) (1/60)



第80図 土坑E群2類(188号土坑)(1/60)

央と主体部Cの手前でやや狭まり0.50mである。天井部までの高さは0.60m、主軸方位N-82°-Wである。(横坑状主体部) いずれの主体部の坑底は平坦で、断面形はかまぼこ形を呈する。〈主体部A〉奥行き2.20m・幅0.75m・天井部までの高さ0.62m・長軸方位N-7°-E。〈主体部B〉奥行き2.00m・幅0.70m・天井部までの高さ0.60m・長軸方位N-11°-E。〈主体部C〉主軸横坑部の一番突き当たりの主体部である。奥行き1.00m・幅2.70m・天井部までの高さ0.60m・長軸方位N-9°-E。〈主体部D〉奥行き0.90m・幅0.70m・天井部までの高さ0.60m・長軸方位N-5°-E。〈主体部E〉奥行き1.20m・幅0.90m・天井部までの高さ0.60m・長軸方位N-14°-E。(照明施設) 照明用具を設置したと思われる掘り込みが主体部Aの東壁中央から1ヶ所、主体部A・B・Eの主軸横坑部近くから3ヶ所確認できた。それぞれの掘り込みを照明1~4として説明する。〈照明1〉主体部Aの主軸横坑部近くの西壁面に設置される。奥行き0.06m・幅0.16m・坑底面からの高さ0.28m。〈照明2〉主体部Aの東壁中央に設置される。奥行き0.08m・幅0.16m・坑底面からの高さ0.32m。〈照明3〉主体部Bの主軸横坑部近くの西壁面に設置される。奥行き0.08m・幅0.18m・坑底面からの高さ0.30m。〈照明4〉主体部Eの主軸横坑部近くの東壁面に設置される。奥行き0.08m・幅0.24m・坑底面からの高さ0.31m。

[遺物] 陶磁器・土器・鉄製品・瓦が出土した。

[時期] 近世(19世紀中)。

遺物 (第85図1・2、第93図7、第40・43表)

第85図1は陶器(練鉢)、2は磁器(染付端反碗)、第93図7は鉄製品(釘)である。

(3) 井戸跡

17号井戸跡

遺構 (第81図、第37表)

[位置] (D-6) グリッド。

[構造] 134Hを切る。平面形は円形を呈する。開口部径は1.10mを測る。断面は漏斗状で0.70m程の深さで径約0.70mになり、以下はほぼ垂直に垂下する。

[遺物] 陶器・土器・土製品・鉄製品が出土した。

[時期] 近世(17世紀前~中)。

[所見] 危険防止のため、深さ1.30m程掘り下げたところで調査を中止した。

遺物 (第88図1~4、第40表)

第88図1~4は陶器で、1は志野丸皿、2は天目茶碗、3は折縁鉄絵皿、4は鉄絵鉢である。

18号井戸跡

遺構 (第81図、第37表)

[位置] (D-6) グリッド。

[構造] 134Hを切る。平面形は円形を呈する。開口部径は約1.90mを測る。下方に向かうにつれて、中心が南東に偏る。深さ1.30mでの径1.00mである。

[遺物] 板碑1点出土した。

[時期] 中・近世。

[所見] 危険防止のため、深さ1.30m程掘り下げたところで調査を中止した。

遺物 (第96図3、第46表)

板碑である。

19号井戸跡

遺構 (第81図、第37表)

[位置] (C-6) グリッド。

[構造] 平面形は円形を呈する。開口部径は約1.20mを測る。径はそのまま1.10~1.20mを測り、垂直に垂下している。

[遺物] 陶磁器・土器・石製品が出土した。

[時期] 近世。

[所見] 危険防止のため、深さ2.00m程掘り下げたところで調査を中止した。

遺物 (第91図9、第42表)

石製品(砥石)である。

20号井戸跡

遺構 (第81図、第37表)

[位置] (D-5・6) グリッド。

[構造] 189Dと重複する。平面形は円形を呈する。開口部径は約0.80mを測る。径はそのまま0.70~0.80mで垂直に垂下する。

[遺物] 磁器・土器・鉄製品が出土した。

[時期] 近世。

[所見] 危険防止のため、深さ2.20m程掘り下げたところで調査を中止した。

遺物 (第93図29、第43表)

鉄製品(包丁)である。

21号井戸跡

遺構 (第81図、第37表)

[位置] (D-5) グリッド。

[構造] 140号住居跡を切る。開口部は平面形が楕円形を呈し、規模は1.90×1.70mを測る。上部は漏斗状の断面形を呈する。深さ1.50m以下は径1.10mの円形に推移し、ほぼ垂直に垂下する。

[遺物] 陶器・板碑が出土した。

[時期] 近世(17世紀前~中)。

[所見] 危険防止のため、深さ2.50mを越えたところで調査を中止した。

遺物 (第88図1~3、第96図6、第40・46表)

第88図1~3は陶器で、1は丸碗、2は丸皿、3は搦鉢である。第96図6は板碑で、23Wとの接合資材である。

22号井戸跡

遺構 (第82図、第37表)

[位置] (D-4・5) グリッド。

[構造] 140Hを切り、北端で23Wと重複する。基本構造は、北半部が南側へ下がるスロープ部、そしてスロープ部を下がり、そこにテラス部、北端が本体部として区分される。しかし、これら一連の掘り込みが別遺構の偶然の配置による可能性もあるが、ここでは、本井戸跡に伴う関連施設であると捉えることにする。(平面形) 全体に杓子状を呈し、南北5.80mの細長い形態を呈している。(スロープ部) テラス部への連絡はスロープになっている。斜面の角度は確認面からの深さ1.60m程までは23°で、さらにそこから比高差0.70m程を53°で下りテラス部に至る。(テラス部) スロープ部から下がった南側の平坦部である。深さは2.40mの位置である。径1.30~1.50mの円形を基本とし、南端の本体に切られたような形態を呈している。また、深さ0.18mの小ピット1本が検出された。(本体部) テラス部の南端に位置する。平面形は円形を呈し、規模は1.12×1.05mを測る。(その他) 東壁には足掛け穴のような小横穴が3ヶ所確認できた。

[遺物] 板碑が2点出土した。

[時期] 中・近世。

[所見] 危険防止のため、井戸本体の深さ3.00mまで掘り進んだところで調査を断念した。井戸本体へ続くスロープをもつ類に、本地点のすぐ東に位置する第1地点の5号井戸跡がある。この井戸跡は、報告中で北側にスロープあるいは階段状を呈する掘り込みである17号土坑と同時に確認され、別遺構として報告されている。本井戸跡のようにテラス部はないが、類似するものであろうか。

遺物 (第96図4・5、第46表)

板碑である。

23号井戸跡

遺構 (第82図、第37表)

[位置] (C・D-4・5) グリッド。

[構造] 249D・22Wと重複する。開口部の平面形は楕円状を呈し、規模は1.60×1.35mを測る。断面形は上部が漏斗状で、深さ1.00m程から下は径0.85m程で垂下する。壁面には足掛け穴と思われる小横穴が掘られている。この井戸跡は北西側に幅1.50m・奥行き約0.70m・深さ0.35mの張り出し部をもつ。また、南側にも奥行き約0.70m・深さ約0.35mの張り出し部をもつ。

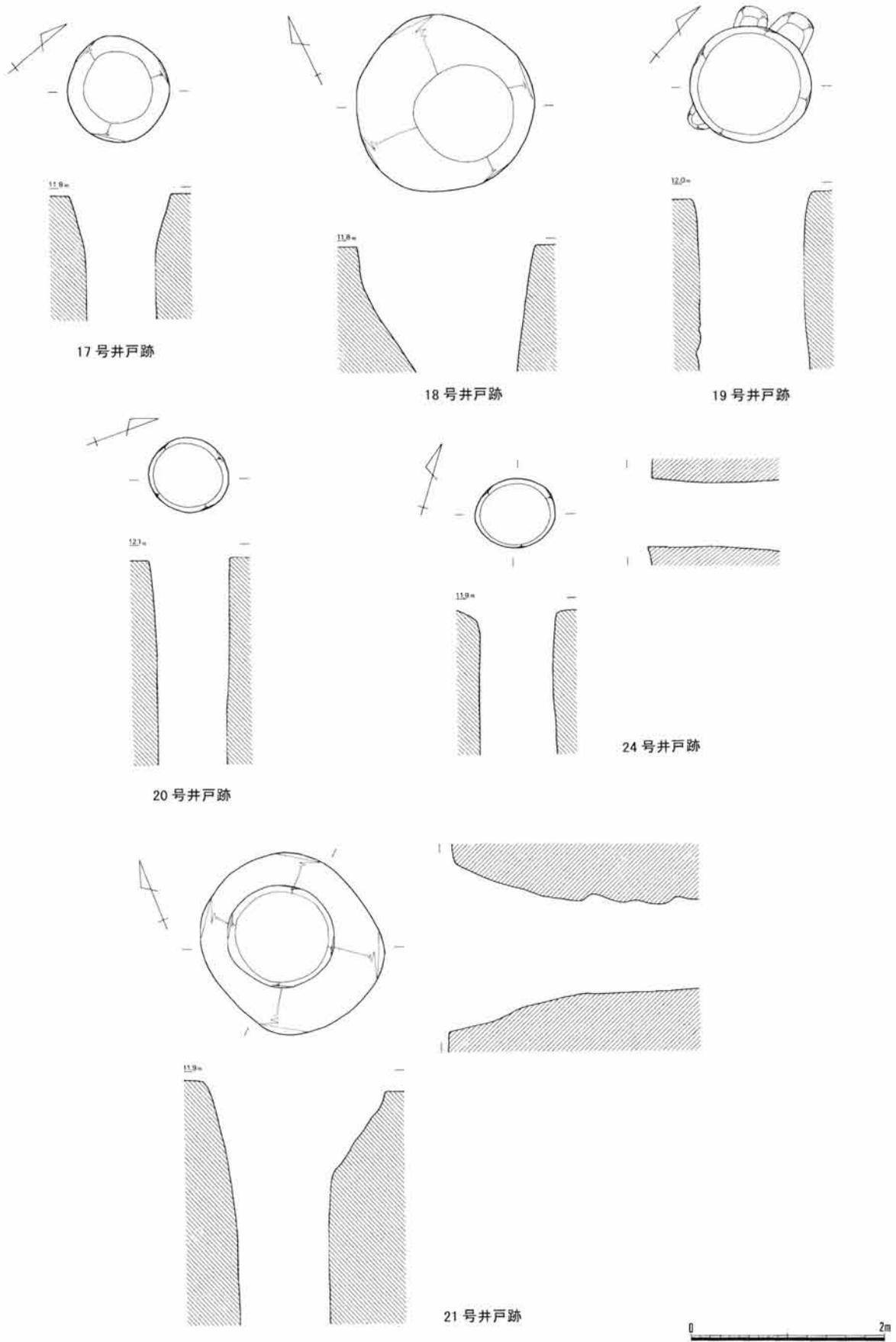
[遺物] 陶器・土器・板碑が出土した。

[時期] 近世(17世紀前~中)。

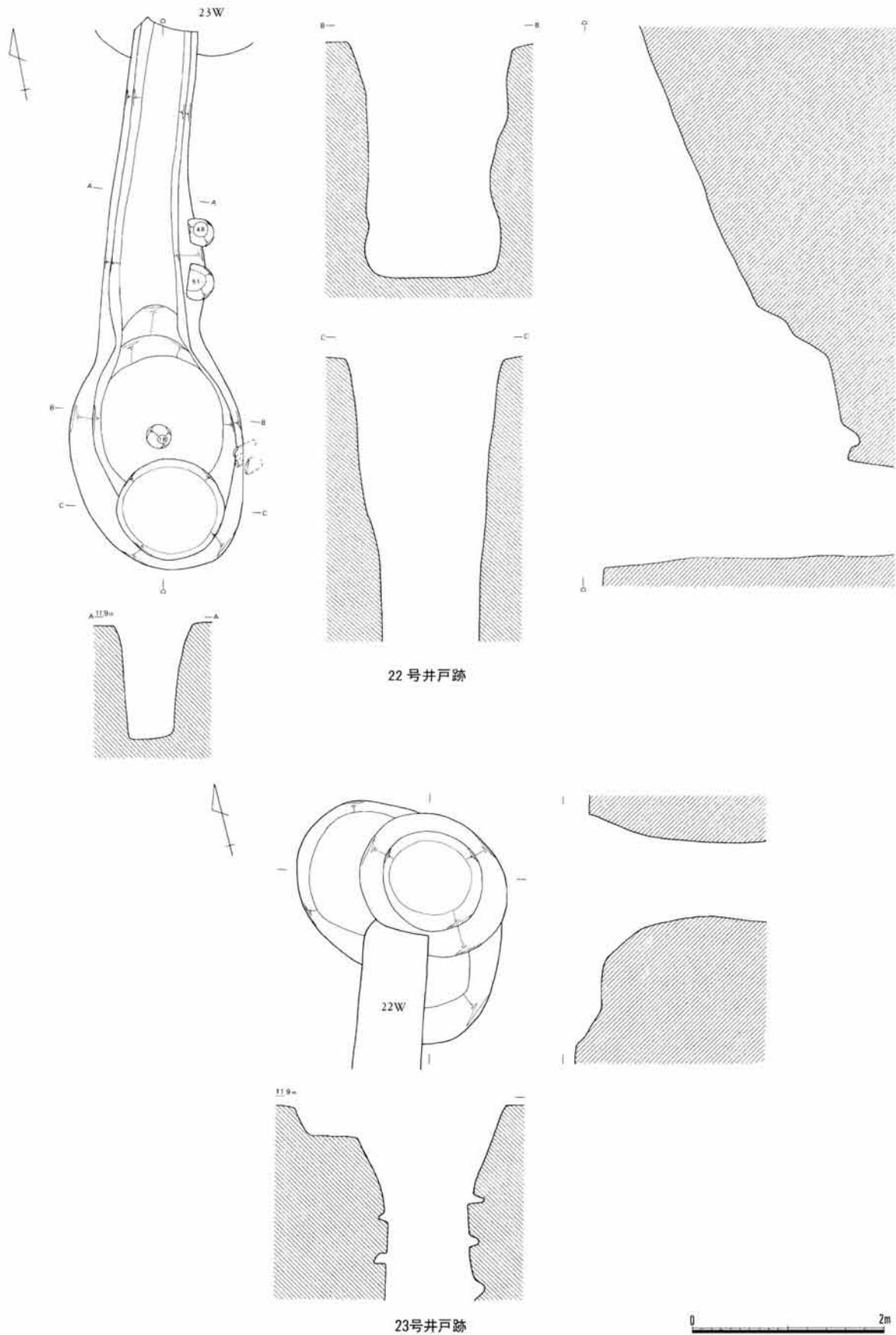
[所見] 危険防止のため、井戸本体の深さ2.00mまで掘り進んだところで調査を中止した。

遺物 (第88図1~6、第96図6、図版43-3-7、図版48-2-7~9、第40・46表)

第88図1~4・図版43-3-7は陶器で、1は碗、2・3は播鉢、図版43-7は有耳壺である。第88図5・6は土器(焙烙)である。第96図6・図版48-2-7~9は板碑である。第96図6は21Wとの接合資料である。



第81図 井戸跡 1 (1/60)



第82図 井戸跡 2 (1/60)

24号井戸跡

遺 構 (第81図、第37表)

[位置] (C-4・5) グリッド。

[構造] 平面形は楕円形を呈し、規模は0.85×0.75mを測る。下部においても断面は開口部とほぼ同径のまま垂下する。

[遺物] 陶器・土器が出土した。

[時期] 近世 (17世紀前～後)。

[所見] 危険防止のため、深さ1.50mまで掘り進んだところで調査を中止した。

遺 物 (第88図1、図版43-2-2～4、第40表)

図版43-2-2～4は陶器で、2は志野丸皿、3は播鉢、4は土瓶蓋である。第88図1は土器(焙烙)である。

(4) 溝 跡

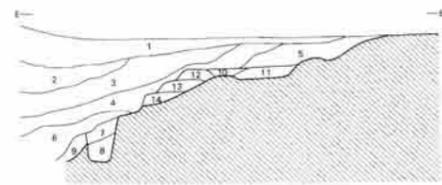
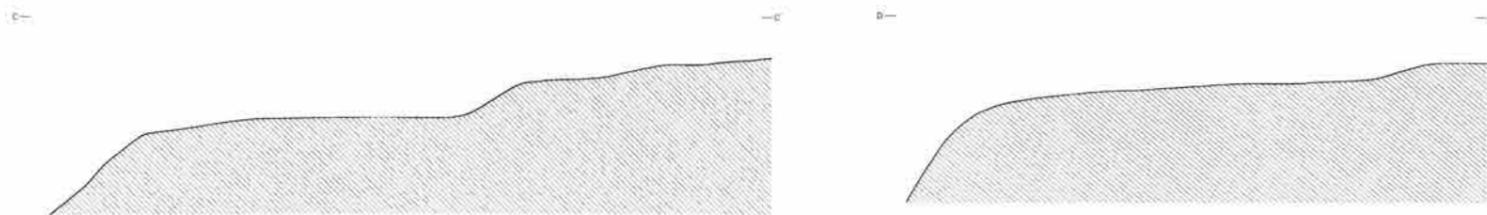
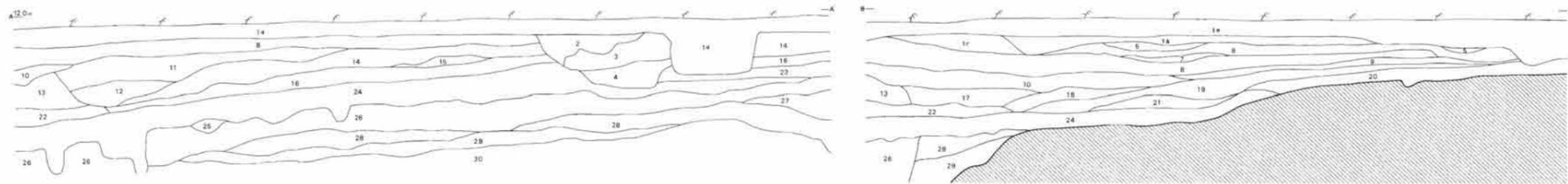
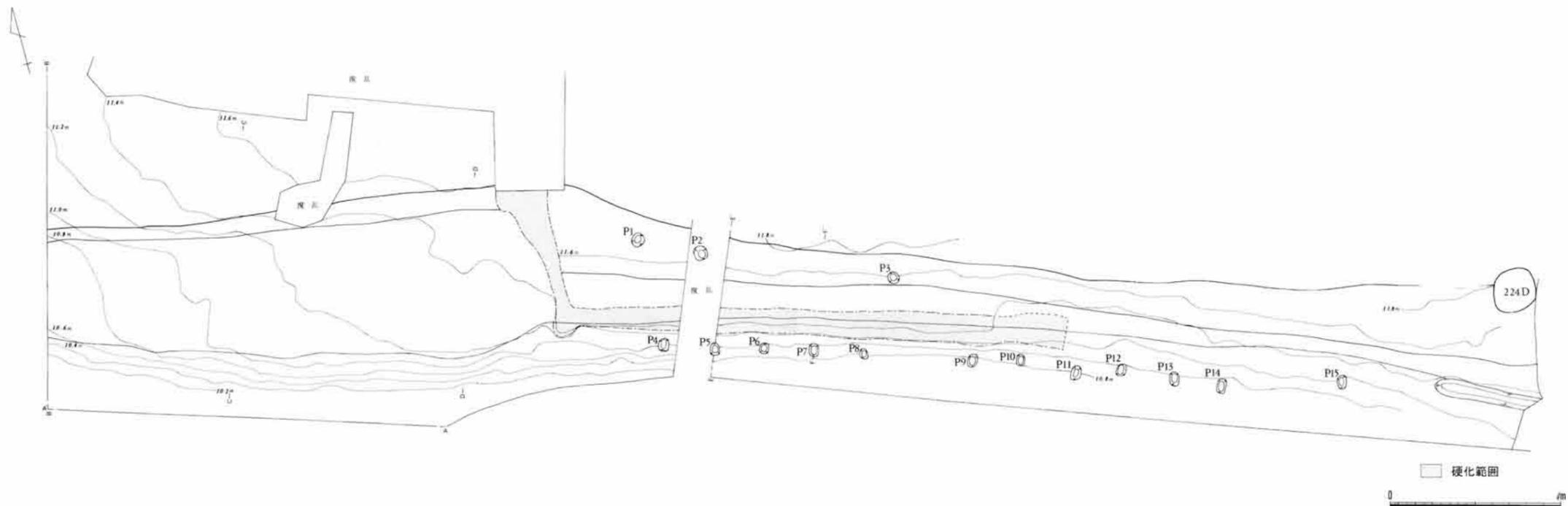
1号溝跡

遺 構 (第83図、第38表)

[位置] (E-1～7) グリッド。

[概要] 本遺構は、昭和55年に実施した市史編さん室の発掘調査により、上幅12.2m・下幅1.6m・地表面から深さ4.7mを測る、箱葉研形の大堀であることが判明しており(志木市史編さん室 1986)、過去に調査を行なった第1地点でも確認されている。

[構造] 136・137・139・142・144～147H・190Dを切っている。(規模) 調査区南端のEグリッドすべてで確認でき、調査区内での長さは54.7mである。(走行方位) N-75°-Wで、おおよそ東西方向に直線的に走行している。ただし、(D-1)・(E-1・2)グリッド内では北側に傾斜が変化しているようである。(硬化面) (E-2～4)グリッド内の傾斜部分で、硬化した平坦面が確認できた。幅は30cm前後で、セクションEはその土層断面図である。これによると、土層10～14層がその硬化した土層に相当する。版築状に土層が互層になっていないため、人為的な施設とは判断しづらいが、可能性として、大堀内側斜面の通路である「犬走り」と称されるものであるかもしれない。(E-2)グリッド内では「L」字状に屈曲しており、大堀上端まで延びていることが確認できた。(ピット列・細溝) (E-3・4)グリッド内でピット列が、(E-4～6)グリッドでは長さ20m・幅20cm程の細溝が確認できた。ピット列は確認面からおおよそ70cm程の深さから確認され、いずれも大堀内側斜面に構築されている。各ピットの深さは第83図のピット計測表に示した。セクションEではP5の断面がかかっており、前述した硬化面との位置関係がわかるが、これによるとピット列は通路と考えられる硬化面の外側に配されていることが理解できる。細溝については、ピット列の東側の延長上に配されていた。おそらく、ピット列と細溝は、機能上では同じくするもので、ピット列は丸太あるいは材木を建てて作られた柵列であり、細溝については板材を建てて作られた板塀であり、両者とも大堀内側の土塁と通路の外側に構築された塀施設であるものと想像される。(土塁) 遺構確認の段階や表土剥ぎ作業の段階から、注意深く確認したが、土塁施設については確認することはできなかった。(その他) 本遺構に付設する遺構として、31・32Mについても考慮する必要があるものと思われる。特に、32Mは、大堀内側に平行して存在するため、土塁の土留め的な役割をした施設である可能性もある。



- 1層 表土。
- 2層 ローム粒子を含む暗褐色土。
- 3層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。
- 4層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。
- 5層 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗褐色土。
- 6層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む明褐色土。
- 7層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗褐色土。
- 8層 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗褐色土。
- 9層 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む明褐色土。
- 10層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗褐色土。
- 11層 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗褐色土。
- 12層 ローム粒子・ローム小ブロックを含み、炭化物粒子を多く含む暗褐色土。
- 13層 ローム粒子・ローム小ブロックを含み、炭化物粒子を多く含む暗褐色土。
- 14層 ローム粒子・ローム小ブロックを含み、炭化物粒子を多く含む暗褐色土。

硬化層

- 16層 表土及び積土。
- 17層
- 18層
- 19層
- 20層
- 21層
- 22層
- 23層
- 24層
- 25層
- 26層
- 27層
- 28層
- 29層
- 30層

ピット番号	深さ (cm)
1M-P1	40
1M-P2	86
1M-P3	57
1M-P4	99
1M-P5	108
1M-P6	102
1M-P7	110
1M-P8	114
1M-P9	119
1M-P10	111
1M-P11	105
1M-P12	113
1M-P13	117
1M-P14	109
1M-P15	77

(確認面を11.8mとしての深さ)



第83図 1号溝跡 (1/120・1/60)

[遺物] 陶磁器・土器・土製品・石製品・鉄製品・銅製品・瓦・板碑が出土した。

[時期] 近世（18世紀後～19世紀初）。

[所見] 今回の調査では、柏城関連の遺構が数多く検出されているが、本来、こうした遺構は各遺構単位での説明では、イメージがもてるわけがなく、柏城全体を考慮に入れた中で検討する必要があるであろう。第4章第4節では朝霞市教育委員会の野沢 均氏にお願いし、発掘調査で判明した具体的な柏城像を考察して頂いたので参照してもらいたい。

遺物（第89図1・2、第90図3、第91図1・2、第93図19～24・42・48、第40～43表）

第89図1・2は磁器で、1は染付小碗、2は染付丸碗である。第90図3は土製品（泥面子）、第91図1・2は石製品（石筆）である。第93図19～24は鉄製品で、19～24は釘、42は不明品、第93図48は銅製品（煙管）である。

30号溝跡

遺構（第69図、第38表）

[位置]（B-3～6）グリッド。

[構造]（規模）長さ33m。上幅は調査区外にあり不明であるが、南半部で1mを測ることから、およそ2mの幅をもつものである。下幅は0.2m前後。（深さ）約0.6m。（走行方位）N-75°-W。

[遺物] 陶磁器・土器・銭貨・瓦・板碑が出土した。

[時期] 近世（19世紀中）。

[所見] 出土遺物から、時代を正確に把握することは難しいため、この遺構についても柏城関連遺構の可能性はあるが、詳細不明である。

遺物（第89図1～7、第94図16、図版44-1-8～11、第40・44表）

第89図1～3・図版44-1-8～10は陶器で、1は有耳壺蓋、2は小杉茶碗、3はピラ掛け端反碗、8・10は片口鉢、9は天目茶碗である。第89図4～6・図版44-1-11は磁器で、4・5は染付小碗、6は染付端反碗、11は染付皿である。第89図7は土器（焙烙）、第94図16は銭貨である。

31号溝跡

遺構（第69図、第38表）

[位置]（D-1・2）グリッド。

[構造] 弓状にカーブをもつ。（規模）上幅0.5m・下幅0.15m（深さ）0.1m前後を測る。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 中・近世。

[所見] 詳細は不明であるが、1Mの西側の屈曲に対応してカーブしており、さらに32Mの西側延長上にもあることから、柏城関連施設である可能性がある。

32号溝跡

遺構（第69図、第38表）

[位置]（D・E-3・4）グリッド。

[構造] 140・145・146・148H・293Dを切る。東端で192D・140Hと重複するが、それより東側では

確認できなかった。西端でも270Dの手前の(D-3)グリッドまでしか確認できなかったが、上端の形態が若干丸みを呈することから、やはりこの付近で途切れているのであろう。基本的には下端と見られる低い部分が2列あることから、北溝と南溝の2本の溝が重複しているものと考えられる。新旧関係は北溝→南溝で、南溝が新しい。(規模)西端は2本の溝が1本に収束しているようで、上幅は2.60m・下幅0.80m・深さ0.47mである。(D-4)グリッドの192D手前では、2本の重複形態であり、上幅3.4m、下端は北溝で0.4m、南溝で1.4mである。深さは北溝で0.50m、南溝で0.30mであるため、南溝の方が若干幅広で浅い溝である。確認できる長さは18.30mである。(走行方位)N-73°-W。(覆土)北側・南側の溝ともにローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土を基調する。

[遺物] 陶磁器・土器・石製品・鉄製品・板碑が出土した。

[時期] 近世(17世紀後半)。

[所見] 本遺構は、柏城大堀である1Mの内側に平行して走行することから、土塁の土留め的な役割をした施設である可能性がある。

遺物 (第89図1・2、第91図10、第93図43、図版44-1-3、第40・42・43表)

第89図1・図版44-1-3は陶器で、1は緑褐釉刷毛目文鉢、3は播鉢である。第89図2は土器(焙烙)、第91図10は石製品(砥石)、第93図43は鉄製品(不明品)である。

(5) ピット群

調査区域内には数多くのピットが存在し、その大部分が中世以降に比定できるものと考えられる。しかし、今回の報告では、そのすべてに遺構名を付けることはせず、遺物が出土し、さらに実測図あるいは写真図版に図示できた遺物をもつピットに関してのみピット名を付け説明することにした。

今回、中世以降のピット名を付けたのは、P5～P25の21本である。

各ピットの配置は第3図の遺構分布図、計測値は第39表を参照。

遺物

P5からは陶磁器が数点出土したが、図示できたのは第89図1の磁器(染付皿)1点である。

P6からは第93図17の鉄製品(釘)1点と銭貨2点が出土した。第94図17は元祐通宝、18は紹聖元宝。

P7からは鉄製品・瓦が出土したが、図示できたのは第93図27の鉄製品(刀子)1点である。

P8からは陶磁器・土器が出土したが、図示できたのは第89図1の陶器(高田徳利)、第89図2の磁器(染付御神酒徳利)である。

P9からは第94図19の銭貨(天聖元宝)1点が出土した。

P10からは土器2点と銭貨1点が出土したが、図示できたのは第89図1の土器(焙烙)1点と第94図20の銭貨(永楽通宝)1点である。

P11からは第93図18の鉄製品(釘)1点が出土した。

P12からは第93図51の銅製品(飾り金具)1点が出土した。

P13からは陶磁器・土器が出土したが、図示できたのは図版44-2-1の磁器(上絵付碗)1点である。

P14からは第89図1の陶器(播鉢)1点が出土した。

P15からは陶器・土器が各1点出土したが、図示できたのは第89図1の陶器(櫛目文鉢)1点である。

P16からは第90図4の土製品(土玉)1点が出土した。

遺構名	位置	長軸長	短軸長	深さ	長軸方位	出土遺物(掲載点数 全点数)												遺構年代	備考							
						陶器	磁器	土器	土製品	石製品	鉄製品	銅製品	銭貨	瓦	板碑											
174D	(C-6)G	1.03	0.80	0.46	N-S	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	中・近世	
180D	(D-6)G	不明	不明	0.85	N-60°-E	0	7	0	3	0	5	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	5	近世	鉄製品1点(釘)
196D	(D-5)G	開口部径1.60		2.80	N-30°-E	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	近世	底面は浸食されていないか、上総掘りによる井戸跡の可能性はある
		坑底部1.14				坑底部0.90	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
197D	(D-5)G	不明	0.94	0.31	N-S	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	中・近世		
204D	(C-5・6)G	不明	0.93	0.30	N-22°-E	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	中・近世		
220D	(C-5)G	不明	1.20	0.29		0	1	0	1	0	12	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	近世	土製品1点(土壘)	
224D	(E-5)G	1.03	1.00	0.56	N-4°-E	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	中・近世		
226D	(C-5)G	1.64	1.14	0.29	N-80°-W	0	1	0	2	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	近世		
281D	(D-2)G	0.78	0.65	0.19	N-10°-W	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	中・近世		
293D	(D-3)G	1.50	1.20	0.36	N-76°-W	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	中・近世		
323D	(B-3)G	不明	不明	0.39	N-19°-E	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	中・近世		
324D	(B-3)G	不明	1.42	0.29		0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	中・近世		
合計						0	9	0	7	0	27	1	1	0	0	1	2	0	0	0	0	1	0	5		

第34表 土坑C群一覧

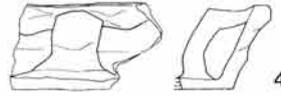
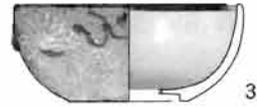
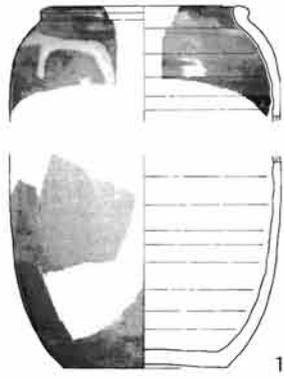
遺構名	位置	長軸長	短軸長	深さ	長軸方位	出土遺物(掲載点数 全点数)												遺構年代	備考							
						陶器	磁器	土器	土製品	石製品	鉄製品	銅製品	銭貨	瓦	板碑											
147D	(B-6)G	不明	2.07	0.60	N-67°-E	3	7	4	7	2	13	0	0	2	2	1	1	0	0	0	0	5	52	0	19C中	近世のゴミ穴か? / 石製品2点(磁石) / 鉄製品1点(釘)
153D	(B-6)G	不明	不明	0.70		4	12	1	8	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	19C中	近世のゴミ穴か? / A~Dの4基の土坑を一括した	
157D	(B-6)G	不明	不明	0.26		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	近世	近世のゴミ穴か?	
166D	(B-6)G	2.41	1.60	0.85	N-26°-E	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	近世	近世のゴミ穴か?	
229D	(B-5)G	1.92	1.72	0.30	N-34°-W	1	2	0	1	0	2	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	1	19C前~中		
260D	(D-4)G	不明	0.87	0.41	N-63°-W	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	近世		
318D	(B-4)G	1.92	1.80	0.66	N-75°-W	0	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	近世		
325D	(B-3)G	2.32	1.52	0.21	E-W	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	近世		
合計						8	24	5	18	2	17	0	0	2	2	1	5	0	0	0	0	5	55	0		

(単位:m)

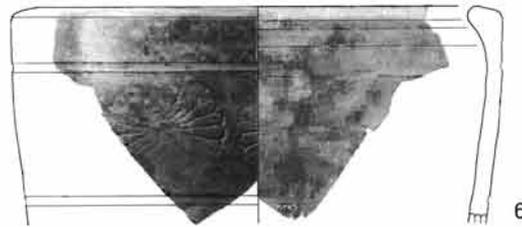
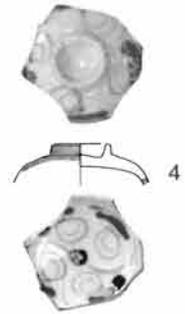
第35表 土坑D群一覧

遺構名	位置	分類	基本構造	出土遺物(掲載点数 全点数)												遺構年代	備考									
				陶器	磁器	土器	土製品	石製品	鉄製品	銅製品	銭貨	瓦	板碑													
149D	(B-6)G	1類	大部分が崩落しており詳細は不明(入口竪坑部)0.75×0.90mの長方形(主体部)2.00~2.40mの不整形(主軸方位)N-11°-E	2	4	3	7	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	4	0	0	19C中~後	鉄製品1点(釘)	
191D	(D・E-5)G	1類	(入口竪坑部)開口部は2.10×1.50mの楕円形/坑底面は1.10×0.80mの不整形長方形/深さ2.20m(主体部)2.90×2.60mの長方形(主軸方位)N-5°-E/人骨・銭貨は本土坑に伴うものではない	0	5	0	1	0	11	0	0	0	0	1	1	0	0	6	6	0	5	0	7	近世	鉄製品1点(包丁?) / 銭貨6点(永楽通宝) / 人骨	
223D	(B・C-4・5)G	1類	(入口竪坑部)開口部は1.10×0.96mの隅丸方形/坑底面は0.90×0.70mの長方形/深さ1.75m(連絡横坑部)長さ0.50m/高さ0.70m(主体部)坑底面は2.25×1.95mの長方形(主軸方位)N-16°-E	7	7	0	0	1	1	0	0	1	3	3	0	0	2	2	0	2	2	2	2	17C前	石製品1点(磁石) / 鉄製品3点(釘2点 / 火打金1点) / 銭貨2点(祥符通宝 / 元豊通宝)	
270D	(D-2)G	1類	(入口竪坑部)開口部は径1.70mのほぼ円形/坑底面は1.40×1.10mの長方形/深さ1.60m/壁面に足掛け穴5カ所確認(主体部)台形状を呈し、前壁2.10m/奥壁2.60m/奥行3.20m(主軸方位)N-80°-W	0	2	0	1	0	2	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	近世	石製品1点(磁石)	
312D	(C-3)G	1類	天井部は崩壊/(入口竪坑部)開口部は1.70×1.50mの楕円形/坑底面は0.85×0.65mの長方形/深さ2.30m/(主体部)台形状を呈し、最大幅3.10m/奥行2.00m(主軸方位)N-15°-E	2	4	0	0	0	7	0	0	1	1	0	3	0	0	3	3	0	0	0	0	17C後~18C中	石製品1点(磁石) / 銭貨3点(元祐通宝 / 皇宋元宝 / 永楽通宝) / 馬の骨片	
145D	(B-6)G	2類	全長南北9.10m・東西5.20mの巨大な地下坑(入口竪坑部)ローマブロックによる構築物あり(主軸横坑部)長さ5.80m/幅1.30m前後/深さ2.50m(積穴状主体部)A~Gの7室あり(照明施設)掘り込み5カ所確認(主軸方位)N-20°-E	5	18	2	29	1	11	0	0	0	0	2	2	1	1	0	0	0	8	0	1	19C中~後	鉄製品2点(不明品) / 銅製品1点(煙管)	
183D	(D-5・6)G・(E-6)G	2類	全長南北6.80m・東西3.00m/2つの主体部が連結するタイプ/入口竪坑部も2つ確認(入口竪坑部)入口Aは開口部0.75×0.65mの長方形/深さ1.90m/入口Bは深さ2.20m(連絡横坑部)長さ2.00m/幅0.70m/天井部までの高さ1.00m(主体部)主体部Aは径2.00mの不整形形/主体部Bは1.70~1.90mの不整形形(照明施設)4カ所確認(主軸方位)N-15°-W	0	4	1	4	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	18C後~19C初	石製品1点(磁)
188D	(D-6)G	2類	全長南北4.20m・東西4.60mの巨大な地下坑/全体に「王」の字状を呈する(入口竪坑部)開口部は0.80×0.55mの隅丸長方形/深さ2.50m(主軸横坑部)東西方向の長さ約3.30m(横坑部)主体部)A~Eの5室あり(照明施設)4カ所確認(主軸方位)N-82°-W	1	4	1	1	0	2	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	9	0	0	19C中	鉄製品1点(釘)	
合計				17	48	7	43	3	35	0	0	4	4	8	12	1	1	11	11	0	29	2	11			

第36表 土坑E群一覧



145号土坑出土遺物



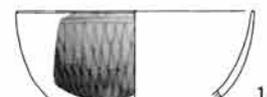
147号土坑出土遺物



149号土坑出土遺物



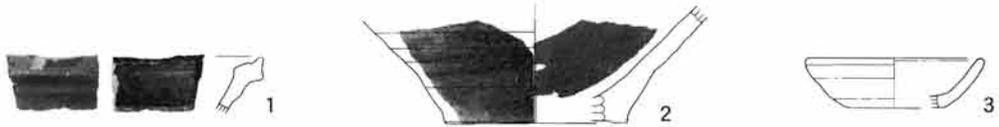
153号土坑出土遺物



166号土坑出土遺物



第84図 土坑出土陶磁器・土器 1 (1/4)



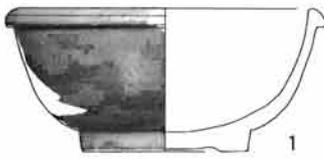
179号土坑出土遺物



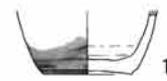
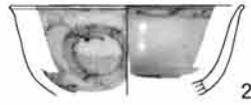
183号土坑出土遺物



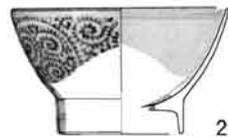
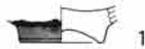
184号土坑出土遺物



188号土坑出土遺物



192号土坑出土遺物



200号土坑出土遺物



201号土坑出土遺物



210号土坑出土遺物



213号土坑出土遺物



221号土坑出土遺物



229号土坑出土遺物



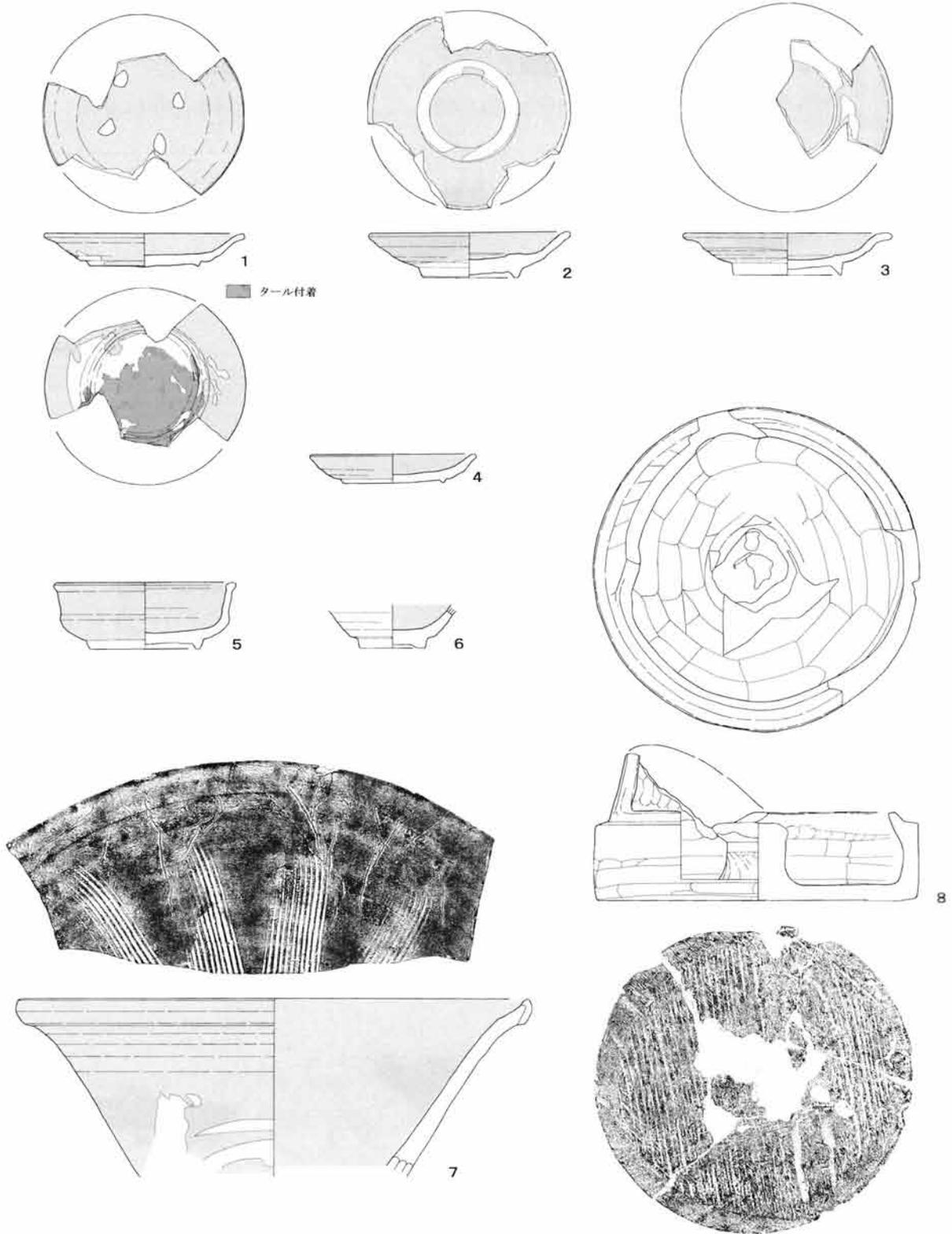
272号土坑出土遺物



276号土坑出土遺物

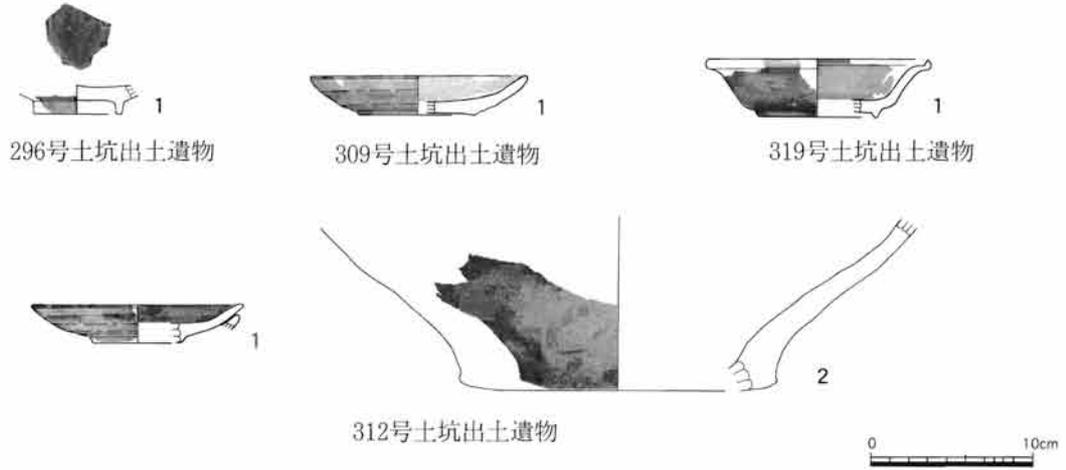


第85図 土坑出土陶磁器・土器 2 (1/4)

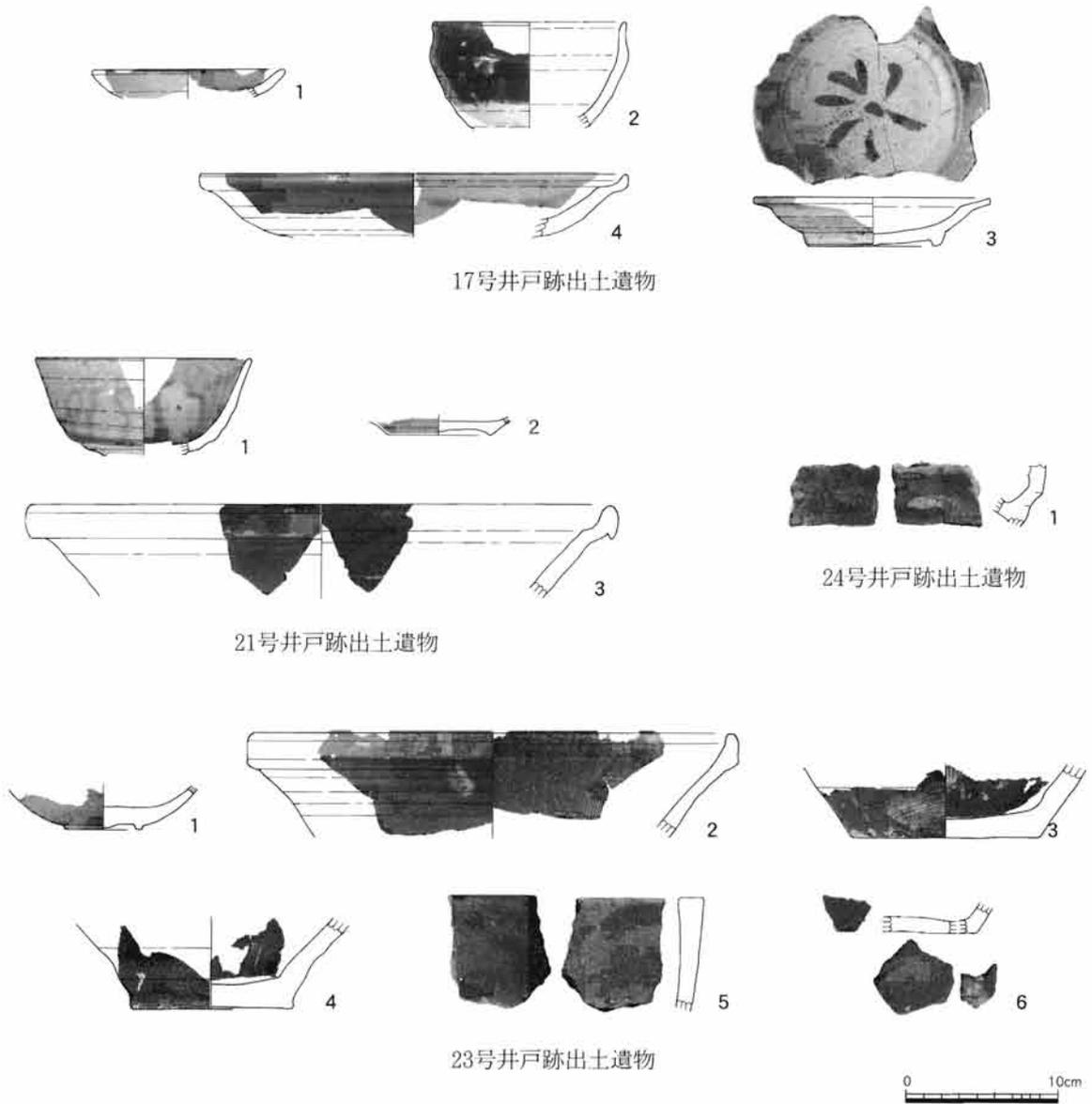


223号土坑出土遺物

第86図 土坑出土陶磁器・土器 3 (1/4)



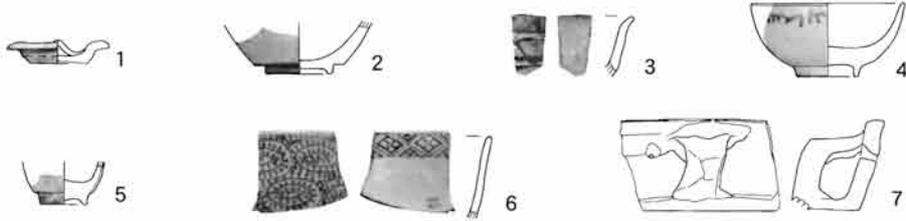
第87図 土坑出土陶磁器・土器 4 (1/4)



第88図 井戸跡出土陶磁器・土器 (1/4)



1号溝跡出土遺物



30号溝跡出土遺物



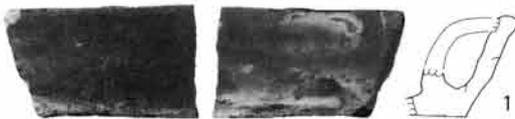
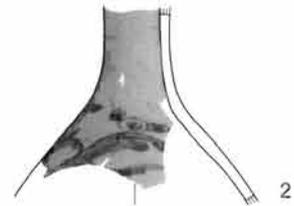
32号溝跡出土遺物



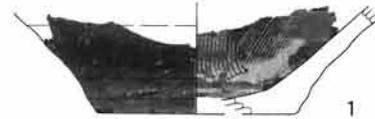
5号ピット出土遺物



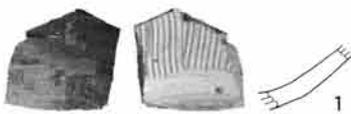
8号ピット出土遺物



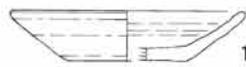
10号ピット出土遺物



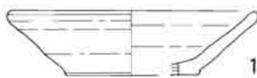
14号ピット出土遺物



15号ピット出土遺物



17号ピット出土遺物



19号ピット出土遺物



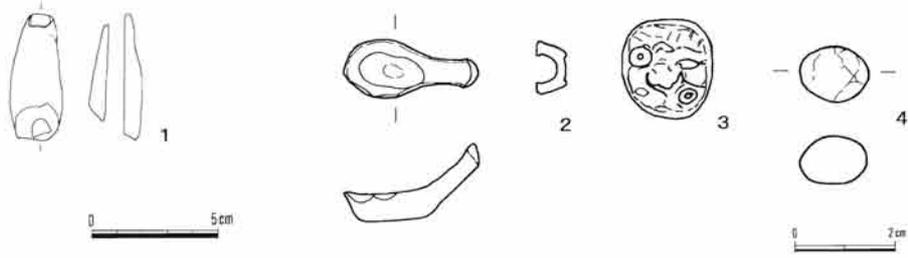
20号ピット出土遺物



25号ピット出土遺物



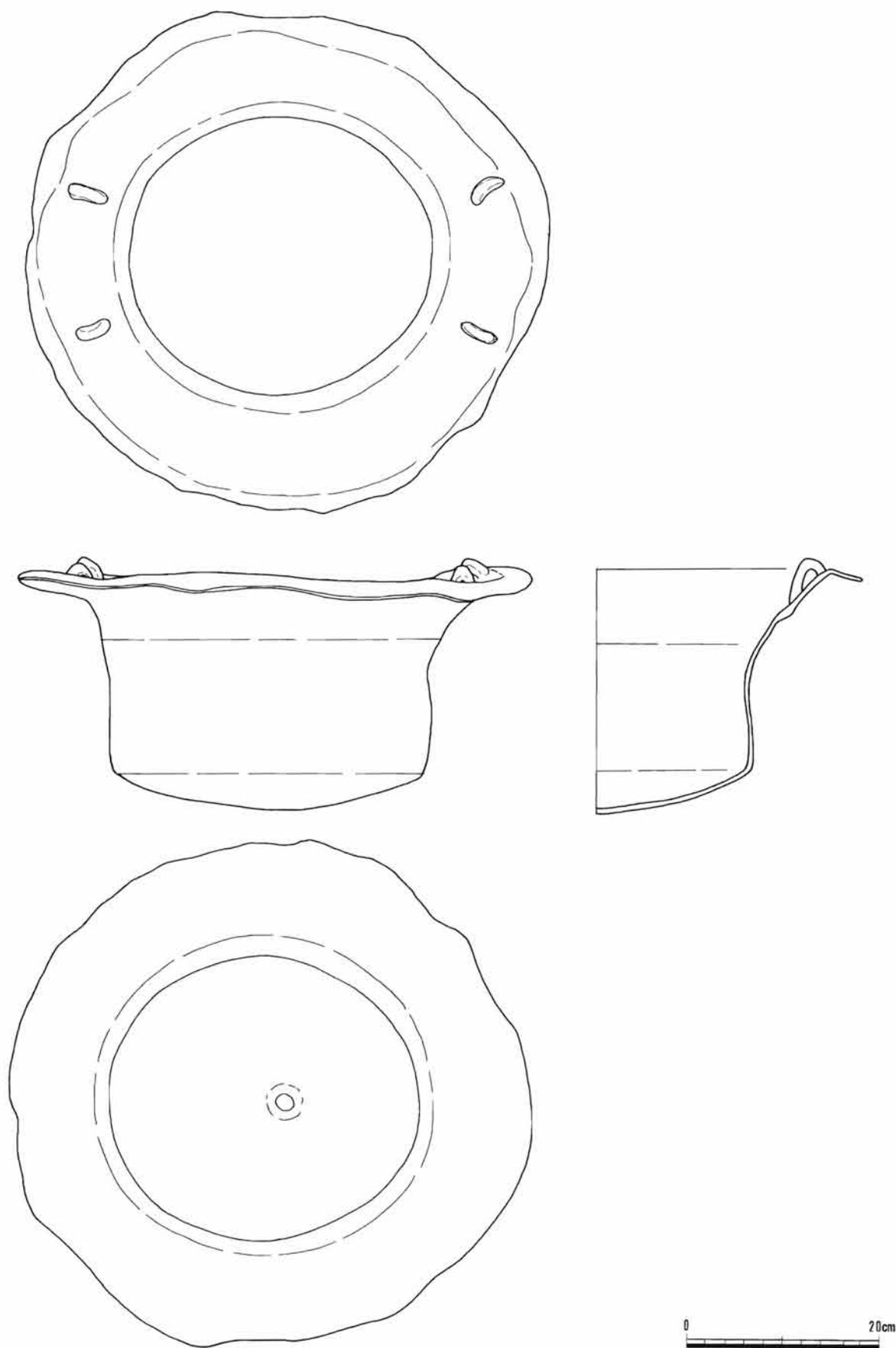
第89図 溝跡・ピット出土陶磁器・土器 (1/4)



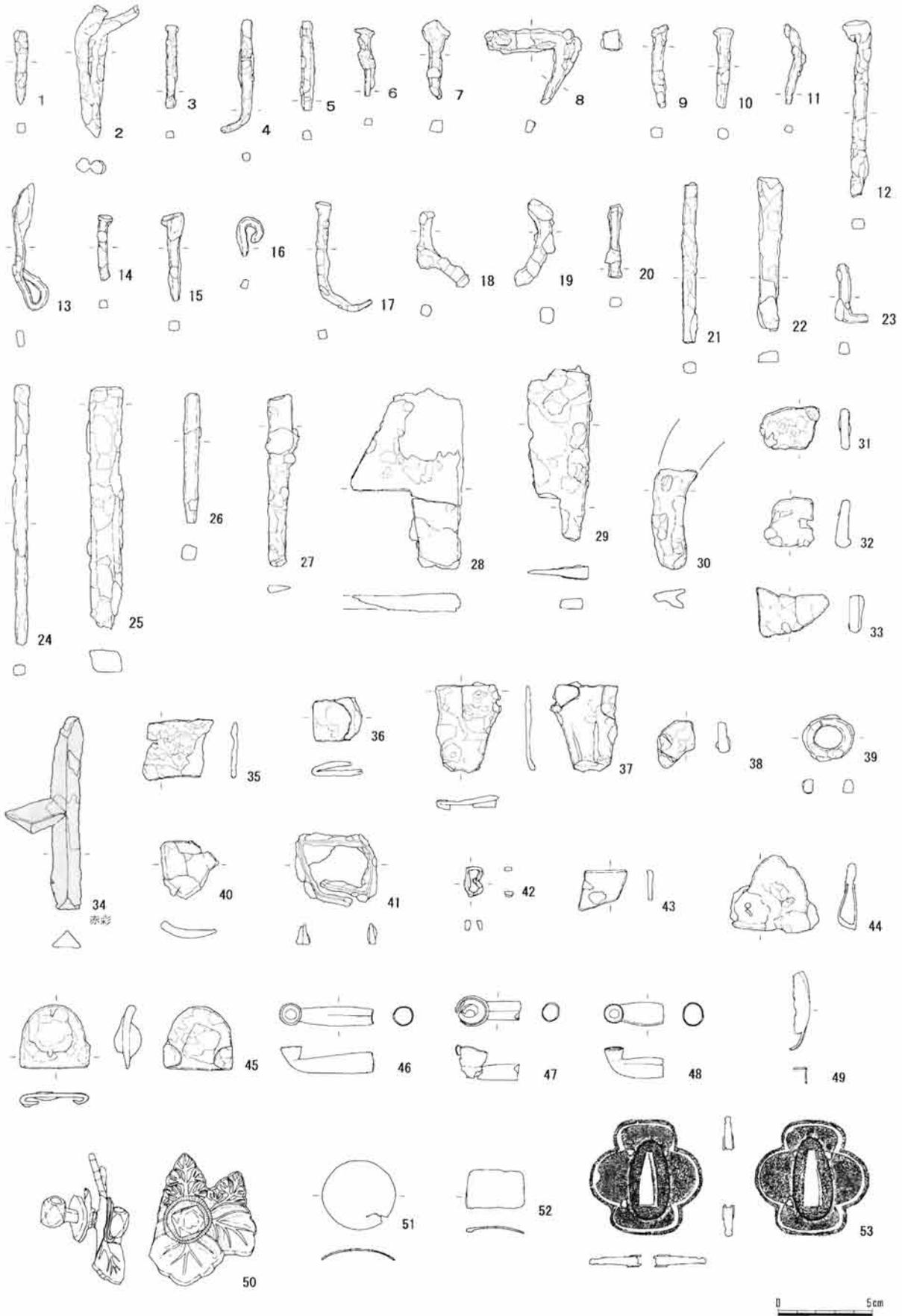
第90図 遺構出土の土製品 (1/3・2/3)



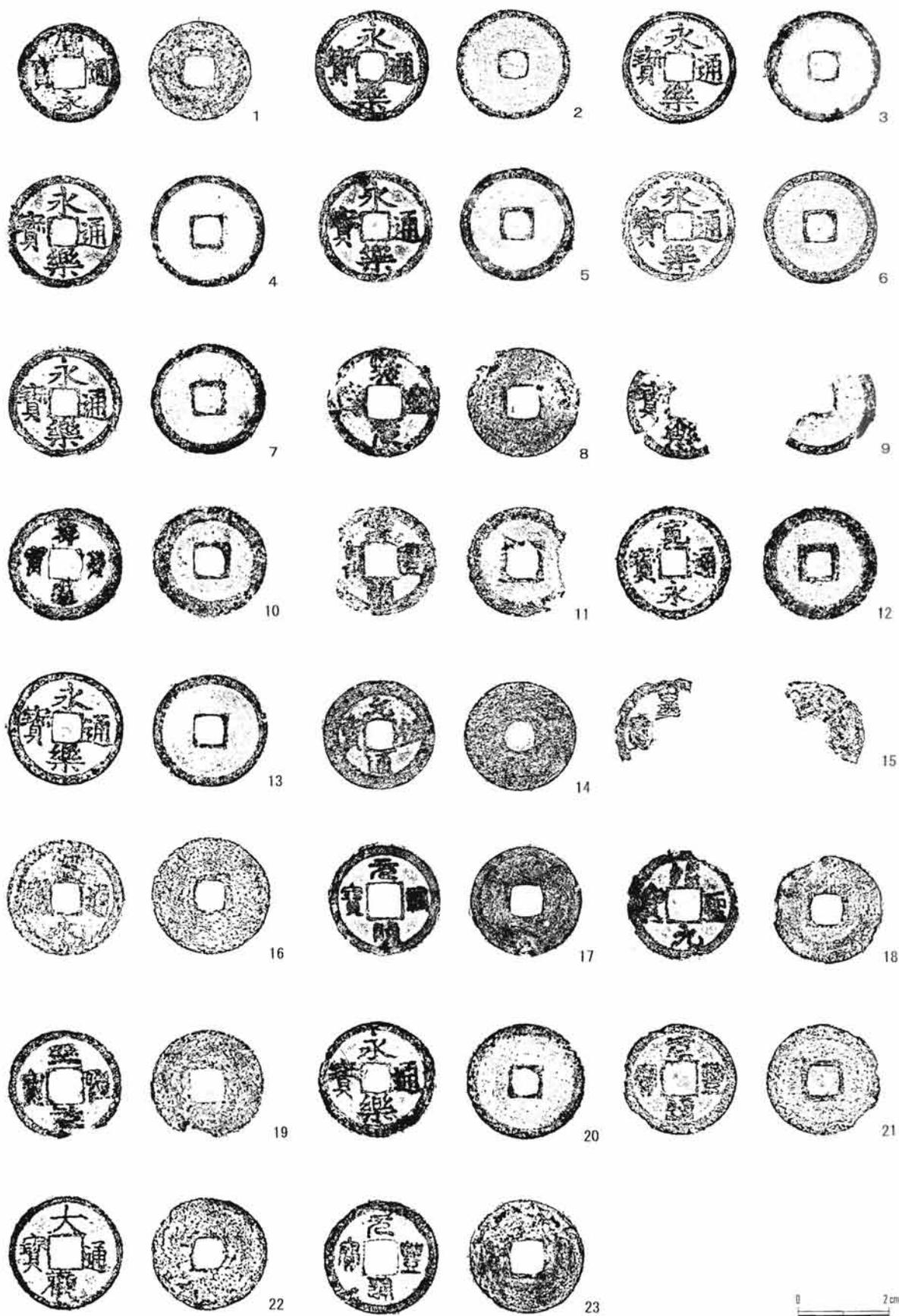
第91図 出土石製品 (2/3・1/3)



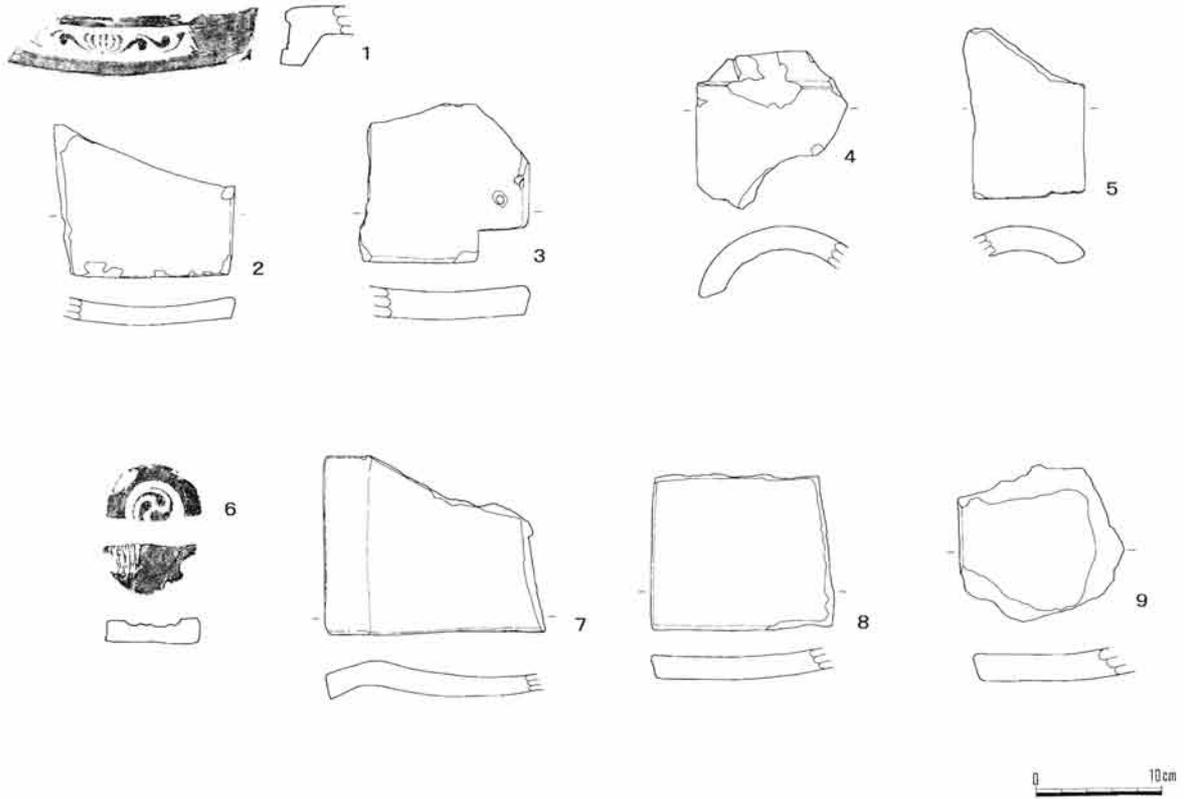
第92図 234号土坑出土鉄鍋 (1/6)



第93図 出土金属製品 (1/3)



第94圖 出土錢貨 (4/5)



第95図 遺構出土の瓦 (1/6)



第96図 遺構出土の板碑 (1/6)

()内は現存値・推定値

挿図・図版番号	遺構名	種別	器種	法量			胎土	製作の特徴	釉薬	生産地・系譜	時期		
				器高	口径	底径							
第84図1	145D	陶器	壺	(17.3)	(10.8)	8.4	にぶい橙色	緻密	底部回転系切り	外面灰釉流し掛け/内面鉄釉/灰釉流し掛け/口縁端面拭き取り	灰釉	関東	19C
第84図2	145D	陶器	筒形碗	(4.6)	-	-	黄白色	緻密(軟質)	外面クロ目顯著	外面給付け(オリーブ黒色・赤色)	透明釉	関西地方	19C代
第84図3	145D	磁器	蓋物	5.1	(11.8)	(6.2)	白色	緻密	削り込み高台	外面イッチン描き/口縁部軸拭き取り	-	京焼風	不明
第84図4	145D	土器	埴埴	4.5	-	-	-	密/角閃石(多)・赤色粒子	外面胴部下端削り/底部チヂレ目	口縁部～外面全面に煤付着	-	北関東系	17C～18C
図版40-5	145D	陶器	馬の目皿	-	-	-	黄白色	緻密	-	鉄絵口縁端面「團縁」/口縁部内面「高卷文」	灰釉	瀬戸	連房第8～11小期
図版40-6	145D	陶器	片口	-	-	-	黄白色	緻密	内面折返し口縁	-	灰釉	美濃	連房第11小期
図版40-7	145D	陶器	楀鉢	-	-	-	黄白色	密	-	緑釉流し掛け	灰釉	瀬戸	連房第8～11小期
図版40-8	145D	磁器	染付小杯	-	-	-	白色	緻密	-	高台呉須描き「二重團縁」/高台内呉須描き文字不明	透明釉	瀬戸・美濃か	明治期か
第84図1	147D	陶器	甕類	(5.7)	-	-	橙色	緻密	-	外面透明釉流し掛け	外面:鉄釉/内面:透明釉	関東地方	19C代
第84図2	147D	磁器	瑠璃釉小杯	(5.0)	(7.0)	-	白色	緻密	-	口紅	外面:瑠璃釉/内面:透明釉	不明	18C後葉～19C初頭
第84図3	147D	磁器	染付合子蓋	0.9	返し部径6.1	胴部径7.2	白色	緻密	-	外面呉須描き「風景文」	透明釉	肥前か	18C後葉～19C初頭
第84図4	147D	磁器	染付碗蓋	(2.2)	-	橋み径3.1	白色	緻密	-	内外面呉須描き「草花?文」	透明釉	肥前	18C後葉～19C初頭
第84図5	147D	磁器	染付端反碗	(5.0)	(12.6)	-	白色	緻密	-	外面呉須描き「草花文」/内面口縁部「雷文」	透明釉	肥前か	19C中葉
第84図6	147D	土器	埴埴	(11.5)	(25.4)	-	-	緻密	外面磨き	「菊」陰刻文	-	江戸在地	18C後葉～19C初頭
第84図7	147D	土器	火鉢	(3.7)	-	(10.6)	-	密/赤色粒子・砂粒	半球形三足/外面列点文	-	-	江戸在地	19C代
図版40-8	147D	陶器	丸皿・反り皿	-	-	-	灰白色	緻密	付高台	見込み重ね焼き高台痕跡あり	灰釉	美濃	連房第4・5小期
図版40-9	147D	陶器	徳利	-	-	-	黄白色	緻密	削り込み高台/外面底部軸拭き取り	被焼黒化	灰釉・内面錆釉	美濃	連房第8～11小期
第84図1	149D	陶器	楀鉢	(7.0)	-	-	-	密/砂粒	口縁部縁帯2段	描り目12本	-	堺・明石	19C中葉
第84図2	149D	磁器	染付小皿	2.4	10.5	5.6	白色	緻密	内型成形/削り込み高台	見込み型押し「獅子に牡丹?」/呉須上塗り/外面呉須描き「唐草文」/科学コバルト	透明釉	美濃	明治期
第84図3	149D	磁器	白磁小杯	5.2	(6.8)	3.8	白色	緻密	付高台	見込み印「寿」字文/口紅/高台内印「一山」	透明釉	美濃	連房第11小期
図版40-4	149D	土器	手焙り?	7.5	-	-	灰褐色	緻密	内面指押さえ、外面ナデ	外面底部に沈線/内面煤付着/瓦貫	-	不明	
図版40-5	149D	陶器	直縁大皿	-	-	-	黄白色	緻密	-	-	灰釉	瀬戸・美濃	古瀬戸後3期～後4期新段階
図版40-6	149D	磁器	染付丸碗	-	-	-	白色	緻密	-	外面呉須描き「並草葉文」/内面口縁部不明	透明釉	瀬戸・美濃	連房第9～11小期
第84図1	153D	陶器	耳付皿	1.8	(9.6)	(3.8)	被熱不明	緻密	削り込み高台	内外面油煙/灯明皿として使用か	鉛釉	美濃	連房第7小期
第84図2	153D	陶器	小壺蓋	1.1	(6.0)	3.5	黄白色	緻密	-	-	鉛釉	美濃	連房第6・7小期
第84図3	153D	磁器	染付小碗	4.6	(7.2)	(2.6)	白色	緻密	-	外面呉須描き「松?文」/高台「二重團縁」	透明釉	瀬戸・美濃	連房第10・11小期
図版40-4	153D	陶器	御室茶碗	-	-	-	黄白色	緻密	-	呉須絵「樓閣山水文」	灰釉	瀬戸	連房第7小期
図版40-5	153D	陶器	尾呂徳利	-	-	-	灰白色	緻密	外面底部軸拭き取り	-	鉛釉	美濃	連房第5～7小期
図版41-1	160D	磁器	染付丸碗	-	-	-	白色	緻密	-	外面呉須描き「並草葉文」/高台「一重團縁」/見込み「一重團縁」	透明釉	瀬戸・美濃	連房第9～11小期
図版41-1	164D	陶器	楀鉢	-	-	-	浅黄色	緻密	口縁部縁帯形	描り目9本か	錆釉	瀬戸・美濃	大窯第3段階前半
第84図1	166D	磁器	染付丸碗	(4.8)	(12.2)	-	白色	緻密	-	外面呉須描き口縁部「二重團縁」/胴部「一重網目文」	透明釉	肥前	18C後葉～19C初頭
図版41-1	168D	陶器	丸皿	-	-	-	黄白色	緻密	削り込み高台	-	灰釉	美濃	連房第5小期
図版41-2	168D	陶器	腰緒茶碗	-	-	-	灰色	緻密	-	-	灰釉+鉄釉	瀬戸	連房第8・9小期
第85図1	179D	陶器	楀鉢	(2.8)	-	-	浅黄橙色	密	-	-	錆釉	瀬戸・美濃	連房第1小期
第85図2	179D	陶器	楀鉢	(6.2)	-	(9.6)	橙色	緻密	-	描り目14本	錆釉	瀬戸	古瀬戸後4期新段階か
第85図3	179D	土器	皿	2.6	(9.2)	(5.0)	-	緻密/赤色粒子・砂粒	ロクロ成形/底部回転系切り	内面全面タール付着/灯明皿として使用か	-	-	16C前半
図版41-4	179D	陶器	志野丸皿	-	-	-	灰色	密	削り出し高台	-	灰釉	瀬戸	17C前半
第85図1	183D	磁器	染付蕎麦猪口	(3.5)	(7.4)	-	白色	緻密	-	外面呉須描き「樓閣山水文」/内面口縁部呉須描き「四方摩文」	透明釉	肥前	18C後葉～19C初頭
第85図1	184D	陶器	楀鉢	(5.4)	-	-	-	密/砂粒	口縁部縁帯3段	描り目9本か	-	堺・明石	18C末

(単位: cm)

第40表 遺構出土の陶磁器・土器一覧(1)

第3章 検出された遺構と遺物

()内は現存確・推定値

補図・図版番号	遺構名	種別	器種	法量			胎土		製作の特徴	釉薬	生産地・系譜	時期	
				口径	底径	器高							
第85図1	188D	陶器	鉢鉢	7.7	(16.4)	8.4	浅黄色	緻密	削り出し輪高台 高台幅広く、 削り込み浅い	見込みに脚付輪トチン痕	灰釉	瀬戸	連房第10・11小期
第85図2	188D	磁器	染付端反碗	(4.8)	(12.0)	-	白色	緻密		外面呉須描き「草花文」/ 内面口縁部呉須描き「三重 圓線+円文盤ぎ」/見込み 「一重圓線」	透明釉	肥前	18C後葉~19C初頭
第85図3	192D	磁器	染付燗徳利	(3.9)	-	(4.6)	白色	密		底部露胎/外面呉須描き	透明釉	肥前	18C後葉~19C初頭
第85図4	200D	陶器	碗	(1.9)	-	4.3	黄白色	緻密	内反り高台	内面白化肌上?	外面:緑釉/ 内面:透明釉	唐津	17C後半~18C中葉
第85図5	200D	磁器	染付広東碗	6.6	(11.2)	(6.4)	白色	緻密	削り込み高台	外面呉須描き「磨唐草文」/ 高台「二重圓線」/内面 口縁部呉須描き「二重圓線」/ 見込み「一重圓線+不明」/ 上手	透明釉	肥前	18C後葉~19C初頭
第85図6	200D	磁器	染付碗	(1.8)	-	(4.2)	白色	緻密		外面高台呉須描き「一重圓 線」/高台内「二重圓線+ 口(寛か徳口(年製)」/内面 呉須描き「花文」/上手	透明釉	肥前	18C後葉~19C初頭
図版41-4	200D	陶器	端反皿	-	-	-	黄白色	緻密			灰釉	美濃	連房第4・5小期
第85図7	201D	磁器	染付広東碗	6.0	(10.8)	(6.8)	白色	緻密	削り込み高台	外面呉須描き「磨手文」/ 高台「二重圓線」/内面口 縁部呉須描き「二重圓線」/ 見込み「一重圓線+寿? 字文」	透明釉	肥前	18C後葉~19C初頭
図版41-2	201D	陶器	菊皿	-	-	-	黄白色	緻密		(緑釉流し掛け)	黄瀬戸釉	美濃	連房第4小期
図版41-1	206D	陶器	灰落し	-	-	-	灰白色	緻密	外面帯描き丸線 丸ノミ彫り		灰釉+鉄釉	瀬戸	連房第7小期
図版41-2	206D	陶器	内禿皿	-	-	-	にぶい黄橙 色	緻密	削り込み高台		灰釉	美濃	大窯第3段階後半
第85図8	210D	陶器	灯明皿	(2.1)	(10.0)	-	灰色	緻密			錆釉	美濃	連房第10・11小期
第85図9	210D	陶器	灯明皿	1.8	(8.8)	4.0	灰色	緻密	底部削り		錆釉	美濃	連房第7小期
第85図10	213D	陶器	菊皿	(2.8)	-	7.0	黄白色	緻密	付高台	緑釉流し掛け	黄瀬戸釉	美濃	連房第4小期
図版41-1	214D	陶器	志野皿	-	-	-	黄白色	緻密			灰釉	美濃	連房第1小期
図版41-1	216D	陶器	播鉢	-	-	-	浅黄色	緻密	口縁部縁帯形成	襷目4本以上	錆釉	美濃	大窯第4段階後半
第85図11	221D	陶器	小杯か	(2.1)	-	(5.0)	灰白色	緻密	胴部下端面取り 削り	底部露胎	灰釉	志戸呂	16C末~17C初頭 (大窯第4段階併行)
第85図12	221D	土器	焙塔	(2.2)	-	-	-	密(雲母多)・ 長石(多)		底部擦痕・光沢 あり	-	東関東系	17C前葉~中葉
図版41-3	221D	陶器	天目茶碗	-	-	-	黄白色	緻密		上手	鉄釉	瀬戸・美濃	連房第1~4小期
第86図1	223D	陶器	折縁皿	2.3	13.5	7.3	灰褐色	密	削り出し高台	胎土目ビン痕4ヶ所/ター ル付着/灯明皿として使用 か	灰釉	瀬戸・美濃	連房第1小期
第86図2	223D	陶器	折縁皿	3.2	13.6	6.5	黄白色	密	削り出し高台	蛇の目割ぎ/見込み重ね き痕	灰釉	瀬戸・美濃	連房第1小期
第86図3	223D	陶器	折縁皿	2.9	(14.2)	(7.2)	黄白色	密	削り出し高台	蛇の目割ぎ/見込み重ね き痕	灰釉	瀬戸・美濃	連房第1小期
第86図4	223D	陶器	志野皿	2.1	11.2	6.7	黄白色	密	削り出し高台	内外面被熱/胎土目ビン痕 2ヶ所	灰釉	瀬戸・美濃	連房第1小期
第86図5	223D	陶器	小鉢	4.6	(12.3)	7.4	黄白色	緻密	削り出し高台		灰釉	瀬戸・美濃	連房第1小期
第86図6	223D	陶器	天目茶碗	(3.0)	-	4.3	黄白色	密	削り出し高台		鉄釉	瀬戸・美濃	連房第1小期
第86図7	223D	陶器	播鉢	(12.2)	(34.7)	-	黄白色	緻密		襷目11本以上	鉄釉	瀬戸・美濃	連房第1~4小期
第86図8	223D	土器	瓦灯	(10.1)	19.0	21.6	茶褐色	やや粗	内面ナデ、外面筒 部削り、体部磨き	底面に板目	-	江戸在地	
第86図9	229D	陶器	仏龕具	(2.8)	-	4.4	黄白色	緻密	脚部無軸		灰釉	瀬戸・美濃	連房第8~11小期
図版42-1	234D	土器	皿	-	-	-	明橙色	やや粗	ロクロ成形		-	-	
図版42-1	237D	陶器	志野丸皿	-	-	-	黄白色	緻密	削り出し高台		灰釉	-	連房第5小期
図版42-1	246D	土器	増桶	(2.7)	-	-	灰褐色	やや粗		銅付着	-	不明	不明
図版42-1	248D	陶器	播鉢	-	-	-	灰白色	密		襷目6本以上	-	丹波	17C中葉
第85図11	272D	陶器	上絵付碗	(3.4)	(10.3)	-	灰白色	緻密		半菊花文	灰釉	京・信楽	18C後葉~19C初頭
第85図12	276D	磁器	染付丸碗	(2.8)	-	4.0	灰白色	緻密	高台脇削り/高 台内ナデ	くらわんか手/高台砂目/ 外面呉須描き「梅花文」/ 高台「二重圓線」/高台内 異体字	透明釉	肥前(波佐見 ・平戸系)	18C末葉~19C初頭
第87図1	296D	陶器	鉄絵向付か	(1.5)	-	(4.6)	暗赤褐色	緻密	付高台	見込み鉄絵「草文」	鉄釉+透明釉	唐津	17C初頭
図版42-2	296D	陶器	天目茶碗	-	-	-	黄白色	密	削り出し高台	内面鉄釉	鉄釉	瀬戸・美濃	連房第1~2小期
第87図2	309D	陶器	志野丸皿	2.0	(11.2)	(6.0)	黄白色	緻密	削り出し高台/ 高台内ほとんど 削り込み		長石釉	瀬戸・美濃	連房第2小期
第87図3	312D	陶器	皿	2.0	(11.0)	4.6	灰色	密	見込み蛇の目割ぎ	外面胴部下半~高台露胎	銅緑釉	唐津	17C後半~18C中葉
第87図4	312D	陶器	大鉢	(9.0)	-	(16.6)	-	やや粗/砂粒	外面ハケナデ/ 内面ヨコ指ナデ		-	常滑	
第87図5	319D	陶器	折縁皿	3.0	(11.6)	(6.2)	黄白色	緻密	高台脇削り		灰釉	美濃	大窯第3段階後半
第88図1	17W	陶器	志野丸皿	(1.7)	(10.6)	-	黄白色	緻密			長石釉	瀬戸・美濃	連房第1~3小期
第88図2	17W	陶器	天目茶碗	(6.0)	(10.4)	-	黄白色	緻密	高台脇削り		胎釉?	美濃	連房第1・2小期
第88図3	17W	陶器	折縁鉄絵皿	2.8	13.1	7.6	浅黄色	緻密	削り出し高台	見込み鉄絵「花文」/高台 内墨書	長石釉+緑釉	美濃	連房第1・2小期
第88図4	17W	陶器	鉄絵鉢	4.1	(23.4)	-	黄白色	緻密		緑釉流し掛け	長石釉	美濃か	連房第1・2小期

(単位: cm)

第40表 遺構出土の陶磁器・土器一覧(2)

[]内は現存値・推定値

種図・図版番号	遺構名	種別	器種	法量			胎土		製作の特徴	釉薬	生産地・系譜	時期	
				口径	底径	器高							
第88図1	21W	陶器	丸碗	(5.6)	(11.8)	—	灰白色	緻密	高台胎削り	灰釉	唐津か	17C 初頭	
第88図2	21W	陶器	丸皿	(1.1)	—	5.6	灰白色	緻密	削り出し高台	高台内に輪トチン痕	瀬戸・美濃	大冨第2・3段階	
第88図3	21W	陶器	播鉢	(5.2)	(32.8)	—	にぶい黄色	緻密			結軸	瀬戸	連房第4小期
第88図4	23W	陶器	碗	(2.5)	—	(4.2)	灰色	緻密	高台胎(内外)丸ノミ削り		灰釉	唐津	17C 初頭
第88図5	23W	陶器	播鉢	(5.8)	(27.2)	—	浅黄褐色	緻密		播り目7本以上	錆軸	美濃	大冨第3段階後半
第88図6	23W	陶器	播鉢	(4.2)	—	10.3	黄白色	緻密	底部回転糸切り／外面胴部下位削り	播り目18本か	錆軸	瀬戸	連房第1～4小期
第88図7	23W	陶器	播鉢	(5.3)	—	8.8	浅黄褐色	緻密	底部回転糸切り	播り目20本以上	錆軸	瀬戸・美濃	大冨第3段階か
第88図8	23W	土器	焙烙	(6.5)	—	—	—	密/雲母(多)・長石(多)		外面全面に煤付着	—	東関東系	16C 代
第88図9	23W	土器	焙烙	(1.7)	—	—	—	密/雲母(多)・長石(多)・砂粒		外面全面に煤付着	—	東関東系	16C 代
図版43-3-7	23W	陶器	育耳壺	—	—	—	灰白色	密	外面胴部下位		鉄軸	瀬戸・美濃	連房第4・5小期
第88図10	24W	土器	焙烙	(3.9)	—	—	—	密/赤色粒子(多)	粘土紐積み上げ3段／外面胴部下端指押さえ・チレ目	外面胴部に炭化物(厚)付着	—	北関東系	17C 後半
図版43-2-2	24W	陶器	志野丸皿	—	—	—	にぶい黄褐色	緻密			長石軸	美濃	大冨第4段階後半
図版43-2-3	24W	陶器	播鉢	—	—	—	黄白色	密	外折口縁	播り目10本以上	錆軸	瀬戸・美濃	連房第2小期
図版43-2-4	24W	陶器	上瓶蓋	—	—	—	黄白色	緻密	かえし貼付		鉄軸	瀬戸	連房第8～11小期
第89図1	1M	磁器	染付小碗	3.7	(7.8)	(2.8)	白色	緻密		外面具須描き「五葉若草重ね文」	透明釉	肥前	18C後葉～19C初頭
第89図2	1M	磁器	染付丸碗	(3.9)	(9.8)	—	白色	緻密		外面具須描き「横線文+笹文」	透明釉	肥前	18C後葉～19C初頭
第89図3	30M	陶器	有耳壺蓋	1.2	5.2	3.1	黄白色	緻密	つまみ貼付		灰釉	瀬戸	連房第8～11小期
第89図4	30M	陶器	小杉茶碗	(2.2)	—	(3.4)	黄白色	緻密		高台胎～高台露胎	透明釉	京・信楽	18C 後半
第89図5	30M	陶器	ピラ掛け端反碗	(3.2)	—	—	灰白色	緻密			外面:鉄軸ピラ掛け／内面:透明釉?	萩	19C 前半
第89図6	30M	磁器	染付小碗	3.9	(7.8)	3.1	白色	緻密		外面具須描き「笹文」	透明釉	肥前	18C後葉～19C初頭
第89図7	30M	磁器	染付小碗	(2.3)	—	2.4	白色	緻密	外面丸ノミ彫り／削り出し高台	外面具須描き文字?	透明釉	肥前	18C後葉～19C初頭
第89図8	30M	磁器	染付端反碗	(4.4)	—	—	白色	緻密		外面具須描き「新唐草文」／内面口縁部具須描き「四方摩文」	透明釉	肥前	18C後葉～19C初頭
第89図9	30M	土器	焙烙	5.9	(28.6)	(26.0)	—	やや粗/黒色粒子(多)・赤色粒子(少)	外面胴部下端削り／底部チレ目	補修孔あり(1孔)／外面全面に煤付着	—	北関東系	17C～18C
図版44-1-8	30M	陶器	片口鉢	—	—	—	黄白色	緻密	削り出し高台		乾軸	美濃	連房第7小期
図版44-1-9	30M	陶器	天目茶碗	—	—	—	黄白色	緻密			鉄軸	瀬戸	連房第5小期
図版44-1-10	30M	陶器	片口鉢	—	—	—	黄白色	緻密			黄軸	美濃	連房第7小期
図版44-1-11	30M	磁器	染付皿	—	—	—	白色	緻密	蛇の目高台	高台胎?高台具須描き「三重團線」／見込み「二重團線+松文」	透明釉	肥前	18C後葉～19C初頭
第89図10	32M	陶器	襷輪軸毛目文鉢	(2.2)	—	(11.0)	赤色	緻密		内面鉄軸・緑釉流し掛け	鉄軸・緑軸	唐津	17C 後半
第89図11	32M	土器	焙烙	5.3	(38.2)	(34.3)	—	密/赤色粒子・角閃石(少)・白色粒子(少)	外面胴部下端指押さえ／底部チレ目	口縁部～外面全面に煤付着	—	北関東系	17C 後半
図版44-1-3	32M	陶器	播鉢	—	—	—	浅黄褐色	密/緻密?	口縁部縁帯形成	播り目8本/片口あり	錆軸	美濃	大冨第3段階後半
第89図12	P5	磁器	染付皿	3.5	(15.8)	(10.0)	白色	緻密		外面具須描き「唐草文」/高台「二重團線」/内面具須描き「一重網目文に花?文」	透明釉	肥前	18C後葉～19C初頭
第89図13	P8	陶器	高田徳利	(4.0)	4.4	—	灰色	緻密	折り返し口縁		灰釉	美濃	連房第10・11小期
第89図14	P8	磁器	染付御神蓋徳利	(10.3)	—	—	白色	緻密		外面具須描き「植物文」	透明釉	肥前	18C 中葉
第89図15	P10	土器	焙烙	5.5	(62.3)	(57.6)	—	やや粗/赤色粒子・繊維	外面胴部下端指押さえ／底部チレ目	口縁部～外面全面に煤付着	—	北関東系	17C?18C
図版44-2-1	P13	磁器	上絵付碗	—	—	—	白色	緻密		外面上絵「草花文」	透明釉	肥前	18C～19C
第89図16	P14	陶器	播鉢	(5.8)	—	(10.4)	浅黄褐色	緻密	底部回転糸切り	播り目17本/内面使用による摩耗著しい	錆軸	瀬戸・美濃	大冨第2・3段階
第89図17	P15	陶器	楕円文鉢	(3.4)	—	—	にぶい褐色	緻密		内面白化粧土刷毛塗り	鉄軸・透明釉	唐津	17C 後半
第89図18	P17	土器	灯明皿	2.6	(12.2)	(6.0)	—	緻密	ロクロ成形/底部回転糸切り	内面胴部下半～底部にケール付着/灯明皿として使用か	—	—	15C～16C
第89図19	P17	土器	皿	3.1	(12.0)	7.0	—	緻密/赤色粒子	ロクロ成形/底部回転糸切り	前面黒彩	—	—	15C～16C
第89図20	P19	土器	皿	3.4	(13.0)	(7.0)	—	緻密	ロクロ成形/底部回転糸切り		—	—	不明
第89図21	P20	磁器	染付端反碗	(2.6)	—	—	白色	緻密	内外面被熱	外面具須描き「花唐草文」/口縁か	透明釉	肥前	18C後葉～19C初頭
図版44-2-1	P22	陶器	天目茶碗	—	—	—	にぶい褐色	緻密			鉄軸	美濃	大冨第4段階
図版44-2-1	P23	陶器	丸皿	—	—	—	黄白色	緻密	削り込み高台		灰軸	美濃	大冨第4段階
図版44-2-1	P24	陶器	折縁輪軸鉢	—	—	—	黄白色	緻密			灰軸	美濃	連房第7小期
第89図22	P25	陶器	志野丸皿	2.7	(12.8)	7.8	黄白色	緻密	削り出し高台	内面被熱	長石軸	瀬戸・美濃	連房第2小期

(単位: cm)

第40表 遺構出土の陶磁器・土器一覧(3)

()は現存値

挿図・図版番号	遺構名	種類	長さ	幅	重量	備考
第90図1	220D	土錘	(5.1)	2.1	17.0	孔の直径0.7cm
第90図2	295D	レンゲミニチュア	2.7	1.1	1.2	高さ1.5cm
第90図3	1M	泥面子	2.0	1.8	2.0	厚さ0.7cm
第90図4	P16	土玉	1.4	1.2	1.1	厚さ1.0cm
図版45-1-5	210D	素焼人形	-	5.3	8.4	高さ2.7cm/中空

第41表 遺構出土の土製品一覧

挿図番号	遺構名	種類	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第91図1	1M	石筆	滑石	2.3	0.6	0.6	1.2	
第91図2	1M	石筆	滑石	2.0	0.6	0.6	1.5	(E-1)グリッド
第91図3	147D	砥石	頁岩	8.3	6.0	2.4	120.4	
第91図4	147D	砥石		9.0	6.9	2.7	310.0	
第91図5	223D	砥石		4.9	2.9	1.3	23.6	
第91図6	240D	砥石	凝灰岩	10.2	3.5	2.9	120.7	
第91図7	270D	砥石	凝灰岩	7.4	3.2	2.4	76.5	
第91図8	312D	砥石	凝灰岩	13.0	3.1	1.6	83.5	
第91図9	19W	砥石	凝灰岩	10.9	4.0	3.5	192.7	
第91図10	32M	砥石	凝灰岩	8.5	2.7	2.6	63.9	
第91図11	遺構外	砥石	安山岩	4.4	2.9	1.2	21.9	(C-5)グリッド
第91図12	183D	硯	砂岩	9.8	5.8	1.7	104.0	
第91図13	210D	硯		7.5	6.0	2.0	140.0	
第91図14	269D	石臼		12.2	(7.7)	-	1,100.0	高さ11.9cm

第42表 石製品一覧

挿図番号	遺構名	種類	材質	長さ	最大幅	最大厚	重量	備考
第93図1	147D	釘	鉄	3.9	0.7	0.5	2.6	
第93図2	149D	釘	鉄	(7.1)	1.8	0.9	16.4	2本の釘が銹着したもの
第93図3	154D	釘	鉄	4.4	0.7	0.7	2.8	
第93図4	158D	釘	鉄	6.0	0.9	0.7	5.5	
第93図5	180D	釘	鉄	(4.8)	0.8	0.7	3.6	
第93図6	184D	釘	鉄	(3.7)	1.0	0.8	1.9	
第93図7	188D	釘	鉄	(4.2)	1.5	0.9	4.7	
第93図8	189D	鍔	鉄	(5.1)	1.5	1.1	16.6	釘が曲がったものである可能性あり
第93図9	210D	釘	鉄	(4.5)	0.9	0.8	2.6	
第93図10	210D	釘	鉄	(4.3)	1.1	0.8	2.9	
第93図11	221D	釘	鉄	(4.3)	0.8	0.6	2.1	
第93図12	223D	釘	鉄	(9.6)	1.5	1.5	15.4	
第93図13	223D	釘	鉄	6.9	1.0	0.8	6.4	
第93図14	230D	釘	鉄	3.6	0.8	0.7	1.6	
第93図15	237D	釘	鉄	4.8	1.2	0.8	4.0	
第93図16	265D	釘	鉄	(2.2)	0.5	0.6	1.7	
第93図17	P6	釘	鉄	6.0	0.8	0.6	4.5	
第93図18	P11	釘	鉄	(4.6)	1.1	1.3	5.3	
第93図19	1M	釘	鉄	4.7	1.3	1.0	10.6	
第93図20	1M	釘	鉄	4.0	0.9	0.8	4.2	
第93図21	1M	釘	鉄	(8.8)	0.8	0.6	11.2	
第93図22	1M	釘	鉄	8.4	1.4	0.7	18.2	
第93図23	1M	釘	鉄	3.2	0.9	0.6	3.1	
第93図24	1M	釘	鉄	14.2	0.8	0.7	17.4	
第93図25	遺構外	釘	鉄	(13.2)	1.7	1.3	53.5	(E-2)グリッド出土
第93図26	遺構外	釘	鉄	(7.0)	0.9	0.8	9.4	(E-2)グリッド出土
第93図27	P7	刀子	鉄	(9.3)	1.2	0.4	9.4	刃部欠損
第93図28	191D	包丁?	鉄	(9.8)	5.9	1.0	65.5	欠損が著しく詳細不明
第93図29	20W	包丁	鉄	(9.5)	3.5	0.7	34.4	
第93図30	235D	羽釜?	鉄	(5.4)	1.8	1.0	15.6	断面は「Y」字状を呈している/羽釜の鏝あるいは鉄先か
第93図31	173D	火打金	鉄	2.3	(3.2)	0.5	9.5	
第93図32	223D	火打金	鉄	2.7	(2.6)	0.8	7.5	

(単位: cm, g)

第43表 金属製品一覧(1)

()は現存値

挿図番号	遺構名	種類	材質	長さ	最大幅	最大厚	重量	備 考
第93図33	P21	火打金	鉄	2.7	(3.9)	0.6	8.7	
第93図34	145D	不明品	鉄	(10.4)	1.5	1.0	44.6	壁飾りか/断面三角形/全面赤彩(漆塗り?)
第93図35	145D	不明品	鉄	3.3	(3.7)	0.3	7.0	
第93図36	160D	不明品	鉄	2.4	(2.6)	0.4	7.2	板状のものが折れ曲がるが、製品そのものの形状なのか不明
第93図37	166D	不明品	鉄	(4.9)	3.5	0.3	10.4	基部であろう部分が袋状を呈している/飾り金具か
第93図38	210D	不明品	鉄	(2.6)	2.0	0.6	7.0	
第93図39	230D	不明品	鉄	—	—	0.6	8.3	リング/最大径2.7cm/高さ1.0cm。
第93図40	246D	不明品	鉄	(3.2)	(3.0)	0.4	8.3	
第93図41	P18	不明品	鉄	3.9	4.3	0.2	19.2	リング状を呈する/高さ1.2cm
第93図42	1M	不明品	鉄	1.7	0.9	0.2	0.7	リング状を呈する/高さ0.4cm/留金具であろう
第93図43	32M	不明品	鉄	(2.2)	(2.6)	0.3	2.4	
第93図44	遺構外	不明品	鉄・銅	4.2	4.7	1.0	30.6	鉄と銅の組み合わせ製品/銅部は断面「コ」の字状を呈し、鉄部はその溝部に挟み込み/同製品は同遺跡第35地点から出土(尾形・深井 1999)/飾り金具か
第93図45	遺構外	不明品	鉄	3.5	3.7	1.4	14.4	基部であろう部分が袋状を呈している/飾り金具か
第93図46	145D	煙管	銅	4.9	1.0	0.05	5.7	雁首部分/火皿口径1.2cm/高さ1.5cm
第93図47	210D	煙管	銅	3.5	1.0	0.05	2.9	雁首部分/火皿口径1.7cm/高さ1.8cm
第93図48	1M	煙管	銅	3.2	1.3	0.05	4.2	雁首部分/火皿口径1.0cm/高さ1.7cm
第93図49	187D	刀装具	銅	(4.3)	0.9	0.05	2.9	柄の縁か/高さ0.9cm
第93図50	246D	門扉金具	銅	7.3	(5.4)	—	62.0	額面に五三の桐/額面を貫通し、基軸金具があり、その末端部は面取り装飾、中央は穿孔/座付金具の表面には刻み装飾あり
第93図51	P12	飾り金具	銅	—	—	0.05	5.2	釘隠しと思われる/径3.8cm/高さ0.6cm
第93図52	遺構外	不明	銅	3.1	2.1	0.2	3.1	板状
第93図53	遺構外	刀装具	銅	6.5	5.2	0.3	62.0	鐔/切羽装着あり
第92図	234D	鉄鍋	鉄	—	—	—	—	器高26.8cm・口径53.6cm/内面口縁部直下に4つの耳を持つ内耳鉄鍋/湯口跡の形態は保存処理後に不鮮明なものになってしまったが、検出時は丸形を確認/口縁部は大きく屈曲し、鐔状に平坦口縁/内耳はいずれもやや丸味をもつし字形/体部は直線的に直立し、底部は丸底気味/器厚は全体的に薄手であり、口縁部及び底部が最も厚く5mm程、体部は3~4mm程/パラロイド液含浸

(単位: cm, g)

第43表 金属製品一覧(2)

挿図番号	遺構名	銭貨名	外径	方孔一辺	重量	初鋳年	欠 損	備 考
第94図1	148D	寛永通宝(新)	22.0	6.0	1.7	1697		ハ貝寶
第94図2	191D	永楽通宝	25.0	5.0	3.1	1408		
第94図3	191D	永楽通宝	25.0	5.5	2.7	1408		
第94図4	191D	永楽通宝	25.0	5.5	3.6	1408		
第94図5	191D	永楽通宝	25.0	5.0	3.3	1408		
第94図6	191D	永楽通宝	25.0	6.0	3.8	1408		
第94図7	191D	永楽通宝	25.0	5.5	4.2	1408		
第94図8	192D	熙寧元宝	24.5	7.0	2.1	1068	一部欠損	
第94図9	219D	永楽通宝	—	—	—	1408	遺存度1/3	
第94図10	223D	祥符通宝	25.0	6.0	2.5	1008		
第94図11	223D	元豊通宝	24.0	6.5	2.0	1078	一部欠損	
第94図12	310D	寛永通宝(古)	25.0	5.0	2.6	1636		ス貝寶
第94図13	312D	永楽通宝	25.0	6.0	2.9	1408		
第94図14	312D	元祐通宝	24.5	5.5	2.5	1086		
第94図15	312D	皇宋元宝	—	—	—	1039	遺存度1/3	
第94図16	30M	寛永通宝(古)	25.5	6.0	2.3	1636		
第94図17	P6	元祐通宝	24.0	7.0	2.8	1086		
第94図18	P6	紹聖元宝	23.5	6.0	2.0	1094		
第94図19	P9	天聖元宝	25.0	7.0	2.5	1023	一部欠損	
第94図20	P10	永楽通宝	25.0	5.0	2.6	1408		
第94図21	遺構外	元豊通宝	—	—	—	1078	遺存度1/4	133Hから出土
第94図22	遺構外	大観通宝	25.0	6.5	3.3	1107		287Dから出土
第94図23	遺構外	元豊通宝	24.5	7.0	3.1	1078	遺存度1/2	287Dから出土

(単位: mm, g)

第44表 銭貨一覧

第3章 検出された遺構と遺物

()は現存値

挿図番号	遺構名	種類	長さ	幅	厚さ	主な特徴	備考
第95図1	147D	軒棧瓦	(8.0)	(19.5)	2.2	平部瓦当の文様：均整唐草文で全体にバランスがよくダイナミックな文様／子葉はくびれから先端が太め／同形唐草(円盤状)反転／中心飾りは中央8の字、沈線・点珠あり、脇は重線で外線にくびれあり	
第95図2	147D	平瓦?	(12.8)	(12.9)	2.4		
第95図3	147D	棧瓦	(12.4)	(13.7)	1.8	頭切り込み長2.5cm・幅3.8cm／目痕あり	頭切り込み部近くに釘留め穴(径0.8cm)あり
第95図4	147D	丸瓦?	(12.7)	(11.9)	1.8	玉縁長2.5cm／高さ5.6cm	
第95図5	147D	丸瓦	(13.6)	(9.0)	1.9	内径6.0cm／小口長2.0cm／高さ(2.5)cm	玉縁欠損
第95図6	210D	軒棧瓦	-	-	2.0	瓦当外径8.4cm／瓦当内径4.3cm／小丸瓦当の文様：三つ巴文左巻き／	小丸瓦当部のみ残存
第95図7	210D	棧瓦	(14.5)	(17.4)	1.9	棧長14.2cm／棧幅3.5cm／棧峠は山形	
第95図8	210D	平瓦?	(12.7)	(14.6)	1.7	断面サンドイッチ状に焼成	上下逆さまの可能性あり
第95図9	210D	平瓦?	(12.6)	(13.1)	2.0		上下逆さまの可能性あり

(単位：cm)

第45表 遺構出土の瓦一覧

挿図・図版番号	遺構名	長さ	幅	厚さ	特徴	備考
第96図1	223D	33.4	28.5	2.7	大型破片である／種子「キリク」が刻まれている／薬研彫り／裏面には工具痕あり	
第96図2	223D	9.0	7.0	1.5	種子「キリク」の一部である子音 r (a)の左部分であろうか	
第96図3	18W	27.2	15.5	2.0	種子「キリク」の左側の涅槃点が見られる／薬研彫り	
第96図4	22W	14.7	6.7	3.0	月輪内に配される種子「キリク」の一部の子音 r (a)の左部分であろうか。	
第96図5	22W	16.7	10.7	2.1	種子「キリク」の左側の涅槃点が見られる／薬研彫り	
第96図6	21W・23W	42.7	19.0	2.4	偈は「撰取不捨 念仏衆生」8文字のうちの「□取不捨 □□衆生」5文字が確認できる／紀年は「□年四月□日」であろうか／基部残存	21Wと23Wの遺構間接合
図版48-2-7	23W	17.2	13.4	2.2		小破片
図版48-2-8	23W	6.7	5.8	0.6		小破片
図版48-2-9	23W	5.0	6.2	0.6		小破片

(単位：cm)

第46表 遺構出土の板碑一覧

第6節 遺構外出土遺物

ここでは、表土や攪乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時期の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱うことにする。

遺構外出土遺物は、旧石器時代、縄文時代（早・前・中・後期）、弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代、中・近世の時期に比定されるものであり、以下のように第1～6群に分類した。

第1群 旧石器時代の石器（第97図1・2、第47表）

1は角錐状石器（安山岩）、2は剥片（黒曜石）である。

第2群 縄文時代の遺物

（第97図3～12、第98図13～18、第99図1～53、第100図54～73、第48・49表）

第97図3～18は縄文時代の石器である。

3は石鏃、4は石鏃未製品、5は使用痕のある剥片、6～14は剥片、15～18は打製石斧である。

第98図1～53、第99図54～73は縄文時代の土器である。前期後葉から中期初頭の遺物を中心に、早期後葉から後期前葉にかけての幅広い時期の土器片が出土している。

1～10は早期条痕文系土器である。

いずれも貝殻条痕文が施文された部分のみの破片である。縄文遺構の集中するB～E-3・4グリッドを中心に出土している。

11～13は前期関山式土器である。

非常に小型の破片が多く、図示できるものは少ない。いずれも縄文施文のみの破片で繊維を含む。11の縄文は直前段合撚の異条斜縄文でRLとLRをLに撚っている。

14～45は前期諸磯式・十三菩提式土器である。

14～16は胴部に横位の浮線文を有する諸磯b式の土器片である。14はキャリパー形の深鉢の頸部で浮線文には斜めの刻みが施される。16の浮線文には斜めに縄文の圧痕が施される。

17～33は沈線・条線文をもつ諸磯式である。17～19は諸磯b。20は耳状突起、21はボタン状貼付け文、22～29は縦位の結節浮線文を持つ。30・31は小さなボタン状貼付け文を有する。20～31は諸磯c。

34・35は同心円状の結節浮線文を持つ。36・37は同一個体と思われ、半截竹管による短い線状の刺突文を施文する。諸磯c式か？

38～42は縄文のみ有する破片で38・39は無節Lを横位に40～42は単節RLを縦位に施文する。前期末葉から中期初頭にかけての所産と思われる。

43は横位のRL縄文地に縦位の結節浮線文を垂下する。44は地紋に集合沈線を施文した上に粘土紐を素麺状に貼付し、更にも上から刻むように集合沈線を施文する。45は無文地に横位の結節浮線文を貼付する。43～45は十三菩提式と思われる。

46～56は五領ヶ台式と思われる土器片である。

46は口縁部片で、口縁に平行した横位の沈線文と鋸歯状文の間に三角の陰刻文を有する。口縁内面に

は口縁に平行した稜を巡らせる。50は縦位に粘土紐を貼付し、その中央に縦位の沈線を施文。更にその貼付文の際から横位の平行沈線を施文し、その間に鋸歯状沈線を施文している。51はL Rの縄文地に隆帯を縦に貼り付け、その上を篋状の工具で均し、両脇に沈線を沿わせている。53・55・56は結節（縄）文を持つ。

57～69は中期中葉の阿玉台式・勝坂式土器、中期後葉の加曽利E式土器である。

57～59はいずれも縦位の隆帯をもつ土器片で57は隆帯脇に結節沈線を、58は隆帯上にR Lの縄文を施文する。59は地紋にL Rの縄文を横位に施文する。57～59は阿玉台式。

60の口縁部は顕著に外反し、口唇部には刻みを有する。地文はR Lの縄文を縦位に施文し、口唇部直下2 cm ほどは無文。61は縦位の結節沈線をその太さと同間隔に平行に施文している。60・61は勝坂式と思われる。

62～69は加曽利E式の土器片である。62は波状口縁部の破片で文様は沈線による渦状文と思われる。63はL Rの縄文地に磨消懸垂文をもつ。64は口縁部に沿った微隆起線文をもち、その上からR Lの縄文を施文している。65はL Rの縄文地に微隆起線と磨消による懸垂文を有する。66・67はLの撚糸文のみ、68はLの縄文のみ有する土器片。69は複節L R Lの縄文地に沈線と磨消による曲線文を描く。

70～73は後期前葉の称名寺式・堀之内式土器である。

70は無文地に沈線による懸垂文を有し、表面は丁寧に磨かれ、胎土粒子は細かく、堅く緻密な土器片である。71は胎土に非常に微細な銀色に輝く粒子を含む。火山ガラスか或いは片岩に由来する石英粒子であろうか。73は粗製土器でR Lの粗い縄文を縦位に施文する。器厚は16mmと厚く胎土にはチャートの細礫・粗砂を含む。

第3群 弥生時代の土器（第100図74～79、第50表）

今回の調査では、住居跡等の遺構は一切検出されなかった。遺構外出土の土器についても極めて量は少なかったと言える。74・75は壺形土器、76は高环形土器、77～79は甕形土器の破片である。

第4群 古墳～平安時代の土製品・石製品（第100図80・81、第50表）

80・81は紡錘車で、80は土製、81は石製である。

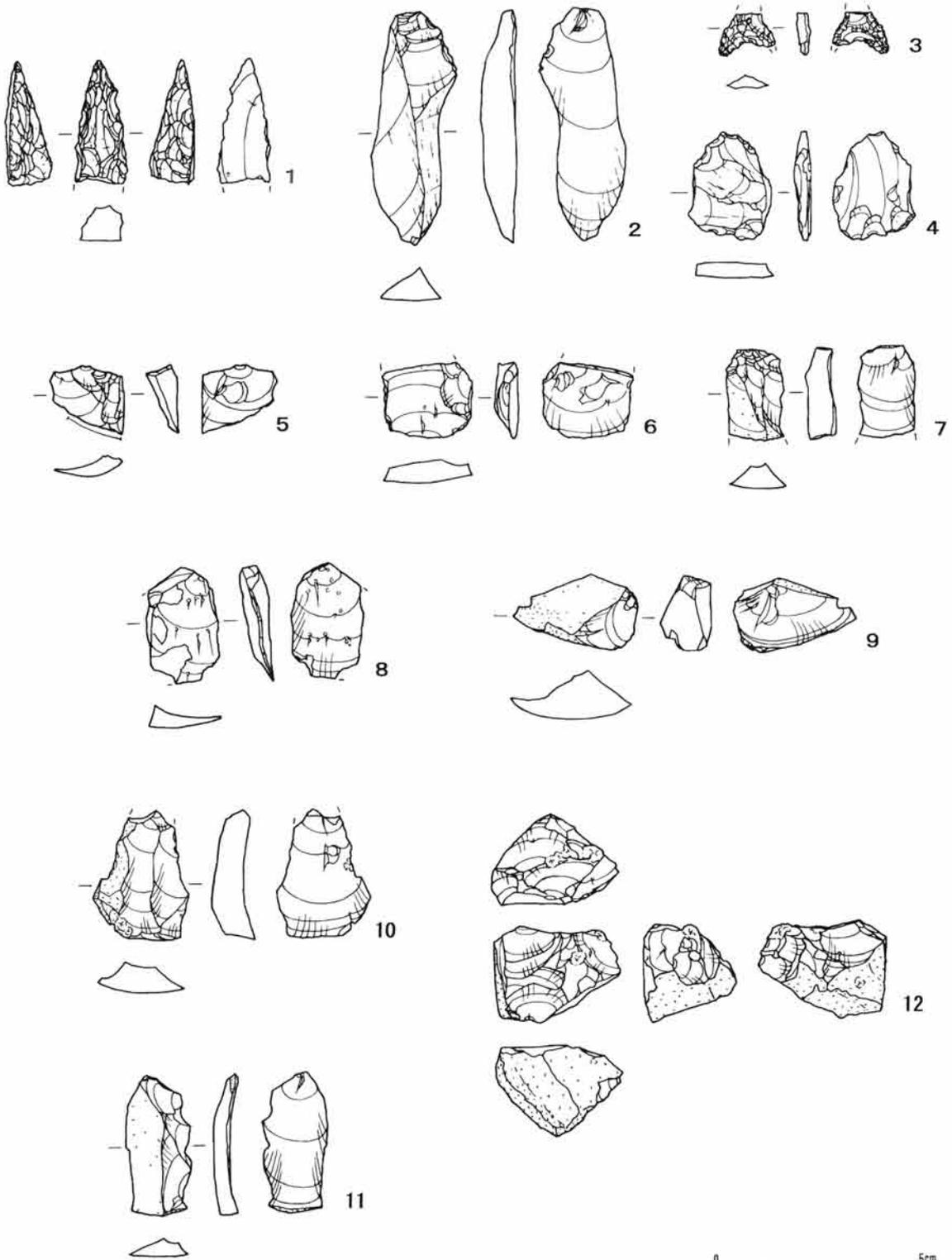
第5群 平安時代の遺物（第100図82～92、第50表）

82～88は須恵器・灰釉陶器である。82～84は須恵器坏形土器、85・86は須恵器埴形土器、87は灰釉陶器の埴形土器、88は須恵器長頸壺である。

89～92は布目瓦である。89・90・92は平瓦、91は丸瓦である。

第6群 中近世の陶磁器・土器（第101図93～111、図版51-112～129、第51表）

第101図93～102・図版51-112～128は陶器、第101図103～109・図版51-129は磁器、第101図110・111は土器である。

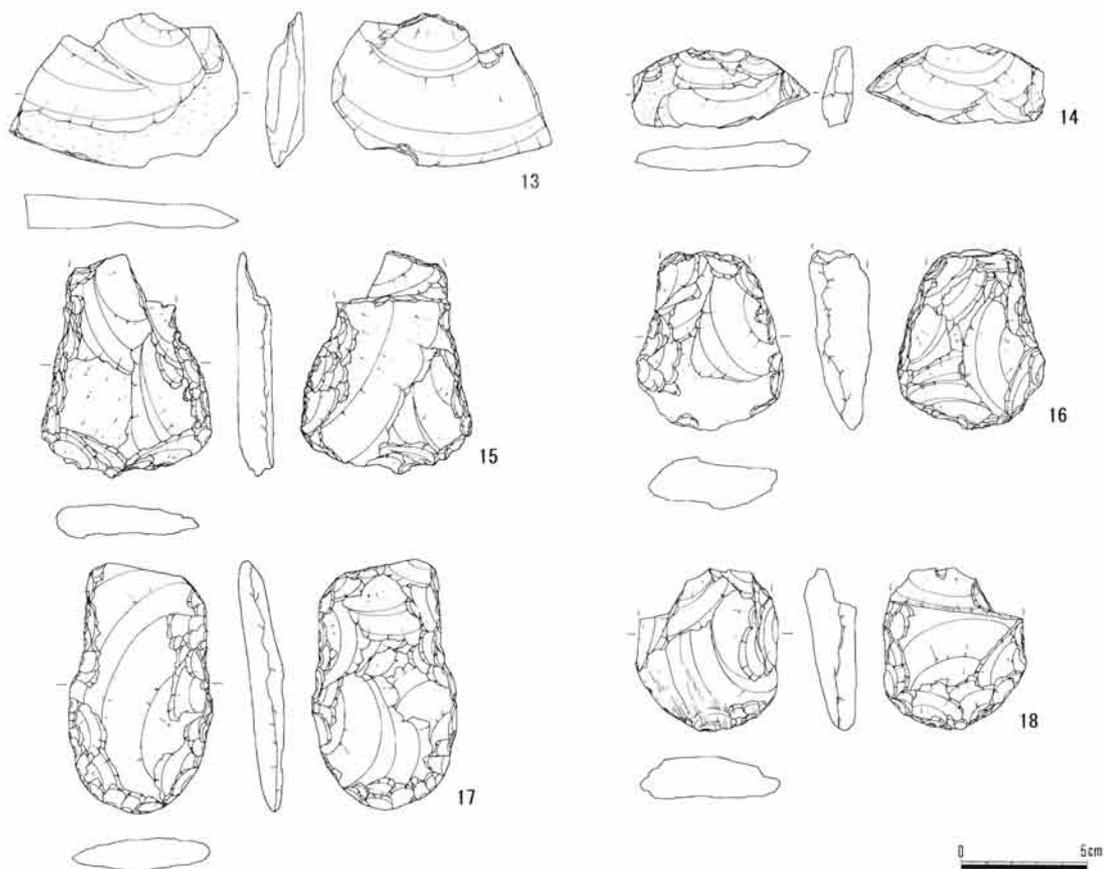


第97図 遺構外出土石器1 (2/3)

挿図番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	遺存状態	備考・出土位置など
第97図1	角錐状石器	安山岩	31.33	12.78	10.71	3.7	下部欠	312D
第97図2	剥片	頁岩	57.64	20.53	8.87	7.4	完形	30M

(単位 mm, g)

第47表 遺構外出土の旧石器時代の石器一覧

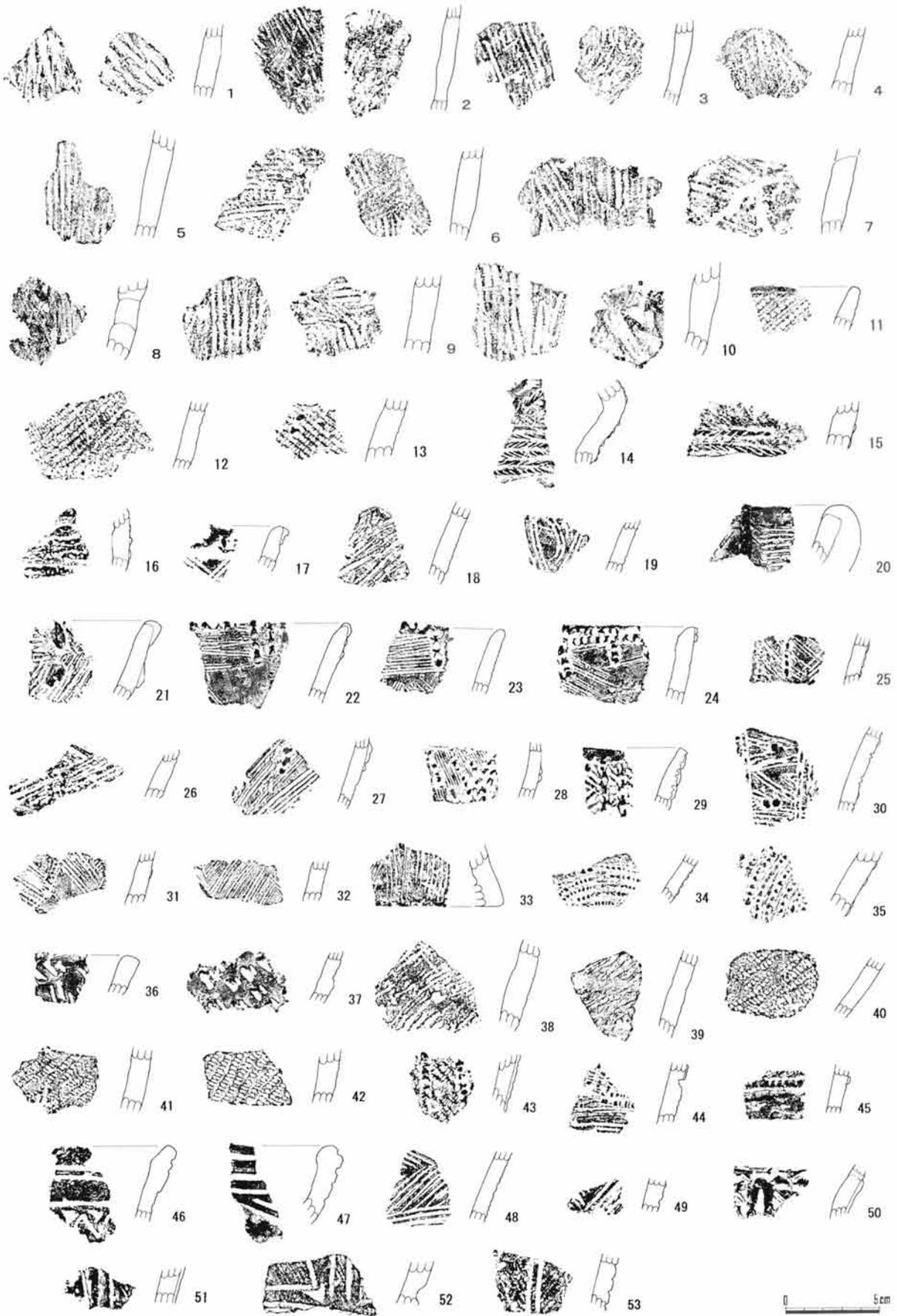


第98図 遺構外出土石器 2 (1/3)

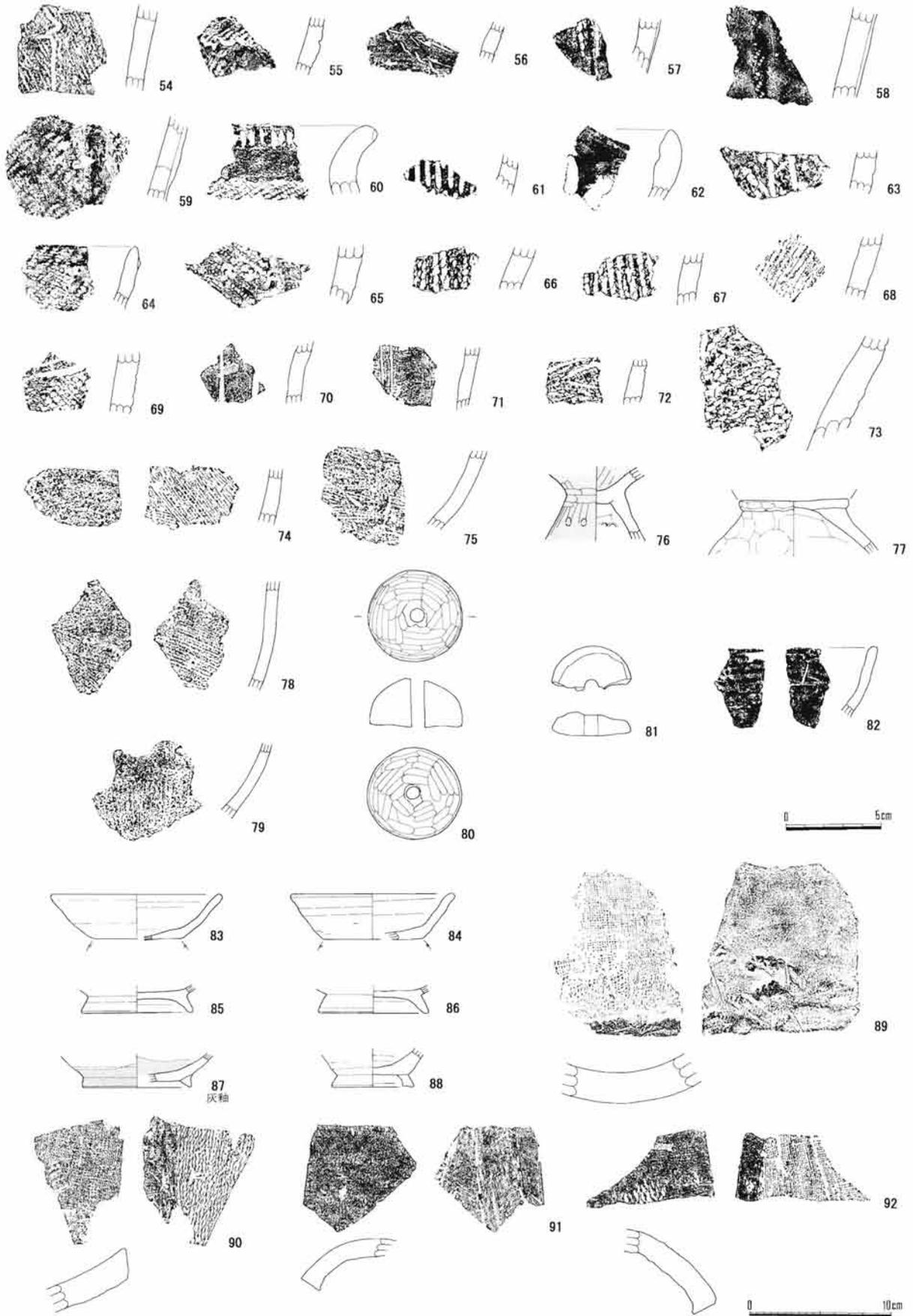
図版番号	器種	形態	石材	長さ	幅	厚さ	重量	遺存状態	出土位置・備考
第97図3	石鏃	凹基	黒曜石	9.27	13.31	3.17	0.3	先端・右脚部欠	133H
第97図4	石鏃未製品		頁岩	26.24	19.53	4.43	2.8	左側縁欠	143H
第97図5	使用痕のある剥片		黒曜石	17.79	18.43	5.59	1	完形	(E-2)グリッド
第97図6	剥片		黒曜石	18.67	22.15	5.59	2.5	上部欠	19W
第97図7	剥片		黒曜石	22.26	13.9	7.82	2.2	下部欠	148H
第97図8	剥片		黒曜石	28.36	17.28	6.48	2.6	左側縁欠	(E-5)グリッド
第97図9	剥片		黒曜石	17.05	28.43	11.76	4.8	完形	(E-2・3)グリッド
第97図10	剥片		黒曜石	31.61	22.82	9.74	4.6	上部欠	147H
第97図11	剥片		黒曜石	34.54	15.86	5.75	2.2	完形	312D
第97図12	石核		黒曜石	24.01	30.49	22.8	13.7	完形	231D
第98図13	剥片		ホルンフェルス	61.78	89.47	15.14	79.7	左側縁欠	153D
第98図14	剥片		ホルンフェルス	33.57	71.22	11.21	28.3	下部欠	237D/打製石斧調整剥片
第98図15	打製石斧	撥形	片岩	90.84	68.35	12.23	93.7	基部欠	191D
第98図16	打製石斧	撥形	ホルンフェルス	74.31	58.62	23.04	104.2	基部欠	146H
第98図17	打製石斧	短冊	ホルンフェルス	100.75	56.97	14.17	100.3	完形	134H
第98図18	打製石斧	不明	頁岩	67.03	57.31	19.24	78.2	基部欠	136H/刃部、使用による磨耗が顕著

(単位: mm, g)

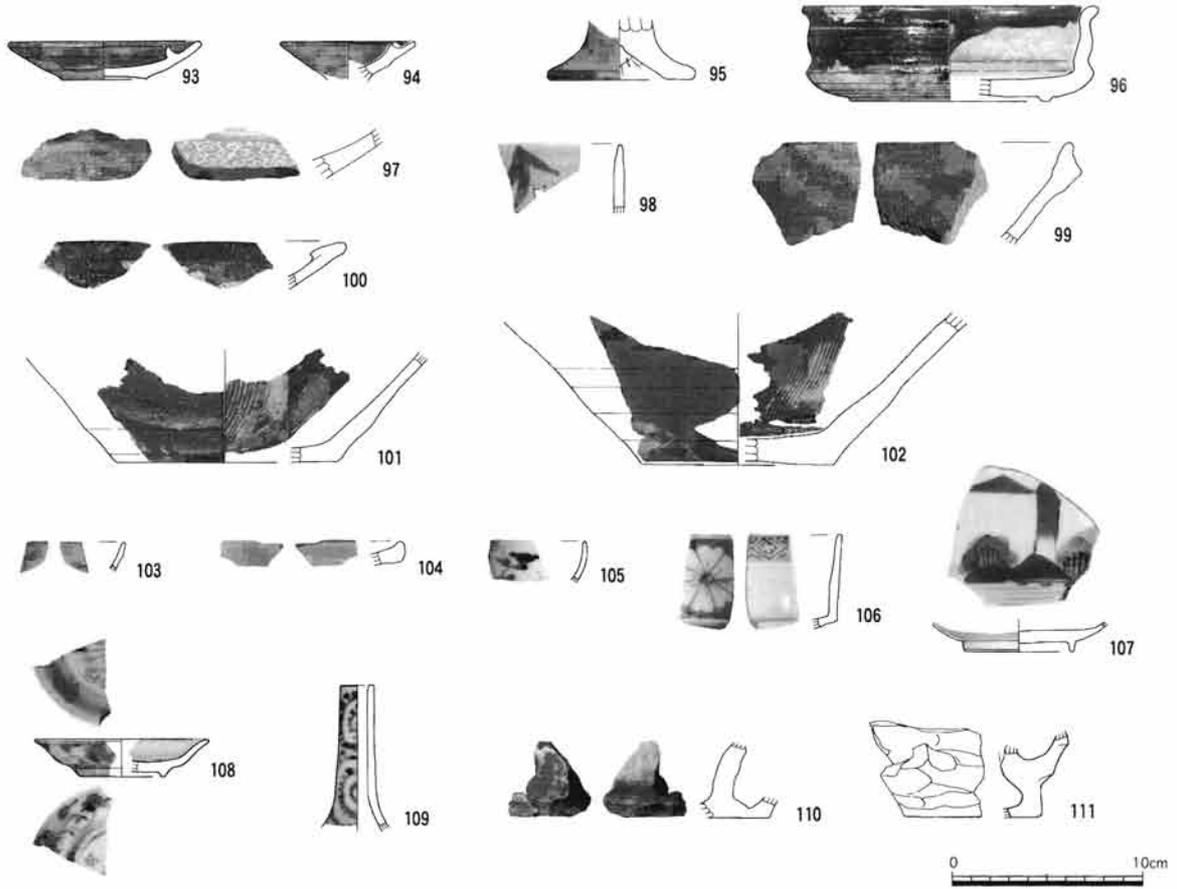
第48表 遺構外出土の縄文時代の石器一覧



第99圖 遺構外出土遺物 1 (1/3)



第100図 遺構外出土遺物 2 (1/3・1/4)



第101図 遺構外出土遺物 3 (1/4)

第3章 検出された遺構と遺物

挿図番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物				備考・出土位置など		
					白色 粒子	角 閃石	細 礫	砂 粒		その他	
第99図1	胴	貝殻条痕文	明褐色	早期条痕文系				○	繊維○	148H	
第99図2	胴	貝殻条痕文	明褐色	早期条痕文系					繊維○	145H	
第99図3	胴	貝殻条痕文	明褐色	早期条痕文系			△	○	繊維○	(B-4)グリッド	
第99図4	胴	貝殻条痕文	褐色	早期条痕文系				○	繊維○	(B-3)グリッド	
第99図5	胴	貝殻条痕文	暗赤褐色	早期条痕文系	○			○	繊維○	148H	
第99図6	胴	貝殻条痕文	赤褐色	早期条痕文系	○			○	繊維○	148H	
第99図7	胴	貝殻条痕文	赤褐色	早期条痕文系	○	○	○		繊維○	235D	
第99図8	胴	貝殻条痕文	明褐色	早期条痕文系			○		繊維○	147H	
第99図9	胴	貝殻条痕文	赤褐色	早期条痕文系	△	△	○		繊維○	(C-5)グリッド	
第99図10	胴	貝殻条痕文	明褐色	早期条痕文系				○	繊維○	147H	
第99図11	口縁	異条斜縄文(正反の合)	明褐色	関山					繊維○	134H	
第99図12	胴	羽状縄文	褐色	関山					繊維○	23・24W	
第99図13	胴	縄文RL	褐色	関山					繊維○	324D	
第99図14	頸部	縄文RLの地文に浮線文を貼付し、浮線文上には斜位の刻みを施す/刻みの傾きは浮線文毎に交互	明褐色	諸磯B	○	△		○		口唇部欠損/134H	
第99図15	胴	浮線文上に斜位の刻み/刻みの傾きは浮線文毎に交互	明褐色	諸磯B	○	○		○		134H	
第99図16	胴	縄文RLを地文に粘土紐による浮線文を貼付し、その上に縄文の圧痕	暗赤褐色	諸磯B				○	○	140H	
第99図17	口縁	口縁外面に貼り付けられた隆帯上に竹管による連続刺突/横位の鋸歯状文	赤褐色	諸磯B				○		286D-1と同一個体か?/148H	
第99図18	胴	半截竹管による斜位の平行沈線文	褐色	諸磯B		△		○		21W	
第99図19	胴	半截竹管による曲線の平行沈線文	赤褐色	諸磯B?				○		140H	
第99図20	口縁	耳状突起/横位の条線	褐色	諸磯C				○		(C-3)グリッド	
第99図21	口縁	半截竹管による条線の地文にボタン状貼付文	赤褐色	諸磯C				○	○	片岩△	312D
第99図22	口縁	口唇部に刻み/横位の条線文/口唇部から縦に2cm程の結節浮線文を垂下する	褐色	諸磯C				○		133H	
第99図23	口縁	口唇部に刻み/地文は口唇部直下は横位、以下は矢羽根状の条線文/口唇部から縦に2cm程の結節浮線文を垂下する	赤褐色	諸磯C				○	○	183D	
第99図24	口縁	半截竹管による条線の地文/口唇部直下に2段の横位結節浮線文を付し、そこから縦位に1.5cm程の結節浮線文を垂下する	赤褐色	諸磯C			○	○		312D	
第99図25	胴	半截竹管による矢羽根状の地文/縦位の結節浮線文を垂下する	褐色	諸磯C		△		○		312D	
第99図26	胴	半截竹管による斜位の条線の地文/縦位の結節浮線文を垂下する	黒褐色	諸磯C				○	金雲母○	152D	
第99図27	胴	半截竹管による斜位の条線の地文/縦位の結節浮線文を垂下する	暗褐色	諸磯C			△	△		148H	
第99図28	胴	半截竹管による斜位の条線の地文/結節浮線文を貼付する	褐色	諸磯C		△		△		132H	
第99図29	口縁	半截竹管による矢羽根状の集合沈線地に縦位の結節浮線文	明褐色	諸磯C	△			○		32M	
第99図30	胴	半截竹管による交互の斜位沈線/結節沈線の懸垂文/ボタン状貼付文	暗赤褐色	諸磯C?				○	○	金雲母◎	破砕破か/312D

胎土混入物の量 ◎:多量 ○:普通 △:少量

第49表 遺構外出土の縄文土器一覧(1)

挿図番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物				備考・出土位置など
					白色粒子	角閃石	細砂	その他	
第99図31	胴	半截竹管による矢羽根状条線文 ／ボタン状貼付文	明赤褐色	諸磯 C			○		140H
第99図32	胴	半截竹管による斜位条線	明灰褐色	諸磯 C			○		143H
第99図33	底	半截竹管による条線文	暗褐色	諸磯 C			○	金雲母△	147H
第99図34	胴	同心円状の結節浮線文	暗褐色	諸磯 C			○	金雲母△	30M
第99図35	胴	同心円状の結節浮線文	暗褐色	諸磯 C			◎	金雲母△	破碎礫か／1M
第99図36	口縁	半截竹管による刺突文	明灰褐色	諸磯 C?	○		○		133H
第99図37	胴	半截竹管による刺突文	明灰褐色	諸磯 C?	○		○		240D
第99図38	胴	縄文 L	黒褐色	前期末～中期初		△	○		148H
第99図39	胴	縄文 L	明褐色	前期末～中期初			○○		
第99図40	胴	縄文 R L	暗赤褐色	前期末～中期初		△	○		148H
第99図41	胴	縄文 R L	褐色	前期末～中期初		○	○	褐色粒子○	149H
第99図42	胴	縄文 R L	褐色	前期末～中期初	△		○		176D
第99図43	胴	縄文 R L / 結節浮線文	赤褐色	十三菩提?			○		148H
第99図44	胴	集合沈線を伴う素縄状貼付文	明褐色	十三菩提	○		○		148H
第99図45	胴	結節浮線文	暗褐色	十三菩提?			○	金雲母○	148H
第99図46	口縁	横位の平行した沈線文／三角形 の陰刻文／鋸歯状の沈線文	褐色	五領ヶ台			○○	金雲母◎	破碎礫か／248D
第99図47	口縁	沈線文	明褐色	五領ヶ台	○		○		180D
第99図48	胴	竹管文	明褐色	五領ヶ台?			○		150H
第99図49	胴	半截竹管による矢羽根状集合沈 線	暗赤褐色	五領ヶ台	△		○○	金雲母○	237D
第99図50	胴	平行沈線間に鋸歯状の沈線文 貼付の懸垂文	褐色	五領ヶ台?			○		173D
第99図51	胴	縄文 L R / 隆帯	赤褐色	五領ヶ台	○		○○		破碎礫か／140H
第99図52	胴	縄文 R L / 沈線文 / 三角陰刻文	赤褐色	五領ヶ台			◎	金雲母△	破碎礫か
第99図53	胴	縄文 R L 地に半截竹管による沈 線文を施し、その沈線に沿って 連続刺突を施文 / 結節文	褐色	五領ヶ台	○		○	金雲母△	(D-2)グリッド
第100図54	胴	縄文 L / 沈線	赤褐色	五領ヶ台			○○		破碎礫か? / (C-1)グリッド
第100図55	胴	縄文 L R / 結節文	明褐色	五領ヶ台			△	○	140H
第100図56	胴	結節文	暗赤褐色	五領ヶ台	△		○		
第100図57	胴	隆帯脇に結節沈線文	褐色	阿玉台	△		○○	金雲母○	破碎礫か / 133H
第100図58	胴	隆帯上に R L 縄文を施文	黒褐色	阿玉台			○○	金雲母◎	破碎礫か / 246D
第100図59	胴	縄文 L R / 隆帯	褐色	阿玉台			○○	金雲母◎	破碎礫か / 166D
第100図60	口縁	口唇部に刻み / 縄文 R L	灰色	勝坂?		△	◎	金雲母△	破碎礫か / (D-2)グリッド
第100図61	胴	結節沈線文	暗赤褐色	勝坂			○		136H
第100図62	口縁	沈線 / 波状口縁	明褐色	加曾利 E II ~ III	△		○		30M
第100図63	胴	磨消懸垂文 / 縄文 L R	明褐色	加曾利 E II ~ III			○		265D
第100図64	口縁	縄文 R L / 微隆起線	黒褐色	加曾利 E IV			○		149H
第100図65	胴	縄文 L R 地に微隆起線文と磨消 懸垂文	褐色	加曾利 E IV			○	褐色粒子○	32M
第100図66	胴	撚糸文 L	明褐色	加曾利 E			○		140H
第100図67	胴	撚糸文 L	褐色	加曾利 E	△		○	褐色粒子△	148H
第100図68	胴	縄文 L	黒褐色	加曾利 E	△	△	○		191D
第100図69	胴	沈線。縄文 L R L	褐色	加曾利 E			○		223D
第100図70	胴	無文地に沈線による懸垂文	明灰褐色	称名寺 II ~ 堀之内 内 1			○		215D
第100図71	胴	無文地に平行沈線文	赤褐色	堀之内 1			○	銀色粒子○ 片岩△	火山ガラスか / (C-5)グリッド
第100図72	胴	沈線 / 縄文 R L	褐色	堀之内 2			○		(E-2)グリッド
第100図73	胴	沈線 / 縄文 R L (粗い)	褐色	後期粗製土器 (堀之内?)	△	△	○		140H

胎土混入物の量 ◎:多量 ○:普通 △:少量

第49表 遺構外出土の縄文土器一覽(2)

第3章 検出された遺構と遺物

()は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	成形及び調整	出土位置	遺存度	時代
第100図 74	壺	-	-	-	外面赤彩	胎土灰白色	黄褐色粒子を含む	内面ハケ目調整、外面ヘラ磨き調整	140H	胴部小破片	弥生後期
第100図 75	壺	-	-	-	外面赤彩	胎土黄褐色	白色粒子を含む	内面ヘラナデ、外面ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	223D	胴部小破片	弥生後期
第100図 76	高坏	(4.1)	-	-	脚部途中に2個並列の穿孔/坏部内面及び脚部外面は赤彩	胎土黄褐色	砂粒を僅かに含む	坏部内面はヘラ磨き調整、脚部は内面ヘラナデ、外面ヘラ磨き調整	322D	坏部～脚部破片	弥生後期
第100図 77	甕	(3.1)	-	-	台付甕の脚部か	茶褐色	白色粒子を僅かに含む	内面ヘラナデ、外面ナデ		脚部破片	弥生後期
第100図 78	甕	-	-	-	-	淡茶褐色	白色粒子・金雲母・砂粒を含む	内外面ハケ目調整	136H	胴部小破片	弥生後期
第100図 79	甕	-	-	-	-	内面暗橙色、外面黒色	白色粒子・砂粒を含む	内外面ハケ目調整	136H	胴部小破片	弥生後期
第100図 80	土製品	-	-	-	紡錘車/最大径5.0cm・高さ2.6cm・穿孔径0.7cm・重さ63.5g	暗黄褐色を基調/黒斑	白色粒子・砂粒を含む	内外面ヘラ磨き調整	150D	完形品	古墳～平安
第100図 81	石製品	-	-	-	紡錘車/径4.2cm・高さ1.3cm・穿孔径0.7cm・重さ12.4g	青白色を基調	-	内外面磨き	273D	1/3程	古墳～平安
第100図 82	須恵器坏	-	-	-	内面口縁部直下に刻書「上」	灰褐色	砂粒を僅かに含む	ロクロ成形	223D	口縁部小破片	平安
第100図 83	須恵器坏	3.2	(12.1)	(6.4)	酸化炎焼成/器厚は厚め	明橙色	茶褐色粒子を僅かに含む	ロクロ成形/底部回転糸切痕	140H	1/3程	平安
第100図 84	須恵器坏	3.3	(11.6)	(7.0)	酸化炎焼成/器厚は厚め	淡橙色	茶褐色粒子を含む	ロクロ成形/底部回転糸切痕	170D	1/3程	平安
第100図 85	須恵器壺	(2.0)	-	7.9	酸化炎焼成	赤褐色	茶褐色粒子を僅かに含む	ロクロ成形/高台内回転ナデ	196D	高台部のみ完形品	平安
第100図 86	須恵器壺	(2.1)	-	(7.8)	酸化炎焼成	明橙色	茶褐色粒子を含む	ロクロ成形/高台内回転ナデ	316D	高台部のみ1/2程	平安
第100図 87	灰釉陶器壺	(2.4)	-	(7.7)	内外面底部を除き灰釉	灰白色	白色砂粒を僅かに含む	ロクロ成形/高台内周辺はヘラ削り回転ナデ、中心部回転糸切痕	223D	高台部から体部下半の1/3程	平安
第100図 88	須恵器長頸壺	(2.8)	-	(5.8)	-	灰褐色	白色砂粒を多く含む	ロクロ成形/高台内軽い回転ナデ	146H	高台部から体部下半の3/4程	平安
第100図 89	布目瓦	-	-	-	平瓦/長さ12.0cm・幅11.3cm・厚さ2.0cm	灰褐色	白色砂粒を多く含む	凹面には布目痕が残り、凸面は横方向のナデ調整	23W	破片	平安
第100図 90	布目瓦	-	-	-	平瓦/長さ9.5cm・幅6.7cm・厚さ1.8cm	暗茶褐色	白色砂粒・小石(長さ1.5cm)を含む	凹面には布目痕、凸面には叩き痕である縄席が残る	264D	破片	平安
第100図 91	布目瓦	-	-	-	丸瓦/長さ8.0cm・幅7.8cm・厚さ1.3cm	灰褐色	白色砂粒を含む	凹面には布目痕が残り、凸面は横方向のナデ調整	24W	破片	平安
第100図 92	布目瓦	-	-	-	平瓦/長さ5.3cm・幅8.5cm・厚さ1.7cm	淡褐色	砂粒を多く含む	凹面に布目痕が残り、凸面はナデ調整が施されるが、叩き痕である縄席が観察される	(B-6) グリッド	破片	平安

(単位 cm)

第50表 遺構外出土の弥生～平安時代の遺物一覧

()内は現存値・推定値

神図・図版番号	種別	器種	法量			胎土	製作の特徴	釉薬	生産地・系譜	時期		
			器高	口径	底径							
第101図93	陶器	灯明受皿	2.0	10.0	4.4	灰白色	緻密	底部削り	錆釉	美濃	連房第10・11小期	
第101図94	陶器	灯明受皿	(2.0)	(7.0)	-			ロクロ成形 内面磨				
第101図95	陶器	灯明受皿	(3.3)	-	7.6			ロクロ成形/高台 内削り	透明釉	江戸在地	19C中葉	
第101図96	陶器	袴腰形香炉	5.0	(15.4)	(10.4)	黄白色	緻密	削り出し高台	胎釉	瀬戸・美濃	連房第5小期	
第101図97	陶器	印花文鉢	(2.6)	-	-	明赤褐色	緻密		三島手/内面白土 象眼「唐草文」	鉄釉・透明釉	唐津	17C後半
第101図98	陶器	鉄絵筒形碗	(3.7)	-	-	灰白色	緻密		外面鉄絵「笹文」	灰釉	不明	不明
第101図99	陶器	播鉢	(5.5)	(37.0)	-	灰白色	やや粗/長石・石英	口縁端部上方突出 /内面凹線	播り目6本	-	丹波	17C中葉
第101図100	陶器	播鉢	(2.4)	-	-	橙色	緻密	内面折返し口縁		錆釉	志戸呂	17C前半(連房第1・2小期併行)
第101図101	陶器	播鉢	(6.0)	-	(11.4)	にぶい黄色	緻密	外面胴部下位～底 部削り		錆釉	瀬戸・美濃	連房第1・2小期
第101図102	陶器	播鉢	(8.0)	-	(10.0)	浅黄色	緻密	底部回転糸切り/ 外面胴部下位削り	播り目14本以上	錆釉	瀬戸・美濃	連房第1・2小期
第101図103	磁器	青磁碗	(1.6)	-	-	灰色	緻密	外面彫刻	画花蓮華文	青磁釉	中国/龍泉窯	13Cか
第101図104	磁器	青磁鉢	(1.3)	-	-	灰白色	緻密			青磁釉	中国/龍泉窯	13Cか
第101図105	磁器	染付小杯	(2.2)	-	-	白色	緻密		外面具須描き「草 木に鳥」文	透明釉	肥前	18C後葉～19C初頭
第101図106	磁器	染付筒形碗	(5.0)	-	-	白色	緻密		外面具須描き「杜 丹文」/内面口縁 部具須描き「四方 禪文」	透明釉	肥前	18C後葉～19C初頭
第101図107	磁器	染付皿	(1.7)	-	5.6	白色	緻密	高台内外削り	見込み具須描き 「山水文」	透明釉	肥前	19C中葉
第101図108	磁器	染付端反皿	2.0	(9.0)	(4.6)	白色	緻密	高台脇削り	外面具須描き「草 花文」、内面「宝 珠」か	透明釉	中国/景德鎮 窯	16C
第101図109	磁器	染付御神酒德利	(7.8)	1.7	-	白色	緻密		外面具須描き「絹 唐草文」	透明釉	肥前	18C後葉～19C初頭
第101図110	土器	焙烙	(4.0)	-	-	-	密/角閃石(多) ・白色粒子	外面胴部下端削り ?/底部チヂレ目		-	北関東系	17C～18C
第101図111	土器	焙烙	(3.8)	-	-	-	密/赤色粒子 (多)・黒色粒 子(多)・白色 粒子(少)	粘土紐積み上げ3 段/外面胴部下 端指押さえ・チヂ レ目・ナデ	外面胴部に炭化物 (厚)附着	-	北関東系	中世末(16C後葉)
図版51-112	陶器	緑釉小皿	-	-	-	黄白色	緻密			緑釉	瀬戸・美濃	古瀬戸後4期新段階
図版51-113	陶器	端反皿	-	-	-	にぶい黄色	緻密			灰釉	瀬戸・美濃	大窯第1段階
図版51-114	陶器	椀皿	-	-	-	黄橙色	緻密	口縁部輪花状		鉄釉	美濃	大窯第3段階後半
図版51-115	陶器	志野丸皿	-	-	-	黄白色	緻密	削り出し高台		長石釉	美濃	大窯第4段階後半
図版51-116	陶器	緑釉はさみ皿	-	-	-	黄白色	緻密		被焼黒化	灰釉	瀬戸・美濃	大窯第1段階
図版51-117	陶器	丸碗	-	-	-	黄白色	緻密			灰釉	美濃	連房第8～11小期
図版51-118	陶器	腰鑄茶碗	-	-	-	黄白色	緻密	付高台		灰釉+鉄釉	瀬戸	連房第8・9小期
図版51-119	陶器	刷毛目茶碗	-	-	-	にぶい黄色	緻密		白化粧土外面「横 線文」/内面「杜 丹文」	灰釉	瀬戸	連房第8小期
図版51-120	陶器	反り皿	-	-	-	黄白色	緻密			灰釉	美濃	連房第4小期
図版51-121	陶器	反り皿	-	-	-	黄白色	緻密	削り出し高台	見込み重ね焼き高 台痕跡あり	灰釉	美濃	連房第4・5小期
図版51-122	陶器	黄瀬戸鉢	-	-	-	黄白色	緻密	付高台	胴部橋描き横線文	黄瀬戸釉	瀬戸・美濃	連房第1・2小期
図版51-123	陶器	型打皿	-	-	-	灰白色	緻密	型打	御深井製品	灰釉	美濃	連房第2小期
図版51-124	陶器	播鉢	-	-	-	黄白色	密/繊維	外面胴部下位～底 部削り/軸拭き取 り	播り目12本以上/ 底部内外面使用に よる摩耗著しい	錆釉	瀬戸・美濃	連房(細別不明)
図版51-125	陶器	土瓶	-	-	-	黄白色	緻密		胴部下端に印「夕 子」	鉄釉	瀬戸	連房第8～11小期
図版51-126	陶器	土瓶	-	-	-	黄白色	緻密	外面橋描き沈線		鉄釉	美濃	連房第8～11小期
図版51-127	陶器	尾呂德利	-	-	-	灰白色	緻密		灰釉流し掛け	胎釉	美濃	連房第5～7小期
図版51-128	陶器	水甕	-	-	-	黄白色	緻密	外面流水文彫刻	緑釉流し掛け	灰釉	瀬戸	連房第8～11小期
図版51-129	磁器	染付皿	-	-	-	白色	緻密		高台具須描き「二 重圓線」/高台内 「一重圓線+文字 不明」/見込み文 様不明	透明釉	肥前	18C後葉～19C初頭

(単位 cm)

第51表 遺構外出土の陶磁器・土器一覧

第4章 調査のまとめ

城山遺跡は、今までの発掘調査から、旧石器時代、縄文時代草創～晩期、弥生時代後期、古墳時代前～後期、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡として判明している。

そして、今回の城山遺跡第42地点の調査では、旧石器時代の石器集中地点2ヶ所、縄文時代の土坑21基、縄文時代早期の炉穴1基、古墳時代後期の住居跡16軒、平安時代の住居跡5軒・土坑13基、中世以降の土坑151基・井戸跡8基・溝跡4本など数多くの遺構・遺物を検出した。

ここでは、以下のいくつかの点についてをまとめることにする。

第1節 縄文時代の土器について

本調査地点において縄文時代の遺構は、早期後葉の炉穴1基・土坑1基、前期後葉の土坑3基、前期と思われる土坑1基、時期不明の土坑16基が検出されているが、遺構に伴う遺物は非常に少ない。

その中で291Dから出土した土器片は、附加条縄文を施文しながらも胎土には繊維を含まない市内では類例を見ないものであった。この土器については、前期の黒浜式期の新段階あるいは諸磯式期への移行段階の特徴をもつ土器と考えられる。

遺構外からの出土遺物は小破片ながら早期後葉から後期前葉にかけての広い時期の土器片が出土している。出土重量の内訳は早期条痕文系土器が666g（15.8%）、前期繊維土器（関山・黒浜）が412g（9.8%）、前期無繊維土器（諸磯・十三菩提）が1476g（35.1%）、前期末から中期中葉（五領ヶ台・阿玉台・勝坂に加えて、前期末～中期初頭と思われるが型式不明のもの）の土器が1024g（24.4%）、中期後葉（加曾利E）が336g（8.0%）、後期前葉（称名寺・堀之内）が291g（6.9%）で、前期後葉の諸磯bから中期前葉の阿玉台まで土器が目立ち、全体の6割を占め、中には数は少ないものの十三菩提式と思われる土器片も出土している。

埼玉県内では一般的に前期末の諸磯b期から中期前葉の勝坂期までにかけての住居跡など大型の遺構は少なく、当該期の土器は多くが土坑・ピット・包含層から出土する傾向にある。

志木市内でも同様の傾向があり、諸磯期から五領ヶ台期にかけての遺物は中野遺跡（第25・43・49地点）、中道遺跡（第21・27地点）、新邸遺跡（第3地点）、城山遺跡（第3・11・12・15・16・29・34・35地点）などで出土しており、城山遺跡が最も遺物の出土量が多いが、出土位置の多くは包含層若しくは遺構外からの出土で諸磯b期から五領ヶ台式期の住居跡は検出されていない。市史では城山遺跡A地点で諸磯a期の住居跡の存在が報告され、城山貝塚との関係を指摘、注目された。さらに近隣には富士見市の水子貝塚などに諸磯a期の集落があり、城山遺跡でも現在未調査の地区から今後さらに諸磯a期住居の検出される可能性はあると思われる。その他の各遺跡調査地点では諸磯b・c式の遺物が目立つが住居跡は検出されていない。しかし、これまでの出土遺物の量から見て志木市の縄文前期後葉から中期初頭にかけての生活圏が中野－城山－中道－新邸という現在の柳瀬川に面した台地のごく縁辺地域で城山を中心に展開されていたことは間違いなく、当該時期の志木市を解明する上で城山遺跡の重要性は非常に高い。

第2節 148号住居跡出土の土師器の胎土分析と考古学的な検証

(1) 胎土分析の目的

志木市周辺において、7世紀に入る前の土師器環形土器（以下、「形土器」を省略）の主体を構成するものは、比企型坏・有段坏・模倣坏・小針型坏などと呼ばれる、いわば広域に流通する製品と言えることができる（尾形 2002）。これらの土器は、比較的肉眼でも他の製品と判別が容易であることから、地域を異にしても同時期に出土する製品は、多分に同一生産地の製品と言えることができるであろう。

しかし、7世紀に入ると、土師器生産に一大画期があったと考えられ、小型製品の坏・鉢のみならず、大型製品の甗・甕は、すべて同様な製作技法と粘土により製作された可能性がある。特に坏は、従来の塗彩されたものではなく、無彩系のものが主体であることに注意したい。この無彩系の坏は、「甗・甕形土器と同様に日常頻繁に使用される雑器として、集落から比較的近距离の範囲に生産地があり、消費者がすぐ手にいれられるもの」（尾形 2000）と考えられている。

このように、以上の内容を前提として、148号住居跡出土の土師器を見てみると、まさに前述したように7世紀に入ってから土師器の様相に相当する。本住居跡出土の土師器は、有色系の赤色系土器である比企型坏（第55図1）が1点と黒色系土器である有段坏（第55図2・3）の2点が存在する他は、坏をはじめ鉢・甗・甕の主体は「無彩系土師器」である。さらに、製作技術ではヘラ削り後に丁寧にナデ（あるいはスリップ）を施し、ヘラ削り痕を消去する手法や砂粒を多く含む胎土、全体の色調が暗黄褐色及び淡橙色を基調とするなど、肉眼的にも同一製品であることが容易に判断できる。

こうした製品は、その分布域が前代の広域流通品に比べ、比較的狭小であることから、ここでは、「在地系土師器」と考えることにする。

つまり、今回の胎土分析の目的は、古墳時代後期の148号住居跡から一括出土した資料60点と参考資料2点の胎土分析を行うことにより、在地系土師器について、自然科学的な分野と考古学的な分野の双方で総合的な検証を行うことである。

(2) 胎土分析の方法

今回の採用した胎土分析の方法は、薄く削った土師器の断面を観察し分析する薄片観察法で、株式会社パレオ・ラボの藤根 久・今村美智子両氏が用いている「薄片法」である。この方法は、同社のホームページでも紹介されているが、土器の薄片を顕微鏡で観察し、胎土中に含まれる珪藻化石・放散虫化石・骨針化石などを見つけだし、外洋性粘土・海生粘土・沼沢地成粘土などを特定する。こうした粘土の特徴と周辺地域に分布する堆積粘土を比較・検討することで、どこの地層から採取して製作された土器であるかと検証する方法である。同時に胎土中に含まれる大型砂粒を観察し、堆積岩類・火山岩類・凝灰岩類・片岩類などの起源岩石を推定し、一層特定の粘土層との結び付きを可能にしている。

この「薄片法」は、最近では群馬県伊勢崎市波志江中宿遺跡で見つかった古墳時代前期の粘土採掘坑における粘土分析でも採用されている（藤根・今村 2003）。この分析から、「土器胎土は、基本材料として粘土と砂粒物は、これら粘土採取の際に粘土層の上下層に分布する砂層などを採取した」（本報告書209ページ参照）ことが明らかになり、大きな成果を上げていると言える。

(3) 148号住居跡出土遺物の器種別割合と時期

本住居跡から出土した土師器は、坏・高坏・鉢・甗・甕（長・丸甕）に分類できる。第52表は、ミニチュア土器と支脚を含めた総数60点の分類をグラフ化したものである。

これによると、坏（31点・51%）・高坏（1点・2%）・鉢（3点・5%）・甗（3点・5%）・甕（19点・32%）・ミニチュア土器（2点・3%）・支脚（1点・2%）であった。

時期については、坏が口径11cm前後のものが含まれているが、口径13cm前後のものが基本であること、甕が胴部中位に最大径をもつものが主体であることから、概ね7世紀前葉に位置付けられるものと考えられる。

(4) 胎土分析以前に実践した考古学的な検証

本住居跡出土の土器の特徴が、無彩系土師器を主体とすることが明らかになったことで5世紀末葉～6世紀後葉の特徴である広域にわたる流通製品とは大きく違った製品であると言えることができる。

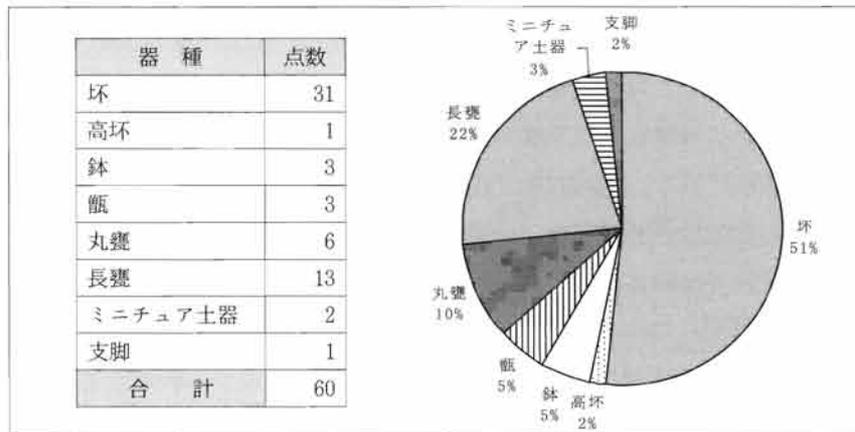
そこで今回は、試験的に本住居跡出土の土師器の胎土分析を実施する前に、坏に限定し考古学的な観点から分類及び検討などの分析を行い、その後の胎土分析データとの比較検討を行った。

1. 土師器坏の分類基準

第53表に土師器坏の分類基準を示した。この分類は、基本的に製作技法・胎土といった「製品レベル」での分類に努めることを重視した。その結果、A・B類以外のC～F類は、「製品レベル」上では類似するものと言えることができるため、大きくは1類の中のバリエーションとしても差し支えがないが、形態的な差異から細分を行った。

また、F類としたものは、従来「その他」とした粗雑品であり、主要土器としては組み込まれないものである。しかし、こうした製品を含め、当時の人たちは日常生活において使用したことは紛れもない事実であることから、すべての製品を把握する必要があるものとする。むしろこうした土器の方が当時の生活様式を追究するためには、最も生活に密着した土器であると言えるであろう。

さらに、C類は、黒色系土器の可能性があることに注意したい。この土器は、6世紀代の黒色系土器とは異なり、形態的にはTK23・47型式の須恵器坏蓋を模倣するという伝統的な形態のものではなく、口縁部がやや短く直立し、有段部分についても断面三角形状を呈している。胎土・調整技法についてもD類に類似することから、「在地系黒色系土器」と考えられる（尾形 2002）。



第52表 148号住居跡出土の器種別割合

2. 土師器坏の分類基準と製作ランクの比較

第54表は、前項で分類したA～F類を土器製作における工程（第1～4工程）として分類し、最終的に第4工程の塗彩までをチェックしたものである。特に、塗彩の有無を第1条件として、有るものは製作ランク上で上位に設定した。

最も製作ランクで上位のA類は、分類基準のA類である。外面底部にヘラ削りを施し、その後、内面と外面口縁部は横方向にナデを行う。最終的には赤色顔料が塗彩される赤色系土器である。この土器は、口縁部内面に沈線がまわり、調整では外面底部がヘラ削り後再調整されないことから、定型化した比企型坏と考えられる。口径が12.0cmであることから、小型化傾向の土器と言える。

製作ランクのB類は、分類基準のB類である。外面底部にヘラ削りを施し、その後内面と外面口縁部は横方向にナデを行う。最終的には焼成段階で内外面黒色処理が施される黒色系土器であるため、工程的にはA類の顔料塗彩の1工程は少ないものと判断した。全体的にC類の黒色系土器と比べ、精巧な作りのもので、有段の作出も明瞭である。TK10型式に類似した土器であり、須恵器模倣坏と考えられるが、時期的な較差があるため直接派生したものとして判断するのは難しい。

製作ランクのC類は、分類基準のC類である。ヘラ削り後、基本的にヘラナデが施される。B類同様に焼成段階で内外面黒処理が施される黒色系土器であるが、B類に比べ、有段は弱く、口縁部は単純に外傾する。この土器は、後述のD1類である無彩系土器との区別は難しい。

製作ランクのD類は、分類基準のD類である。基本的にC類と胎土・調整面では同類である。今回の分類では、器面に若干の黒色処理の痕跡が見られるものが、判断が難しいものは敢えてC類には加えなかった。

製作ランクのE類は、分類基準のE類である。基本的にC・D類と胎土・調整面では同類である。C・D類に比べ、有段の作りが弱く、細部で須恵器を忠実に模倣した形態のものではない。

製作ランクのF類は、分類基準のF類である。ヘラ削り後、底部付近のみヘラナデが施されるもので、口縁部直下はしばしば未調整部分として成形痕である指紋が観察される。口縁部はきれいな円形には成らず見るからに粗雑品として区別可能である。

以上のように、形態的な特徴から分類したA～F類を製作工程の有無及び各工程の技術と比較するとA～F類はそのまま製作ランク（A～Fランク）に置き換えることが可能であると言える。

3. 土器分類の比率

土器分類による比率は、A類－3%、B類－6%、C類－16%、D類－10%、E類－42%、F類－23%であった（第55表）。

以上の結果から、最も多いE類は、志木市では7世紀以降主体的に出土している土器群である。これらは富士見市別所遺跡・谷津遺跡・観音前遺跡、三芳町本村北遺跡、志木市中道遺跡・田子山遺跡・城山遺跡・中野遺跡等で確認できることから、志木市に近接した柳瀬川・新河岸川沿岸を中心とした遺跡に分布しているものと考えられる（尾形 2000）。

次に多いF類は、粗雑品である。E類と合わせると65%にのぼり、このF類を含め、志木市では主体である土器群であると言っても過言ではないであろう。

C・D類は、有段系の黒色・無彩系坏である。これらは和光市吹上遺跡・花ノ木遺跡・四ツ木遺跡・妙蓮寺遺跡、板橋区大門遺跡・徳丸東遺跡・西台後藤田遺跡、杉並区済美台遺跡、新宿区上落合二丁目遺跡・西早稲田三丁目遺跡・下戸塚遺跡等で確認できる。志木市では今回の148号住居跡ではその出土

量が比較的多かったが、分布の主体は、むしろ和光市・板橋区に近接した遺跡であるものと考えられる。分布域は、E・F類よりも広範囲である（尾形 2000・2005）。

B類は、5世紀後葉から伝統的に出土する須恵器坏蓋の模倣坏であろう。7世紀以降ではこうした有段の顕著なものは稀少であると言える。黒色系土器を主体に出土する北関東系の群馬・栃木県方面からの流通品と考えられる。

A類は、比企型坏である。この製品は7世紀以降になると、地域毎での受け入れ方が偏重し、新河岸川沿岸でいうと上福岡市より下流の地域では、6世紀代に比べ、その比率が低く、志木市では平均して1割程度に減少する傾向にある。生産地の中心は、越辺川と高麗川の合流地点周辺の坂戸市・東松山市と推定される。

以上、7世紀前葉に比定される148号住居跡出土土器については、6世紀代の土器群に比べ、製作ランクであるA・Bランクの製品は10%に満たなく、その様相は大きく変化したものと理解できる。

つまり、製作ランクとして優良品であるA・Bランクは、6世紀代でほぼ姿を消し、7世紀以降の志木市周辺ではC・Dランクが和光市・板橋区、E・Fランクが志木市・富士見市周辺で主体となるものと考えられる。なお、DランクとEランクは、製作ランクの上で較差をつけてしまったが、D類とE類については、第54表で示したように形態的な有段の有無以外は製作技術上で顕著にその差を見いだせないため、地域差として捉えた方が良いかもしれない。

さらに、製作技術面で言えることは、A類の比企型坏は、今回ヘラ削り後ナデやヘラ磨き調整がされていなかった。この類については、定型化した比企型坏であるため、初現段階の比企型坏などの古い様相のタイプに比べ、調整面で最終的な仕上げであるナデやヘラ磨き調整が省略されているものである。B類についても前段階の黒色系土器に比べ、やはり最終的な仕上げであるナデやヘラ磨き調整が省略されているものであった。

それに比べ、C～E類については、製作ランクの上ではA・B類の下位に設定したが、ヘラ削り後に丁寧なナデが施され、技術的には、第2工程が加味されている。これについては、在地系土師器の特色と言えることができ、製作ランクとは一線を引く必要があるのではないかと考える。

（5）胎土分析で判明した事項

志木市の古墳時代中・後期の土師器については、考古学的な観点から、前述した説明を含め「製品レベル」の観点で研究を行ってきたつもりである。しかし、製品レベルとは、土器の製作技術・粘土などの共通する要素から判断したものであって、かなりの比重で恣意的なものと言えるであろう。

以下、考古学的な分類基準でのA～F類について、今回の胎土分析で判明した事項をまとめてみることにする。なお、この事項については、胎土分析を行った藤根氏に分析報告とは別に何度も確認して頂いた内容を掲載するものである。

1. 坏A類（比企型坏）の粘土の特徴と産出推定地域

本類の1の土器は、粘土が水成で、砂粒の特徴が堆積岩類を伴うC群であることから、胎土分析ではII a群に分類される。このII a類は、今回の資料のうち唯一1点のみであった。

この土器で特筆すべき特徴を挙げると以下のとおりである。

①淡水種珪藻化石・不明種珪藻化石は全く含まない。

C～F類で特徴的な珪藻化石を全く含まないことは、全く異なった製品であると理解できる。

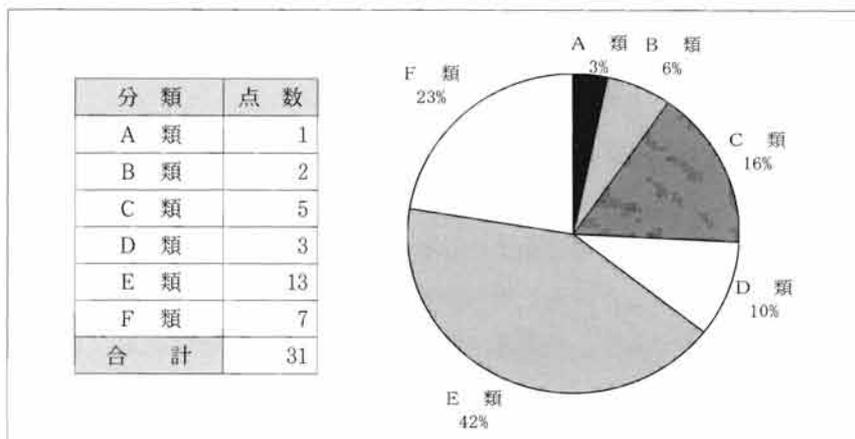
分類	内 容	挿図番号	点数
A 類	赤色土器。比企型坏。	第55図1	1
B 類	黒色土器。有段坏。TK10型式模倣。	第55図2、3	2
C 類	黒色土器。有段坏。		5
1 類	口径15cm前後。	第55図4～7	4
2 類	口径13cm前後。	第55図8	1
D 類	無彩土器。有段坏。		3
1 類	口径13cm前後。	第55図9、10	2
2 類	口径11cm前後。	第55図11	1
E 類	無彩土器。有稜坏。		13
1 類	碗状を呈し深身のもの。	第55図12～16	5
2 類	底部～口縁部にかけて逆ハ字状に開く。	第55図17、18	2
3 類	口縁部が内傾するもの。		6
a 類	口径14cm前後。	第55図19～21	3
b 類	口径11cm前後。	第55図22、23	2
c 類	口径10cm以下。	第55図24	1
F 類	無彩土器。有稜坏。粗雑品。		7
1 類	碗状を呈し深身のもの。		3
a 類	口径14cm前後。	第55図25	1
b 類	口径11cm前後。	第55図26、27	2
2 類	F1類より扁平のもの。		3
a 類	口径13cm前後。	第55図28、29	2
b 類	口径10cm前後。	第55図30	1
3 類	小型扁平のもの。	第55図31	1
合 計			31

第53表 土師器坏形土器の分類基準

	第1工程	第2工程	第3工程	第4工程	段の作り	製作ランク	参 考
	ヘラ削り	ヘラナデ	横ナデ	塗彩			
A 類	○	—	○	赤色	稜	A	定型化した比企型坏
B 類	○	—	○	黒色	強い段	B	黒色系土器
C 類	○	○	○	黒色	弱い段	C	在地系黒色系土器
D 類	○	○	○	—	稜	D	無彩有段坏
E 類	○	○	○	—	稜	E	無彩有稜坏
F 類	○	△	○	—	稜	F	粗雑品

○施工 △一部施工 —なし

第54表 土師器坏形土器の分類と製作ランクの一致



第55表 土師器坏形土器の分類比率

②赤褐色粒子を多く含む。

赤色系土器であるため、赤彩材料が結果に反映したのではないかということも疑問にあり、分析後も藤根氏に再度確認を依頼した。その結果、赤褐色粒子は面的に繋がっている状況ではなく、独立して分布していること、さらに表面に近い場合もあるかもしれないが、比較的土器の内部を観察していることから、赤彩材料ではないという判断である。つまり、肉眼で観察できる赤褐色粒子であり、この粒子は他の製品には含まれていないことから本類の特色と言える。おそらく、胎土中に含まれる褐鉄鉱が焼成により赤化したものと思われる。

③スコリアを全く含まない。

C～F類に特徴的なスコリアを含まないことも本類の特色である。藤根氏に確認したところ、検出されたスコリアは、富士火山系を起源とするもので、埼玉県では川越市以北の地域にはあまり及んでいないと考えられるため、本類は、逆にC～F類とは違い川越市以北の粘土である可能性があり、さらに、淡水種珪藻化石を特徴的に含むことはスコリアが入ることと同時現象であるため、生産地の地域指標としてはスコリアを含むか否かが重要になるであろうと回答を頂いた。

以上、①～③の事項から、A類である比企型坏は、胎土分析の結果、唯一II a類であった。その特徴は、B～F類の胎土分類とは全く異なることから、製品レベルでも異製品である可能性が極めて高いことがわかった。本類の産出推定地域については、今回の結果では、特定できなかったが、比企型坏の多くの土器に白色針状物質が含まれることから、古代の南比企窯跡群の須恵器胎土に関連し、おそらく同地域の粘土の使用が考えられる^(註1)。

2. 坏B類（黒色系有段坏）の粘土の特徴と産出推定地域

本類に分類される2・3の土器は、TK10型式の須恵器坏蓋の模倣坏であり、形状や製作技術においても在地系土師器ではなく、広域流通品と考えられる。

胎土分析では、2は粘土が淡水成で、堆積岩類を主体として火山岩類などを伴うCd群であることからIc群に分類される。3は粘土が淡水成で、火山岩類を主体として堆積岩類などを伴うDc群であることからId群に分類される。しかし、これら2点は、砂粒の特徴である堆積岩と火山岩の主体の違いであり、その構成においては同じ群と考えても差し支えないのではないと思われる。

この類で共通する特筆すべき特徴は、2・3の土器の両方に軽石型ガラス質が含まれることにある。藤根氏に確認したが、今回のデータで軽石を含むということは、C～F類の土器に含まれるスコリアとは共存しないということであるため、粘土的には別物と判断できる。軽石を含む粘土は、浅間火山の噴出物の可能性があるということである。つまり、本類が北関東系の群馬・栃木県方面からの流通品という考古学的な分析と符号するものであろう。

3. 坏C～F類の粘土の特徴と産出推定地域

C～F類の粘土を分析することは、今回の主題である在地系土師器の実態を解明することにつながるものと考えられる。この類は、肉眼上では胎土中に砂粒を多く含むという同様な粘土とその土器の製作技術において共通する特徴をもつことから、筆者が再三述べているように7世紀以降に志木市周辺に分布する無彩有段坏・無彩有稜坏であり、在地系土師器と考えている土器である。C類は前述した在地系黒色系土器と把握する土器である。

これらの胎土分析の結果で特筆すべき事項を以下にまとめることにする。

①スコリアを含み、淡水種珪藻化石・不明種珪藻化石（多量）を含む。

藤根氏に確認したが、スコリアは、北関東において浅間火山からややスコリア質の軽石が噴出しているが、大半は富士火山の噴出物として考えて良いということである。富士火山は8万年以降多量のスコリアを噴出しており、関東ローム層形成に大きく関わり、低地堆積層にも多く含まれている。そのため、富士火山のスコリアが分布する地域が製作地の候補となるであろう。ただし、実際、低地堆積物（淡水種珪藻化石を含むことから）でスコリアを上下層に挟む堆積物が何処に分布するかは現段階では明確ではない。つまり、富士火山系のローム層が分布する地域はスコリア降灰地域であり候補となるが、川越市以北までは及んでいないと思われるが、少なくとも比企や群馬までは及ばないということである。

以上、C～F類については、富士火山などを起源とするスコリアを含み、不明珪藻化石を多量に含むというように共通した粘土の特徴を示唆することは、大方粘土的には同じという結論で大差はないであろうという見解であった。

② 坏C～F類の生産と流通

それでは、考古学的な分類基準においてC～D類と分類可能となった土師器坏であるが、胎土分析上同一粘土であるという結論についてどのように考えればよいのであろうか。これについては、土師器坏の分類基準でも前述したが、「C～F類は「製品レベル」上では類似するものと言えることができるため、大きくは一類の中のバリエーションとしても差し支えない」と規定していることに見事なまでに符号していると言える。

C～F類は、形態的な差異から細分が可能となり、さらに分布状況について調べてみると、C・D類は和光市・板橋区を中心に分布し、E・F類は志木市・富士見を中心に分布していることが判明していることは先に述べたが、特にC・D類は、河川で新河岸川を基準で見た場合は、E・F類よりは下流域に分布の中心域をもち、若干広域に分布する製品であると考えられる。

ここで、C・D類とE・F類は、分布域において異なる実態でありながら、粘土的には同一であるという基準に立ち、いくつか考えられる事項を以下の表にしてみた。

C・D類とE・F類の生産者が異なる場合	C・D類とE・F類の生産者が同一の場合
①粘土的には良質の粘土を産出してもかなり地域が限定されるものと推測されることから、量産の少ない貴重な粘土を共同で使用した可能性がある。	①分類基準による形態差は、需用する側のニーズに関係する。その場合、C・D類は主に和光市・板橋区を中心に、E・F類は富士見市・志木市を中心に流通された。
②粘土的には①と同じ限定される地域であっても、粘土の掌握ポイントが違う。	

以上、C・D類とE・F類の生産者が異なる場合の①については、貴重な粘土を他地域の集団と共有するためには、安定した秩序を保持するためのかなり強い規制とそれを行使することができる強い統率能力をもつ首長層レベル間でのプロトコルが取り交わされなければ不可避であろう。②についても結論的には粘土的に同じ材料であることは、非常に近接した粘土採掘場を保有した他集団が存在し、何ら規制もなく排他的な状況であることはあり得ないと考えられる。

また、C・D類とE・F類の生産者が同一の場合、分類基準による形態差は、需用する側のニーズに関係するものと考えられる。これについては、比企型坏を例に説明することにする。従来から比企型坏は単独型式として扱われ論考されてきた（水口 1989・糸川 1997・尾形 1999）が、最近では「比企

型坏を製作する生産者は、比企型坏だけを製作しているのではなく、しばしば「比企系」と呼ばれることもあるが、有段坏を製作しているし、さらに甕・甑・壺・高坏といった他のすべての器種をも製作している」（尾形 2004）という実態から、比企型坏は同一製品におけるバラエティーの1つであると考えている。言い換えれば、大工場で製作された1つの製品に過ぎないということである。このようにC～F類についても、他器種を含めた無彩系土師器を在地系土師器として1つのブランドと規格した場合、坏のバラエティーとして把握できるものである。

いずれにせよ、今のところは結論を見い出せないが、今後更なる追究に向けて研究視野を広げて行く必要があるであろう。しかし、現時点において、坏C～F類は、6世紀代に主体を占める広域流通品ではなく、かなり集落に近接した場所に生産地があった可能性を示唆することができた。このことから、今回の胎土分析は、古墳時代後期における土師器の生産・流通問題にかなり進展をもたらしたものと評価できるであろう。

4. 坏以外の器種の粘土の特徴と産出推定地域

坏C～F類と同様に、鉢・甑・甕は、無彩系土師器に属し、富士火山などを起源とするスコリアを含み、不明珪藻化石を多量に含むというように共通した粘土の特徴をもつため、結論的には同粘土として判断できるものである。しかし、厳密には、軽石を含む30の高坏や46の長甕、さらにスコリアを含まない土器が存在することも事実であるが、1軒の住居跡から出土した全器種を通じて、その土器群の主体にあるのが、坏を含め全器種で共通した粘土が使用されたと判明したことは、在地系土師器の生産者が、坏などの特定の器種だけを限定し生産していたのではなく、日常生活に必要なすべての器種をトータル的に生産し流通させていたと考えざるを得ないであろう。

こうした在地系土師器に使用された粘土は、具体的に「土器作りに利用できる粘土層は、武蔵野台地を構成する板橋粘土層や東京層のほか、江南台地の相当する粘土層がある」（本報告22ページ参照）というように行政区では板橋区・和光市・朝霞市・富士見市の新河岸川沿いの武蔵野台地の路頭付近にその粘土採掘場が想定できるものである。

今後は、粘土採掘場の検証及び胎土分析資料の増加を行い、共通した認識の下、地域ぐるみでの体系的な研究が望まれるであろう。近い将来、土師器でも古墳時代、特に後期以降における生産・流通については、それ以前の時期に比べ、比較的鮮明に解明されることと推測される。

5. その他の特筆事項

①不明種珪藻化石について

不明種珪藻化石は、海水種であるが淡水種であるか見分けが付かないほど粉々に破碎した珪藻化石である。今回、在地系土師器の粘土には、この珪藻化石が多量に含まれていた。これは何を示唆するかであるが、胎土分析の報告書を受け取った後もかなり藤根氏に質問事項をぶつけながら質疑応答を繰り返す中、これについては、土師器以外の資料であるカマドの粘土の分析と照らし合わせることで判明することができた。それは、第62表の61・62の資料であるが、これらには、粘土の特徴である不明種珪藻化石が多量に含まれていないことであった。つまり、在地系土師器は、肉眼でも砂っぽい土器という印象であることがわかるように、堆積岩類を主体とした砂粒を多量に含んでいるが、カマドに使用される粘土には、砂粒がそれ程多量に含まれていないことであった。そのため、報告中では、「板橋粘土層は、御岳火山のPm-1テフラ（8万年）を含み、少ないものの淡水種珪藻化石を含んでいる」（本報告221ページ）というように粘土層のみに着目して分析を行っていた。

藤根氏のその後の見解であるが、おそらく粘土層自体にはこれ程までの不明種珪藻化石が多量に含まれる層は近接地では見あたらないため、混和材である砂粒に不明種珪藻化石が多量に含まれていたのではないかということである。おそらく、粉々に破碎された原因は、単に粘土と混和剤を混ぜた際にこれまで破碎されることはあり得ないことから、従来まで考えられていた混和材に使用する砂粒を混和材用としてわざわざ河川まで行って採取していたのではなく、粘土採掘の際に粘土層とは違った砂層から同時に砂粒を採掘したのではないかという結論である。この結論は、前述した波志江中宿遺跡の分析と一致することになった。つまり、時代の違いはあるものの土器胎土の基本材料は、粘土採取の際に混和材の砂粒についてもその上下層に堆積する砂層から採取されたものと考えられる。

また藤根氏は、今回多量の不明種珪藻化石が含まれている理由について、砂粒が砂層中のものであるため、長年の浸食の繰り返しで、その砂粒に付着した珪藻化石が粉々に粉碎されたためであると推測される。つまり、今後は粘土層のみの粘土だけに注目するのではなく、混和材の砂粒については、砂層の細かな特徴もデータ化し、比較検討しなくてはならないであろうという見解である。

②カマドに使用された粘土について

前項①で若干触れているが、カマドに使用された粘土からは、珪藻化石がほとんど含まれていないことがわかる。これについては、土器には混和材として、砂粒を意図的に混ぜる必要があったが、カマドに使用する粘土には、混和材として砂粒を混ぜる必要がなかったためであろう。このことから推測すると、粘土採掘の段階には粘土は粘土、砂粒は砂粒として分別して採掘し、その後の保管に当たってもかなり完備されたシステムがあったものと推測できる。

(6) まとめ

今回、古墳時代後期の148号住居跡から一括出土したすべての土師器を対象に胎土分析を行うことにより、在地系土師器の解明を目的で、自然科学的分野と考古学的分野の双方で総合的な検証を行ったつもりである。

その結果、考古学的に分類した坏C～F類とその他の鉢・甑・甕といったすべての器種は、坏A・B類と明らかに異製品であることが判明した。つまり、前者は、6世紀代に主体にある広域流通品ではなく、7世紀以降に主体をもつ無彩系あるいは黒色系土師器であり、同時にこれを「在地系土師器」と結論付けられるものと考えられる。後者の坏A・B類は5世紀末葉から6世紀全般にかけて盛行する広域流通品で、坏A類の比企型坏は、比企地域の製品であり、坏B類の黒色系土器は浅間火山を供給源とする軽石を含むことから、北関東というさらに遠方からの流通品と考えられる。

さらに今回注目される事項は、在地系土師器に使用された粘土が、行政区では板橋区・和光市・朝霞市・富士見市の新河岸川沿いの武蔵野台地の路頭付近にその粘土採掘場が想定できたことである。

こうした、一つ一つの分析データの蓄積は、将来的に「土器を単なる型式的序列のためではなく、製品レベルまで掘り下げた具体的な検証」(尾形 2001)を行い、「当時の人たちは、どのような経路でどのような方法で入手したか」(尾形 2000・2003)という土器流通の問題を解明するための基礎資料と成り得るものであろう。

第3節 中・近世について

(1) 中世以降の土坑について

今回の調査で検出された土坑は、第56表を参照すると、151基の数をのぼり、その内訳はA群－4基、B群－119基、C群－12基、D群－8基、E群－8基であった。ここでは、すべての土坑についてを詳しく説明することはできなかったが、いくつか特徴ある土坑について簡単に触れて置くことにする。

1. 土坑A群について

土坑A群1類は、2類の単純構造を呈するものではなく、上端より下端が広がり、袋状の構造を呈するものである。今回の調査では、146・155・184Dの3基が該当する。規模はおよそ一辺2m前後のもので、深さは1mを越え、安定して深い掘り込みであることを特徴とする。この土坑は、これまでの城山遺跡でも検出されたことがなく、市内では皆無である。

2類は、234Dの1基が該当するが、坑底から鉄鍋が出土したことに注目される。こうした例は、近年「鍋被り葬」として論議がされている事例であろう。この鍋被り葬については、桜井準也氏によると、「発掘調査で検出された事例は、現時点で54遺跡あり、道路工事や耕作等で偶然発見されたものも含めると全国で89例に及ぶ。これを都道府県別にみると青森県・岩手県・福島県・群馬県・東京都・千葉県・神奈川県で多く、5例以上の発見例が報告されている。この分布地域は鍋被り葬に関する伝承が残っている地域とほぼ重なる」と説明されている（桜井 2002）。そして、この風習の研究には次のような意義があるというにまとめられている。

- ①病気による差別の表象としての鍋被り葬
- ②単独埋葬地と村境
- ③伝承の生成と継承

2. 土坑B群1類（溝状土坑）について

この溝状土坑については56基が検出された。これらの土坑の性格は、結論的には不明とするしかないが、最近の調査例から、いくつか推測される事項が浮上したため、以下にまとめることにする。

①農業関連

志木市に隣接する新座市新開遺跡（斯波 1991）で確認されているようにサトイモあるいはサツマイモを出荷までの間貯蔵するための穴である「いもあな」・「いもびつ」などと呼ばれる類と考えられ、サツマイモ栽培が盛んになった近世から昭和にかけての所産と推測される。

これらの多くは北側の道路に近い位置に比較的集中し、さらに主軸方向がその道路に平行して掘削されている。これは出荷など畑地からの搬出時の利便性からと考えられるが、調査区東側では道路に対し直角に掘削されていることについては、(B～E-6) グリッド付近にも通路があったと想像することが可能である。

形態・規模は、平面形が極めて長い長方形で壁面は垂直に近い。坑底面は平らに整えられている。幅（短軸長）は掘る人間の肩幅位からやや広目の0.50m～0.70m程度が最も多いが、長軸長に関しては長短のばらつきが大きい。収納量を坑の長さで調節することや軟腐病等の害を避けるために毎年場所を変えて掘ることを考えると、年毎に作柄・作付けに関してはかなり不安定であったと推測できる。

なお、B群2類についてもイモ類の貯蔵用として仮定した場合、出荷貯蔵用の溝状土坑とあまり重複しないようにしかも道路から遠くに設けられているものが多く、小型であることなどから、出荷用ではなく自家消費用あるいは種イモ貯蔵用の「たねびつ」などと呼ばれるものではないかと考えられる。

幅狭の長方形土坑として分類したものの中で「たねびつ」とは性格が異なるものと思われるものは、151・152・182・194・246・269Dである。種イモ貯蔵用として考えると151Dは小型過ぎ、その他は深過ぎて出芽が悪くなると思われる。これらの「たねびつ」以外の土坑についての時期・用途等の詳細は不明である。

② 柏城関連

騎西町騎西城武家屋敷跡（嶋村・島村・坂本 1996）では、この1類と同様な土坑が検出されており、南北と東西の主軸方向をもつ土坑が直交するように分布する状況など類似性が指摘できる。しかし、騎西城武家屋敷跡では、これらの土坑の年代について、その出土遺物から15世紀末～17世紀初頭に比定しており、騎西城が文献に見られる年代とはほぼ一致する見方をしている。土坑の機能面については触れられていなかった。

また、児玉町浅見境北遺跡（恋河内 1997）でもこの1類と同様な土坑が検出されており、ここでは「溝状土坑」と表記されている。分布状況についても類似し、25基が本地点ほど密な分布ではないが、南北と東西を主軸方向をもつ土坑が直交している。時期については、遺構に伴う遺物がないため、明確ではないとしながら、覆土の状態や他の遺構との重複関係から、「中世屋敷が廃絶された後の、中世後半（15世紀後半）～近世前半頃の所産」と推測している。

③ 遮蔽物の基礎

東京都豊島区染井遺跡（成田・宮間・水本他 2001）では、5・6基の土坑が直線的に構築されている。ここでは、機能を示す痕跡が検出されなかったため、性格は不明と言わざるをえないとしながら、「この土坑列の南西側に、列に沿って硬化面が検出されている。この硬化面が通路とすると、この土坑列は遮蔽物の基礎と考えられる」とし、時期については、18世紀後葉以降に比定している。

以上、B群1類については、①から「いもあな」・「いもびつ」と呼ばれる近世から現代にかけての農業関連遺構、②の騎西城武家屋敷跡や浅見境北遺跡の例を志木市に当てはめるならば、柏城関連あるいは柏城廃絶後の遺構に関連する可能性がある。さらに③から18世紀後葉以降の通路に沿った遮蔽物の基礎である。というように大きく3通りの見方があることを念頭に入れる必要がある。

実際これらの遺構の年代を比定できれば、問題は解決できる方向に向かうのは間違いないが、出土遺物から、その時期の詳細を比定するには非常に難しいと思われる。

例えば、今回の出土遺物から柏城関連に関係する時期の遺物を探してみると、164・179・214・216・221Dから、中世に遡る資料は存在するが、その遺物から確実に中世の遺構として判断するのは困難であると考えられるからである。これらの遺物の多くは、小破片であり、さらに覆土中からの出土であるため、ただ単に混入品として捉えられても仕方ない遺物ばかりという状況であると言える。

また、今回の全体の資料を見ても、最新の資料は、147・153・229Dから出土した19世紀中頃に比定され、未だ近世の範疇で捉えられることであるが、これについては、前述した新開遺跡のような「いもあな」・「いもびつ」の形態に類似していても、明治・昭和のような近年のものではないと言えることができる。いずれにせよ、今後の課題とし、十分検討する必要がある。

3. 土坑B群4類について

この土坑については、坑底コーナー部に火床部を有し、市内でも城山遺跡内の柏城跡内部にのみに検出される特異な遺構である。この遺構の性格については、いわゆる「小竪穴状遺構」の範疇で捉えられるものと考えられるが、時期・用途については、依然として詳細不明と言うしかないであろう。

埼玉県児玉郡神川村皂樹原遺跡（篠崎・平田 1989）では、中世に属する多数の遺構が検出され、遺物・遺構の二面から詳細な分析が行われている。その中で、特に方形竪穴状遺構の中で、「火処」をもつ例として、20号竪穴が検出されている。この遺構は、「長軸長さ5.4～6.7mの範囲に収まるものであり、短軸幅は2.2m」の規模をもつものであり、今回の城山遺跡例とは大きく構造が異なるものである。坑底には2基の炉跡をもち、炉の周囲には石が配されていたもので、煮炊きの痕跡は追えるが炉に掛けたであろう鍋類は破片すら出土していないという状況である。

また、檜下4号竪穴は、「火処」を有さず、上屋構造をもつ例として注目されるものである。坑底には「長軸上に棟持柱のピットをもち四隅にも壁柱穴を有する」と説明されているが、上屋構造については、柱穴が内傾するため、絵巻物等の絵画資料には例を見い出せないとしながらも、「テント状」のものと想定しているようである。この同様な柱穴をもつ例に、本群の187号土坑があげられよう。

なお、未報告資料であるが、平成16年度に発掘調査が実施された城山遺跡第49地点からは、今回の土坑B群4類に比定できる365号土坑が検出され、火床とする部分がコーナーの2ヶ所から確認され、ここからは、注目すべき遺物として、須恵器系の甕の破片と礫が数点出土している。この遺物についての鑑定はまだ途中であるが、ここで検出された礫についても何らかの意味があるものであろう。

いずれにせよ、いわゆる「小竪穴状遺構」としての範疇として、実際に人がそこで何らかの目的をもって火を焚いたのは間違いなく、さらに187号土坑例は、檜下例を参考するならば、「テント状」の上屋構造をもつものであると想定できそうである。今後、唯一安定した状態で遺物を出土した城山遺跡第49地点の365号土坑の整理作業を進めるに当たり、新たに判明した事実があれば、そこで詳しく触れることにしたいと考えている。

(2) 遺物の集計について

ここでは、第57表の中世以降の遺構から出土した遺物の種類別の集計表を参考に遺物状況をまとめることにしたい。この数値は、報告書に掲載分の数値ではなく、全出土遺物の点数を示している。

まず、一番多く出土した遺物から順に列記すると、陶器－433点、土器－412点、磁器－269点、瓦－217点で、これらは他の遺物に比べ、相当な数量にのぼる。そして、次に多いのは、鉄製品－68点、板碑－64点、銭貨－22点である。銅製品－8点、土製品－7点は極めて少なかった。

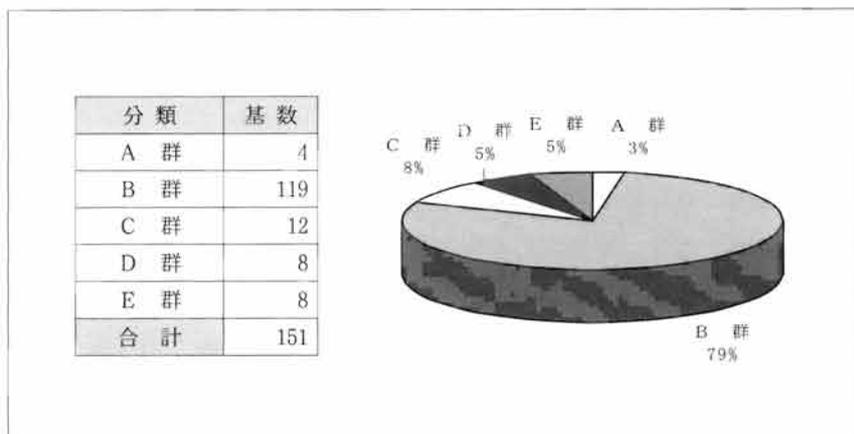
次に、遺構別にみた遺物状況を見てみると、まず土坑についてであるが、A群からは、遺構数が4基と少ないために出土点数は僅かであった。陶器－5点、鉄製品－3点、土器－2点、瓦－2点、磁器－1点であった。

B群は遺構数が119基と土坑全体の79%を占めるため、遺物量も圧倒的に多かった。陶器－252点、土器－251点、磁器－104点、瓦－107点が多く、次いで鉄製品－30点、板碑－30点が多く出土した。

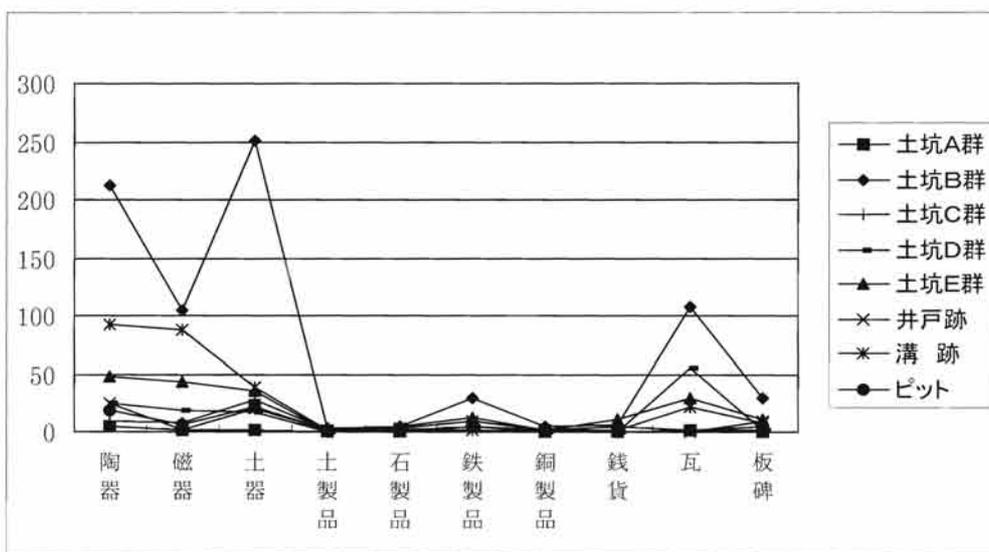
C群からは、土器－27点が多く、次いで陶器－9点、磁器－7点が出土した。

D群からは、瓦－55点が多く、次いで陶器－24点、磁器－18点、土器－17点が多く出土した。

E群からは、陶器－48点、磁器－43点、土器－35点、瓦－29点の順で多く出土した。



第56表 分類別の土坑割合



	陶器	磁器	土器	土製品	石製品	鉄製品	銅製品	銭貨	瓦	板碑
土坑A群	5	1	2	0	0	4	0	0	2	0
土坑B群	212	104	251	3	4	30	5	6	107	30
土坑C群	9	7	27	1	0	2	0	0	1	5
土坑D群	24	18	17	0	2	5	0	0	55	1
土坑E群	48	43	35	0	4	12	1	11	29	11
井戸跡	24	2	20	1	1	2	0	0	0	9
溝跡	93	88	38	1	3	9	1	1	21	7
ピット	18	6	22	1	0	5	1	4	2	1
合計	433	269	412	7	14	69	8	22	217	64

(単位：点)

第57表 中世以降の遺構出土の遺物集計

井戸跡からは、陶器－24点、土器－20点が多く、次いで板碑－9点が出土した。

溝跡からは、陶器－93点、磁器－88点が多く、次いで土器－38点、瓦－21点が出土した。

(3) 「館村」の土地利用の変遷について

ここで、今回の調査区内における中世以降の土地利用についての変遷を出土遺物の年代が特定できた遺構についてのみ、以下のとおりに時期区分を行った。

－1 期－ (15世紀中葉～後葉) 古瀬戸後3期～後4期新段階

今回の調査で最も古い遺物のグループは、149Dから出土の古瀬戸後3期～後4期新段階の直縁大皿(図版40-5)、179Dの古瀬戸後4新段階の播鉢(第85図1)の2点のみである。しかし、149Dは地下室で、19世紀中葉～後葉に位置付けられ、179Dは3期として捉えたため、この2点は遺構には共伴せず混入品として理解した。そのため、この時期の遺構は検出されなかったことになる。

－2 期－ (15世紀末葉～16世紀中葉) 大窯第1・2段階

次に古い遺物のグループは、16世紀前半の179Dの皿(第85図3)の1点のみである。179Dについては、3期として捉えたため、この遺物は混入品と理解した。そのため、この時期の遺構は検出されなかったことになる。

－3 期－ (16世紀後葉～17世紀中葉) 大窯3・4段階～連房式登窯第1段階第3小期

遺物としては、柏城廃絶直前あるいは直後の時期を示すが、これらの遺物は、基本的にその遺構の廃絶時の時期を示すものと考えられることから、遺構としては、柏城が機能していた時期、つまり柏城関連の遺構と言えることができる。

この時期の遺物としては、164Dの大窯第3段階の播鉢(図版41-1)、179Dの志野丸皿(図版41-4)、206Dの大窯第3段階後半の内禿皿(図版41-2)、214Dの志野皿(図版41-1)、216Dの大窯第4段階後半の播鉢(図版41-1)、221Dの大窯第4段階併行の志戸呂の小坏?(第85図1)・17世紀前葉～中葉の東関東系の焙烙(第85図2)・連房式登窯第1～4小期の天目茶碗(図版41-3)、223Dの連房式登窯第1～4小期の陶器(第86図1～7)、248Dの17世紀中葉の丹波の播鉢(図版42-1)、296Dの17世紀初頭の唐津鉄絵向付か(第87図1)と連房式登窯第1～2小期の天目茶碗、309Dの連房式登窯第2小期の志野丸皿(第87図1)、319Dの大窯第3段階後半の折縁皿(第87図1)、17Wの連房式登窯第1～3小期の陶器(第88図1～4)、21Wの陶器(第88図1～3)、23Wの陶器・土器(第88図1～6、図版43-3-7)、24Wの陶器・土器(第88図1、図版43-2-3)、32Mの大窯第3段階後半の播鉢(図版44-1-3)、P14の大窯第2・3段階の播鉢(第89図1)、P20・21の大窯第4段階の天目茶碗(図版44-2-1)と丸皿(図版44-2-1)、P25の連房式登窯第2小期の志野丸皿(第89図1)があげられる。

以上の遺構を列記すると、164・179・214・221・223・248・296・309・319D、17・21・23・24W、P14・20・21・25である。ただし、206Dは4期の遺物が共伴していることから、4期に比定し、216Dは磁器が出土していることから、近世とのみ表記した。24Wの土瓶蓋(図版43-2-4)は連房式登窯第8～11小期と新しい遺物である。32Mは他の陶器・土器2点は17世紀後半に比定されるため、単純に4期に比定した。

遺構内訳は、土坑9基、井戸跡4基、ピット4本である。さらに土坑では、B群－8基(1類－3基、2類－2基、3類－1基、4類－2基)、E群1類－1基である。

－4 期－ (17世紀後葉～18世紀中葉) 連房式登窯第4～7小期

この時期の遺物には、145Dの17～18世紀の北関東系とする焙烙（第84図4）、147Dの連房式登窯第4・5小期の丸皿・反り皿（図版40-8）、153Dの連房式登窯第7小期の耳付皿（第84図1）・連房式登窯第6・7小期の小壺蓋（第84図2）・連房式登窯第7小期の御室茶碗（図版40-4）・連房式登窯第5～7小期の尾呂徳利（図版40-5）、168Dの連房式登窯第5小期の丸皿（図版41-1）、200Dの17世紀後葉～18世紀中葉の唐津碗（第85図1）と連房式登窯第4・5小期の端反皿（図版41-4）、201Dの連房式登窯第4小期の菊皿（図版41-2）、206Dの連房式登窯第7小期の灰落し（図版41-1）、210Dの連房式登窯第7小期の灯明皿（第85図2）、213Dの連房式登窯第4小期の菊皿（第85図1）、237Dの連房式登窯第5小期の志野丸皿（図版42-1）、312Dの17世紀後葉～18世紀中葉の唐津の皿（第87図1）、23Wの連房式登窯第4・5小期の有耳壺（図版43-3-7）、24Wの17世紀後葉の北関東系の焙烙（第88図1）30Mの17～18世紀の陶器・土器（第89図7、図版44-1-8～10）、32Mの17世紀後葉の唐津の刷毛目文鉢（第89図1）と北関東系の焙烙（図版44-1-3）、P10の17～18世紀の北関東系の焙烙（第89図1）、P13の17～18世紀の肥前の上絵付碗（図版44-2-1）、P15の17世紀後葉の唐津の櫛目文鉢（第89図1）、P24の連房式登窯第7小期の折縁輪髹鉢（図版44-2-1）があげられる。

以上の遺構を列記すると、168・206・210・213・237・312D、32M、P10・13・15・24である。ただし、145Dについては、地下室で、19世紀中葉～後葉に位置付けられ、147・153Dについては19世紀中葉のゴミ穴、200・201Dについては、18世紀後葉～19世紀初頭に比定した。23・24Wは3期とした。30Mは最新の遺物から19世紀中葉に比定した。

遺構内訳は、土坑6基、溝跡1基、ピット4本である。さらに土坑分類では、B群－5基（1類－3基、2類－1基、3類－1基）、E群1類－1基である。

－5 期－（18世紀後葉～19世紀全般）連房式登窯第8～11小期

この時期の遺物は、今回の調査では最も多く、遺構については、近世瓦及び磁器を出土した遺構もこの時期に比定されるであろう。この時期の遺物を出土する遺構を列記すると、145～149・153・154・160・163・164・166・168～170・176・178・180・181・183・184・186・188・189・191・192・196・200～202・208・210～212・214～216・219～222・226・229～231・237・242・243・248・265・270・272～274・276・280・282・297～300・310・318D、19・20W、1・30M、P5・7・8・13・19・20・23である。

遺構内訳は、土坑62基、井戸跡2基、溝跡2条、ピット7本が該当する。さらに土坑分類では、A群1類－2基、B群－46基（1類－33基、2類－6基、3類－4基、4類－3基）、C群－4基、D類－5基、E群5基（1類－2基、2類－3基）である。

以上、遺物の時期を1～5期に区分し、それに合わせ遺構の時期を比定したが、あくまでも個々の遺構の時期について比定した根拠は、前述した「これらの遺物の多くは、小破片であり、さらに覆土中からの出土であるため、ただ単に混入品として捉えられても仕方ない遺物」を前提としていることには変わりない。

ここでは、以下に各期の特徴を簡単にまとめた。

1期（15世紀中葉～後葉）・2期（15世紀末葉～16世紀中葉）については、遺物が極めて少なく、遺構についても明確にこの時期に比定できるものはないということは、この時期での土地利用が、面的なエリアで行われていたと想像するのは困難であろう。

遺物量が顕著に増加する時期は、3期（16世紀後葉～17世紀中葉）からである。この時期は、柏城が機能していた時期と考えられることから、柏城関連の遺構と言えることができる。

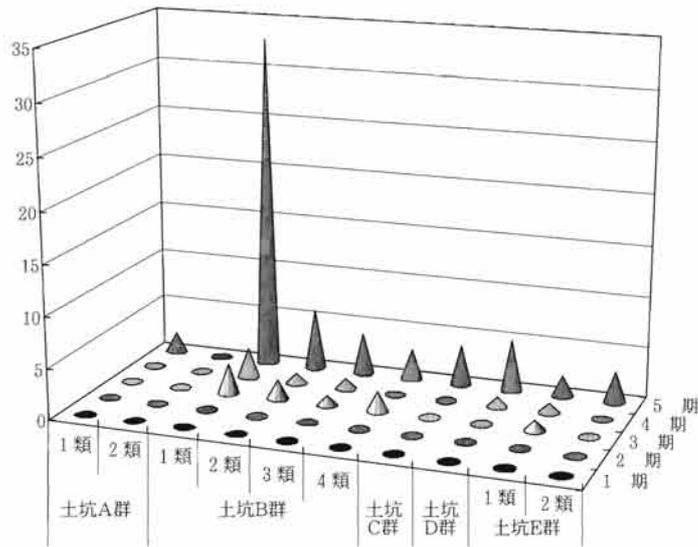
第4章 調査のまとめ

この時期の安定した遺物を出土した遺構には、223Dと17・21・23・24Wがあげられ、これらはこの時期に比定できる数少ない重要な遺構であると言える。さらにこの時期にB群4類とした「火床」をもつ179・214Dの2基が存在することは、形態・機能的に非常に限定できるであろうと理由から、他のすべてもこの時期、つまり柏城関連の遺構である可能性がある。

次の4期（17世紀後葉～18世紀中葉）に比定できる遺物は、柏城廃絶後の状況を示す資料である。この時期の遺物は、減少傾向にあると言え、この時期での土地利用についても面的なエリアで行われたと想像することは困難であろう。

続く5期（18世紀後葉～19世紀全般）は、今回の調査で最も多くの遺物を出土した時期である。このことから、今回の調査で検出された遺構の大部分がこの時期の所産のものと考えられるかもしれない。特に、前記した土坑B群1・2類については、今後の課題としているが、時期については、すべてこの時期の所産である可能性が高いと言えるであろう。

第58表（18世紀後葉～19世紀全般）には、1～5期の時代別の土坑割合を示したが、これを見ても特に土坑B群1類は5期に比定できる遺物が圧倒的に多いということが理解できるであろう。同時に地下室・地下坑についてもこの時期の所産のものと考えられる。さらに柏城の大堀跡の1Mにこの時期の遺物が比較的多く出土したということは、この1Mの最終段階での埋没時期を示すと考えられることから、この1Mの完全な機能停止に前後して、溝状土坑であるB群1・2類や地下室・地下坑、あるいは今回触れていないが、(D・E-6)グリッドで確認できた2棟の蔵跡（基礎部分を検出）など本地点での土地利用がほぼ全域に展開するものと考えられる。



	土坑A群		土坑B群				土坑C群	土坑D群	土坑E群		合計
	1類	2類	1類	2類	3類	4類			1類	2類	
1期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3期	0	0	3	2	1	2	0	0	1	0	9
4期	0	0	3	1	1	0	0	0	1	0	6
5期	2	0	33	6	4	3	4	5	2	3	62
合計	2	0	39	9	6	5	4	5	4	3	77

(単位：基)

第58表 時代別の土坑割合

(4) 元禄検地と「館村」の畑地の増加について

今回の調査地点は、近世において「館村」と呼ばれる行政区の一部に相当する。この「館村」の土地利用については、『志木市史 通史編』の中の荒井晴夫氏により、詳細に論考されているため参考にすることにする。荒井氏は、『館村検地帳』^(註2)を参考に元禄検地前後の「館村」における田畑の面積比較表(第59表)と「館村」における『武蔵田園簿』(慶安年間(1647~1651年成立)と元禄検地の村高の比較表(第60表)を示し、元禄検地前後での畑地と村高の増加を指摘している。

それではまず、第59表を見てみることにする。館村における元禄検地は、元禄14(1701)年に実施されている。これによると上々畑の廃止・新下々の新設などの査定基準の見直しが行われているものの、畑地の面積は、11766畝18歩から13179畝27歩と12%の増加が見られる。

また、第60表では、『武蔵田園簿』との間に50年程の差があるが、元禄検地の際には、畑地における村高は、370.237石から634.122石へと71.3%の著しい増加を見せている。

以上のように近世の「館村」を振り返り、元禄検地前後の畑地と村高の増加という実情があるとすれば、前項(1)で土坑B群1・2類を①近世の農業関連遺構である「いもあな」・「いもびつ」。②騎西城を例に志木市では、柏城関連の遺構。③18世紀後葉以降の遮蔽物の基礎。というように3つの見方による検証が必要であるとしているが、前項(3)を照らし併せて考えると、どうやら近世でも18世紀前半~後半にかけて、さらに19世紀以後も数期の時間幅をもって使用された農業関連の遺構である「いもあな」・「いもびつ」などと呼ばれる類と考えるのが最も自然ではないだろうか。19世紀代の最新の遺物については、この土坑の最終段階の機能停止を示す時期と考えられる。

等級	元禄13年	元禄14年	増減率
上田	1,271.01	936.14	- 26.4%
中田	1,046.22	1,410.23	+ 34.8%
下田	1,502.03	1,446.29	- 3.9%
下々田	1,426.19	1,858.20	+ 30.1%
合計	5,268.18	5,652.26	+ 7.3%
上々畑	84.02	-	-
上畑	1,995.13	1,726.18	- 15.6%
中畑	1,775.16	2,114.16	+ 19.1%
下畑	4,356.11	3,348.10	- 30.1%
下々畑	2,769.23	4,315.08	+ 54.3%
新下々畑	-	570.03	-
上野	29.07	95.06	+ 947.5%
中野	29.07	209.01	-
林畑	152.20	-	-
屋敷	561.06	799.29	+ 42.4%
合計	11,766.18	13,179.01	+ 12.0%
総計	17,035.06	18,831.27	+ 10.5%
石高	石	石	-
	1,034.661	1,096.265	+ 6.0%

第59表 館村元禄検地前後面積比較表

		武蔵田園簿	元禄検地	増加率
館村		石	石	
	田畑	347.862 (48.4%)	462.143 (42.4%)	32.9%
	計	370.237 (51.6%)	634.122 (57.8%)	71.3%
	計	718.099 (100%)	1,096.265 (100%)	52.7%

第60表 村高比較表

〔『志木市史 通史編上』より引用〕

第4節 中・近世における城山遺跡の総括

(1) はじめに

城山遺跡は、柏城と呼ばれる城館跡であり、『新編武蔵風土記稿』にも記載がある。しかし、柏城は中世期の文献には登場せずわずかに『廻国雑記』に記載される大石氏館に疑定する説が提出されている程度である。

柏城は、本丸から三の丸まで4つの郭を持つ連郭式の形状を持つ平城である。本丸を中心に西に西の丸、南に三の丸、東に二の丸を有し北は、荒川の氾濫下に臨んでいる。築城の時期・廃城の時期はともに文献の上でたどる事は出来ない。ただし考古学的には、城山遺跡としての調査が実施されており多くの成果を挙げている。

城山遺跡では、すでに40地点を越す調査が実施され、そのうちA・C・1・2・3・4・6・7・9・11・12・15・16・25・29・35地点において中世～近世にかけての遺構が検出されている。今回報告する42地点は、第1・2地点と同様に三の丸に該当すると推定される地点である。

また、本丸・二の丸に該当する地点の調査も実施され、本丸を区画する大溝や二の丸の虎口と考えられる溝跡などが検出されている。

今回は、三の丸の遺構について若干検討することとする。

(2) 三の丸の遺構について

まずは、第42地点と同様に三の丸に位置する第1・2地点の遺構について概観する。第1・2地点では、第42地点と同様に1Mが検出され、それに付随して3Mが確認されている。この2本の溝は位置関係から虎口を形成するものと考えられる。(E-1・4)グリッドでは5Mが、1Mと並行して走る様子が確認され1Mと同時期の遺構の可能性が指摘された。また、(E-2・4)グリッドでは、1Mに若干の掘り込みが確認され、それに付随するようにピットが存在している。このことから橋状の施設が存在していたことも考えられ、この地点には馬出状の施設が存在していた可能性もある。

さらには、1Mに沿った北側には、中世の遺構が希薄な地帯があり土塁の存在が予測される。もし、仮に土塁が存在したとすれば、30Dは土塁が存在すべき位置にあり、また土塁側に開口部を有する点を考慮すると、土塁や大溝を意識しないで構築されたものと考えられよう。土塁構築以前か、土塁廃絶後の遺構であることが想定できる。

第1・2地点北東部には、3棟の掘立建物が検出されており、これらが城館に伴う遺構であろうと推定される。

土坑は、各種形状の土坑が確認されている。

第42地点の遺構を概観する。土坑については、A～E群まで5種に分類されている。

A群には、第1・2地点でも検出されている墳墓が該当する可能性があるが、調査中に墳墓としての可能性が認識されたのは、234Dのみであった。第1・2地点では、散在的に墳墓が検出されておりこの種の土坑が墳墓であった可能性も指摘できるが、現状では性格まで言及することは難しい。ただし、A群1類の袋状の構造を呈する土坑については、山形県酒田市梵天塚遺跡(石井 2000)で戦国期の墓地としての報告例もある。

B群4類とした火処を持つ土坑は、いわゆる方形竪穴に該当すると考えられる。これ以外にもA群1類とした146号土坑なども火処を持たない方形竪穴の可能性のある遺構が含まれる。方形竪穴は、倉庫や住居として簡易的に構築された構造物と考えられているが、柏城で検出された方形竪穴は、火処を持つ点から居住施設としての機能が持たされていたものと推定される。この種の遺構は、同じ三の丸内に該当する第1・2地点では、10・21・24・26Dの4基が検出されており、その他では検出されていないため、三の丸内という選地による機能分化の存在が認められる。

埼玉県内では同種の遺構が皂樹原・檜下遺跡で確認されている(平田他 1989)。



第102図 城山遺跡第1・2地点の遺構分布図 (1/600)

これらの遺構の年代間は、おおむね柏城が機能していた時期に該当するものと考えられる。

B群1類とした長方形の土坑の機能として、報告書中(194ページ)において農業関連、城館関連、遮蔽物の基礎と三つの可能性を示唆している。

埼玉県内では、同種の形状を呈する遺構が児玉町浅見北遺跡(恋河内 1997)からも25基検出されている。報告書では、この種の遺構を「溝状土壙」という名称で呼んでいるが、南北方向に長軸をあわせている二つの方向性を持った遺構群が検出されている。「一部土壙同志で重複しているが、いずれも土壙の端部を相互に接する程度の類似した重複形態であり、明確に新旧関係が捉えられないことから、あまり時間差はない」と考えている。時代比定としては、「中世屋敷が廃絶された後の、中世後半(15世紀後半)から近世前半頃」と想定している。

遺構の性格については、不明であるとしながらも、「ほ場整備前の調査区の現地表面に見られた畑の区画の基礎」になったものとしている。

また、都内でも類似した遺構として、東京日野市山王上遺跡(千田 2004)で236基の長方形の土坑が長軸方向を一致させて検出されている。この土坑群も「現在調査区の囲む道路の方向に一致」していることが指摘され、この道路が明治大正期の地図からも知ることができることから、公団住宅の建設以前の遺構であろうと推測している。

城山遺跡で検出されたこの種の遺構も出土遺物が少なく、時代比定・用途の認定など思うに任せない。しかし、前記した遺跡と同様、やはり現況道路などの方向によく一致したものである。現在の道路は、『館村旧記』に見られる「柏城落城後の屋敷割の図」に認められる東門と西門をつなぐ道路であろうことから、ある程度近世期の区画が意識されたものと解したい。

これらのことから、このB群1・2類の土坑は、報告中でも指摘しているように柏城廃城以後に三の丸地点が耕地化されるに伴い構築された遺構である可能性が高いものと考えられる。この種の遺構は、第1・2地点では検出されていないことを考えると、柏城廃城以後の土地利用に関して第1・2地点と第42地点では異なっていた可能性も指摘される。

E群2類とした地下室は、従来墳墓とされる地下式坑と同種の性格とすべきであるのか若干の疑問がある。この遺構の分布は、志木市近傍では、新座市新開遺跡第3地点(斯波 1989)や朝霞市ハケタ・中道遺跡(野沢 1994)などでも確認されており、昭和前半頃まで使用されていた穴倉の可能性も考慮して考察する必要がある。

E群1類に関しても出土遺物が少ないため確実な時代比定が困難である。しかし、火処を持つ竪穴の存在など仮説的平坦地の可能性が指摘できるとするならば、E群1類とした地下室も食料貯蔵庫などのような平坦施設の一部である可能性も考慮する必要がある。

井戸跡は、出土遺物が17世紀前半の遺物が目に付くことから、この時期が廃棄年代ではないかと考えられる。柏城の遺構か、廃城後の開発に伴うものと推定される。

ただし、第42地点22Wや第1・2地点の17Dと5Wは掘り込みを伴う特殊な形状の井戸であり、17Dからは、懸垂して使用したと考えられる和鏡が検出されており、柏城に伴う可能性の高い遺構である。

(3) まとめ

以上のことから、三の丸からの出土遺物は第1・2地点の出土遺物もあわせて15世紀後半から16世紀代の遺物が主体を占めることが分かる。すなわち城としての機能は大まかにこの年代幅に収まると考え

られ、検出された遺構もこの時代幅におさまるものと考えられよう。このことから、柏城の三の丸は、15世紀ころ以降に機能していた場所であること、また兵站地としての機能があったことが推定される。

柏城の自体の築城時期は、今次までの調査では確実な証拠を掴むことは出来なかったが、14世紀に遡る遺物が検出されていることなどから、14世紀以前にさかのぼる可能性もある。遺物の年代観等を見ると、柏城を『廻国雑記』記載される「大石信濃守といへる武士の館」とすることに不都合は無い。また、現状の城館跡として認識されている柏城の形状は、近世期に改変を受けてはいるものの、おおむね15～16世紀に形成されたものといえよう。

第1・2地点では中世と考えられる掘立柱建物跡やその可能性のある柱穴などが検出されており、三の丸に建物が存在していたことは確実である。

第42地点で検出された方形堅穴が仮設の兵站施設であるとするならば、柏城にこのような施設が構築された時期は限定されるのではないかと考えられる。現状では、大きな戦と考えられるものに、後北条氏対越後上杉氏、後北条氏対甲斐武田氏、そして後北条氏対豊臣氏が考えられるのではないだろうか。『館村旧記』には、対越後上杉氏との合戦で柏城落城の伝説が記されていることは示唆的である。

遺物は、15・16・17世紀と年代が連続して出土しているところを見ると、柏城は、豊臣氏による関東征伐まで存続していた可能性は大きく、それ以後連続して『館村旧記』に見られるような開発が行われたものと推定される。これは、第35地点で検出された近世初頭期の鑄造遺構の存在がこのことの証拠となろう。

第1・2・42地点では、墓坑と考えられる土坑群が検出されている。これらは、遺物や形状から中世後半といわれる墓坑に類似する。しかし、墓域を城館内に散在的に設けるだろうか。廃城後に形成された民家に伴う家墓の可能性はないかと考えている。志木市内では、中道遺跡第26地点で棺と寛永通宝の六道銭を伴う近世墓が検出されており、棺を持つ近世的墓制に切り替わるのがこの前後の時期ではないかと推定されることから、第1・2・42地点で検出された墓坑は、柏城廃城以後の年代を持つ可能性もある。『館村旧記』に見られる近世初頭期の開発に伴う民家の家墓の可能性が追求されよう。

柏城の廃城が、豊臣秀吉による小田原征伐によるものであるとするならば、城山遺跡から検出されている瀬戸大窯期の遺物がほぼ廃城前後を分けるものとなる。

柏城廃城後に直ちに城以外の機能を持つ場所として変貌していったものと考えられる。第35地点での鑄造遺構やそのほか近世前半期と考えられる遺構・遺物の存在はそのことを裏付けている。

【註】

- (1) 比企型坏については、坂戸市の加藤恭朗・坂野千登勢両氏にご教示を頂いた。特に、加藤氏は、比企型坏の生産地について、比企型坏の胎土に白色針状物質が普遍的に含まれることから、入間地域は比企型坏を出土する中心地的な存在でありながら、古代の南比企窯跡群で使用される粘土と同一のものであるという認識であり、生産地はやはり比企地域に特定できるのではないかと筆者と同意見であった。
- (2) 『館村検地帳』については、現在、『元禄十四年武州新座郡館村検地水帳全9冊及び畑方御検地野帳6冊』として、市指定文化財に指定されている。指定年月日は平成2年3月1日。元禄検地は、志木市においては、元禄11(1698)年に川越城主柳沢吉保領分に編入された宗岡・館村では、元禄13(1700)年に「宗岡村」で、翌年に「館村」でそれぞれ実施された。

[引用・参考文献]

- 青木 修・藤澤良祐編 2001『瀬戸大窯とその時代』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター設立10周年記念企画展図録(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 青木 修・金子健一ほか編 2003『江戸時代的美濃窯』平成15年度(財)瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 石井浩幸 2000「戦国期の墓地跡—酒田市梵天塚遺跡の調査事例から—」『さあべい』第17号 さあべい同人会
- 池田悦夫編 1998『東京都新宿区市谷左内町遺跡Ⅰ』—(仮称)大日本印刷株式会社事務所ビル新築工事に伴う緊急発掘調査報告書—新宿区大日本印刷遺跡調査団
- 江戸遺跡研究会編 2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
- 尾形則敏 1999「いわゆる「比企型環」の編年基準の要点—小地域を対象とした編年の確立に向けて—」『あらかわ』第2号 あらかわ考古談話会
- 2000「志木市における古墳時代の土師器の編年(1)—5世紀から7世紀の環形土器の変遷—」『あらかわ』第3号 あらかわ考古談話会
- 2002「武蔵野台地北西部における古墳時代の地域性—集落を中心とする5世紀から7世紀の土器様相—」『あらかわ』第5号 あらかわ考古談話会
- 2004「荒川下流域右岸地帯における古墳時代中・後期の様相—東京西北～東北部を中心とした5～7世紀の遺跡と土器様相—」『あらかわ』第7号 あらかわ考古談話会
- 岡本直久・青木 修編 2002『江戸時代の瀬戸窯』平成14年度(財)瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 恋河内昭彦 1997『城の内・日延・東田・浅見境北遺跡』児玉町文化財調査報告書第23集 児玉町教育委員会
- 佐々木保俊・尾形則敏 1988『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告書第4集 志木市遺跡調査会
- 斯波 治 1991『新開遺跡第2地点 発掘調査報告書』新座市遺跡調査会
- 1989『新開遺跡第3地点 発掘調査報告書』新座市遺跡調査会
- 篠崎 潔・平田重之 1989『皂樹原・檜下遺跡Ⅰ(阿呆境の館跡)中世編—朝日工業(株)児玉工場関係埋蔵文化財発掘調査報告—』皂樹原・檜下遺跡調査会
- 嶋村英之・島村範久・坂本征男 1996『騎西城武家屋敷跡 第7次発掘調査報告書』騎西町遺跡調査会
- 志木市史編さん室 1986『志木市史 中世資料編』
- 1990『志木市史 通史編上』
- 桜井準也 2002「鍋割り研究の意義」『日本考古学協会第68回総会 研究発表要旨』日本考古学協会
- 千田利明他 2004『東京都日野市山王上遺跡』日野市遺跡調査会
- 中島 宏他 1988『埼玉の中世城館跡』埼玉県教育委員会
- 成田涼子・宮間利之・水本和美他 2001『染井Ⅳ』豊島区埋蔵文化財調査報告14 豊島区教育委員会
- 西田宏子編 2002『知られざる唐津—二彩・単色彩・三島手』(図録)根津美術館
- 橋崎彰一 1983「猿投窯の編年について」齊藤孝正編『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)』(尾北地区・三河地区)愛知県教育委員会
- 野澤 均 1993『行人塚・金子塚下遺跡(第1地点)発掘調査報告書』朝霞市教育委員会 朝霞市遺跡調査会
- 1994『原畑・越戸第二遺跡第3地点 ハケタ・中道遺跡第2地点 北浦第三遺跡第2地点 西久保・宮山遺跡第5地点 向山遺跡第2地点発掘調査報告書』朝霞市教育委員会 朝霞市遺跡調査会
- 平田重之他 1989『皂樹原・檜下遺跡Ⅰ』皂樹原・檜下遺跡調査会
- 藤澤良祐 1991「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要X』瀬戸市歴史民俗資料館
- 1997「中世瀬戸窯の動態」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 1993「瀬戸大窯の時代」瀬戸市史編纂委員会編『瀬戸市史』陶磁史篇四 瀬戸市
- 2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐・金子健一 1998「近世瀬戸焼の生産と流通」瀬戸市史編纂委員会編『瀬戸市史』陶磁史篇六 瀬戸市
- 藤根 久・今村美智子 2003「第3節 土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴」『波志江中宿遺跡』日本道路公団 伊勢崎市 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 両角まり 1996「内耳鍋から焙烙へ—近世江戸在地系焙烙の成立—」『考古学研究』第42巻第4号 考古学研究会

[付 編]

自然 科学 分析

I. 土師器の胎土分析

藤根 久・今村美智子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

土師器の胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら、例えば胎土中に含まれる岩石片の特徴から、これら砂粒物の示す地域がいずれであるかを推定することは容易でない。

土師器胎土は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、粘土材料は比較的良質とも思える粘土層から採取され、混和材としての砂粒物は、これら粘土採取の際に粘土層の上下層に分布する砂層などを採取したことが、粘土採掘坑の調査から推察される（藤根・今村 2003）。

東海地域には、弥生時代後期の赤彩を施したパレススタイル土器が知られているが、これら3分の1程度の試料では、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれるが（藤根 1998、車崎ほか 1996）、これら火山ガラスは、粘土採取の際に近接地に分布するテフラ層を採取したことが予想される。このように、胎土中の混和材は、砂層の特徴である可能性が高く、現河川砂とは大きく異なることから、現在の河川砂との比較では問題が大きい。

土師器胎土は、第一に土器に使用した粘土や混和材がどのような特徴を持つかを十分理解することが重要であり、こうした特徴を持つと思われる粘土層や砂層などと比較検討すべきと考える。

ここでは、古墳時代後期の148号住居跡から出土した土師器の胎土材料について検討した。

2. 試料と方法

試料は、坏・高坏・鉢・甗・甕形土器などの60試料と、参考資料として中野遺跡第49地点の14号住居跡（弥生時代後期）と66号住居跡（古墳時代後期）から検出された粘土2試料である（第61表）。

これら試料は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片（プレパラート）を作成した。なお、粘土は、予め電気炉を用いて750度、6時間で焼成し、土器と同様に薄片を作成した。

(1)試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドガラスに接着し平面を作成した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。

(2)さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドガラスに接着した。

(3)その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

試料は、薄片全面について微化石類（珪藻化石、骨針化石、孢子化石）や大型粒子などの特徴について観察・記載を行った。なお、ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。

[放散虫化石]

放散虫は、放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊生珪藻化石とともに外洋性堆積物中によく見られる。

[骨針化石]

試料番号	標図番号	器 種	分 類	色相 明度/彩度	色	混入粒子の肉眼的特徴						そ の 他
						白色結晶	透明粒子	角閃石類	雲母類	赤色粒子	黒灰色粒子	
No.1	第55図1	坏形土器	A 類	5YR 5/4	にぶい赤褐	○				○		表面赤彩
No.2	第55図2	坏形土器	B 類	2.5Y 8/3	淡黄	○	○	○	△		△	
No.3	第55図3	坏形土器	B 類	10YR 8/3	浅黄橙	○						細粒
No.4	第55図4	坏形土器	C 類-1類	7.5Y 7/3	にぶい橙	○	○	○			◎	
No.5	第55図5	坏形土器	C 類-1類	10YR 6/6	明黄褐	◎	◎	△			◎	粗粒子多い
No.6	第55図6	坏形土器	C 類-1類	10YR 7/3	にぶい黄橙	◎	○	△		△		
No.7	第55図7	坏形土器	C 類-1類	10YR 6/6	明黄褐		◎	○		◎	◎	
No.8	第55図8	坏形土器	C 類-2類	10YR 7/3	にぶい黄橙	◎	△	△		◎	◎	
No.9	第55図9	坏形土器	D 類-1類	7.5Y 7/4	にぶい橙		○	△		◎	◎	粗粒子多い
No.10	第55図10	坏形土器	D 類-1類	10YR 7/4	にぶい黄橙	△	◎	△		△	◎	粗粒子多い
No.11	第55図11	坏形土器	D 類-2類	10YR 7/4	にぶい黄橙	△		△			◎	
No.12	第55図12	坏形土器	E 類-1類	10YR 7/4	にぶい黄橙	○	○	△		△	◎	粗粒子多い
No.13	第55図13	坏形土器	E 類-1類	10YR 7/3	にぶい黄橙	○	△	○		○	◎	粗粒子多い
No.14	第55図14	坏形土器	E 類-1類	7.5Y 7/4	にぶい橙	◎	○	○		◎	◎	スコリア?
No.15	第55図15	坏形土器	E 類-1類	10YR 7/3	にぶい黄橙		△			◎	◎	
No.16	第55図16	坏形土器	E 類-1類	7.5YR 7/6	橙		△	△		△	○	
No.17	第55図17	坏形土器	E 類-2類	7.5Y 7/3	にぶい橙	△	△	○		○	◎	
No.18	第55図18	坏形土器	E 類-2類	10YR 8/2	灰白	○	○	△		○	◎	スコリア?
No.19	第55図19	坏形土器	E 類-3類-a類	10YR 7/4	にぶい黄橙	○	○	△		○	◎	
No.20	第55図20	坏形土器	E 類-3類-a類	7.5Y 7/4	にぶい橙	◎		△		○	◎	粗粒子多い
No.21	第55図21	坏形土器	E 類-3類-a類	2.5Y 7/3	淡黄	◎		△		◎	◎	粗粒子多い
No.22	第55図22	坏形土器	E 類-3類-b類	10YR 7/4	にぶい黄橙		○			◎	◎	
No.23	第55図23	坏形土器	E 類-3類-b類	10YR 7/4	にぶい黄橙	△		△			◎	スコリア?細粒
No.24	第55図24	坏形土器	E 類-3類-c類	2.5Y 8/3	淡黄	△	△	○		△	◎	
No.25	第55図25	坏形土器	F 類-1類-a類	10YR 8/2	灰白	○	○	△		◎	◎	
No.26	第55図26	坏形土器	F 類-1類-b類	10YR 6/3	にぶい黄橙	◎		○		△	◎	内部に隙間多い
No.27	第55図27	坏形土器	F 類-1類-b類	10YR 7/3	にぶい黄橙	○	△	○		△	◎	
No.28	第55図28	坏形土器	F 類-2類-a類	10YR 6/4	にぶい黄橙	◎	△	△		△	◎	粗粒子多い,内部に隙間多い
No.29	第55図29	坏形土器	F 類-2類-a類	10YR 7/4	にぶい黄橙	◎	△	△		△	○	スコリア?
No.30	第55図30	坏形土器	F 類-2類-b類	7.5Y 7/4	にぶい橙	○	△	△		◎	◎	スコリア?
No.31	第55図31	坏形土器	F 類-3類	7.5YR 7/6	橙	◎	△	○			○	
No.32	第55図32	高坏形土器		10YR 7/3	にぶい黄橙	○				△	○	
No.33	第55図33	丸壺形土器	(小型丸壺)	5YR 6/6	橙	○	○			◎	◎	粗粒子多い
No.34	第55図34	丸壺形土器	(小型丸壺)	10YR 7/3	にぶい黄橙	△	△	○		◎	◎	
No.35	第55図35	鉢形土器		5YR 5/4	にぶい赤褐	○	△			△	◎	内部隙間多い,スコリア?
No.36	第55図36	鉢形土器		7.5Y 7/3	にぶい橙	○	△	△		◎	◎	スコリア?
No.37	第55図37	鉢形土器		7.5Y 5/3	にぶい褐	○	○			△	△	
No.38	第56図38	甌形土器		7.5YR 6/6	橙		○			◎	◎	粗粒子多く,内部に隙間多い
No.39	第56図39	甌形土器		5YR 7/4	にぶい橙	◎	○	△		○	○	
No.40	第56図40	甌形土器		7.5Y 7/4	にぶい橙	○	△	△		△	◎	スコリア?
No.41	第56図41	丸壺形土器	(小型丸壺)	10YR 7/4	にぶい黄橙	△		○		◎	◎	
No.42	第56図42	丸壺形土器	(大型丸壺)	10YR 7/4	にぶい黄橙	○	○	△		◎	◎	
No.43	第56図43	丸壺形土器	(大型丸壺)	10YR 7/6	黄橙	○				◎		内部隙間多い
No.44	第56図44	丸壺形土器	(大型丸壺)	5YR 6/6	橙	△		△			◎	スコリア
No.45	第57図45	長壺形土器		7.5Y 6/3	にぶい褐	○		△		○	△	スコリア
No.46	第57図46	長壺形土器		7.5YR 7/4	にぶい橙	△	△	△		◎	○	
No.47	第57図47	長壺形土器		10YR 7/3	にぶい黄橙	○	○	△	△	△	△	
No.48	第57図48	長壺形土器		7.5YR 7/4	にぶい橙	○	△	△		△	◎	スコリア
No.49	第57図49	長壺形土器		10YR 7/3	にぶい黄橙	△	△	△			◎	
No.50	第57図50	長壺形土器		2.5Y 8/4	淡黄	○				◎	○	
No.51	第58図51	長壺形土器		10YR 7/4	にぶい黄橙	○	○	△		△	◎	
No.52	第58図52	長壺形土器		7.5YR 7/2	明褐灰	○	△	△		◎	○	
No.53	第58図53	長壺形土器		10YR 7/3	にぶい黄橙	◎		△	△	◎	◎	スコリア
No.54	第58図54	長壺形土器		7.5YR 6/6	橙	○	△	△		○	○	
No.55	第58図55	長壺形土器		7.5YR 6/6	橙	○	○				◎	スコリア
No.56	第58図56	長壺形土器		7.5Y 6/3	にぶい褐	○	△			◎	◎	
No.57	第58図57	長壺形土器		7.5YR 6/4	にぶい橙	○	○	△		○	◎	スコリア
No.58	第58図58	支脚		7.5YR 6/6	橙			△		△	△	脆い
No.59	第58図59	ミニチュア土器		10YR 6/6	橙	○	△			△	◎	粗粒子多く脆い
No.60	第58図60	ミニチュア土器		10YR 6/3	にぶい黄橙	○				◎	◎	
No.61	参考資料	粘土	(弥生時代後期)	2.5Y 7/4	淡黄							中野遺跡第49地点14号住居跡
No.62	参考資料	粘土	(古墳時代後期)	10RY 3/3	暗褐							中野遺跡第49地点66号住居跡

第61表 148号住居跡から出土した土器の詳細とその特徴

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。

[珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは10～数百 μm 程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。最近では、小杉（1988）や安藤（1990）によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復原が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石（淡水種）と分類し、同定できないものは珪藻化石（？）とした。なお、各胎土中の珪藻化石は、その詳細を記載した。

[植物珪酸体化石]

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約10～50 μm 前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や垂鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

[孢子化石]

孢子状粒子は、珪酸質と思われる直径10～30 μm 程度の小型無色透明の球状粒子である。これらは、水成堆積中で多く見られるが、土壌中にも含まれる。

[石英・長石類]

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。なお、石英・長石類（雲母）は、黄色などの細粒雲母類が包含される石英または長石類である。

[長石類]

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などの $\text{SiO}_2\%$ の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状には剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。カコウ岩などの $\text{SiO}_2\%$ の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。なお、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類とした。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビールびんのような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。 $\text{SiO}_2\%$ が少ない深成岩、 $\text{SiO}_2\%$ が中間ある

いは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてSiO₂%が中間から少ない火山岩によく見られ、SiO₂%の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のようなSiO₂%が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

[ガラス質]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄くて湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考える。なお、濁ガラスは、非晶質でやや濁りのあるガラスで、火山岩類などにも見られる。

[複合鉱物類]

構成する鉱物が石英あるいは長石以外に重鉱物を伴う粒子で、雲母類を伴う粒子は複合鉱物類（含雲母類）、輝石類を伴う粒子を複合鉱物類（含輝石類）、角閃石類を伴う粒子を複合鉱物類（角閃石類）とした。

[複合石英類]

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質(マトリックス)の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒のものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01mm未満のものを微細、0.01~0.05mmのものを小型、0.05~0.1mmのものを中型、0.1mm以上のものを大型と分類した。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類（等粒）として分類した。この複合石英類（等粒）は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考える。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質とし、約0.06mm未満のものを泥岩質とする。

[不透明・不明]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

3. 各胎土の特徴および計数の結果

（各胎土の特徴および計数の結果）

胎土中の粒子組成は、任意の位置での粒子を分類群別に計数した（第62表）。また、計数されない微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

No. 1 : 70~600 μ mが多い（最大粒径1.5mm）。赤褐色粒子〈複合石英類（微細）〉石英・長石類〉単斜輝石、斜方輝石、角閃石類、[片理複合石英類]、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No. 2 : 70~500 μ mが多い（最大粒径800 μ m）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉軽石型ガラス質、

斜長石 (双晶)、斜長石 (累帯)、角閃石類、ジルコン、珪藻化石 (沼沢湿地付着生 *Eunotia praerupta* var. *bidens*、*Stauroneis phoenicenteron*、淡水種 *Pinnularia* 属、*Cymbella* 属、*Eunotia* 属、*Diploneis* 属、不明種多産)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石やや多い

No. 3 : 70~300 μm が多い (最大粒径750 μm)。石英・長石類>斜長石 (双晶)>斑晶質>複合石英類 (微細)>角閃石類、ジルコン、単斜輝石、[軽石型ガラス質]、放散虫化石、珪藻化石 (淡水種 *Eunotia lunaris*、*Cymbella minuta*、*Pinnularia* 属、*Navicula* 属、*Neidium* 属、*Diploneis* 属、*Melosira* 属、*Eunotia* 属、*Cymbella* 属、*Gomphonema* 属、不明種極多産)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No. 4 : 100~750 μm が多い (最大粒径1.2mm)。石英・長石類>複合石英類 (微細)>砂岩質>複合石英類、斜長石 (双晶)、角閃石類、[発泡斑晶質、ガラス質]、角閃石類、単斜輝石、斑晶状泥岩質、珪藻化石 (淡水種 *Pinnularia* 属、*Eunotia* 属、不明種多産)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石多い

No. 5 : 50~500 μm が多い (最大粒径900 μm)。石英・長石類>複合石英類 (微細)>複合石英類、斜長石 (双晶)、[斑晶質、発泡斑晶質、片理複合石英類、ガラス質]、斜方輝石、角閃石類、珪藻化石 (淡水種 *Epithemia turgida*、*Synedra ulna*、*Cymbella* 属、*Eunotia* 属、不明種多産)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No. 6 : 110~800 μm が多い (最大粒径1.4mm)。複合石英類 (微細)>石英・長石類>複合石英類、[褐色ガラス付着斜長石 (双晶)]、斜長石 (双晶)、[発泡斑晶質]、角閃石類、斜方輝石、珪藻化石 (淡水種 *Pinnularia* 属、*Cymbella* 属、不明種多産、砂粒付着 *Pinnularia borealis*)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石多い

No. 7 : 60~600 μm が多い (最大粒径1.4mm)。複合石英類 (微細)>石英・長石類>砂岩質>複合石英類、斜長石 (双晶)、[褐色ガラス付着斜長石 (双晶)]、斑晶質、単斜輝石、角閃石類、ジルコン、珪藻化石 (沼沢湿地付着生 *Eunotia praerupta* var. *bidens*、淡水種 *Pinnularia* 属、*Eunotia* 属、*Melosira* 属、不明種多産)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石多い

No. 8 : 60~600 μm が多い (最大粒径1.7mm)。石英・長石類>複合石英類 (微細)>斜長石 (双晶)、カリ長石 (パーサイト)、角閃石類、複合石英類、砂岩質、[ガラス質、発泡斑晶質]、珪藻化石 (淡水種 *Synedra ulna*、不明種)、孢子化石、植物珪酸体化石

No. 9 : 110~700 μm が多い (最大粒径1.5mm)。複合石英類 (微細)>石英・長石類>砂岩質>複合石英類、角閃石類、カリ長石 (パーサイト)、単斜輝石、[斑晶質、ガラス質、ジルコン]、珪藻化石 (沼沢湿地付着生 *Eunotia praerupta* var. *bidens*、淡水種 *Pinnularia* 属、*Eunotia* 属、不明種多産、砂粒付着 *Cymbella sinuata*)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石やや多い (ヨシ属含む)

No.10 : 60~700 μm が多い (最大粒径1.2mm)。複合石英類 (微細)>石英・長石類>砂岩質>斜長石 (双晶)、カリ長石 (パーサイト)、[複合石英類、発泡斑晶質]、角閃石類、ジルコン、単斜輝石、珪藻化石 (淡水種 *Synedra ulna*、不明種やや多い)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No.11 : 50~400 μm が多い (最大粒径850 μm)。石英・長石類>複合石英類 (微細)>複合石英類、角閃石類、斜長石 (双晶)、単斜輝石、ジルコン、[ガラス質、片理複合石英類]、珪藻化石 (淡水種 *Pinnularia* 属、*Eunotia* 属、不明種)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石やや多い

No.12 : 110~600 μm が多い (最大粒径2.5mm)。石英・長石類>複合石英類 (微細)>砂岩質>斜長石 (双晶)、発泡斑晶質、角閃石類、単斜輝石、[ガラス質]、珪藻化石 (淡水種 *Epithemia adnata*、*Eunotia formica*、*Pinnularia* 属、*Eunotia* 属、不明種多い)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石、イネ類

珪酸体化石

No.13：100～800 μm が多い（最大粒径1.6mm）。複合石英類（微細）〈斑晶質〉石英・長石類〉複合石英類、砂岩質、斜長石（双晶）、斜方輝石、単斜輝石、凝灰岩質、角閃石類、片理複合石英類、珪藻化石（淡水種 *Navicula pusilla*、*Pinnularia* 属、*Cymbella* 属、*Nitzschia* 属、不明種多産）、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No.14：90～800 μm が多い（最大粒径1.5mm）。複合石英類（微細）〈石英・長石類〉砂岩質〉複合石英類、斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、発泡斑晶質（最大粒径1.7mm）、単斜輝石、角閃石類、珪藻化石（淡水種 *Pinnularia* 属、不明種）、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No.15：50～500 μm が多い（最大粒径1mm）。複合石英類（微細）〈石英・長石類〉砂岩質〉斜長石（双晶）、[発泡斑晶質]、複合石英類、角閃石類、単斜輝石、カリ長石（パーサイト）、ジルコン、珪藻化石（沼沢湿地付着生 *Eunotia praerupta var. bidens*、*Eunotia formica*、*Eunotia* 属、不明種多産）、骨針化石、孢子化石多い、植物珪酸体化石

No.16：110～800 μm が多い（最大粒径1.3mm）。複合石英類（微細）〈石英・長石類〉斑晶質、複合石英類、[発泡斑晶質]、斜長石（双晶）、角閃石類、単斜輝石、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、淡水種 *Navicula bacillum*、*Pinnularia* 属、*Eunotia* 属、*Cymbella* 属、不明種多産）、骨針化石、孢子化石多い、植物珪酸体化石

No.17：120～400 μm が多い（最大粒径850 μm ）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、単斜輝石、角閃石類、[複合石英類、発泡斑晶質]、珪藻化石（湖沼沼沢湿地 *Melosira ambigua*、淡水種 *Synedra ulna*、*Pinnularia* 属、*Melosira* 属、*Eunotia* 属、陸域 *Hantzschia amphioxys*、不明種）、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No.18：50～750 μm が多い（最大粒径1.2mm）。複合石英類（微細）〈石英・長石類〉砂岩質〉斜長石（双晶）、[複合石英類、斑晶質]、角閃石類、泥岩質、単斜輝石、珪藻化石（沼沢湿地付着生 *Eunotia pectinalis var. undulata*、*Eunotia praerupta var. bidens*、湖沼沼沢湿地 *Melosira ambigua*、淡水種 *Pinnularia* 属、*Eunotia* 属、*Cymbella* 属、不明種多産）、骨針化石、孢子化石多い、植物珪酸体化石

No.19：40～400 μm が多い（最大粒径1mm）。石英・長石類〉砂岩質〉複合石英類〉泥岩質〉斜長石（累帯）〉角閃石類〉スコリア、珪藻化石（淡水種 *Pinnularia* 属、不明種）、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石、稲類珪酸体化石

No.20：70～700 μm が多い（最大粒径1.5mm）。複合石英類（微細）〈砂岩質〉石英・長石類、複合石英類、角閃石類、[ジルコン]、単斜輝石、斑晶質、[スコリア質]、珪藻化石（淡水種 *Pinnularia* 属、不明種多い）、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石やや多い

No.21：90～750 μm が多い（最大粒径1.5mm）。複合石英類（微細）〈砂岩質〉複合石英類、泥岩質、石英・長石類、ジルコン、角閃石類、単斜輝石、珪藻化石（藻場 *Cocconeis scutellum*、淡水種 *Neidium* 属、不明種多い）、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No.22：150～800 μm が多い（最大粒径1.4mm）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〈砂岩質〉複合石英類、角閃石類、単斜輝石、[ガラス質、発泡斑晶質]、ジルコン、珪藻化石（淡水種 *Synedra ulna*、*Pinnularia* 属、不明種やや多い）、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No.23：70～600 μm が多い（最大粒径900 μm ）。複合石英類（微細）〈石英・長石類〉砂岩質〉斜長石（双晶）、複合石英類、[発泡斑晶質]、雲母類、角閃石類、珪藻化石（淡水種 *Eunotia biareofera*、*Pinnularia*

属、不明種多産)、骨針化石、孢子化石多い、植物珪酸体化石

No.24: 70~750 μm が多い(最大粒径1.4mm)。複合石英類(微細)石英・長石類)砂岩質、斜長石(双晶)、カリ長石(パーサイト)、[発泡斑晶質、斑晶質]、角閃石類、単斜輝石、珪藻化石(沼沢湿地付着生 *Eunotia pectinalis* var. *undulata*、淡水種 *Pinnularia* 属、*Eunotia* 属、*Cymbella* 属、不明種多産)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No.25: 100~750 μm が多い(最大粒径1.2mm)。複合石英類(微細)石英・長石類)砂岩質)斜長石(双晶)、[複合石英類、発泡斑晶質]、角閃石類、単斜輝石、珪藻化石(淡水種 *Eunotia* 属、*Cymbella* 属、不明種多い)、骨針化石、孢子化石多い、植物珪酸体化石

No.26: 90~700 μm が多い(最大粒径1.1mm)。石英・長石類)複合石英類(微細)斑晶質)斜長石(双晶)、単斜輝石、砂岩質、複合石英類、角閃石類、褐色ガラス付着斜長石(双晶)、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属系、不明種多い)、骨針化石、孢子化石多い、植物珪酸体化石

No.27: 90~750 μm が多い(最大粒径1.1mm)。複合石英類(微細)石英・長石類)斑晶質)斜長石(双晶)、褐色ガラス付着斜長石(双晶)、発泡斑晶質、砂岩質、[ガラス質]、単斜輝石、珪藻化石(淡水種 *Epithemia adnata*、*Pinnularia* 属、*Eunotia* 属、*Cymbella* 属、*Diploneis* 属、不明種多産)、骨針化石、孢子化石多い、植物珪酸体化石

No.28: 70~750 μm が多い(最大粒径1.9mm)。複合石英類(微細)石英・長石類)斜長石(双晶)、[複合石英類、発泡斑晶質、斑晶質、片理複合石英類]、砂岩質、角閃石類、単斜輝石、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属、*Diploneis* 属、不明種多い)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No.29: 80~750 μm が多い(最大粒径1.4mm)。石英・長石類)複合石英類(微細)砂岩質、泥岩質、複合石英類、斜長石(双晶)、カリ長石(パーサイト)、角閃石類、単斜輝石、ジルコン、[斑晶質、発泡斑晶質]、珪藻化石(淡水種 *Eunotia* 属、*Cymbella* 属、不明種多産)、骨針化石、孢子化石多い、植物珪酸体化石

No.30: 70~800 μm が多い(最大粒径mm)。複合石英類(微細)石英・長石類)砂岩質、[発泡斑晶質]、角閃石類、斜長石(双晶)、単斜輝石、ジルコン、珪藻化石(淡水種 *Stauroneis acuta*、*Diploneis* 属、*Eunotia* 属、不明種多産)、骨針化石、孢子化石多い、植物珪酸体化石

No.31: 80~500 μm が多い(最大粒径900 μm)。石英・長石類)複合石英類(微細)複合石英類、砂岩質、斜長石(双晶)、砂岩質、角閃石類、[発泡斑晶質]、単斜輝石、珪藻化石淡水種 *Synedra ulna*、*Cymbella* 属、*Melosira* 属、不明種やや多い)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No.32: 100~700 μm が多い(最大粒径1.3mm)。石英・長石類)複合石英類(微細)砂岩質)複合石英類、雲母類、[軽石質ガラス、斑晶質、片理複合石英類]、単斜輝石、角閃石類、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属、不明種)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No.33: 70~800 μm が多い(最大粒径1.5mm)。石英・長石類)複合石英類(微細)斑晶質)複合石英類、斜長石(双晶)、砂岩質、角閃石類、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属、*Cymbella* 属、*Diploneis* 属、スコリア発泡内付着珪藻化石 *Neidium* 属、*Melosira* 属、不明種多産)、骨針化石、孢子化石多い、植物珪酸体化石

No.34: 60~800 μm が多い(最大粒径1.9mm)。複合石英類(微細)石英・長石類)複合石英類、砂岩質、カリ長石(パーサイト)、[発泡斑晶質]、単斜輝石、珪藻化石(淡水種 *Cymbella* 属、*Diploneis* 属、不明種多い)、骨針化石、孢子化石多い、植物珪酸体化石多い

No.35: 100~750 μm 前後が多い(最大粒径1.4mm)。複合石英類(微細)〈石英・長石類〉砂岩質〉角閃石類、[発泡斑晶質、凝灰岩質]、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属系、不明種)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No.36: 120 μm ~1.0mmが多い(最大粒径1.6mm)。複合石英類(微細)〈石英・長石類〉砂岩質〉発泡斑晶質、角閃石類、複合石英類、[凝灰岩質]、片理複合石英類、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属、不明種)、骨針化石、孢子化石多い、植物珪酸体化石

No.37: 130~800 μm が多い(最大粒径1.1mm)。複合石英類(微細)〈石英・長石類〉砂岩質〉斜長石(累帯)、[発泡斑晶質、複合石英類]、角閃石類、単斜輝石、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属、*Eunotia* 属、*Melosira* 属、不明種多産)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No.38: 70~750 μm が多い(最大粒径1.2mm)。複合石英類(微細)〈複合石英類〉石英・長石類〉泥岩質、単斜輝石、[ガラス質、発泡斑晶質]、珪藻化石(海水種 *Grammatophora macilenta*、藻場 *Cocconeis scutellum*、淡水種 *Epithemia adnata*、*Melosira distans*、不明種)、骨針化石、孢子化石多い、植物珪酸体化石

No.39: 60~700 μm が多い(最大粒径1.2mm)。複合石英類(微細)〈石英・長石類〉砂岩質〉複合石英類、斜長石(双晶)、[発泡斑晶質、ガラス質]、泥岩質、角閃石類、単斜輝石、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属、*Cymbella* 属系、不明種多産)、骨針化石、孢子化石多い、植物珪酸体化石

No.40: 100~900 μm が多い(最大粒径1.9mm)。複合石英類(微細)〈砂岩質〉石英・長石類〉複合石英類、斜長石(双晶)、カリ長石(パーサイト)、泥岩質、角閃石類、斜方輝石、[発泡斑晶質、斑晶質]、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属、淡水種 *Pinnularia* 属、不明種)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No.41: 60~700 μm が多い(最大粒径1.1mm)。複合石英類(微細)〈石英・長石類〉砂岩質〉複合石英類、斜長石(双晶)、発泡斑晶質、斑晶質、角閃石類、単斜輝石、[ガラス質、片理複合石英類]、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属、*Neidium* 属、*Eunotia* 属、不明種多い)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石多い

No.42: 60~400 μm が多い(最大粒径1.1mm)。複合石英類(微細)〈石英・長石類〉複合石英類、泥岩質、砂岩質、角閃石類、斜長石(双晶)、単斜輝石、[片理複合石英類]、珪藻化石(海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、淡水種 *Pinnularia* 属、不明種)、骨針化石、孢子化石多い、植物珪酸体化石

No.43: 60~700 μm が多い(最大粒径1.2mm)。複合石英類(微細)〈石英・長石類〉複合石英類、斑晶質、斜長石(双晶)、単斜輝石、角閃石類、ジルコン、[発泡斑晶質]、珪藻化石(淡水種 *Stauroneis acuta*、*Pinnularia* 属、*Cymbella* 属、*Diploneis* 属、*Eunotia* 属、不明種多産)、骨針化石、孢子化石多い、植物珪酸体化石

No.44: 60~700 μm が多い(最大粒径1.2mm)。複合石英類(微細)〈石英・長石類〉砂岩質〉複合石英類、泥岩質、珪藻化石(淡水種 *Synedra ulna*、*Pinnularia* 属、*Eunotia* 属、不明種)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石多い

No.45: 50~600 μm が多い(最大粒径1.3mm)。複合石英類(微細)〈石英・長石類〉複合石英類、斜長石(双晶)、斑晶質、砂岩質、斜長石(累帯)、発泡斑晶質、単斜輝石、角閃石類、珪藻化石(淡水種 *Synedra ulna*)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸化石

No.46: 90~700 μm が多い(最大粒径1.6mm)。複合石英類(微細)〈石英・長石類〉複合石英類、砂岩質、角閃石類、単斜輝石、斑晶質、珪藻化石(海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、湖沼沼沢湿地

Melosira ambigua、淡水種 *Epithemia turgida*、*Pinnularia* 属系多い、*Cymbella* 属、陸域 *Hantzschia amphioxys*、不明種)、骨針化石、孢子化石多い、植物珪酸体化石

No.47: 100~900 μm が多い(最大粒径1.2mm)。石英・長石類)複合石英類(微細)斜長石(双晶)、複合石英類、砂岩質、角閃石類、ジルコン、単斜輝石、発泡斑晶質、珪藻化石(湖沼沼沢湿地 *Melosira ambigua*、淡水種 *Pinnularia* 属、*Cymbella* 属、*Neidium* 属、不明種多産)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No.48: 90~750 μm が多い(最大粒径1.4mm)。複合石英類(微細)砂岩質)石英・長石類)複合石英類、角閃石類、斜長石(双晶)、斑晶質、[発泡斑晶質]、泥岩質、単斜輝石、放散虫化石、珪藻化石(海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、淡水種 *Pinnularia* 属、不明種)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No.49: 60~700 μm が多い(最大粒径1.9mm)。複合石英類(微細)石英・長石類)複合石英類)砂岩質)斜長石(双晶)、斑晶質、発泡斑晶質、[片理複合石英類]、単斜輝石、角閃石類、珪藻化石(海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、沼沢湿地付着生 *Stauroneis phoenicenteron*、不明種)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No.50: 100~600 μm が多い(最大粒径1.6mm)。石英・長石類)複合石英類(微細)斑晶質、複合石英類、砂岩質、斜長石(双晶)、珪藻化石(海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、湖沼沼沢湿地 *Melosira ambigua*、淡水種 *Pinnularia* 属、*Cymbella* 属、*Melosira* 属、不明種多産)、骨針化石、孢子化石多い、植物珪酸体化石多い

No.51: 100~500 μm が多い(最大粒径750 μm)。複合石英類(微細)石英・長石類)砂岩質)泥岩質、斜長石(双晶)、褐色ガラス付着斜長石(双晶)、カリ長石(パーサイト)、角閃石類、単斜輝石、[斑晶質]、珪藻化石(淡水種 *Stauroneis acuta*、*Pinnularia* 属、*Cymbella* 属、*Synedra* 属、*Melosira* 属、不明種)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No.52: 100~800 μm が多い(最大粒径1.8mm)。石英・長石類)複合石英類(微細)砂岩質)複合石英類、斑晶質、斜長石(双晶)、発泡斑晶質、ジルコン、角閃石類、[片理複合石英類]、単斜輝石、珪藻化石(淡水種 *Eunotia* 属、*Cymbella* 属、*Gomphonema* 属、不明種多産)、骨針化石、孢子化石多い、植物珪酸体化石

No.53: 110~750 μm が多い(最大粒径2mm)。複合石英類(微細)石英・長石類)斑晶質)砂岩質、斜長石(双晶)、カリ長石(パーサイト)、[複合石英類]、ジルコン、雲母累、単斜輝石、斜方輝石、角閃石類、軽石型ガラス質、珪藻化石(不明種)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No.54: 220~800 μm が多い(最大粒径1.3mm)。複合石英類(微細)石英・長石類)斑晶質)斜長石(双晶)、複合石英類、砂岩質、角閃石類、単斜輝石、斜方輝石、[発泡斑晶質]、ジルコン、完晶質、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属、陸域 *Hantzschia amphioxys*、不明種)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No.55: 80~500 μm が多い(最大粒径1.1mm)。複合石英類(微細)石英・長石類)砂岩質)複合石英類、角閃石類、斜長石(双晶)、単斜輝石、斑晶質、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属、*Diploneis* 属、*Eunotia* 属、不明種多産)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No.56: 100~600 μm が多い(最大粒径1.5mm)。複合石英類(微細)石英・長石類)斑晶質、複合石英類、斜長石(双晶)、斜長石(累帯)、砂岩質、角閃石類、発泡斑晶質、単斜輝石、ジルコン、珪藻化石(湖

沼沼沢湿地 *Melosira ambigua*、淡水種 *Diploneis finnica*、*Synedra ulna*、*Melosira* 属、不明種)、骨針化石、植物珪酸体化石

No.57: 80~800 μm が多い(最大粒径1.1mm)。石英・長石類) 複合石英類(微細) 複合石英類、斜長石(双晶)、カリ長石(パーサイト)、発泡斑晶質、[斑晶質、片理複合石英類]、斜長石(累帯)、角閃石類、単斜輝石、斜方輝石、珪藻化石(淡水種 *Synedra ulna*、*Melosira pensacolatae*、不明種多い)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No.58: 80~500 μm が多い(最大粒径1.6mm)。複合石英類(微細) 石英・長石類) 砂岩質) 斜長石(双晶)、[片理複合石英類、発泡斑晶質]、角閃石類、ジルコン、斜方輝石、複合石英類、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属、不明種)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

No.59: 60~700 μm が多い(最大粒径1.9mm)。複合石英類(微細) 石英・長石類) 砂岩質) 複合石英類、[斑晶質]、角閃石類、斜方輝石、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属、砂粒付着陸域 *Pinnularia borealis*、不明種多産)、孢子化石多い、骨針化石、植物珪酸体化石

No.60: 70~500 μm が多い(最大粒径800 μm)。複合石英類(微細) 石英・長石類) 斑晶質、泥岩質、[複合石英類]、斜長石(双晶)、斜長石(累帯)、角閃石類、単斜輝石、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属、不明種多産)、骨針化石、孢子化石多い、植物珪酸体化石

No.61: 60~290 μm が多い(最大粒径750 μm)。石英・長石類) 雲母類) 複合石英類(微細)、複合石英類、[凝灰岩質]、角閃石類、単斜輝石、ジルコン、骨針化石、植物珪酸体化石

No.62: 50~250 μm が多い(最大粒径700 μm)。石英・長石類) 複合石英類(微細) 斜長石(双晶)、雲母類、斑晶質、放散虫化石、珪藻化石(海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、淡水種 *Eunotia* 属、*Cymbella* 属、不明種)、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石

4. 考察

(1) 微化石による材料粘土の分類

検討した胎土中には、その薄片全面の観察から、珪藻化石や骨針化石などが検出された。これら微化石類の大きさは、珪藻化石が10~数100 μm (実際観察される珪藻化石は大きいもので150 μm 程度)、放散虫化石が数100 μm 、骨針化石が10~100 μm 前後である(植物珪酸体化石が10~50 μm 前後)。一方、碎屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9 μm 以下、シルトが約3.9~62.5 μm 、砂が62.5 μm ~2mmである(地学団体研究会・地学事典編集委員会編 1981)。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は、胎土材料の粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれていること、製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した土器胎土は、微化石類により1) 淡水成粘土の粘土塊、2) 水成粘土を用いた胎土、であることが分かった(第61表)。なお、粘土の起源を指標する珪藻化石などが少ない場合には、(淡水成)とした。また、海水種珪藻化石が含まれるものの、淡水種珪藻化石が含まれる場合には、粘土の種類は淡水成とした。

1) 淡水成粘土を用いた胎土または粘土(58胎土、1粘土)

これらの胎土または粘土中には、比較的多く淡水種珪藻化石が含まれていた。これら淡水成粘土とし

た胎土では、淡水種珪藻化石と思われる破片が多産している胎土が多い。なお、10胎土中には、少ないものの海水種珪藻化石あるいは放散虫化石を含む胎土も見られた。また、66号住居跡カマドの粘土中には、放散虫化石が含まれていた。

2) 水成粘土を用いた胎土または粘土 (2胎土、1粘土)

これらの胎土または粘土中には、少ないものの不明種珪藻化石あるいは骨針化石を含んでいた。

(2) 砂粒組成による分類

ここで設定した複合鉱物類は、構成する鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。このため、各胎土または粘土塊中の鉱物、岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った。起源岩石の推定は、片理複合石英類が片岩類、砂岩質や複合石英類(微細)が堆積岩類、斑晶質や完晶質が火山岩類、ガラス質がテフラ(火山噴出物)、複合石英類(大型)や複合鉱物類(含雲母類など)が深成岩類、凝灰岩質が凝灰岩類、流紋岩質が流紋岩類である。なお、発泡斑晶質はスコリア質テフラである。

砂粒組成の分類は、最も多く出現する分類群(第1出現群)と次いで多く出現する分類群(第2出現群)の組合せに従った。

その結果、土器胎土では、堆積岩類を主体として深成岩類などを伴うC b群、堆積岩類を主体とするC群、堆積岩類を主体として火山岩類などを伴うC d群、火山岩類を主体として堆積岩類を伴うD c群であった(第62表)。

一方、粘土塊では、堆積岩類を主体として深成岩類などを伴うC b群、堆積岩類を主体として火山岩類などを伴うC d群であった。

出現数は、C b群が最も多く40胎土と1粘土、次いでC群が11胎土、C d群が8胎土と1粘土、D c群が1胎土であった。なお、富士火山などから噴出したスコリア(発泡斑晶質)が相当多くの胎土中に確認され、No.14の坏形土器胎土中では最大粒径1.7mmの粒子が見られた。

一方、粘土塊では、堆積岩類を主体として深成岩類などを伴うC b群、堆積岩類を主体として火山岩類などを伴うC d群であった。

(3) 胎土材料

土器胎土の材料は、粘土においては淡水種珪藻化石を比較的多く含む淡水成粘土を利用していた。また、混和材としての砂粒は、一部の土器胎土を除いて堆積岩類を主体とした砂粒組成であった。

粘土と砂粒の特徴から大きく分類すると、粘土が淡水成で砂粒組成がC群である場合をI a群、以下淡水成でC b群である場合をI b群、淡水成でC d群である場合をI c群、淡水成でD c群の場合をI d群、粘土が水成でC群である場合をII a群、水成でC b群である場合をII b群、水成でC d群の場合をII c群である。

比較的多くの胎土では、富士火山などの起源からなるスコリアを含んでいた。一部のスコリア粒子では、発泡部分において小型の珪藻化石が付着していたことから、水成堆積したスコリアであることが理解される。すなわち、台地を構成するローム堆積物中の風化したスコリアではないことを示す。

比較的大型の軽石を含む胎土が見られたが、これらの胎土中においてスコリアは含まれていない。

土器作りは、基本材料として第一に粘土が必要である。対象となる粘土は、比較的軟質であり、崖面あるいは採掘可能な粘土層の粘土である。

一般的に、土器作りに利用される粘土層は、第四紀中期更新世（約80万年前）以降に堆積した粘土層が対象となる。

東京都町田市相原・小山地区では、縄文時代中期の粘土採掘坑群が6ヶ所検出されたが、約40～50万年前に堆積した多摩ローム層を対象として採掘されたことが分かった（東京都埋蔵文化財センター 2000）。

群馬県伊勢崎市に所在する波志江中宿遺跡では、4世紀代の65基に及ぶ粘土採掘坑が調査され、Aテフラより下位層の沼沢地で堆積した粘土層を対象として採掘されたことが分かった（財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003）。

なお、粘土採掘坑内からは完形のS字甕が2基に1個の割合で出土しているが、胎土と採掘の対象粘土層との比較から、極めて類似した珪藻化石群集を含むことから、これらS字甕がこれら粘土採掘坑の材料で作られた土器であることが示された（藤根・今村 2003）。

No.3の坏形土器をはじめ8試料の胎土中では、海水種珪藻化石あるいは放散虫化石が含まれていたことから、基盤層あるいは下位層において海成層が分布する地域の可能性が高い。なお、66号住居跡カマドの粘土中には放散虫化石や海水種珪藻化石が含まれている。

板橋区教育委員会（1980）は、板橋区赤塚四丁目地内において成増路頭の地質調査を行い、露出する上位層の立川ローム層から下位層の東京層上部層までの堆積物の記載を行っている。東京層上部層は、貝化石を伴う海成層であるが、上位層の成増礫層は珪藻化石から淡水成であることを示している。さらに、上位層の板橋粘土層は、御岳火山のPm-1テフラ（8万年）を含み、少ないものの淡水種珪藻化石を含んでいるとしている。

遺跡周辺では、土器作りに利用できる粘土層は、武蔵野台地を構成する板橋粘土層や東京層のほか、江南台地の相当する粘土層などがある（日本の地質『関東地方』編集委員会編 1988）。

なお、普遍的に1mm前後のスコリア粒子を含み、最大1.7mm（No.14の坏形土器胎土中）に及ぶことから、比較的近い場所で採取された可能性がある。

14号住居跡や66号住居跡カマドから検出された粘土中は、粘土が水成または淡水成粘土であるが、砂

		第1出現群						
		A	B	C	D	E	F	G
		片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第2出現群	a	片岩類	Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab	Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc	Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd	Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De	Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef	Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg

第63表 胎土中岩石片の分類と組み合わせ

粒組成が堆積岩類を主体として深成岩類または火山岩類を伴った組成であるが、隣接する場所から採取した粘土である場合には、隣接地の組成と考えることができる。なお、66号住居跡カマド12層の粘土中には放射虫化石や海水種珪藻化石が含まれていることから、海成層が分布していることが推定される。淡水種珪藻化石を特徴的に含む粘土を用いた土器胎土は、砂粒組成において堆積岩類主体のC群、Cb群、Cd群、あるいはDc群のいずれに組成においても伴うことから、採取場所における砂粒組成のバラツキを示すと思われる。

No.1の坏形土器は、微化石類が少なく砂粒組成において堆積岩類を含むものの赤褐色粒子が多産する胎土である。この土器は、他の多くの土器とは異なった材料であることから、製作地が異なることも考えられる。

5. おわりに

一般的に土器胎土の粘土材料は、微化石類を良好に含むことが多いことから、土器作りは相当良質の粘土層を利用したことが考えられる。ここで対象とした土器胎土は、粘土においては淡水成粘土が多く利用され、堆積岩類を主体とする砂粒組成であることが分かった。また、1mm前後のスコリア粒子を普遍的に含むことから、比較的近接地の可能性が指摘される。

今後、材料として良質の粘土層の広域的な地質調査が不可欠と考え、こうした粘土や砂粒の特徴と比較検討する事により、土器作りあるいは製作地などについての詳細が明らかになるものと考えられる。

[引用文献]

- 安藤一男 1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42,2,73-88.
- 地学団体研究会・地学事典編集委員会編 1981『増補改訂 地学事典』平凡社 1612p.
- 藤根 久 1998「東海地域（伊勢～三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料」『第6回東海考古学フォーラム岐阜大会 土器・墓が語る』108-117.
- 藤根 久・今村美智子 2003「第3節 土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴」『波志江中宿遺跡』日本道路公団 伊勢崎市 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 p.262-277.
- 堀口 万吉 1986「II. 埼玉県の地形と地質」『新編 埼玉県史』5-80.
- 板橋区教育委員会 1980『成増路頭地質調査報告書』文化財シリーズ第32集郷土史料集 116p.
- 小杉正人 1988「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27,1-20.
- 車崎正彦・松本 完・藤根 久・菱田 量・古橋美智子 1996「土器胎土の材料－粘土の起源を中心に－」『日本考古学協会第62回大会研究発表要旨』153-156.
- 日本の地質『関東地方』編集委員会編 1988「日本の地質3 関東地方」共立出版 335p.
- 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003『波志江中宿遺跡』北関東自動車道（高崎～伊勢崎）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第7集 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第283集 289p.
- 東海考古学フォーラム三重大会事務局 2000『S字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム三重大会 249p.
- 東京都埋蔵文化財センター 2000『多摩ニュータウン遺跡-No.247・248遺跡－（本文編）』東京都埋蔵文化財センター調査報告第80集 608p.

II. 土坑内土壌の微細物分析・炭化物同定

藤根 久・鈴木 茂・新山雅弘・植田弥生（パレオ・ラボ）

1. はじめに

今回の調査では、中世以降の用途不明の土坑が複数検出された。これらの土坑内土壌は、白色の微細物を多く含む灰質土壌であった。また、246号土坑出土の銅製品（第93図50）にも灰質土壌が付着していたため、同様に分析を行った。

ここでは、これら土坑内土壌について、湿式洗別を行い粗粒物と細粒物に分けて、残留物の検討を行った。なお、種子同定は、古墳時代後期の住居跡出土の土器内から検出された種実の同定も述べる。

2. 試料と方法

試料は、以下に示すとおりである。

No.1～14（第64表、図版53）は、2φ篩を用いて湿式により篩い分けし、炭化物は、傾斜法により回収した。回収した炭化物は実体顕微鏡を用いて主に種子類について検討した。

さらに、これとは別に試料1～3g程度をトールビーカーに入れ、精製水を加えた後超音波した。5分程度放置した後、粘土分あるいはコロイドをアスピレータにより除いた。なお、この作業は、粘土分やコロイドが無くなるまで続けた。各残渣は、生物用スライドグラスに適量を採取し、簡易のプレパラートを作成した。各プレパラートは、顕微鏡観察して主に植物珪酸体について検討した。

第65表のNo.1～8の試料については、古墳時代後期の住居跡出土の土器内の土壌から検出された炭化物試料であり、これは志木市遺跡調査会においてウォーターセパレーションにより分別されたものである。

3. 結果と考察

各試料状況を実体顕微鏡で観察すると、いずれも白色植物遺体や炭化物を含む灰質物と推定された。洗出しによる2φ篩残渣のうち、傾斜法により回収された炭化物類を観察すると、白色の植物遺体片を含む試料が多い。炭化物を観察すると、種子を含む試料が多く、炭化材を含む試料も多い。

なお、215号土坑試料中には、炭化した昆虫遺体が多く含まれ、いずれも単一種から構成されていた。この昆虫遺体は、貯蔵したイネに加害するコクヌスト（穀盗人）またはコクヌストモドキ（穀盗人擬き）と考えられる（明和高校の森 勇一氏の私信）。

以下では、簡易プレパラートによる微細物の顕微鏡観察、種子同定、炭化材同定に分けて考察する。

〔微細物の顕微鏡観察〕（図版54）

いずれの試料も、イネ科植物の植物体を形成する珪酸体片が含まれている。特に214・215・217・222号土坑および312号土坑では、比較的多産する。また、イネの葉身で形成される機動細胞珪酸体が含まれ、194・215・222号土坑では多く含まれていた。

さらに、イネの穎で特徴的に形成される穎珪酸体が187・214・215・222・237号土坑で多産した。

312号土坑では、ウシクサ族の機動細胞珪酸体が多く含まれていた。なお、ウシクサ族には、ススキ

やチガヤなどの植物が含まれる。

184号土坑と246号土坑銅製品付着において針状珪酸体が多産したが、植物の同定は困難であるが両者の珪酸体は形態的に異なっていた。なお、いずれもイネ科植物の植物体を形成すると考えられる角状珪酸体や針状珪酸体あるいは突起状珪酸体が比較的多く含まれていた。

全体的には、イネ科植物を焼いた際の灰質物であることが理解される。

177・187・214号土坑では、少ないものの完形の珪藻化石が含まれていた。

[種子同定] (第65表、図版55・56)

炭化種実の検討は、古墳時代後期の炭化物試料および中世以降の土壌試料の合計19試料について行った。炭化物試料は、炭化物を主体とした乾燥試料であり、プラスチックケースに保存されていた。土壌試料は、堆積物を水洗洗浄し、炭化物の回収を行った。これら試料について、実体顕微鏡下で炭化種実の採集・同定・計数を行った。

各試料から出土した炭化種実の一覧を第65表に示した。同定されたのは、木本1分類群、草本20分類群であり、木本はスギ、草本はイネ、オオムギ、コムギ、ムギ類、ヒエ、ヒエまたはイヌビエ、ヒエまたはアワ、アワ、エノコログサ属、イネ科、ホタルイ属、タデ属、ギシギシ属、シロザ近似種、ササゲ属、ダイズ近似種、マメ科、カタバミ属、エノキグサ、イヌコウジュ属またはシソ属であった。その他に、不明炭化種実、不明炭化物塊、菌核も得られた。以下に、各試料の炭化種実の記載を示す。なお、一覧表中において、個数の欄が空欄となっている試料は、炭化種実を全く含んでいなかった試料である。

[炭化物試料：古墳時代後期]

134号住居跡 (No.1)：不明炭化物塊が数個であった。

135号住居跡 (No.2)：発泡が著しく、不明である。

135号住居跡 (No.3)：イネ炭化胚乳の完形が1個体、1/2程度の破片が2個体である。

135号住居跡 (No.4)：イネ炭化胚乳の1/2程度の破片が1個体、不明の破片が1個体。不明としたものは、イネ炭化胚乳の可能性があるが、非常に小さい破片であり、同定は控えた。

136号住居跡 (No.5,6,7)：No.5とした11の土器内からは、炭化種実として同定し得るものを全く含んでいない。No.6はイネの炭化胚乳の完形が1個体(状態は非常に悪い)。No.7はイネ炭化胚乳の完形が1個体、タデ属炭化果実の完形が2個体、シロザ近似種炭化種子の完形が1個体と破片が2個体、マメ科炭化種子の完形が1個体である。

146号住居跡 (No.8)：イネ炭化胚乳の完形が、1個体(欠損部あり)、破片が2個体である。

[土壌試料：中世以降]

177号土坑 (1層・No.9)：ヒエが2個体のみであった。

178号土坑 (サンプル①、②・No.10,11)：①はイネ炭化胚乳破片が少量と炭化穎片の基部が多量、ヒエ、ヒエまたはアワ、アワが少量であった。②はイネ炭化胚乳と炭化穎片、ヒエ、アワ、イネ科が多量であり、オオムギ、コムギ、ホタルイ属、タデ属、カタバミ属などが少量であった。他に、菌核が比較的少量に得られた。なお、②は炭化種実が多量に含まれており、イネ、ヒエ、アワ、イネ科、菌核の一部は重量換算により、推定個数を算出した。

184号土坑 (No.12)：炭化種実は今一つ得られなかった。

187号土坑 (No.13)：イネ炭化胚乳と炭化穎片、ヒエ、アワが多量であり、コムギもやや目立った。他

試料番号	遺構名	時期	色	明度、彩度	肉眼的特徴	その他特徴	洗出し内容物			細粒内容物				備考
							植物遺体片	種子類	その他	植物細胞片	イネ機動細胞	イネ類珪酸体	その他	
No.1	177号土坑	平安	にぶい黄褐色	10YR 4/3	白色細粒物少量混じる	細粒焼土混じる		△		△		○	角状珪酸体目立つ	珪藻化石含む
No.2	217号土坑	平安	灰黄色	2.5Y 7/2	白色細粒物多く混じる	炭化材伴う(クリ)				◎	△		突起状珪酸体	
No.3	178号土坑	中世以降	極暗褐色	7.5YR 2/3	白色細粒物少量混じる	小片炭化物混じる	炭化材多い	◎		△		△	角状珪酸体含む	
No.4	184号土坑	中世以降	白色		針状物(または綿状)多く含む					△			針状珪酸体(タイプA)多産	
No.5	187号土坑	中世以降	浅黄橙色(～黒色)	10YR 8/3	白色細粒物多く混じる	細粒炭化物多く混じる	白色遺体片少量	◎		○	△	◎	角状・棒状珪酸体多い	珪藻化石含む
No.6	194号土坑	中世以降	オリーブ褐色	2.5Y 4/4	白色細粒物多く混じる		白色遺体片多い	△		○	○			
No.7	214号土坑	中世以降	明黄褐色	10YR 6/6	白色細粒物多く混じる		炭化材含む	○		◎		◎	角状珪酸体目立つ	珪藻化石含む
No.8	215号土坑	中世以降	にぶい黄褐色	10YR 4/3	白色細粒物多く混じる	大型焼土混じる	白色遺体片多産	○	昆虫	◎	○	◎	突起状珪酸体	
No.9	222号土坑	中世以降	にぶい黄褐色	10YR 6/4	白色細粒物多く混じる	大型焼土混じる	白色遺体片多産	○		◎	○	◎		
No.10	237号土坑	中世以降	黄褐色	2.5Y 5/4	白色細粒物混じる					△		◎	角状珪酸体含む	
No.11	246号土坑	中世以降	黄灰色	2.5Y 4/1	白色細粒物多く混じる	炭化材片含む		△		○	△			覆土3層
No.12	246号土坑	中世以降	灰黄褐色	10YR 5/2	針状物(または綿状)多く含む		炭化ササ類	△		△			針状珪酸体(タイプB)多産	銅製品付着
No.13	312号土坑	中世以降	暗褐色	10YR 3/3	白色細粒物混じる	タケ垂科	白色遺体片少量	△		◎			ウシクサ族機動細胞珪酸体多い	
No.14	257号土坑	中世以降	-	-	-	コナラ節	-	-	-	-	-	-	-	-

第64表 土壌試料の粗粒および細粒部分の特徴

分類群名・部位\試料種別・No.・遺構名		炭化物試料								土 壌 試 料										
		No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	No.15	No.16	No.17	No.18	No.19
		134号 住居跡	135号 住居跡	135号 住居跡	135号 住居跡	136号 住居跡	136号 住居跡	136号 住居跡	146号 住居跡	177号 土坑	178号 土坑	178号 土坑	184号 土坑	187号 土坑	194号 土坑	214号 土坑	215号 土坑	222号 土坑	246号 土坑	312号 土坑
			第30図7	第30図6	第31図12	第34図11	第34図7	第35図13	第50図2	1層	サンプル①	サンプル②					2層		3層	
スギ	炭化種子																	2		
イネ	炭化穎果																	2		
	炭化胚乳			1(2)	(1)		1	1	1(2)		(6)	62(73)		258(2)	1	62(39)	9(5)	15(3)	1(1)	
	炭化穎片										多量	多量		多量	多量	少量	極多量	多量	少量	少量
オオムギ	炭化胚乳											4		4						1
コムギ	炭化胚乳											6		38		2				
ムギ類	炭化胚乳											(1)		4				1		
ヒエ	炭化穎果・胚乳									2	5	243		854		195	4	3		
ヒエまたはイヌヒエ	炭化胚乳																		2	
ヒエまたはアワ	炭化胚乳									1										
アワ	炭化穎果・胚乳									4	121			544		143	3		1	
エノコログサ属	炭化穎																(6)			
イネ科	炭化胚乳											53				13			1	
ホタルイ属	炭化果実											2(1)								
タデ属	炭化果実							2				2								
ギシギシ属	炭化果実															1				
シロザ近似種	炭化種子							1(2)												
ササゲ属	炭化種子													(1)						
ダイズ近似種	炭化種子															1				
マメ科	炭化種子							1												
カタバミ属	炭化種子											1								
エノキグサ	炭化種子																(1)			
イヌコウジュ属またはシソ属	炭化果実													1						
不明	炭化種実													2(8)			11(8)			
不明	炭化物	塊数個	1		(1)															
菌核												52								

数字は個数、()内は半分ないし破片の数を示す

第65表 炭化種実出土一覧

に、オオムギ、ムギ類、ササゲ属、イヌコウジュ属またはシソ属、不明炭化種実が少量得られた。なお、イネ、コムギ、ヒエ、アワの一部は重量換算により、推定個数を算出した。

194号土坑 (No.14)：イネ炭化胚乳が1個と炭化穎片が多量であった。

214号土坑 (No.15)：イネ炭化胚乳、ヒエ、アワが多量であり、イネ炭化穎片、コムギ、イネ科、ギシギシ属、ダイズ近似種が少量であった。なお、イネ、ヒエ、アワ、イネ科の一部は重量換算により、推定個数を算出した。

215号土坑 (2層・No.16)：イネ炭化穎片が非常に多量であり、炭素が抜けて白色になったものが目立った。他に、イネ炭化胚乳、不明炭化種実がやや目立ち、ヒエ、アワ、エノコログサ属、エノキグサも得られた。

222号土坑 (No.17)：イネ炭化胚乳が比較的目立ち、炭化穎片が多量であった。他に、スギ炭化種子、イネ炭化穎果、ムギ類、ヒエが少量であった。

246号土坑 (No.18)：ヒエまたはイヌビエ、アワ、イネ炭化胚乳と炭化穎片が少量であった。

312号土坑 (No.19)：オオムギが1個とイネ炭化穎片が少量であった。

以下では、栽培植物が同定されたため各時代の栽培状況について考察する。

[古墳時代後期の栽培状況]

検討した結果、多くの試料からイネ炭化胚乳が検出され、古墳時代後期において、当遺跡でイネが利用されていたと考えられる。136号住居跡出土のNo.7のみ、イネ以外にタデ属、シロザ近似種、マメ科が得られ、これらが利用されていた可能性も否定はできないが、利用法などは不明であり、イネなどの作物に付随するなどして雑草が紛れ込んだ可能性も考えられる。

[中世以降の栽培状況]

同定された分類群のうち、栽培植物と考えられるのは、イネ、オオムギ、コムギ、ヒエ、アワ、ササゲ属、ダイズ近似種であり、イネ、ヒエ、アワは178・187・214号土坑で非常に多産した。イネは多くの試料で穎片が目立ち、胚乳にも穎が一部張り付いているものもしばしば見られた。また、ヒエやアワも、穎果や胚乳に穎が一部張り付いたものが見られた。このことから、これらは、元は穎を被った穎果の状態であり、胚乳は洗浄の過程などで穎が取れてしまったのだと予想される。穎果(脱穀前)であったことを考慮すれば、これら栽培植物の種実類は、調理などが済んだ段階のものではなく、利用される以前のものが各土坑に埋積したのだと考えられる。

上記分類群以外で得られたのは、栽培植物の可能性のあるイヌコウジュ属またはシソ属、不明 (No. 13,16)、木本のスギ、概ね乾き気味の場所の雑草と予想されるエノコログサ属、イネ科、タデ属、ギシギシ属、シロザ近似種、カタバミ属、エノキグサ、低湿地の雑草のホタルイ属などである。これらは、各土坑の周辺に生育していたか上記作物に付随するなどして土坑内に混入したのではないと思われる。なお、各土坑の性格については、栽培植物の多産から、貯蔵穴の可能性が考えられる他、栽培植物以外にも雑草類も含まれることから、ゴミ穴などの可能性も考えられるのではないだろうか。

主な炭化種実の形態記載

イネ *Oryza sativa* Linn. 炭化穎果、炭化胚乳、炭化穎片

完全に穎を被った炭化穎果は少ないが、炭化胚乳の表面には穎の一部が張り付いて残っているものが

しばしば見られる。胚乳は、明らかな未熟果（しいな）がかなり目立つ。穎は、いずれも細かな破片であり、計数・採集は困難であるため行っていない。なお、178号土坑サンプル①では、穎の基部が目立った。

オオムギ *Hordeum vulgare* Linn. 炭化胚乳

コムギに比べて細長く大型の傾向である。長楕円形で下端はやや尖り気味。一方の面には、基部から頂部にかけて一本の溝が走る。

コムギ *Triticum aestivum* Linn. 炭化胚乳

丸こく、楕円形で厚みがあり、断面も楕円形ないしほぼ円形。一方の面には、基部から頂部にかけて一本の溝が走る。なお、ムギ類としたものは、破片や状態が悪いため、オオムギともコムギとも識別し得なかったものである。

ヒエ *Echinochloa crus-galli* P.Beauv. var. *fumentacea* Trin. 炭化穎果、炭化胚乳

アワに比べ、穎が完全に残っているものは少ないが、一部穎が張り付いたものはしばしば見られる。大きさは、アワよりやや大型の傾向であるが、ばらつきが大きく、イヌビエが混じっている可能性もある。胚は幅が広く、長さは果実長の2/3程度を占める。臍はうちわ形。なお、ヒエまたはイヌビエ、ヒエまたはアワとしたものは、状態が悪く、各々の識別が困難であったものである。

アワ *Setaria italica* Beauv. 炭化穎果、炭化胚乳

大半は、胚乳であるが、穎果や穎が一部張り付いたものもしばしば見られる。穎の表面には、横方向に波打つアワ特有の隆起が見られる。胚乳の先端部はやや平らな円形で中央部が凹むものがしばしばみられた。胚部分の長さは果実長の2/3程度。臍は幅が狭く細長い楕円形。なお、エノコログサ属と紛らわしいものも稀に見られたが、厳密に識別しえず、アワに含めた。

エノコログサ属 *Setaria* 炭化穎

215号土坑2層では、アワよりも明らかに小型で細長い穎が得られた。これのみエノコログサ属としてアワと区別した。

イネ科 Gramineae 炭化胚乳

ヒエやアワの胚乳と比べると、明らかに小型で細長い。胚の占める割合は、果実長の1/2以下である。ヌカキビかと思われるものも稀に見られた。

タデ属 *Polygonum* 炭化種実

二面のものと三稜のもののが得られた。二面のものは、長さ1.3mm、幅1.1mm程度の卵形。断面は丸みを帯び、楕円形で稜は不明瞭である。三稜のものは、爆ぜていて変形しているが、長さ・幅共に1.3mm程度と思われる。

ササゲ属 *Vigna* 炭化種子

アズキの仲間カリョクトウの仲間であるが、子葉内面に幼根と初生葉が保存されておらず、識別は困難である。長さ3.6mm、幅2.3mm程度。

ダイズ近似種 *Glycine* cf. *max* 炭化種子

長さ7.6mm、幅4.6mm、厚さ4.2mm程度の大型の種子である。中央には、長さ2.3mm程度の楕円形の臍が位置する。

マメ科 Leguminosae 炭化種子

莢と思われる部位が少しへばり付いている。長さ2.3mm、幅1.7mm程度。やや片寄った位置に小さな円

形の臍がある。ササゲ属などの栽培種とは明らかに異なり、大きさも小さいので、おそらく野生種ではないかと思われる。

イヌコウジュ属またはシソ属 *Mosla and/or Perilla* 炭化果実

大きさ1.4mm程度で野生種のイヌコウジュ属か栽培種のシソ属か識別し得ない。

不明 Unknown 炭化種実、炭化物塊

炭化種実は、187号土坑と215号土坑2層から得られ、いずれも同一種と思われる。長さ5～6mm、幅4mm前後の倒卵形。一方の面には、縦方向の低い筋(隆起)が多数入る。もう一方の面には、縦方向の溝状の筋が中央に一本入る。炭化物塊は、134号住居跡出土の長甕から得られた。土器の内面に付着した炭化物であり、強い光沢を持つ部分が見られる。穀類などの小種実の集合である可能性があるが、発泡が非常に著しく、原形は留めていない。形態からの識別は困難であり、不明である。

菌核

178号土坑サンプル②から得られた試料は腐った樹木の表面などに付く菌の集合である。大きさ、形などは様々であるが、出土したものは、球形(仁丹状)であり、これがいくつか集合したものも見られる。

[炭化材の樹種同定] (第64表、図版57)

試料は、平安及び中世以降の土坑3基から出土した炭化材である。

試料は、炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

同定した炭化材の残り破片は、志木市遺跡調査会に保管されている。

217号土坑からはクリ、257号土坑からはコナラ節、312号土坑からはタケ亜科が検出された(No. 2, 14, 13)。

これらの炭化材がどのような経緯で炭化し、土坑内に埋積したものか不明であるが、検出されたこの3分類群は、平安及び中世以降の遺跡から普通に木製品や燃料材として検出されているものであった。クリとコナラ節は、2～4cm角の破片であり、燃料材として使われた薪や炭の破片か、不要な樹木の枝材を燃やした残渣かも知れない。タケ亜科(竹類・笹類)は、稈(茎)の厚み約2mmで直径約6mmの細いものと、稈の厚み約3mmで太い稈の破片と推定されるものであった。どちらも維管束の周囲を囲む維管束鞘の発達はやや悪く、笹類の稈であるかも知れない。

いずれの樹種も、製品が燃えた残りか、または周辺に生育していたものを利用した可能性もある。

以下に、各樹木分類群の材組織の記載をする。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版57-1a~1c (217号土坑)

年輪の始めに中型の管孔が密に配列し除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は単列同性である。

コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus*. subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版57-2a~2c (257号土坑)

年輪の始めに中型の管孔が配列し除々に径を減じ、晩材部では薄壁・角形で小型の管孔が火炎状・放

射方向に配列する環孔材である。道管の穿孔は単穿孔、放射組織は単列のものと広放射組織がある。

タケ亜科 Gramineae subfam. Bambusoideae イネ科 図版57-3a・4a (312号土坑)

稈（茎）の厚み約 2 mm で直径約 6 mm の細いもの（図版57-3a）と、稈の厚み約 3 mm で太い稈の破片と推定されるもの（図版57-4a）があった。どちらも維管束の周囲を囲む維管束鞘の発達はやや悪く、笹類の稈であるかも知れない。

III. 動物遺体の分類・同定

黒澤 一男 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

本稿では、動物遺体について分類・同定を行なった。以下に貝類・哺乳類について個別に説明する。

2. 貝類

今回分析した試料は185点であり、その内容を第66表に示した。マツカサガイが最も多く出土し、ハマグリとオオタニシが多く出土する特徴を持つ。以下に主要な分類群について説明する。地点別で見ると、21号井戸跡からの出土が175点と全体の95%程度を占めている。なお、個体数については、二枚貝は殻頂の残存する個体を、巻貝は芯が2巻以上残存する個体を計数した。

オオタニシ (図版58-1~3)

オオタニシは胎児殻と思われる個体も含めると、全体の約18%を占める。殻高が1 cm以下の胎児殻が多く出土している。また、大型の完形のものでは殻高が4 cm程度となる。

オオタニシは日本の各地の淡水域に分布している。

マツカサガイ (図版58-4・5)

マツカサガイは全体の半数以上の52%を占める。それらの殻長はおよそ3 cm程度の個体が多く出土している。

マツカサガイは、日本各地に分布し、小石の多い河川や池の底に生息している。

ハマグリ (図版58-6)

ハマグリは29%を占める。それらの多くが殻頂周辺のみ破損した個体であるため、それらの殻長は計測できないが、残存している殻頂周辺部を現生標本と比較すると4 cm程度の個体が出土している。

ハマグリは、日本周辺の沿岸域に広く分布し、潮間帯から水深20m前後の砂泥底に生息する。干潟などから採取できることから多くの遺跡で比較的多く産出する。ハマグリは、比較的容易に採取することができ、一般的な食用の貝類のひとつである。

3. 哺乳類

哺乳類からはウマとヒトが同定された。その内容は第67表に示す。

312号土坑からは、小型のウマの中手骨または中足骨が出土した。非常に脆くなっており、骨幹部は破片化している。遠位端および近位端が部分的に残存していた。近位端幅は35mm程度、遠位端幅は30mm程度であることから1.1~1.2m小型の在来馬と考えられる。

191号土坑からは、ヒトの歯27本と、頭蓋骨または下顎骨の破片と思われる骨片が出土した。歯の咬耗をみると、少なくとも2個体の歯が混ざっている。咬耗が弱いものと、象牙質が一部露出する状態のもの2種類で、前者は21本、後者は臼歯のみの6本が検出されている。咬耗の弱いもの下顎切歯や犬歯は小さく華奢であることから女性のものと考えられ、年齢は咬耗の状態から20歳代と考えられる。咬耗が進んでいるものは40歳以上の熟年または老年のものと考えられる。

採取遺構名			191号土坑	223号土坑	312号土坑	21号井戸跡	23号井戸跡	Total
巻貝類								
オオタニシ	<i>Cipangopaludina japonica</i>					12		12
オオタニシ(胎児殻)						22		22
巻貝類(アカニシ?)		Fr	+	+	+	+	+	+
二枚貝類								
マツカサガイ	<i>Inversidens japonensis</i>	L				54		97
		R				43		
シオフキガイ	<i>Mactra veneriformis</i>	R					1	1
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>	L				26	3	53
		R				18	6	
Total			+	+	+	175	10	185

第66表 貝類出土量

試料番号	遺構名	種類	部位	年齢	その他特徴	備 考
1-1	191号土坑	ヒト	歯	若		左上顎歯5本(第1・2切歯, 犬歯, 第1小臼歯, 第1大臼歯) 右上顎歯5本(第2切歯, 第1・2小臼歯, 第1・2大臼歯) 左下顎歯5本(第1切歯, 犬歯, 第2小臼歯, 第1・2大臼歯) 右下顎歯6本(第1切歯, 犬歯, 第1・2小臼歯, 第1・2大臼歯)
1-2	191号土坑	ヒト	歯	老	咬耗 一部象牙質露出	左上顎歯3本(第1~3大臼歯), 右上顎歯2本(第1・2大臼歯) 大臼歯1本
1-3	191号土坑	ヒト	骨片			頭蓋骨 or 下顎骨
2	270号土坑	不明	骨片			
3	312号土坑	ウマ	中手 or 中足骨			

第67表 動物遺体一覧

謝辞

同定用の現生骨格標本は、国立歴史民族博物館西本研究室の所蔵標本を観察させていただいた。また同定には西本豊弘教授、太田敦子氏にご助力いただいた。ここに感謝の意を表する。

【参考文献】

- 吉良哲明 1954『原色日本貝類図鑑(増補改訂版)』保育社 p.240
渡部忠重・奥谷 司 1954『学研生物図鑑 貝II』学習研究社 p.294

IV. 鉄鍋の保存処理に係る工程

(株) 東都文化財保存研究所

1. 処理前調査

遺物の現状を肉眼ならびに実体顕微鏡を用いて、錆の状態や土の付着状態を観察する。遺物の表面に付着した有機質（木質・布目痕など）の有無を調査する。

保存処理作業を開始する前に遺物の写真撮影を行い、保存処理前の状態を記録する。

2. クリーニング

処理前調査をもとに不必要な錆や土を除去する。

錆や土の状況の応じて、デザインカッター・メス・ブラシ・筆・刷毛・エアブラシ・アルコールなどを使い分ける。エアブラシとは、圧力空気とともに酸化アルミニウムの微粒子をペン先状のノズルから噴出されることにより錆や土を除去する機械である。エアブラシは、遺物に発生した亀裂、錆膨れ内部。遺物表面の細かい錆のクリーニングに有効な機械である。

3. 脱塩処理

金属製遺物の錆を進行させる要因として水分のほか塩分や酸があげられる。これらの要因を除去し錆を抑制させるために脱塩処理を行う（第68表）。

ソックスレー装置（東京国立文化財研究所考案の脱塩装置）により脱塩処理を行う。ソックスレー装置は、遺物を入れた脱酸素の洗浄槽内におよそ80度に加熱した純水を定期的に交換して、採取した水に抽出された陰イオンをイオンメーターにより定量し、その値が0ppmに近くなるまで繰り返し続ける。処理中には、洗浄槽内に窒素ガスを毎分1リットル吹き込み脱気することも同時に行う。窒素ガスの役割は、洗浄槽内を窒素ガス雰囲気とし腐食の進行を防ぐとともに、その泡で純水を攪拌して常に新しい水を遺物に接触することにある。

4. 樹脂含浸

遺物本体の強化と防錆をはかるために樹脂含浸を行う。遺物を減圧下でアクリル樹脂を含浸する。減圧含浸することで遺物内部までアクリル樹脂（パラロイドB-72、溶剤はキシレン）をしみこませ、遺物本体の強化をはかる。遺物をアクリル樹脂によりコーティングすることで、遺物と外気との遮断をはかり大気中の酸素・湿気、汚染物質との接触をなくすことをはかる。また、欠損部の復元に際して遺物本体に復元のためのエポキシ樹脂やアクリル絵具が直接付着しないように遺物を保護する。

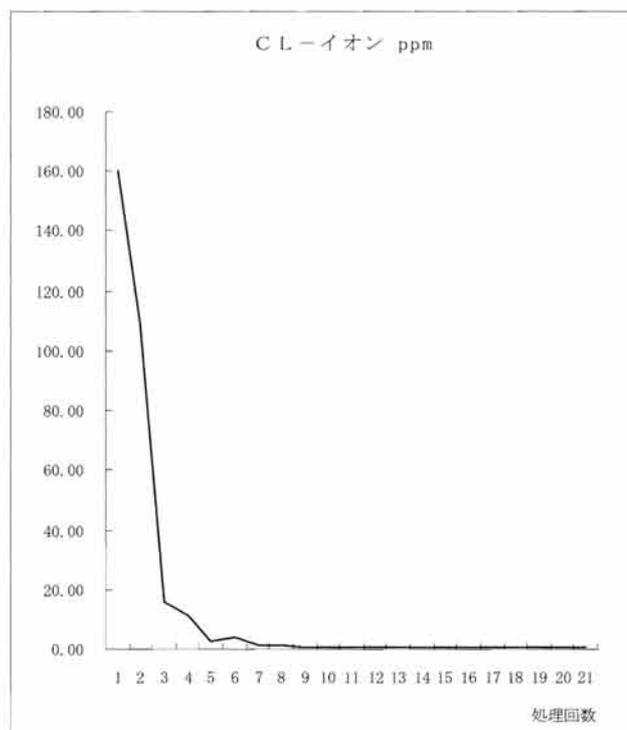
5. 接合・樹脂充填

化学的処置により防錆処理と強化の終了した遺物を、本来の形状に戻すために破片を接合する。破片の接合には溶剤系接着剤（商品名セメダインC）、エポキシ系（商品名セメダインハイスーパー）、シアノアクリレート系接着剤（商品名アロンアルファ）などを用いる。遺物が欠損している場合や亀裂部分

処理回数	CL-イオン ppm
1	160.00
2	109.00
3	16.00
4	11.30
5	2.90
6	4.00
7	1.27
8	1.55
9	0.77
10	0.68
11	0.77
12	0.61
13	0.64
14	0.57
15	0.51
16	0.45
17	0.70
18	0.61
19	0.74
20	0.79
21	0.47

遺物点数	鉄鍋1点
総数量	5,890.0g
洗浄水交換時間	24時間毎
洗浄水温度	70~80℃
一回の洗浄水量	40ℓ
窒素ガス	1ℓ/min (夜間停止)

TOAイオンメーター IM-40S



第68表 234号土坑出土鉄製品脱塩グラフ

にはエポキシ樹脂を充填する。

6. 彩色

エポキシ樹脂を充填した部分や復元部分を顔料、アクリル樹脂エマルジョン等を用いて周囲と違和感のない程度に補彩する。

7. 処理後調査

全体の調整が終了した後一定期間観察し、化学的処理（防錆・強化）や考古学的処理（接合・復元）が確実に終了したかを確認する。その後、処理前に準じた写真撮影を行い、修理中に得られた情報や修理履歴（どのような材料、方法を用いて処理を行ったのか）を保存処理報告書にまとめる。

保存処理後の写真は、図版39に掲載した。

圖 版



1. 調査区近景



2. 表土剥ぎ風景



3. 旧石器時代遺物出土状態



4. 旧石器時代遺物出土状態



5. 基本土層(A-A')



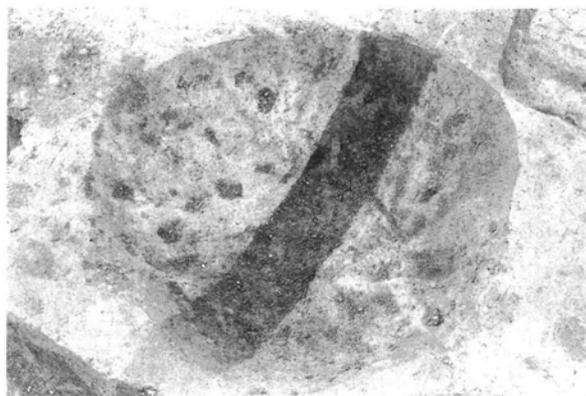
6. 4号炉穴遺物出土状態



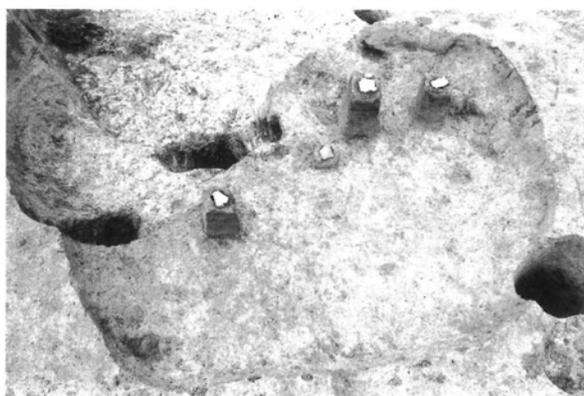
7. 4号炉穴遺物出土状態



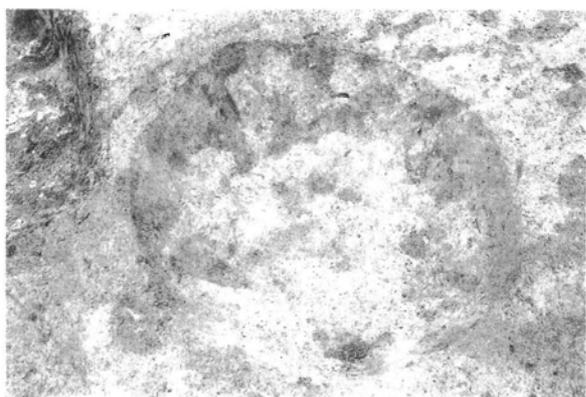
8. 4号炉穴



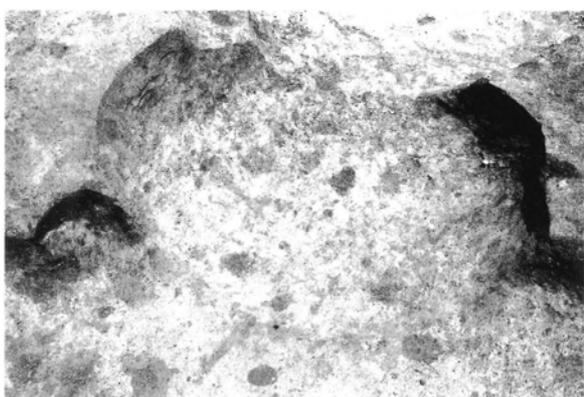
1. 195号土坑



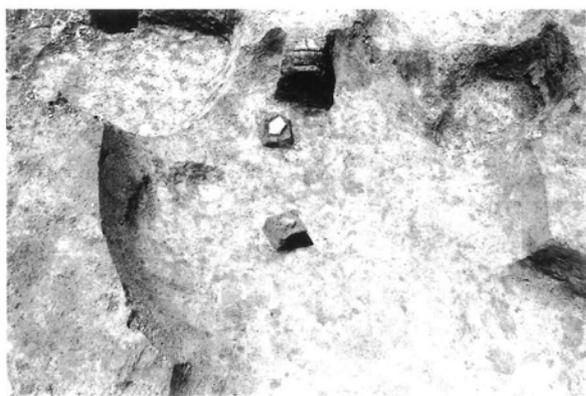
2. 251号土坑



3. 252号土坑



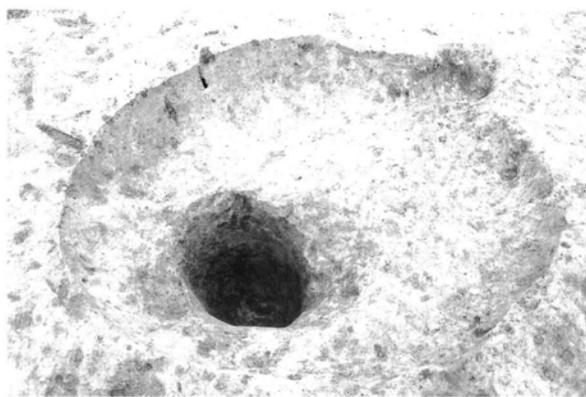
4. 284号土坑



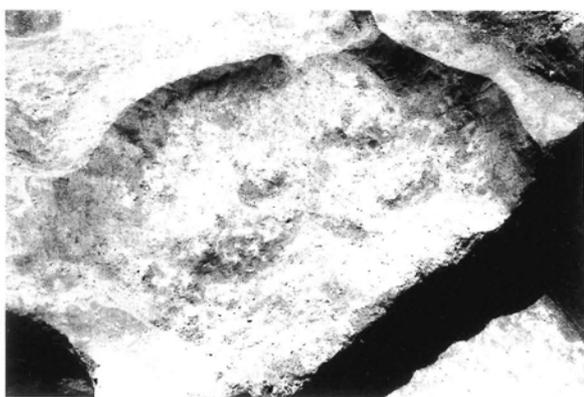
5. 286号土坑



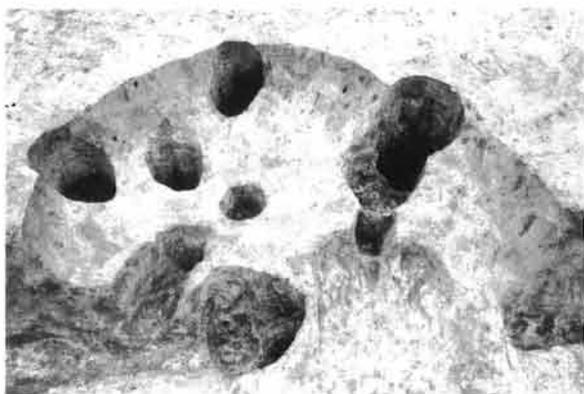
6. 287号土坑



7. 290号土坑



8. 291号土坑



1. 314号土坑



2. 315号土坑



3. 320号土坑



4. 321号土坑



5. 326号土坑



6. 327号土坑



7. 328号土坑



8. 329号土坑



1. 131・132号住居跡



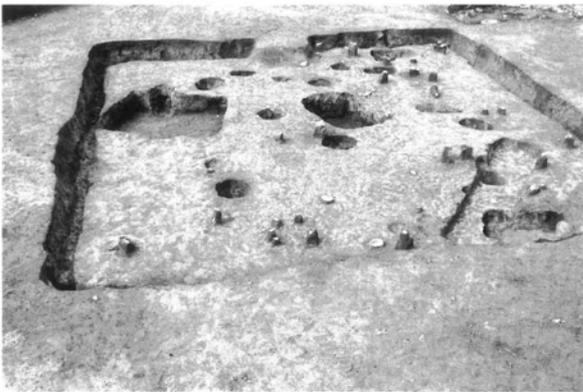
2. 131・132号住居跡貯蔵穴



3. 132号住居跡遺物出土状態



4. 132号住居跡カマド



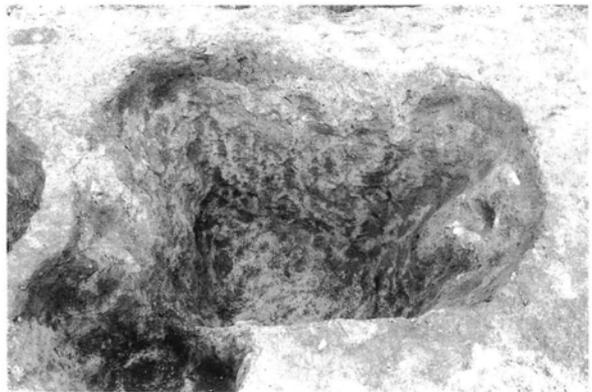
5. 133号住居跡遺物出土状態



6. 133号住居跡遺物出土状態



7. 133号住居跡カマド



8. 133号住居跡貯蔵穴



1. 134号住居跡遺物出土状态



2. 134号住居跡遺物出土状态



3. 134号住居跡遺物出土状态



4. 134号住居跡遺物出土状态



5. 134号住居跡貯藏穴



6. 134号住居跡



7. 135号住居跡遺物出土状态



8. 135号住居跡遺物出土状态



1. 136号住居跡遺物出土状態



2. 136号住居跡貯蔵穴遺物出土状態



3. 136号住居跡カマド遺物出土状態



4. 136号住居跡カマド



5. 136・137号住居跡



6. 137号住居跡炭化材出土状態



7. 137号住居跡遺物出土状態



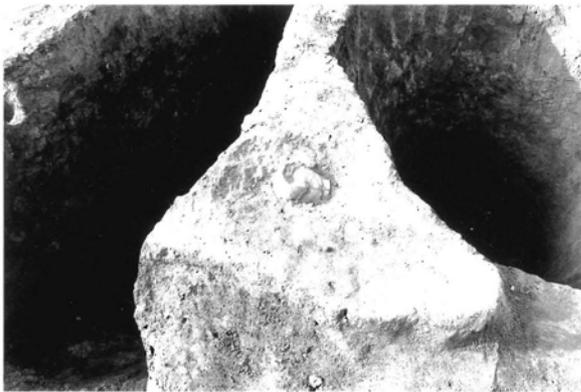
8. 137号住居跡遺物出土状態



1. 140号住居跡遺物出土状態



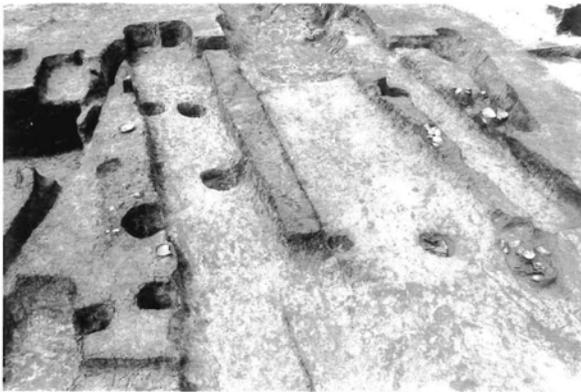
2. 140号住居跡遺物出土状態



3. 140号住居跡カマド遺物出土状態



4. 140号住居跡



5. 141号住居跡遺物出土状態



6. 141号住居跡遺物出土状態



7. 141号住居跡遺物出土状態



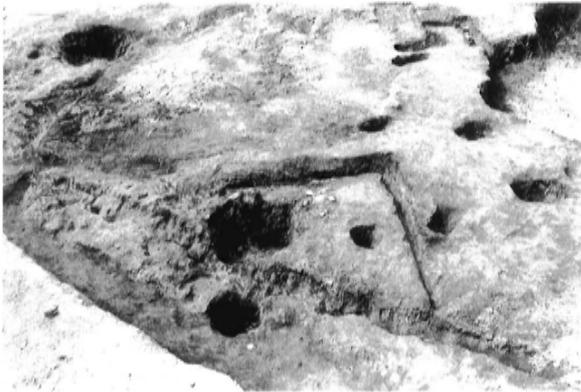
8. 141号住居跡貯蔵穴遺物出土状態



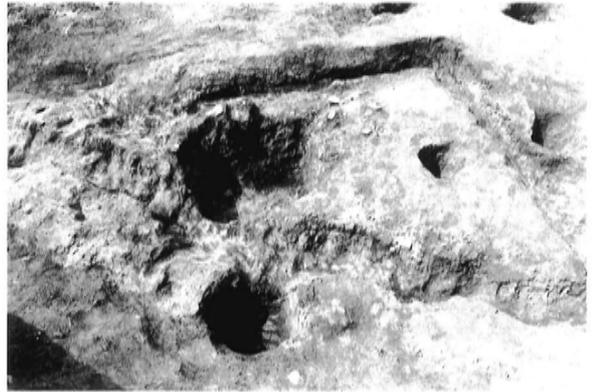
1. 142号住居跡遺物出土状態



2. 142号住居跡貯蔵穴遺物出土状態



3. 142・144号住居跡



4. 144号住居跡遺物出土状態



5. 143号住居跡遺物出土状態



6. 143号住居跡遺物出土状態



7. 143号住居跡炭化材・粘土出土状態



8. 143号住居跡



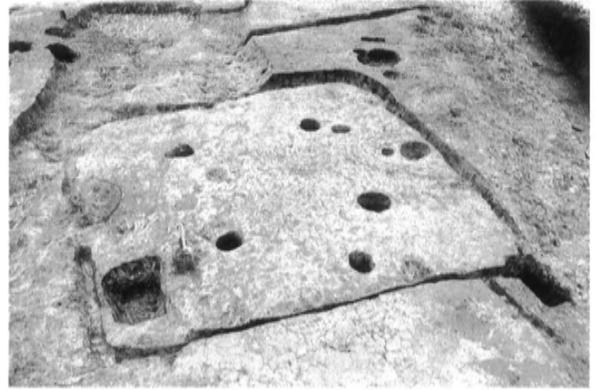
1. 145号住居跡遺物出土状態



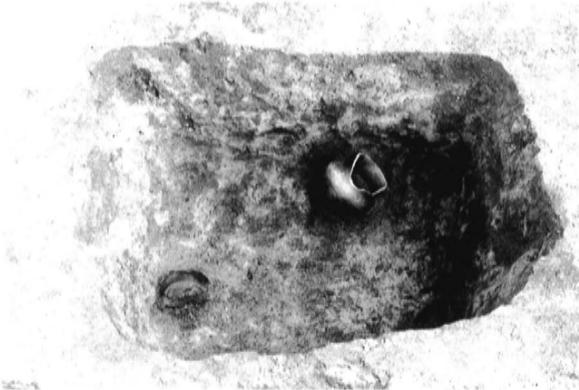
2. 145号住居跡貯蔵穴



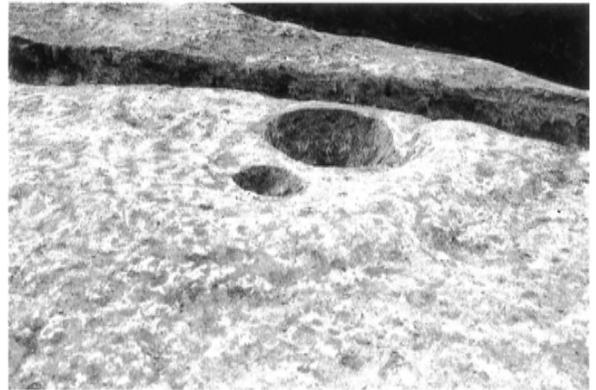
3. 145・146号住居跡遺物出土状態



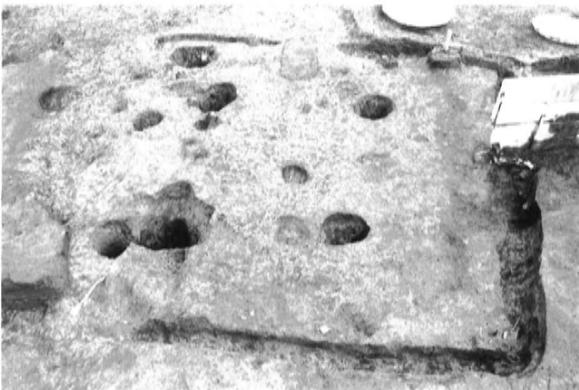
4. 145・146号住居跡



5. 146号住居跡貯蔵穴遺物出土状態



6. 146号住居跡入口ピット付近



7. 147号住居跡



8. 147号住居跡掘り方



1. 148号住居跡遺物出土状態



2. 148号住居跡遺物出土状態



3. 148号住居跡遺物出土状態



4. 148号住居跡遺物出土状態



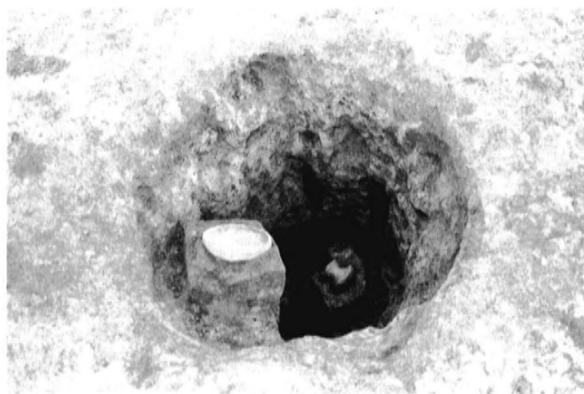
5. 148号住居跡遺物出土状態



6. 148号住居跡遺物出土状態



7. 148号住居跡遺物出土状態



8. 148号住居跡遺物出土状態



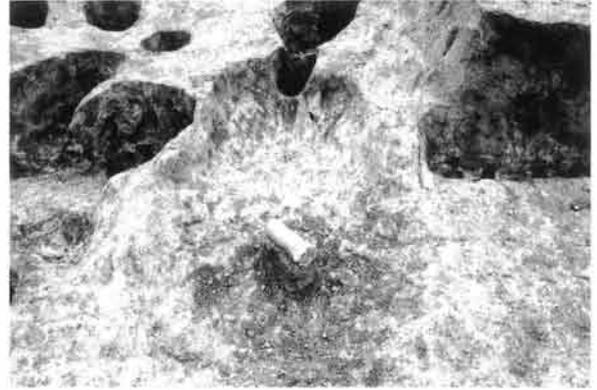
1. 148号住居跡貯蔵穴遺物出土状態



2. 148号住居跡貯蔵穴



3. 148号住居跡カマド遺物出土状態



4. 148号住居跡カマド



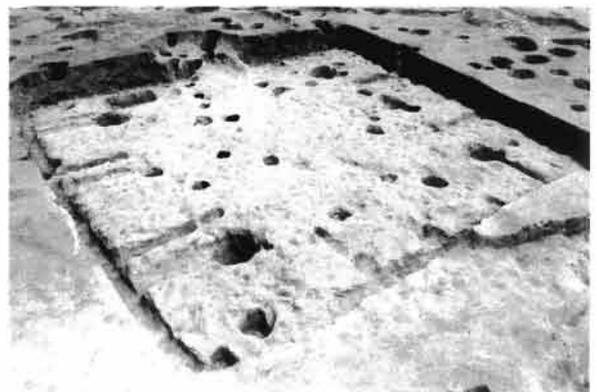
5. 148号住居跡入口ピット付近



6. 148号住居跡



7. 148号住居跡間仕切り溝



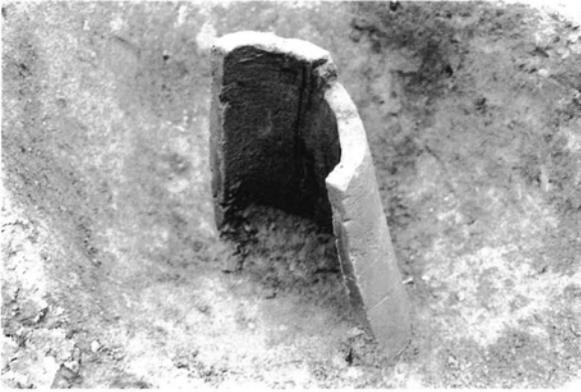
8. 148号住居跡掘り方



1. 138号住居跡遺物出土状態



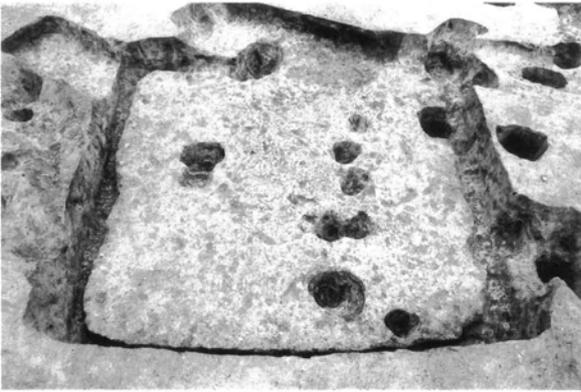
2. 138号住居跡カマド遺物出土状態



3. 138号住居跡カマド瓦出土状態



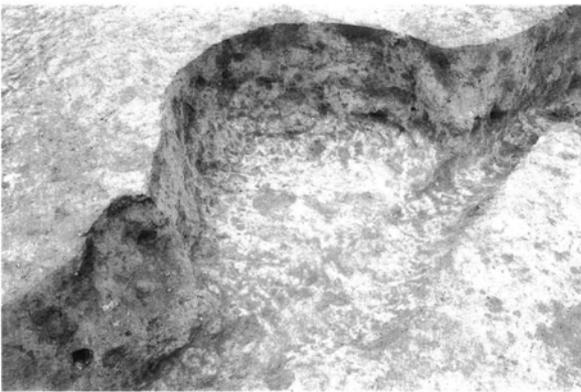
4. 139号住居跡遺物出土状態



5. 150号住居跡



6. 151号住居跡



7. 156号土坑



8. 177号土坑



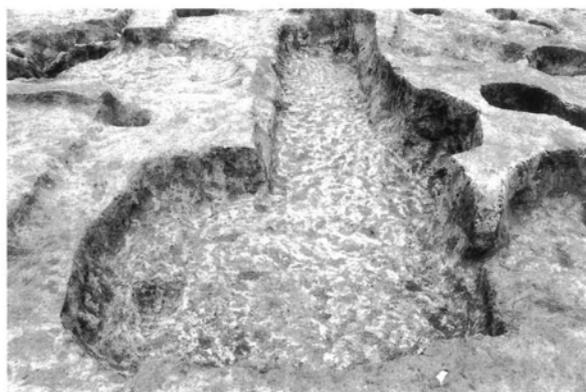
1. 190号土坑



2. 193号土坑



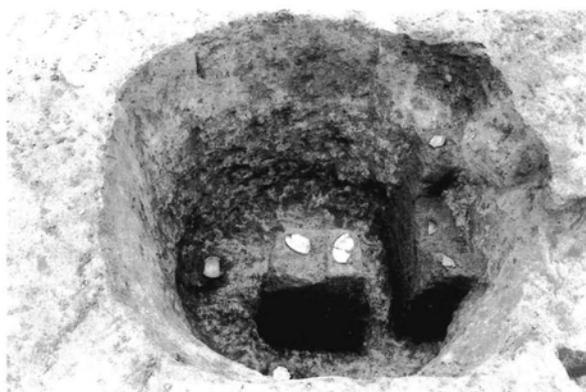
3. 218号土坑



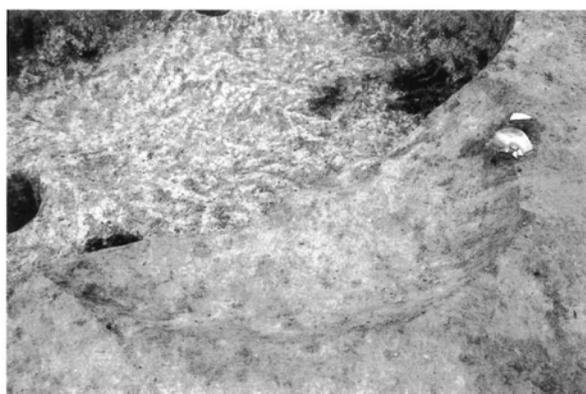
4. 228号土坑



5. 247号土坑



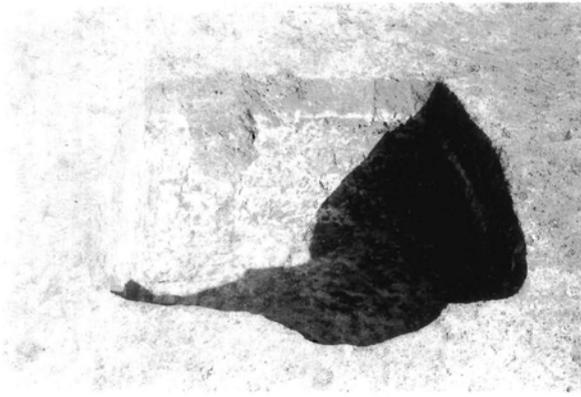
6. 255号土坑



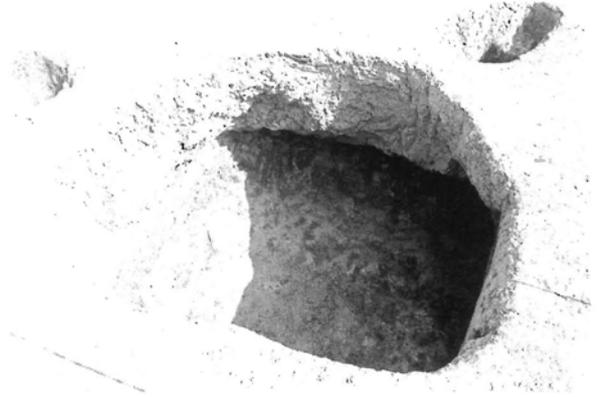
7. 259号土坑



8. 259号土坑遗物出土状态



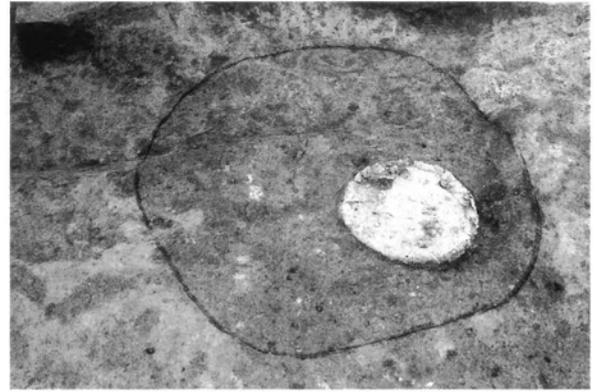
1. A群1類 146号土坑



2. A群1類 155号土坑



3. A群1類 184号土坑



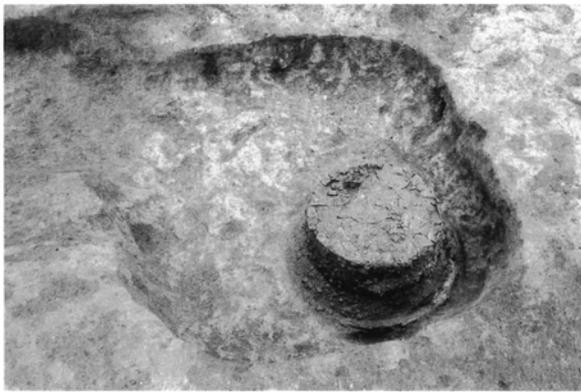
4. A群2類 234号土坑 (精査前)



5. 234号土坑鉄鍋出土状態



6. 234号土坑鉄鍋出土状態



7. 234号土坑



8. 234号土坑鉄鍋取り上げ作業風景



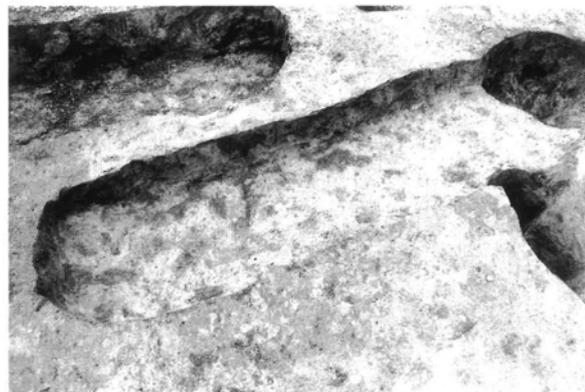
1. B群1類 (B・C-3) グリッド付近



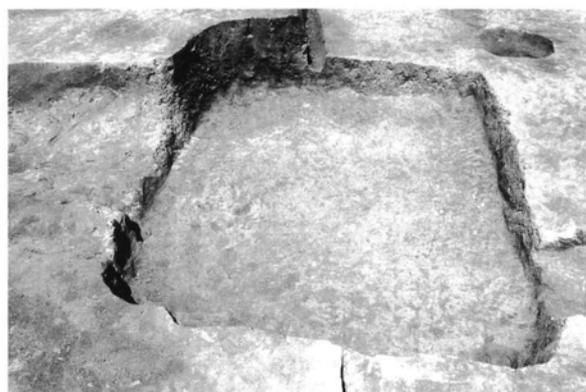
2. B群1類 297・299・300号土坑



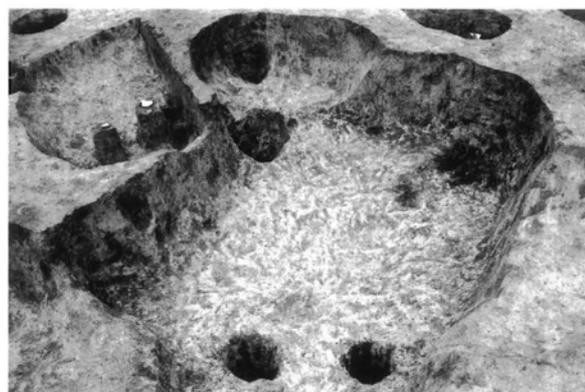
3. B群2類 194号土坑



4. B群2類 256号土坑



5. B群3類 192号土坑



6. B群3類 257号土坑



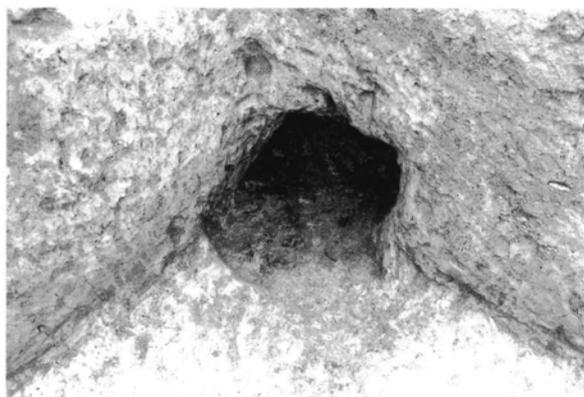
7. B群3類 311号土坑



8. B群3類 319号土坑・D群 325号土坑



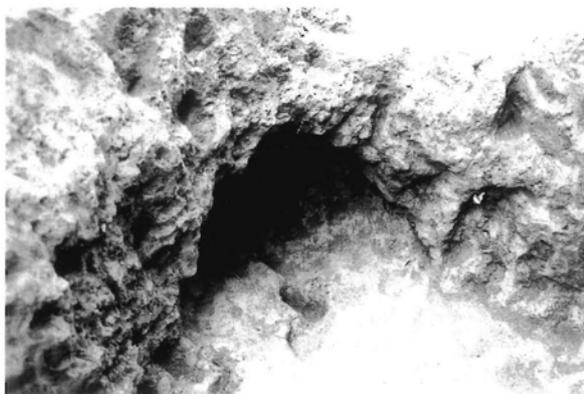
1. B群4類 178号土坑



2. 178号土坑火床部



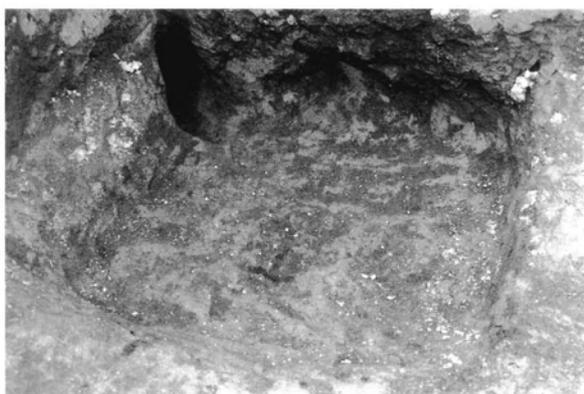
3. B群4類 179号土坑



4. 179号土坑火床部



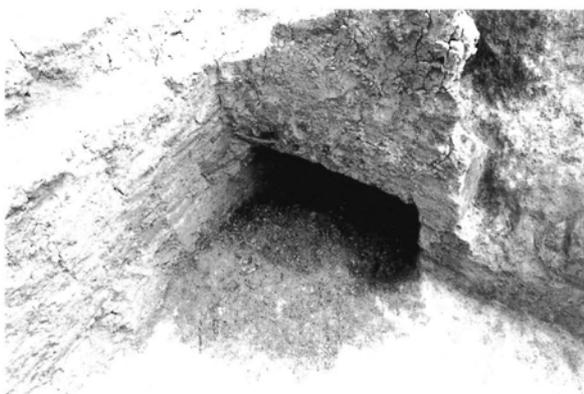
5. B群4類 187号土坑



6. 187号土坑火床部



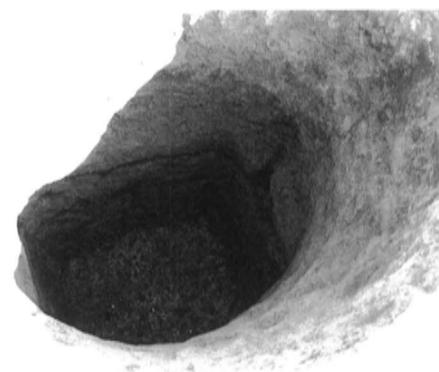
7. B群4類 215号土坑



8. 215号土坑火床部



1. C群 180号土坑



2. C群 196号土坑



3. C群 224号土坑



4. B群1類 322号土坑・C群 323・324号土坑



5. D群 147号土坑



6. D群 186号土坑



7. D群 318号土坑



8. 土坑群測量風景



1. E群1類 191号土坑



2. 191号土坑竖坑部



3. E群1類 223号土坑



4. 223号土坑連絡部



5. E群1類 270号土坑



6. 270号土坑竖坑部



7. E群1類 312号土坑



8. 312号土坑



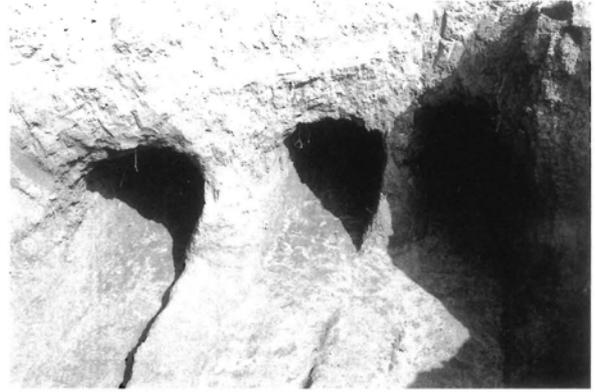
1. E群2類 145号土坑豎坑ロームブロック



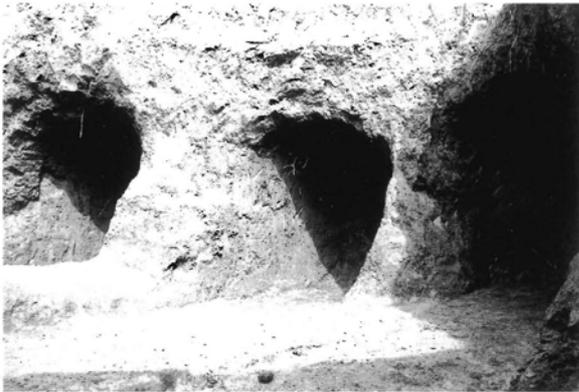
2. 145号土坑 重機による発掘風景



3. 145号土坑主体部



4. 145号土坑主体部C～E



5. 145号土坑主体部C～E



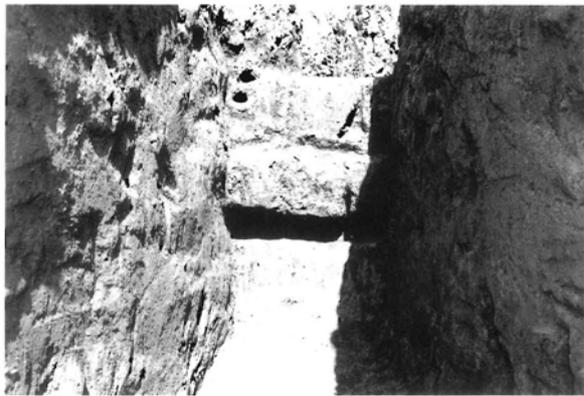
6. 145号土坑主体部G



7. 145号土坑主体部G



8. 145号土坑照明5



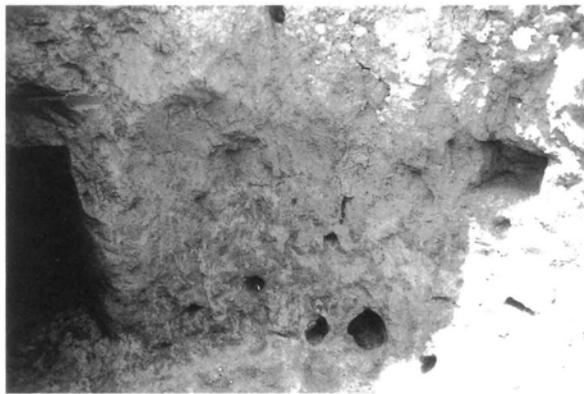
1. E群2類 183号土坑入口A 足掛け状の階段



2. 183号土坑連絡横坑部



3. 183号土坑主体部Aと主体部B連絡部



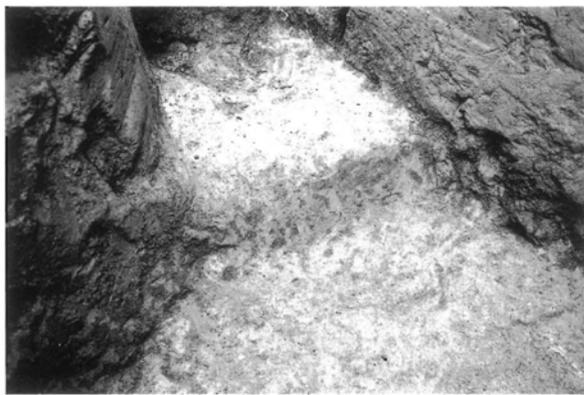
4. 183号土坑主体部A



5. 183号土坑照明2・3



6. 183号土坑照明1



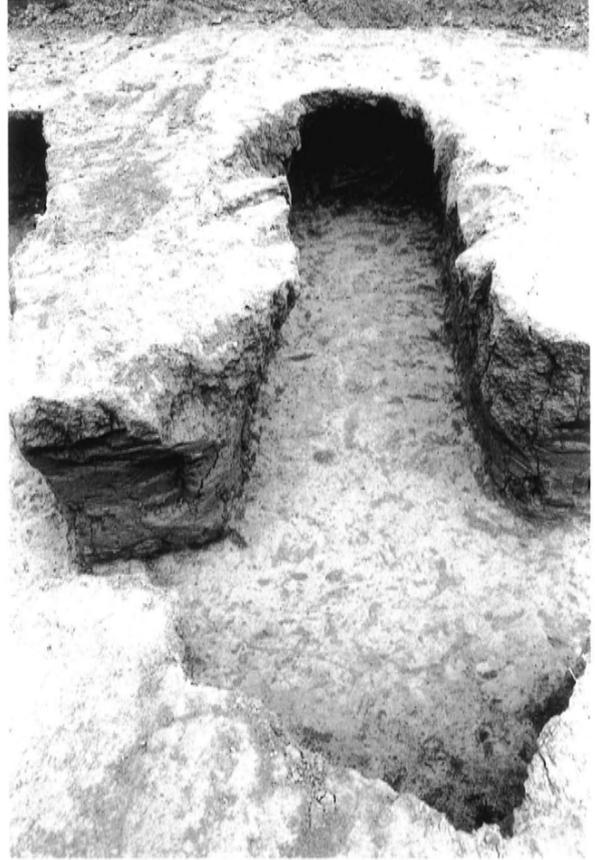
7. 183号土坑主体部B連絡部



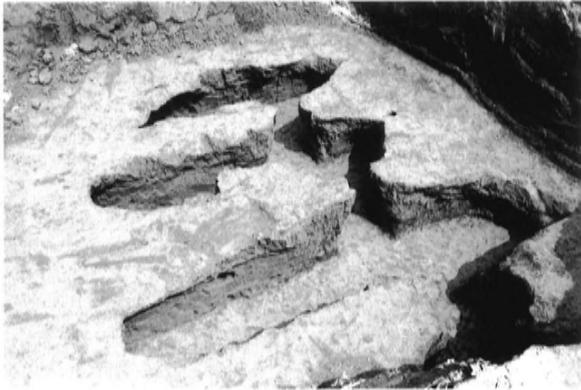
8. 183号土坑主体部B



1. E群2類 188号土坑



3. 188号土坑主体部B



2. 188号土坑



4. 188号土坑主体部A



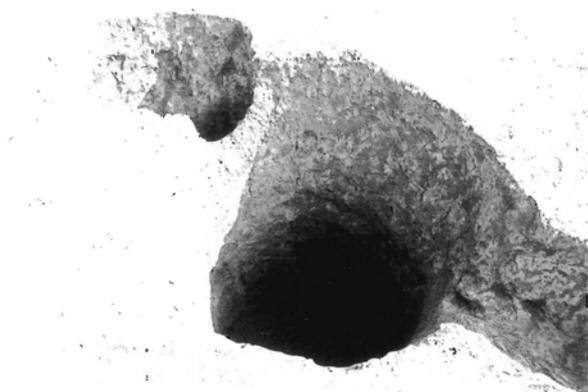
5. 188号土坑照明2



6. 188号土坑主体部B



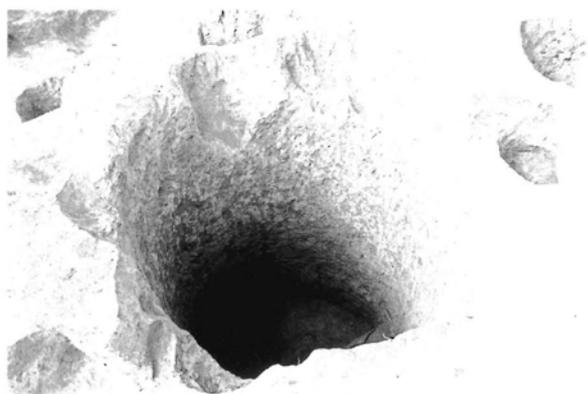
7. 188号土坑主軸橫坑部



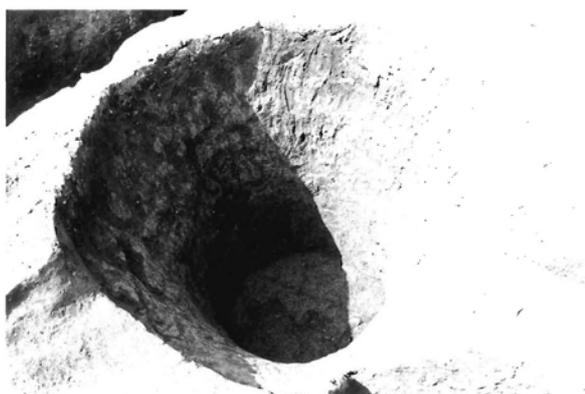
1. 17号井戸跡



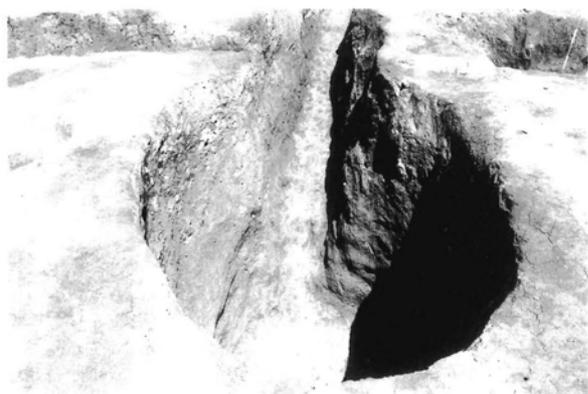
2. 18号井戸跡



3. 19号井戸跡



4. 21号井戸跡



5. 22号井戸跡



6. 22号井戸跡スロープ部



7. 22号井戸跡



8. 22号井戸跡発掘風景



1. 1号溝跡 (E-3~5) グリッド



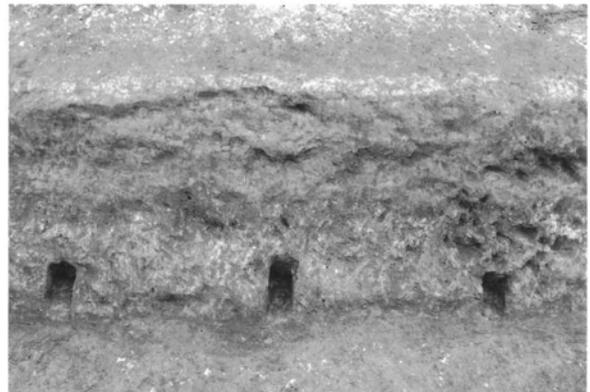
2. 1号溝跡発掘風景



3. 1号溝跡硬化部分 (E-3・4) グリッド



4. 1号溝跡ピット列 (E-3・4) グリッド



5. 1号溝跡ピット列



6. 1号溝跡発掘風景



7. 1号溝跡 (E-1・2) グリッド



1. 1号溝跡 (E-1・2) グリッド



2. 1号溝跡 (E-1・2) グリッド



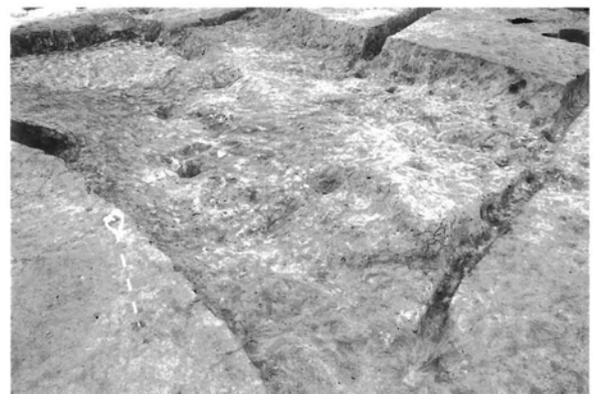
3. 1号溝跡硬化部分 (E-3) グリッド



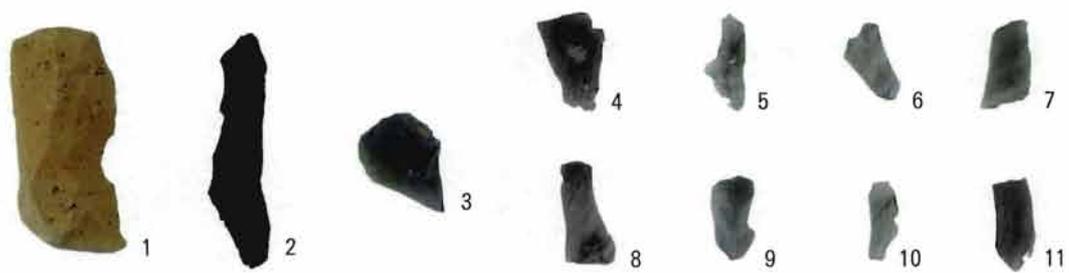
4. 30号溝跡 (B-3・4) グリッド



5. 31号溝跡



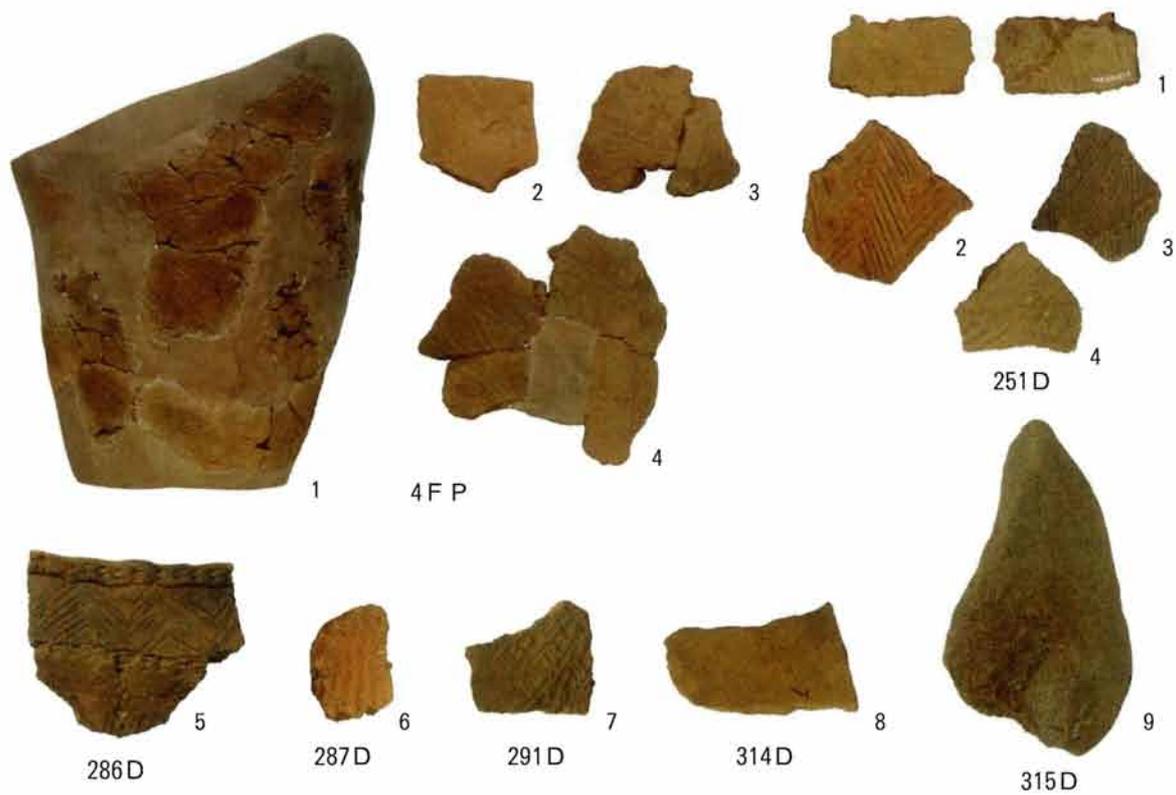
6. 32号溝跡 (D-4) グリッド



1. 第1文化層（第IV層上部）出土石器



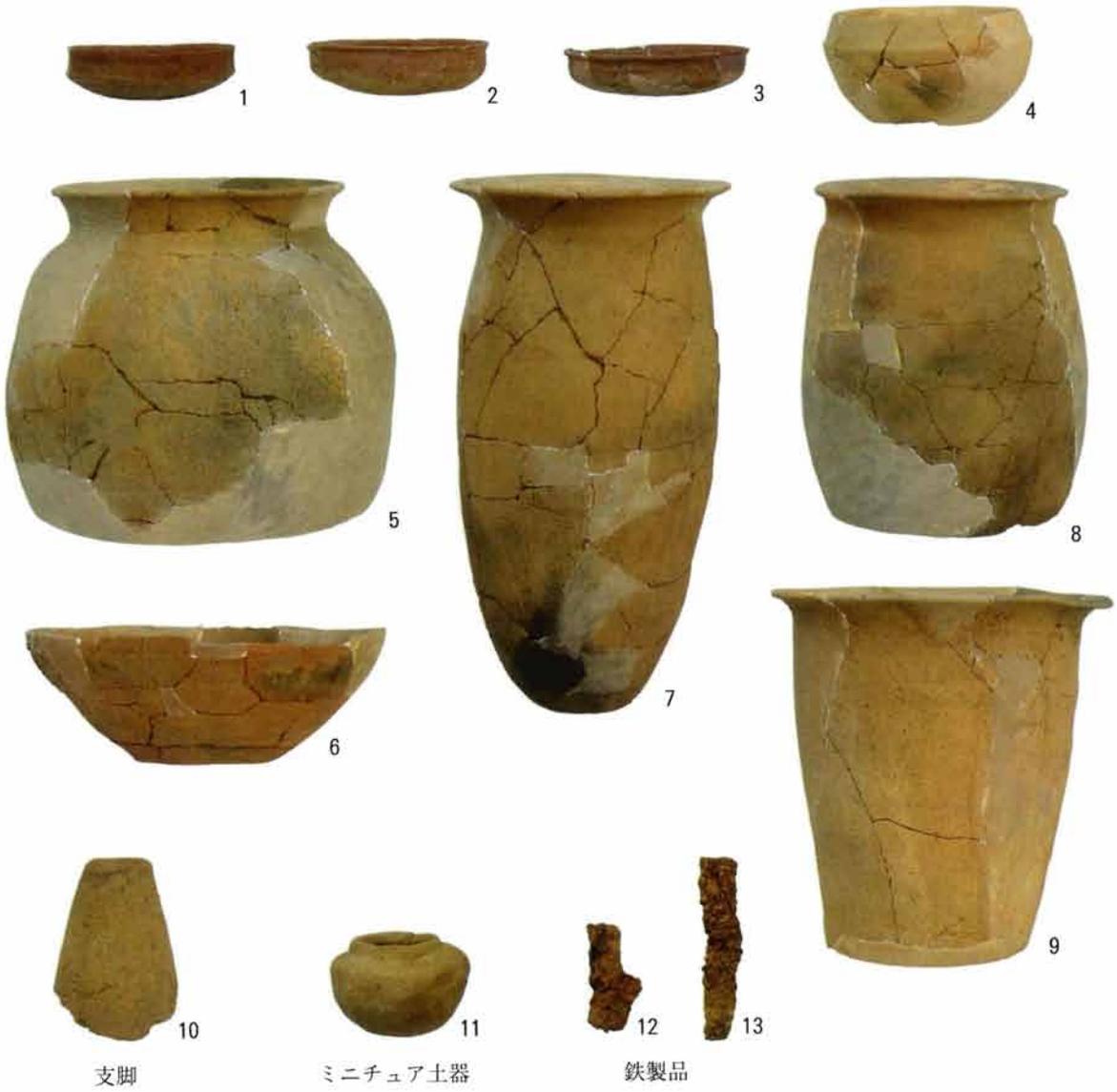
2. 第2文化層（第VII層）出土石器



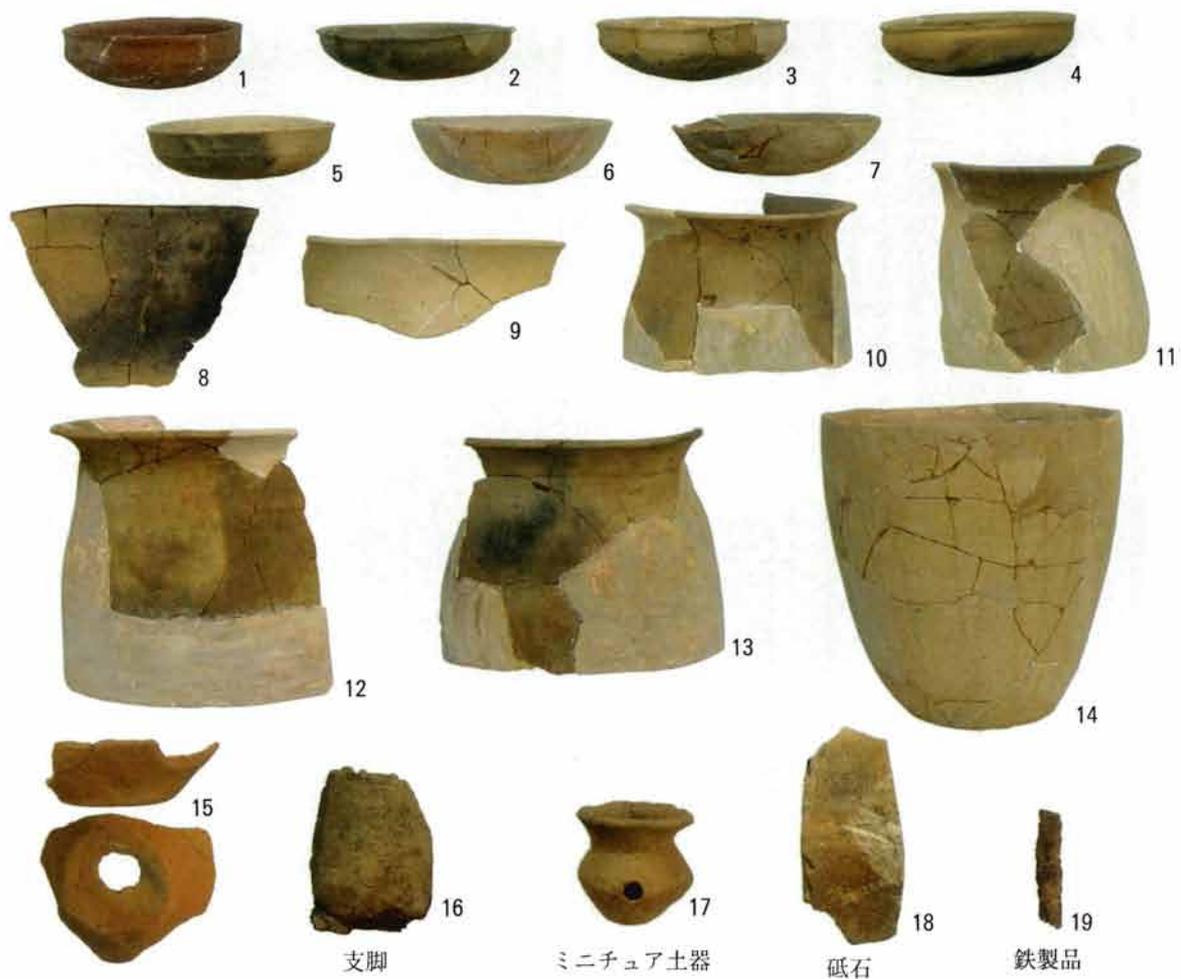
3. 4号炉跡・土坑出土遺物



1. 131号住居跡出土遺物



2. 132号住居跡出土遺物



1. 133号住居跡出土遺物



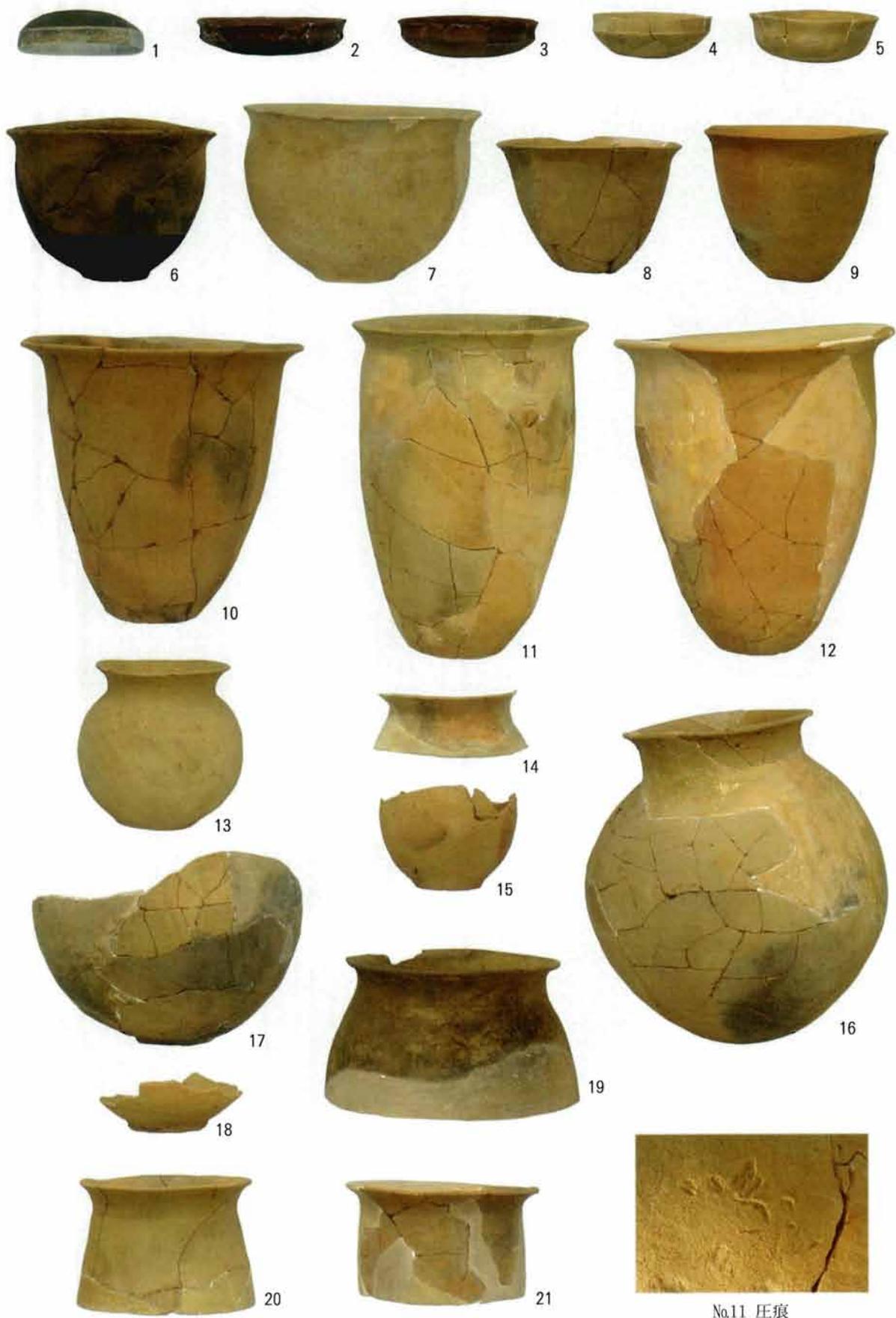
2. 134号住居跡出土遺物 1



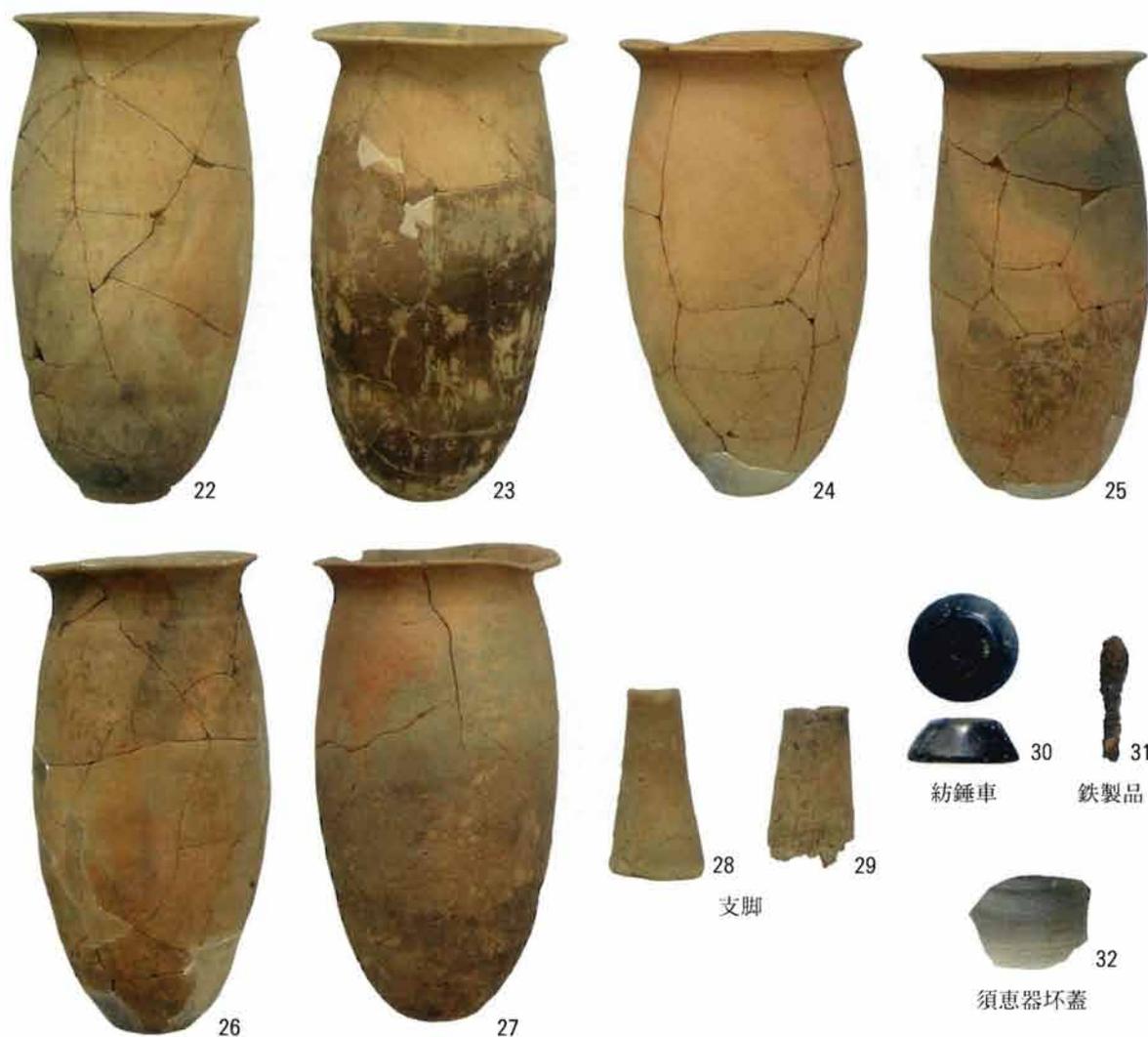
134号住居跡出土遺物 2



135号住居跡出土遺物



136号住居跡出土遺物 1



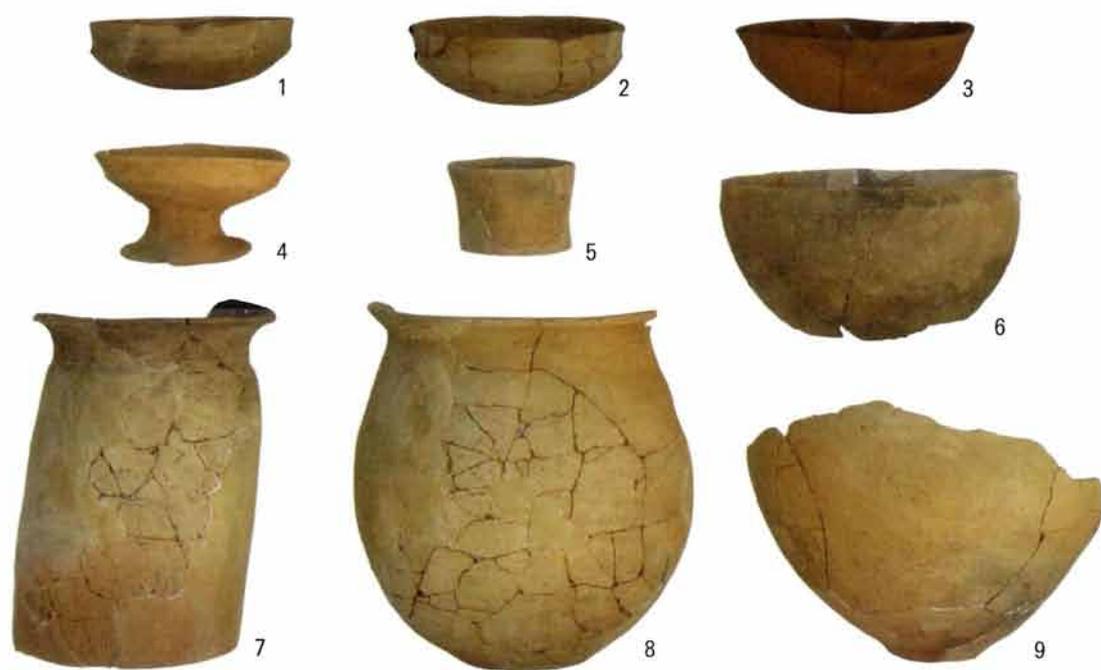
1. 136号住居跡出土遺物 2



2. 137号住居跡出土遺物



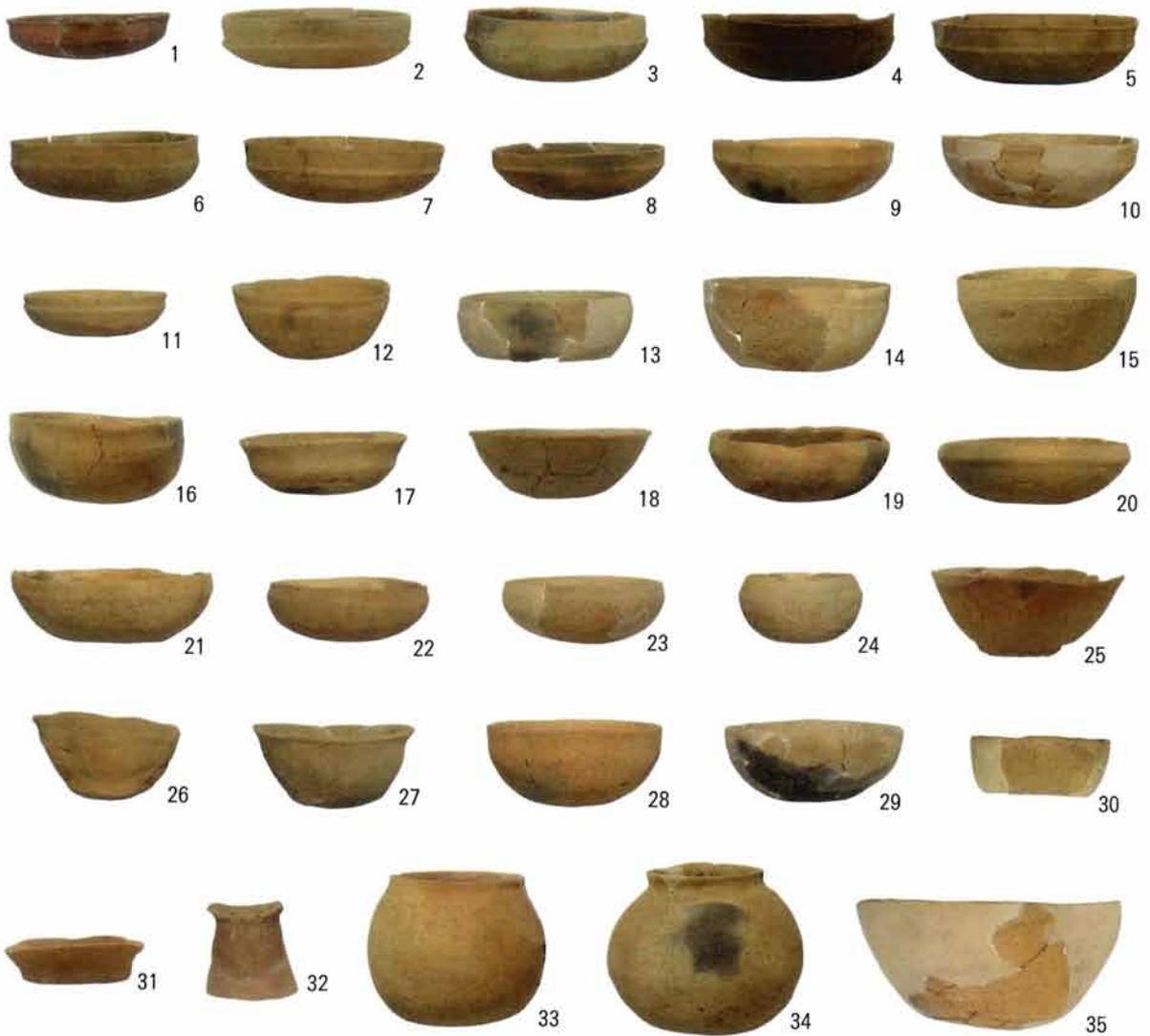
1. 140号住居跡出土遺物



2. 141号住居跡出土遺物



1. 146号住居跡出土遺物



2. 148号住居跡出土遺物 1



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46

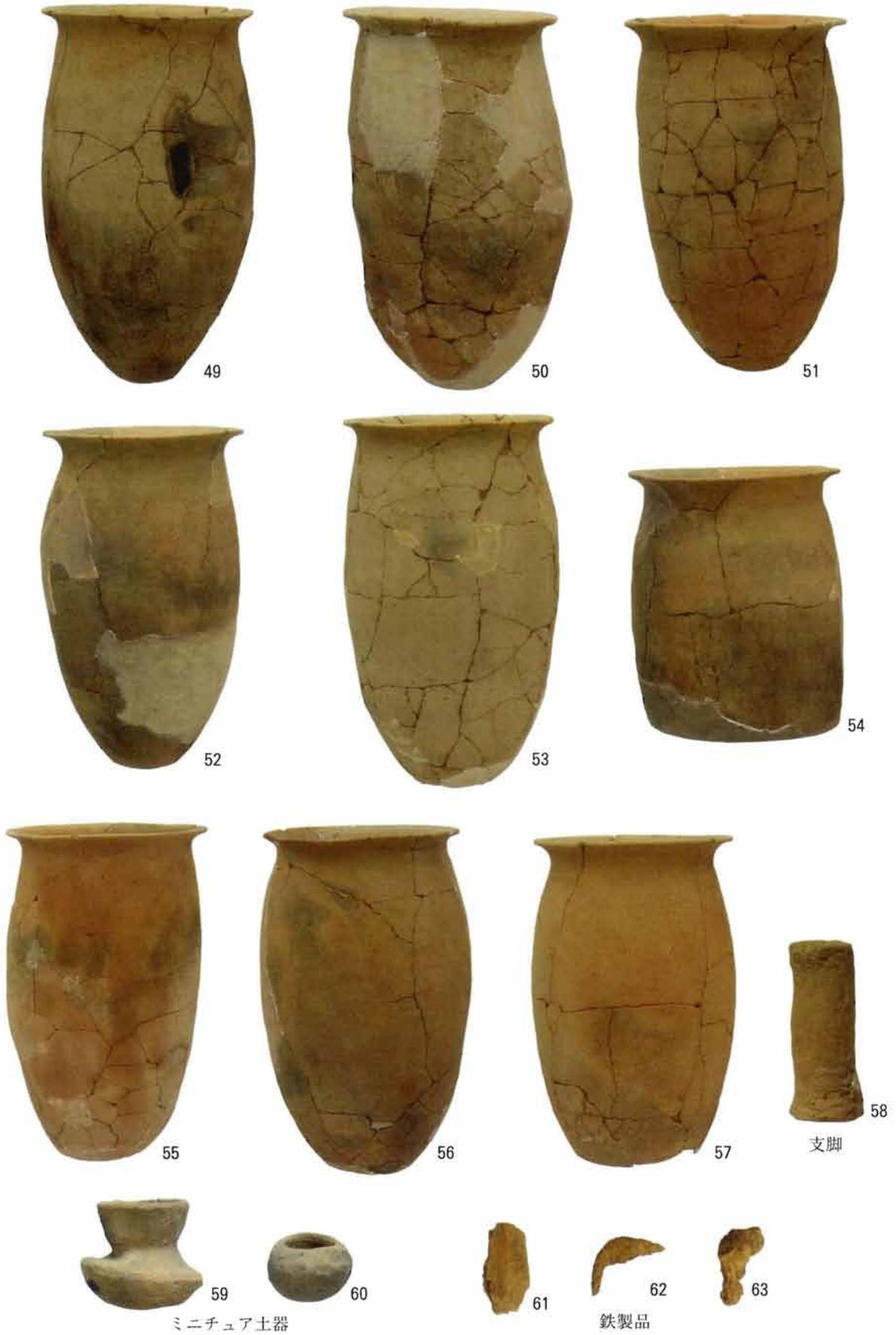


47



48

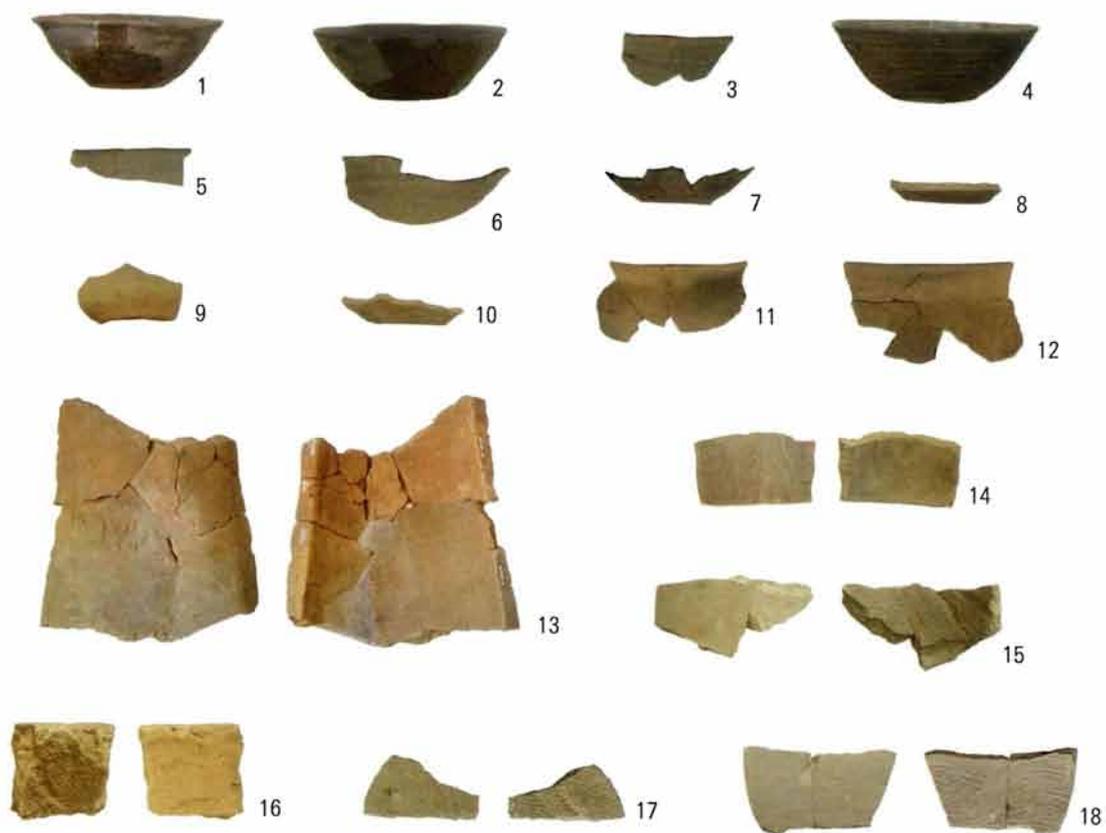
148号住居跡出土遺物 2



148号住居跡出土遺物 3



1. 138号住居跡出土遺物



2. 139号住居跡出土遺物



1. 149~151号住居跡出土遺物



2. 土坑出土遺物



3. ピット出土遺物

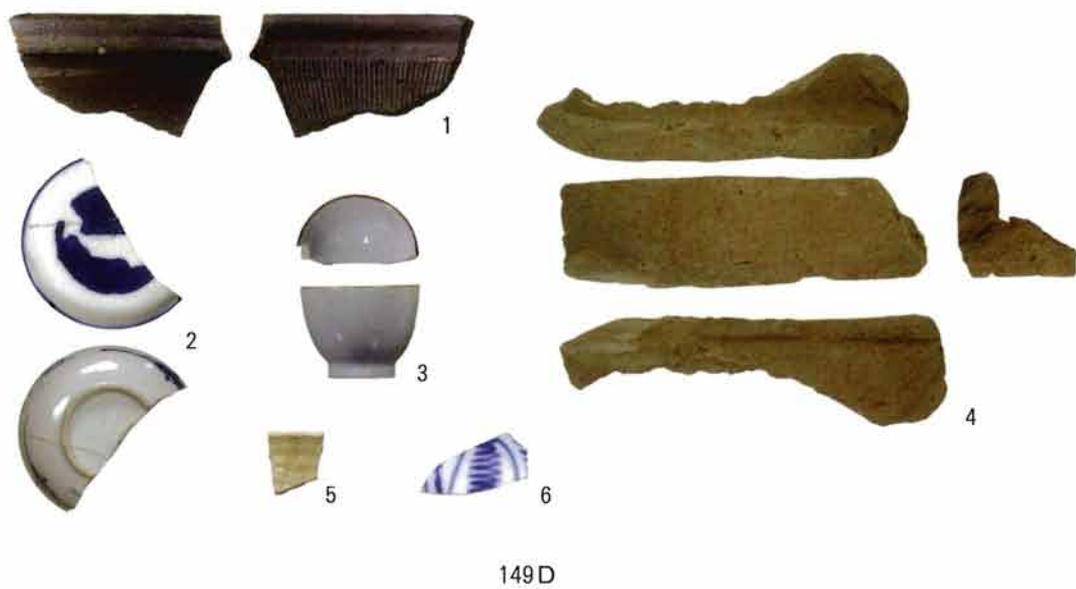


保存処理後



出土状態

234号土坑出土鉄鍋



土坑出土陶磁器·土器 1



160D



164D



166D



168D



1



2



3



4

179D



1

183D



1

184D



1

188D



2



1

192D



1



2

200D



3



4



1

201D



2



2

206D



1

210D



2



1

213D



1

214D



1

216D



1

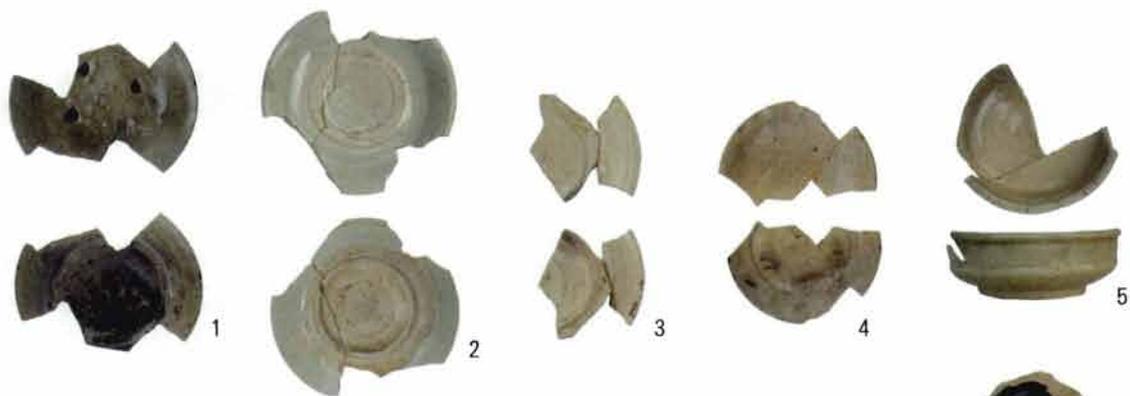


2

221D



3



223D



229D



234D



237D



248D



246D



276D



272D



296D



309D



312D



319D





1. 17号井戸跡出土陶器



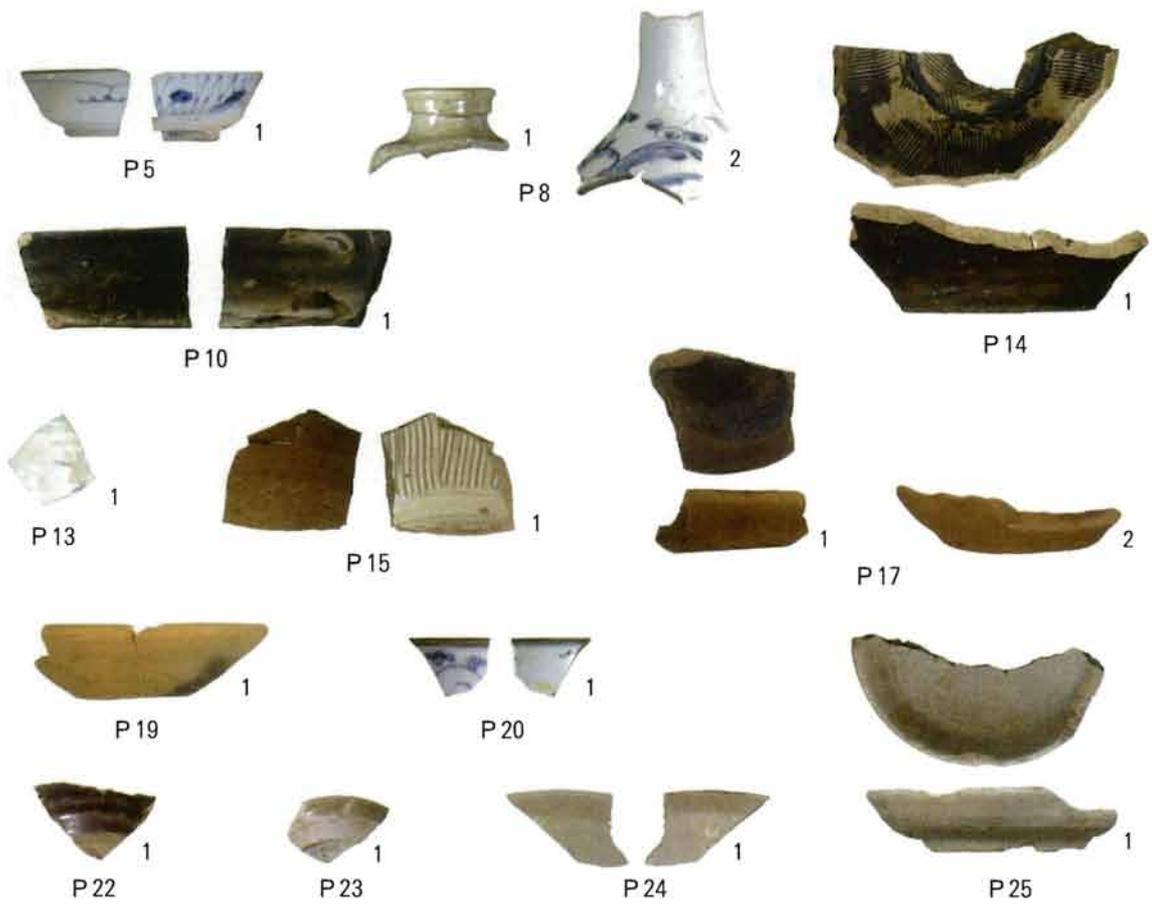
2. 21・24号井戸跡出土陶器・土器



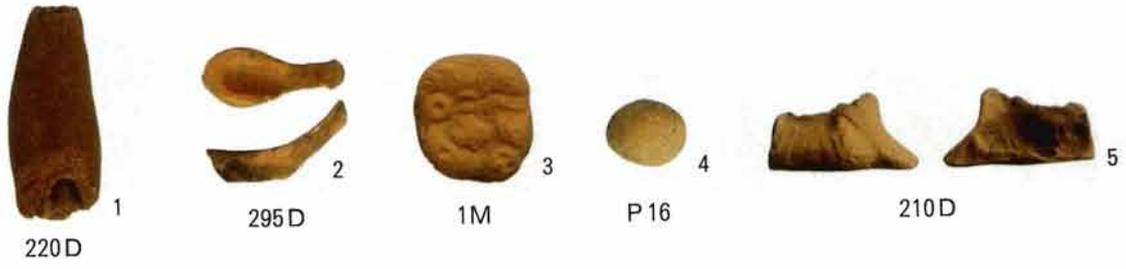
3. 23号井戸跡出土陶器・土器



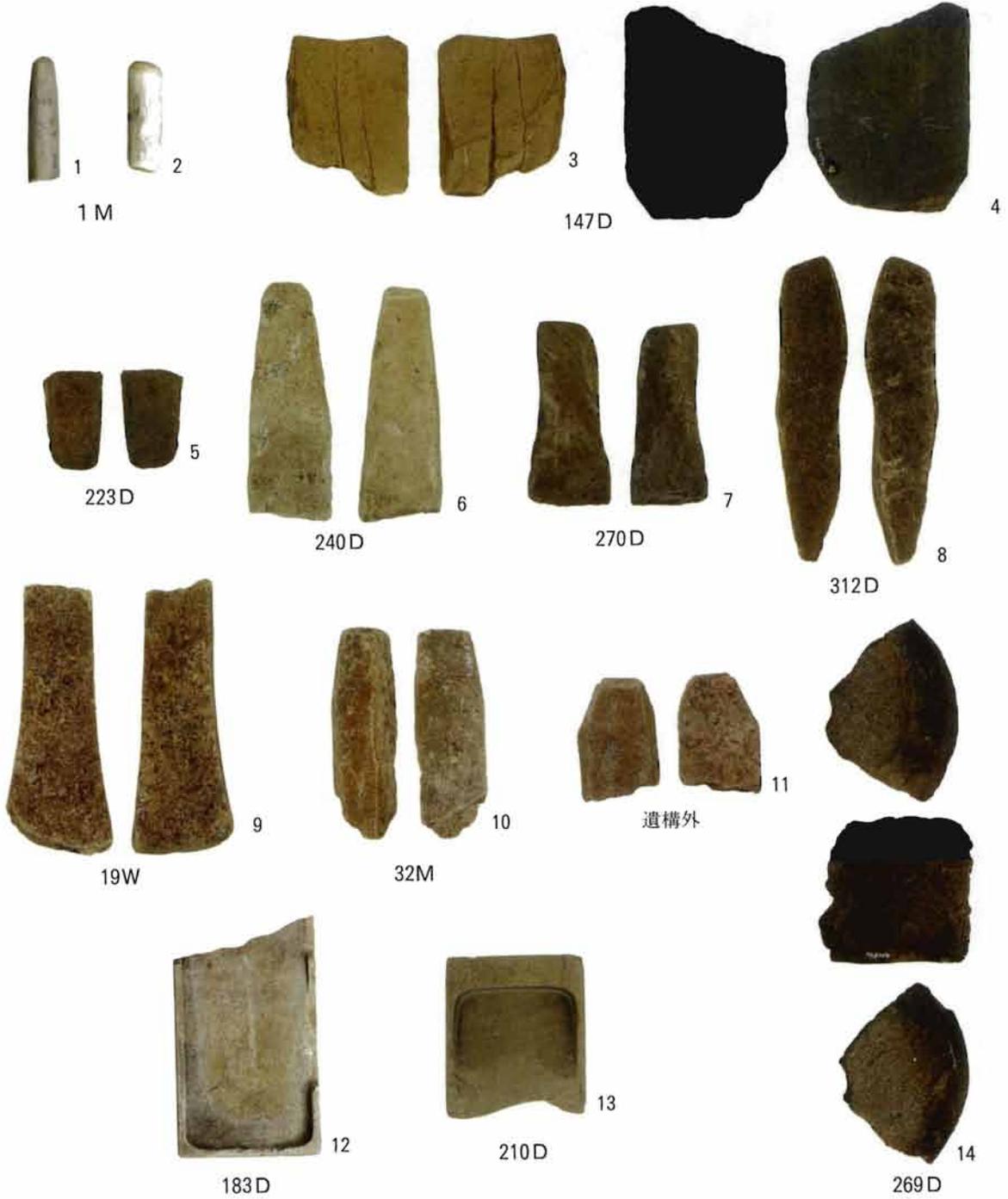
1. 溝跡出土陶磁器・土器



2. ピット出土陶磁器・土器



1. 遺構出土の土製品



2. 出土石製品



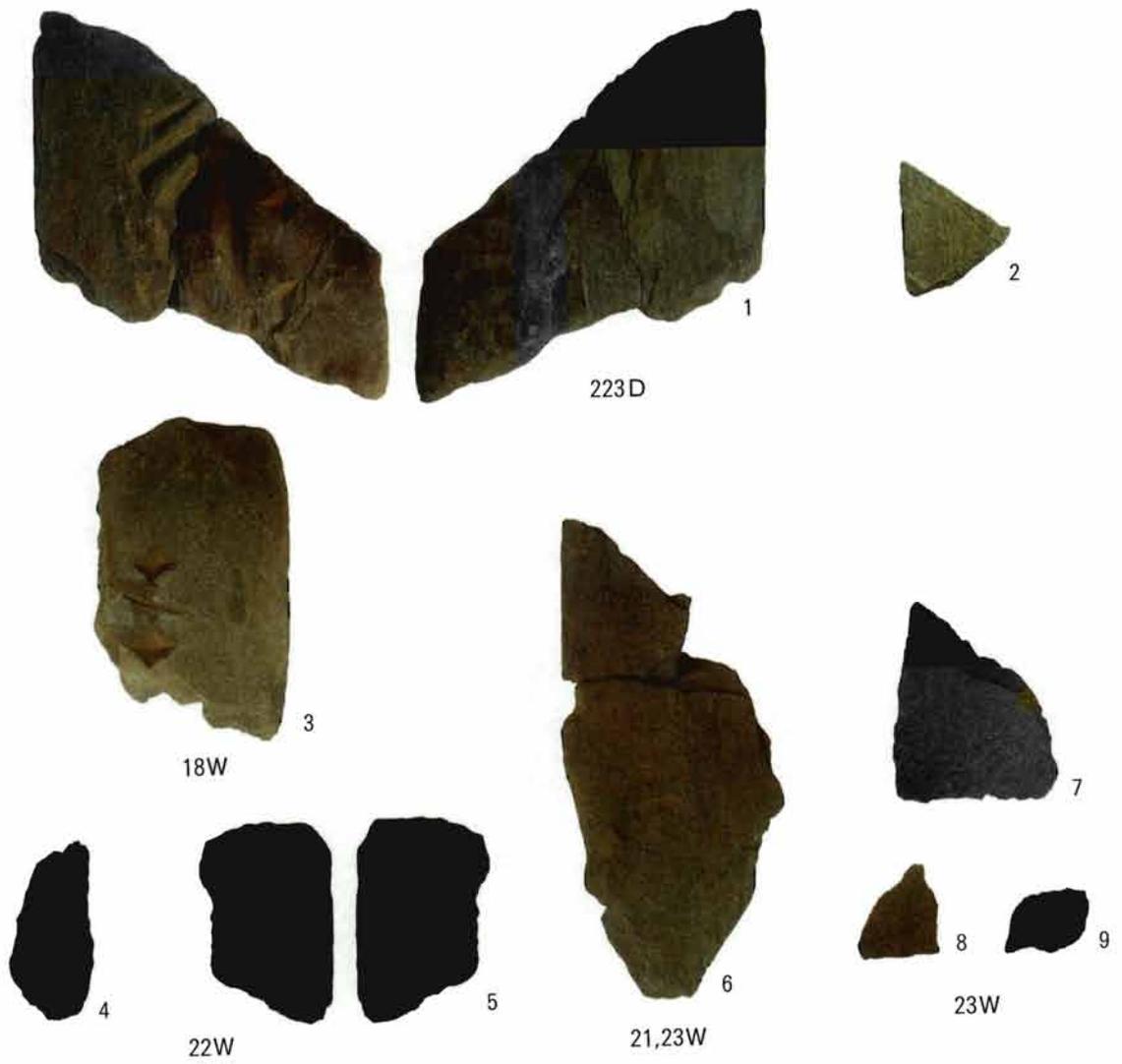
出土金属製品



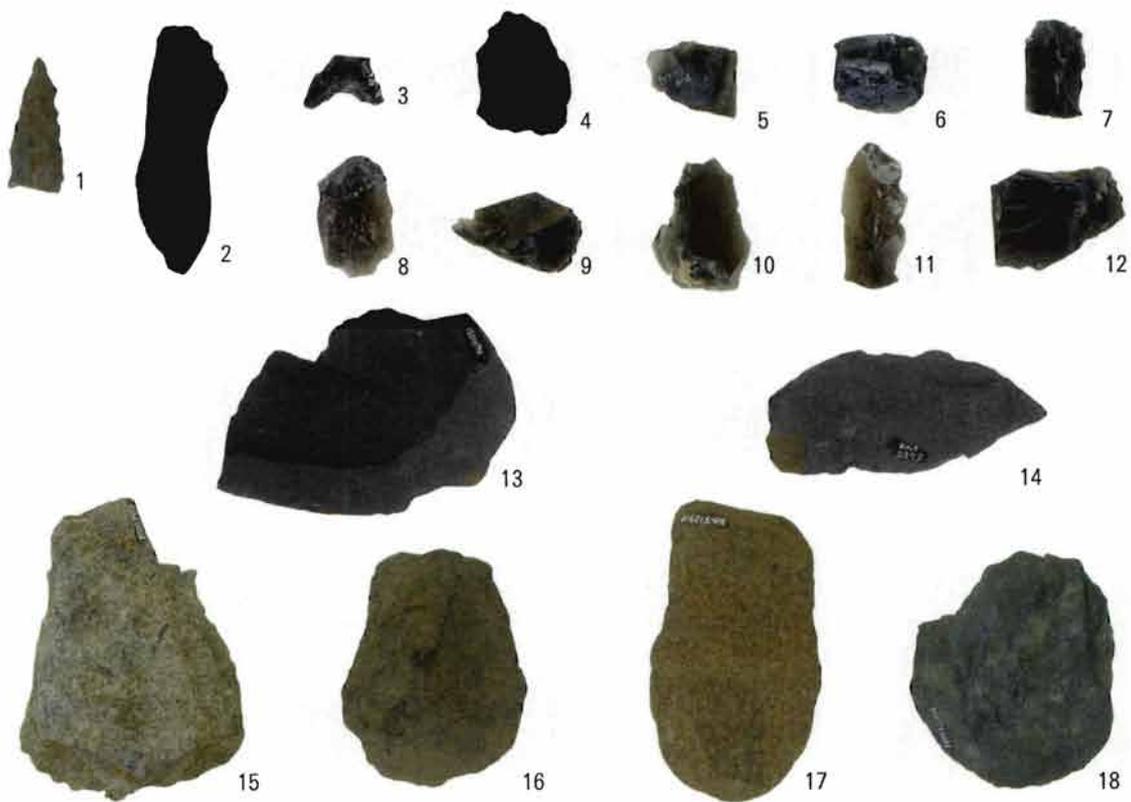
出土錢貨



1. 遺構出土の瓦



2. 遺構出土の板碑



1. 遺構外出土石器



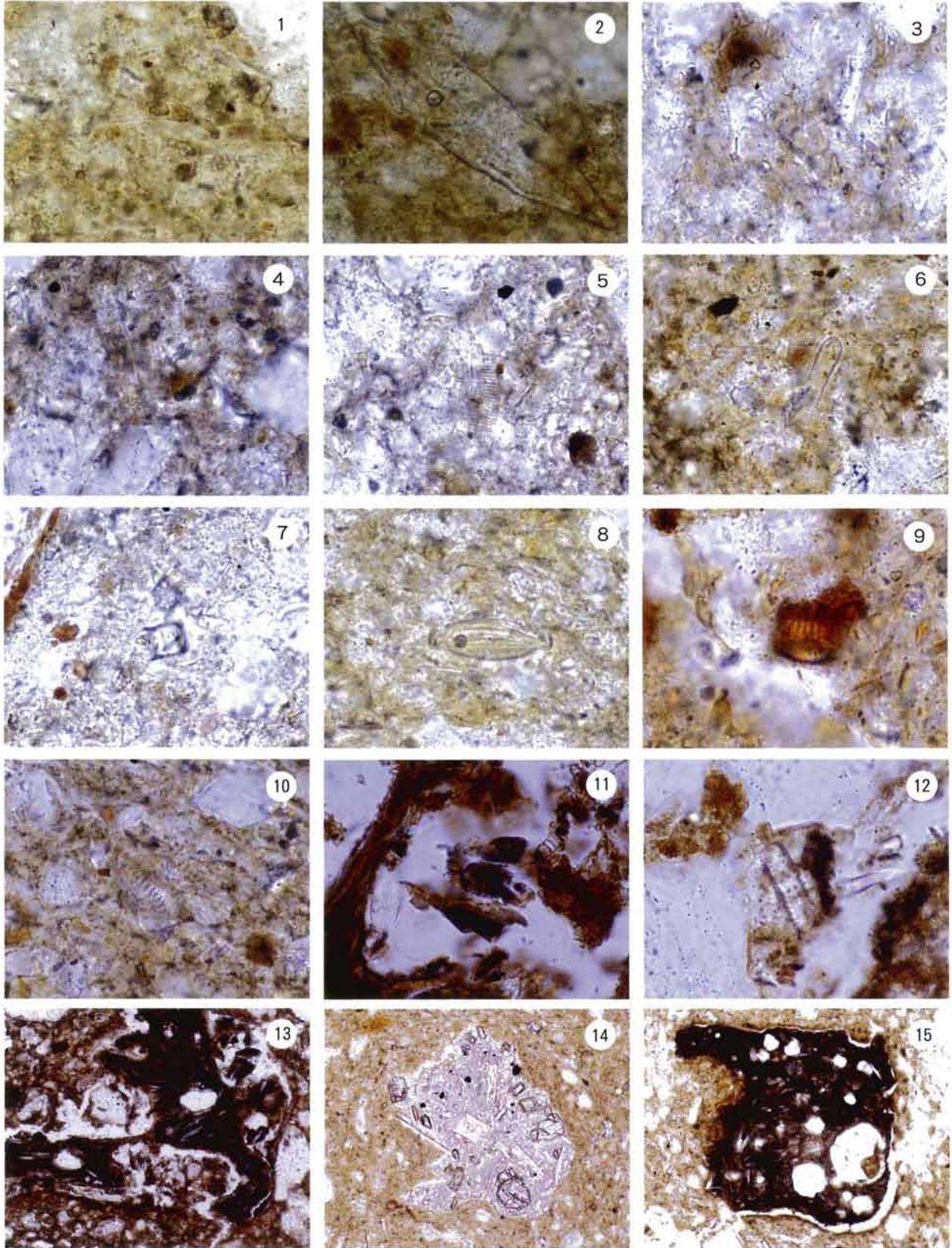
2. 遺構外出土遺物 1



遺構外出土遺物 2

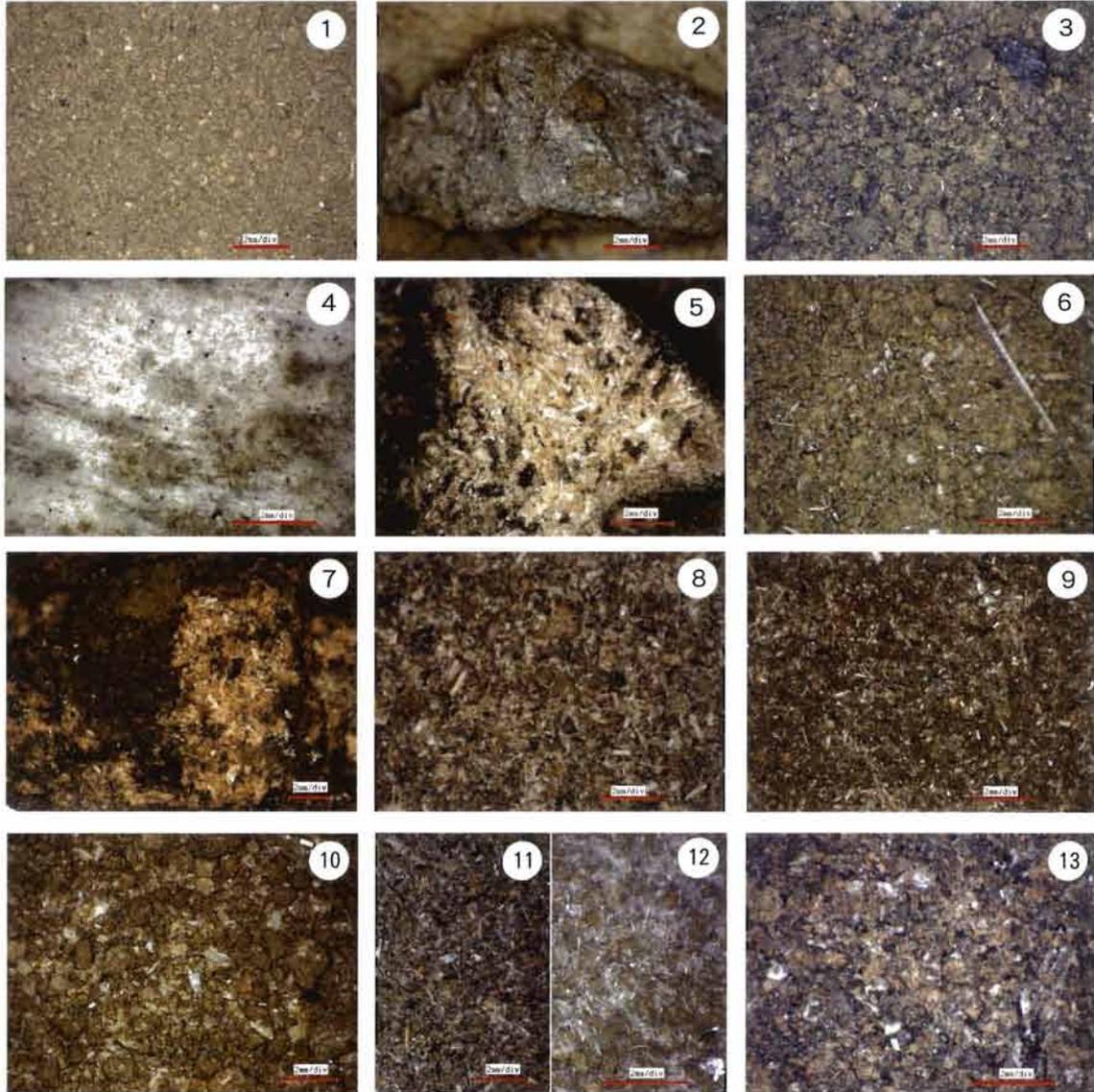


遺構外出土遺物 3



土器胎土中の粒子顕微鏡写真 (スケール: 1~12は20 μ m、13~15は100 μ m)

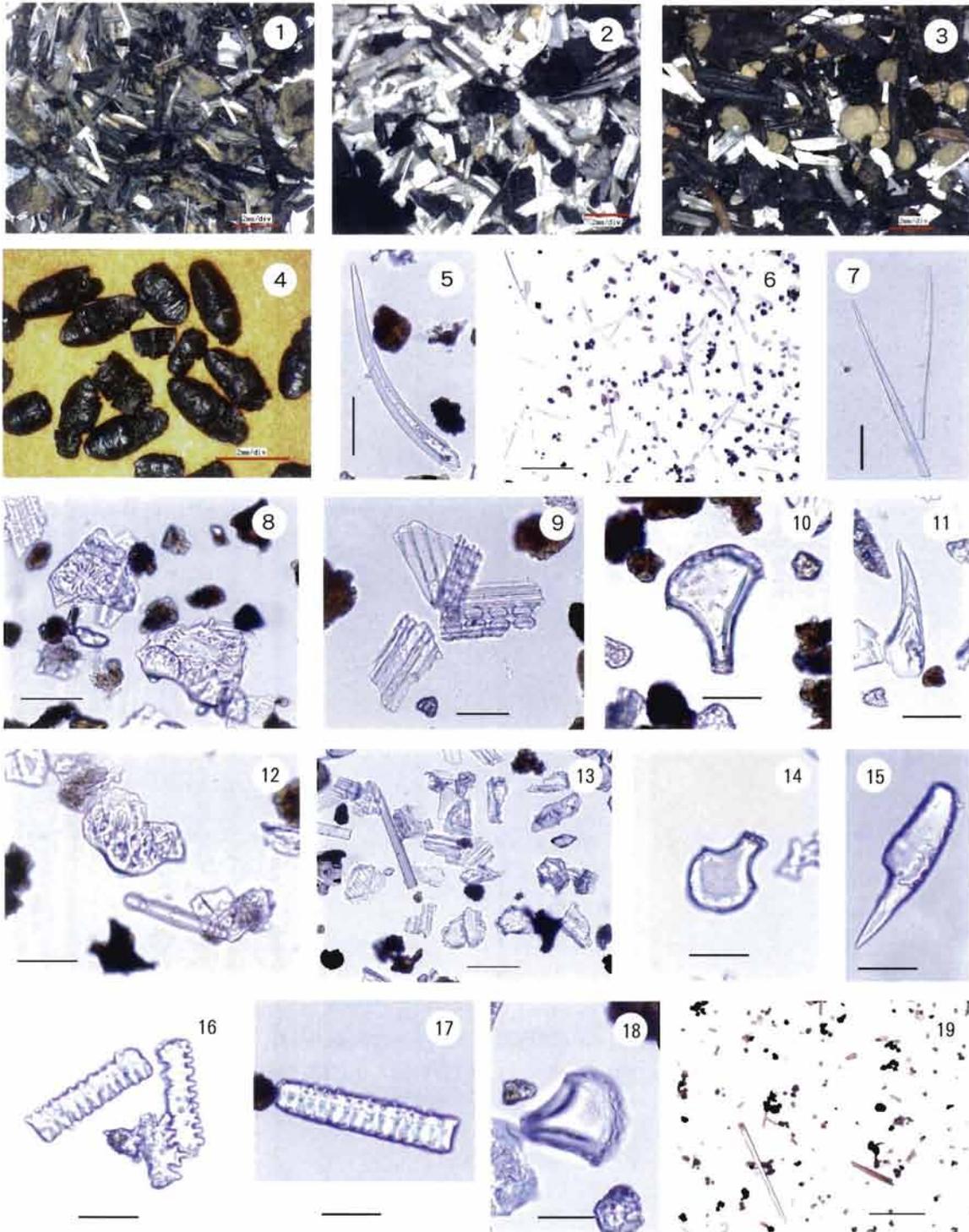
- | | | |
|--|---|-------------------------------------|
| 1. <i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> (No. 9) | 2. <i>Stauroneis phoenicenteron</i> (No. 2) | 3. <i>Gomphonema</i> 属 (No. 3) |
| 4. <i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>undulate</i> (No. 24) | 5. <i>Pinnularia</i> 属 (No. 27) | 6. <i>Eunotia formica</i> (No. 12) |
| 7. <i>Melosira ambigua</i> (No. 18) | 8. <i>Navicula pusilla</i> (No. 13) | 9. <i>Melosira ambigua</i> (No. 40) |
| 10. <i>Coscinodiscus</i> 属 / <i>Thalassiosira</i> 属 (No. 46) | 11. 付着珪藻化石 (No. 32) | 12. 付着珪藻化石 (No. 19) |
| 13. 発泡斑晶質 (No. 33) | 14. 斑晶質 (No. 54) | 15. 発泡斑晶質 (No. 16) |



土壤試料の産状写真 (スケールは 2 mm/div)

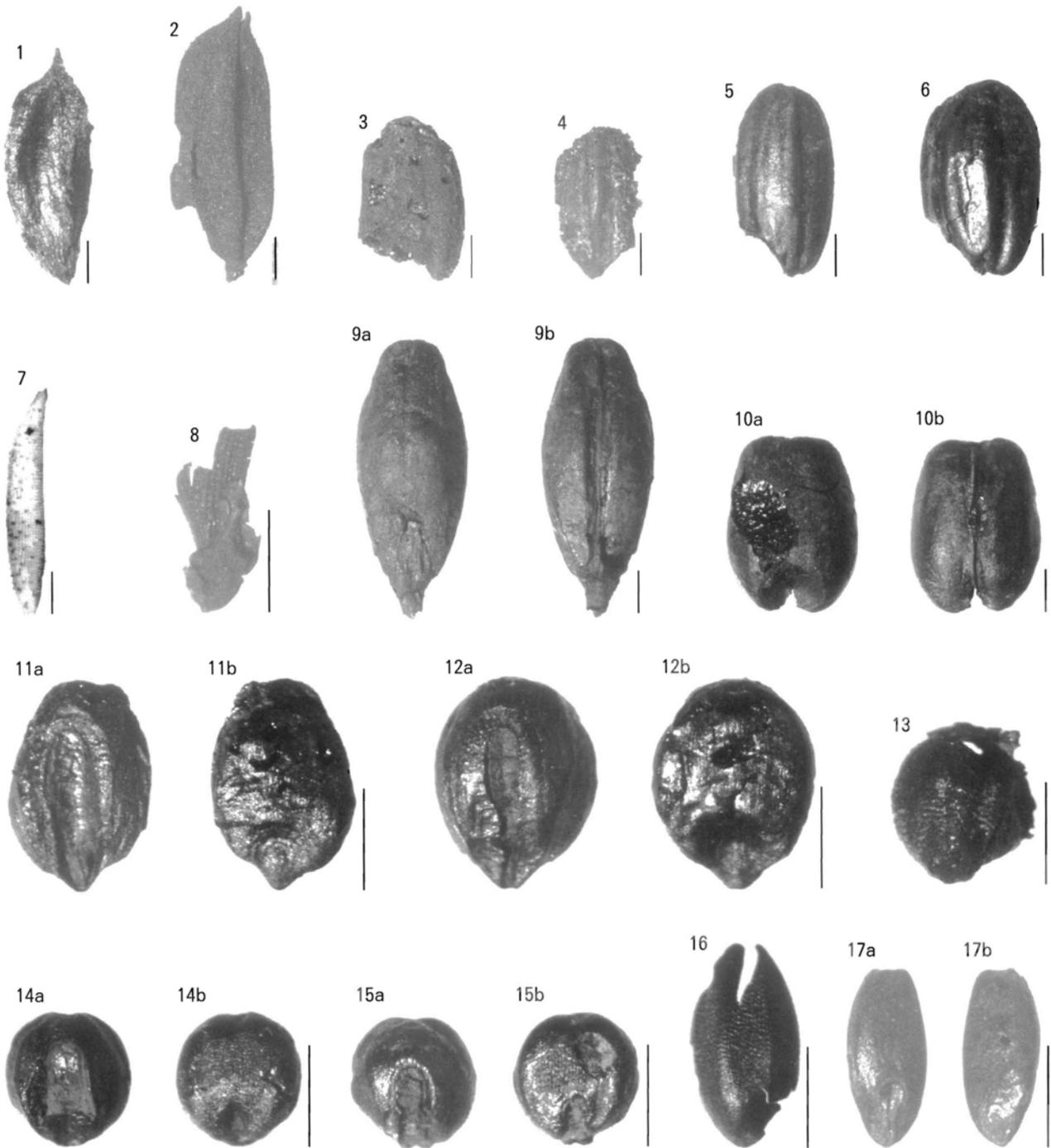
1. 177号土坑 2. 217号土坑 3. 178号土坑 4. 184号土坑 5. 187号土坑 6. 194号土坑
7. 214号土坑 8. 215号土坑 9. 222号土坑 10. 237号土坑 11. 246号土坑 3層
12. 246号土坑銅製品付着 13. 312号土坑

(番号は第64表のNo.に対応)



土壤試料中の粒子顕微鏡写真 (スケール: 1~4は2mm/div、5~7は200 μ m、8~19は50 μ m)

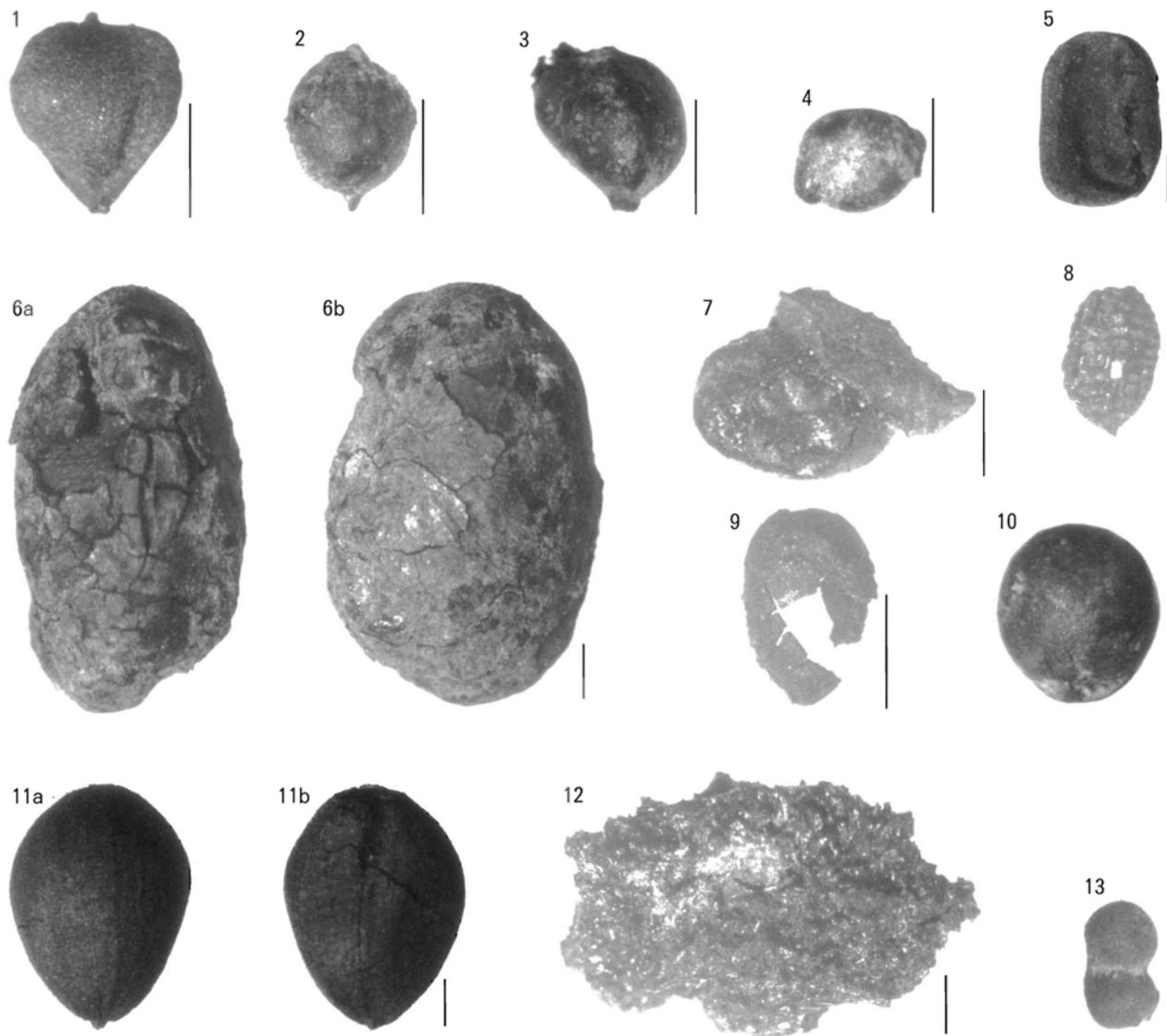
1. 194号土坑洗出し残渣 2. 215号土坑洗出し残渣 3. 222号土坑洗出し残渣 4. 昆虫遺体 (215号土坑)
 5. 角状珪酸体 (178号土坑) 6. 針状珪酸体産状 (184号土坑) 7. 針状珪酸体 (184号土坑) 8. イネ穎珪酸体 (187号土坑)
 9. 珪酸体 (194号土坑) 10. イネ機動細胞珪酸体 (194号土坑) 11. 突起状珪酸体 (214号土坑)
 12. イネ機動細胞珪酸体 (214号土坑) 13. 珪酸体 (217号土坑) 14. イネ機動細胞珪酸体 (217号土坑)
 15. 突起状珪酸体 (222号土坑) 16. 棒状珪酸体 (222号土坑) 17. 棒状珪酸体 (222号土坑) 18. イネ機動細胞珪酸体 (222号土坑)
 19. 針状珪酸体産状 (246号土坑)



出土した炭化種実 1 (スケールは 1 mm)

1. スギ、炭化種子 (222号土坑、No.17) 2. イネ、炭化穎果 (222号土坑、No.17) 3. イネ、炭化胚乳 (146号住居跡、No.8) 4. イネ、炭化胚乳 (136号住居跡、No.6) 5. イネ、炭化胚乳 (222号土坑、No.17) 6. イネ、炭化胚乳 (214号土坑、No.15) 7. イネ、炭化穎 (破片) (215号土坑、No.16) 8. イネ、炭化穎 (基部) (178号土坑) 9. オオムギ、炭化胚乳 (178号土坑、No.11) 10. コムギ、炭化胚乳 (178号土坑、No.11) 11・12. ヒエ、炭化胚乳 (178号土坑、No.10・11) 13. アワ、炭化穎果 (178号土坑) 14・15. アワ、炭化胚乳 (178号土坑、No.10・11) 16. エノコログサ属、炭化穎 (215号土坑、No.16) 17. イネ科、炭化胚乳 (178号土坑)

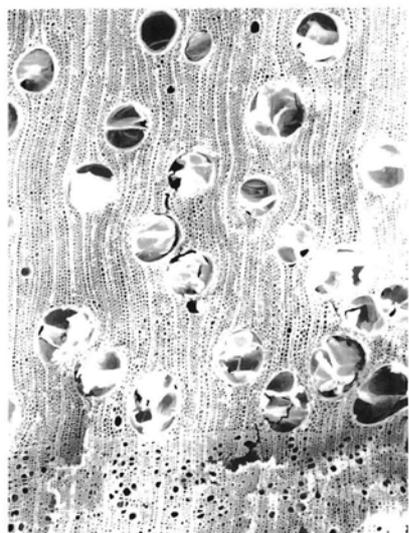
() 内のNo.は第65表に対応



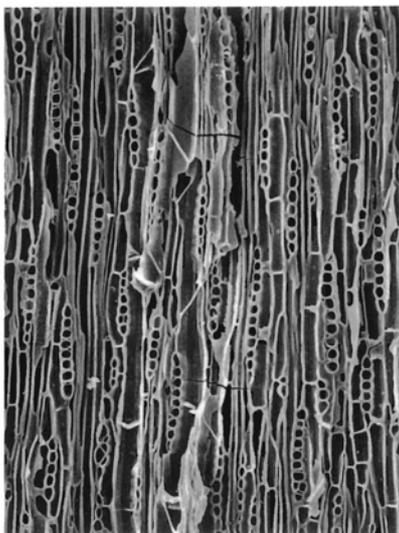
出土した炭化種実 2 (スケールは 1 mm)

1. ホタルイ属、炭化果実 (178号土坑、No.11) 2・3. タデ属、炭化果実 (136号住居跡、No.7) 4. シロザ近似種、炭化種子 (136号住居跡、No.7) 5. ササゲ属、炭化種子 (187号土坑、No.13) 6. ダイズ近似種、炭化種子 (214号土坑、No.15) 7. マメ科、炭化種子 (136号住居跡、No.7) 8. カタバミ属、炭化種子 (178号土坑、No.11) 9. エノキグサ、炭化種子 (215号土坑、No.16) 10. イヌコウジュ属またはソソ属、炭化果実 (187号土坑、No.13) 11. 不明、炭化種実 (187号土坑、No.13) 12. 不明、炭化物 (134号住居跡、No.1) 13. 菌核 (178号土坑、No.11)

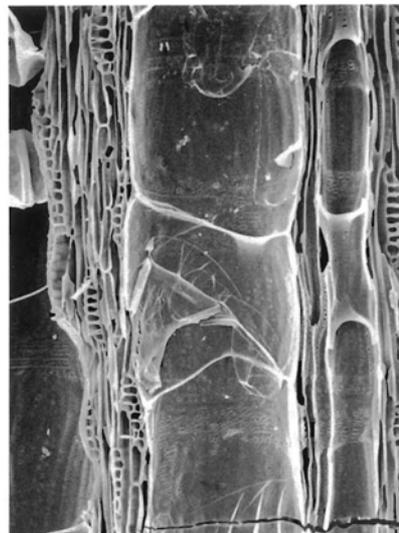
() 内のNo.は第65表に対応



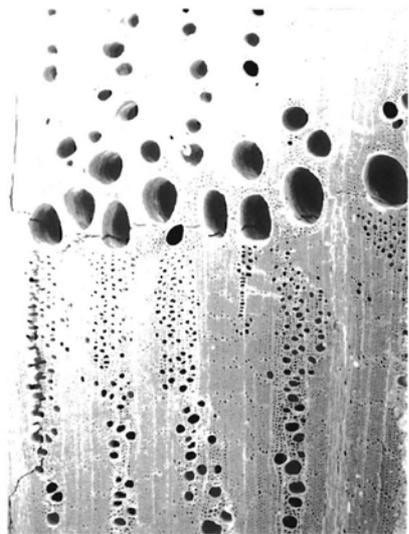
1 a クリ (横断面)
(217号土坑) bar : 1.0mm



1 b クリ (接線断面)
(217号土坑) bar : 0.1mm



1 c クリ (放射断面)
(217号土坑) bar : 0.1mm



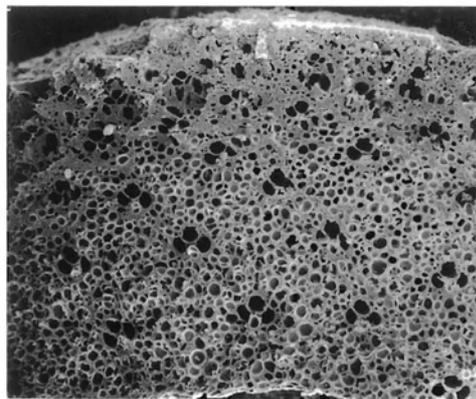
2 a コナラ節 (横断面)
(257号土坑) bar : 1.0mm



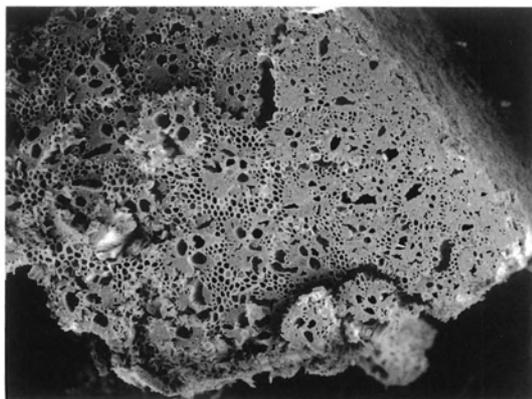
2 b コナラ節 (接線断面)
(257号土坑) bar : 0.1mm



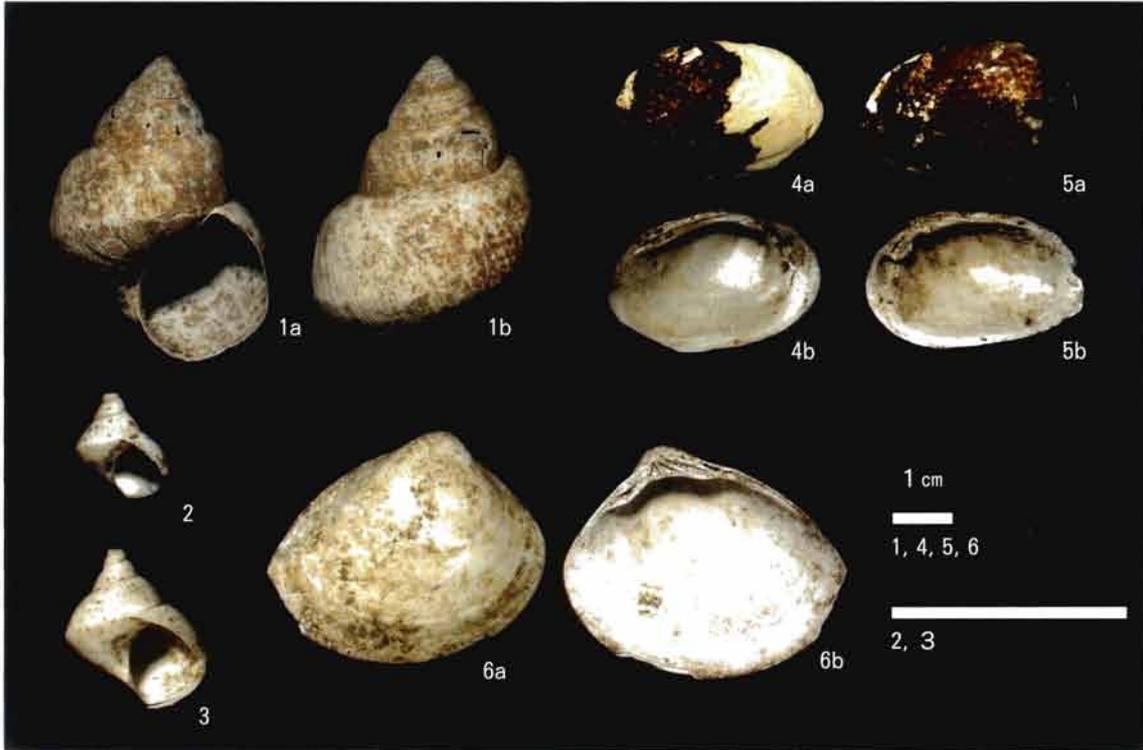
2 c コナラ節 (放射断面)
(257号土坑) bar : 0.1mm



3 a タケ亜科 (横断面)
(312号土坑) bar : 1.0mm

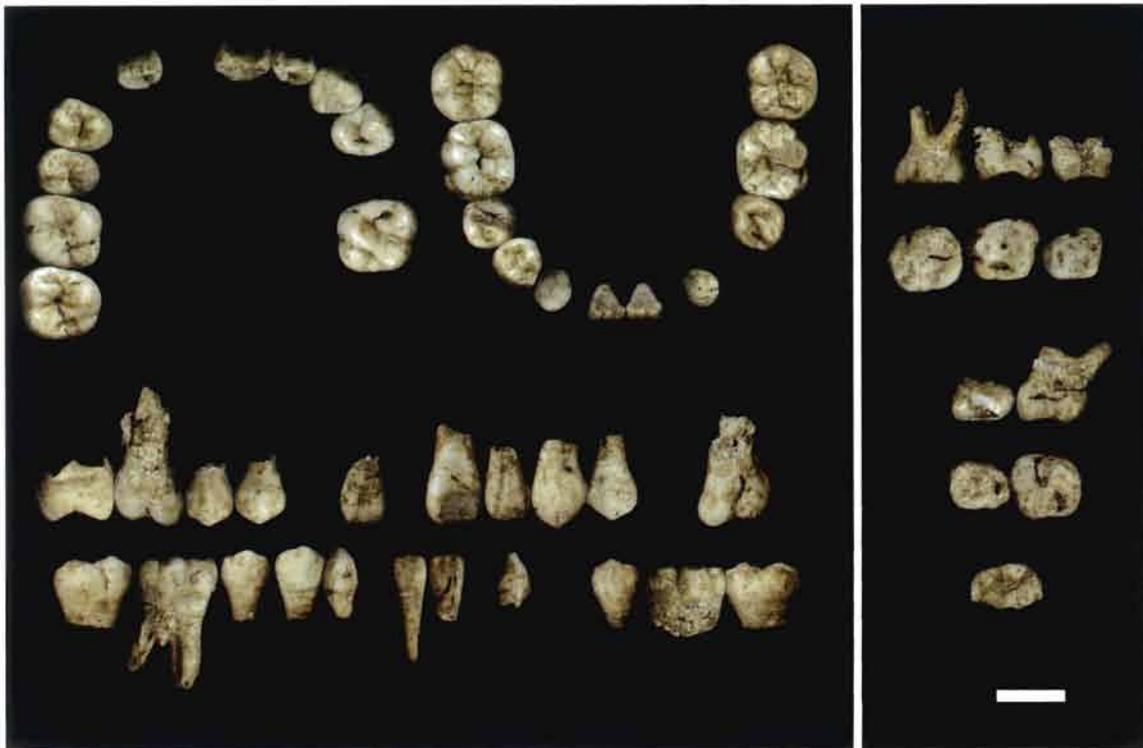


4 b タケ亜科 (横断面)
(312号土坑) bar : 0.1mm



出土貝類

1-3, オオタニシ (2, 3: 胎児殻) 4・5, マツカサガイ 6, ハマグリ



191号土坑出土人骨 (スケールは1 cm)

左 (1-1): 咬耗弱く, 華奢な歯
 左上: 上顎歯 (下面から) 中上: 下顎歯 (上面から)
 下: 側面からの上顎歯・下顎歯
 右 (1-2): 咬耗進んでいる大白歯
 右上: 左上顎第1~3 大白歯
 右中: 右上顎第1・2 大白歯 右下: 大白歯

報 告 書 抄 録

ふりがな	しろやまいせきだい42ちてん まいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ							
書名	城山遺跡第42地点 埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名		巻	次					
シリーズ名	志木市遺跡調査会調査報告	巻	次	第10集				
編著者	尾形則敏 深井恵子 青木 修							
編集機関	埼玉県志木市遺跡調査会							
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 TEL 048 (473) 1111							
発行年月日	平成17(2005)年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (°'")	東経 (°'")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しろやまいせき 城山遺跡 (第42地点)	しきしかしやちやう 志木市柏町 3丁目2627-1 他3筆	11228	003	35° 49' 55"	139° 34' 08"	20010223 ~ 20010629	2,106.89	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
しろやまいせき 城山遺跡 (第42地点)	集落	旧石器時代 縄文時代 古墳時代後期 奈良・平安時代 中世以降	石器集中地点 2ヶ所 土坑 21基 炉穴 1基 住居跡 16軒 住居跡 5軒 土坑 13基 ピット 4本 土坑 151基 井戸跡 8基 溝跡 4本 ピット群	石器・礫 土器・石器 土器 土師器・須恵器・ 土製品・鉄製品 土師器・須恵器・ 布目瓦・鉄製品 土師器・須恵器 瓦 陶磁器・かわらけ ・瓦・鉄製品・銅 製品・板碑	城山遺跡では、調査による旧石器時代の石器検出は初めて。 古墳時代後期（7世紀前葉）の148Hから、大量の土師器が出土。そのすべてを胎土分析実施。 P1から偏行唐草文の軒平瓦の破片が出土。 234Dから鉄鍋の完形品が出土。 1Mは柏城の三の丸大堀跡に相当。			

志木市遺跡調査会調査報告書 第10集

城山遺跡第42地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 埼玉県志木市遺跡調査会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発行日 平成17（2005）年11月30日
印刷 株式会社 白峰社